

玉東町文化財調査報告 第8集

The Seinan Battlegrounds and Memorial Site of the 1877 War in Gyokuto

# 玉東町西南戦争遺跡

調査総合報告書

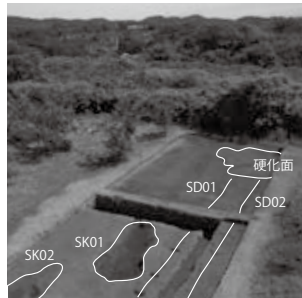
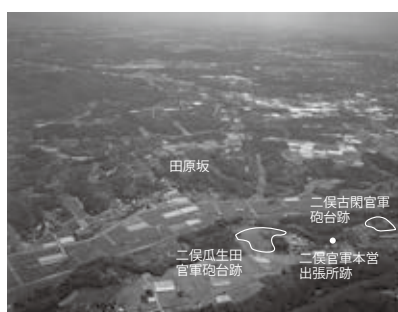
2012

玉東町教育委員会



上 二俣官軍砲台跡遠景（北西から）

下 二俣瓜生田官軍砲台跡調査区  
（西から）





二俣瓜生田官軍砲台跡出土銃弾等



二俣瓜生田官軍砲台跡出土遺物



二俣古閑官軍砲台跡（南西から）



二俣古閑官軍砲台跡トレンチ土層断面



二侯古閑官軍砲台跡出土遺物



二侯古閑官軍砲台跡出土銃彈等



二俣官軍本営出張所跡近景（南東から）



二俣官軍本営出張所跡石蔵跡西側壁面



横平山全景（北から）



横平山戦跡 山頂塹壕跡



横平山戦跡 障地遺構 1



横平山戦跡土坑 SK03・SK04 (北から)



SK03・SK04 土層断面





横平山戦跡出土エンフィールド銃弾



横平山戦跡出土スナイドル銃弾



横平山戦跡出土スナイドル銃葉莖等



横平山戦跡出土鏢等



半高山・吉次峠戦跡遠景



吉次峠から見た半高山近景（南から）



半高山戦跡スペンサー薬莖集中区



半高山戦跡盛土遺構



半高山戦跡銅貨出土状況



半高山戦跡雷管出土状況



半高山戦跡出土スナイドル銃弾



半高山戦跡出土エンフィールド銃弾等



半高山戦跡出土薬莖・雷管



半高山戦跡出土四斤砲弾



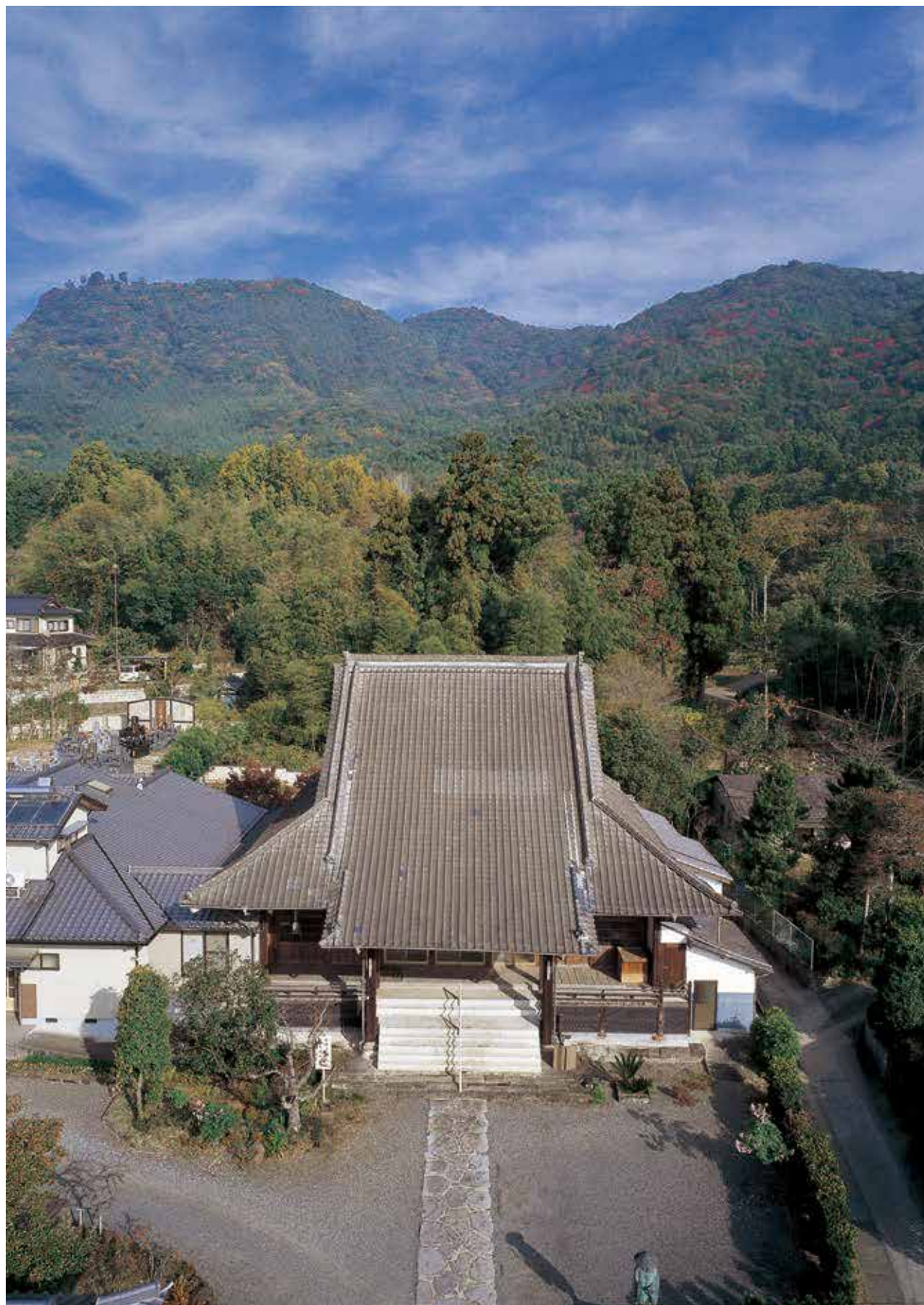
正念寺山門正面（南から）



正念寺山門（北から）



山門に残る銃弾痕



徳成寺（南から）



高月官軍墓地近景（北から）



高月官軍墓地



高月官軍墓地外壁の樋





宇蘇浦官軍墓地 吉松秀枝少佐の墓（写真奥）



宇蘇浦官軍墓地内警視局墓石



宇蘇浦官軍墓地



二俣瓜生田官軍砲台跡 明治 10 年上野彦馬撮影（引用『明治十年戦役記念写真帖』）



二俣古閑官軍砲台跡（段下より）明治 10 年上野彦馬撮影（引用『明治十年戦役記念写真帖』）



二俣古閑官軍砲台跡 1/3 明治 10 年上野彦馬撮影 (引用『明治十年戦役記念写真帖』)



二俣古閑官軍砲台跡 2/3 明治 10 年上野彦馬撮影 (引用『明治十年戦役記念写真帖』)



二俣古閑官軍砲台跡 3/3 明治 10 年上野彦馬撮影 (引用『明治十年戦役記念写真帖』)



玉名郡木葉町附近兩軍配置図 明治 16 年作成 (熊本県立図書館所蔵)



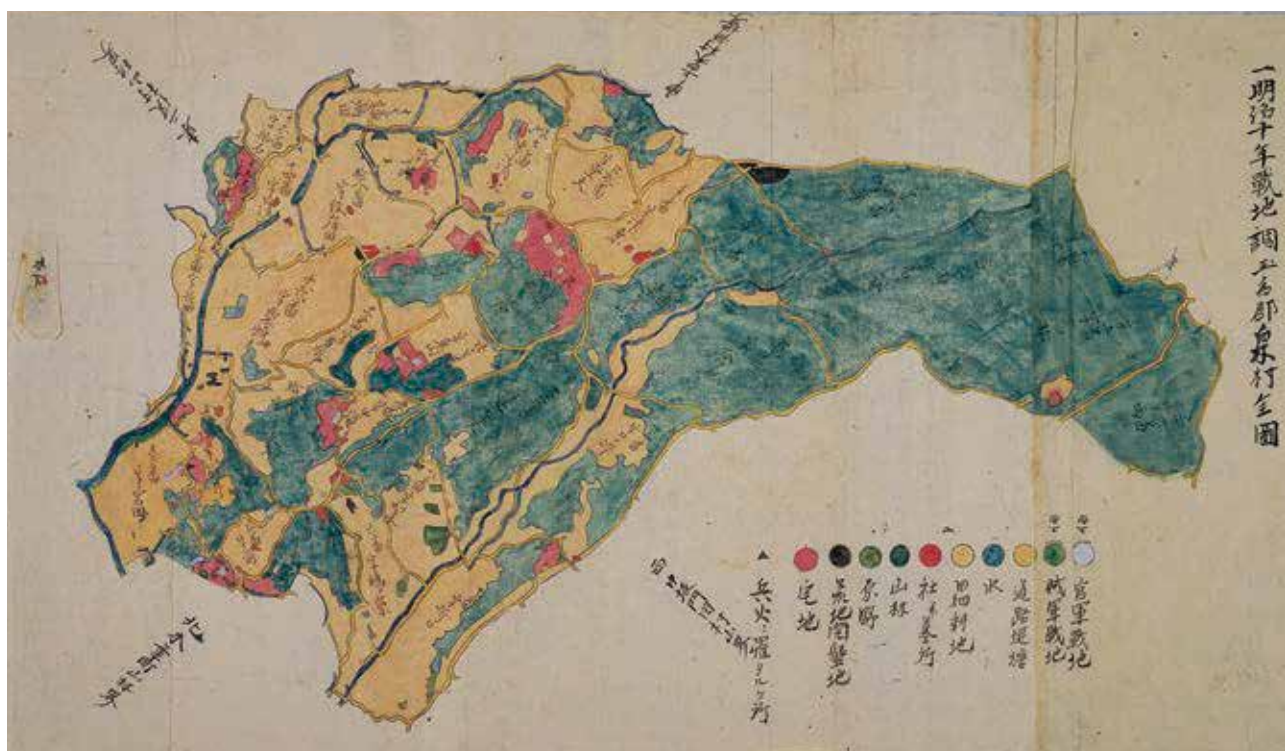
玉名郡二侯村両軍配置並罹災区域図 明治 16 年作成 (熊本県立図書館所蔵)



玉名郡上白木村両軍配置図 明治 16 年作成 (熊本県立図書館所蔵)

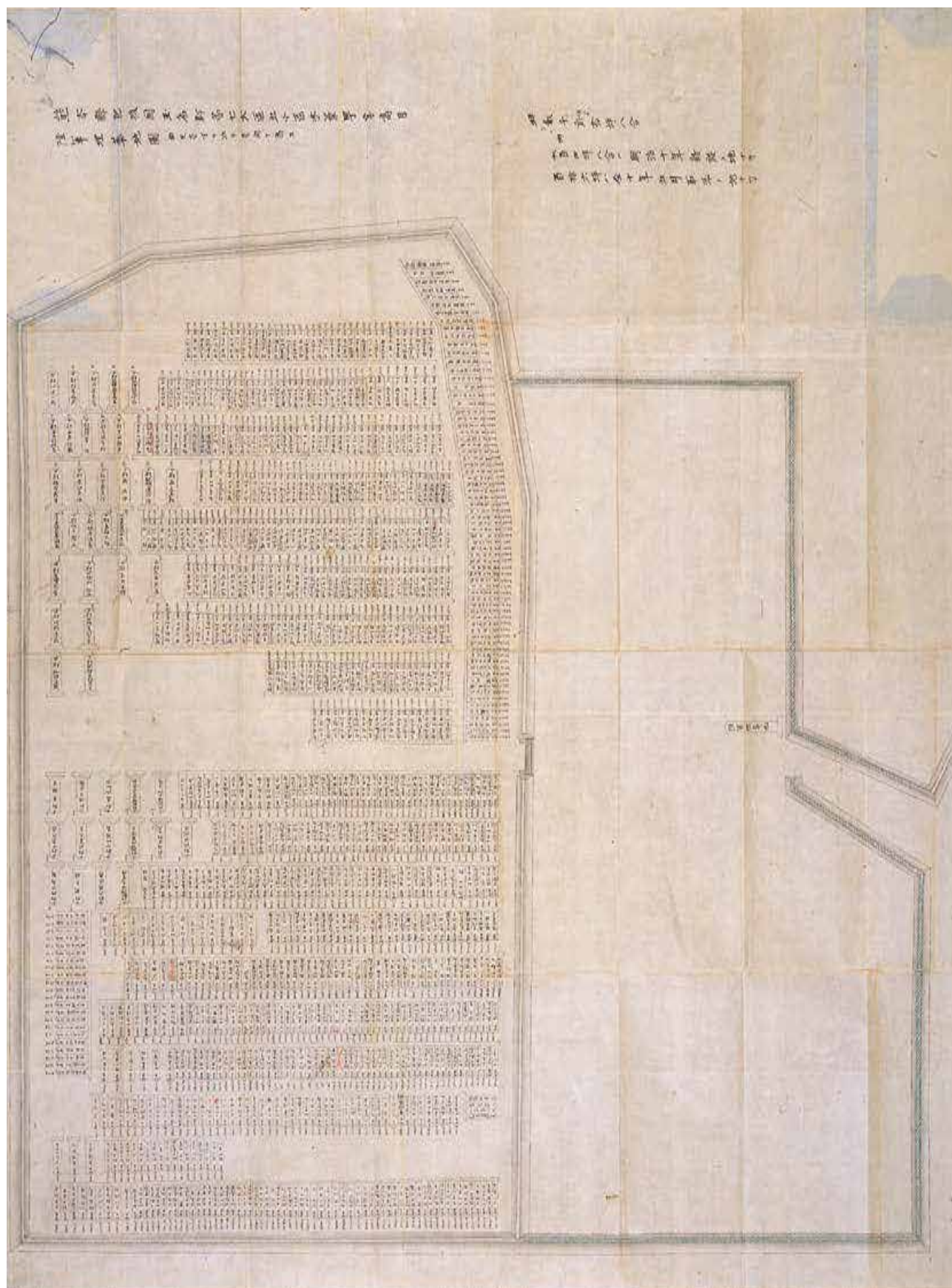


玉名郡西安寺村兩軍配置圖 明治 16 年作成 (熊本県立図書館所蔵)



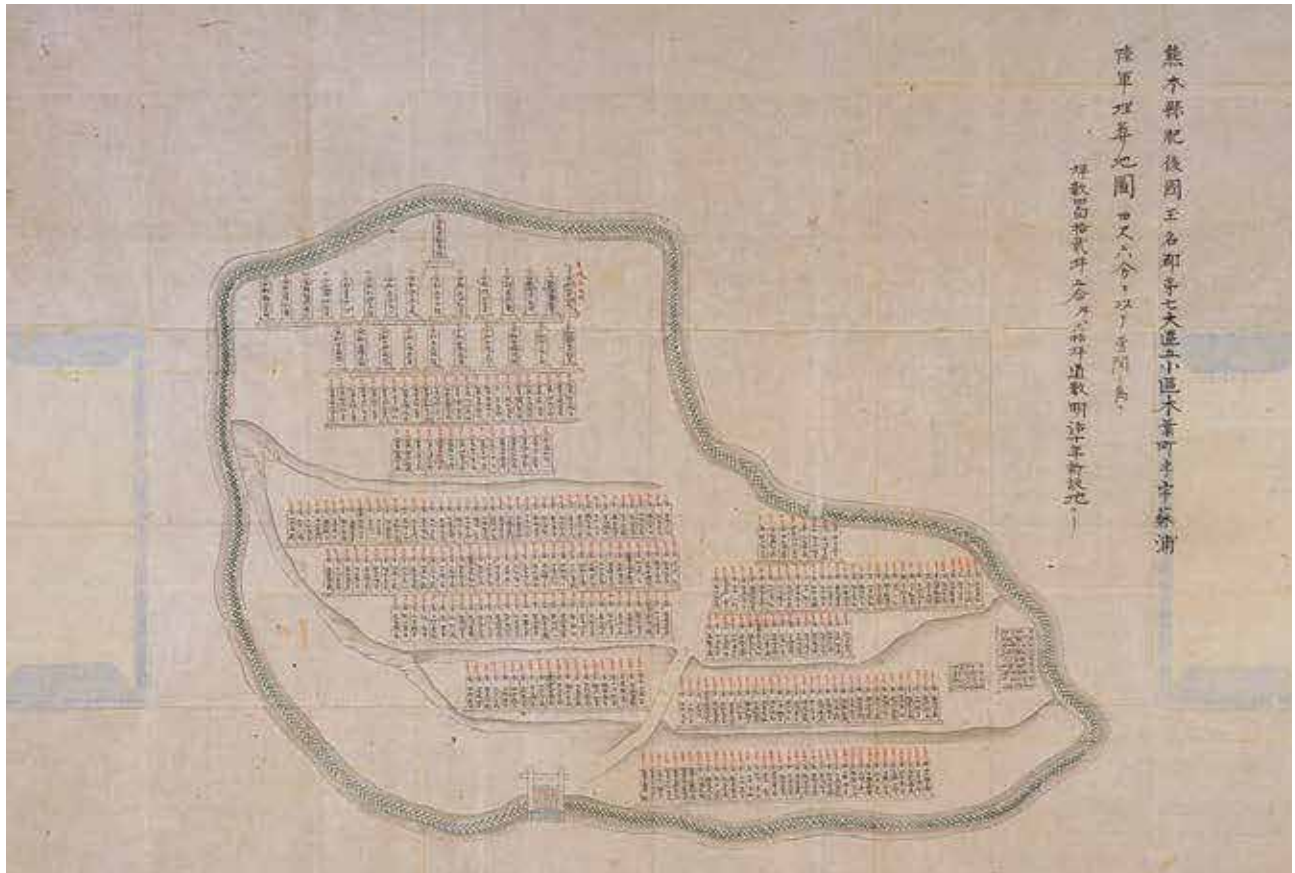
玉名郡白木村兩軍配置並罹災区域圖 明治 16 年作成 (熊本県立図書館所蔵)



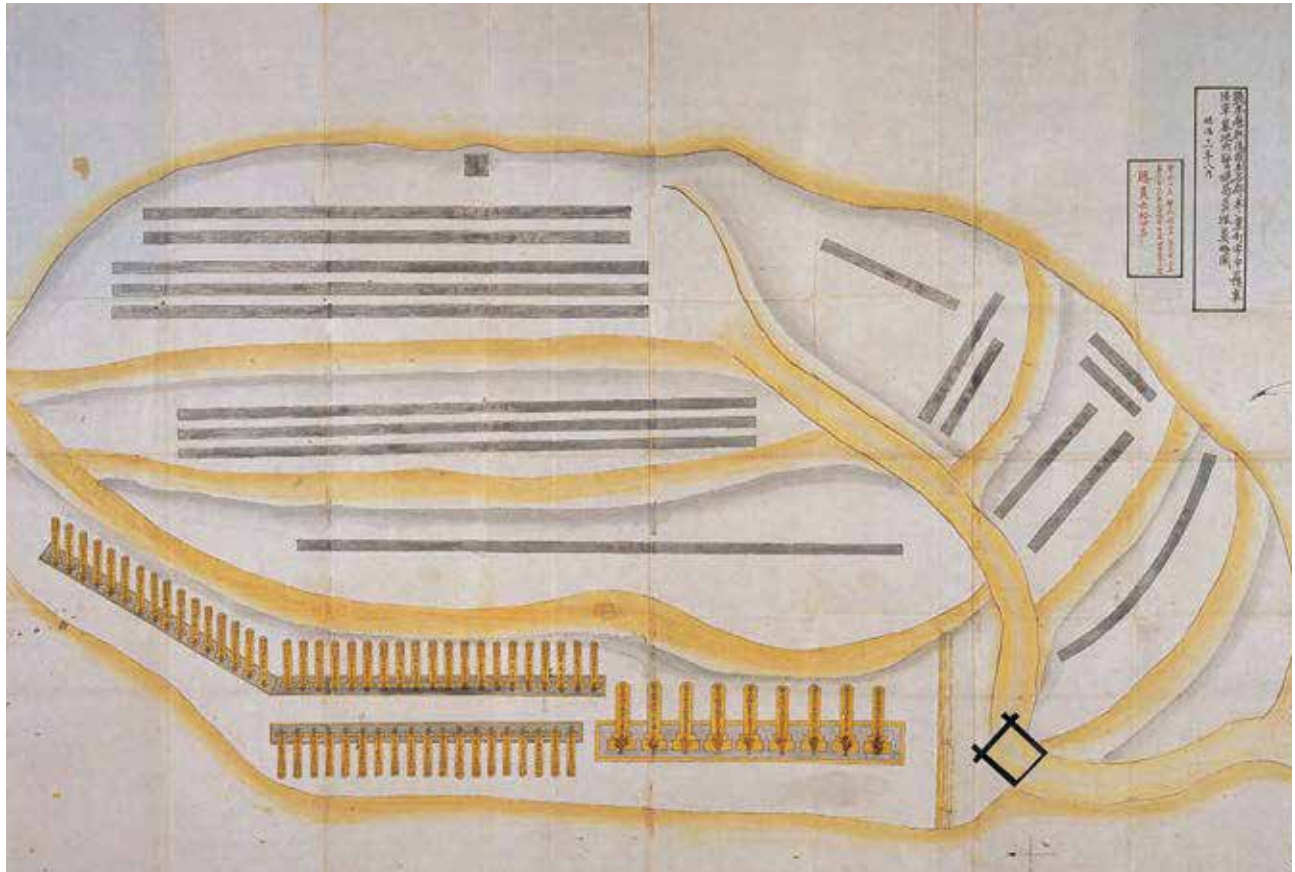


高月陸軍埋葬地区 明治 19 年調製 (熊本県立図書館所蔵)





宇蘇浦陸軍埋葬地図 明治 19 年調製（熊本県立図書館所蔵）



宇蘇裏（浦）陸軍基地内警視局員埋葬略図 明治 19 年調製（熊本県立図書館所蔵）

# 玉東町西南戦争遺跡

調査総合報告書

2012

玉東町教育委員会

## 序

西南戦争は、明治10(1877)年、政府軍(官軍)と反政府軍である薩軍とが九州一円において戦火を交えた国内最大にして最後の内戦です。戦争では前途有望な若者ら14,000余名が戦死、それ以上の戦傷者が出ました。また周辺住民は多大な負担と犠牲を強いられた事件でした。一方、戦後の日本は近代化の道を躍進し、日本赤十字社の前身である博愛社が発足するなど精神的な近代化も促進された側面もありました。

当町には、田原坂攻撃の前線基地となった二俣砲台跡、田原坂と並ぶ激戦地横平山、吉次峠・半高山等の戦跡が数多く所在し、官軍病院となった正念寺や徳成寺が一部当時の姿で残っています。また、激しかった戦闘を物語る1,379基もの官軍の墓、人知れずひっそりと眠る薩軍の墓があります。町中至る所にその痕跡が残されており、調査においても具体的な戦闘を物語る遺物や遺構が確認されているところです。

戦後135年を経た今日、これらの遺跡は人々の記憶と共に風化しつつありますが、この調査を機に改めて日本近代化の礎となった西南戦争の犠牲者を弔い、二度と国内でこのようなことが繰り返されることがないように、また世界における戦争の火が早く消えてしまうことを祈念いたします。

最後になりましたが、本調査が関係者および地域住民のみなさまの多大なるご理解とご協力によって実施することができましたことを厚くお礼申し上げます。

平成24年9月

玉東町教育長 坂田 傑

## 例 言

- 1 本書は玉東町に所在する西南戦争遺跡の発掘調査等に伴う報告書である。
- 2 本遺跡の調査は玉東町教育委員会が実施した。調査には平成20年度から24年度国庫補助事業費を使用した。
- 3 各調査の調査期間と調査組織および担当者については本文中に記した。
- 4 本写真図版のうち現地での遺構写真は主に調査担当者によるもので、航空写真は株式会社九州航空による。高所作業車による遺跡の鳥瞰撮影写真、官軍墓地の写真は牛嶋茂氏によるものである。遺物写真については株式会社写測エンジニアリングに委託した。また、出土遺物のX線写真撮影は福岡市埋蔵文化財センター、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の協力を得た。
- 5 出土遺物の整理作業は、平成22年度から平成24年度まで実施した。
- 6 遺構・遺物の実測・トレス・拓本は宮本千恵子、野満彩子、荒木洋子、松本登紀子、溝田淳子、平木琢が行った。
- 7 本書の執筆については下記のとおりである(敬称略)。

### 【考察等】

「近代国家の成立と西南戦争」鈴木淳(東京大学大学院人文社会系研究科・文学部教授)

「出土した被服附属品の遺物について」鈴木徳臣(日本近代史研究家)

「西南戦争関係の出土遺物」浅川道夫(日本大学国際関係学部准教授)

「木葉病院の検証-正念寺・徳成寺-建造物の調査」伊東龍一(熊本大学自然科学研究科大学院教授)

「二俣官軍本営出張所跡」の石造建物について」高瀬哲郎(石垣技術研究機構代表)

「西南戦争における官軍墓地の成立と現状について」前川清一(肥後金石研究会主宰)

「西南戦争と玉東町-戦場・基地・墓地」水野公寿(玉東町西南戦争遺跡群調査検討委員会専門委員)

「熊本県における西南戦争遺跡」西住欣一郎・岡本真也(熊本県教育庁教育総務局文化課)

### 【紹介】

「木葉猿の由来」永田禮三(木の葉猿窯元)

「西南戦争と正念寺」隈部広宣(正念寺前住職)

### 【自然科学分析】

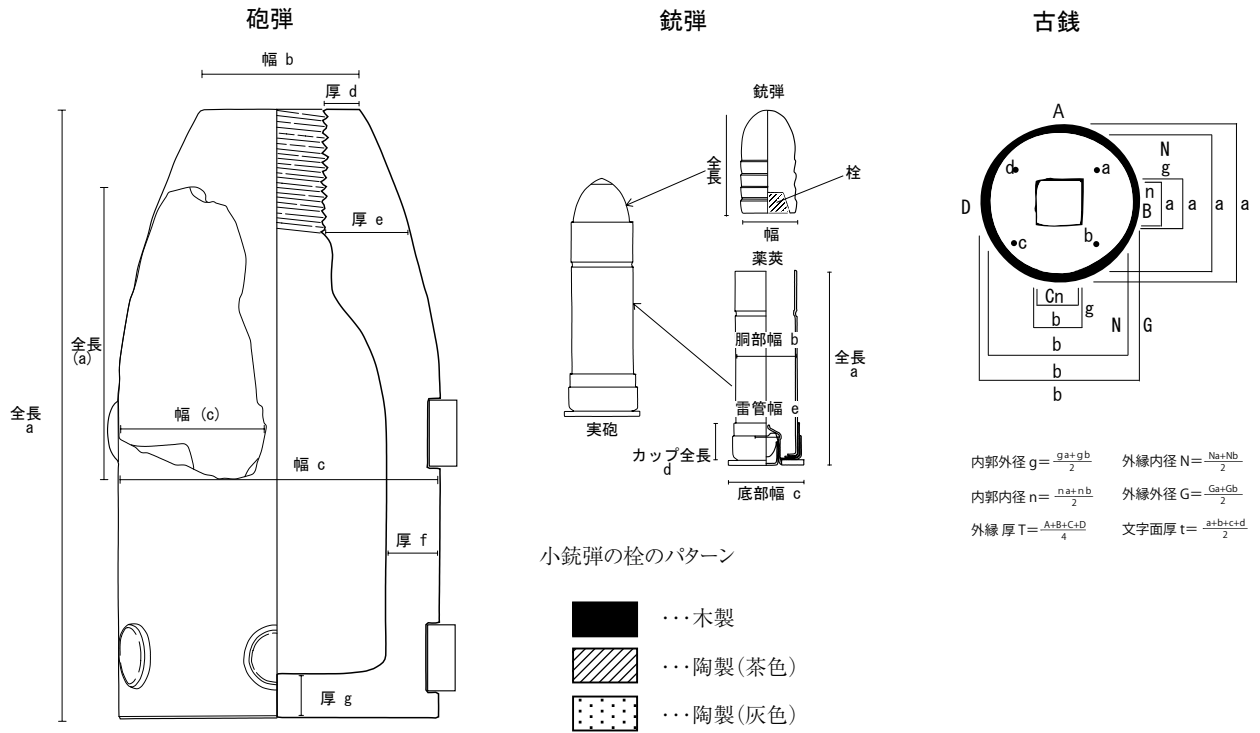
「横平山戦跡の植物ケイ酸体分析」パリオ・サーヴェイ株式会社

「西南戦争遺跡出土遺物の蛍光X線分析」大坪志子・平木琢(熊本大学埋蔵文化財調査センター)

- 8 本遺跡で出土した金属製品の保存処理は、一部を独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所で行い協力を得た。また、横平山戦跡出土鏝は財団法人元興寺文化財研究所に委託した。その他は株式会社葵文化に委託した。
- 9 本書に掲載した位置図は、主に建設省国土地理院長の承認を得た同発行の5万分の1地形図を複製した(承認番号 平23九複 第120号)地形図を使用した。
- 10 発掘調査で出土した遺物及び図面・写真等の記録類は玉東町教育委員会において保管している。
- 11 本書の編集は玉東町教育委員会で行い、宮本が担当した。

# 凡 例

- 1 平面直角座標は、世界測地系を利用している。方位は座標軸を基準とした座標北を示している。
- 2 本書に使用したレベル(L=)は標高を示す。
- 3 本書に掲載している遺物、遺構図は、それぞれ任意の縮尺で掲載している。挿図中のスケールを参照されたい。
- 4 各層位の土色及び遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修）による。
- 5 文中の実測番号後の括弧内には、遺物番号を記載する。
- 6 出土遺物の部位名称、計測部位は以下のとおりである。



# 本文目次

図版	
序文	
例言	
第I章 調査の概要	1
第1節 はじめに	1
第2節 調査に至る経緯	1
第3節 調査の組織	2
第4節 調査の方法と経過	5
第II章 遺跡の位置と環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	8
紹介 木葉猿の由来 永田禮三	12
第3節 西南戦争の概要	13
近代国家の成立と西南戦争 鈴木淳	19
第III章 二俣砲台跡の調査	21
第1節 二俣砲台跡の位置と環境	21
第2節 二俣砲台跡における戦況	22
第3節 二俣砲台跡における調査地の設定について	24
1 二俣瓜生田官軍砲台跡の調査	25
第1節 調査区の設定と調査の方法	25
第2節 層序	26
第3節 遺構と遺物	28
第1項 西南戦争の遺構と遺物	28
(1) 遺構	28
(2) 遺物	33
第2項 中世の遺構と遺物	42
2 二俣古閑官軍砲台跡の調査	50
第1節 調査区の設定と調査の方法	50
第2節 層序	50
第3節 西南戦争の遺構と遺物	51
(1) 遺構	51
(2) 遺物	51
3 官軍本営出張所跡の調査	60
第1節 調査区の設定と調査の方法	60
第2節 遺構と遺物	60
(1) 遺構	60

(2)遺物	64
第IV章 横平山戦跡の調査	65
第1節 遺跡の位置と環境	65
第2節 横平山における戦況	65
第3節 調査区の設定と調査の方法	66
第4節 層序	67
第5節 西南戦争の遺構と遺物	67
(1)遺構	67
(2)遺物	76
横平山戦跡の植物珪酸体分析	98
出土した被服附属品の遺物について 鈴木徳臣	102
第V章 半高山・吉次峠戦跡の調査	104
第1節 遺跡の位置と環境	104
第2節 半高山・吉次峠戦跡の戦況	104
第3節 調査区の設定と調査の方法	105
第4節 西南戦争の遺構と遺物	106
(1)半高山戦跡調査区遺構	106
(2)吉次峠戦跡調査区遺構	108
(3)半高山戦跡調査区出土遺物	109
資料紹介1「銃陣笠」	120
(4)吉次峠戦跡調査区出土遺物	132
資料紹介2「弾薬箱」	151
第VI章 戦場遺跡出土銃弾の分類と検討	152
第1節 出土銃弾の分類	152
第2節 出土銃弾の検討	153
西南戦争遺跡出土遺物の蛍光X線分析 大坪志子・平木琢	157
西南戦争関係の出土遺物 浅川道夫	165
第VII章 病院跡の調査	168
第1節 西南戦争における病院施設	168
第2節 木葉病院跡の推定	168
第3節 正念寺山門について	172
資料紹介3「ヤタガン式銃剣」	173
木葉病院の検証-正念寺・徳成寺-建造物の調査 伊東龍一	177
1 霊雨山 正念寺	177
2 誠光山 徳成寺	189
紹介 西南戦争と正念寺 隈部広宣	196
第VIII章 官軍墓地の調査	198
第1節 遺跡の位置と環境及び調査の方法	198
第2節 官軍墓地の成立	198

第3節	墓石の配置と種類	199
第4節	墓石に見る官軍戦死者について	201
	資料紹介4「木製墓標」	207
第IX章	考察	245
	「二俣官軍本営出張所跡」の石造建物について	
	－熊本県玉名郡玉東町「西南戦争遺跡」関係－ 高瀬哲郎	246
	西南戦争における官軍墓地の成立と現状について 前川清一	252
	西南戦争と玉東町－戦場・基地・墓地 水野公寿	273
	熊本県における西南戦争遺跡 西住欣一郎・岡本真也	289
第X章	総括	299
第1節	はじめに	299
第2節	調査の成果	299
第3節	今後の課題	307

## 写真図版目次

図版1	上 二俣官軍砲台跡遠景	図版12	上 半高山戦跡出土エンフィールド銃弾等
	下 二俣瓜生田官軍砲台跡調査区	左下 半高山戦跡出土薬莢・雷管	
図版2	上 二俣瓜生田官軍砲台跡出土銃弾等	右下 半高山戦跡出土四斤砲弾	
	下 二俣瓜生田官軍砲台跡出土遺物	図版13	上 正念寺山門正面
図版3	上 二俣古閑官軍砲台跡	左下 正念寺山門	
	下 二俣古閑官軍砲台跡トレンチ土層断面	右下 山門に残る銃弾痕	
図版4	上 二俣古閑官軍砲台跡出土遺物	図版14	徳成寺
	下 二俣古閑官軍砲台跡出土銃弾等	図版15	上 高月官軍墓地近景
図版5	上 二俣官軍本営出張所跡近景	左下 高月官軍墓地	
	下 二俣官軍本営出張所跡石蔵跡西側壁面	右下 高月官軍墓地外壁の樋	
図版6	上 横平山全景	図版16	左上 宇蘇浦官軍墓地吉松秀枝少佐の墓
	下 横平山戦跡山頂塹壕跡	右上 宇蘇浦官軍墓地内警視局墓石	
図版7	上 横平山戦跡陣地遺構1	下 宇蘇浦官軍墓地	
	左下 横平山戦跡土坑SK03・SK04	図版17	上 二俣瓜生田官軍砲台跡
	右下 SK03・SK04土層断面	明治10年上野彦馬撮影	
図版8	左上 横平山戦跡出土エンフィールド銃弾	下 二俣古閑官軍砲台跡	
	右上 横平山戦跡出土スナイデル銃弾	明治10年上野彦馬撮影	
	左下 横平山戦跡出土スナイデル銃薬莢等	図版18	上 二俣古閑官軍砲台跡1/3
	右下 横平山戦跡出土鏢等	明治10年上野彦馬撮影	
図版9	上 半高山・吉次峠戦跡遠景	下 二俣古閑官軍砲台跡2/3	
	下 吉次峠から見た半高山近景	明治10年上野彦馬撮影	
図版10	上 半高山戦跡スペンサー薬莢集中区	図版19	上 二俣古閑官軍砲台跡3/3
	左中 半高山戦跡盛土遺構	明治10年上野彦馬撮影	
	左下 半高山戦跡銅貨出土状況	下 玉名郡木葉町附近両軍配置図	
	右下 半高山戦跡雷管出土状況	明治16年作成	
図版11	半高山戦跡出土スナイデル銃弾		



図版20	上 玉名郡二俣村両軍配置並罹災区域図 明治16年作成
	下 玉名郡上白木村両軍配置図 明治16年作成
図版21	上 玉名郡西安寺村両軍配置図 明治16年作成
	下 玉名郡白木村両軍配置並罹災区域図 明治16年作成

図版22	上 玉名郡原倉村両軍配置図 明治16年作成
	下 「明治十年田原・吉次・植木戦績図」大正9年発行
図版23	高月陸軍埋葬地図 明治19年調製
図版24	上 宇蘇浦陸軍埋葬地図 明治19年調製
	下 宇蘇裏(浦)陸軍墓地内警視局員埋葬略図 明治19年調製

## 挿 図 目 次

第1図	玉東町遺跡地図……………	10	第35図	二俣古閑官軍砲台跡出土遺物実測図(I字型摩擦管等) ……	55
第2図	西南戦争の主な戦い……………	14	第36図	二俣古閑官軍砲台跡出土遺物実測図 (銃弾・砲弾関係遺物等) ……	56
第3図	玉東町東部の台場分布図……………	18	第37図	二俣古閑官軍砲台跡出土遺物実測図……………	57
第4図	二俣官軍砲台跡地形図及び調査区位置図……………	24	第38図	二俣古閑官軍砲台跡出土遺物実測図……………	58
第5図	二俣瓜生田官軍砲台跡トレンチ配置図……………	25	第39図	二俣官軍本営出張所跡遺構配置図……………	61
第6図	二俣瓜生田基本層序……………	26	第40図	二俣官軍本営出張所跡石蔵跡西側壁面立面図(B-B') ……	63
第7図	二俣瓜生田官軍砲台跡2・3区トレンチ土層断面図 ……	27	第41図	二俣官軍本営出張所跡石蔵跡西側壁面断面図 ……	63
第8図	二俣瓜生田官軍砲台跡2区1Gr遺構配置図 ……	29	第42図	二俣官軍本営出張所跡石蔵跡平面図……………	63
第9図	2区1GrSD1・SD2平面・土層断面図 ……	30	第43図	二俣官軍本営出張所跡表面採集遺物……………	64
第10図	2区1Gr硬化面平面図・土層断面図 ……	31	第44図	「二俣村両軍配置並罹災区域図」明治16年作成 (熊本県立図書館蔵)……………	65
第11図	二俣瓜生田官軍砲台跡2区1GrSK01平面・土層断面図 ……	32	第45図	横平山戦跡トレンチ配置図・グリッド区割図……………	67
第12図	二俣瓜生田官軍砲台跡2区1GrSK02平面・土層断面図 ……	33	第46図	横平山戦跡山頂部遺物出土状況……………	68
第13図	二俣瓜生田官軍砲台跡遺物出土状況図……………	34	第47図	「斯氏築城典刑巻之二」……………	68
第14図	二俣瓜生田官軍砲台跡出土遺物実測図(摩擦管等) ……	35	第48図	横平山戦跡山頂塹壕土層断面図……………	69
第15図	二俣瓜生田官軍砲台跡摩擦管分布図……………	36	第49図	横平山戦跡山頂トレンチ土層断面図……………	69
第16図	二俣瓜生田官軍砲台跡出土遺物実測図(銃弾関係遺物) ……	37	第50図	横平山戦跡陣地遺構1・1Tr平面・断面図……………	70
第17図	二俣瓜生田官軍砲台跡出土遺物実測図(帽章等) ……	39	第51図	横平山戦跡陣地遺構1遺物出土状況詳細図 ……	71
第18図	二俣瓜生田官軍砲台跡出土遺物実測図(木ネジ釘等) ……	40	第52図	横平山戦跡11Tr平面・断面図……………	72
第19図	二俣瓜生田官軍砲台跡出土遺物実測図……………	41	第53図	横平山戦跡9Tr平面・土層断面図……………	74
第20図	二俣瓜生田官軍砲台跡トレンチ配置図……………	42	第54図	横平山戦跡10Tr平面図……………	74
第21図	二俣瓜生田官軍砲台跡1区12Tr平面図・北壁土層断面 図及びトレンチ内出土遺物実測図……………	43	第55図	横平山戦跡出土遺物分布図……………	77
第22図	二俣瓜生田官軍砲台跡1区13Tr平面図・南壁土層断面図 ……	43	第56図	横平山戦跡出土遺物実測図(エンフィールド銃弾) ……	82
第23図	二俣瓜生田官軍砲台跡1区14Tr平面図・北壁土層断面図 ……	44	第57図	横平山戦跡出土遺物実測図(スナイデル銃弾A類) ……	83
第24図	二俣瓜生田官軍砲台跡1区14Tr出土遺物実測図 ……	44	第58図	横平山戦跡出土遺物実測図(スナイデル銃弾B類等) ……	84
第25図	二俣瓜生田官軍砲台跡1区15Tr北壁土層断面・平面図 ……	45	第59図	横平山戦跡出土遺物実測図(スナイデル薬莖) ……	86
第26図	二俣瓜生田官軍砲台跡1区15Tr出土遺物実測図 ……	45	第60図	横平山戦跡出土遺物実測図(スナイデルスペンサー薬莖) ……	87
第27図	二俣瓜生田官軍砲台跡1区16Tr土層断面図 ……	45	第61図	横平山戦跡出土遺物実測図……………	89
第28図	二俣瓜生田官軍砲台跡H24年確認調査トレンチ土層断面図 ……	46	第62図	横平山戦跡出土遺物実測図……………	90
第29図	二俣瓜生田官軍砲台跡H24年確認調査出土遺物実測図 ……	46	第63図	半高山・吉次峠戦跡調査区範囲図……………	105
第30図	二俣古閑官軍砲台跡調査区トレンチ配置図 ……	50	第64図	半高山戦跡トレンチ配置図……………	106
第31図	二俣古閑官軍砲台跡土層断面図……………	50	第65図	半高山戦跡1Tr北側土層断面図……………	106
第32図	二俣古閑官軍砲台跡遺物出土状況図……………	52	第66図	半高山戦跡SX01平面図・西側壁面土層断面図 ……	107
第33図	二俣古閑官軍砲台跡摩擦管種類別分布図……………	53	第67図	吉次峠戦跡調査区1TrSD01東壁面土層断面図 ……	108
第34図	二俣古閑官軍砲台跡出土遺物実測図(L字型摩擦管) ……	54			

第68図	半高山戦跡遺物出土状況図……………109	第89図	徳成寺建物配置図……………176
第69図	半高山山頂部薬莢等分布図(上)・山頂岩陰スベンサー 薬莢出土状況(下)……………110	第90図	玉名郡内田手永寺院本末間数御改帳 (永青文庫所蔵)より作図「正念寺」……………178
第70図	半高山戦跡調査区古銭出土状況……………111	第91図	正念寺山門平面図・断面図……………179
第71図	半高山・吉次峠戦跡遺物分布図・詳細図……………112	第92図	正念寺山門正面立面図……………180
第72図	半高山戦跡出土遺物実測図(エンフィールド銃弾等)……………117	第93図	正念寺山門背面立面図……………180
第73図	半高山戦跡出土遺物実測図(スナイデル銃弾A1・A2類)……………119	第94図	正念寺山門東立面図……………181
第74図	半高山戦跡出土遺物実測図(スナイデル銃弾A類)……………120	第95図	正念寺山門東断面図……………181
第75図	半高山戦跡出土遺物実測図(スナイデル銃弾B・A2/B類)……………121	第96図	正念寺山門西立面図……………182
第76図	半高山戦跡出土遺物実測図(銃弾関係遺物)……………122	第97図	正念寺山門西断面図……………182
第77図	半高山戦跡出土遺物実測図(スナイデル薬莢)……………123	第98図	正念寺鐘楼平面図……………183
第78図	半高山戦跡出土遺物実測図(スナイデル薬莢)……………124	第99図	正念寺鐘楼断面図……………183
第79図	半高山戦跡出土遺物実測図(スナイデル薬莢)……………125	第100図	正念寺庫裡平面図……………184
第80図	半高山戦跡出土遺物実測図(スベンサー薬莢・雷管)……………126	第101図	玉名郡内田手永寺院本末間数御改帳 (永青文庫所蔵)より作図「徳成寺」……………190
第81図	半高山戦跡出土遺物実測図(砲弾)……………128	第102図	徳成寺本堂断面図……………191
第82図	半高山戦跡出土遺物実測図(砲弾)……………129	第103図	徳成寺本堂平面図……………192
第83図	半高山戦跡出土遺物実測図(砲弾)……………130	第104図	高月・宇蘇浦官軍墓地墓石実測図……………201
第84図	半高山戦跡出土遺物実測図(古銭・キセル)……………131	第105図	官軍墓地分布図……………205
第85図	半高山戦跡出土遺物実測図(キセル)……………132	第106図	高月官軍墓地平面図・墓石配置図……………208
第86図	吉次峠戦跡出土遺物実測図……………133	第107図	宇蘇浦官軍墓地平面図・墓石配置図……………209
第87図	正念寺山門石段等平面・立面・縦断面実測図……………174		
第88図	正念寺建物配置図……………175		

## 表 目 次

第1表	玉東町の遺跡……………11	第15表	蛍光X線による半高山戦跡出土エンフィールド銃弾 分析値……………162
第2表	二俣瓜生田官軍砲台跡出土遺物観察表……………48-49	第16表	蛍光X線による横平山戦跡出土スナイデル薬莢 分析値……………163
第3表	二俣古閑官軍砲台跡出土遺物観察表……………59	第17表	スナイデル銃弾における型別主要元素の発現率及び 平均含有率……………163
第4表	横平山戦跡出土遺物観察表……………92~97	第18表	蛍光X線による比較資料分析値……………163
第5表	分析試料……………98	第19表	玉東町における病院繻帯所地名表及び官軍墓地に おける木葉病院死者の推移……………171-172
第6表	植物珪酸体分析結果……………99	第20表	高月官軍墓地死亡地・死亡日一覧……………203
第7表	半高山戦跡出土遺物観察表……………134~150	第21表	宇蘇浦官軍墓地死亡地・死亡日一覧……………204
第8表	吉次峠戦跡出土遺物観察表……………151	第22表	官軍墓地一覧……………206
第9表	第一第二旅団後装銃弾薬受払表 (明治10年3月3日より13日まで)……………152	第23表	高月官軍墓地石碑名簿……………210~233
第10表	玉東町西南戦争遺跡出土銃弾関係遺物一覧……………152	第24表	宇蘇浦官軍墓地石碑名簿……………234~243
第11表	玉東町西南戦争遺跡の銃弾の分類……………153		
第12表	スナイデル実包変遷表……………154		
第13表	蛍光X線による横平山戦跡出土スナイデル銃弾 分析値……………159-160		
第14表	蛍光X線による横平山戦跡出土エンフィールド銃弾 分析値……………161		

# 第1章 調査の概要

## 第1節 はじめに

西南戦争は日本における最大にして最後の内戦である。西郷隆盛を盟主とした鹿児島県の不平士族ら反政府軍(以下、薩軍)と明治政府軍(以下、官軍)が明治10(1877)年2月14日から9月24日までの約8ヶ月の間、熊本を中心に宮崎・鹿児島・大分各県において戦闘を繰り返した。約14,000人の戦死者を出しながら、西郷隆盛の自刃をもって西南戦争は終結を迎えた。この事件の終結は幕末・明治維新期の内乱の終結を意味し、その後、日本は自由民権運動を中心とした言論の時代へと変わっていった。

西南戦争において、当町と隣接する熊本市北区植木町は大激戦地となった。両軍が築いた陣地や台場等、西南戦争関連の遺跡は現在も数多く残っている。しかし一方で当時、戦地となった地域の被害は甚大なもので衝撃的な事件であった。少し前までは「この前の戦争」として語り継がれてきたが、戦後135年を経た今日、人々の記憶は風化しつつある。多くの戦死傷者を出し、地域に甚大な被害をもたらしながらも近代日本を産み出すきっかけとなったこの事件とその遺跡を、後世に伝え残していくことは現代に生きる私たちの責務である。

本書では平成20年度から平成24年度にかけて行った調査について報告する。調査は、半高山・吉次峠戦跡、横平山戦跡、二俣瓜生田官軍砲台跡、二俣古閑官軍砲台跡、二俣官軍本営出張所跡、正念寺、徳成寺、高月官軍墓地、宇蘇浦官軍墓地に対して行った。半高山・吉次峠戦跡における調査は熊本県カントリーパーク事業に伴う国土交通省補助事業として、それ以外の調査は文化庁国庫補助事業として国庫補助金を受けて行った。

## 第2節 調査に至る経緯

当町における西南戦争の遺跡は、周知の遺跡としてこれまで保存活用がなされてきた。また、平成7年度発行の『玉東町史』編纂の際には膨大な関連史料の収集がなされ、当町における西南戦争の実態解明がなされた。しかし、いずれの近代の遺跡もそうであるように、文献調査が主となり個別具体的な遺跡の調査、検討等はあまりなされていなかった。

平成7年「特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準」の一部改正に伴い、文化庁文化財部記念物課によって設置された「近代遺跡の調査等に関する検討会」によって、幕末・開国頃から第二次世界大戦終結頃を対象とした全国的な近代遺跡の調査が行われた。そこで、約6,000件の報告の中から詳細調査対象の戦争遺跡50件として「西南戦争遺跡群」がリストアップされた。そのような中、当町では平成19年に計画された半高山公園整備計画が発端となり、西南戦争遺跡の価値付けを行うことが急務となった。そこで同年の確認調査もふまえ、当町に所在する関連遺跡の学術的価値付けを行い国指定史跡とすることを目的に、平成21年4月に玉東町西南戦争関連遺跡群調査検討委員会を組織し、本格的な発掘調査に着手した。また同年8月には植木町・玉東町西南戦争遺跡群連携保存活用協議会を立ち上げ、旧植木町(現熊本市北区植木町)と西南戦争遺跡群の国指定史跡に向けての取り組みを始めた。

**調査の目的** 調査の目的は、明確な遺構や遺物の検出により具体的な戦闘の内容を明らかにし、遺跡群の「国指定史跡」を目指すことである。調査に当たっては調査検討委員会の審議、指導を得て行い、また、

文化庁、熊本県文化課に度重なる指導・助言を賜った。平成23年度第1回調査検討委員会で、国指定史跡の範囲について協議がなされ、半高山・吉次峠戦跡、横平山戦跡、二俣瓜生田官軍砲台跡、正念寺、徳成寺、高月官軍墓地、宇蘇浦官軍墓地の7箇所を国指定史跡とすることを目標に調査を進めることとなった。

### 第3節 調査の組織

西南戦争遺跡調査の調査主体は玉東町教育委員会であり、平成21年度発足の玉東町西南戦争関連遺跡群調査検討委員会の審議・了承を得て実施している。調査の組織、協力者は以下のとおりである。(敬称略)

調査主体	玉東町教育委員会
	玉東町西南戦争関連遺跡群調査検討委員会
専 門 委 員	甲元眞之(永青文庫センター長、元熊本大学教授)(H21年4月～) 水野公寿(元 熊本県立大学非常勤講師)(H21年4月～) 鈴木 淳(東京大学教授)(H21年4月～)
地 元 委 員	東原重則(玉東町文化財保護委員会会長)(H21年4月～) 西村重光(元 二俣東地区嘱託員)(H21年4月～H23年3月) 三嶋 司(元 西安寺地区嘱託員)(H21年4月～H22年3月) 深川隆則(元 原倉東地区嘱託員)(H21年4月～H22年3月) 清田勝家(原倉東ボランティア団体代表)(H21年4月～) 上村聖一(二俣東地区嘱託員)(H23年4月～) 吉川忠廣(元 原倉東地区嘱託員)(H22年4月～) 三嶋 功(元 西安寺地区嘱託員)(H22年4月～)
オブザーバー	禰宜田佳男(文化庁文化財部記念物課)(H21年4月～) 山下信一郎(文化庁文化財部記念物課)(H21年4月～) 前川清一(熊本県教育庁文化課)(H21年4月～H22年3月) 西住欣一郎(熊本県教育庁教育総務局文化課)(H21年4月～) 岡本真也(熊本県教育庁教育総務局文化課)(H24年4月～) 木庭(前田)真由子(熊本県教育庁教育総務局文化課)(H23年4月～) 田中 誠(熊本県都市計画課)(H21年4月～H24年3月) 堀 朝喜(熊本県都市計画課)(H24年4月～) 神原育子(熊本県都市計画課)(H24年4月～)
事 務 局	小柳俊介(玉東町教育委員会)(H21年4月～8月) 坂田 傑(玉東町教育委員会)(H21年9月～) 徳永 博(玉東町教育委員会)(H21年4月～H22年3月) 北島義文(玉東町教育委員会)(H22年4月～H24年3月) 野村義勝(玉東町教育委員会)(H23年4月～) 清田良一(玉東町建設課)(H21年4月～) 上村健二(玉東町産業振興課)(H21年4月～H24年3月)

高瀬伸一(玉東町産業振興課)(H24年4月～)

藤本一之(玉東町教育委員会社会教育課)(H21年4月～)

宮本千恵子(玉東町教育委員会社会教育課)(H21年12月～)

玉東町文化財保護委員

東原重則

児玉顯太郎

寺本由喜代

池田道明

永田英津子

西浦彰一

平成20(2008)年度

内 容:半高山・吉次峠戦跡確認調査(玉名郡玉東町原倉字半高1112-43 他)

調査期間:平成20年7月28日～8月15日

調査責任者:小柳俊介(教育長)、徳永博(事務局長)

調査担当:西住欣一郎(熊本県文化課主幹)、木村龍生(熊本県文化課主任学芸員)

調査事務:藤本一之(課長補佐)

平成21(2009)年度

内 容:①半高山・吉次峠戦跡発掘調査

②横平山戦跡発掘調査(玉名郡玉東町字二俣2445-7 他)

調査期間:①平成21年7月6日～10月24日

②平成21年12月2日～平成22年2月26日

調査責任者:小柳俊介(教育長)～平成21年8月、坂田傑(教育長)平成21年9月～、徳永博(事務局長)

調査担当・調査事務:藤本一之(課長補佐)、宮本千恵子(臨時職員)平成21年12月～

調査指導:原剛(軍事史学会副会長)、磯村照明(ジャパンカートリッジ・コレクターズアソシエーション  
附属弾薬研究センター長)

平成22(2010)年度

内 容:二俣瓜生田官軍砲台跡発掘調査(玉名郡玉東町字二俣1805-1他)

調査期間:平成22年5月6日～平成22年9月22日、平成22年11月8日～平成23年1月15日

調査責任者:坂田傑(教育長)、北島義文(事務局長)

調査・整理担当:宮本千恵子(主事)

調査事務:藤本一之(課長補佐)、宮本千恵子(主事)

調査指導:高橋信武(大分県埋蔵文化財センター主幹)、伊東龍一(熊本大学自然科学研究科大  
学院教授)、長谷部善一(熊本県教育庁文化課参事)

平成23(2011)年度

内 容:①二俣古閑官軍砲台跡発掘調査(玉名郡玉東町字二俣1918-1 他)

②横平山戦跡第2次調査

③正念寺・徳成寺調査

④高月・宇蘇浦官軍墓地調査

⑤半高山戦跡第2次調査

⑥二俣官軍本営出張所跡調査

調査期間：平成23年5月～平成24年3月中旬

調査責任者：坂田傑(教育長)、北島義文(事務局長)

調査・整理担当：宮本千恵子(主事)、野満彩子(非常勤職員)

調査事務：藤本一之(課長補佐)、宮本千恵子(主事)

調査指導：浅川道夫(日本大学准教授)、牛嶋茂(元奈良文化財研究所企画調整室専門職員)、高瀬哲郎(石垣技術研究機構代表)、高橋信武(大分県埋蔵文化財センター主幹)、前川清一(肥後金石研究会主宰)、水野公寿(玉東町西南戦争関連遺跡群調査検討委員会専門委員)、渡辺芳郎(鹿児島大学教授)

平成24(2012)年度

内 容：横平山戦跡・半高山戦跡レプリカ埋納作業、報告書作成作業

調査責任者：坂田傑(教育長)、野村義勝(事務局長)

調査・整理担当：宮本千恵子(主事)、野満彩子(非常勤職員)

調査事務：藤本一之(課長補佐)、宮本千恵子(主事)

調査協力者 玉東町原倉東地区、二俣東地区、木葉地区を主とした多くの地元の方々、区長の方々、植木町・玉東町西南戦争遺跡群連携保存活用協議会委員、植木町西南戦争遺跡群調査検討委員、狩野照巳・坂田幸之助・前田重治(元玉東町文化財保護委員)、中原幹彦・角田幸一・増田直人・檀佳克・山下宗親・松村真紀子・美濃口雅朗(熊本市教育委員会)、美濃口紀子(熊本市立熊本博物館)、富田紘一(熊本城顕彰会)、木村龍生・水上公正(熊本県教育委員会)、今田治代(氷川町教育委員会)、吉永直人・西山由美子(八代市教育委員会)、鶴嶋俊彦(人吉市教育委員会)、正岡祐子(水俣市教育委員会)、橋口剛士(御船町教育委員会)、緒方博文(日向市教育委員会)、佐々木幸男・末吉広海(鹿児島市教育委員会)、中村幸一郎(鹿児島県立埋蔵文化財センター)、新里亮人(伊仙町教育委員会)、中山寧人(鳥取県埋蔵文化財センター)、尾崎光伸(財団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室)、坂口浩司(堺市市長公室文化部)、遠藤正樹(出雲市文化環境部文化財課)、菅原広史(浦添史文化部文化課)、荻野珠奈(志摩市教育委員会)、石田為成(岡山市古代吉備文化財センター)、西村美幸(三重県埋蔵文化財センター)、澤田正明(島根県立古代出雲歴史博物館)、高橋正臣(高良大社)、八坂秀史(大分県護国神社)、渡辺芳郎(鹿児島大学教授)、斉藤達志(防衛省防衛研究所)、小西雅徳(板橋区立郷土資料館)、井桜直美(日本カメラ博物館)、高妻洋成・脇谷草一郎・田村朋美(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所)、鈴木徳臣(西南戦争研究家)、神園紘(古貨幣研究家)、坂口寛治、高木正文、角田誠、松本達也、山野皓史、Tristan Vick(順不同、敬称略)

調査協力機関 正念寺、徳成寺、田原坂資料館、熊本県立図書館、鹿児島市維新ふるさと館、国立大学法人熊本大学、熊本大学埋蔵文化財調査センター、福岡市埋蔵文化財センター、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、日本赤十字社企画広報室、防衛省防衛研究所、えびの市教育委員会、明大工業株式会社(順不同)

発掘作業員 荒木洋子、伊形久佐子、岩本大輔、小山重子、河村伸市、木下恵治、清田久利、児玉孝仁、佐々崇志、嶋田伸一、嶋田たず子、高田由美子、田中弘文、寺本純二、中尾百合子、中嶋恭一、中嶋真寛、広瀬多津美、平井美加世、松本登紀子、溝田淳子、宮田賢祠、村上憲誠

整理作業員 荒木洋子、小柳智絵美、児玉孝仁、嶋田伸一、平木琢、松本登紀子、溝田淳子

#### 第4節 調査の方法と経過

調査の方法 調査区の選定にあたっては平成5年刊行『熊本県遺跡地図』や、町史編纂の際に収集した資料や伝承等を参考に、玉東町西南戦争関連遺跡群調査検討委員会の審議、調査指導者の御指導をいただきながら行った。調査方法については、高橋信武氏(大分県埋蔵文化財センター主幹)に、金属探知機による遺物(銃弾や金属薬莖等)の探査法をご教示いただき、遺跡推定地において実施し遺物の集中区を検出した。また、遺構検出・確認のためのトレンチ掘削を行った。詳細な調査方法、調査区等については、個別に述べる。

調査検討 委員会 開催日と内容	平成21年 4月 6日	発足
	平成21年 8月 5日	半高山・吉次峠戦跡発掘調査状況報告・現地視察、二俣瓜生田官軍砲台跡調査計画について
	平成22年12月24日	半高山・吉次峠戦跡発掘調査報告、横平山戦跡発掘調査状況報告
	平成22年 4月23日	横平山戦跡発掘調査報告、二俣瓜生田官軍砲台跡発掘調査計画について
	平成22年12月 9日	二俣瓜生田官軍砲台跡発掘調査報告、半高山・吉次峠戦跡、横平山戦跡、二俣瓜生田官軍砲台跡国指定史跡範囲について、平成23年度調査予定地(官軍墓地、官軍病院跡)について
	平成23年 5月13日、14日	国指定史跡候補地の視察、選定
	平成23年 2月29日	平成23年度調査成果(二俣古閑官軍砲台跡、官軍本営出張所跡、横平山戦跡第2次調査、半高山・吉次峠戦跡第2次調査、官軍病院跡、官軍墓地)報告、横平山戦跡・二俣古閑官軍砲台跡・本営出張所跡視察



平成23年5月14日調査検討委員による現地視察(横平山戦跡)



平成22年12月9日調査検討委員会

#### 発掘調査の経過 半高山・吉次 峠戦跡の調査

平成20年度の熊本県文化課の行った確認調査をうけて、平成21年7月6日から10月24日にかけて半高山・吉次峠戦跡の第1次調査を行った。半高山は西側斜面の未開墾地を中心に約16,330㎡の遺物探査を行い、山頂部においてトレンチ調査を行った。遺物探査及び遺物掘削は7月6日から8月4日にかけて行った。その後、9月7日まで、写真による記録を行い遺物出土地点の測量を行った後に、大半の遺物を埋め戻した。また7月22日から10月8日にかけて半高山における1、2Tr掘削を行った。吉次峠戦跡においては現在公園となっている4,600㎡において遺物探査及びトレンチ調査を行った。8月6日から

同12日にかけて遺物の探査を行い、17日までに写真記録、遺物出土地点測量を行っている。また、7月27日から8月29日にかけてトレンチ掘削、土層の記録を行った。航空写真撮影は10月8日に行った。遺物の盗難が懸念された為、平成22年12月には埋め戻した遺物の回収を行った。

平成23年8月29日～平成24年1月中旬にかけて半高山の北側斜面の遺物残存状況を確認する為、約8,300㎡を対象に遺物探査を行った(第2次調査)。また、半高山第1次調査区の山頂部、裾部における遺物の再探査を行った。遺物は、写真記録、地点測量を行った後にレプリカを埋納し取り上げた。第1次、第2次調査は株式会社有明測量開発社に委託した。

横平山戦跡  
調査

平成21年12月2日～2月26日にかけて横平山戦跡の発掘調査を行った。現在公園となっている山頂部及び未開墾地である北側斜面約8,680㎡において遺物探査、掘削を行い、写真による記録、遺物出土地点の測量を随時行った。また、平成22年1月4日に1Trの掘削、1月19日～2月16日に2～5Tr、2月17日～24日に6～8Tr、2月25日、26日に9Trの掘削と埋め戻しを行った。掘削・埋め戻しはすべて人力で行った。平成23年10月12日から3月にかけて9Tr及びその拡張区にて遺構の広がりを確認した。併せて平成21年度に取り上げた遺物のレプリカ埋納作業を行った。調査に先行して行った横平山の地形測量は株式会社パブリックコンサルタントに委託した。

二俣瓜生田  
官軍砲台跡

平成22年5月6日～9月8日にかけて第1次調査を行った。高台約2,380㎡、堀道約378㎡を対象に遺物探査を行い、遺物集中区に対して、1、2Tr、1Gr設け6月11日より掘削を開始した。並行してその他13～16Trの掘削も行った。6月22日に1Gr内にて遺構検出を行い、7月26日に1Gr拡張区、8月13日には1Gr東にさらに拡張区を設け遺構を検出した。8月3日に調査検討委員による現地視察があり、8月4日には砲台の広がりを確認するために高橋信武氏と周辺踏査を行った。また、同日明大工業株式会社の協力を得て遺構の3D測量を行った。8月7日には現地説明会を開催した。9月1日には航空写真撮影を行い、9月2日に長谷部善一氏に写真撮影の指導を受け、9月6日には浅川道夫氏により調査指導を受けた。9月22日に埋め戻しを行った。職場体験学習で玉東中学校生徒2名の協力を得た。なお、調査に先行して行った調査区周辺の地形測量は株式会社有明測量に委託した。

第1次調査で検出された遺構の広がりを確認するために平成22年11月8日から平成23年1月27日までの期間で第2次調査を行った。調査区内における遺物の再探査を行い、4～11Trの掘削、遺構の検出を行っている。

二俣古閑官軍  
砲台跡調査

高台を中心とした5,840㎡の範囲において平成23年8月29日から12月中旬まで金属探知機による遺物探査及びトレンチ掘削により遺構検出面・遺物出土面を確認した。ここは、現在果樹園となっており、遺構確認作業はしていない。平成23年10月3日、4日に高橋信武氏、鈴木淳氏に調査指導をいただいた。

二俣官軍本営  
出張所跡調査

調査検討委員である鈴木淳氏に、官軍本営出張所跡について現在残っている遺構を調査するよう指導をいただいた。そこで、平成23年12月から平成24年3月にかけて4,600㎡において遺構の残存状況の確認調査を行った。平成23年2月1日に高瀬哲郎氏に調査指導を受け、2月8日より石蔵跡の検出を行った。2月27日に再度、高瀬氏による調査指導を受けた。3月12～13日に高橋氏による調査指導を受けた。13日には牛嶋茂氏の協力を得て、写真撮影を行った。

官軍病院跡  
(正念寺・徳成寺)  
調査

平成23年5月から11月にかけて建造物の実測及び検証を行った。調査は、熊本大学大学院自然科学研究科教授、伊東龍一氏に委託した。また、平成24年度第1回調査検討委員会により、西南戦争当時の街道沿いの景観を残すものとして正念寺山門及び石段、石垣までを国指定史跡予定地とすることとなった。そのため平成24年6月～7月にかけて石段の追加実測を行った。実測は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。



高月・宇蘇浦  
官軍墓地調査 平成22年3月に、当町に残る台帳と墓石の碑銘の照合作業を行った。また、平成23年5月から6月にかけて両官軍墓地の墓石配置図の作成を行った。墓石配置図の作成は遺構実測支援システム「遺構くんcubic」を利用した。基準点測量は株式会社パブリックコンサルタントに委託した。

整理作業の  
経過 平成22年11月より遺物整理作業を開始した。平成22年から平成23年3月にかけて横平山戦跡、半高山戦跡出土遺物注記、各種台帳整理、図面整理、写真整理を行った。平成23年4月から平成24年3月にかけて二俣砲台関係遺構図デジタルトレース、横平山戦跡・半高山戦跡遺物実測を行った。その他随時半高山戦跡第2次調査出土遺物注記、台帳整理及び実測を行った。平成24年3月には株式会社写測エンジニアリングに委託し遺物写真撮影を行った。平成24年4月から平成24年7月にかけて追加実測トレースを行い報告書図版、原稿作成を行った。西南戦争遺物の鑑定には浅川道夫氏、鈴木徳臣氏、高橋信武氏の多大なる協力をいただいた。また、出土土器については渡辺芳郎氏、美濃口雅朗氏、木村龍生氏に助言、指導をいただいた。

官軍墓地、官軍病院に関する調査として平成23年度に文献調査を行った。前者に関しては前川清一氏、後者に関しては水野公寿氏に調査をお願いした。熊本県立図書館所蔵県政資料の調査や、防衛研究所、国立公文書館(11月30日～12月2日)における調査を行った。

周知啓発活動	平成21年11月30日	半高山戦跡現地説明会
	平成21年 1月30日	横平山戦跡現地説明会
	平成21年 3月20日、21日	遺物展示会(田原坂資料館、玉東町中央公民館)
	平成22年 7月14日	出前授業(玉東中学校2年総合学習)
	平成22年 8月 4日	二俣瓜生田官軍砲台跡発掘体験
	平成22年 8月 7日	二俣瓜生田官軍砲台跡現地説明会
	平成23年 8月 5日	むかし体験教室「弾作り」
	平成23年 2月～3月	出土遺物展示会(玉東町中央公民館ロビー)
	平成24年 6月 1日	出前授業(玉東中学校3年総合学習)
	平成24年 6月17日	遺物展示会(ハニーローザ収穫祭に伴う)(玉東町中央公民館ロビー)



遺物展示会の様子



二俣瓜生田官軍砲台跡現地説明会の様子

## 第II章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

- 位置** 玉東町は熊本県北部にあり、玉名市の東に位置する。昭和30年3月1日に木葉村と山北村が合併して玉東村となり、昭和42年から町制を施行した。町域は南北に縦長く総面積24.4km<sup>2</sup>である。主な産業は農業であり、特に果樹栽培が盛んである。町には主要な道路が通り古来より往来の盛んなところであった。古くは豊前街道から分岐した三池往還が木葉の町中を通り、熊本市大窪から玉名高瀬へ至る吉次往還が町の南側の山並みを通っていた。現在、町の中心部には旧三池往還に沿うように国道208号線、JR鹿児島本線が東西方向に走っている。
- 地形** 北に木葉山(286m)、国見山(389m)を主峰に山々が反り立ち、南に金峰山系の三ノ岳(681.3m)から伸びる丘陵地がゆるやかに発達する。この南北の山に挟まれるように菊池川の支流である木葉川が西に向かって流れ、周辺に低地帯が広がり現在の町の中心部となっている。
- 地質** 北部山地は変成岩類、主に石英片岩、雲母片岩、角閃岩から成っている。一部に石灰岩を産出し、石灰岩の採掘は江戸末期からの町の主要産業となっている。また、南部金峰山系の山地は第三紀から第四期にかけて出来た新しい火山体で、主に安山岩や凝灰角礫岩と阿蘇起源の火砕流堆積物からなる。三ノ岳から緩やかに伸びるこれら火山丘陵地には浸食による谷が発生し、起伏に富んだ地形を成す。

### 第2節 歴史的環境

町には旧石器時代の遺跡は確認されておらず、縄文時代からの数多くの遺跡が存在する。以下時代ごとに主要な遺跡を紹介する。

- 縄文時代** 三ノ岳中腹の原倉地区では、立岩、大谷の両石器製作址が遺物の表面採集によって確認されている。三ノ岳は前述のとおり安山岩を主体とした山であり、それを利用した石斧等が採集されているが、いずれも未調査であるため詳細は不明である。その他、原倉の東山遺跡で押型文土器など早期から晩期の土器が採集され<sup>(1)</sup>、町の東側に位置する二俣台地上においても石鏃や敲石等が採集されている。
- 弥生時代** 町の北側の天神山古墳の周辺や町の南側の東山遺跡の周辺において弥生時代後期の遺物が採集確認されている。また、平成16年から平成17年度の九州新幹線建設工事に伴い発掘調査された稲佐津留遺跡では稲佐地区の台地の南西側平地にて弥生時代後期の銅鏡や巴形銅器が出土している<sup>(2)</sup>。
- 古墳時代** 町の中央を流れる白木川を中心に二基の古墳と石棺群が確認されている。二基の古墳はいずれも円墳で上古閑古墳と天神山古墳である。上古閑古墳は台地の先端部に築かれている。主体部は大型の箱形石棺である。盗掘を受けているため、副葬品は不明であるが、石棺の構造から5世紀のものと思われる。天神山古墳は、低地に築かれた円墳で、箱形石棺を主体部とする。上古閑古墳に後続するものと考えられている。
- これらに先行するのが助吉地区の石棺群であり、二俣台地の西端に位置する。墳丘は無く、十数基の石棺が一部露出した状態で検出された。1988年の調査では、4～5世紀のものと思われる箱形、舟形、家形の三種、11基の石棺と4体の人骨が検出されている。その他、6～7世紀頃と思われる横

穴群が白木川の左岸の凝灰岩壁に4基確認されている。昭和61年に実測調査がおこなわれているが、遺物は出土していない。このように町における古墳の数は少ないが、特定地域における古墳の変遷を知るうえでは重要視される。

## 古代

稲佐地区において稲佐廃寺跡が確認されている。現熊野座神社の周辺から宇野廉太郎や東弘典らによって布目瓦が多量に採集されていたが、昭和27年田辺哲夫と玉名高校考古学部によって測量調査が行われた。昭和46年松本雅明らは神殿の床下に礎石を発見し、翌年調査が行われ、法起寺式の伽藍配置の寺院が明らかになった。その後、田辺哲夫によって報告された軒丸瓦は五種類あり、奈良時代末から平安時代中期に及ぶ。唐草が大きく取り巻く新羅系瓦に似た意匠を持っていることから、朝鮮半島との関係性の有無が論じられている。

同時期には、古代の製鉄関連遺跡が多く確認されている。県下約7割の関連遺跡が玉名・玉東地域に集中しているといわれる。特に精錬遺跡は玉名の小岱山周辺、大岳周辺、そして玉東町の三ノ岳周辺に集中する。玉東町には西原製鉄遺跡をはじめ、古代末～中世初期にかけて10カ所の製鉄遺跡が現在確認されている。西原製鉄遺跡は三ノ岳の山麓に位置する遺跡で、昭和54年の調査によって二基の製鉄炉が検出され、この地域の製鉄炉の様式が明らかになった。



西原製鉄遺跡炉跡

## 中世

鎌倉時代には遠江国より下向した相良氏が山北地域を支配したといわれている。その菩提寺として現在は廃寺となっている西安寺跡があり、相良氏の銘が刻まれた三基の五輪の塔がある。これらについての調査は、昭和38年に田邊哲夫らによって行われ、廃寺の礎石や瓦等が検出された。また、平成19年には五輪の塔について再検討が行われ、逆修供養塔として建てられたものとの見解が前川清一によって示されている。



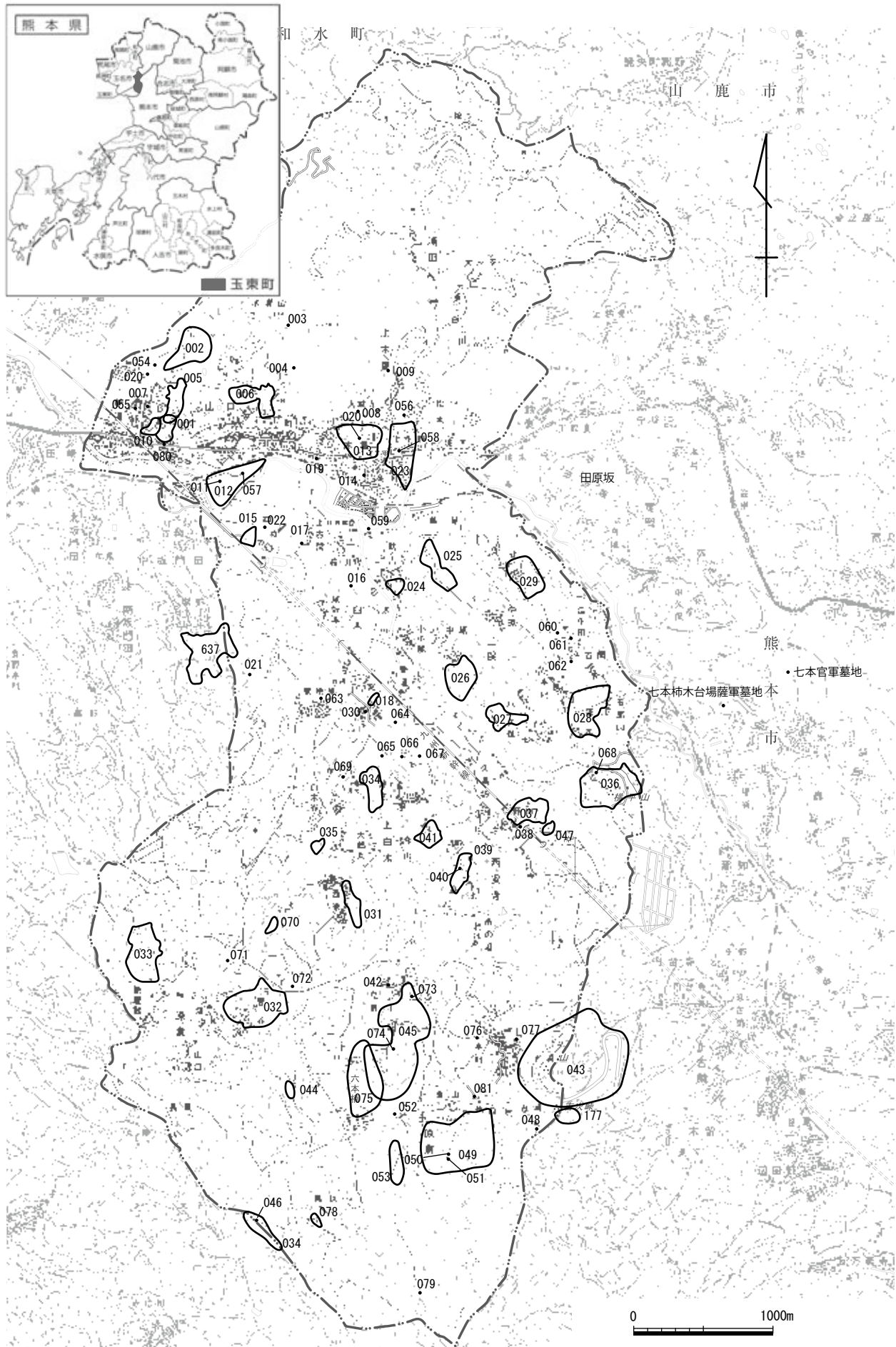
西安寺五輪塔

この五輪の塔の存在が示すように13世紀代には山北相良氏が台頭していたことがわかっているが、どのようにいつまで相良氏による支配が続いたのかはわかっていない。山北地域に於ける中世期の状況について不明な点が多いが、平成22年度に行った二俣瓜生田官軍砲台跡における調査では二俣台地の東端において中世期と思われる大溝が確認され、当該地域に於ける居城の存在が明らかになった。

その他、木葉山の南西裾部に位置する丘陵地において、掘立柱建物群や堀切を伴う南北朝時代ごろの城跡が確認されている(稲佐城跡)。また、木葉山南側末端部の丘陵地には周溝を伴う木葉城跡が確認されている。南北朝時代においては宇都宮氏、戦国時代においては小森田氏の居城であったとの伝承が残っているが詳細は不明である。

## 近世～近代

現木葉地域は内田手永、現山北地域は小田手永に属した。内田手永は「往還筋にあり、交通の便よく田畑の釣合もよく、出小屋(出店)が見られるほどだった」という。産業では銅の試掘や石灰焼きが興り、近年まで採掘が行われている。また、木葉焼と称される焼き物が盛んであった。特に素焼きの猿(木葉猿)と火鉢が有名であり、木葉猿は『南総里見八犬傳第九輯』にも取り上げられ土産物とし



第1図 玉東町遺跡地図

第1表 玉東町の遺跡(『熊本県遺跡地図』熊本県教育委員会発行より)

網掛け部分は西南戦争遺跡

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
1	稲佐廃寺跡	稲佐 切畑	古代	寺社	県	古代寺院、塔礎石・金堂基壇の一部、布目瓦多量
2	稲佐城跡	稲佐	中世	城		同上地、本丸跡に熊野神を祀る
3	伊形霊雨の墓	木葉 往生松	中世	墓	町	時習館居寮、詩作、国文に長じた
4	宇蘇浦官軍墓地	木葉 宇蘇	近代	墓地	県	西南役戦死者 333 を葬る、谷村計介墓もあり
5	宮の元	稲佐 切畑	弥生~中世	包蔵地		
6	山口	山口 長宗	弥生~中世	包蔵地		
7	立福寺跡	稲佐	中世	寺社		
8	円久寺跡	上木葉	中世	寺社		
9	大城寺跡	上木葉	中世	寺社		
10	稲佐切畑	稲佐 切畑	弥生	包蔵地		熊野神社全域、弥生土器片多量
11	窪田越前塚	木葉 久保田	古墳	古墳		墳丘上に箱式石棺の一部露出
12	町下	木葉 町下	古代・中世	包蔵地		青磁・土師器・須恵器・瓦器破片
13	木葉宇都宮城跡	木葉 丸田	中世	城		小森田城跡、役場裏手
14	高月官軍墓地	木葉 高月	近代	墓地	県	西南役戦死者 976 柱を葬る
15	音丸	白木 上古閑	弥生・古墳	包蔵地		弥生土器・土師器
16	箱井古墳	白木 箱井	古墳	古墳		高台上小円墳、石材露出する
17	上古閑古墳	白木 上古閑	古墳	古墳		箱形、蓋入母屋の石棺
18	二郎丸横穴群	白木 二郎丸	古墳	古墳		2基
19	揚の六地藏	木葉 前田	中世	石造物		銘があるが風化し、不詳
20	有栖川官督戦地	木葉 丸田	近代	軍事	町	碑あり
21	白木柏軒の墓	白木 口の坪	近世	墓		
22	世尊寺跡	木葉 世尊寺	中世	寺社		真言宗、寺号築地蓮華院に移す
23	土生野	木葉 土生野	古墳	包蔵地		部落内に須恵器・土師器を包含する
23	土生野	木葉 土生野	縄文~古代	包蔵地		須恵器・土師器
24	助吉古墳	二俣 助吉	古墳	古墳		封土を失い、石材堆積
25	陣林	二俣 陣林	縄文~古代	包蔵地		
26	堂の元	二俣 堂の元	縄文~古代	包蔵地		
27	京塚	二俣 京塚	縄文~古代	包蔵地		
28	前久保古塔碑群	二俣 前久保ほか	中世	石造物		
29	辻	二俣 辻	縄文後晩期	包蔵地		
30	小清水横穴	白木 小清水	古墳	古墳		風化深い、2基
31	西原製鉄跡	原倉 西原	古代	生産	県	鉾滓・焼灰あり
32	原倉	原倉 畑ほか	弥生	包蔵地		弥生土器・石器
33	原倉西	原倉 建が迫ほか	古墳	包蔵地		須恵器
34	城山城跡	上白木 城山ほか	中世	城		山北小学校一帯
35	太郎丸権現山	上白木 太郎丸	古代	生産		スラッグ・ふいごの羽口
36	横平山戦跡	二俣 中道ほか	近代	戦跡	町	西南役、濠跡、記念碑あり
37	西安寺	西安寺 上の原ほか	弥生末	包蔵地		土師器・須恵器片、住居跡
38	久満坊埋蔵銭出土地	西安寺 吉丸	古代・中世	包蔵地		中国唐~明 479 個
39	西安寺跡	西安寺 寺中尾ほか	中世	寺社	県	礎石・排水溝
40	西安寺五輪塔群付板碑群	西安寺 寺中尾	中世	石造物	県	相良氏五輪塔 外、板碑
41	座主古塔碑群	上白木 座主	中世	石造物		笠塔婆・五輪塔
42	立岩石器製作	原倉 立岩屋敷	縄文	生産		石斧・剥片多数
43	半高山戦跡	原倉 半高	近代	戦跡		
44	釜の口製鉄跡	原倉 山口原	古代・中世	生産		鉾滓多量散布、ふいごの羽口、焼土
45	東山西	原倉 荒平	縄文~弥生	包蔵地		縄文後晩期御領式、弥生
46	金糞谷製鉄跡	原倉 藤原	古代・中世	生産		
47	西安寺製鉄	西安寺 寺中尾	古代	生産		スラッグ
48	吉次峠戦跡	原倉 荒強当	近代	戦跡	町	西南役、佐々軍駐屯地、谷村計介捕まる
49	東山	原倉 荒強当	縄文	包蔵地		縄文後期の土器・石器含包
50	むくろじ製鉄跡	原倉 荒強当	古代	生産	町	鉾滓・羽口多量
51	むくろじかじ墓群	原倉 荒強当	古代	墳墓		山林中にいくつもの小墳丘点在
52	篠原国幹戦没地	原倉 大谷	近代	緑地		石標柱、薩軍武将、明治10年3月4日戦死
53	大谷石器製作	原倉 大谷	縄文	生産	町	安山岩石器多量出土
54	寺山板碑	稲佐 寺口	中世	石造物		
55	グランさん板碑	稲佐 馬場屋敷	中世	石造物		
56	官軍本営跡	木葉 部田見	近代	戦跡		
57	天神山古墳	木葉 町下	古墳	古墳		
58	官軍病院跡(正念寺)	木葉 土生野	近代	包蔵地		
59	眼鏡橋跡	二俣 鍛冶場	近世	包蔵地		
60	菌吹如来	二俣 北原		建造物		
61	官軍砲台跡	二俣 瓜生田	近代	戦跡		
62	官軍本営出張所	二俣 瓜生田	近代	戦跡		
63	山北八幡宮仁王像	白木 粟地原	中世	建造物	町	要 防火
64	阿蘇火砕流埋没炭化木出土地	上白木 小林		記念物		
65	阿蘇火砕流埋没炭化木出土地	上白木 黒牟田		記念物		
66	即身成仏の碑	上白木 小林	中世	石造物		
67	弾痕の家	上白木 小林	近代	建造物		
68	薩軍仮埋葬地	二俣 峠	近代	墓地		
69	眼鏡橋跡	上白木 鐘丸	近世	包蔵地		
70	清田原製鉄	原倉 清田原	古代・中世	生産		
71	官軍砲台跡	原倉 七ツ松	近代	軍事		
72	道標(追分石)	原倉 清田原	近世	石造物		
73	薩軍砲台跡	原倉 立岩原	近代	戦跡		
74	菖蒲谷製鉄所跡	原倉 荒平	古代	生産		
75	六本楠	原倉	縄文	包蔵地		
76	原倉清田氏板碑群	原倉 登立	中世	建造物	町	
77	原倉清田氏五輪塔	原倉 尾池	中世	建造物	町	
78	馬伏製鉄	原倉 馬伏	古代	生産		
79	官軍砲台跡	原倉 大谷	近代	戦跡		
80	乃木少佐奮戦の地	稲佐 平迫	近代	軍事		

で珍重されたようである。『玉名郡村誌』の明治11年代の調査<sup>(3)</sup>によると、焼物職は12戸もあり、盛んだったことを偲ばせる。その他、木葉には旅籠や酒屋、種々雑多な業種があり、宿場町として栄えていた。明治期には第7大区4小区に属した。

一方、小田手永に属する山北の村々は「田方少く、畑方は山付、段畑かち、地味いたってよろしからず、其上馬通成り難し」とある。明治期には第7大区5小区に属し産業は農業が中心であった。両地域は、1977(明治10)年国内最後の内戦となった西南戦争における大激戦地となった。

註

- (1)玉東町史編纂委員会 1994『玉東町史 西南戦争編・資料編』玉東町 第二編 考古・古代にて前田重治採集の縄文土器が報告されている。
- (2)熊本県教育委員会 2010『稲佐津留遺跡・西安寺遺跡-九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告』熊本県文化財調査報告第263集
- (3)田辺哲雄編 1958『肥後国玉名郡村誌』玉名民報社

## 紹介 木葉猿の由来

木の葉猿窯元 永田 禮三

今を去る千三百余年前 養老七年、木の葉の里に侘住いをしていた都の落人が、夢枕に立った老翁のお告げにより、奈良の春日大明神を祀り、木の葉山の赤土で祭器を作り、残りの土を捨てたところ猿に化したという伝説から生まれたものである。

悪病、災難除け、安産子宝、子孫繁栄の守り神として広く愛玩されている。型を使わず指先だけで粘土をひねって作り、素焼の素朴な伝統玩具である。

大正時代の「全国土俗玩具番付表」で横綱にランクされている。



現在の木葉猿



「南総里見八犬伝」表紙  
(千葉県館山市立博物館蔵)  
今から280年前に「南総里見八犬伝」第九巻の表紙に掲載された。



元治元年 木葉猿版画  
(坂田幸之助氏蔵)  
(「玉東町史」より転用)

### 第3節 西南戦争の概要

#### 西南戦争の概要

西南戦争は1877(明治10)年に勃発した国内最後の内戦である。西郷隆盛率いる私学校生徒を中心とした鹿児島の士族1万3千人は、明治政府に抗議せんと陸路鹿児島を出発した。2月15日のことである。途中、党薩諸隊といわれる人々も加わり総勢3万人に膨らんだ。2月19日に「鹿児島県賊徒征討」の詔勅が下り、薩軍は賊軍となる。

薩軍諸隊は2月22日に熊本城を包囲するも、政府の軍隊である熊本鎮台の籠城軍を破れず、主力は玉名方面へと向かう。玉名高瀬の戦いで菊池川を越えることの出来なかった薩軍は、田原坂を中心として東は山鹿、西は玉東町吉次峠、三の岳を越えて河内に至るまで官軍(明治政府軍)を迎え撃つための陣を敷いた。官軍は高瀬より前進するも苦戦を強いられることになる。このとき、玉東町は官軍の兵站が置かれ、基地の町と化した。

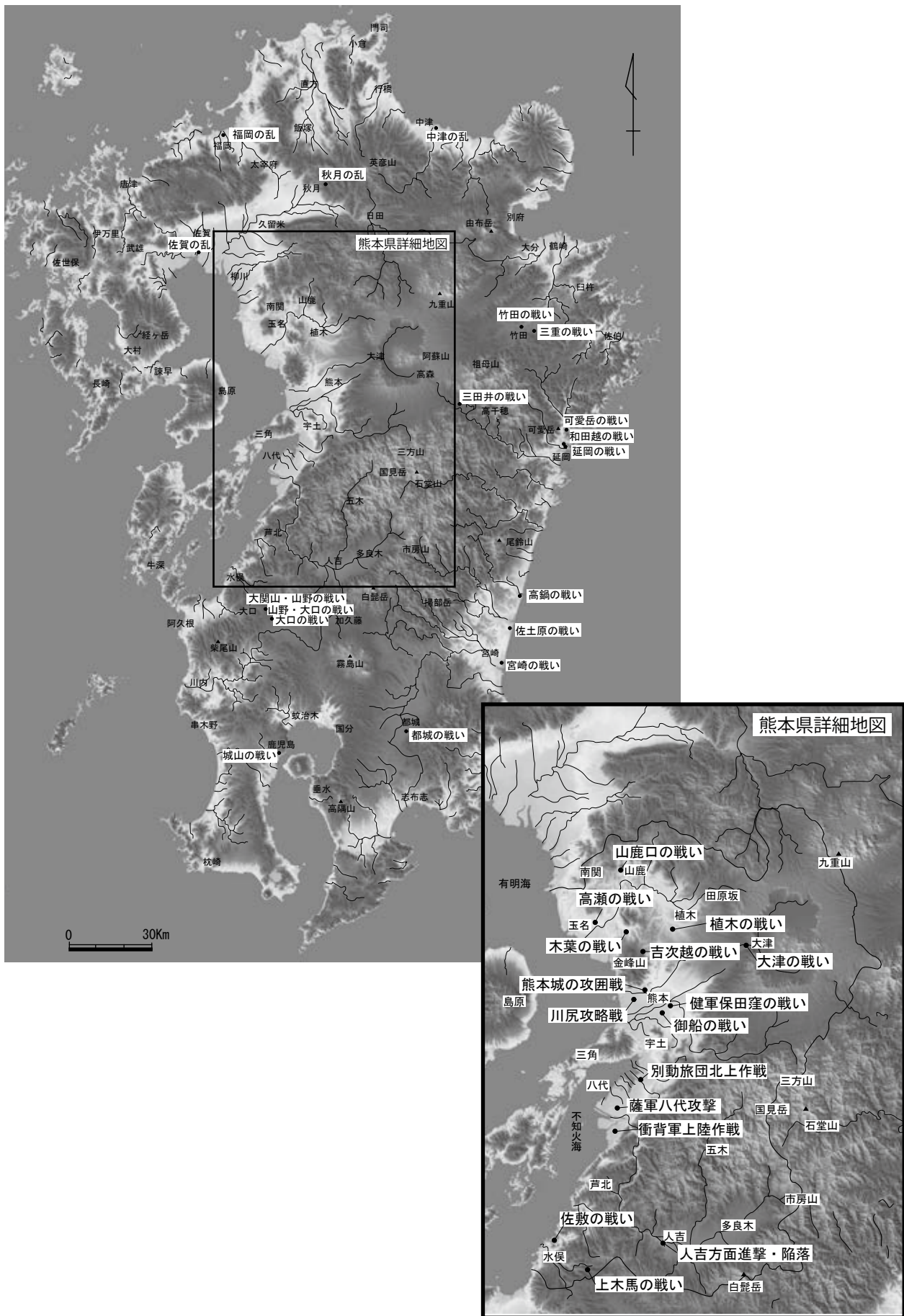
一方官軍は挟撃作戦を取り、衝背軍は八代方面から上陸し戦線を進め、また薩軍の本拠地である鹿児島を押さえ、薩軍の兵站を断つことに成功した。3月20日に官軍が田原坂を占領し、周辺地域、さらに熊本市内一帯の薩軍を駆逐することで4月16日に漸く熊本城開城となる。

薩軍はそれでもなお起死回生を願い、人吉方面、豊後方面、水俣方面へと拡散していく。6月1日に官軍が人吉を占領後、薩軍は大分・宮崎方面へと向かう。8月16日宮崎県の長井村にて西郷による解散宣言があり、党薩諸隊は降伏する。西郷らを中心とした薩軍約400名は宮崎の可愛岳を越えて、8月30日に故郷鹿児島に至り、城山に陣営を設けた。官軍は6万人の軍で彼らを迎え討つことになる。そして9月24日の最後の総攻撃の日に西郷らの自刃により終結する。

明治政府は反乱軍の沈静の為に約8ヶ月もの月日と大勢の人命、多大な予算を費やした。不平士族である薩軍の首脳部は自害し、降参したものは裁判によりその後の処置が決められた。そのほとんどは懲役処分となった。その後、武装蜂起による大きな反乱は国内ではなくなり、近代化の波はさらに加速することとなる。

#### 玉東町における西南戦争

玉東町が戦場となったのは、明治10(1877)年2月23日以降のことである。22日、熊本市北区植木町向坂において乃木希典率いる小倉歩兵第十四連隊(官軍)の一部と薩軍が戦火を交え、官軍が惨敗。木葉方面に一時退却し、連隊本部を木葉に置いた。23日、薩軍300余名が植木を通過する際に出会い頭の戦闘となり、官軍は木葉方面に薩軍を誘い込んだ。第十四連隊は木葉山山上から玉東町木葉の土生野まで戦線を張り、これを迎え撃つ。薩軍は木葉山麓から玉東町二俣の藤野に及ぶ散兵戦で対抗した。その後、高瀬における会戦の後に薩軍が田原坂を中心に二俣の横平山、原倉の吉次峠～三ノ岳に強固な陣地を構えたために膠着戦となる。一方、木葉、上木葉には官軍の本営が置かれ、前線の指揮が執られた。3月3日、4日には吉次峠をめぐる戦いが、3月15日には横平山をめぐる戦いが行われ、町には多くの陣屋や台場が両軍によって築かれた。それを記したのが明治16年に町の各村が提出した図版19下から22上の絵図であり、これを現在の地図に反映したものが第3図である(高橋信武作成)。第3図は、大正年間に作られた戦蹟図(図版22下)ともほぼ合致しており、これらの絵図を根拠に今回の調査を行った。



第2図 西南戦争の主な戦い



## 玉東町における西南戦争の経過

- 2月23日 木葉の戦い 乃木少佐率いる小倉歩兵第十四連隊。
- 2月25日 第1、第2旅団久留米から高瀬に到着。本営を玉名正勝寺に設置。
- 2月26日 高瀬の戦いにて薩軍(党薩諸隊含め1万2千人)破れ田原・吉次・山鹿に退く。熊本隊、寺田の戦いで  
～27日 敗退。吉次峠による。
- 3月 1日 第1、第2旅団(1万3千人)。
- 3月 2日 山縣参軍、大山少将、高瀬に進出。
- 3月 3日 官軍、進撃開始。木葉から植木に入り熊本に入る隊、吉次峠を越え大窪を経て熊本に入る隊と全軍  
を二つに分けて進軍した。  
薩軍は木葉山中腹から稲佐の高地に陣地を築き官軍を要撃。官軍は木葉・境木に進出。
- 3月 4日 曇 午後 雨 官軍、田原坂攻撃。「進むものは必ず傷つき、退く者は必ず斃る」状況。官軍右翼隊、  
二俣村進出。第一、第二旅団本営・会計部を木葉町窪田嘉久馬宅に置く。安楽寺下村の小綱帯  
所、炊飯所を木葉に移す。
- 3月 5日 雨 薩軍、二俣の官軍守線に急襲。二俣口第十四連隊第二大隊第二中隊右小隊と第二大隊第三  
中隊と近衛隊が応戦する。田原口は第十四連隊第二大隊第四中隊が進撃。砲兵右分隊は本道、  
中央分隊は二俣に出て薩軍を砲撃する。
- 3月 6日 晴 官軍第一旅団、田原口を進撃。旅団本営を木葉窪田嘉久馬宅から上木葉の高田源七宅へ移  
す。会計本部は従来どおり。
- 3月 7日 晴 官軍諸隊増員、総員五戦数百名に及ぶが薩軍には及ばず。一進一退の状況。田原坂正面の  
主力攻撃を二俣正面に変更。第一旅団砲隊は藤尾より中原にわたる高地に山砲数門をもって谷を隔  
てて二俣の薩軍に砲撃。薩軍は抜刀攻撃による夜襲が盛んになり、官軍苦しむ。第一旅団、第二旅  
団の本営出張所を二俣に設ける。
- 3月 8日 晴 官軍、諸隊配置は前日と変わらず。第一旅団は吉次の敵に備えていた砲兵を二俣の本体に併  
せ、二俣に砲壘二座を増築し、田原坂背後の薩軍壘を砲撃した。
- 3月 9日 雨 官軍、諸隊配置は前日と変わらず。田原、二俣、横平山の地勢図を作らせ、それにもとづき攻撃  
の部署を定める。一個大隊を右側より迂回して前後から挟撃。薩軍壘三つをとる。第八連隊の一  
中隊第二大隊第二中隊は二俣五郎山を攻撃する。官軍清輝艦が小天村を艦砲射撃する。
- 3月10日 晴 午後 雨 各隊休息するが、薩軍壘に隣接する部署は変わらず対戦する。工兵、塹壕二道を二俣  
の戦線中に造る。また、前日攻略した薩軍壘の改築をし、次の日の攻撃に備える。  
吉次峠の薩軍が木葉方面に進出するという誤認があり、全軍動揺。砲兵第四大隊第二中隊新たに  
南関より到着。各々その一分隊を田原坂本道及び二俣口に進め、薩軍壘を轟撃する。薩軍、西安  
寺に進出。官軍の軍艦日進・孟春が河内塩屋を砲撃。
- 3月11日 快晴 官軍、横平山、二俣、田原に進撃。横平山正面の薩軍壘二つを取るも側面より攻撃を受け、こ  
れを捨てる。横平山山麓の八久保に前線をしく。本営を高瀬に進める。警視隊巡查三百名が南関よ  
り木葉に到着。
- 3月12日 曇晴 官軍、砲兵第十四連隊第四大隊第二小隊を分けて田原、二俣に進軍。予備砲兵と共に薩  
軍を砲撃する。吉次峠の薩軍来襲に対し近衛二個中隊と東京鎮台第一連隊第二大隊第一第二中  
隊、白木にて応戦。吉次峠の薩軍、横平山山麓の官軍を襲う。第二旅団の近衛第一連隊第二大  
隊第四中隊が応戦。さらに近衛第一連隊第一大隊第四中隊、近衛第一連隊第二大隊第三中隊も

防戦するが、9日に奪った薩軍壘三つを奪い返される。(山鹿口にて官軍大勝)警視巡查百名を一隊とし、抜刀隊とする。

- 3月13日 官軍死者は木葉正念寺境内に葬っていたが、場所不足により高月の埋葬地が設けられる。明日の進撃に備え、第一旅団は地勢の詳細調査を行い、第二旅団は砲兵第四大隊第二小隊の各一分隊を二俣村の全面と田原坂本道に出し、薩軍壘を轟撃させた。
- 3月14日 官軍、警視抜刀隊の投入。二俣口より進撃。田原坂の薩軍四壘を奪うも、奪い返される。
- 3月15日 横平山の戦い。薩軍、横平山の奪還の為、三百名の壮士をもって急襲。官軍、中腹、さらに麓まで退くことになった。官軍は全兵力をもって横平山を奪還した。薩軍貴島清率いる薩軍が二俣口の官軍に夜襲をかける。
- 3月16日 官軍歩兵休戦。砲撃は続行。
- 3月17日 官軍、田原坂攻撃開始。二俣口で第一守戦の鎮台第八連隊第三大隊第三、第四中隊、同第十一連隊第三大隊第三中隊と薩軍抜刀隊百数名が戦う。吉次峠の薩軍が二俣口の官軍壘を砲撃。数十発でやむ。
- 3月18日 鎮台第十一連隊第二大隊第三中隊を二俣口右側、砲兵第四大隊第二小隊の三分隊を二俣村の砲台に一分隊を田原坂本道に進め、第一旅団の砲兵と共に薩軍壘を轟撃する。
- 3月19日 官軍、吉次峠の薩軍の牽制を行うが数刻にて退く。官軍、翌日の田原坂総攻撃に備え、軍議。
- 3月20日 雨 官軍、二俣口を出発、各隊部署に就き、右翼、中央、左翼をもって一斉に進撃。右翼が七本柿木台場を攻め落とし、薩軍北側に退却。田原坂陥落。官軍、植木方面に進撃。向坂にて大激戦となり、薩軍勝利。
- 3月21日 雨 植木方面の戦い。薩軍、本営を立福寺、熊本隊本営を東門寺に移す。官軍、第一旅団会計部を七本に、二俣の官軍食糧出張所及び小綱帯所と炊飯所を境木に設置した。官軍第三旅団、山鹿に進出。
- 3月22日 植木方面の戦い。官軍総督本営を久留米から南関に進める。
- 3月23日 官軍、歩兵五十五中隊、砲十四門、工兵二中隊、警視隊をもって植木東部の山鹿道、植木東部の広住から滴水、木留、半高山を攻撃。薩軍の抵抗に進めず。
- 3月24日 官軍、滴水、轟より木留を攻撃。
- 3月25日 官軍、木留攻撃。
- 3月26日 官軍、半高山・吉次峠の虚撃、主力は木留攻略に力を注ぐ。
- 3月27日 官軍、第一旅団、植木・木留道に布陣する。第二旅団近衛第一連隊第二大隊第三中隊、荻迫を占領。
- 3月28日 官軍、前日同様薩軍攻撃。福岡士族が蜂起。
- 3月29日 官軍、休戦。薩軍、徴募兵約二千名、人吉に到着。
- 3月30日 雨 原倉方面守兵、三ノ岳攻撃するも失敗。第三旅団に隈府攻撃の命令が出るが失敗。
- 3月31日 官軍、守備強化。
- 4月 1日 官軍、半高山、吉次峠、三ノ岳を急襲。横平山から三方向より半高山攻めが実行され、山頂を占領。また、立岩より吉次峠、三ノ岳の薩軍攻撃。熊本隊一番小隊の佐々友房は半高山が落ちたので木留に退く。
- 4月 2日 雨 官軍、吉次峠、轟村から木留を攻撃。付近の民家に火をつけ、延焼したため、薩軍は辺田野に退く。

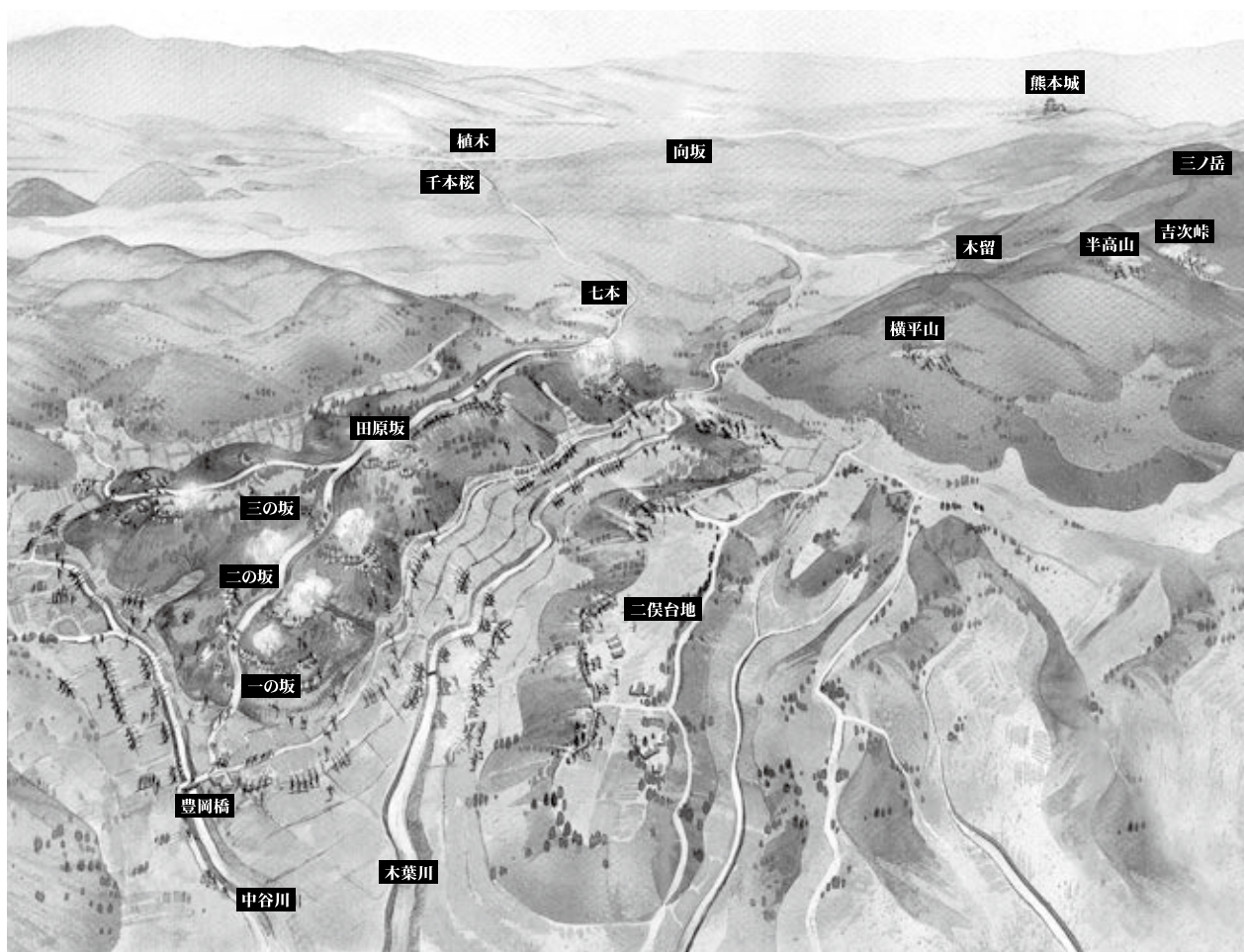
- 4月 3日～5日 休戦。  
 4月 6日 官軍、荻迫、辺田野の薩軍を攻撃。荻迫柿木台場の占領に成功したが、薩軍の逆襲を受けて退却。  
 4月 7日 休戦。  
 4月 8日 官軍、6日の攻撃同様。一進一退の攻防。  
 4月 9日 官軍、辺田野の薩軍を攻撃。退却。七本の本営を滴水に移す。  
 4月10日 雨 休戦。  
 4月11日 休戦。  
 4月12日 薩軍、滴水の官軍本営に大挙襲撃。官軍、撃退する。官軍会計本部を七本の旧本営に移す。  
 4月13日 官軍、別働第五旅団を結成。大山少将を旅団長に兼任し木葉に本営を置いた。  
 4月14日 薩将西郷隆盛、村田、池上両将と木山に移る。官軍衝背軍が熊本城に突入。熊本城、開城。薩軍、健軍・木山方面に撤退。  
 4月15日 植木、三ノ岳方面より火災発生。薩軍自ら陣営を焼き背走。

参考文献

川口武定 1878『従征日記』上巻

参謀本部陸軍部編纂 1887『征西戦記稿』

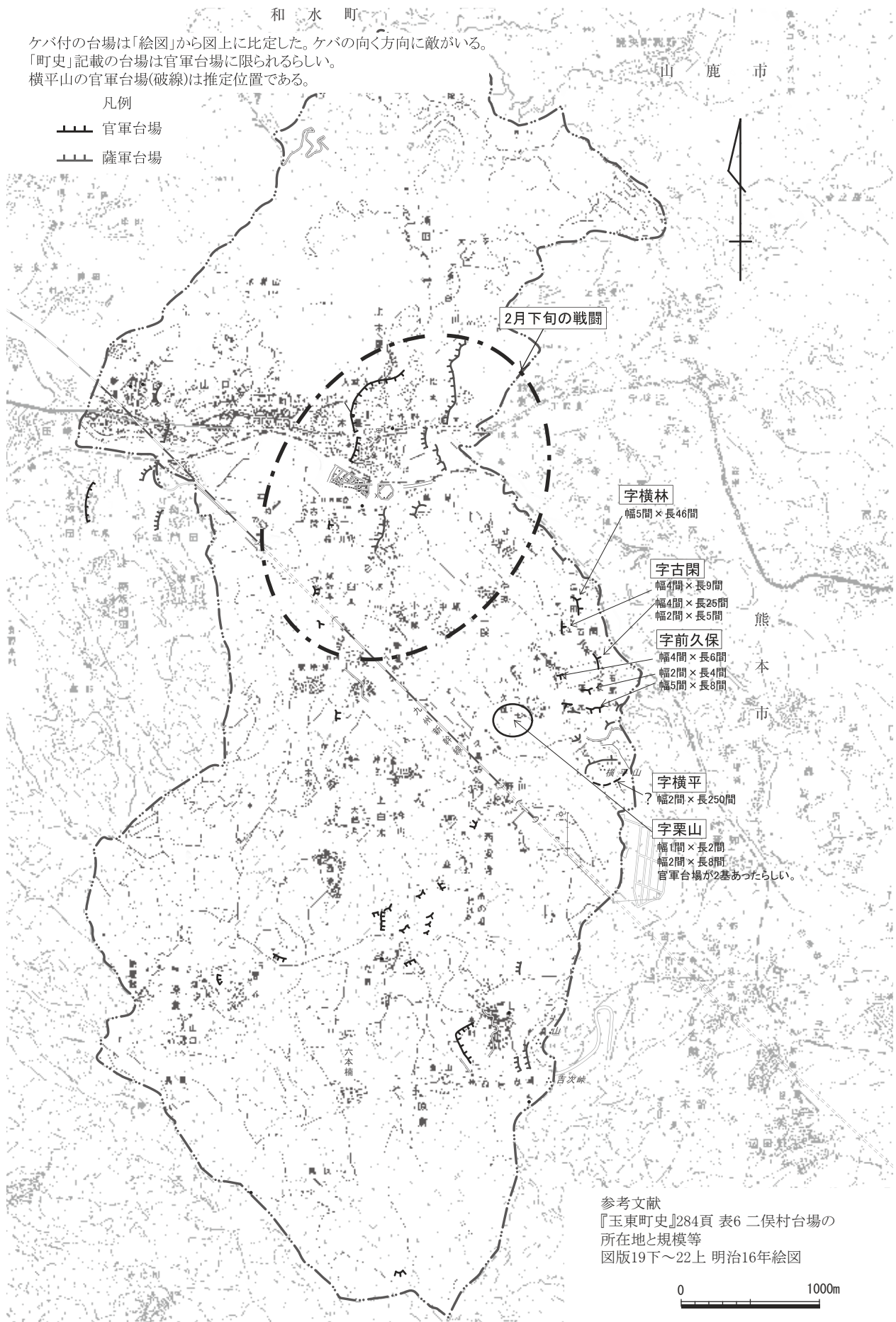
玉東町史編纂委員会 1994『玉東町史 西南戦争編・資料編』玉東町



田原坂、横平山、半高山(吉次峠)戦闘鳥瞰想像図  
 『西南戦争ガイドブックより転載』

ケバ付の台場は「絵図」から図上に比定した。ケバの向く方向に敵がいる。  
 「町史」記載の台場は官軍台場に限られるらしい。  
 横平山の官軍台場(破線)は推定位置である。

- 凡例
- 官軍台場
  - 薩軍台場



参考文献  
 『玉東町史』284頁 表6 二俣村台場の  
 所在地と規模等  
 図版19下～22上 明治16年絵図

第3図 玉東町東部の台場分布図(作成 高橋信武)

## 近代国家の成立と西南戦争

鈴木 淳

### 1 西南戦争の歴史的意義

西南戦争は日本最後の内戦であった。この後、強固な近代国家が対外戦争を戦う時代が来る。

西南戦争で争われたのは、軍事力の担い手であった。士族の軍隊が良いのか、農民兵を主体とした徴兵制の軍隊が良いのかである。それは単に軍隊の兵員の調達方法をめぐる問題ではなく、独占的に武を担う武士という階級が特権を持つ社会を認めるのかどうか、社会、国家の形が争われたのである。政府は明治5年に徴兵告諭を出し、翌年から徴兵検査や徴集に着手したが、私学校派が主導権を握っていた鹿児島県は西南戦争までそれを実施しなかった。

大島明子「1873(明治6)年のシビリアンコントロール―征韓論政変における軍と政治」(『史学雑誌』第117編第7号、平成20年)は、当時の政府主流派が、藩を解体して中央集権国家を作っていくために、大蔵省による財政の管理と、旧藩士族団に依存しない軍事力の形成とを進め、征韓論や台湾出兵はこのような流れに抗する動きであったと論じている。士族が外政論を唱えたのは、外国を侵略して領土を拡張するためというよりは、軍事力の担い手としての士族の地位を主張するためであった。一方、明治政府の主流派は、彼らが軍事力を担い、有力な藩ごとにまとまった士族の勢力によって政府が左右されることを恐れた。

その後の歴史の流れを知っている我々には、四民平等のもと、徴兵制の軍事力で近代国家を支えたのは当然の流れのように思える。しかし、打倒された幕府の方が、武士身分以外の者達を主とするフランス式歩兵隊を持っていたのに対し、薩摩藩の軍事力は武士によって担われており、これは他の諸藩も基本的には同じだった。武士は元来戦功によって評価される。彼らの多くはそれを前提にして戊辰戦争を戦い、勝利をおさめれば相応に報われるものと考えたであろう。また敗者となり、あるいは勝利に十分に貢献できなかった者達は、外征という次の戦功の機会を求めたはずである。しかし、戦功によって権益を分配するのでは、敗戦側の武士や武士以外の身分の者も帰属意識を持つ近代国家は形成できない。新政府の雄藩出身の幹部は、自らは藩としての戦功を背景に高い地位を得ながら、近代国家の形成のために、このような旧武士の考えを否定する。そこで、新政府が自分たちに戦功に見合った待遇を与えていないと考えて郷里に戻った旧武士たち、いわゆる不平士族は、他の地域にも同じ意識を持った人がいると信じていることができた。また、今は新政府側にいる士族の多くも、いかほどかは同様の不満を持っており、特に旧同藩の仲間の呼び掛けには応えて同調するかもしれないと考えることもできた。実際、佐賀の乱のように政府の高級官僚が不満をかかえて帰郷したことが反乱に繋がることもあり、またほとんどの士族反乱が他地域の士族の同調を期待していた。そのようななかで、最後まで自重していた最大勢力である鹿児島士族団が立ち上がったのが西南戦争である。士族集団と徴兵制軍隊、いずれが武力を担うのが国家のあり方として正しいのか、軍事力のあり方をめぐる争いは、戦争で決着をつけざるを得ない。勝利自体が戦争の目的である。

政府からの同調者は出なかったが、熊本土族の一部は薩軍に加わり、高知や酒田など有力な士族集団が同調する可能性は政府によっても真剣に警戒された。新政府は、将来的に軍事力の担い手になる意思がないことを明示する巡査としての参加という形ででも戦いに加わって郷里や自らの名誉を揚げようと考えた士族たちの力も借りて、勝利を収めた。最強の士族集団が破れ、他の士族集団もそれに同調する機会を見送った以上、これ以後、武力反乱を考える士族集団はなくなった。四民平等を前提とする新国家の体制は、戊辰戦争ではなく、西南戦争の結果として確定した。西南戦争こそが、日本の近代を切り開いたのである。

## 2 植木・玉東に残る遺跡の意味

西南戦争の遺跡は、戦場となった鹿児島、熊本、大分、宮崎各県に分布する。その中で以上のような西南戦争の歴史的意味を考えると、植木・玉東地区の遺跡は特に高い価値を持つ。それは、全国の注目を浴びながら、担い手の異なる軍事力の優劣がどのような形で争われたのかを良く示しているからである。この地区では、明治10年2月22日に小倉から熊本に進もうとした乃木希典大佐以下の歩兵第14連隊が薩軍と衝突して破れる両軍初の遭遇戦が展開され、さらに玉名方面まで進んだ薩軍が増援を受けた政府軍に押されてこの地域に戻り、田原坂、吉次峠などに防御陣地を構築して、4月の初めまで政府軍と激戦を繰り返した。

発掘調査の結果、田原坂や山頭で薩軍が発射した銃弾が数多く発見された。従来から田原坂では両軍の銃弾が数多く飛び交い「行き合い弾」まで生じたという伝承がある一方で、薩軍は刀を振るって奮戦したという印象もあった。しかし、銃弾が十分にあった時点では、薩軍が強力な小銃火力を発揮していたことが遺跡から実証され、彼らが近代的軍事力の担い手として堂々と戦ったことが明らかとなった。士族兵には白兵戦が有利であったが、それだけに頼れる時代でないことを薩軍は理解していたのだ。また二俣川の官軍砲台で、砲車の轍と摩擦管の出土で戦局の帰趨に大きな影響を与えた政府軍砲兵の活発な活動が裏付けられた。砲兵、さらには薩軍にはなかった工兵も含め、西洋の近代的軍隊の編制と技術を直輸入して戦ったのが政府軍の特色であり、現時点では確認されていないが、工兵が配属されていた砲台跡などには工兵隊の活動の痕跡が埋蔵されていると考えられる。近世城郭への籠城戦となった熊本での戦いと異なり、この地域では両軍が自由に場所を選んで野戦築城を行い、それを中心に戦いを繰り返したのでそれぞれの軍事力のありかたが遺構に良く示される。その全貌や含意には未解明の点も多く、保護の必要性が高い。

戦場は面として広がり、時間によって動いて行った。この地域でその軸となったのは、それ自体が攻防の焦点であり、また戦場が遠のいても弾薬補給や死傷者の収容の道となった田原坂を通る旧街道である。戦いの中心となった田原坂の道筋、車両が通る当時の街道の性格を良く示す豊岡の眼鏡橋、そして政府軍の病院が置かれ、山門に当時の弾痕をとどめる木葉の正念寺門前が、当時の歴史を今に伝える。当時は戦闘員と非戦闘員の区別が明確で、住民は、両軍に動員されて運搬や雑用にあたったが、彼らが主に働かされた街道は、その存在を想起させる場でもある。また西南戦争時には後に日本赤十字社に発展する博愛社が創設され、正念寺は同社の医療活動の場でもあった。相手側の負傷者も治療することは函館戦争時の高松凌雲に先例があるが、この時代らしく西洋の近代的な赤十字の理念に合わせて制度化されたのである。

薩軍戦死者が戦場近くに適宜埋葬されたのに対し、政府軍戦死者は官軍墓地を整備して埋葬された。これは田原坂に薩軍陣地跡を削平して建立された崇烈碑とともに、新たな軍事力の担い手を顕彰する当時の政府の姿勢を良く示している。後年、薩軍側の顕彰碑や墓地の整備も進み、その事も西南戦争をめぐる歴史として重要であるが、今回の遺跡の範囲は西南戦争自体の歴史的な性格を示すものとして、戦争直後までとどめられる。

## 第三章 二俣砲台跡の調査

### 第1節 二俣砲台跡の位置と環境

二俣砲台跡は、玉東町二俣台地東側に位置する。遺跡の所在する二俣台地は金峰山三ノ岳から半高山(標高294m)、横平山(標高144m)と北に伸びる尾根の端部で、標高は約100mである。

二俣台地の地形について『征西戦記稿』では「地形タルヤ正面ハ溪間ヲ隔テ植木ニ向ヒ左ハ斜メニ田原ノ險ニ連リ右ハ横平山及ヒ吉次越ニ連絡スル山脈ニシテ彼我ノ要地タリ」と記し、薩軍の陣地に対しての要地であることがうかがい知れる。また「賊田原坂ノ傍阜及ヒ横平長窪諸山ノ高嶺ニ據リ数十壘ヲ築キ星羅碁布互ニ犄角ヲ成ス故ニ官軍ト賊ト其地勢大ニ懸絶ス攻撃ノ方、最モ難シ該隊ノ至ルヤ其兵ヲ要地ニ排シ一小溪ヲ隔テ賊ト対撃シ日暮ニ至ル…」のと記載のとおり、官軍は



二俣砲台跡の戦況

強固な布陣の薩軍に対し谷を隔てて対峙する作戦をとった。また、従軍記者 福地源一郎は、『東京日日新聞』明治10年3月26日の記事に「植木街道は堀道なれば、もとより二俣よりは見えず、ただ電信柱が見ゆるのみ。…此の地方は山に添ふて田畠を作る故に、かくの如き崖をなし、横よりみれば凹字の聯なりたるが如し。賊壘は其の高地を占めて固守し、官兵は低所より上攻す。而して二俣は高くして植木街道に相對すれども、歩兵の攻撃は街道と二俣山との間なる溪間よりするなり。」<sup>(1)</sup>と記している。台地の東側斜面は急な崖面になっており、その先は船底と呼ばれる低地帯で、木葉川が南北方向に流れている。ここは文字通り船の底のような形状を成し、この地域を挟んで二俣台地と田原坂のある植木台地が併走する。その間約100m。現在その地に立ち相手方の陣地を見ると、人の動きが見えるほどの近距離である。

さて、実際の二俣砲台はどこにどのように築かれたのだろうか。昭和18年に西南戦争顕彰会が踏査や聞き取り調査を元に建立した石碑<sup>(2)</sup>や、図版22下の大正年間には作られた戦跡図には二俣台地の三つの地点に砲台が築かれている。三つの砲台のうち、左翼をなす二俣瓜生田官軍砲台跡と右翼をなす二俣古閑官軍砲台跡は台地の凸部に位置している。またその間に挟まれる凹部に中央砲台跡が設置された。ここには、官軍本営出張所跡も置かれたという。

なお、戦後すぐに上野彦馬らによって撮影された古写真には二俣砲台跡2箇所が写されており<sup>(3)</sup>当時の状況を雄弁に語ってくれる。

註

(1) 徳富蘇峰 1980『西南の役』(六)

(2) 西南戦争顕彰会編 1939『西南戦蹟顕彰會第一回踏査記』には聞き取りの状況が記される。

(3) 富田紘一 2003『熊本城古写真物語』『熊本城』



明治十年撮影 二俣瓜生田官軍砲台跡



現在の二俣瓜生田官軍砲台跡(南西から)



明治十年撮影 二俣古閑官軍砲台跡



現在の二俣古閑官軍砲台跡(左:南から、右:南西から)

※明治十年撮影 砲台跡古写真は『明治十年戦役写真帖』より(富田紘一氏提供)

## 第2節 二俣砲台跡における戦況

3月3、4日の第一次総攻撃において田原坂及び吉次峠の突破に失敗した官軍は、二俣台地の南端丘陵部にある横平山に布陣する薩摩軍に対峙するために、二俣台地に進出し砲台を築いた。砲台では連日、田原坂の薩摩軍に対する砲撃が行われ効を奏したという。文献によると、二俣砲台には、第一旅団東京鎮台予備砲兵第一大隊、砲兵第四大隊が3月4日から田原坂陥落の20日まで配備された。西南戦争顕彰会が昭和16年4月に発行した『西南戦蹟顕彰會第一回踏査記』には、当時9歳であった豊住友吉氏の次のような話がある。「田原坂攻撃には、此の処より出発し、溪谷を越え向ふの田原や七本の敵に迫まつたが、一時間許りは突喊の聲の凄まじき聞こえ後は静であつた。此の陣地には砲が八門あつて敵を撃つた。薩摩には砲がなかつたから不利であつた様だ。又此の砲は夜には、木葉に持行き晝(ひる)には毎日持来た。」

二俣砲台跡に関する詳細な戦闘報告については次に掲載する。



## 第一旅団東京鎮台予備砲兵第一大隊『戦闘略記』より抜粋(防衛研究所所蔵)

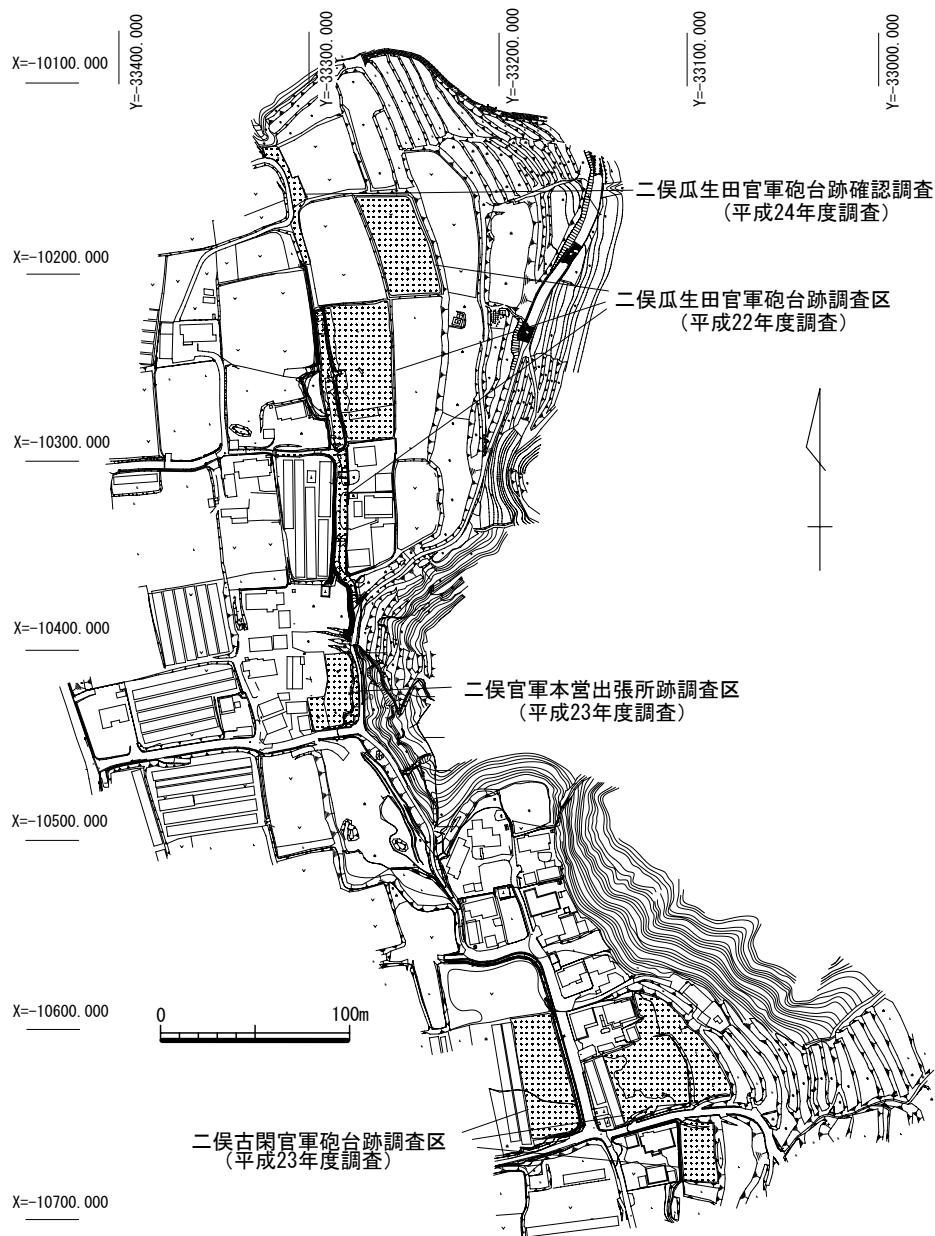
- 三月 四日 又二俣村へ一砲車ヲ出シ(溝口曹長之ヲ率ヒ)激射数刻遂ニ抜ケス、上木葉ニ引揚ケ舎營ス。
- 五日 午前第五時呼集、右砲兵分隊ハ本道堺木村マテ出張、中央分隊ハ二股(二俣)ノ砲台ヨリ賊壘ヲ射撃ス(江上大尉重明之ヲ率ヒ)。午後第六次上木ノ葉村ニ帰り舎營ニ就ク。別働軍砲兵ハ休戦。
- 六日 午前第三時呼集、砲兵中央分隊ハ堺木村迄出張、右分隊(江見大尉重明之ヲ率ヒ)ハ二俣村ノ砲台ヨリ賊壘ヲ猛撃ス、賊稍退ク。
- 七日 午前第三時五十分呼集、砲兵及ヒ中央ノ兩分隊ヲ合(江見大尉重明之ヲ率ヒ)セ二俣村ノ砲台ヨリ終日賊壘ヲ射撃シ、又臼砲一門ヲ出シ賊屈ヲ抛撃ス。
- 八日 砲兵午後第二時原倉村ヲ発シ二股(二俣)村ノ本隊ニ合シ、堡壘二個ヲ建設シテ賊壘ヲ放射ス。
- 九日 午前第六時各砲車ヲ砲台ニ進メ賊ノ堡壘ヲ激射シ、又臼砲一門(軍曹谷木義信之ヲ率ヒ)ヲ那智村エ出シ賊ノ巢窟ナル民家ヲ擲射ス。
- 十日 午前第六時砲三門ヲ出シ賊壘ヲ射撃ス。午後第二時第二小隊左分隊二股ニ到着ス。依テ一砲軍ヲ引上ケ之ニ代ヘシム(小橋少尉誠八之ヲ率ヒ)。午後第五時各舎營ニ帰ル。
- 十一日 砲兵午前第六時三十分各砲車ヲ砲台ニ進メ(砲数八門)緩々發射ス。午後第三時ヨリ進撃ノ合音ト齊シク大小ノ砲銃ヲ乱射シテ賊壘ヲ掃フ。賊支ユルコト得ステ之ヲ捨テ走り…
- 十二日 砲兵午前第五時三十分各砲車ヲ砲台ニ進メ緩カニ賊壘ヲ撃ツノミ。別ニ異常ナシ。
- 十三日 砲兵午前第五時三十分砲車ヲ砲台ニ進メシニ進撃止メノ令アリ。各砲車ヲ二分シテ午前午後ト交換セシム午後第六時舎營ニ帰ル。左分隊ノ一砲車(小橋少尉誠人之ヲ率ヒ)夜間放射ノ為メイ同所ニ露營ス。
- 十四日 砲兵午前第五時三十分各放射ヲ進メ火力ヲ猛烈ニシ、歩兵モ亦放火ヲ盛ニシ、以テ正面ノ賊壘ヲ陥イル。
- 十五日 砲兵午前第五時三十分各放射ヲ進メ賊壘ヲ射撃ス。然ルニ賊我右翼ナル横平山ヲ迂回シ来ル。我兵応シテ之ヲ防ク。賊遂ニ支ユル能ワステ山ヲ捨テ退ク。此時我砲車二分隊(江見大尉重明瀬寄大尉久誠小橋少尉誠人溝口少尉試補等)ヲ出シテ賊ヲ乱射ス。午後第六時賊又左翼ヲ襲ヒ来ル。我砲台ヨリ之ヲ撃チ遂ニ迂回ヲ防止シ舎營ニ就ク。
- 十六日 砲兵午前第五時三十分各砲車ヲ進メ賊壘ヲ發射ス。賊ヨリモ亦砲ヲ發シテ我援隊ヲ射撃スルニ依リ、二俣ノ戦線後ニ砲台ヲ築キ猛烈ノ放火ヲ行ヒ砲兵之ヲ熄滅ス。午後第六時三十分舎營ニ就ク。
- 十七日 午前第六時各砲車ヲ進メ緩射ス。同三十分ヨリ進撃、各砲台ヨリ一齊ニ發射ス。此機ニ乗シ歩兵大ニ進ミ正面ノ堡壘ヲ陥ル。午後第六時三十分舎營ニ就ク。
- 十八日 砲兵午前第六時ヨリ各砲車ヲ進メ以テ進撃ノ号音ヲ待ツ。同第十時頃進撃始マリ各砲台ヨリ一齊ニ放射シ遂ニ正面ノ杉木(柿木?)台場ヲ落取ス。午後第六時三十分舎營ニ就ク。
- 二十日 砲兵午前第四時砲車ヲ進メ更ニ谷ヲ越ヘ前面ノ堡壘ニ備ヘテ連發シ、以テ合音トナス。此砲声ニ応シ諸隊進撃、遂ニ二股(二俣)ヲ陥イレ火ヲ民家ニ放チ進ム。

### 第3節 二俣砲台跡における調査地の設定について

平成22年度の調査に先立って、前述の文献史料による検討及び踏査を行った。踏査においては高橋信武氏にご同行いただき、大砲の消耗品である摩擦管を砲台跡の碑傍で採集することができた。また軍事史的観点から原剛氏に御指導いただき、調査区を設定した。

平成23年度には、砲台の右翼をなす二俣古閑官軍砲台跡の遺物遺構の残存状況の調査を行った。ここも瓜生田官軍砲台跡同様の方法をとり、事前調査で周辺の踏査を行った際に(平成22年度8月実施)高橋信武氏によって摩擦管が採集された。採集地を中心に平成23年度に調査を行っている。

砲台の全体像を明らかにすることの必要性を調査検討委員である鈴木淳氏により御指導いただいた為、両砲台の調査に伴い、その中心に位置する官軍本営出張所跡の調査及び中央砲台跡の調査を行った。それぞれの調査範囲は第4図の網掛け部分であり、詳細な調査区設定については各遺跡の調査において述べる。



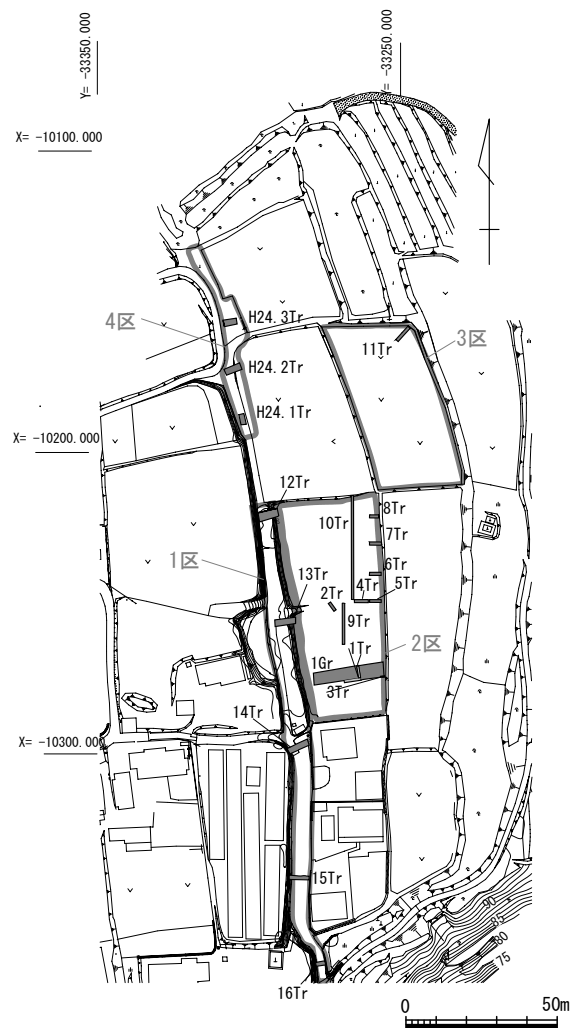
第4図 二俣官軍砲台跡地形図及び調査区位置図

## 1 二俣瓜生田官軍砲台跡の調査

### 第1節 調査区の設定と調査の方法

第1次調査 事前踏査により、摩擦管を採集した石碑を中心に調査区を設定した。調査区は第4図網掛け部分である。また、便宜的に1～4区に調査区を分けた。第1次調査では1、2区において全面的な金属探知機による遺物探査を行った。反応があった箇所は20cm四方角で掘り下げ遺物を検出した。金属探知機の反応範囲は対象物に対して20cm程度である。なお草の生え方によっても反応が変わる為、できる限り下草をはらい精査した状況で探査を行った。

全面的な金属探査により、大砲の発火剤である摩擦管が2区の高台部分に集中することが確認されたため、特に集中のみられる2区南側において土層(1Tr)の確認を行った。また、遺構の有無を確認するために1Trに接続するように5×15mの1Grを設定した。1Gr内の掘削については、3cm掘り下げた際に金属探知機による探査を行い、小さな金属片においても検出することに務め、遺構面の検出を行った。その際、東西方向にサブトレンチを設け、土層の堆積状況を確認しながら調査を進めた。地表面から15cm程(1層)掘り下げた段階でII層上面で遺構の検出を行った。また、遺構の広がりを確認する為南に80cm拡張し、さらに東側に拡張区を設定した。すべて人力で掘削、精査を行った。また、遺跡の広がりを確認する為に現在の凹道部分に12～16Trを設け地表面の探査をした後、バックホーによりトレンチ掘削を行い人力で精査を行った。遺物は、光波測距儀及び遺構実測支援システム遺構くんcubicを利用し座標を記録、写真撮影後取上げた。



第5図 二俣瓜生田官軍砲台跡トレンチ配置図



1区の現状(南から)



2区における金属探査の状況

第2次調査 1Grにおいて遺構が検出されたため、その広がりを確認するために平成22年11月より第2次調査を行った。2、3区において2～11Trを設け、1Grで確認できた層位に基づきI層の掘削を行いII層上面にて遺構の検出を行った。

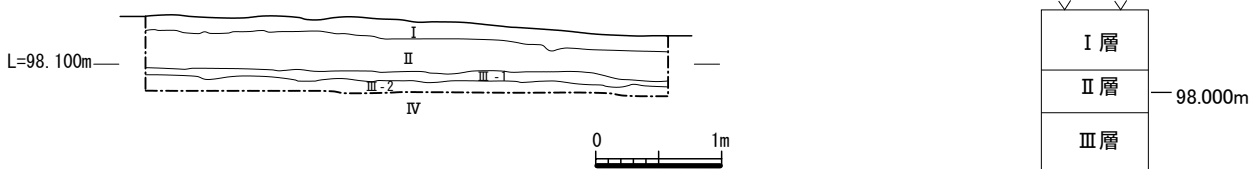
なお、遺跡北側の範囲を確定するために平成24年度にトレンチ掘削による試掘調査を行っている。

## 第2節 層序

現在の高台平地(2区)地表面(98.8m)を基準として、耕作土からなるI層。同じく耕作土と思われるが表面が硬く締まるII層。黒色土の整地層であるIII、IV層。暗褐色ローム層であるV層。以下、無遺物の礫混じりのローム層が厚く堆積する。

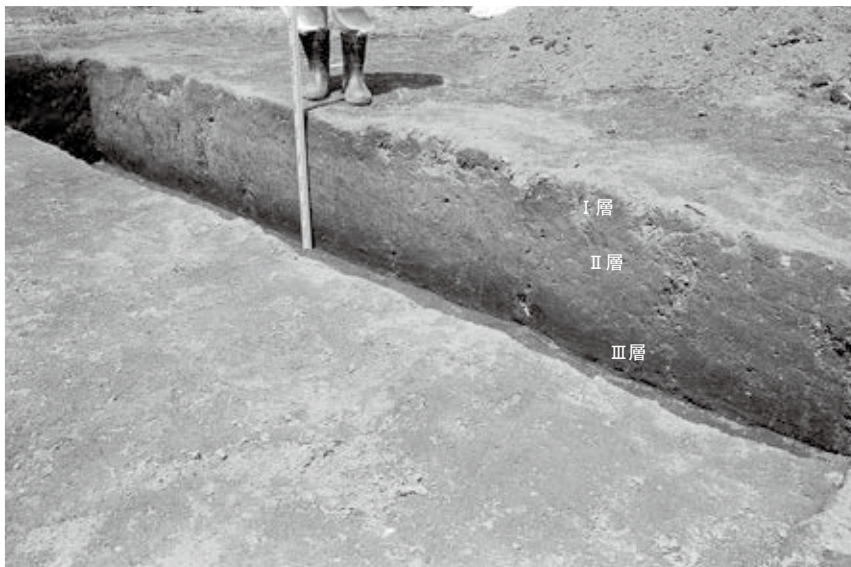
I層及びII層上面からは西南戦争時の遺物が出土している。また、III、IV層からは中世の土器片等が出土する。2、3区についてはII層上面で遺構の検出を行い、表土面で金属探査により遺物の探査を行った。

なお、1区凹道部分においてはVIII層まで掘り抜く大溝が検出されている。

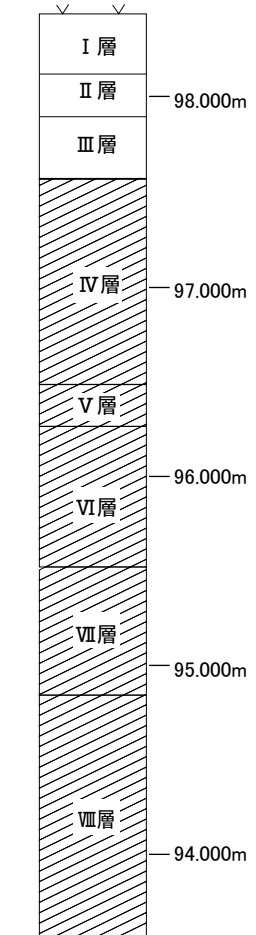


二俣瓜生田官軍砲台跡2区1Gr 1Tr土層断面図

- I 10YR3/3暗褐色土。しまりなく、粘質なし。微細なガラス粒子を含む。現代の耕作土。ビニル片等混入。近代の遺物を含む。
- II 10YR4/4褐色土。しまる。粘質なし。白色、褐色、赤褐色の粒子(1~5mm)が多量に混入する。近代の遺物を含む。
- III-1 10YR2/3黒褐色土。II層漸移層。しまり強く、粘質なし。褐色5mm大の粒が混入する。
- III-2 10YR1.7/1黒色土。しまり弱く、やや粘質あり。中世土器片含む。
- IV 7.5YR3/4暗褐色ローム。しまり弱く、粘質なし。角閃石、ガラス粒子、赤褐色粒が混入する。
- V 5YR4/8 赤褐色ローム。しまる。粘質あり。白い粒子を少量含む。小礫含む。
- VI 5YR4/8 赤褐色ローム。しまる。粘質あり。白い粒子、小礫を多量に含む。ジャリジャリとした感触。
- VII 5YR5/4 にぶい赤褐色ローム。しまる。粘質ややあり。1、2mm大の石英粒や長石を含む。1cm大の小礫を含む。ジャリジャリとした感触。
- VIII 10YR6/3 にぶい黄橙ローム。しまる。粘質あり。赤色、橙等の2、3cm大の小礫を多量に含む。ジャリジャリとした感触。

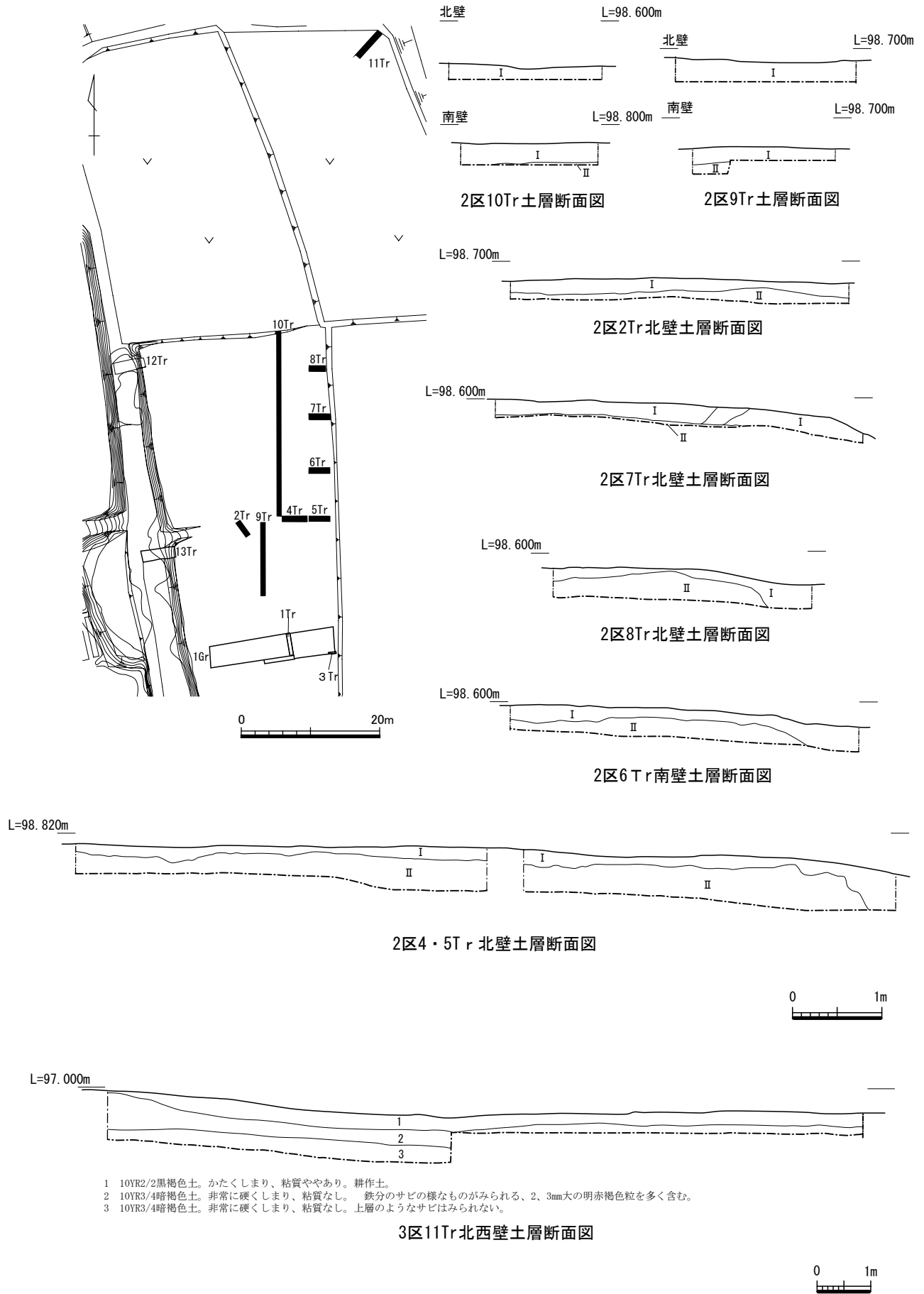


2区1Gr 1Tr土層断面



1区13Trより模式図化

第6図 二俣瓜生田基本層序



第7図 二俣瓜生田官軍砲台跡2・3区トレンチ土層断面図

### 第3節 遺構と遺物

2、3区遺物出土状況 西南戦争時の遺構と遺物は主に2区の高台平地部分と凹道部分の1区、一段下がった3区平地部分にて検出された。遺物は地表面からII層上面の間で出土している。摩擦管は2区高台平地部分にて集中出土することが確認され、また遺構は2区南側の1Gr内において検出した。以下、第1項と遺物にて詳細をのべる。

2～10Trでは西南戦争時の面と推測される硬くしまるII層上面は確認できたが、遺構は確認されなかった。

1区遺物出土状況 現在の凹道路部分である1区北側においては銃弾2点、薬莖3点が出土し、砲台跡碑傍から帽章1点、1区南側道路脇から刀鏢1点が表面採集された。この内、凹道に設置

した12Tr5層中で西南戦争時の遺物であるスナイデルの金属薬莖が出土しており、明治10年の西南戦争時には5層下位の面が利用されていたことがわかった。明治33年測図には、1区にはっきりと掘道が記されており、現在の地形が当時と変わっていないことが伺える。その他、1区については5箇所のトレンチを設定し、土層の確認を行った。これより南北方向に中世の遺物を包含する大溝が走っていることが確認された。本来は5区の高台から西にかけて地形は高くなるが、それを掘り抜いて大溝が造られ、数回にわたり埋め戻されながら現在の道路になっていったと考えられる。以下、第2項において詳細を報告する。



明治33年測図瓜生田付近の状況

### 第1項 西南戦争の遺構と遺物

#### (1) 遺構

摩擦管の集中区である1GrII層上面において、細長い1条の溝(SD01)と、楕円形の土坑(SK01、SK02)2基を検出した。遺構の広がりを確認するため、調査区を南側に80cm拡張したところ、SD01と平行に伸びるSD02を検出した。また、1Grを東側にさらに8m拡張したところ、SD01、02の先端に硬化面を検出した。さらにその東側に南北方向に伸びる溝(SD03)を検出した。

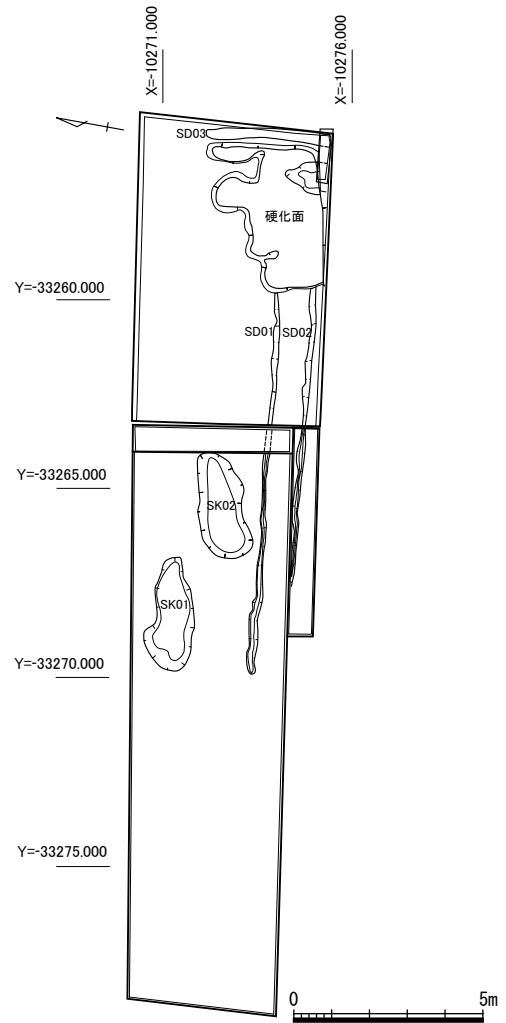
溝2条はその間隔から考えると、西南戦争当時使われていた四斤山砲の車輪が残したものと考えられ、東に広がる硬化面は前装式であった四斤山砲に弾込めをするための作業場遺構と考えられる。また、東端の溝については排水の為の施設と推測される。土坑については不明な点が多いが、底面に炭化物を多く含む黒色土が堆積し、そこから大砲の消耗品関係の遺物が出土することから考えると廃棄の為の土坑であると推定する。



1Gr II 層上面遺構検出状況(東から)



2区1Gr 遺構検出状況(南西から)



第8図 二俣瓜生田官軍砲台跡2区1Gr遺構配置図



2区1Gr SK01、02



2区1Gr SD01、02



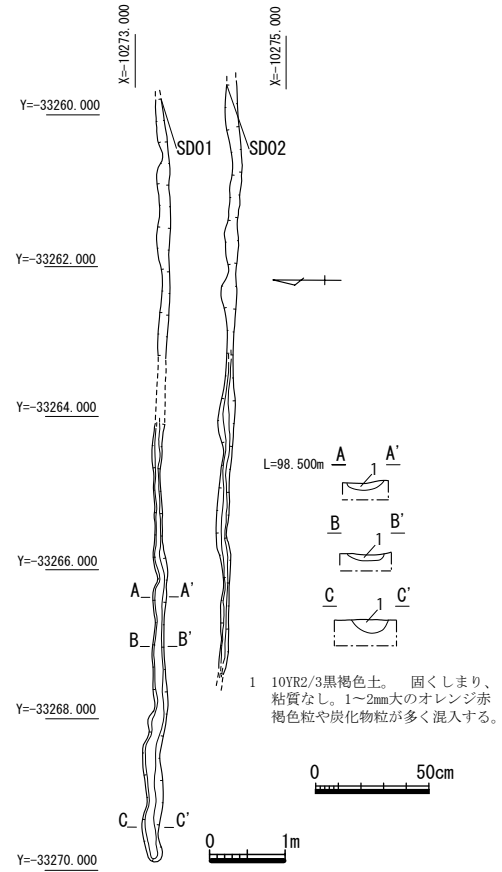
2区1Gr東側拡張区 硬化面 SD01、02検出状況

溝SD01・02 幅16cm程度、深さ6cmの細い溝は2条検出された。それぞれ断面形態はかまぼこ状を呈す。各中心軸の距離は約84cmであり、内輪間66～78cmである。長軸は約10m東西方向に平行にのびる。覆土は1層より若干暗い色調で、柔らかい。SD01、02は東側ほどはっきりとその痕跡が残っていた(東側は未掘)。

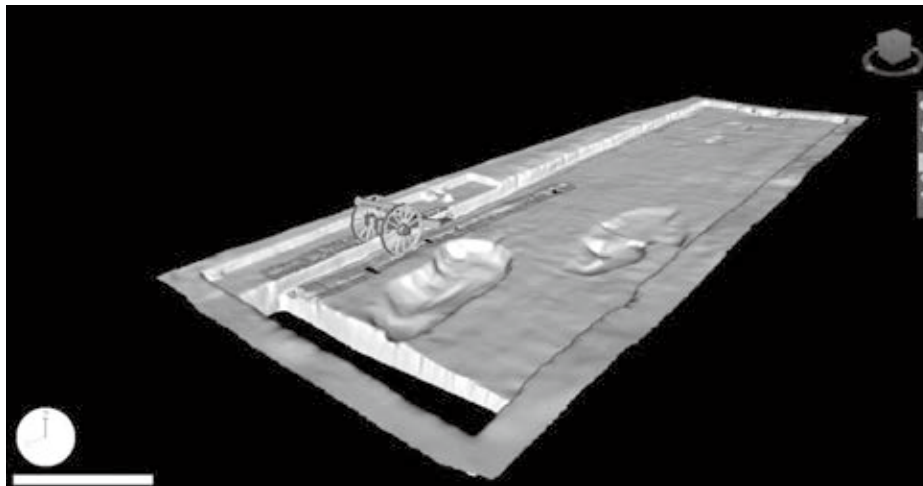
文献によると四斤山砲の車輪の幅は74cmであり<sup>(1)</sup>、ほぼ一致する。当時の大砲は発射後、その衝撃で勢いよく後退する。次の発射は再び前方に戻し、繰り返して砲撃が行われた。車輪は同じ所を何度も行き来する為、轍は太くなったと思われる。

註

(1) 陸軍省『兵器沿革史第一輯』191～192頁



第9図 2区1GrSD1・SD2平面・土層断面図

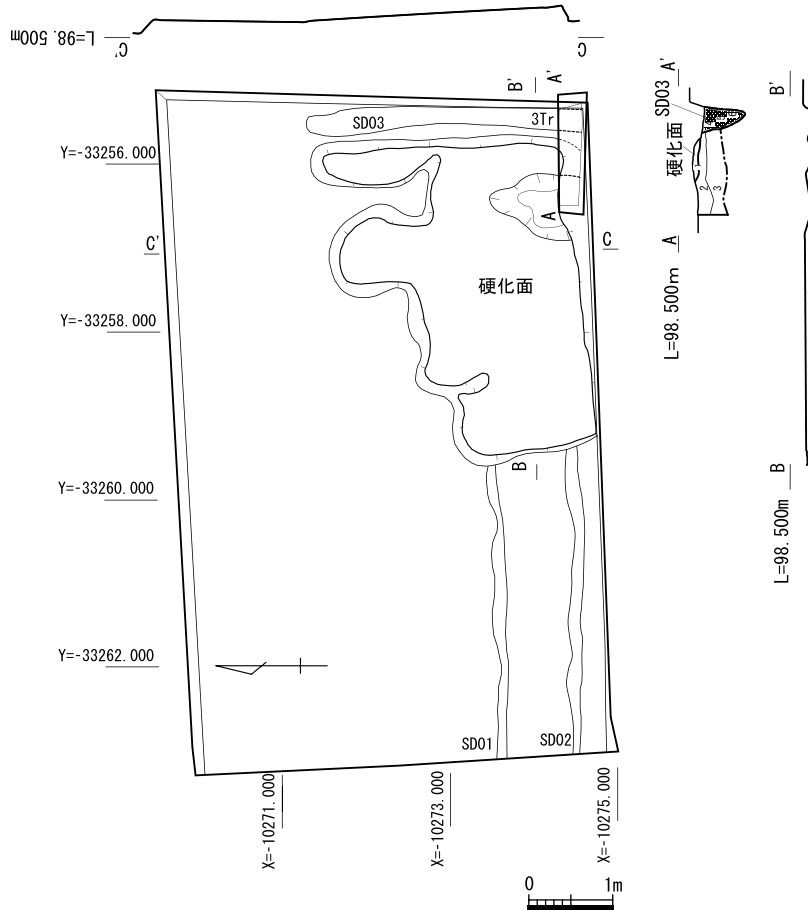


二俣瓜生田官軍砲台跡3D実測図 大砲イメージ図(作図協力:明大工業株式会社)



**硬化面** 平面形態は約4m×4mで不定形な台形を呈する。かなり固く締まっており、意図的に敲き締められたものと考えられる。3Tr土層断面より、その厚さは10cm程度である。なお、硬化面下位において遺物の反応(金属探知機による)は確認されなかった。

**SD03** 硬化面のさらに東側において幅30cm、長さ340cm以上の溝が南北方向に確認された。硬化面のある面から彫り込まれており、硬化面と同時期のものと考えてよいだろう。一部土層を確認したところ、断面形態は逆三角形で深さは60cmであることが確認された。覆土中で遺物は出土していない。



- 1 10YR2/3黒褐色土。固くしまり、粘質なし。1~2mm大のオレンジ赤色粒や炭化物粒を多く均等に混入する。
- 2 10YR2/3黒褐色土。軟らかく、粘質なし。上層と同じ混入物だが粒が目立ちボソボソしている。
- 3 7.5YR2/3暗褐色土。ややしまり、粘質なし。ニガ土のようなブロック(しまる)が混入する。混入物は1,2と同じ。
- 4 10YR2/3黒褐色土。軟らかく、粘質あり。1より少し大きめの炭化物、オレンジ粒を含む。
- 5 10YR3/3暗褐色土。軟らかく、粘質あり。炭化物を含む。炭化物 オレンジ粒を少し含む。
- 6 10YR3/3暗褐色土。やや縮まり、粘質あり。

第10図 2区1Gr硬化面平面図(検出状況図)・土層断面図

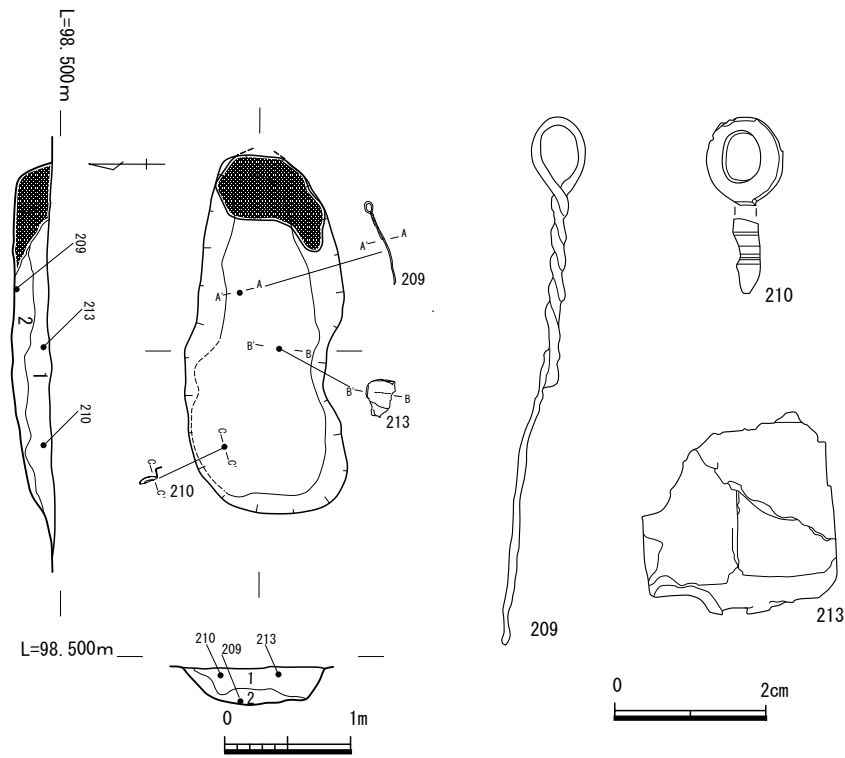


硬化面検出状況



硬化面及びSD01・02

SK01 284×130cmの東西方向に長い楕円形を呈す。深さは30cmであり、覆土はSD01、02と同様であるが、東端下部には炭化物を多く含む黒褐色土が堆積している。遺構内では下部で摩擦管環線(ワイヤーループ)1点(209)が出土している。今回の調査では管部が15点出土しているのに対し、1点のみの出土であった。径1mm、全長7mmの銅製の針金で、端部を撚り合わせて、先端に内部最大径8mmの輪が作られている。その他、覆土より杓子形銅製品1点(210)、スナイドル薬莖の胴部破片(213)が出土している。

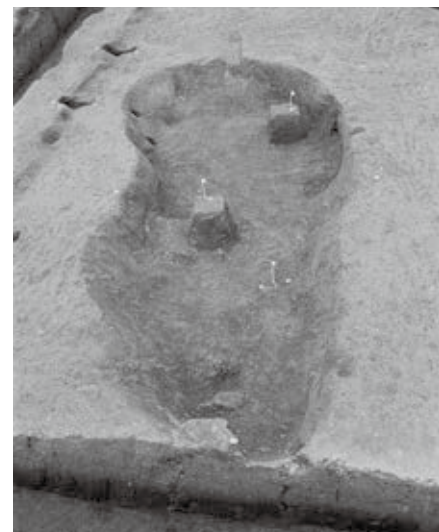


- 1 10YR3/3暗褐色土。固くしまり、粘質なし。5ミリ大の明赤褐色粒子、炭化物が混入する。
- 2 10YR3/3暗褐色土。上層よりしまり弱く、粘質なし。5ミリ大の橙色の粒子、炭化物が混入する。
- 3 10YR2/3黒褐色土。ややしまり、粘質ややあり。暗褐色土の大きなブロック、炭化物、赤褐色粒子が多く混入する。

第11図 二俣瓜生田官軍砲台跡2区1GrSK01平面・土層断面図

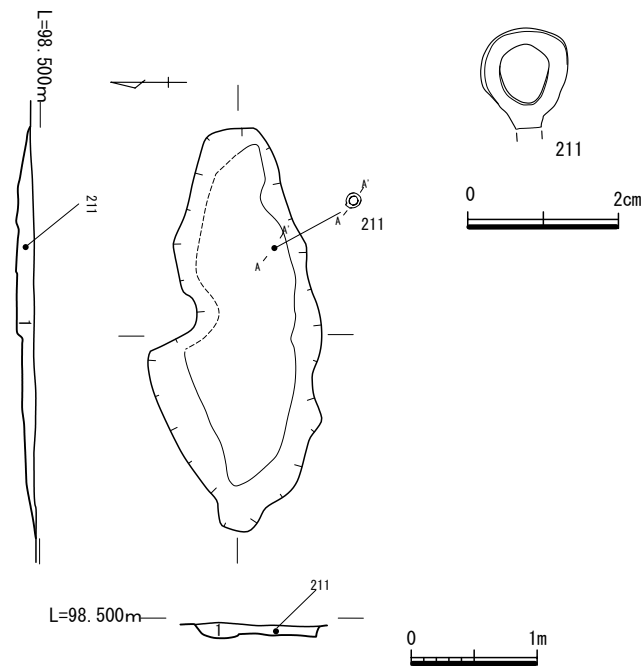


2区1Gr SK01 土層断面(北東から)



2区1Gr SK01内 遺物出土状況

SK02 SK01と同様、320cm×140cmの東西に長い楕円形を呈す。深さは12cmであり、SK1よりやや浅い。覆土は単層で、SK1-1層と同様である。遺構内からは杓子形銅製品が1点(211)出土している。



1 10YR3/3暗褐色土。固くしまり、粘質なし。5ミリ大の明赤褐色粒子、炭化物が混入する。



第12図 二俣瓜生田官軍砲台跡2区1GrSK02平面・土層断面図

2区1Gr SK02 土層断面図

(2)遺物

西南戦争関係遺物と認められるものについては、摩擦管管部15点(表採遺物2点含む)、摩擦管環線(ワイヤーループ)1点、S字環1点、杓子形銅製品12点、スナイドル薬莖20点、スペンサー薬莖1点、小銃弾14点、<sup>つづみがね</sup>鼓金2点等が出土している。これらはすべてI層中より出土した。また、同時期と思われる<sup>きせる</sup>煙管や、銅銭、木ネジ、角釘等が出土している。

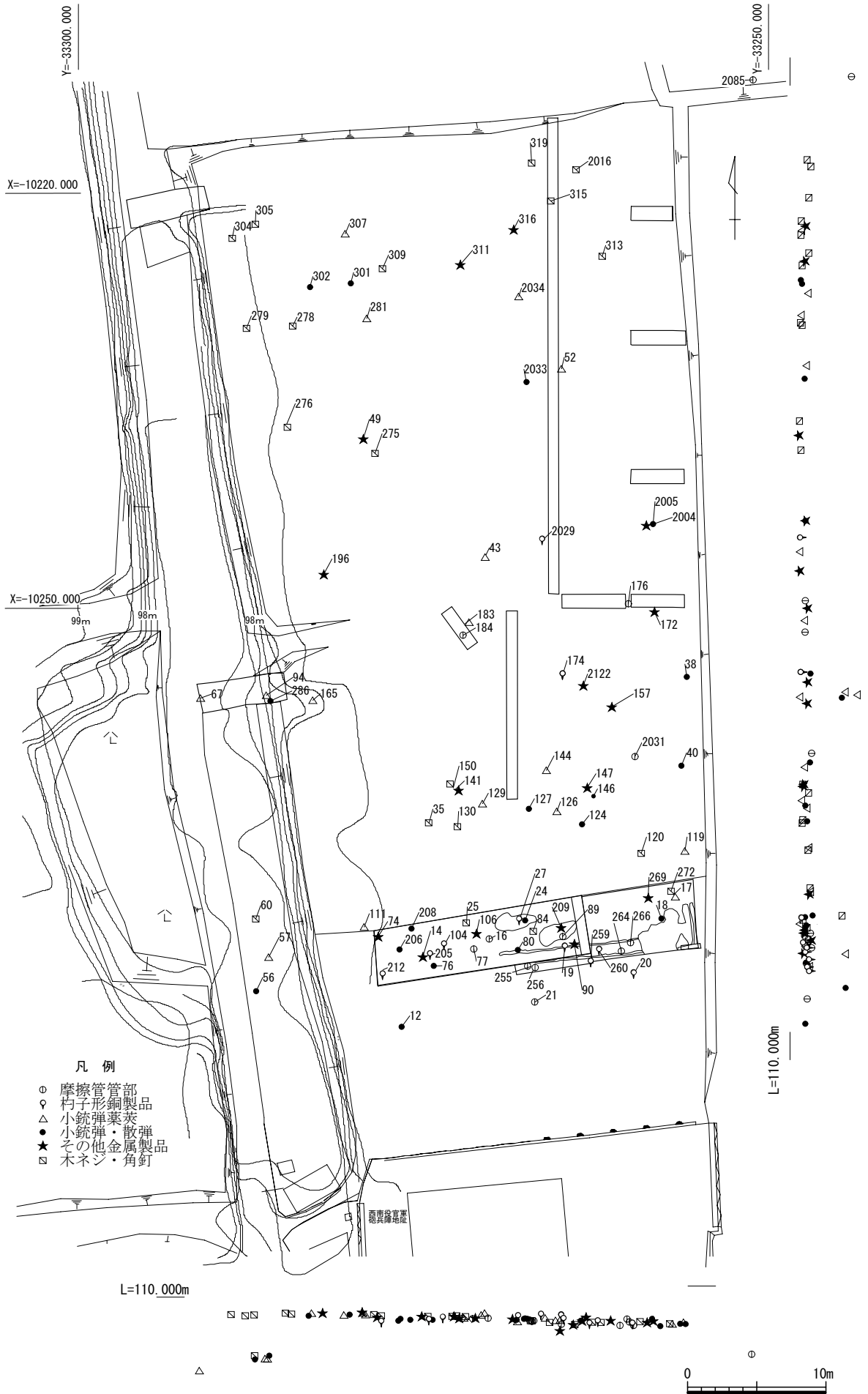
摩擦管

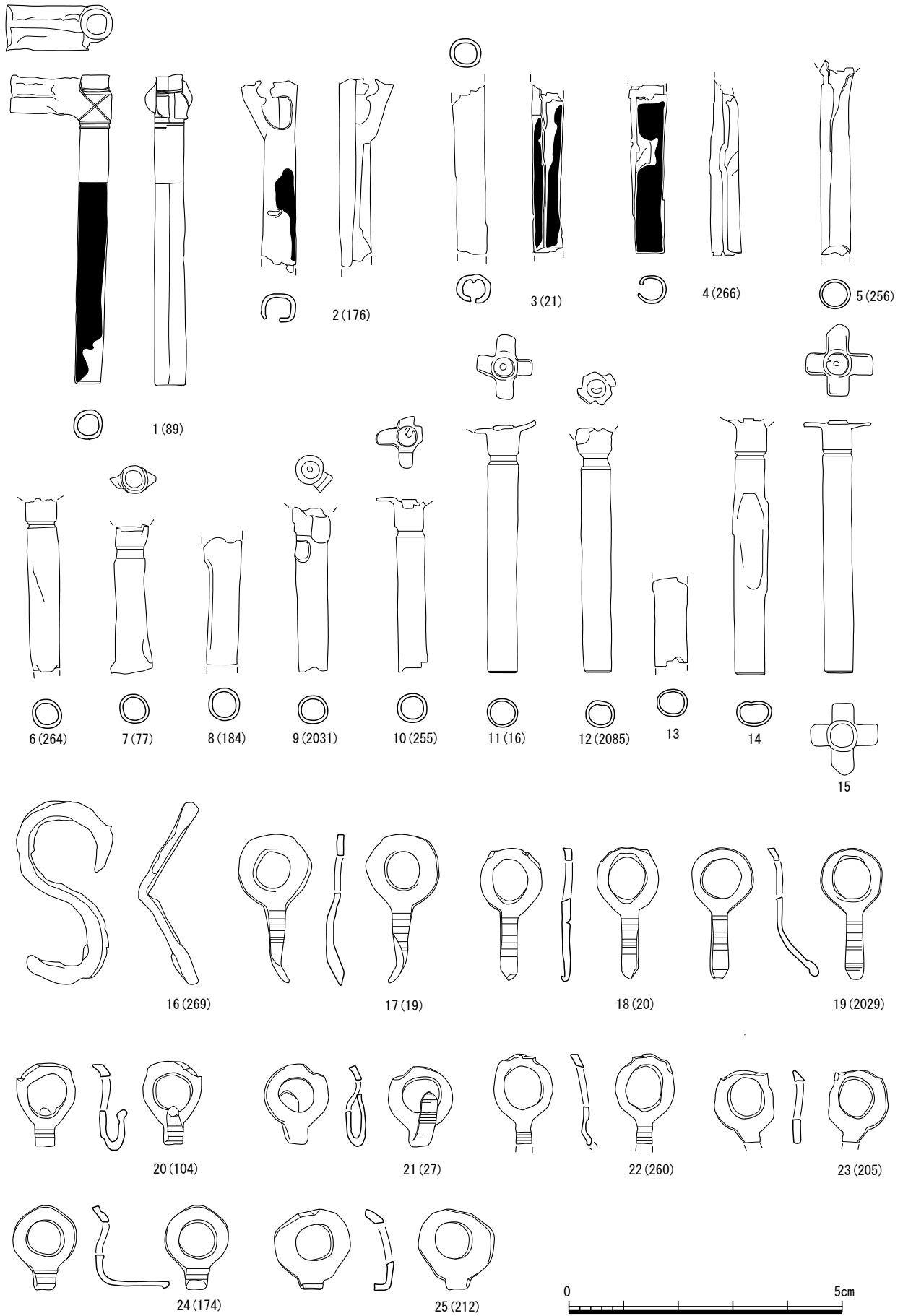
摩擦管(摩擦式火管)は、大砲の発火の為に使用されたものである。径5mm、全長55mm程度の小さな銅製筒である。大砲の火門孔に差込み装薬に点火することで大砲が発射する仕組みになっている。中に細粒火薬が入り、環線(ワイヤーループ)という銅線が挿入され両端は蠟で密閉されている。ワイヤーループを勢いよく引っ張ると摩擦熱で薬剤が反応し火花が出る。幕末に日本に伝来し、国産化された。

二俣瓜生田官軍砲台跡においては摩擦管管部が15点、ワイヤーループが1点出土している。摩擦管は二種類に分類できる。筒の先端部が逆L字になっているものと(以後、L字型摩擦管と呼ぶ)、筒



二俣瓜生田官軍砲台跡出土遺物





第14図 二俣瓜生田官軍砲台跡出土遺物実測図(摩擦管等)

はまっすぐに伸びるが先端が花卉状に四つ俣に分れているものである(以下、I字型摩擦管と呼ぶ)。前者が5点、後者が10点出土している。

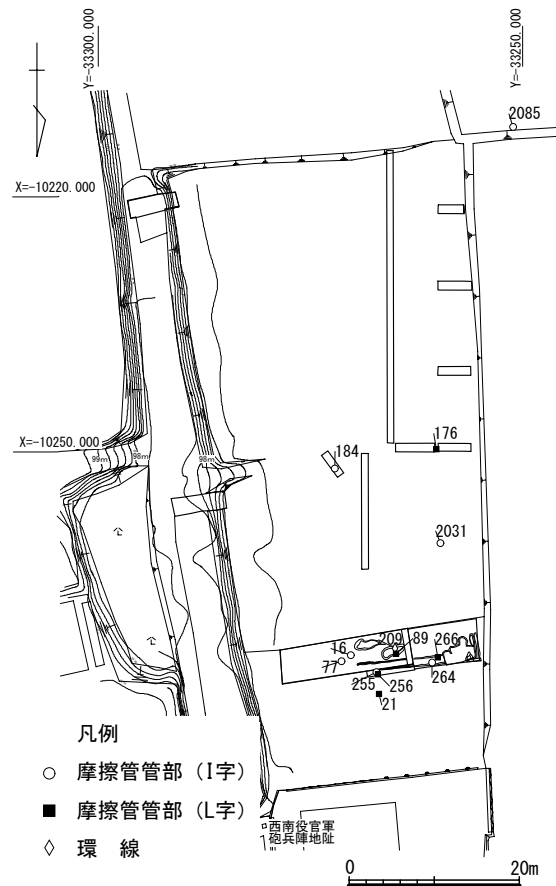
**L字型摩擦管** 第14図1(89)～5(256)はL字型摩擦管管部である。1(89)は、ほぼ完形であるが、ワイヤーループがついていない為使用済のものと思われる。厚さ1mmの銅版を直径5.5mmの筒状に成形し上部に薄い銅板が巻かれ、その上に薄い銅を筒状にしたカバーのようなものが筒に垂直方向に着けられている。それを細い針金で幾重にも巻いて固定している。×印に針金を締め巻いてあり、この筒が重要な役割を果たしたものと思われる。また、胴部の筒の表面には黒い塗布物が残っており、そこだけは緑青(錆)が進んでいない。西南戦争期の摩擦管の蛍光X線分析の結果によるとスズがメッキとして使用されている。これもスズメッキが残存しているものと思われる<sup>(1)</sup>。

**I字型摩擦管** 同図6(264)～15はI字型摩擦管である。ほぼ完形に近い。これらの径は5.5mmでありL字型と変わりなく、全長は46mmである。すべてワイヤーループは抜けている状態で出土した。先端部には木栓が挿入されており1mmの穴が開いている。ここにワイヤーループがあったと考えられる。また、先端部から6mm下にくびれ部が作られている。先端に挿入された木栓が抜けないように製造の過程でプレスされたものだろう。L字型と異なり銅板部分を巻いて成形した痕跡(つぎめ)が無い。

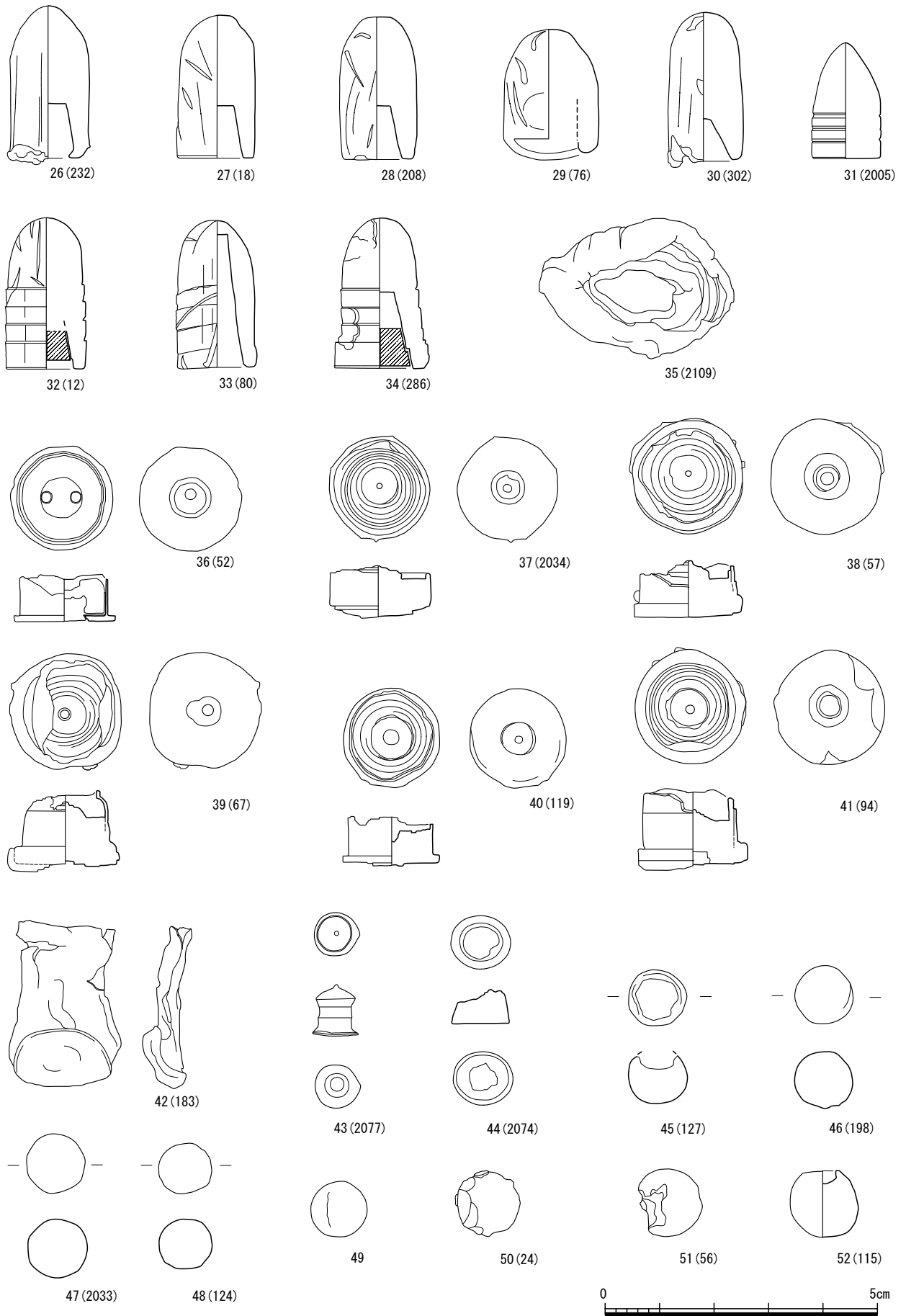
**杓子形銅製品** 同図17(19)～25(212)は銅製品で、中心部に穴のあいた丸い環状の銅版に尾がついてオタマジャクシのような形状をしている。杓子形銅製品と仮名を付けた。出土分布状況を見ると、摩擦管と同じような出土位置を示すため、関連するものと考えられるが、用途は不明である。田原坂や熊本城桜馬場で同様のものが出土している。いずれも円形部分の外径は12～13mmで、内径は5.5mm～7mmである。尾の部分は12～13mmで、両面に1mm間隔で横に刻み目が入る。刻み目は折り曲げを想定したものだろうか、出土遺物は刻み目で折れ曲がった、もしくは切れたものが多い。

同図16(269)はランヤード(引き綱)の先端に取り付けるS字環である。中央でくの字に折れ曲がっているが、ほぼ完形である。2mm厚断面方形の鉄製で、幅18mm、全長33mmである。

**小銃弾関係遺物** 第16図26(232)～35(2109)は鉛製の小銃弾である。26(232)～30(302)がエンフィールド銃弾で、その内26(232)～28(208)は内部断面形態が台形の同一規格のものと思われる。径15mm、全長25mmである。29(76)は側面が潰れており詳細な分類は不明である。30(302)は内部断面形態が円錐状のエンフィールド銃弾のプリチェット弾といわれるもので在入栓を必要としないものである。大きさは前述のものとはあまり変わらない。31(2005)はスペンサー銃弾である。径12.5mm、全長21mm。外面に三条の圈溝が入り先端部が鋭角に尖る。32(12)～35(2109)はスナイドル銃弾である。径は15mm、



第15図 二俣瓜生田官軍砲台跡摩擦管分布図



第16図 二俣瓜生田官軍砲台跡出土遺物実測図(銃弾関係遺物)



2区 1Gr 遺物出土状況



摩擦管出土状況



銃弾出土状況

全長27mmで、32(12)はプラグが詰まっているため、内部断面形態は不明である。33(80)は内部断面形態が円柱状のB類である(第VI章参照)。34(286)は、内部断面形態は台形のA類で、先端部は中空になっているものと思われる。35(2109)はドーナツ状に潰れ、詳細は不明である。

同図36(52)～41(94)はスナイドル銃の薬莖底部である。真鍮製の胴部は腐食の為残っていない。36(52)は薬莖内部にある雷管部分に二つの穴があいているもので、今回のすべての調査の中で出土例はこの一点である。40(119)は底部全面が銅製であり、内部雷管も8mmと大きいことから、MARKI～Ⅲいずれかと思われる。その他内部雷管は銅製、7mm程度であり、底部は鉄製で径20mmとほぼ同規格である。中心の雷管を囲むように紙のようなものが同心円状に幾重にも巻かれている。

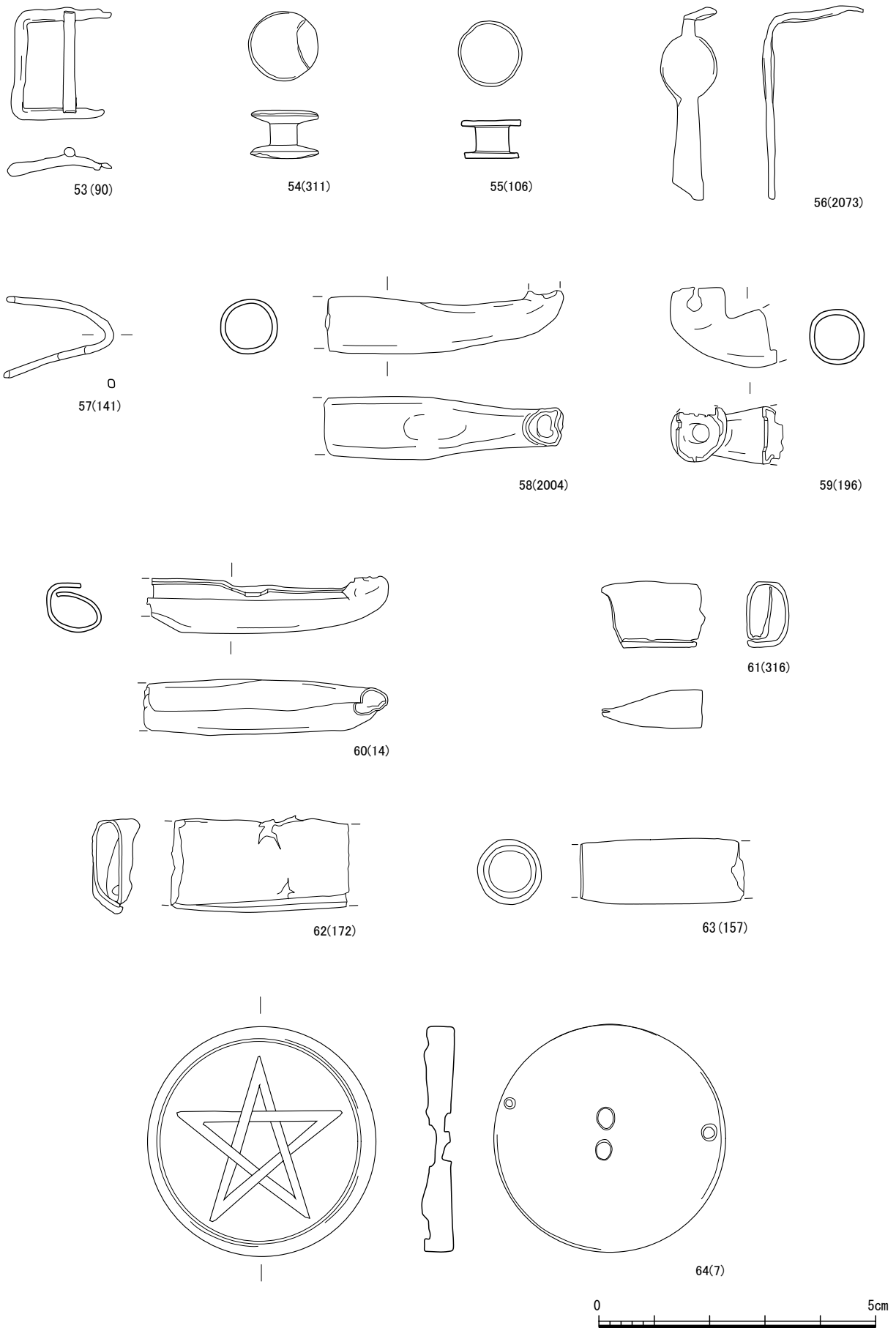
42(183)はスペンサー薬莖である。潰れた状態で出土した。43(2077)はスナイドル薬莖に内蔵されている雷管である。外側は無い状態で出土した。44(2074)は鉄製のプラグである。浅川氏によると、ミニエー銃弾の弾底凹部にはめ込まれたものさうだ。

45(127)～52(115)は鉛製の霰弾弾子もしくは火縄銃の弾と思われる。径10～11mmの球形を呈す。一部陥没したものもある。

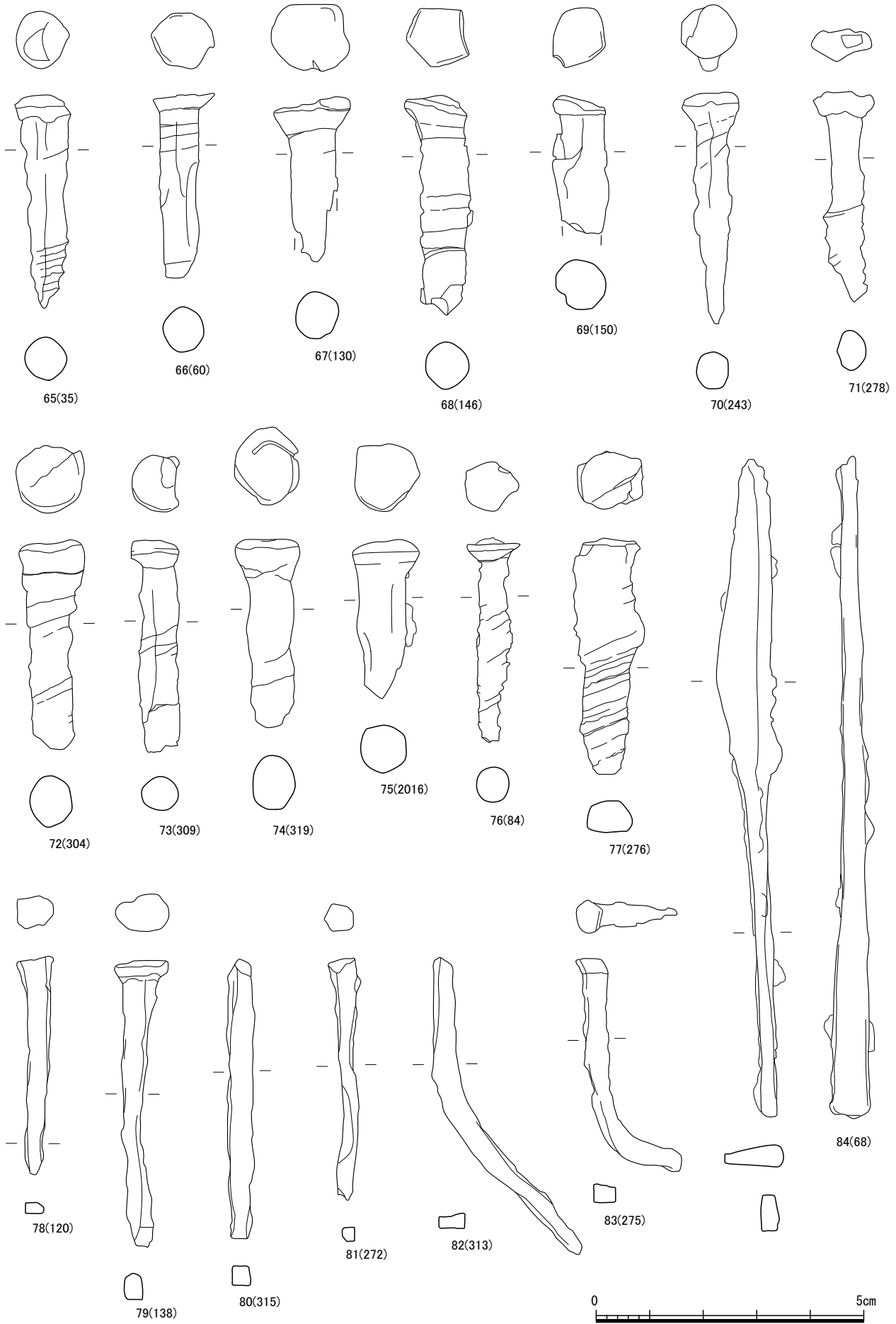
その他の遺物

第17図53(90)は銅製のベルト金具である。一部欠損している。径2mmの針金状のものを曲げて作られた華奢なものである。54(311)、55(106)は真鍮製の鼓金である。革製品などを留め合わせたものと思われる。54(311)が55(106)よりやや大きめで径12mm厚み9mmである。56(2073)は全長50mm、幅10mm、厚み2mmの銅版であり、途中で曲がっている。用途は不明である。57(141)は、径1.5mmの針金で全長42mm程度のものであるが途中で折れ曲がっている。銅製の針金は当時も多用されたと考えられるため掲載した。





第17図 二俣瓜生田官軍砲台跡出土遺物実測図(帽章等)



第18図 二俣瓜生田官軍砲台跡出土遺物実測図(木ネジ・釘等)

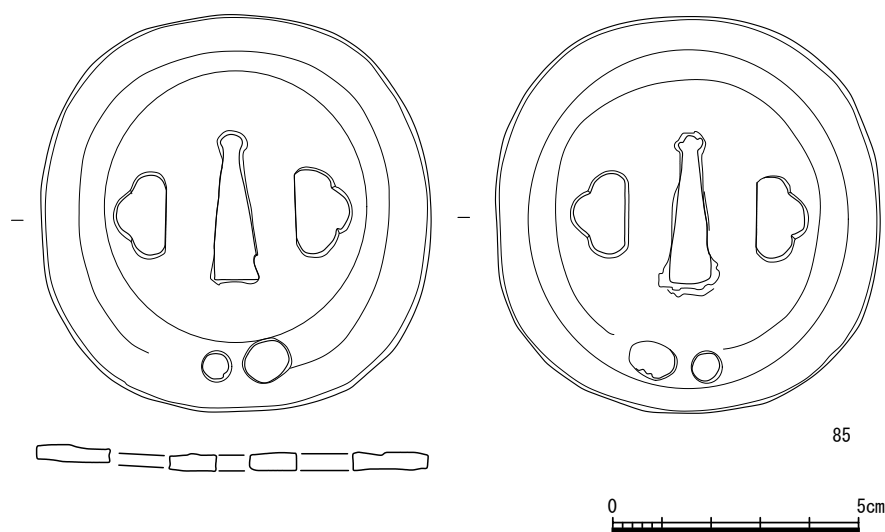
58(2004)～63(157)はキセルである。いずれも銅製である。59(196)は雁首、それ以外は吸い口と思われる。吸い口は1mm程度の薄い銅版を筒状に曲げて作られるものと、つぎ目の無い筒状のものに分けられる。

64(7)は、清明星の刻まれた帽章である。砲台跡の碑傍で採集された。銅製で、表面には清明星が幅2mmの凸線でまるで一筆書きのように刻印されている。裏面には中央に径3mmの穴があるが貫通していない。また両端に径1mm、2mmの二つの穴がある。帽章として利用された際には、この穴に糸をかがっていたのだろうか。

第18図65(35)～77(276)は木ネジである。頭10mm、長さ50mm程度のもので鉄製であるため錆が激しい。ネジ山がかろうじて見えるものもある。78(120)～83(275)は角釘である。調査区全体で19点出土しており、当時の弾薬箱等に使われていた可能性があるものとして図化した。84(68)は鉄製でナイフ形を呈する。全長123mm、幅10mmで用途不明である。第19図85は、地元の方によって表面採集された刀の鏢である。1区道路脇の土手に露出していたという。68mm×69mmの楕円形で厚み3mmの銅製である。表面には象嵌などの装飾は見られない。二つの腕貫緒を通す孔が穿ってある。

註

(1)山田拓伸 2003「摩擦管の科学的調査」『西南戦争の記録 第2号』



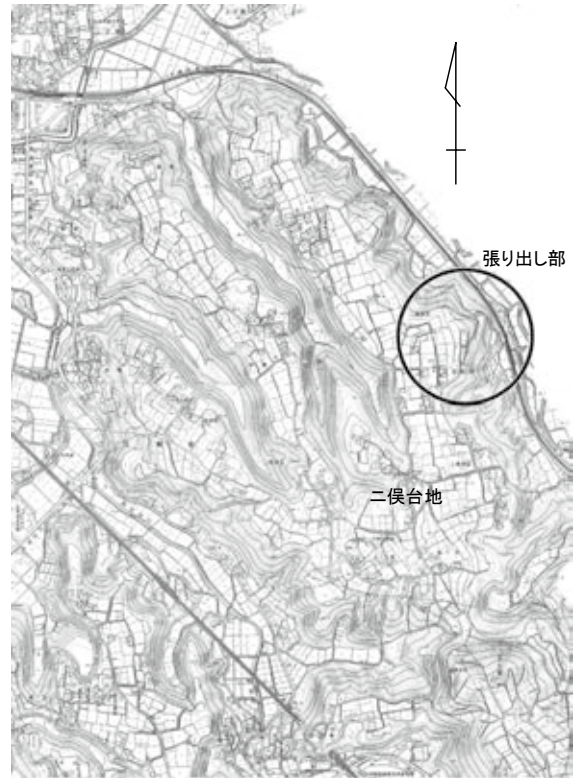
第19図 二俣瓜生田官軍砲台跡出土遺物実測図

第2項 中世の遺構と遺物

二俣瓜生田官軍砲台跡は二俣台地が張り出した部分にあり、砲台として利用された高台部分に沿うように南北方向に凹道がある。

平成22年度第1次調査では、現在の凹道に直行するように12~16Trを設け、西南戦争の遺構面を検出した他、凹道の下にそれに沿うような形で大溝を検出した。また、平成24年度に行った確認調査では大溝がさらに北側に延びることを確認した。

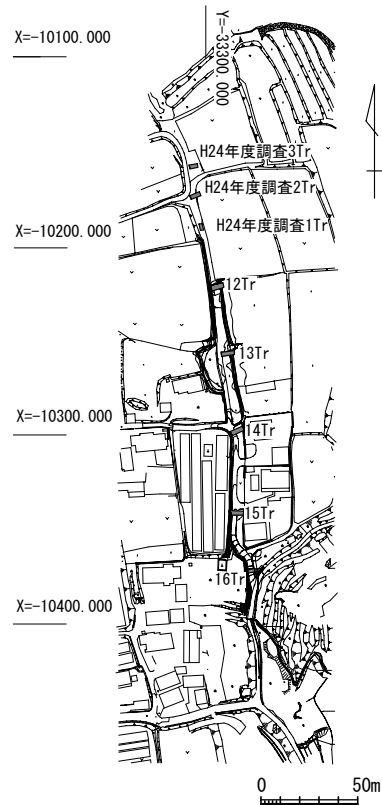
大溝は二俣台地の張り出し部分を断ち切るように南北方向に走っている。平成24年度の確認調査の際には熊本県文化課の岡本氏によって大溝がその形状を保ったまま北側の斜面部分にも残っていることが確認された。以下、トレンチ断面で確認された大溝の形態、トレンチ内出土遺物について述べる。



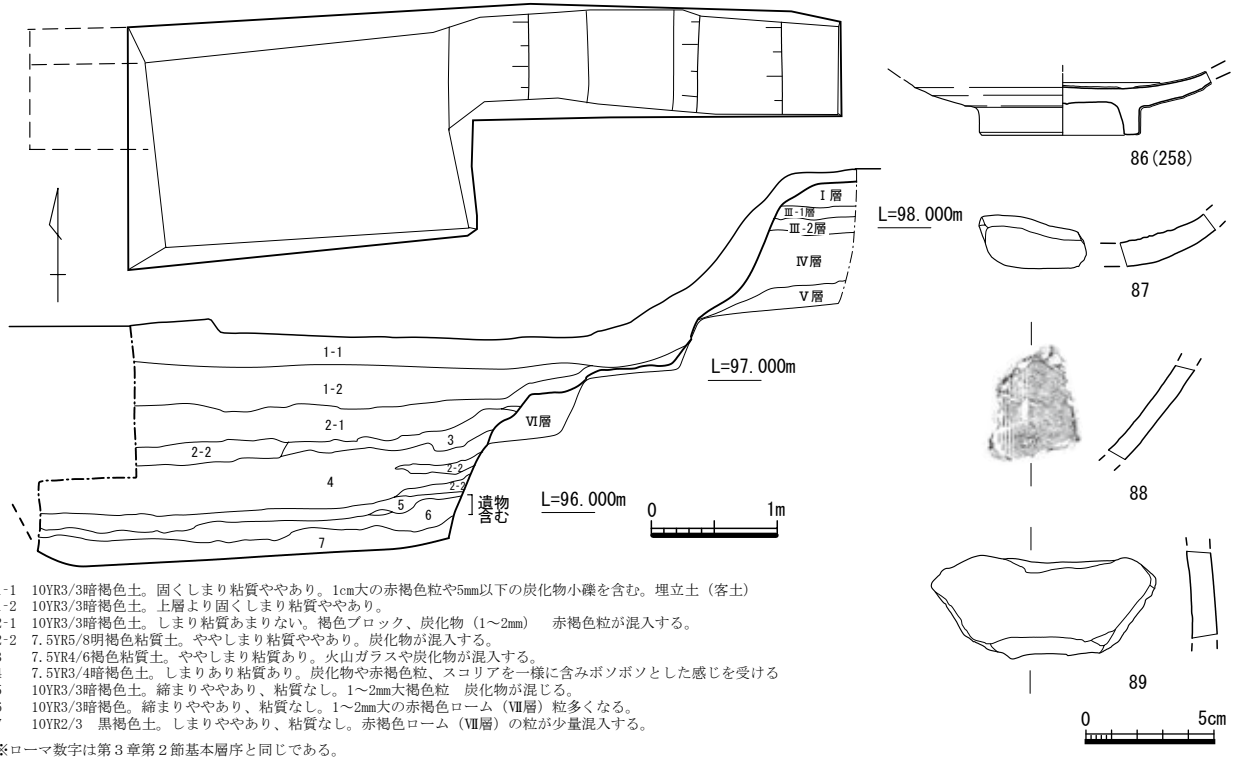
13Tr 各トレンチでは、大溝の断面を確認することができたが、それらは各所で断面の形状が異なる。

最も幅が広く高低差のある場所は13Tr付近である。ここでは溝の最下部が標高94mであり、最も高い13Tr東側の高台肩部と比べると4.5mの高低差がある。調査区の関係上西側肩部の形状はわからないが、コンタラインが他より落ち込んでいる部分があり、おそらくここが西側の肩部と思われ、幅は15m程であると考えられる。全体的な断面の形状はV字を呈し、東側斜面部分には標高96mの位置と96.7mの位置に2箇所平坦な部分があり階段状をなす。その他、13Tr底部にて直径20cm程の柱穴状の掘り込みを確認した。13Tr中では、5層中に西南戦争期の葉莖を確認した他、遺物は出土していない。

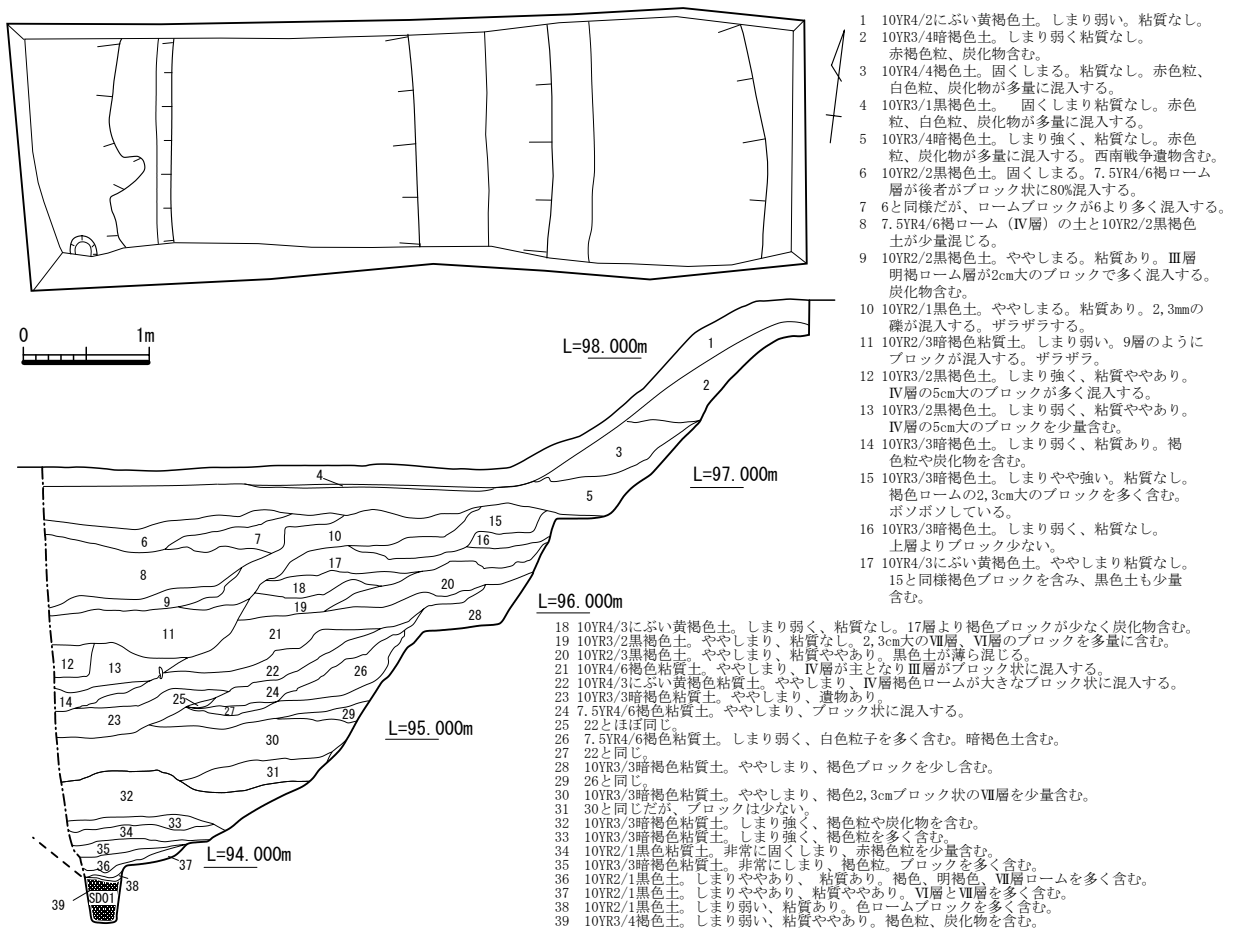
12Tr 12Trの断面形態は逆台形を呈する。最下部は標高95.8m、最上部は東側肩部の98.4mであり、その差は2.6mである。西側肩部の状況は未調査であるが現地表面は標高99.5mと、東側肩部より高い。大溝の立ち上がりもあまり変わらないと思われる、これより高低差は13Trの約半分、幅は約7mであると推定できる。13Trに見られた段差は、ここでは97mの位置に一箇所確認された。また、12Trからは溝底部に近い土層中より遺物が出



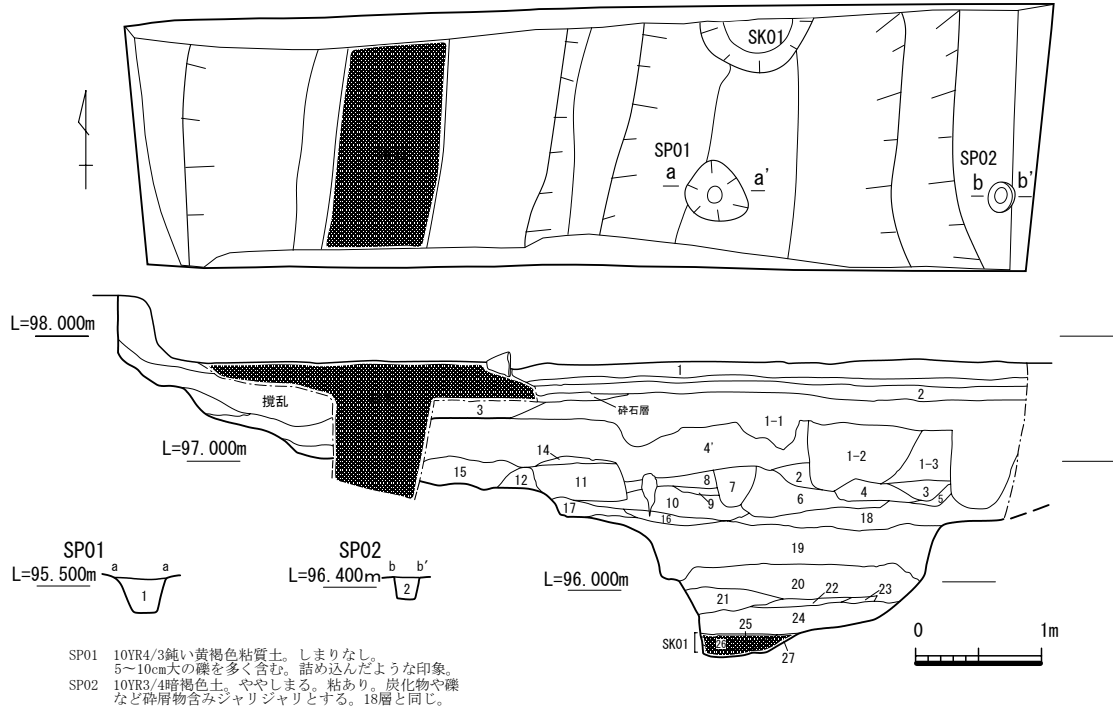
第20図 二俣瓜生田官軍砲台跡トレンチ配置図



第21図 二俣瓜生田官軍砲台跡1区12Tr平面図・北壁土層断面図及びトレンチ内出土遺物実測図

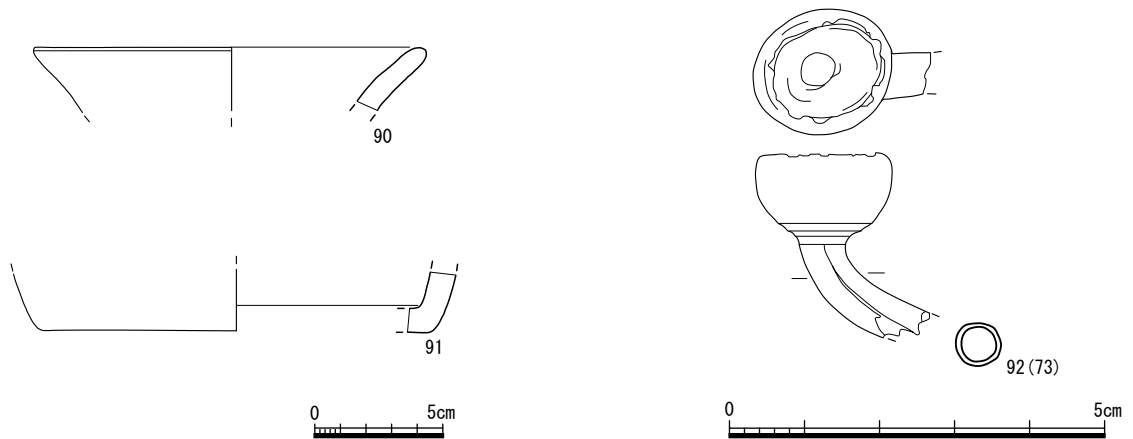


第22図 二俣瓜生田官軍砲台跡1区13Tr平面図・南壁土層断面図

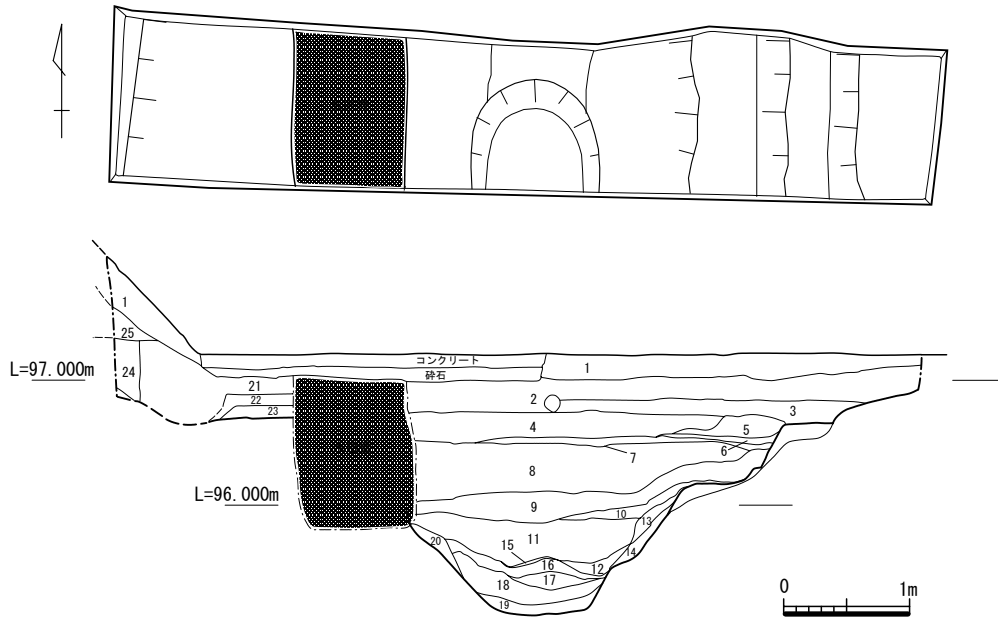


- SP01 10YR4/3鈍い黄褐色粘質土。しまりなし。5~10cm大の礫を多く含む。詰め込んだような印象。  
 SP02 10YR3/4暗褐色土。ややしまる。粘あり。炭化物や礫など碎屑物含みジャリジャリとする。18層と同じ。
- 1 10YR3/3褐色土。非常に固くしまり、粘質なし。1~2.3mmの炭化物、赤褐色粒、白色粒を多く含む。
  - 1-1 10YR3/4暗褐色土。しまり、粘質あり。炭化物、赤粒などを多量に含む。耕作土。
  - 1-2 10YR2/3黒褐色土。ややしまり、粘質あり。炭化物多く含む。間けきがいりやわらかい。
  - 1-3 1-1とほぼ同じだが、より固くしまる。
  - 7 10YR3/4暗褐色土。しまりなく、粘質あまりない。碎屑物含み、ジャリジャリしている。
  - 8 19と同じロームの埋土。
  - 9 10YR3/4暗褐色土。黒色土混じる。
  - 10 10YR3/4暗褐色土。しまりあまりなく、粘質なし。赤褐色粒を多く含み、ボロボロと崩れやすい。
  - 11 19とVII層土が少し混じる。ややしまり、粘質あり。
  - 12 同上VII層土多く含む。
  - 13 10YR3/4暗褐色土。しまり、粘質なし。礫を含みジャリジャリとする。
  - 14 10YR3/4暗褐色土。13よりやわらかい。
  - 15 13にVII層がまんべんなく含まれる。しまりあり、粘質なし。
  - 16 20がベースとなり25のような黒色土を含む。
  - 17 20と類似。
  - 18 10YR3/4暗褐色土。ややしまり、粘質あり。炭化物やローム礫起源の碎屑物含み、ジャリジャリとする。
  - 19 10YR4/6赤褐色土。ややしまり、粘質あり。褐色ロームを主体とし、暗褐色土が少し混じる。一気に埋められたものか。
  - 20 10YR3/4暗褐色土。ややしまり、粘ややあり。炭化物や小礫混じる。22、25のような黒色土を含む。
  - 21 5YR5/6明赤褐色土。しまりあまりない。粘質あり。礫混じり。VII層の碎屑物多く含む。
  - 22 25と類似。
  - 23 10YR4/2灰黄褐色土。しまりなし、粘質あり。粘土質。小礫碎屑物を多く含む。
  - 24 10YR3/4暗褐色土。かたくしまり、やや粘質あり。赤色礫、炭化物を含む。
  - 25 10YR2/1黒褐色土。しまりなく、粘質あり。不純物なし。
  - 26 10YR3/3暗褐色土。しまりなく、粘質あり。VII層中礫の碎屑物多く含む。
  - 27 10YR6/3暗褐色土。しまりなく、粘質あり。VII層礫の碎屑物を多く含み、ジャリジャリとする。

第23図 二俣瓜生田官軍砲台跡1区14Tr平面図・北壁土層断面図

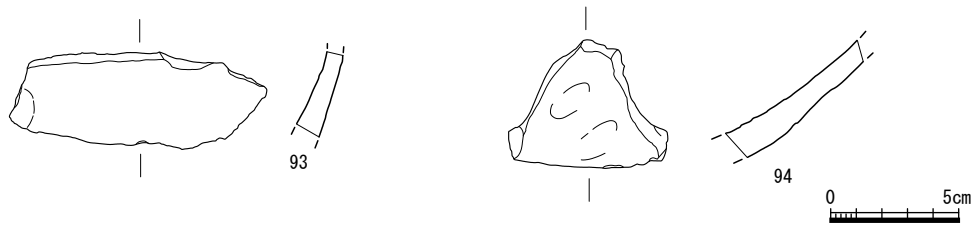


第24図 二俣瓜生田官軍砲台跡1区14Tr出土遺物実測図

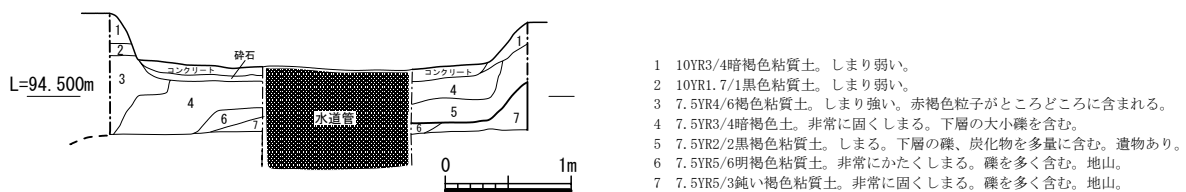


- 1 10YR3/4暗褐色土。しまりあり、粘質なし。
- 2 10YR3/3暗褐色土。ややしまり、粘質なし。小さなブロック状の土混じる。
- 3 10YR2/3黒褐色土。ややしまり、粘質ややあり。2, 3mmの暗褐色ブロックが混入する。
- 4 10YR3/4暗褐色土。しまる。粘質ややあり。長石、微細なガラス粒、1cm大の褐色ブロック粒が混入する。
- 5 10YR4/6褐色土。ややしまる。粘質あり。ブロック状の褐色ロームが混入する。
- 6 10YR3/3暗褐色土。しまりなし。粘質ややあり。
- 7 10YR2/3黒褐色土。しまりなし。粘質ややあり。黒褐、褐色粒多く混入する。
- 8 10YR3/4暗褐色土。ややしまる。粘質ややあり。長石、微細なガラス、褐色、赤褐色粒、5cm大の褐色ブロック炭化物含む。ボンボンとしている。埋戻土。
- 9 10YR3/4暗褐色土。ややしまる。粘質ややあり。8より大きな粒、ブロックが混入する。炭化物が多く混入す。遺物94含む。
- 10 10YR3/4暗褐色土。しまりなし。粘質ややあり。9よりふかふかする。混入ブロック大きい。VII層ブロックが混入する。
- 11 7.5YR4/6褐色土。しまりなし、粘質ややあり。II、III層が混じる。暗褐色土混じる。
- 12 7.5YR4/4褐色土。しまりなし、粘質ややあり。下層16の土と11の土混じる。
13. 14 VII層と暗褐色土混じる。
- 15 10YR1.7/1黒色土。しまりなし。粘質あり。ザラザラとしている。遺物含む。
- 16 10YR2/2黒褐色土。ややしまる。粘質ややあり。炭化物、褐色粒など含む。ボンボンとしている。
- 17 10YR3/4暗褐色土。しまりなし。粘質ややあり。炭化物、VII層の粒含む。
- 18 10YR3/4暗褐色土。しまりなし。粘質あり。炭化物、褐色ブロック含む。遺物93含む。
- 19 10YR3/4暗褐色土。しまりあり、粘質あり。炭化物、VII層の粒、褐色ブロック。
- 20 10YR2/3 黒褐色土。しまりなく、粘質なし。長石、ガラス粒子含む。ボンボンとしている。
- 21 10YR3/3暗褐色土。非常に固くしまる。粘質なし。明赤褐色粒、炭化物含む。
- 22 10YR3/4暗褐色土。固くしまり、粘質なし。明赤褐色粒含む。
- 23 10YR3/4暗褐色土。ややしまり、粘質なし。下層ローム混じる。
- 24 10YR3/5暗褐色土。ややしまり、粘質あり。ボンボンとしている。ガラス粒子含む。
- 25 10YR3/4暗褐色土。しまりあり、粘質なし。ボンボンとしている。ガラス粒子含む。

第25図 二俣瓜生田官軍砲台跡1区15Tr北壁土層断面・平面図



第26図 二俣瓜生田官軍砲台跡1区15Tr出土遺物実測図

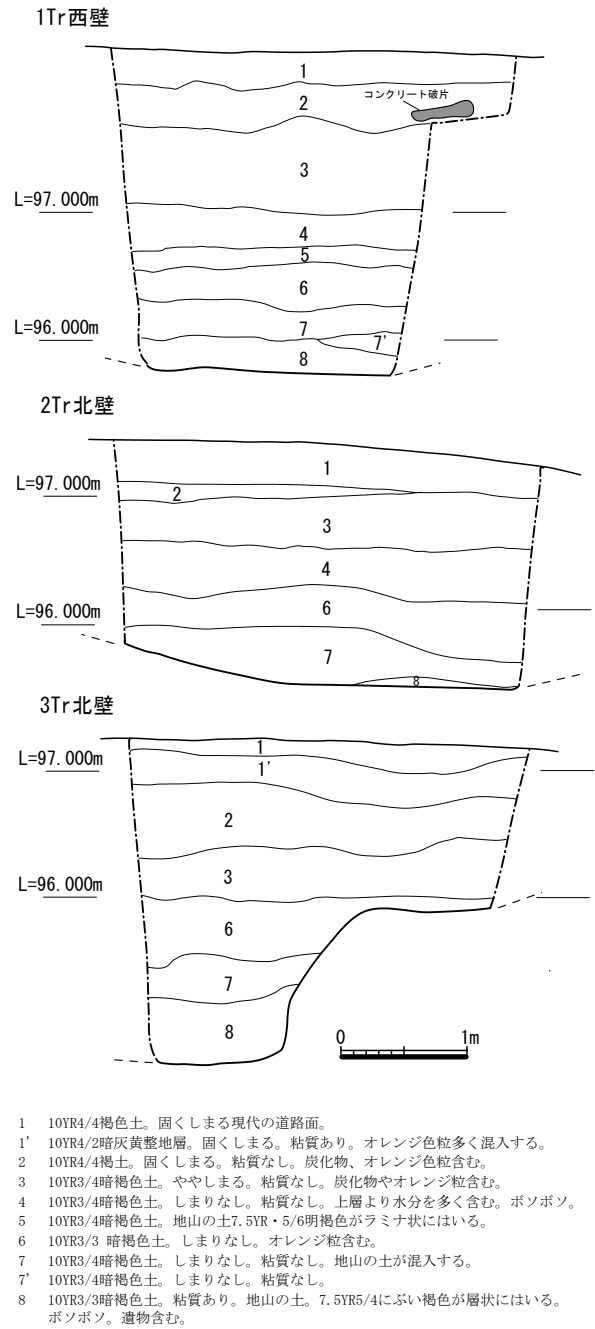


- 1 10YR3/4暗褐色粘質土。しまり弱い。
- 2 10YR1.7/1黒色粘質土。しまり弱い。
- 3 7.5YR4/6褐色粘質土。しまり強い。赤褐色粒子がところどころに含まれる。
- 4 7.5YR3/4暗褐色土。非常に固くしまる。下層の大小礫を含む。
- 5 7.5YR2/2黒褐色粘質土。しまる。下層の礫、炭化物を多量に含む。遺物あり。
- 6 7.5YR5/6明褐色粘質土。非常にかたくしまる。礫を多く含む。地山。
- 7 7.5YR5/3純い褐色粘質土。非常に固くしまる。礫を多く含む。地山。

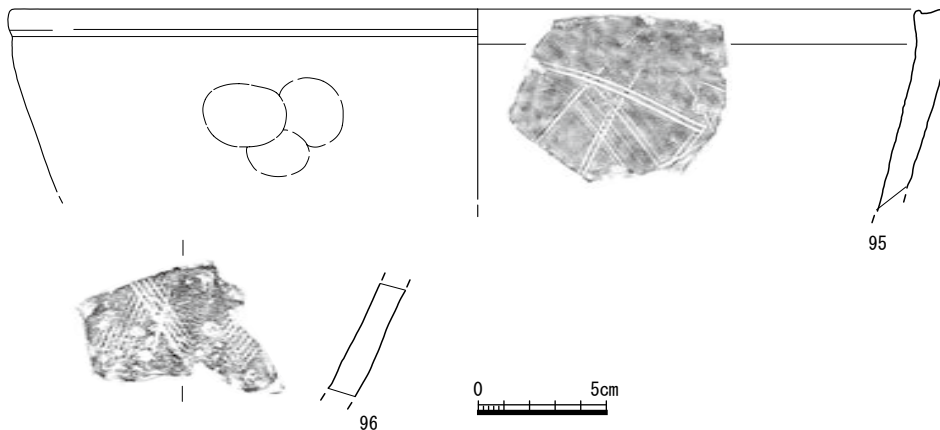
第27図 二俣瓜生田官軍砲台跡1区16Tr土層断面図

土している。第21図86は17世紀肥前産の陶器皿である。13Tr7層より出土した。見込みは蛇の目釉はぎで高台径6.9cm、残存器高は2.5cmである。釉薬は黄灰色であり、見込みと高台を除き全面にかかる。87は土師器坏(?)の底部である。内側は回転ナデ後に黄褐色の釉が施されている。両者とも13Tr6層で出土している。

14Tr、15Tr 14、15Trにおける大溝の断面形態は、13Trよりも傾斜の緩やかなV字を呈する。14Trの東側肩部は未調査であるが西側肩部は標高約98.8mである。最下部は95.3mで高低差3.5mである。14、15Trとも標高96.5mの位置に段がある。この他、14Trにおいては不定形な柱穴が2基、土坑が1基検出された。14Trにおいては溝底部に近い24層中より土器とキセル1点が出土している。第24図90は土師器坏、91は瓦質土器の鉢の底部である。92は首部のが大きく湾曲した羅宇キセルの雁首である。火皿は大振りて首部接続部に補強帯が付くことから16世紀台の古式のものと思われる。15Trでは9、15、19層中で土器が出土した。第26図93は土師器甕の胴部破片であり15Tr18層より出土した。また、94は瓦質土器で、鉢の底部と思われる。



第28図 二俣瓜生田官軍砲台跡H24年確認調査トレンチ土層断面図



第29図 二俣瓜生田官軍砲台跡H24年確認調査出土遺物実測図



16Tr 16Trは二俣台地の張り出し部の付け根付近と思われる。ここでは東側の肩部を検出したが、西側は未調査である。トレンチ断面より判断すると、より広がるとも考えられるが、これより南側は深い谷となっているため、ここで溝が終る可能性もある。

平成24年度 1～3Tr 平成24年度確認調査の際に設定した1～3Trは二俣台地張り出し部の北側に位置する。ここでも溝の断面が確認された。いずれにおいても溝の肩部は確認していないが、3Trにおいては12～15Trにおいて確認された平坦面が標高96mの位置で確認されている。第29図95は2Tr8層にて出土した瓦質の播鉢である。96も同様であるが、廃土より出土したため明確な出土層位は不明である。

まとめ 以上より、地点によって少し異なるものの13、14、15Trにおいて確認された断面V字の大溝が二俣台地の張り出し部を断ち切るように意図的に造られたことは確かである。前述した台地張り出し部で北側斜面に現在も残っているV字の溝の形状が本来の溝の形状であるかどうかは未調査の為わからないが、トレンチで確認された大溝の続きであると考えられる。台地上の溝は、後に埋め戻されたものであろう。トレンチで見られた大溝の断面は一様ではないが、地山を削った土を用いて数回にかけて埋め戻しが行われている。溝は深いところで現地表面より4.5mもあり、埋め戻しは近くの土、つまり溝の斜面を削って行われたと思われる。トレンチで見られた標高96mの平坦面は、埋め戻しの時に削られたものだろう。平坦面は2段あるところもあり、このような作業が2回以上繰り返されたことが考えられる。

現在、台地張り出し部の東側は急斜面で竹林となっている。つまり、かつては東側張り出し部分が独立した状態になっていたものと考えられる。

遺物が少ないため、はっきりとしたことは言えないが、大溝の築造時期は溝底部より出土した遺物より16世紀以前に遡ると考えられる。16世紀以前というと中世期であり、このような深い溝＝堀切を伴った山城が多く築城される時期である。当該地域周辺に城跡を連想させるような字名は残っていない(当該地名は小字横林である。周辺には小字前畑、瓜生田、北原、井堀等がある)ため、この独立した台地がどういった性質を持つものか分からないが、周辺地域には中近世期の板碑が点在しており、地域の有力者の拠点となっていたことが考えられる。



13Tr 土層断面



14Tr 土層断面



大溝の推定ラインと周辺の中・近世板碑

第三章 二俣砲台跡の調査

第2表 二俣瓜生田官軍砲台跡出土遺物観察表

※出土位置(層位)について特に記載の無い物はI層中より出土。

摩擦管

実測No.	遺物No.	部位	出土位置	分類	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	
第14図	11	16	管部 2区	I	48.0	5.0	3.2	
第14図	3	21	管部 2区	L	31.0	5.5	2.3	
第14図	7	77	管部 2区	I	27.0	5.5	1.5	
第14図	1	89	管部 2区	L	56.0	5.5	4.4	
第14図	2	176	管部 2区	L	34.5	6.5	1.5	
第14図	8	184	管部 2区	I	23.5	5.5	1.0	
第14図	10	255	管部 2区	I	31.0	5.5	2.3	
第14図	5	256	管部 2区	L	35.0	6.0	1.4	
第14図	6	264	管部 2区	I	31.0	6.0	1.6	
第14図	4	266	管部 2区	L	31.0	6.0	1.3	
第14図	9	2031	管部 2区	I	29.0	5.6	2.0	
第14図	12	2085	管部 2区	I	44.5	4.8	2.5	
第14図	15	一括	管部 2区	一括	I	47.0	5.5	2.4
第14図	13	表採	管部 2区	石碑傍	I	15.9	5.1	0.5
第14図	14	表採	管部 2区	I	46.0	5.5	3.2	
第11図		209	環線 2区	SK02下位	70.4	-	0.8	

杓子形銅製品

実測No.	遺物No.	出土位置	全長(mm)	径(mm)	質量(g)
第14図	17	19 2区	27.5	13.3	0.7
第14図	18	20 2区	24.5	11.0	0.6
第14図	21	27 2区	17.0	11.8	0.8
第14図	20	104 2区	15.0	11.4	0.7
第14図	24	174 2区	13.0	11.4	0.3
第14図	23	205 2区	14.5	13.8	0.8
第11図		210 2区 SK02下位	15.0	12.8	0.8
第12図		211 2区 SK01	12.5	10.3	0.3
第14図	25	212 2区	16.5	10.8	0.4
		259 2区	27.0	12.4	0.8
第14図	22	260 2区	15.0	10.5	0.6
第14図	19	2029 2区	24.5	11.8	0.6

銃弾

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	分類	栓	潰れ方	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	備考
第16図	32	12	スナイドル銃弾	2区	A2/B	陶/灰	27.3	14.8	30.3	裾部凹溝幅広い
第16図	27	18	エンフィールド銃弾	2区	b	木	25.8	14.5	31.8	
		38	スナイドル銃弾	2区	-	-	-	-	10.9	破片
		40	スナイドル銃弾	2区	-	-	-	-	28.0	破片
第16図	51	56	火縄銃弾	1区	-	-	-	-	12.9	6.9
第16図	29	76	エンフィールド銃弾	2区	ショート弾	-	23.4	17.1	25.6	
第16図	33	80	スナイドル銃弾	2区	B	-	26.8	14.9	27.7	
第16図	52	115	火縄銃弾	2区	-	-	-	-	11.7	7.2
		206	エンフィールド銃弾	2区	-	-	-	-	5.0	破片
第16図	28	208	エンフィールド銃弾	2区	b	-	25.5	13.5	30.9	
第16図	26	232	エンフィールド銃弾	2区	b	-	28.0	15.0	34.5	
第16図	34	286	スナイドル銃弾	2区	A	-	28.2	17.5	28.8	
		301	スナイドル銃弾	2区	-	-	-	-	4.7	破片
第16図	30	302	エンフィールド銃弾	2区	a	-	27.4	13.3	33.8	
第16図	31	2005	スベンサー銃弾	2区	-	-	20.8	12.1	20.0	
第16図	35	2109	スナイドル銃弾	3区	-	-	-	-	27.0	

薬莢

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	分類	a(mm)	b(mm)	c(mm)	d(mm)	e(mm)	質量(g)
		17	スナイドル薬莢	2区	(9.6)	(17.1)	-	(6.1)	7.3	3.9
第16図	36	52	スナイドル薬莢	2区	(8.1)	(16.6)	(19.0)	(6.5)	7.5	3.0
第16図	38	57	スナイドル薬莢	1区	(9.5)	(18.6)	(20.8)	(5.0)	7.0	5.0
		62	スナイドル薬莢	1区	(11.7)	(17.6)	(20.6)	(7.6)	7.2	5.0
第16図	39	67	スナイドル薬莢	2区	(13.3)	(17.3)	(20.2)	(8.6)	7.2	6.0
第16図	41	94	スナイドル薬莢	1区	(13.2)	(16.9)	20.2	(10.0)	(7.8)	6.5
		111	スナイドル薬莢	2区	(9.9)	(16.9)	-	(7.2)	7.3	4.1
第16図	40	119	スナイドル薬莢	2区	(8.3)	(15.3)	(17.1)	(6.8)	(8.4)	5.7
		126	スナイドル薬莢	2区	(8.9)	(17.7)	(19.7)	(6.0)	(6.9)	4.8
		129	スナイドル薬莢雷管	2区	(9.0)	-	-	-	8.0	1.2
		144	スナイドル薬莢	2区	(9.2)	(17.1)	(20.7)	(5.4)	7.1	4.4
		165	スナイドル薬莢	2区	(8.5)	(16.4)	-	(5.6)	6.6	2.2
第16図	42	183	スベンサー薬莢	2区	(29.3)	(19.8)	(17.4)	-	-	3.9
第11図		213	スナイドル薬莢	2区	(26.0)	-	-	-	-	2.4
		281	スナイドル薬莢	2区	(7.4)	(17.1)	-	(5.5)	7.0	3.0
		307	スナイドル薬莢	2区	(9.1)	(17.5)	(19.3)	(6.5)	6.7	3.9
第16図	37	2034	スナイドル薬莢	2区	(8.8)	(17.2)	-	(6.1)	7.4	4.2
第16図	43	2077	スナイドル薬莢雷管	2区	-	-	-	-	-	1.9
		表採1	スナイドル薬莢	1区	(11.0)	(17.5)	20.4	(5.8)	(7.3)	5.7
		表採2	スナイドル薬莢	2区	(11.2)	(17.3)	(21.6)	(6.7)	7.2	5.9
		表採3	スナイドル薬莢	2区	(9.0)	(17.8)	-	(7.5)	(7.8)	4.3

その他の遺物

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	全長(mm)	径(mm)	質量(g)
第17図	64	7 帽 章	2区	4.1	4.1	20.4
第17図	60	14 キセル	2区	4.3	1.0	3.4
第16図	50	24 鉄砲弾	2区	-	10.6	4.3
第18図	65	35 木ネジ	2区	39.5	8.0	6.6
		49 一銭銅貨	2区	23.2	1.6	3.3
		51 銅 貨	2区	15.9	1.7	0.7
第18図	66	60 木ネジ	2区	39.0	7.0	6.4
第18図	84	68 ナイフ形鉄製品	2区	184.0	16.5	39.0
		74 寛永通宝	2区	25.1	-	4.90
第18図	76	84 木ネジ	2区	38.0	7.8	2.5
第17図	53	90 ベルト金具	2区	2.0	1.7	1.4
第17図	55	106 鍍 金	2区	11.0	11.0	2.3
第18図	78	120 角 釘	2区	40.5	4.0	2.1
第16図	48	124 鉛砲弾	2区	-	10.0	4.3
第16図	45	127 鉛砲弾	2区	-	11.0	4.2
第18図	67	130 木ネジ	2区	29.7	8.0	7.6
		134 くさび	2区	47.5	5.7	17.3
第18図	79	138 角 釘	2区	53.0	5.0	4.3
第17図	57	141 銅針金	2区	4.7	-	0.4
第18図	68	146 木ネジ	2区	41.0	8.5	8.6
		147 銅 貨	2区	15.9	1.5	0.6
第18図	69	150 木ネジ	2区	26.0	10.0	6.2
第17図	63	157 キセル一部	2区	28.6	11.8	9.4
第17図	62	172 キセル一部	2区	31.3	16.5	5.8
第17図	59	196 キセル	2区	2.0	1.1	2.1

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	全長(mm)	径(mm)	質量(g)
第16図	46	198 鉛砲弾	2区	-	11.0	6.0
第18図	70	234 木ネジ	3区	43.3	6.2	5.1
第14図	16	269 S字環	2区	32.2	-	1.9
第18図	81	272 角 釘	2区	46.5	4.0	1.6
第18図	83	275 角 釘	2区	43.0	5.0	2.1
第18図	77	276 木ネジ	2区	45.0	10.0	8.0
第18図	71	278 木ネジ	2区	39.0	5.0	4.4
		279 角 釘	2区	26.7	5.0	4.7
第18図	72	304 木ネジ	2区	39.0	8.0	6.9
		305 角 釘	2区	52.5	5.0	2.5
第18図	73	309 木ネジ	2区	39.5	7.0	5.5
第17図	54	311 鍍 金	2区	9.0	12.3	2.7
第18図	82	313 角 釘	2区	58.0	4.0	3.7
第18図	80	315 角 釘	2区	53.0	4.0	4.0
第17図	61	316 キセル	2区	15.4	12.0	1.3
第18図	74	319 木ネジ	2区	35.1	8.5	7.0
第17図	58	2004 キセル	2区	43.0	11.0	7.2
第18図	75	2016 木ネジ	2区	29.5	8.5	6.3
第16図	47	2033 鉛砲弾	2区	-	11.0	5.7
第17図	56	2073 銅製品	2区	35.0	10.0	1.5
第16図	44	2074 鉄 栓	2区	-	-	0.9
		2122 十銭銅貨	2区	-	-	1.9
第19図	85	寄託資料 刀 鏝	2区	46.0	5.5	123.0
第16図	49	表探 鉛砲弾	2区	-	10.1	6.0

土器

実測No.	遺物No.	器種	出土位置	部位	口径(cm)	器高(cm)	器色	胎土	外面調整	内面調整
第24図	91	71 鉢	1区14Tr 24層	底部	不明	(29)	(外) 10YR5/1 褐灰色 (内) 10YR6/4 にぶい黄褐色	白色微砂粒 1mm 雲母 1~2mmの砂粒	回転ナデ	回転ナデ
第24図	90	72 壺か (土師器)	1区14Tr 24層	口縁部	(15.8)	(2.5)	(外) 10YR6/4 にぶい黄褐色 (内) 7.5YR5/4 にぶい褐色	赤褐色粒 石英	ナデ	ナデ
第21図	86	258 陶器碗	1区12Tr 7層	胴部 底部	不明	(2.5)	(外) 10YR6/3 にぶい黄褐色 (内) 10YR6/4 にぶい黄褐色	精密	回転ナデ後施軸	回転ナデ後施軸
第21図	87	一括 土師器環 (?)	1区12Tr 6層	底部	不明	(2.1)	(外) 10YR5/2 黄褐色 (内) 2.5Y5/3 黄褐色	精密	ナデ	ナデ後軸葉塗布
第21図	88	一括 瓦質土器 描鉢	1区12Tr 6層	胴部	不明	(4.3)	(外) 2.5Y4/1 黄灰色 (内) 2.5Y5/1 黄灰色	白色粒	ナデ	ナデ
第24図	89	一括 壺	1区15Tr 9層	胴部	不明	(3.0)	(外) 10YR5/3 にぶい黄褐色 (内) 10YR6/4 にぶい黄褐色	白色砂粒 赤褐色粒 石英	ナデ	ナデ
第26図	93	一括 壺 (土師器)	1区15Tr 18層	胴部	不明	(3.2)	(外) 10YR5/3 にぶい褐色 (内) 10YR6/4 にぶい黄褐色	石英 1mm以下 雲母 角閃石	回転ナデ	回転ナデ
第26図	94	一括 鉢 (瓦器)	1区15Tr 9層	底部	不明	(5.0)	(外) 7.5YR6/6 褐色 (内) 7.5YR6/4 にぶい褐色	雲母 2.3mmの石英多く含む	押圧	回転ナデ
第29図	95	一括 描鉢 (瓦質土器)	確認調査区 2Tr 8層	口縁部	(34.3)	(8.0)	(外) 5Y4/1 灰色 (内) 5Y4/1 灰色	精密 白色砂粒	ハケ-回転ナデ 回転ナデ後指押え	回転ナデ後ハケ
第29図	96	一括 描鉢	確認調査区 2Tr	底部	不明	(3.7)	(外) 10YR5/4 にぶい黄褐色 (内) 10YR2/1 黒色	白色砂粒 石英	ナデ	ナデ後ハケ

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	全長(mm)	径(mm)	質量(g)
第24図	92	73 キセル雁首	1区14Tr 24層	23.2	17.0	4.2

談 話

玉東町稲佐 井上タキ 91才

十年の戦争じゃ、この附近の人達は、とんだ目に逢い、本当に苦勞しました。この稲佐の部落は官軍が高瀬方面から田原坂攻撃の時の通り道であったので、この部落の民家が邪魔になるということで、夜、ひそかに梅林から稲佐に通ずる水路を通して民家に放火して引き揚げた。住民は全部寝静っていた頃で不意をつかれ、何一つ持ち出すこともできず、家財の全部は燃えてしまった。体一つで逃げるのがやっとだったと聞いています。

女は腰巻一つで逃げた人もあり、着替えなんか何一つなく非常に困った。親類の人達が見かねて着替えや、食糧を持って来てくれた。また入浴も出来ないで「シラミ」がわいてかゆくて仕方がないので「シラミ」取りが毎日の日課だった。

私の家で焼け残ったのは、仏様と木製の火鉢だけだった。仏様は逃げる時、これだけかと思ひ必死になって身につけて護ったものですが、木製の火鉢は何で持ち出したか、よくわからない、とほめていたのでしょう。

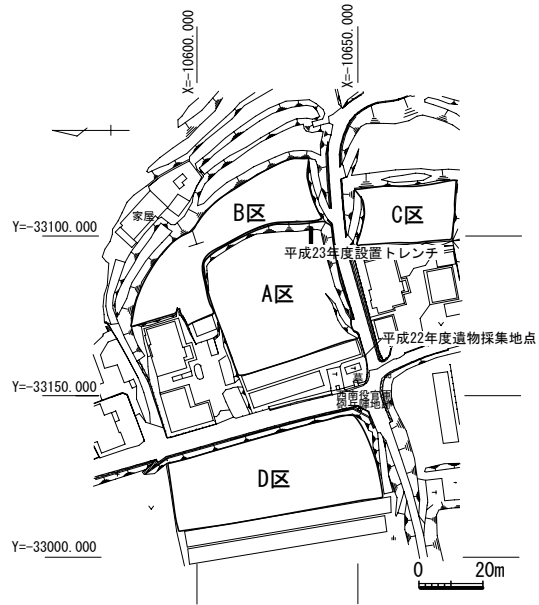
出典:玉東町編 平成7年『歴史への招待』

## 2 二侯古閑官軍砲台跡の調査

### 第1節 調査区の設定と調査の方法

**調査区** 砲台の範囲を明らかにするために第30図A～D区において金属探査を行った。A区は瓜生田の砲台跡のように平坦面になっており現在も“台場”といわれている。

**調査の方法** 調査は現地表面を精査後、金属探知機により2回遺物探査を行い、反応箇所を掘削する方法をとった。遺物は光波測距儀により座標を記録し、記録写真を撮って取り上げた。取り上げた遺物の代わりには、プラスチックで作ったレプリカを埋納している。なお、A区東端にトレンチを設定し土層の確認を行った。

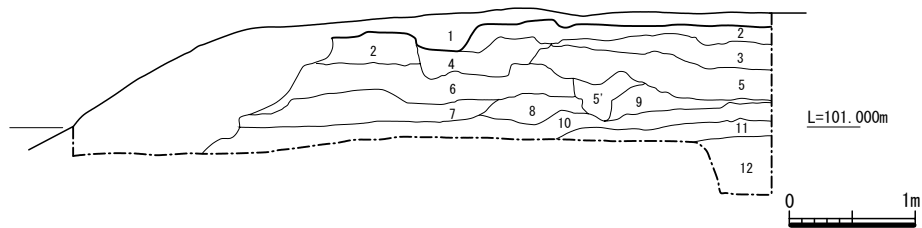


第30図 二侯古閑官軍砲台跡調査区・トレンチ配置図

### 第2節 層序

A区東側に設置したトレンチ土層断面によると、約1mにわたって耕作土が堆積しており、その下位には瓜生田地区と同じく黒色土層(Ⅲ層)が堆積していることが確認できた。当該地は現在、果樹園として利用されている。50年ほど前はタバコ畑として利用されていたようだ。前述の上野彦馬撮影の「二侯古閑台場跡」の古写真には稲の切株のようなものがみえ、以前から耕作地として利用されていた土地であったようだ。

現地表面から20cm程下位(標高約101.600m)に非常に固くする2層がある。瓜生田と同様に考えれば、ここが西南戦争時の地表面であると考えられ、それを裏付けるように、遺物は1～2層上面のレベルに集中して出土している。しかし、トレンチ内では遺物が出土していないため、確証は得られなかった。また、金属探知機は機器の探査面から20cm程度しか探知出来ないため、その性能に起因している可能性も考慮せねばならない。



- 1 10YR3/3 暗褐色土 粘質なし。5mm大の赤褐色粒、白色粒、炭化物を含む。火山ガラス含む。乾くと非常に固くなる。西南戦争時の遺物が多く出土する。
- 2 10YR3/3 暗褐色土 粘質なし。非常に固くする。0.5～1cm大の赤色粒、大小の白色粒、炭化物を多く含む。
- 3 10YR4/4 褐色土 粘質なし。やや固くする。1.2mm程度の赤色、白色粒を多く含む(上層より割合は少ない)。
- 4 10YR4/4 褐色土 粘質なし。やや固くする。1.2mm程度の赤色、白色粒を多く含む。小さなブロック状にまとまっているため、ボンボンとしている。
- 5 10YR3/4 暗褐色土 粘質なし。やや固くする。1.2cm大程度の赤色、褐色の小礫が少量混入する。
- 5' 10YR2/3 黒褐色土 やわらかく、粘質なし。
- 6 10YR3/4 暗褐色土 粘質なし。固くする。1.2mm程度のレンガ色、赤、白色粒、炭化物がまんべんなく混入する。
- 7 10YR3/4 暗褐色土 粘質なし。やや固くする。1cm大の褐色粒(小礫)、1mm大の赤色、白色粒、5mm大の炭化物が混入する。
- 8 10YR2/3 黒褐色土 粘質ややあり。しまりやや弱い。1cm大の褐色粒が少量、5mm大の炭化物が少量混入する。
- 9 10YR4/3 暗褐色土 粘質なし。しまりやや弱い。1.2mm大の赤色粒が少量混入するが、全体的に混入物少ない。
- 10 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘質あり。しまりやや弱い。2、3mm大の赤色粒、白色粒、炭化物が少量混入するが、全体的に混入物少ない。
- 11 10YR2/2 黒褐色土 粘質あり。しまりやや弱い。2、3mm大の赤色粒が少量混入する。上面は整地してあるようにフラットである。上部から土器1点出土。=瓜生田Ⅲ層
- 12 7.5YR3/4 暗褐色粘土 粘質あり。しまりやや弱い。ローム。火山ガラスを含む。無遺物。=瓜生田Ⅳ層

第31図 二侯古閑官軍砲台跡土層断面図



二俣古閑官軍砲台跡の現状



軍服釦出土状況



I字型摩擦管出土状況

### 第3節 西南戦争の遺構と遺物

#### (1) 遺構

今回の調査では、大幅な掘削による遺構面の検出作業は行っていない。しかし、古写真に見るように、現地形は西南戦争時の地形とあまり変わっておらず、土地の改変はなされていないと考えられる。つまり、当時の遺構は現地表面に近い位置に残っていると推測される。

#### (2) 遺物

調査区全体において西南戦争時の大砲の消耗品である摩擦管管部が39点、杓子形銅製品34点、小銃弾5点、スナイドル薬莖が4点出土した。その他、軍服に関する遺物や蹄鉄が出土した。西南戦争関係の遺物はA、B、D区の段違いの畑三段で出土していることから、この三段を利用した砲撃が行われたことがうかがえる。

#### 摩擦管

摩擦管はA、B、D区において出土した。引き金部分であるワイヤーループは出土せず、管部のみが出土している。その内訳は、L字型のものが25点、I字型のものが14点である。瓜生田官軍砲台跡では、L字型5点、I字型10点が出土しており、瓜生田に比べるとL字型の割合が多いのが特徴的である。L字型のものは1860年代に米英で採用されていた形式、I字型のものは同時期に蘭仏で採用されていた形式で国産化もされたようだ<sup>(1)</sup>。第33図に示すように、それぞれがまとまって集中的に出土する傾向があり、これらが元位置を保っているとすれば、集中区は砲撃の単位と考えられ大砲を何度か据え直し、砲撃方向を変えて発射したことが推測される。

#### L字型摩擦管

第34図の1(21)～15(209)はL字型摩擦管と、その部品である。L字型摩擦管の規格は径5mm、全長55mmである。瓜生田において出土したものと同様、黒い塗布物(スズメッキと思われる)が認められるものがある。1(21)、4(3)、5(131)、7(150)を見ると、黒い塗布物は比較的残っているが先端部より17mmには無い。先端部17mmはカバーをして針金を巻く部分であり、そこに着いていないということは、カバーがかけられ針金が巻かれた後に塗布されたものと思われる。15(209)はL字型の先端部



第32図 二俣古閑官軍砲台跡遺物出土状況図

カバーである。

**I字型摩擦管** 第35図16(35)～24(321)は、I字型摩擦管である。銅製で全長46mm、直径5mmの筒状になっている。先端から5mm下にくびれがあり、先端部は四俣に分かれている。一方、L字型に見られた黒い塗布物も同様に塗られている。第35図22(214)には先端部内側まで塗られた痕跡がある。先端部には木栓が詰められており、ワイヤーループが入れられていた孔があく。

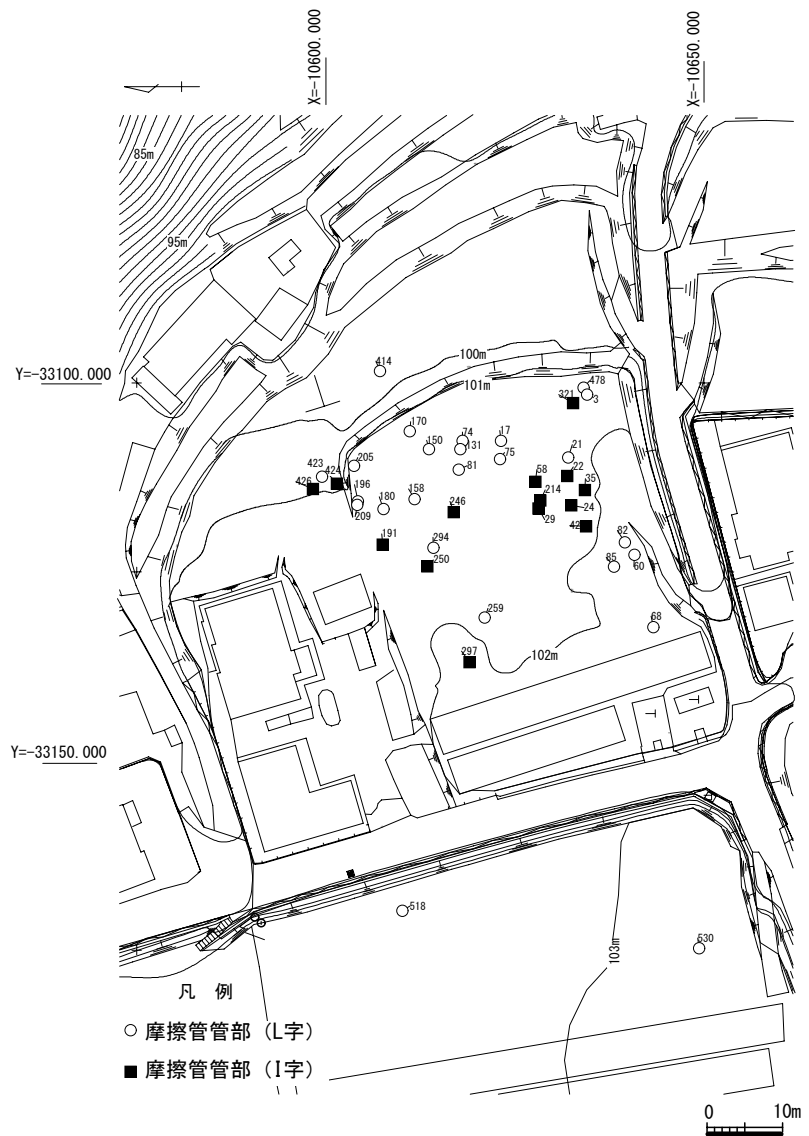
25(191)、26(424)はI字型摩擦管の類似品である。径が3mm程度と他と比べるとかなり細く、古閑では3点出土しているが、瓜生田官軍砲台跡では出土していない。

**大砲関係遺物** 27(189)はS字環である。厚さ3mmの鉄製で、大部分が欠損している。二俣瓜生田官軍砲台跡でも出土しているが、大砲を発射する際に摩擦管のワイヤーループの穴に紐を取り付ける際に使われたものである。

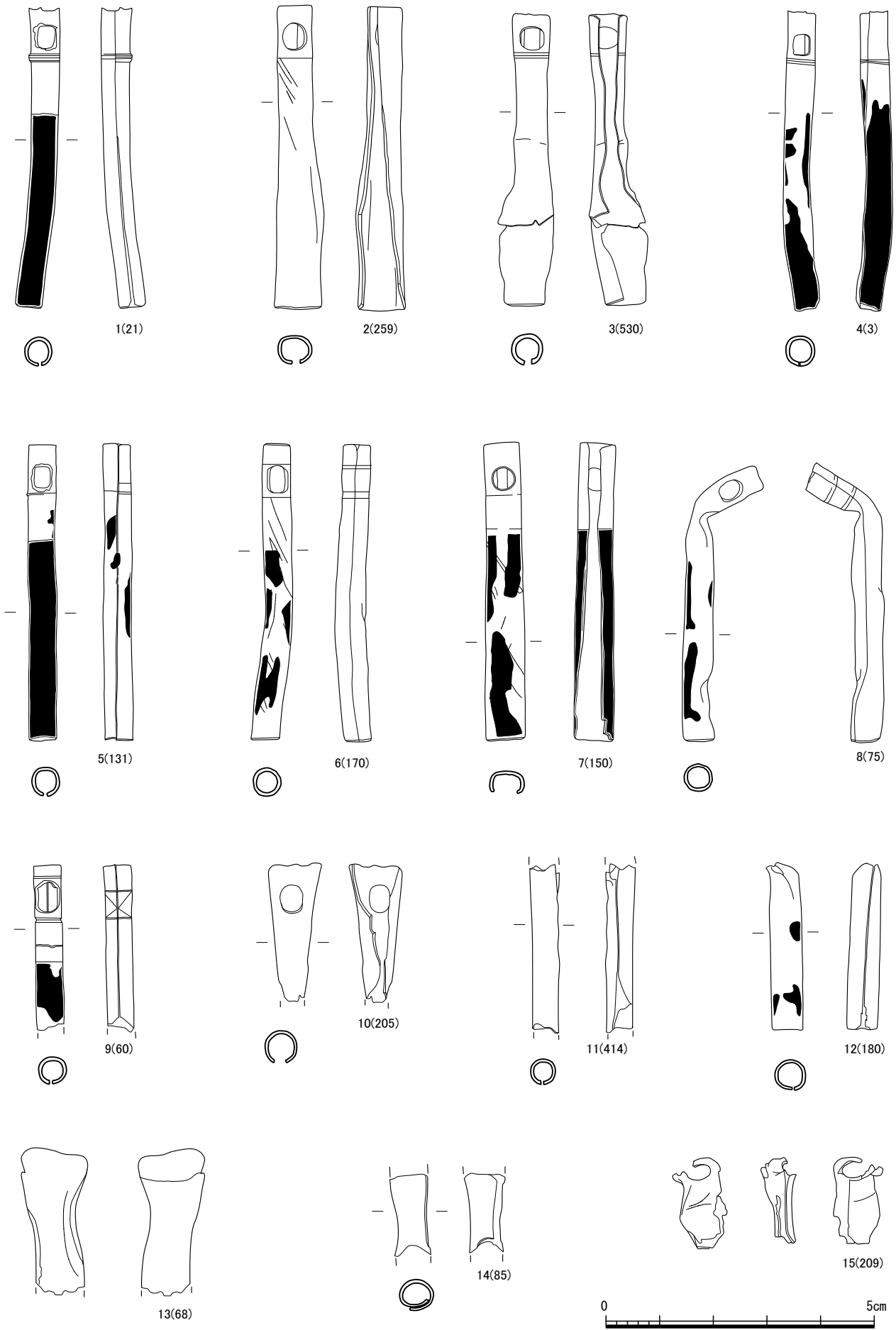
28(383)は大砲砲弾箱の割りピンである。全長32mm、幅3.5mmの銅製である。銃弾弾薬箱は消耗品であったが、砲弾弾薬箱はリユースするため、蓋が簡易に開けられるようになっていたという<sup>(2)</sup>。

**杓子形銅製品** 29(433)～35(43)は、全長22mm、先端の円形部分の径12mm、内径5mm、厚み1mmの杓子形の銅製品である。二俣瓜生田官軍砲台跡同様、摩擦管と同じ分布状況を示し、出土点数もほぼ同数である。やはり、大砲の発火に際して何らかの関係するものと思われる。

**銃弾** 調査区内からは5点の小銃弾が出土している。内訳は、スナイドル銃弾1点、エンフィールド銃弾4点である。第36図36(472)はスナイドル銃弾で、鉛製である。全長27mm、径14.5mmで胴部には等間隔に4条の圈溝が入り、施条痕が筋状に残る。弾底断面形態は先細りの円柱状でB類である。着弾によるためか先端部が少し凹んでいる。同図37(220)はエンフィールド銃弾であるが、側面が潰れて内側の形態はわからない。38(117)は全長29mm径15mmで施条痕が筋状に残り、端部が膨らんでいる。弾

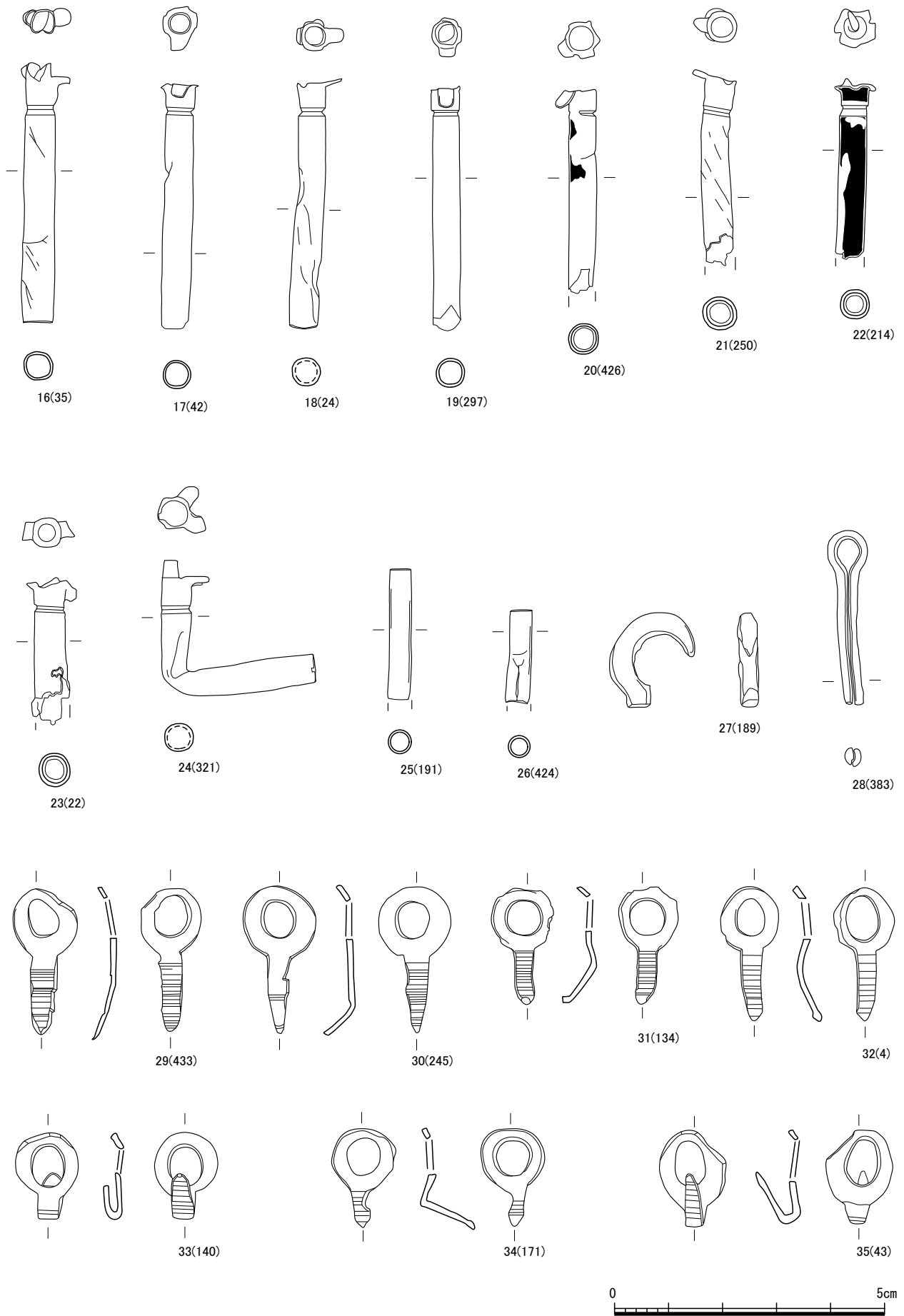


第33図 二俣古閑官軍砲台跡摩擦管種類別分布図



第34図 二俣古閑官軍砲台跡出土遺物実測図(L字型摩擦管)



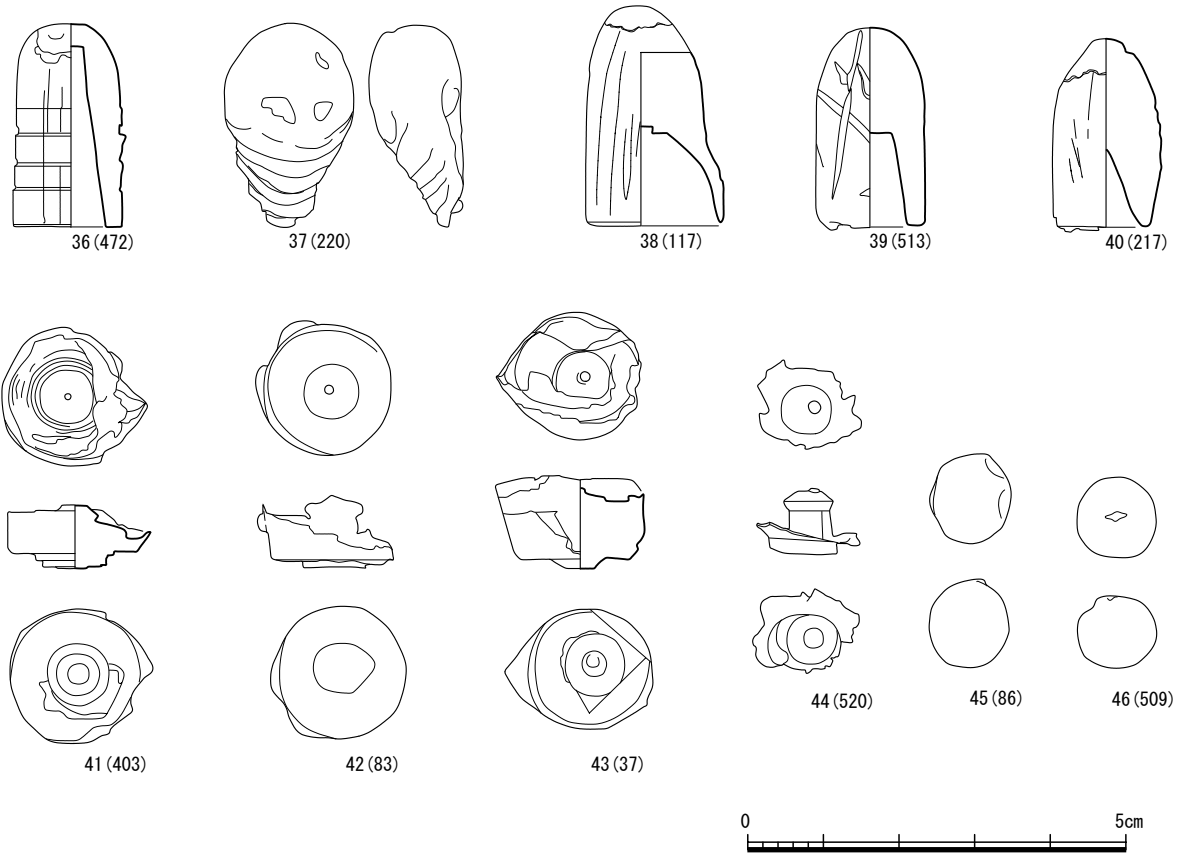


第35図 二俣古閑官軍砲台跡出土遺物実測図(1字型摩擦管等)

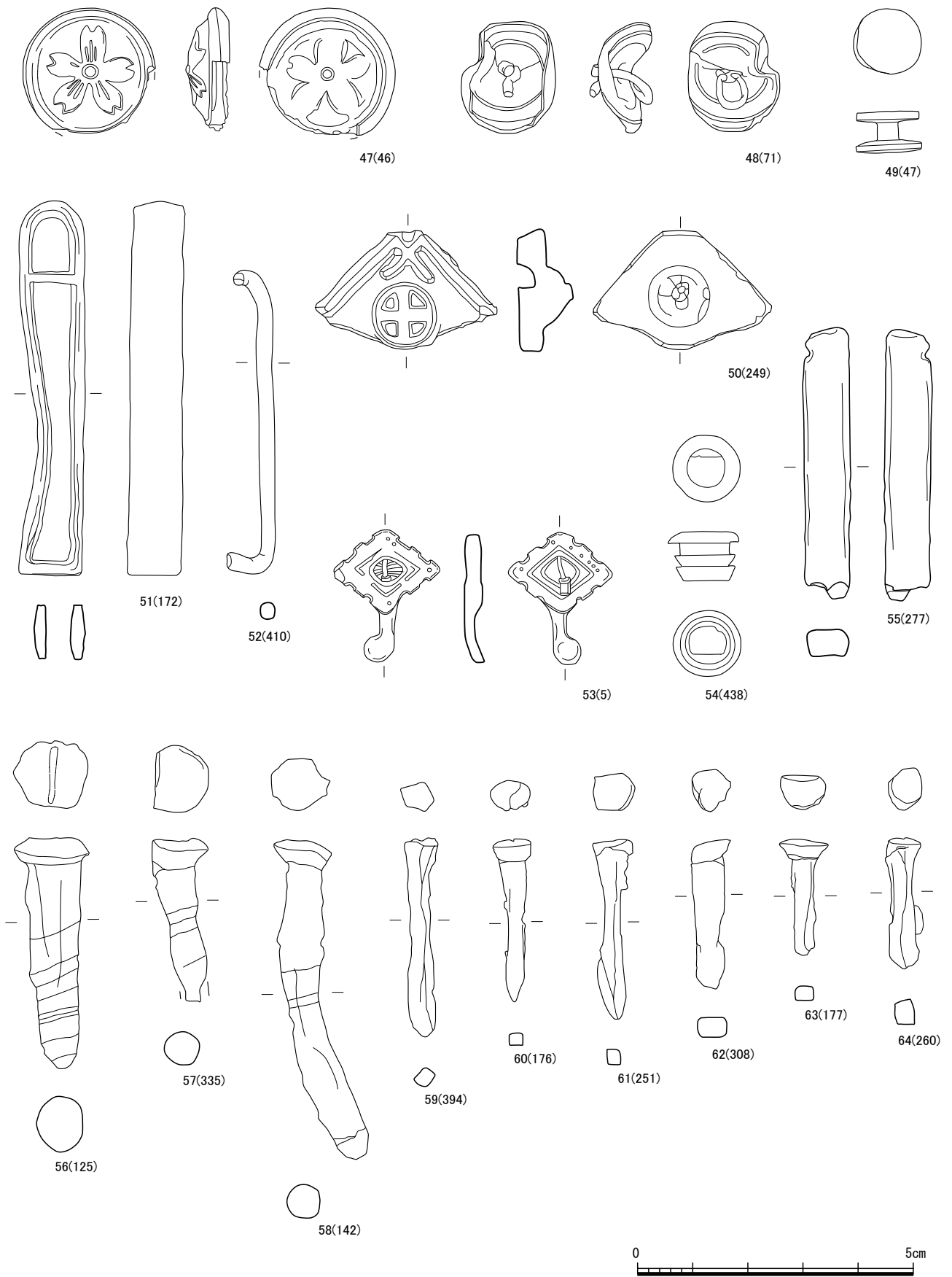
底断面形態は台形のb類である。39(513)は36よりも少し小型で全長26mm径14mmである。側面表面には切り傷のようなものが多数にはいる。弾底断面形態は台形である。40(217)は全長25mm、径14mmであり、37よりも少し小型である。筋状の施条痕がつき、先端部が潰れている。弾底断面形態は円錐状をなすa類である。

**銃弾薬莖** 第36図41(403)～43(37)はスナイドル薬莖である。いずれも底部のみしか残っておらず詳細はわからないが、雷管部分はすべて径7mmである。44(520)はスナイドル薬莖内部の雷管である。

**霰弾弾子** 第36図45(86)は鉛製、46(509)は鉄製の霰弾弾子と思われる。火縄銃弾の可能性もある。



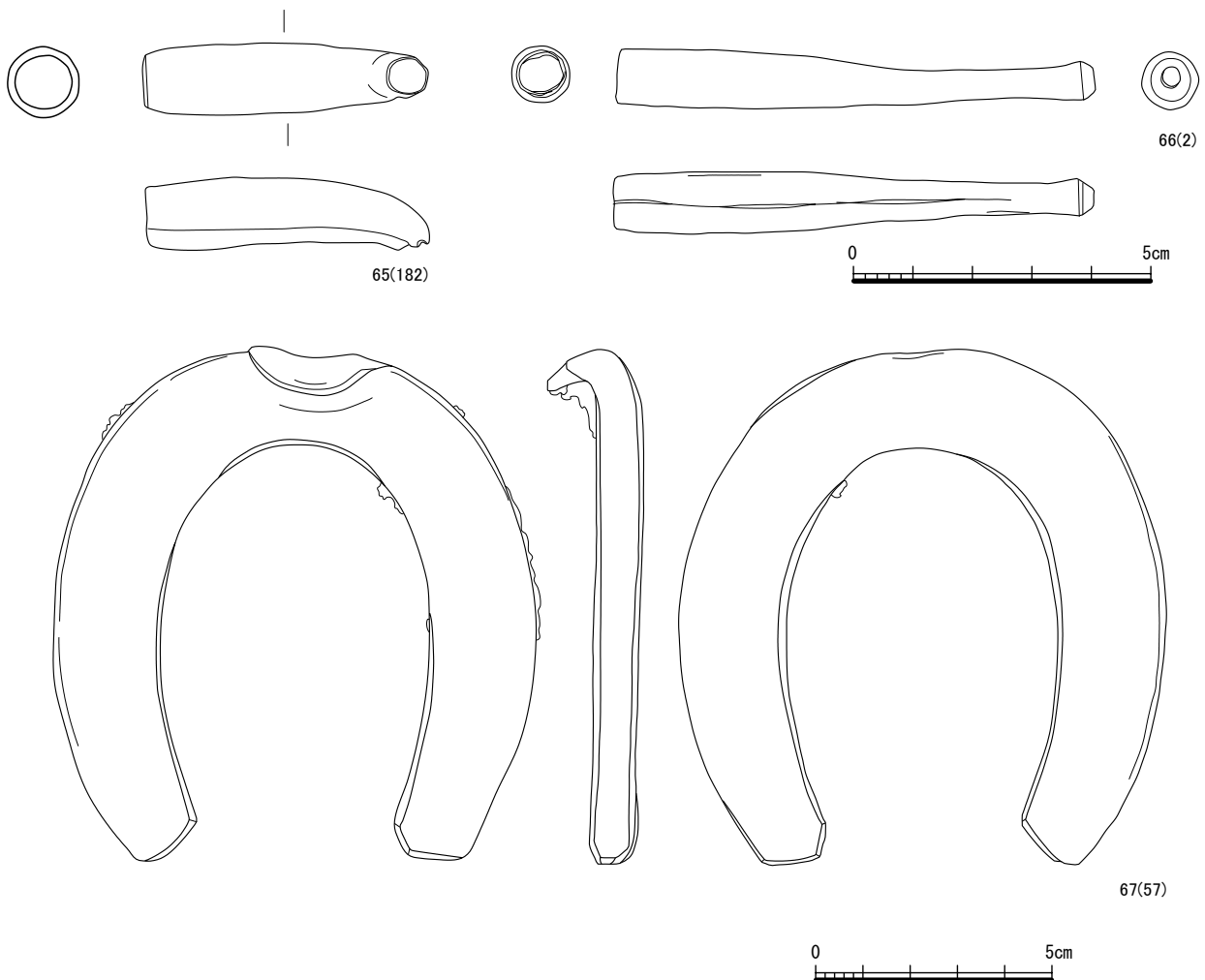
第36図 二俣古閑官軍砲台跡出土遺物実測図(銃弾関係遺物等)



第37図 二俣古閑官軍砲台跡出土遺物実測図

その他の遺物 第37図47(46)、48(71)は洋装軍服の釦の表、裏である。銅製で径22mm。表は厚み1mmの銅版に内側から型押しがしてあり、桜紋が浮き出ている。糸通しの孔には銅製針金が差しこまれ、内部で一回ひねりが加えられる。田原坂においても同規格のものが出土している。

49(47)は鼓金である。皮物を留める時に用いたもので、径12mm、厚さ7mmの銅製である。51(172)は下士卒用の帯革に通す吊り受けである。全長66mm、幅11mm、厚み10mmの真鍮製である。52(410)は銅製の針金で全長55mm、径3mmで両端がC字型に曲げられている。用途は不明である。50(249)、53(5)は銅製の装飾品と思われる。54(438)は銅製で外側はネジ山の様な形状を呈する。用途は不明である。55(277)は白銅製品と思われる。当時の食器には白銅が使われていたことからスプーンの柄ではないかと推測されている。56(125)、57(335)、58(142)は鉄製のマイナス木ネジである。頭径約10mmで弾薬箱に使用される木ネジと類似する。59(394)～64(260)は角釘と思われる。錆がひどく詳細はわからない。65(182)、66(2)は羅字キセルの吸い口である。いずれも銅製で、厚み1mm程の銅板を曲げて、丸く筒状に成形されている。67(57)は蹄鉄である。鉄製でA区西側で1点出土した。全長106mm、幅100mm、厚み7.5mmで小型の馬のものと推定される。



第38図 二俣古閑官軍砲台跡出土遺物実測図

第3表 二俣古閑官軍砲台跡出土遺物観察表

※出土位置(層位)について特に記載の無い物はI層中より出土。

摩擦管

実測No.	遺物No.	出土位置	部位	分類	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	
第34区	4	3	A区	管部	L	55.3	5.3	3.8
		17	A区	管部	L	27.8	5.0	1.4
第34区	1	21	A区	管部	L	56.1	5.3	3.1
第35区	23	22	A区	管部	I	26.9	5.5	1.4
第35区	18	24	A区	管部	I	46.1	5.3	2.9
		29	A区	管部	I	29.6	5.0	1.7
第35区	16	35	A区	管部	I	48.0	5.5	3.9
第35区	17	42	A区	管部	I	44.4	5.3	2.7
		58	A区	管部	I	29.5	5.7	1.4
第34区	9	60	A区	管部	L	30.5	5.0	1.5
第34区	13	68	A区	管部	L	26.9	11.8	1.1
		74	A区	管部	L	30.5	5.2	2.0
第34区	8	75	A区	管部	L	52.0	5.0	3.4
		81	A区	管部	L	34.1	5.1	2.1
		82	A区	管部	L	32.1	5.6	1.6
第34区	14	85	A区	管部	L	14.5	5.8	0.9
第34区	5	131	A区	管部	L	53.2	5.3	3.0
第34区	7	150	A区	管部	L	56.0	7.6	3.1
		158	A区	管部	L	24.0	7.3	1.5
第34区	6	170	A区	管部	L	56.0	5.0	3.0
第34区	12	180	A区	管部	L	32.0	5.5	1.7
第35区	25	191	A区	管部 I細型		23.6	4.0	1.2
		196	A区	管部	L	33.0	5.2	1.7
第34区	10	205	A区	管部	L	26.0	6.0	1.1
第34区	15	209	A区	管部	L	15.9	6.9	0.8
第35区	22	214	A区	管部	I	32.0	5.4	2.2
		246	A区	管部 I細型		17.3	4.0	0.3
第35区	21	250	A区	管部	I	36.0	6.0	1.8
第34区	2	259	A区	管部	L	57.0	6.0~9.0	3.3
		294	A区	管部	L	25.6	5.7	1.8
第35区	19	297	A区	管部	I	44.7	5.4	2.1
第35区	24	321	A区	管部	I	57.0	5.5	3.1
第34区	11	414	B区	管部	L	30.4	5.1	1.3
		423	B区	管部	L	27.8	5.1	1.5
第35区	26	424	B区	管部 I細型		15.2	3.9	0.2
第35区	20	426	B区	管部	I	36.9	5.5	2.1
		478	A区	管部	L	36.2	6.4	2.2
		518	D区	管部	L	31.0	6.1	1.6
第34区	3	530	D区	管部	L	54.0	7.0	3.4

杓子形銅製品

実測No.	遺物No.	出土位置	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	
第35区	32	4	A区	24.4	10.2	0.6
		13	A区	13.7	8.7	0.3
		14	A区	14.7	-	0.6
		15	A区	18.8	11.8	0.5
		16	A区	12.4	11.4	0.4
		19	A区	16.7	12.8	0.9
		20	A区	13.2	9.2	0.4
第35区	35	43	A区	17.3	12.1	0.7
		48	A区	12.4	10.1	0.3
		62	A区	14.7	13.0	0.9
		73	A区	15.7	11.6	0.6
		133	A区	12.2	-	0.2
第35区	31	134	A区	21.5	11.2	0.6
		135	A区	17.7	12.4	0.5
第35区	33	140	A区	15.9	11.2	0.7
		148	A区	24.8	11.6	0.7
		155	A区	21.8	10.5	0.6
		169	A区	10.9	9.7	0.5
第35区	34	171	A区	19.6	11.5	0.7
		175	A区	14.6	12.2	0.6
		200	A区	13.5	11.9	0.6
		213	A区	16.1	13.4	0.8
第35区	30	245	A区	27.1	13.3	0.9
		317	A区	16.5	12.9	0.9
		375	A区	20.0	11.3	0.7
		376	A区	22.7	12.9	0.9
		393	B区	21.2	12.9	0.8
第35区	29	433	B区	26.2	11.7	1.0
		440	B区	24.6	12.5	0.8
		443	B区	15.6	12.4	0.8
		448	B区	13.3	9.0	0.4
		462	B区	23.2	13.3	0.8
		474	B区	16.5	13.1	0.9
		481	B区	17.8	12.7	0.7

銃弾

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	分類	栓	潰れ方	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	備考
第36区	38	117	エンフィールド銃弾	A区	a	無	(28.4)	(17.7)	29.5	器壁が薄い
第36区	40	217	エンフィールド銃弾	A区	b	無	(24.5)	(13.0)	28.0	ブリレット
第36区	37	220	エンフィールド銃弾	B区	-	無	(26.7)	(17.4)	14.2	
第36区	36	472	スナイデル銃弾	B区	B	無	(26.7)	(14.8)	30.0	下のライン幅広い
第36区	39	513	エンフィールド銃弾	D区	b	無	(26.0)	(14.3)	31.7	

葉莢

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	a(mm)	b(mm)	c(mm)	d(mm)	e(mm)	質量(g)	備考
第36区	43	37	スナイデル銃弾	A区	(11.5)	(18.9)	-	(9.8)	6.7	5.1
第36区	42	83	スナイデル銃弾	A区	(8.7)	(17.1)	-	(6.6)	7.2	3.2
第36区	41	403	スナイデル銃弾	B区	(8.7)	(16.9)	-	(5.6)	7.3	3.1
第36区	44	520	スナイデル葉莢雷管	D区	(8.2)	-	-	-	6.9	1.6

その他の遺物

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	
第38区	66	2	キセル	A区	82.0	10.0	13.7
第37区	53	5	銅製装飾品	A区	24.0	1.9	3.1
		10	クサビ	A区	44.0	-	17.8
第37区	47	46	官軍制服ボタン	A区	23.0	24.0	1.8
第37区	49	47	鍍金	A区	6.7	11.7	2.8
第38区	67	57	蹄鉄	A区	106.0	100.0	193.6
第37区	48	71	官軍制服ボタン	A区	20.0	17.0	1.4
第36区	45	86	鉛銃弾	A区	-	11.1	5.3
		119	鉛銃弾	A区	-	9.7	4.8
第37区	56	125	木ネジ	B区	41.5	13.9	8.0
第37区	58	142	木ネジ	A区	58.0	10.7	8.0
		146	鉛銃弾	A区	-	9.8	5.2
		151	銅貨	A区	1.6	19.0	2.6
		157	白銅製品?	A区	(17.1)	16.4	12.9
第37区	51	172	吊り受け	A区	67.0	12.0	21.0
第37区	60	176	角釘	A区	29.5	4.7	1.2
第37区	63	177	角釘	A区	21.0	5.0	1.5
		181	銅貨	A区	1.4	22.5	3.2
第38区	65	182	キセル	A区	48.0	12.0	9.1
第35区	27	189	S字環	A区	-	-	1.3
第37区	50	249	銅製装飾品	A区	33.0	22.0	10.1

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	
第37区	61	251	角釘	A区	33.5	5.2	2.2
第37区	64	260	角釘	A区	24.0	4.0	2.0
第37区	55	277	スプーンの柄	A区	49.0	8.0	9.2
第37区	62	308	角釘	A区	27.0	5.0	2.4
		311	ベルト金具	A区	-	-	10.5
		314	用途不明銅製品	A区	21.1	5.3	1.7
		327	鉛銃弾	A区	-	12.4	3.9
第37区	57	335	木ネジ	A区	29.8	9.7	3.9
第35区	28	383	割りピン	A区	39.0	9.0	3.8
第37区	59	394	角釘	B区	36.0	4.3	2.2
第37区	52	410	銅針金	B区	53.7	-	2.6
第37区	54	438	ネジの様な部品	B区	9.0	12.0	1.7
		502	鉛銃弾	D区	-	10.8	6.2
		508	銅版	D区	-	-	0.3
第36区	46	509	鉄銃弾	D区	-	10.3	5.9
		510	金属板	D区	-	-	8.3
		523	銅板	D区	32.0	-	3.9
		534	鍍金	D区	-	-	1.8
		537	銅板	D区	67.7	-	16.7
		541	銅貨	D区	-	22.2	2.9

### 3 官軍本営出張所跡の調査

#### 第1節 調査区の設定と調査の方法

官軍本営出張所跡伝承地には屋敷等の遺構は残っていない。昭和18年建立の石碑には田尻政光、松永庄七らの屋敷が官軍の本営出張所として使われていたと刻まれる。また、その屋敷跡中央部には砲台も築かれたようだ。ここでは金属製の廃棄物が多く、金属探知機による関係遺物の探査は不可能であったため、周辺の踏査により遺物の回収を行った。また、屋敷周辺の石垣等の実測・検証を行った。

調査にあたっては高瀬哲郎氏に御指導をいただいた。その際に、屋敷跡南東端に残された石積みが幕末から明治時代初期にかけて造られた構造物であるという指摘があったため、厚く堆積していた現代の廃棄物を除去し、石積み及び床面の検出を行った。

#### 第2節 遺構と遺物

##### (1) 遺構

屋敷跡の周囲にめぐらされた石垣の実測を行った。また、屋敷跡の南東端を削って造られた半地下式の遺構を検出した。

##### (i) 屋敷跡の石垣

東側斜面を削って作られた道に対する土留めとしての石垣(図A-A'以下石垣A)、南側を通る道に対する土留めとしての石垣(図C-C'以下石垣C)が確認された。石垣Aは安山岩の柱状の切り石を3~4段に積み上げたものである。また、石垣Bは安山岩の自然石や軽石をランダムに積んだものである。いずれも専門的な技術をもって造られたものとはいえないもので、構築された時期は特定できない。

##### (ii) 半地下状遺構(石蔵跡)

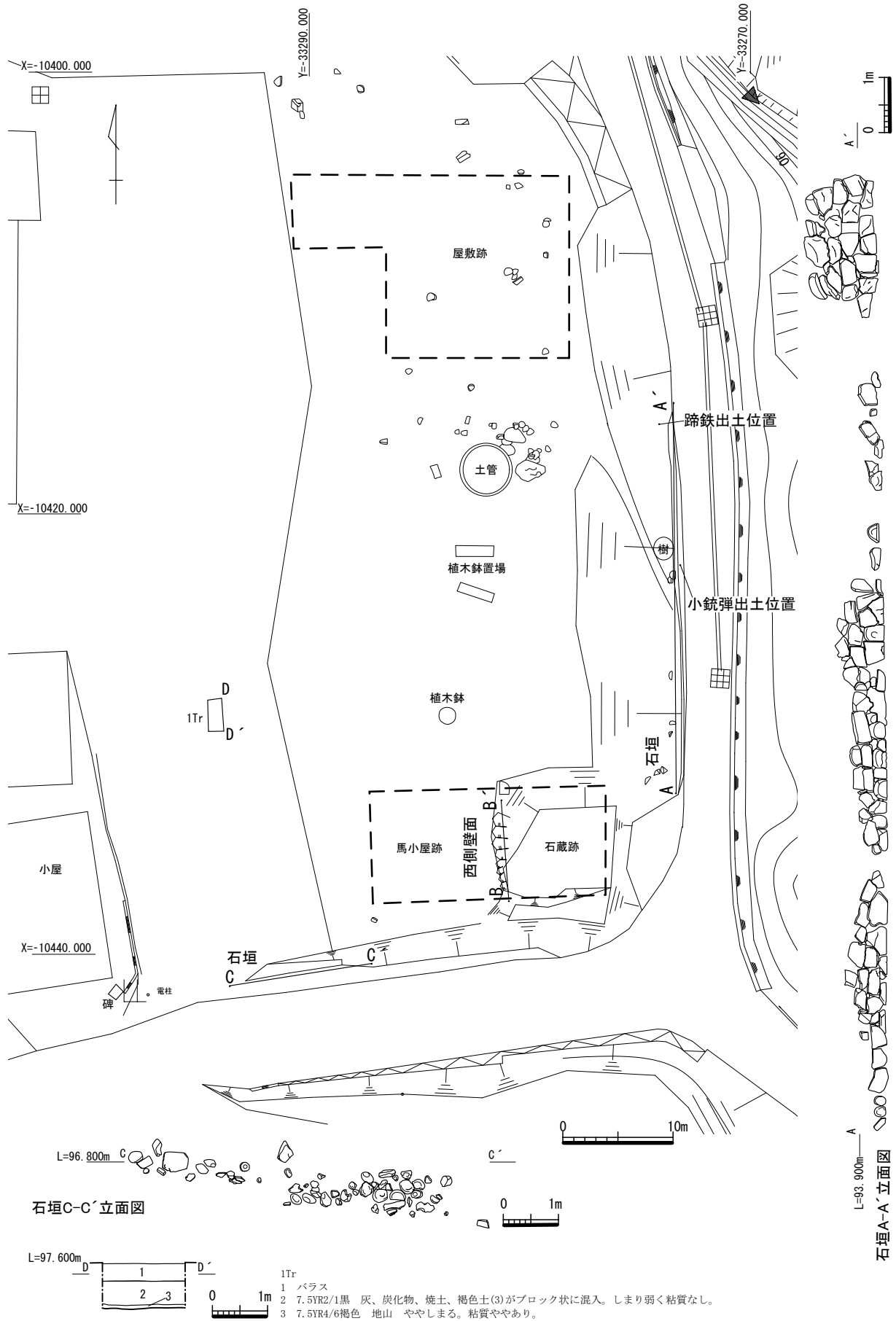
##### 構造

屋敷跡の南東端において、東側の崖部と南側の道部分を利用した半地下式の遺構を検出した。平面形態は5m四方、地下に2m程掘り込んだものであり、東側に開口する。遺構の西側壁面には削り取った土壁を補強する石積みの壁が形成されている。また、北側土壁面にもその痕跡が見られる。南側壁面には石垣Cと同様の石積みが見られ、東側壁面はすでに無いが、地域の人の話では60年ほど前までは石の壁があったという。つまり、この半地下式の遺構はかつては石室のような構造物であったと考えられる。床面直上まで現代の廃棄物が堆積しており、比較的最近(火災によるものか)埋められたものようだ。廃棄物を除去すると、床面に漆喰で造られたような白色の三和土<sup>たたき</sup>が検出された。

##### 西側壁面

西側の壁面はすべて凝灰岩の切石からなる。全長180cm×幅31cm×奥行31cmの直方体の石柱二本が15cm程度の厚みの礎石の上に建てられており、南北に並ぶ。その間隔は360cmで、間を埋めるように30cm(縦)×40cm(横)×30cm(奥行)程の直方体の切石が布積みされている。これらは、石柱がほぼ直立しているのに対し、西側に83度の勾配をもつ。南側石柱の右側面には85度の角度で勾配線が刻まれており、築造時の勾配より若干西側に倒れていることがわかる。

南側石柱よりさらに南には50cm(縦)×50cm(横)の正方形の切石が三つ垂直方向に積み重ねられており、それを挟んで全長120cmの石柱が直立している。北側石柱の北側の壁には石が積み重ねられていた痕跡は無く、地山となっている。どの石も隙間無く積み重ねられている。



第39図 二俣官軍本営出張所跡遺構配置図

南北側壁面 北側壁面傍には崩落した切石が散乱しており、従来は石壁があったと考えられる。石材は全て凝灰岩製であり、直方体の切石には各所に幅10cm程の矢穴が残っている。

南側壁面は、石垣Cのように安山岩の自然石や軽石等種々雑多なものがランダムに積み上げられており、西側壁面に見る石積みとは性質の異なるものようだ。背面は土壁となっている。

床面 石柱の下に敷かれる礎石は元来4箇所あったと考えられ、今回の調査では南西側と南東側のもの2箇所を検出した。礎石の間隔より平面プランは2間×2間であることがわかった。床面には礎石の内側に方形の三和土<sup>たたき</sup>が形成されている。三和土はピンポールを刺してみると約10cmの厚みをもっていることが確認された。

石蔵の用途 遺構の上屋は検出していないが、廃棄物の中には棧瓦が大量に混入していた。火事後に母屋の屋根材が捨てられたものかもしれないが、この石蔵の屋根瓦とも考えられる。ここは60年程前には、馬小屋として利用がなされていたようであり、現在70代である地権者の祖父はここを「ひょうろう」と呼んでいたそうだ。高瀬氏は石積みに使われた技術が江戸幕末期～明治前期の石工のものであるとし、当該地においてこのように頑丈な石造の蔵のようなものが造られる理由も考えられないことから、西南戦争時に造られた弾薬庫ではないかと指摘する。時期や用途を決定する遺物が出土していないことからあくまで推定の域を出ないが文献史料等で追加調査をしていきたい。



半地下状遺構近景

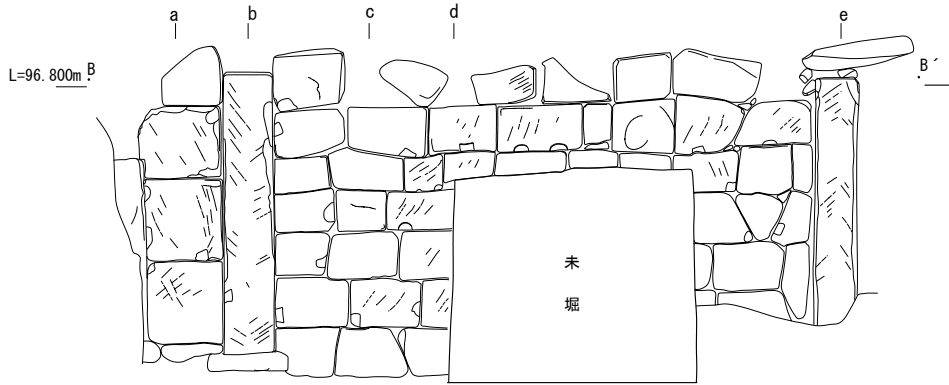


半地下状遺構

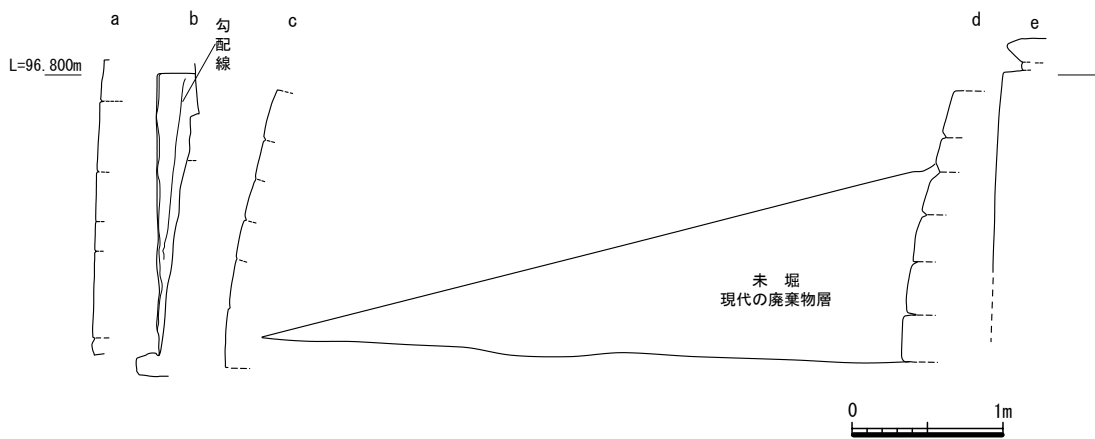


西側壁面の石積(南半分)

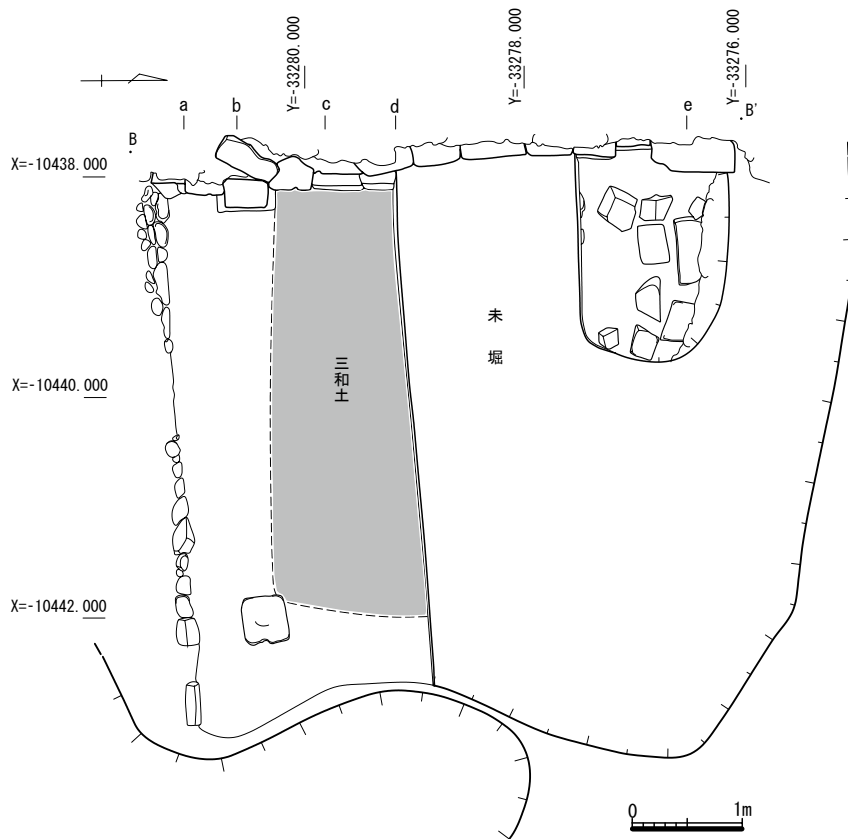




第40図 二俣官軍本営出張所跡石蔵跡西側壁面立面図(B-B')



第41図 二俣官軍本営出張所跡石蔵跡西側壁面断面図

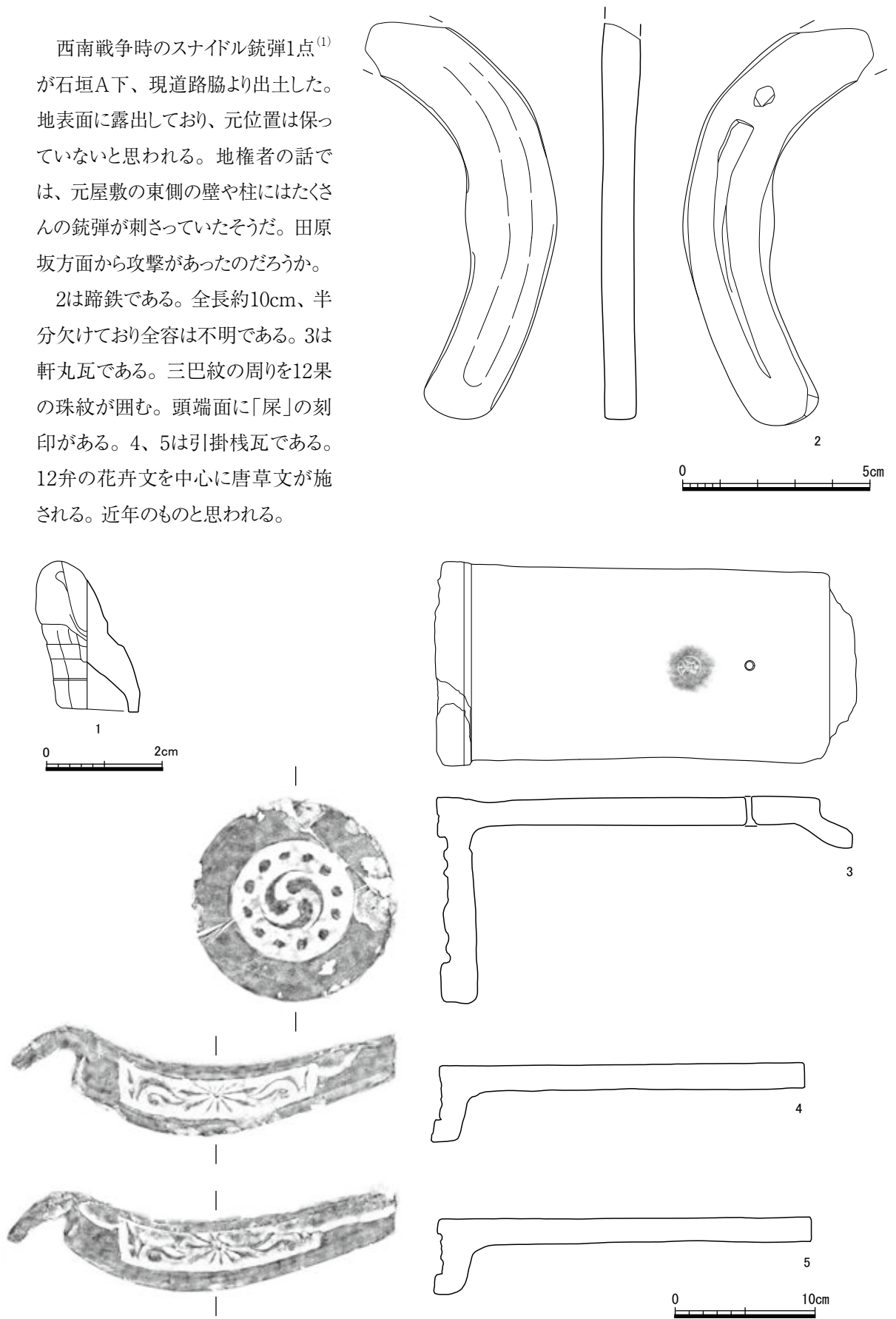


第42図 二俣官軍本営出張所跡石蔵跡平面図

(2) 遺物

西南戦争時のスナイデル銃弾1点<sup>(1)</sup>が石垣A下、現道路脇より出土した。地表面に露出しており、元位置は保っていないと思われる。地権者の話では、元屋敷の東側の壁や柱にはたくさんの銃弾が刺さっていたそうだ。田原坂方面から攻撃があったのだろうか。

2は蹄鉄である。全長約10cm、半分欠けており全容は不明である。3は軒丸瓦である。三巴紋の周りを12果の珠紋が囲む。頭端面に「屎」の刻印がある。4、5は引掛棧瓦である。12弁の花弁文を中心に唐草文が施される。近年のものと思われる。



第43図 二俣官軍本営出張所跡表面採集遺物

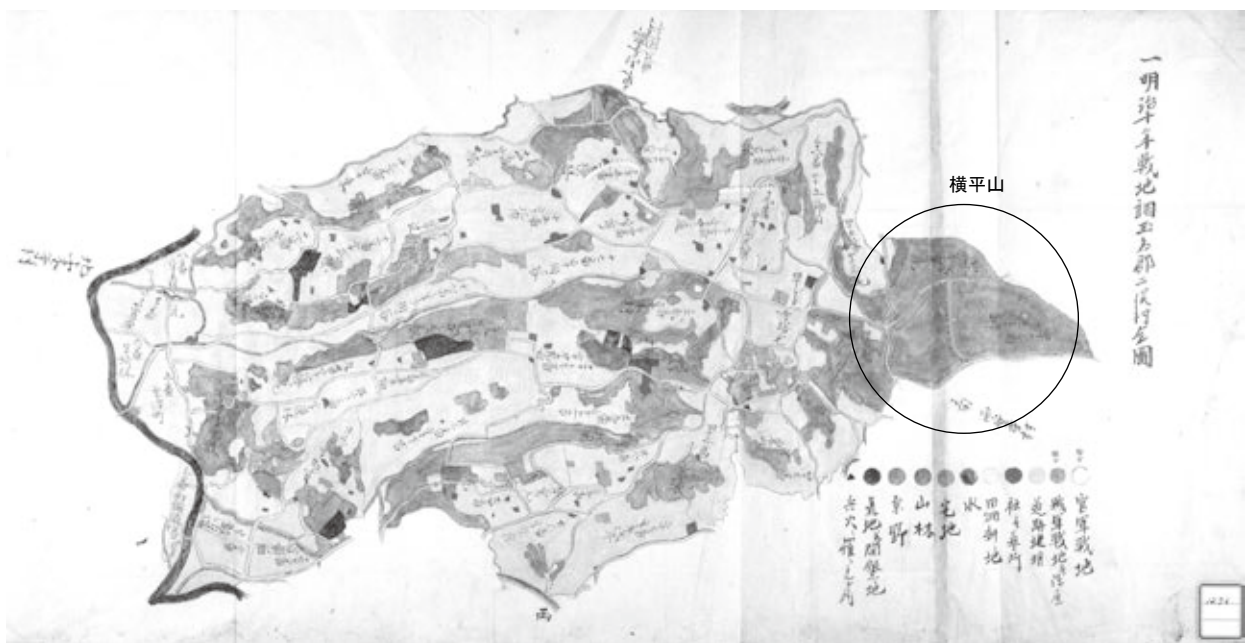
## 第IV章 横平山戦跡の調査

### 第1節 遺跡の位置と環境

横平山戦跡は、二俣台地の南端にあたる標高144mの小高い山である。玉東町二俣字峠に所在する。二俣官軍本営出張、二俣古閑官軍砲台、激戦地五郎山の南に位置し、薩軍本営の木留に通じる道が山の東脇を通る。横平山の北側斜面は急であり、南側は緩やかに半高山方面へと続く。この横平山から半高山へと連綿と続く尾根上に薩軍の陣地が築かれ、田原坂を中心に布陣する薩軍の左翼をなしたといわれている。現在、山頂に立ってみると、北側には二俣台地や田原坂、遠くは山鹿方面まで見渡すことができる。高みにおいて戦況を見るには絶好の地であっただろう。『征西戦記稿』にはその地形を「夫れ横平山の勢たるや脈を三岳に発し、吉次・半高の諸山より蜿蜒起伏して此に至り、陡然として止まり忽ち射探状を成し、支脈を左右に張り、一は白木に跨がり、一は田原坂の左に連なり、而して二俣村の左に峙つ、即ち田原坂官軍守戦の背なり。我もし之を失へば、<sup>ただ</sup>菅に田原坂十数日の戦勞を空しふするのみならず、二俣の諸壘も亦保つべからず。実に枢要の地となす」と表現している。両軍にとって要衝の地であったことは言うまでもない。

### 第2節 横平山における戦況

諸文献資料によると、主な戦闘は3月9日から3月15日まで行われている。3月11日に官軍が横平山の薩軍壘2壘を奪うが、3月15日の明け方に再び300名の薩軍兵の攻撃にあい壘を奪い返される。薩軍は橋口隊、酒匂隊、河野隊、萩原隊が横平山に集結し、高みに拠って激射し、両軍激戦となった。官軍は近衛一中隊、第十一連隊の二中隊、警視局抜刀隊30名で対戦し、その後迫田大尉率いる第一連隊第二中隊、第八連隊の一中隊、第十四連隊の二中隊が集結した。鎮台兵は銃創し、抜刀隊と共に左右翼より一斉突撃。午後1時には薩軍壘2壘を奪還した。その後抜刀隊50名が加わり、午後4時には官軍の占領下となったという。



第44図 「二俣村両軍配置並罹災区域図」明治16年作成(熊本県立図書館所蔵)

第44図「二俣村両軍配置並罹災区域図」には、横平山に東西に山を横断する長い塹壕が記され、横平山全体が陣地となっている様子がうかがい知れる。実際、土地の人の話では数十年前までは、深さ1m程度の塹壕が横平山を東西に横断するようであったという。また、聞き取り調査では当時、山の木は伐採され、枝葉の部分を山麓に向けて敵兵の侵入を防いでいた(鹿柴<sup>ろくさい</sup>)という。また、横平山の戦いでは官軍側の警視抜刀隊が投入された。刀の刃がぶつかり合い、まるで稲光のようであったという話も残っている。

### 第3節 調査区の設定と調査の方法

平成21年度第1次調査では、土地の状態が当時と変わっていないと思われる山の北斜面全体約8,680mを対象とした遺物探査を行った。山は風倒木や下草に覆われていたため、これらをすべて除去し、全面的に金属探知機による探査を2回ほど行った。また、反応箇所を掘削し遺物の検出を行った。銃弾に関しては入射角等出土状況の詳細な記録をとり、光波測距儀より座標を記録した後、取り上げた。遺跡の保存という観点から平成23年第2回の調査検討委員会で遺物取り上げについて検討がなされ、取り上げた遺物の代わりにレプリカを埋納することが決定した。銃弾レプリカは弾を象った土器にナンバーを記したものを利用した。その他の遺物はプラスチック剤を遺物に類似させて固めたものを埋納した。



金属探査の様子



遺物レプリカ

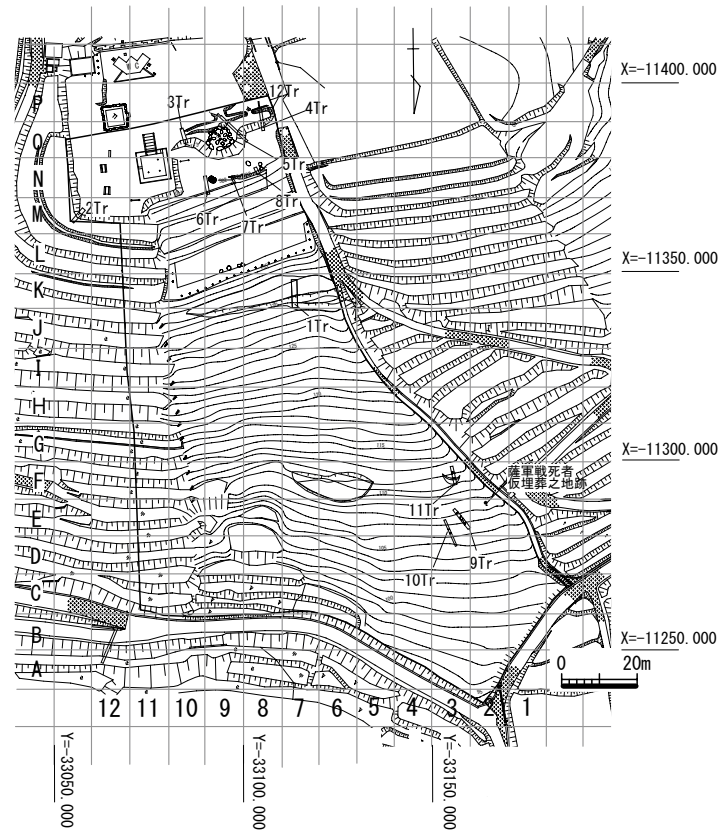
トレンチ設定 遺物探査の結果、遺物の集中する場所や塹壕等遺構の存在が想定される場所に13箇所のトレンチを設定した。トレンチの配置図グリッド区割図は第45図に示す。

1Trは薬莖等遺物の集中がみられる場所に設けた。ここでは掘り込み等の遺構は検出することが出来なかったが、当時の地表面がほぼそのままの形で残されていることが確認できた。また、2、6～8Trは山頂の平坦部の北縁に設け、塹壕等の遺構の確認を行った。2Tr、8Trからは何も検出することができなかったが、6、7Trにおいて土坑のような遺構を検出した。3～5、12Trは現存する山頂部塹壕跡の残存状況を確認するために設け、4、5、12Trにおいて西南戦争時の塹壕跡の形状を確認することができた。また、塹壕の前面には稲藁や竹を編んで作られた包ランが置かれるケースが多いことから、5Tr塹壕土層断面において土壌のサンプリングをし、分析を行った。サンプリング箇所については山頂塹壕跡の5Tr断面図に示した。結果については後述する。

山腹の仮埋葬地の確認のため、9Trを設け、遺物、土層の確認を行った。

平成23年度には仮埋葬地付近の9Trを再度発掘し、詳細な土層の観察を行った。また、9Trの土坑の広がりを確認するために西側に拡張し、10Trを改めて設けた。

その他、11Trの南西側に平坦部が見られたため、1Tr同様遺構の確認を行った。



第45図 横平山戦跡トレンチ配置図・グリッド区割図

#### 第4節 層序

山頂部分は公園開発による造成のためか、2、3cmの暗褐色土の1層の下層は赤褐色ローム層で10cm大～の大きな礫を含む地山となる。また、山腹においては、10cm程度腐葉土の堆積はあるが、その下の黒褐色土の直下は地山である。丘陵地であるため土砂の堆積は少ないようだ。『征西戦記稿』には「満山皆磊砢砂土なし、胸壁を築く能はず」とある。横平山は山全体が阿蘇火砕流の砂礫層でなっており、塹壕を穿つことも容易でなく胸壁をつくる土砂も少ないことが記されており、当時も現在と同じような状況であったと思われる。

#### 第5節 西南戦争の遺構と遺物

##### (1) 遺構

##### (i) 山頂部塹壕跡

横平山山頂部には塹壕跡といわれる浅い溝が残っている。これについての検証と、その他山頂部における遺構の残存状況について確認する為2～8、12Trを設定した。

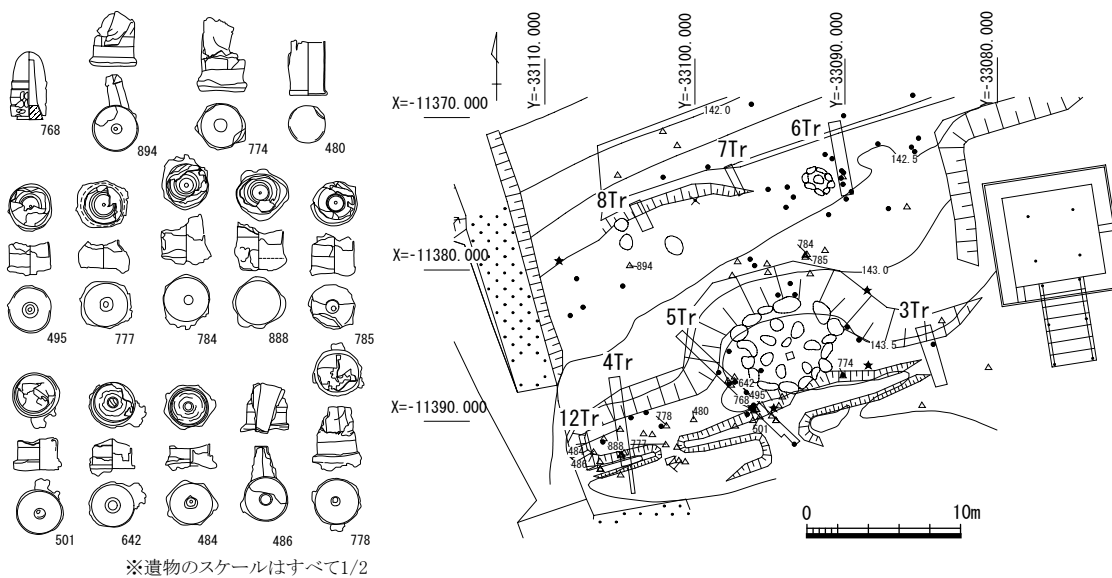
山頂部塹壕跡に直行するように3～5Trを設定し、山頂から北側を下る場所に2、6～8Trを設定したところ、塹壕跡からは、地山を掘りこんだ溝(SD01)を検出し、6、7Trにて土坑SK01、02を検出した。



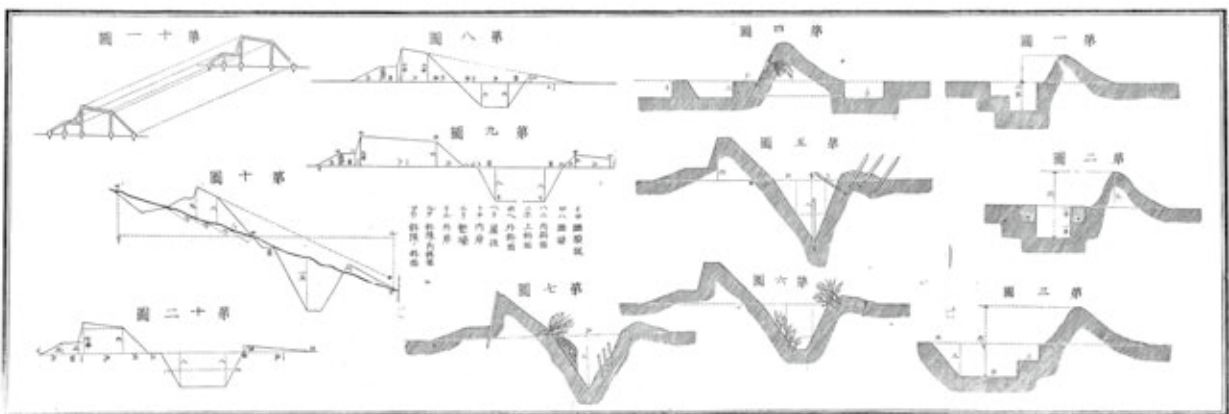
山頂部に残る塹壕跡

SD01 塹壕西半分にあたる4、5、12Trでは溝(SD01)を検出し、本来の塹壕の形状を確認することができた(第48図)。SD01は東西方向に伸びる深さ約80cm、幅1mの溝で、北側が高く、南側が低い。SD01の北側面には山麓から上がってくる敵兵を想定した遮蔽物(胸壁)が山の斜面を利用して造られ、それに取り付くように一段ステップが設けられている。遺構覆土であるSD01-9層からは葉莢胴部の破片が出土しており、SD01-9層は戦闘後間もなく堆積したものと推測される。またSD01-10層は、現代の廃棄物が混入し最近堆積したものだろう。事実、50年ほど前までは今よりも溝の深さは深かったという。一方、塹壕跡東側3Trでは、前述のようなはっきりとした遺構断面は確認できなかった。山頂部は平成6年の公園造成の際に若干削平をうけているようで、塹壕も一部が壊されているものと思われる。

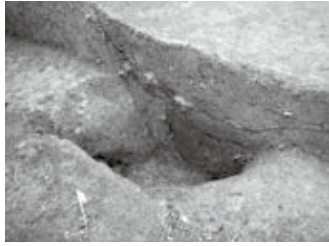
従来この塹壕遺構は東西方向に長く伸びるもので「西南之役戦地調添図・二俣村」の「字峠」に東西方向に長く伸びる陣地と推定できる。同図には、字峠の陣地は「賊軍戦地并陣屋」との記載がある。



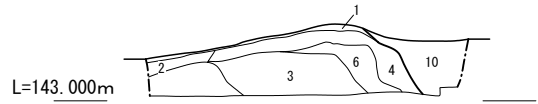
第46図 横平山戦跡山頂部遺物出土状況



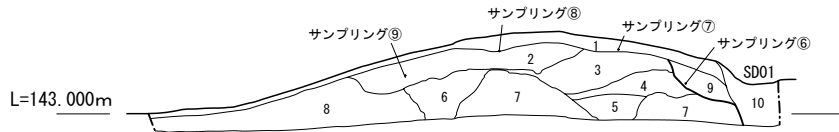
第47図 「斯氏築城典刑卷之二」



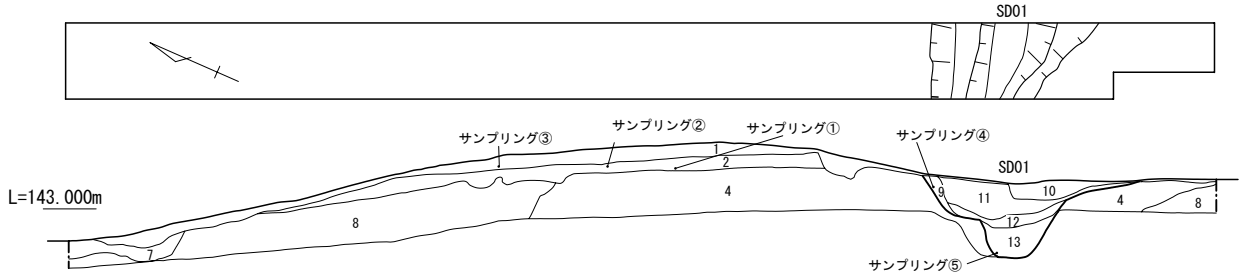
5Tr1 土層断面



3Tr東壁断面図



4Tr東壁土層断面図

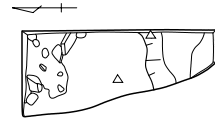


5Tr東壁土層断面・平面図



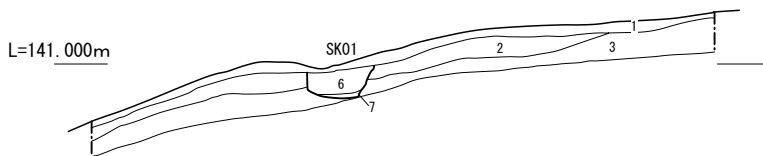
- 1 7.5YR4/6褐色粘質ローム。固くしまる。1、2mmの炭化物を少量含む。
- 2 7.5YR3/4暗褐色粘質土。固くしまる。1、2mmの炭化物を少量含む。ボンボンしており間隙が入る。
- 3 5YR3/6明赤褐色ローム。固くしまる。粘質はあまりない。5cm大の白色粒を含む。微細なガラス粒子を含む。
- 4 5YR4/8赤褐色粘質ローム。しまりやや強い。5mm程度の塊になってボロボロと崩れやすい。白色粒2mm大を含む。
- 5 2.5YR4/8赤褐色粘質ローム。しまりやや強い。1cm～5cm大の白色粒を含む。ボンボンと間隙が入る。
- 6 5YR4/6褐色粘質ローム。しまりやや弱い。5cmの礫を大量に含む。
- 7 10YR5/3にぶい黄褐色粘質ローム。白色粒、礫を含む。柔らかい。
- 8 5YR4/6赤褐色粘質ローム。しまりやや弱い。5～10cm大の礫を多量に含む。
- 9 5YR4/3 にぶい赤褐色粘質ローム。しまりやや弱い。1mm大の白色粒、微細なガラス粒子を多く含む。遺物含む。
- 10 7.5YR3/4 暗褐色粘質土。しまり弱く、現代の廃棄物を多く含む (SD1-1層)
- 11 5YR3/6極暗褐色粘質土。しまりやや弱い。ボンボンしており間隙が入る。廃棄物が混じる。(SD1-1層)
- 12 5YR4/4にぶい赤褐色粘質土。固くしまる。1.2mmの炭化物や石英の粒を含む。
- 13 5YR4/4にぶい赤褐色粘質土。しまりやや弱い。白色粒、炭化物を含む。地山7層のブロック小礫がまれに混じる。

※サンプリング試料は、植物珪酸体分析に用いた(98頁参照)

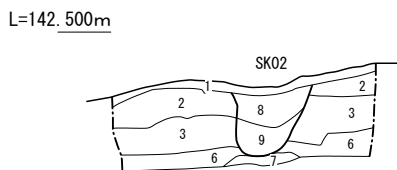


12Tr東壁土層断面・平面図

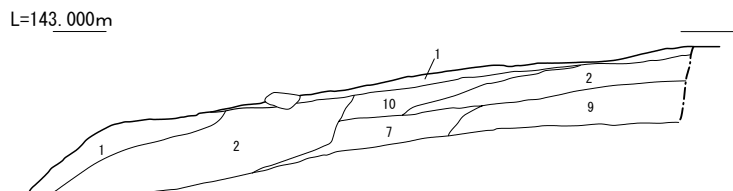
第48図 横平山戦跡山頂塹壕土層断面図



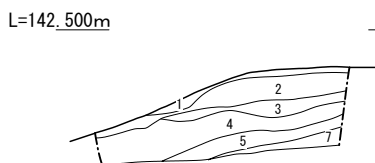
6Tr東壁土層断面図



7Tr東壁土層断面図



2Tr土層断面図



8Tr東壁土層断面図

- 1 7.5YR4/6褐色粘質ローム。固くしまる。1、2mmの炭化物を少量含む。
- 2 5YR3/6 赤褐色粘質ローム。しまりあり。2cm大のにぶい橙色のブロック、炭化物、白色粒多量に含む。
- 3 7.5YR4/6 褐色ローム。粘質しまりややあり 炭化物、微細なガラス粒含む。10cm大の礫少量含む。
- 4 7.5YR5/6 明褐色粘質土。非常に固くしまる。2mm大の白色砂粒や1cm大の白色礫を多く含む。
- 5 7.5YR6/4 にぶい橙粗砂層。しまる。客土。
- 6 7.5YR3/4 暗褐色粘質ローム。しまりあり、1cm大の炭化物含む。
- 7 7.5YR4/4 褐色粘質ローム。しまりあり、粘質が非常に強い。
- 8 5YR4/6 赤褐色粘質土。1の土を含む 固くしまる。
- 9 7.5YR3/3 暗褐色粘質土。ややしまり、2cm大の小礫少量含む。

第49図 横平山戦跡山頂トレンチ土層断面図

また、当時の兵法教本「斯氏築城典刑巻之二」の急造塹壕第三図の図面とその断面形態が類似しており、胸壁が北側を向くことから山麓から登ってくる敵(官軍を推定)に対して造られた薩軍の陣地であると考えられる。

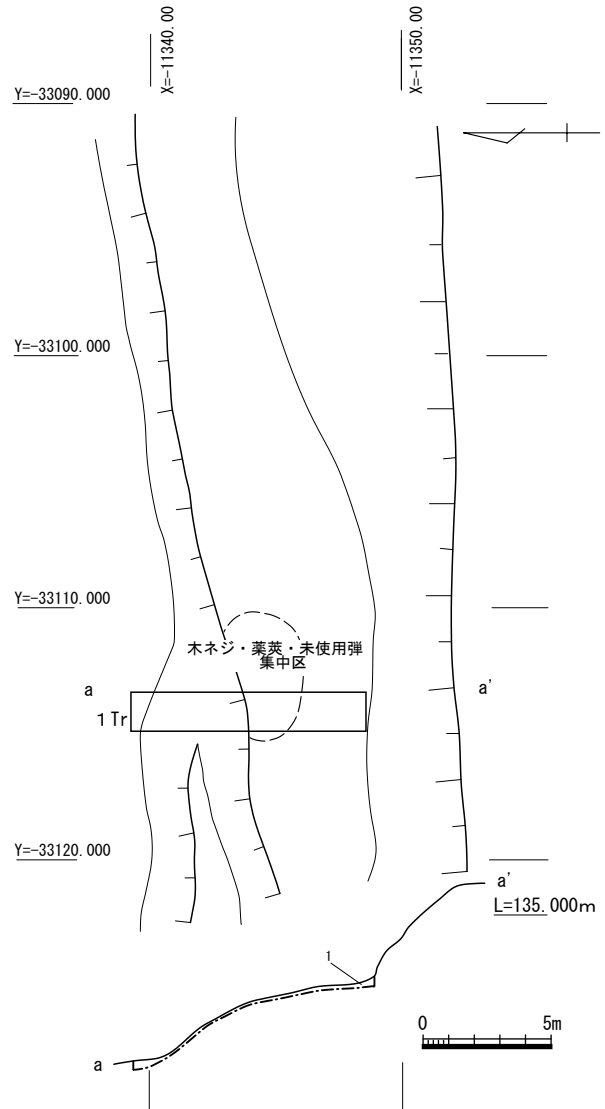
SK01、02 山頂部では平坦面の北端7、8Trにおいて2つの土坑を検出した。幅50cm、深さ50cm程度の規模のもので、覆土は固くしまっており、地山の土を掘ってすぐ埋めたような印象を受ける。遺物が出土していないこともあり、用途は不明である。

(ii)陣地遺構1

前述したように横平山北側斜面の傾斜は急であるが、テラス状の平坦面が数カ所確認された。その内、薬莖の集中出土地点は陣地跡の可能性が考えられるため、図化・堆積物の確認を行った。

山頂から北側に14m下った標高130mの山腹には、幅10m長さ30mほどのテラス状の平坦面がある。ここには、第51図のようにスナイドル薬莖、木ネジ、未使用のスナイドル銃弾、小銃工具が集中出土している。これらの遺物は主に平場の北縁に集中しており、何らかの遺構があったことが予測されたため、集中区に対して1Tr設定した。しかし、掘り込み等遺構は確認できなかった。

ここで注目されるのは木ネジの集中出土である。木ネジは鉄製の鑄造品であり、検出された時点で腐食でボロボロの状態であった。頭部の計は1cmであり、マイナスの刻み目がある。長さは約5cm程度であり、幾重にも螺旋が刻まれている。伝世品の弾薬箱には同様のマイナス木ネジが使われていることから、これらは弾薬箱の付属品と考えられる。弾薬箱は空になると土や石を入れて胸壁として利用



1 7.5YR3/2黒褐色土。ややしまる。粘質なし。現地表面。

第50図 横平山戦跡陣地遺構1・1Tr平面・断面図

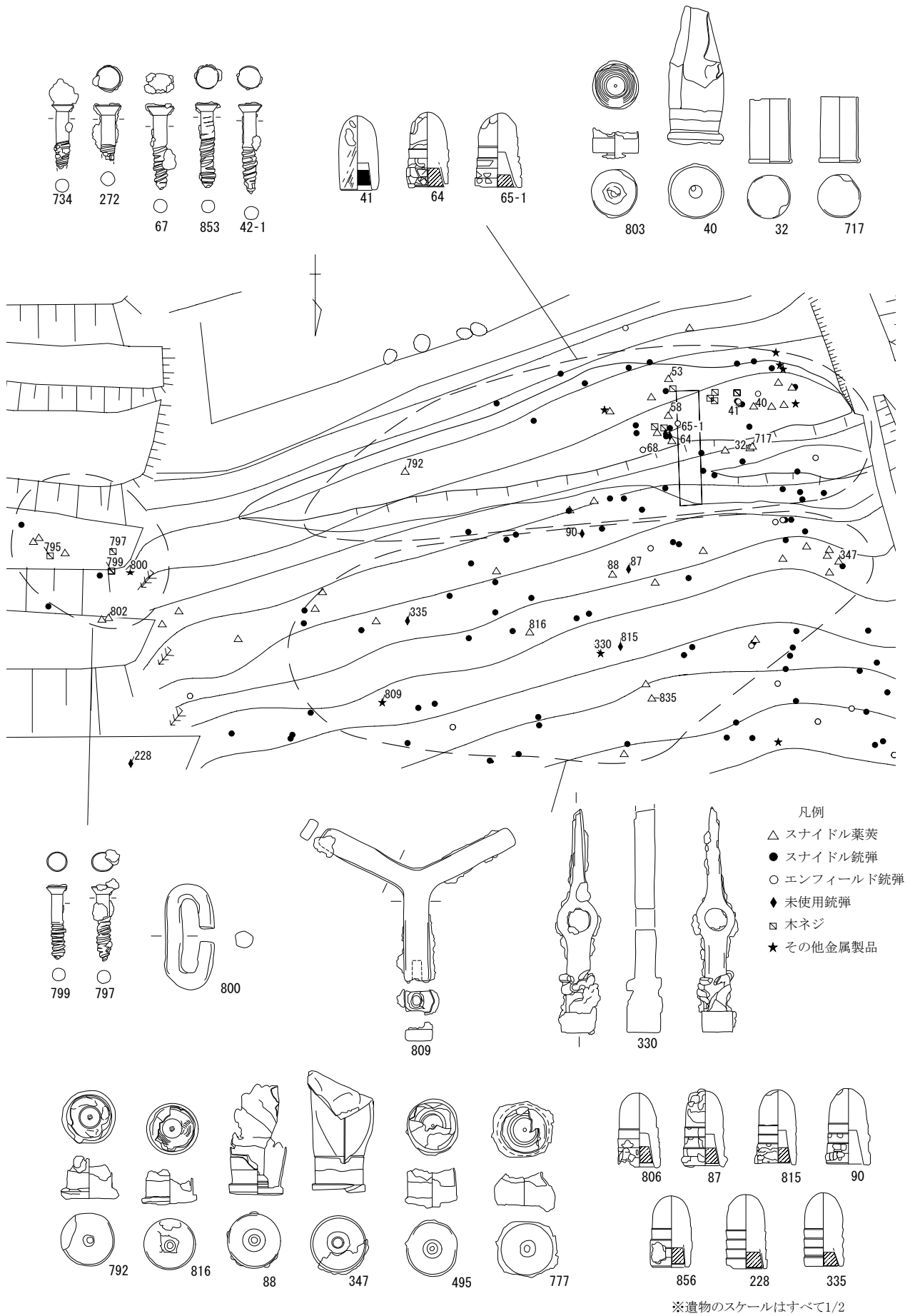


陣地遺構1 (北から)



テラス状遺構木ネジ出土状況





第51図 横平山戦跡陣地遺構1遺物出土状況詳細図

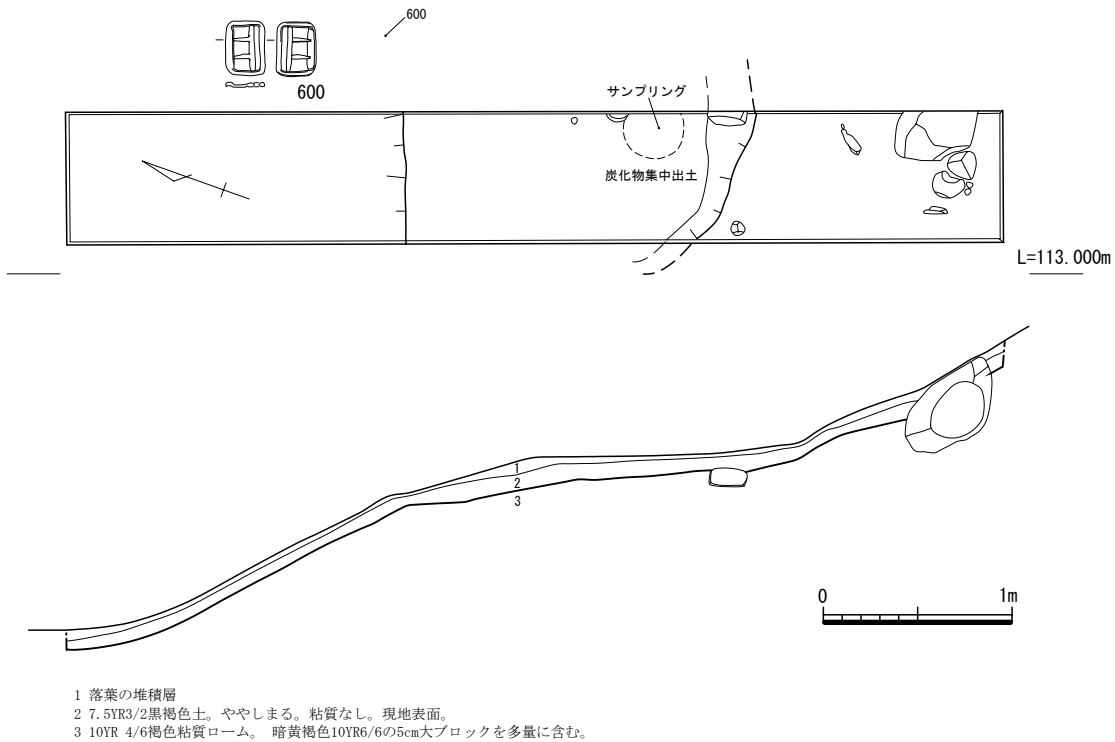
されたという。テラス状平坦面の北縁において集中的に出土することからも、北側山麓から上がってくる敵に対する防御施設として急きょ拵えられた陣地であったと推測する。

(iii) 陣地遺構2

標高110m付近、薩軍仮埋葬地碑の傍には、幅3m×奥行2mの小さな平坦面がある。葉灰等の遺物は確認できなかったが、ベルト金具が1点出土している。平成23年度の確認調査で11Trを設け、土層の確認を行ったところ、上記陣地跡と同様、5cm程度の腐葉土の下に10cm暗褐色土が堆積しており、その直下は地山であることが確認できた。この遺構の中心部において炭化物の集中区を検出した。西南戦争時のものかどうかは不明であるが、今後検討するためにサンプリングを行っている。



陣地遺構2(北西から)



第52図 横平山戦跡11Tr平面・断面図

(iv)不明土坑SK03、SK04(第54図)

9Tr、10Trでは2箇所土坑SK03、SK04を検出した。それぞれ深さが約1m、幅約1.5mである。SK03は10Trにて広がり確認され、東西方向に延びることがわかった。また、SK04は10Trからは検出できず、9Tr拡張でもあまり広がりを持たないことがわかった。これらの遺構内から遺物は出土していないが上面で銃弾が出土している。しかし、表面に浮いた状態で確認されたため、元位置を保っていないと考えられる。

SK03、SK04は地山を掘り込んで作られたもので、覆土である2層は、暗褐色粘質土層の単層からなる。これには地山を削った際に混入したと思われる赤褐色のブロックが含まれており、硬くしめる。また3層は少し明るい地山に似た色であるが赤褐色ブロックが混じる。先に掘られたSK04にSK03を掘った土(3層)が流れこんでいるようだ。いずれも粘質のある山土で硬くしまっている。掘り込みラインがあいまいであることから掘削後すぐ埋められたものと思われる。

仮埋葬地について

征討総督本営は、4月23日熊本県に対して賊軍の墳墓を荒らす行為を止めるよう指示し、熊本県は「賊徒墳墓へ猥りに立入被毀候儀厳禁候事」と立て札を立てさせ、5月14日には修繕(埋めなおし)をするよう指示している。これを受けて山北地区の4つの村が処理を行い、明治10年12月に二俣村用掛、戸長、区長の連名により「賊徒移設埋葬地届」が熊本県に対して提出され(大まかな位置図と地代・地権者等が記されている)ている。全部で104体の遺体の処理が行われているが、横平山での埋葬者数が44体と最も多かった。

この薩軍の遺体は七周忌(明治16年)にも遺骨収集団により改葬がなされている<sup>(1)</sup>。



9TrSK03、SK04検出状況

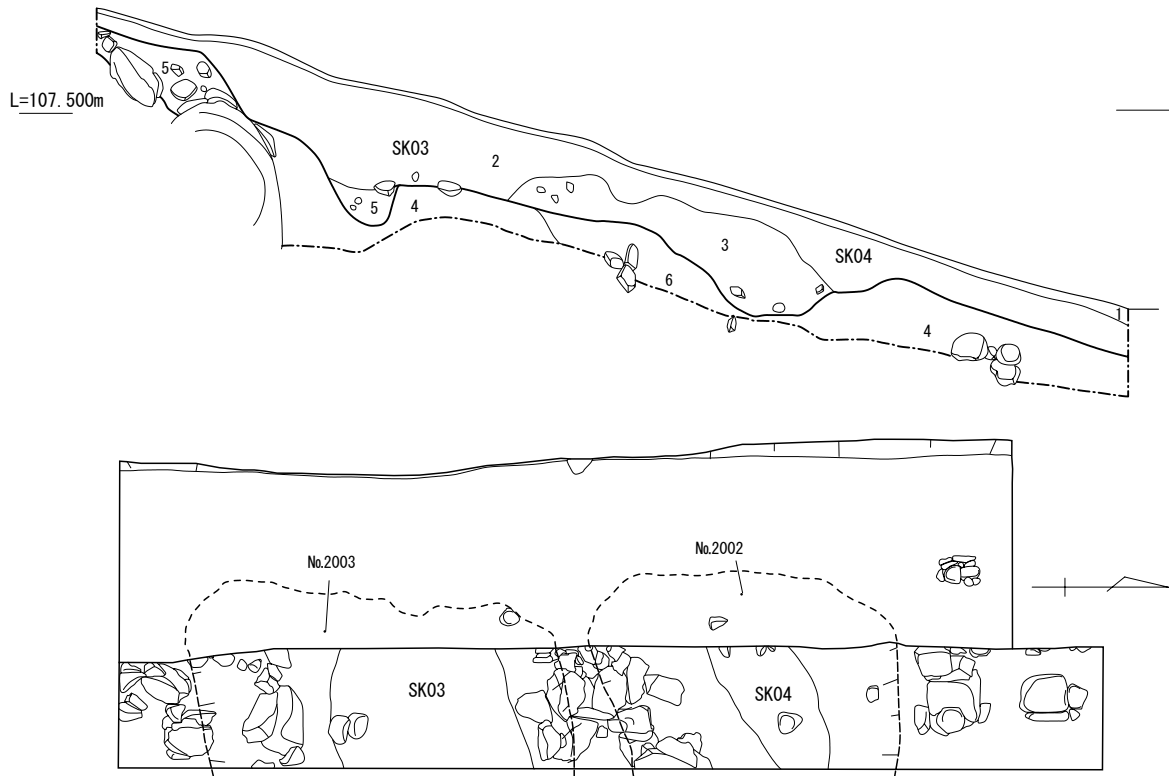


土層断面(手前はSK04)

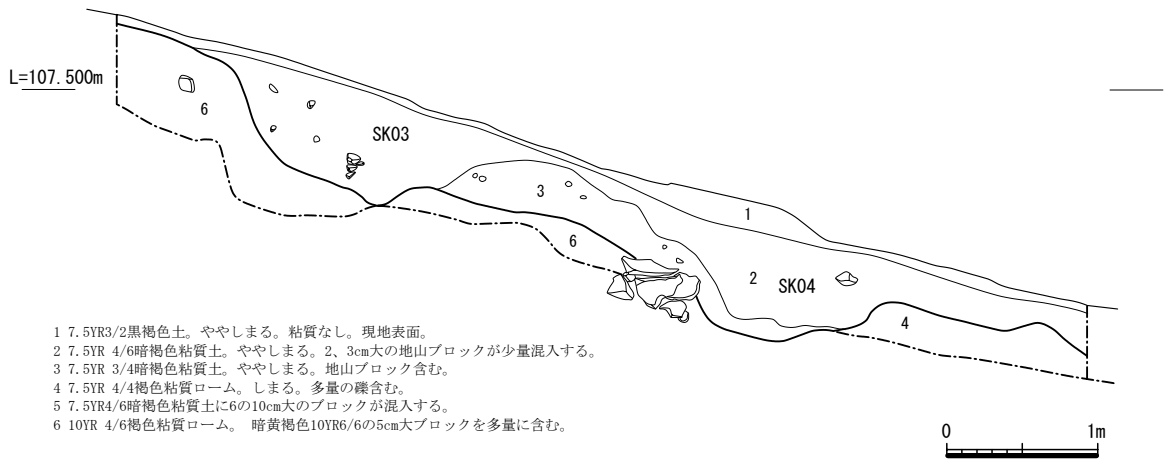


10Tr遺構検出状況

9Tr西壁土層断面

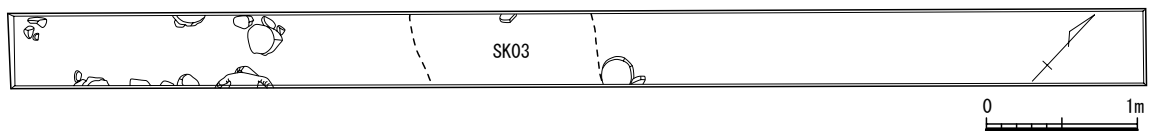


9Tr東壁土層断面(反転)



- 1 7.5YR3/2黒褐色土。ややしまる。粘質なし。現地表面。
- 2 7.5YR 4/6暗褐色粘質土。ややしまる。2、3cm大の地山ブロックが少量混入する。
- 3 7.5YR 3/4暗褐色粘質土。ややしまる。地山ブロック含む。
- 4 7.5YR 4/4褐色粘質ローム。しまる。多量の礫含む。
- 5 7.5YR4/6暗褐色粘質土に6の10cm大のブロックが混入する。
- 6 10YR 4/6褐色粘質ローム。暗黄褐色10YR6/6の5cm大ブロックを多量に含む。

第53図 横平山戦跡9Tr平面・土層断面図



第54図 横平山戦跡10Tr平面図

当該地には仮埋葬地の碑が建てられている<sup>(2)</sup>。前述したSK03、04はこの碑の東側にて検出された。土坑からは遺物が出土しておらず用途は不明であるが、埋め戻しの痕跡から仮埋葬の為に掘られたものとも推定できる。

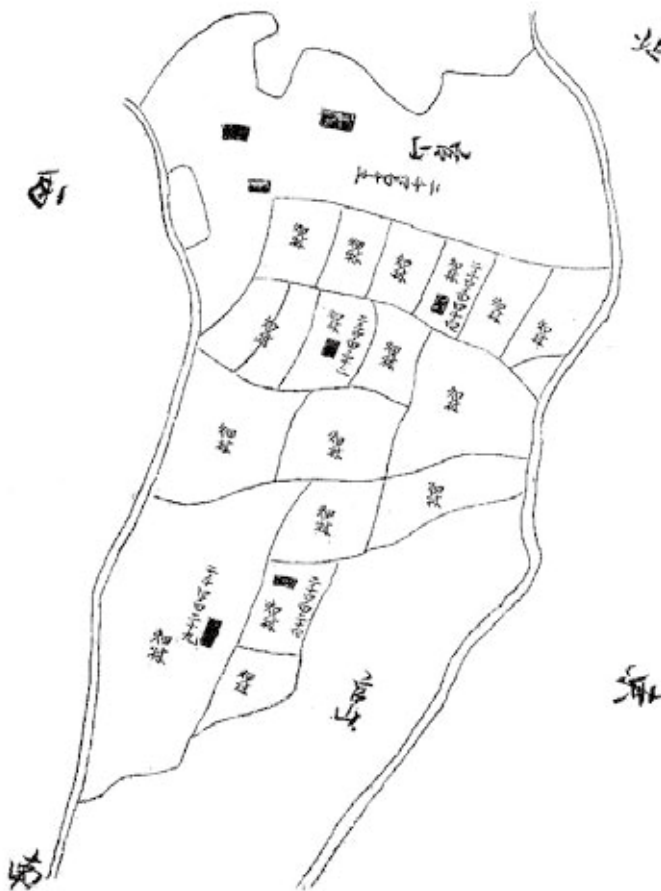
横平山付近には、このような仮埋葬の跡が数カ所あるようだが、一部すでに分からなくなっているものもある。山麓から官軍本営出張所へと向かう旧道の傍らには石を積んだ薩軍埋葬地があり、以前玉東史談会によって発掘された経緯があるが、遺体は検出されていない。その際、糸切底の土師器坏と銅貨が出土したという。発掘をした玉東史談会の前田重治氏によると銅貨は加治木銭であったという。仮埋葬地の所在については、今後聞き取り調査等が必要と思われる。



横平山山腹の薩軍戦死者44体  
仮埋葬地跡の碑

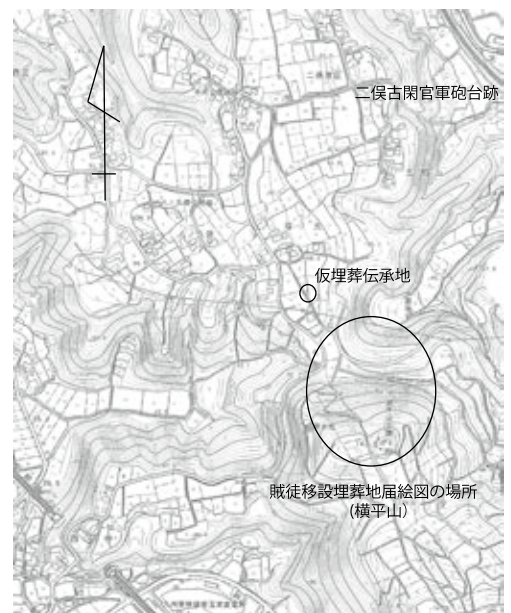
註

- (1) 水野公寿 2007「西南戦争の戦死者-その埋葬と慰霊」『近代熊本』31号
- (2) 現在の碑は平成になって教育委員会によって建てられたものだが、隣には破損した石碑が並んでいる。これが欠損したため、隣に新しく建てられたのだろう。



賊徒移設埋葬地届『土地墓地官賊埋葬地』

自明治十年至十一年(県立図書館蔵県政資料より)



(2) 遺物

西南戦争に関係する遺物は、ほとんどが地表面に近い1層中より出土した。第55図に出土状況を示す。調査区内からは銃弾476点、小銃弾薬莢111点等をはじめ、小銃の工具や銃口蓋、木ネジ13点、砲弾4点等が出土した。その他、軍服の釦や刀の鏢、その付属品も出土している。



遺物出土状況

銃弾の出土状況

銃弾は、横平山北側斜面調査区全体において、まんべんなく出土している。調査区西側の果樹園でも開墾の際には一斗缶いっぱい弾が出土したそうであり、この山の北側斜面に一斉に集中的な射撃が行われたことは言うまでもない。

銃弾は地山にめりこんでいるものもあれば、落ち葉をかき分ければ露出するものもある。出土点数の内、地面にささるよう出土したものは92点であり、その内、先端部が南東を向いているもの31点(33.6%)、南西を向いているもの26点(28%)、北東を向いているもの13点(14.1%)、北西を向いているもの18点(19.5%)であった。また東、北を向くものが各1点であった。遮蔽物や樹木、岩等によって射方向がずれるものもあると思われるが、全体的に南を向いているものが多いようだ。つまり南側の山頂部を目標に発射しているものが多いといえる。

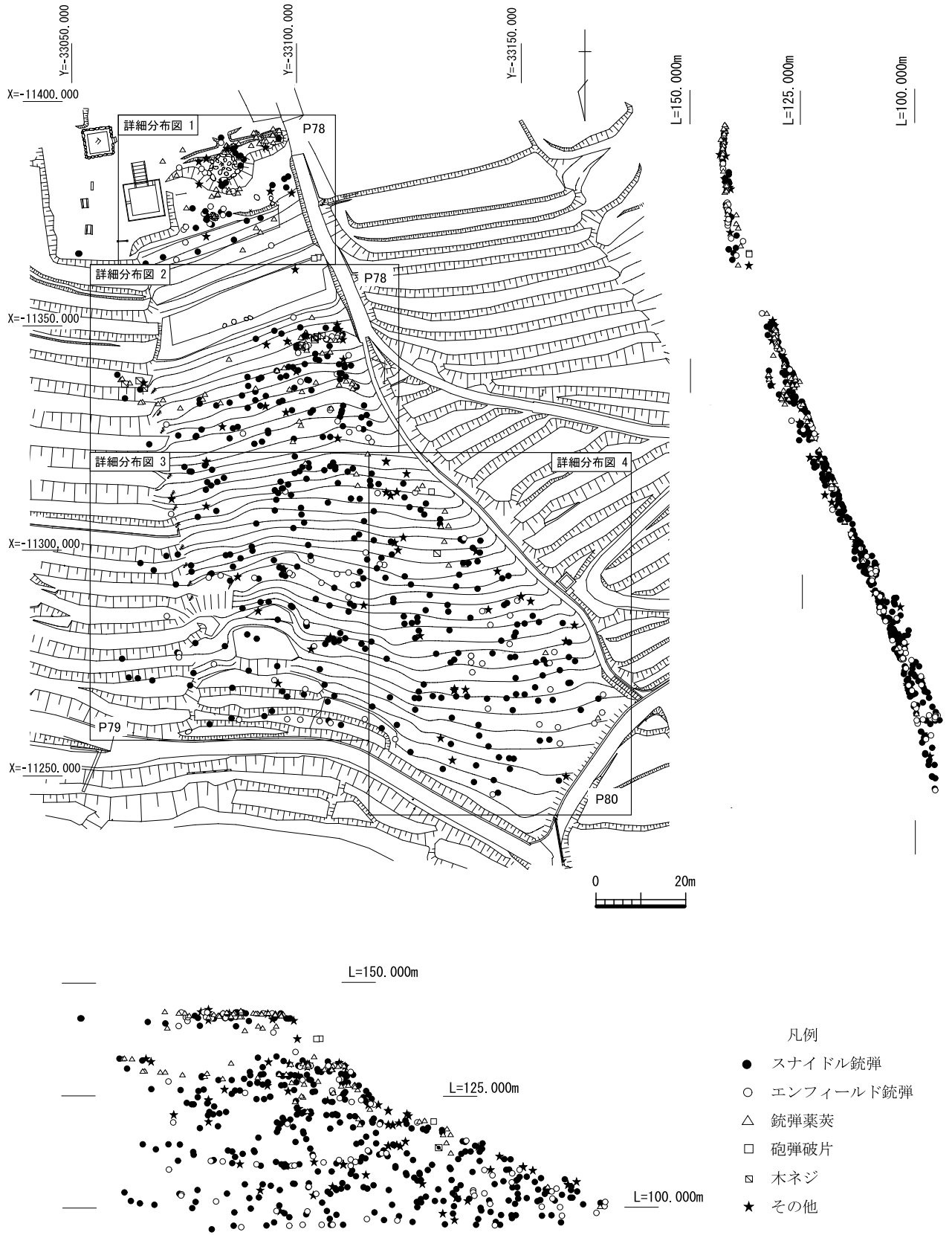
銃弾には様々な種類があるが、横平山で出土した銃弾の種類は銃種で分類すると三種類であった。その大半を占めるのがスナイドル銃弾で378点であり、次に多いものがエンフィールド銃弾で94点、そしてシャープス銃弾が3点出土している。これらのほとんどは潰れており、もともとの形すらわからなくなっているものもある。その内、発射痕のない、未使用弾は全部で22点(スナイドル銃弾16点、エンフィールド銃弾6点)あり、山頂部の標高130m付近(陣地遺構1)に集中的に出土している。

薬莢の出土状況

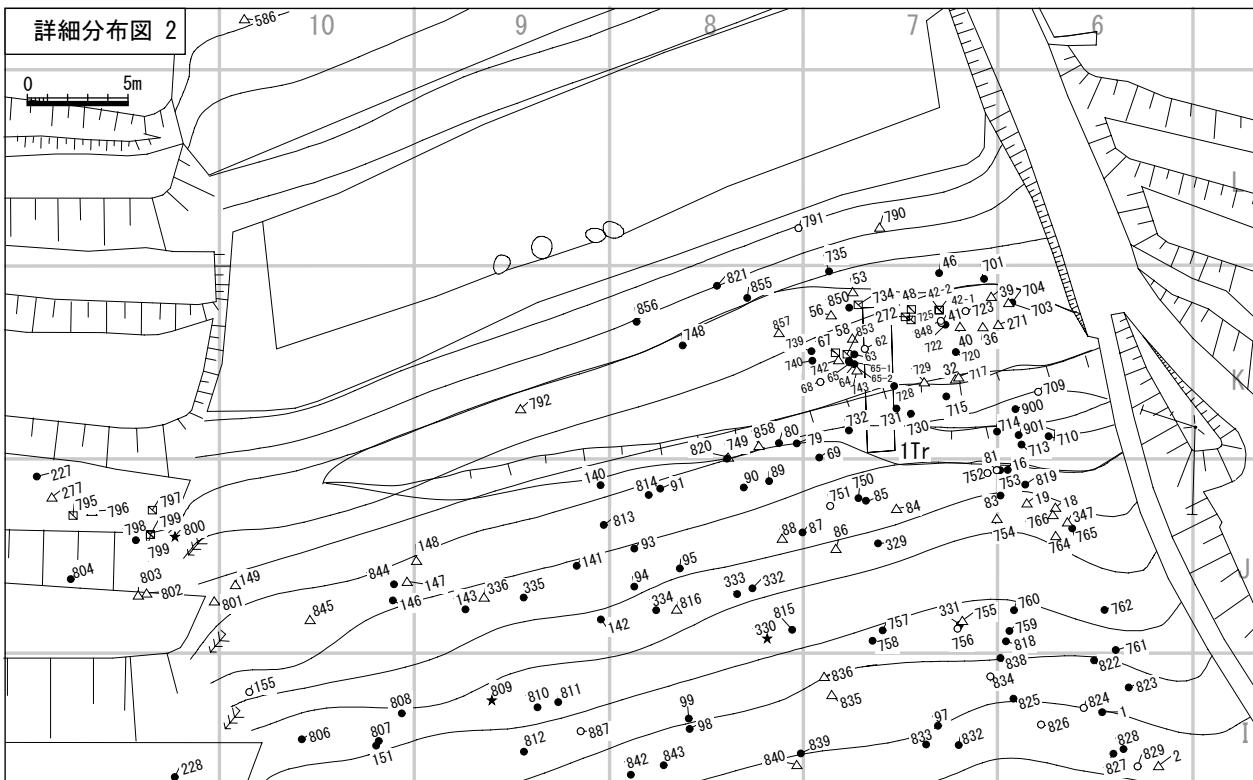
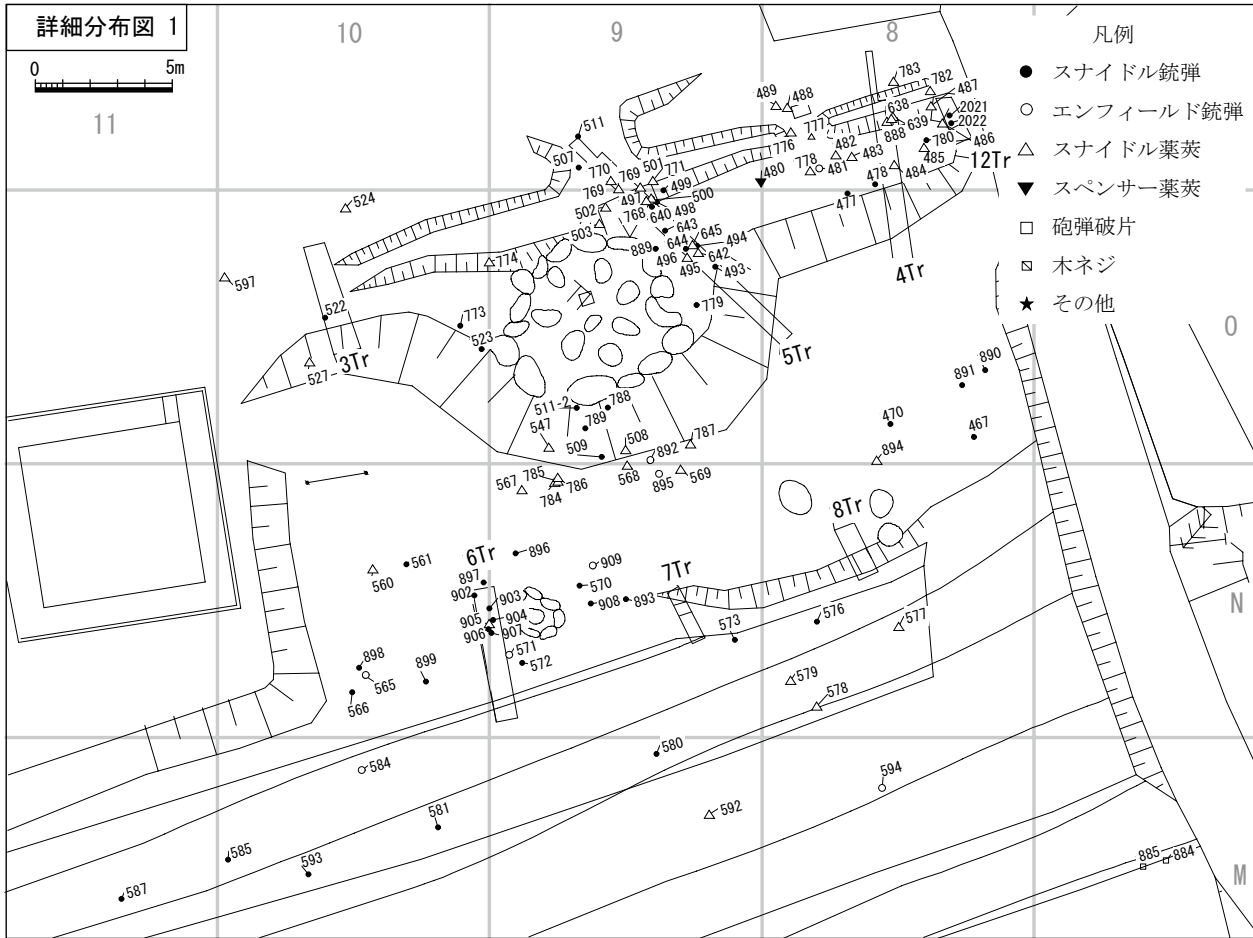
薬莢は銃弾発射後に排出され、その場に遺棄されることを前提とすれば、出土位置は発砲地点=火点を意味する。銃弾はスナイドル銃弾、エンフィールド銃弾等が出土しているが、弾と一対になる薬莢については金属製のスナイドル薬莢108点、スペンサー薬莢3点出土した。エンフィールド銃は紙の薬莢であるため、金属探知機には反応せず、またそうでなくとも風雨にさらされて無くなってしまったものと思われる。(同銃は管打銃であり、銅製の雷管を使用するが、今回の調査では雷管は1点も出土しなかった。)なお、スペンサー薬莢は陣地遺構1において集中出土している。

横平山ではスナイドル薬莢が山頂部及び、標高130mに位置する陣地1において多く出土した。つまり山頂(144m地点)と130m地点に守線が置かれたと推測できる。

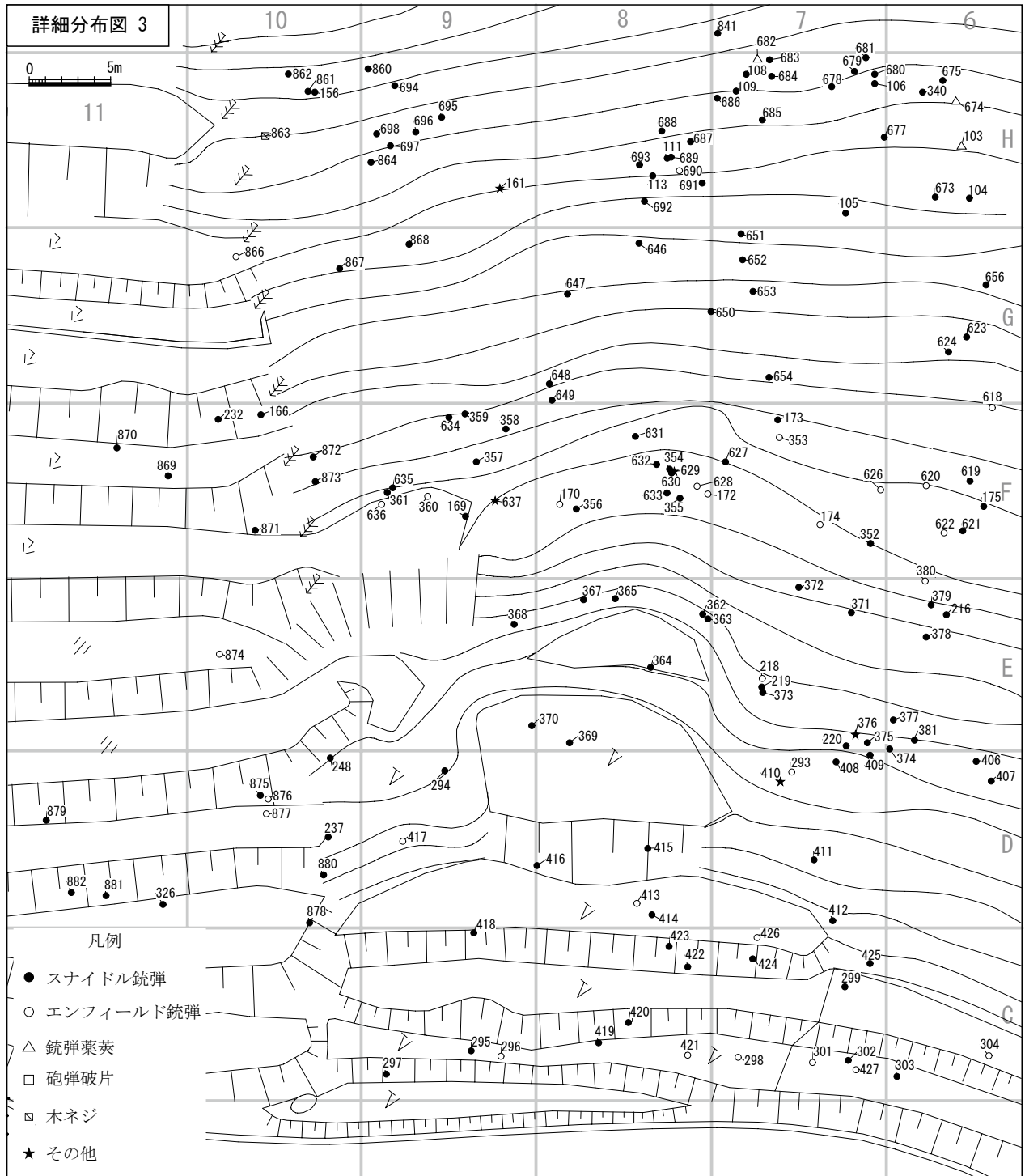
その他、山腹より刀の鏢やその付属品が集中して出土した。あわせて官軍(警視抜刀隊)のものと思われる軍服の金ボタンが山腹付近に比較的まとまって出土した。

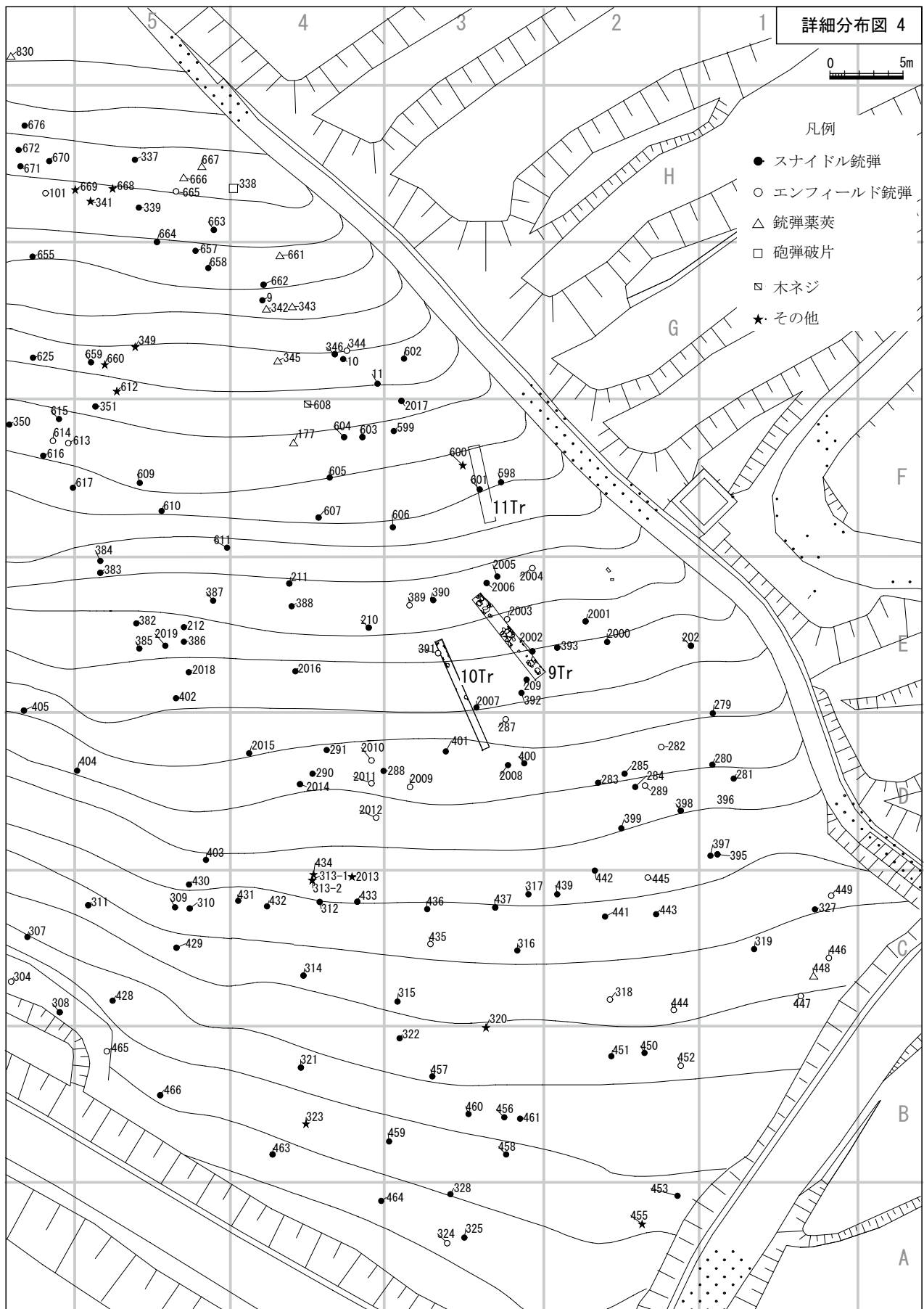


第55図 横平山戦跡出土遺物分布図









エンフィールド  
銃弾

第56図は、後装式エンフィールド銃に使用された鉛製の銃弾である。薬莖は紙であり、使用時は紙を破って火薬を銃口に挿入し弾を込める。銃弾は弾底部の形態で2種類に分類できる。

1(318)～39(571)は弾底凹部が台形を呈し(b類)、1(318)～10(360)には中に木栓、11(353)には陶栓(茶色)が入る。栓は発射時に凹部に食い込み、凹部内の圧力を高める目的で挿入されたものである。横平山出土エンフィールド弾には94点中15点に栓が残っており、そのほとんどが木栓で陶栓は1点のみであった。1(318)、2(41)、12(507)、37(68)は未使用弾と思われる。全長26.2～27.2mm、径14.2～14.4mmとほぼ同規格である。陣地遺構1や山頂部で出土している。その他はすべて斜め右上方向に線状の施条痕が残り、変形しているため本来の形状はとどめていない。



横平山戦跡出土エンフィールド銃弾

銃弾の弾壁は圧力がかかったためか29(523)～35(565)のように薄くなっているものもある。37(68)、38(287)は側面に筋が入り、先端部に突起のようなものが付く。弾鑄型を使って作られたものと思われ、型からはみ出たバリがそのまま残っていると思われる。40(380)、41(282)の2点は断面円錐状を呈すa類でブリケット弾と呼ばれるもので圧入のための栓を必要としない。42(481)～45(824)は寸詰まりの形状を呈し弾底凹部がほとんど無い。もともと短かったものだろうか、それとも発射の圧力等でこのように変形したものだろうか。

スナイドル  
銃弾

第57～第58図46(658)～129(810)は、後装式のスナイドル銃で使用された銃弾である。雷管一体型の金属薬莖と一対になる。銃弾の周縁に四本の鋸歯状圈溝が刻まれるのが特徴である。弾底凹部断面形態で分類を行い、それぞれに出土遺物の一部を図化した。『田原坂』の銃弾の分類にならい、台形のものをA類、先細りの柱形のものをB類とした。また、A類のうち先端部に木片がはいるものをA1類、中空のものをA2類と細分した。

第57図46(658)～55(98)はA1類である。横平山調査区ではA1類を14点検出した。未使用のものがなかったため、本来の形状はわからないが、変形が少ないと思われる49(2015)は、全長26.3mm、径14.8mmである。5点に栓が残っており、すべて茶色の陶栓であった。他の型のものと比較すると、圈溝の幅が均一でないもの(裾部の幅が狭いもの)が多いことが特徴である

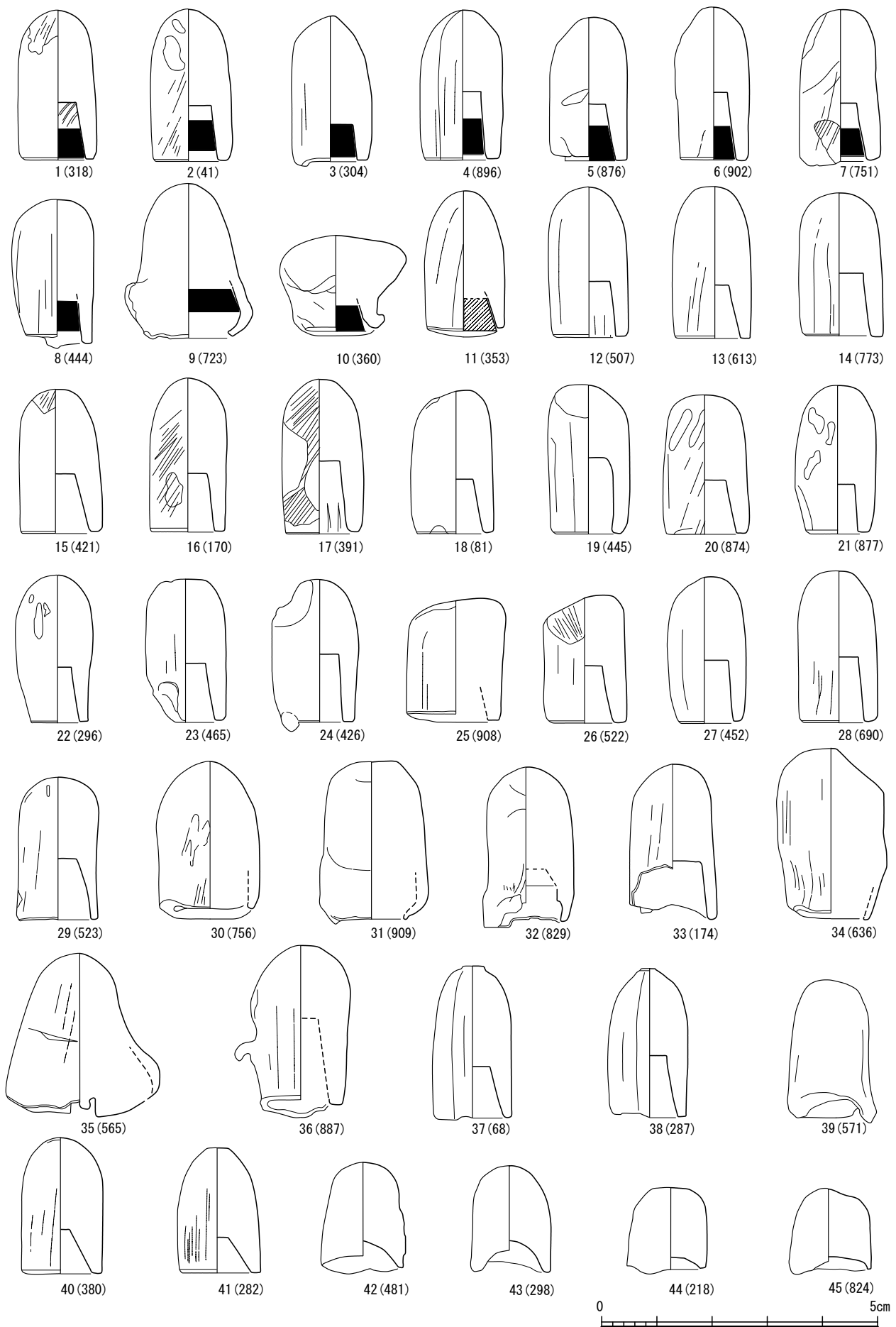
第57図56(87)～72(868)はスナイドル銃弾A2類である。未使用弾が6点出土している内、5点はほぼ同規格で全長27.1mm、径16.1mmである。5点に茶色の陶栓が入っており、弾底凹部は台形である。薬莖胴部が付着しているものもあり、そのためか、銃弾の表面は腐食によりボロボロと表面が剥離している状態である。



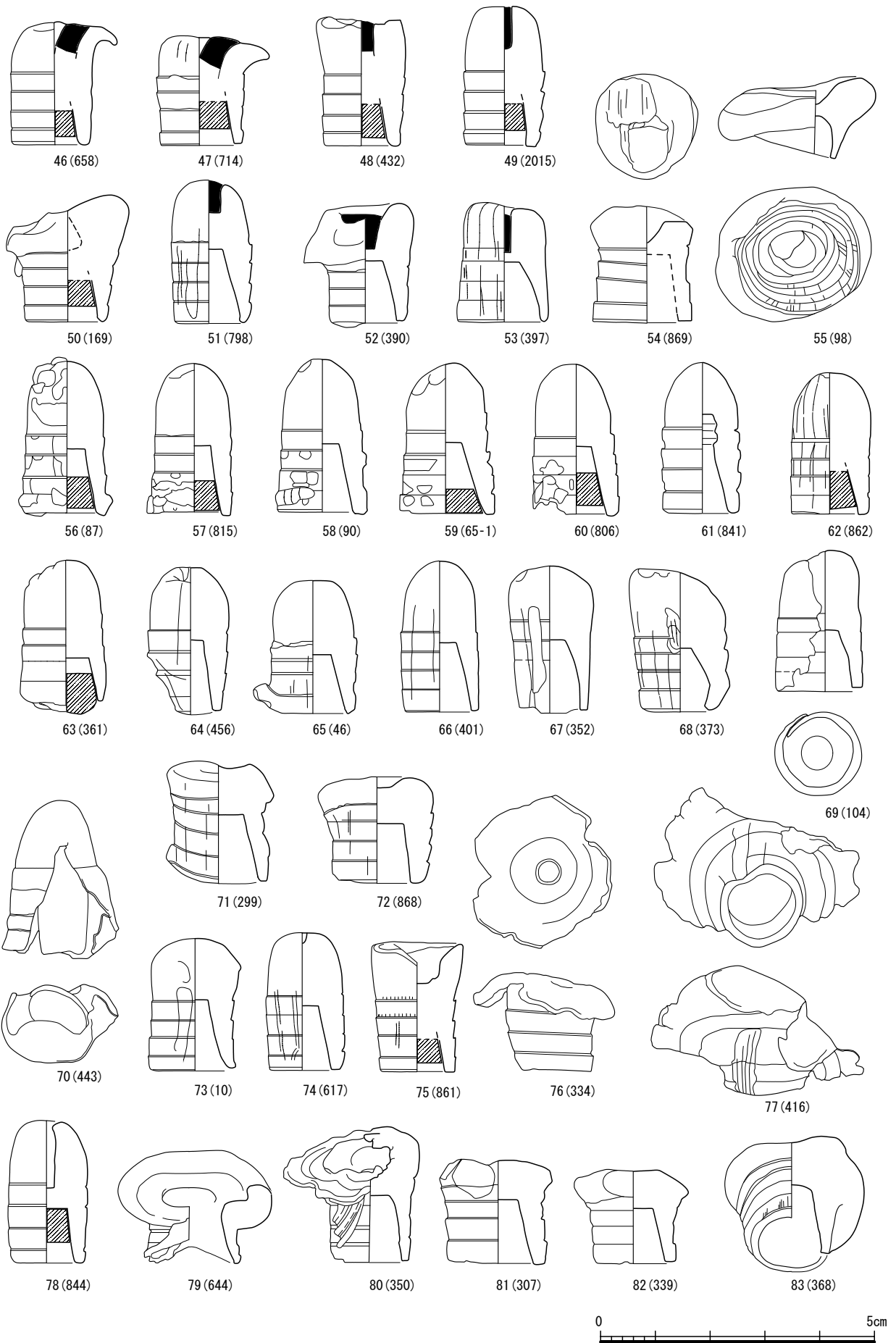
前 スナイドルA2類未使用弾(側部裾は腐食している)  
後 スナイドルA1類(先端に木片が残る)

61(841)は弾底凹部断面形態が特殊である。全体的な形態も少しシャープな印象を受ける。横平山戦跡では1点出土している。69(104)、70(443)は器壁が二重になっており、表面がはげたような形状をする。

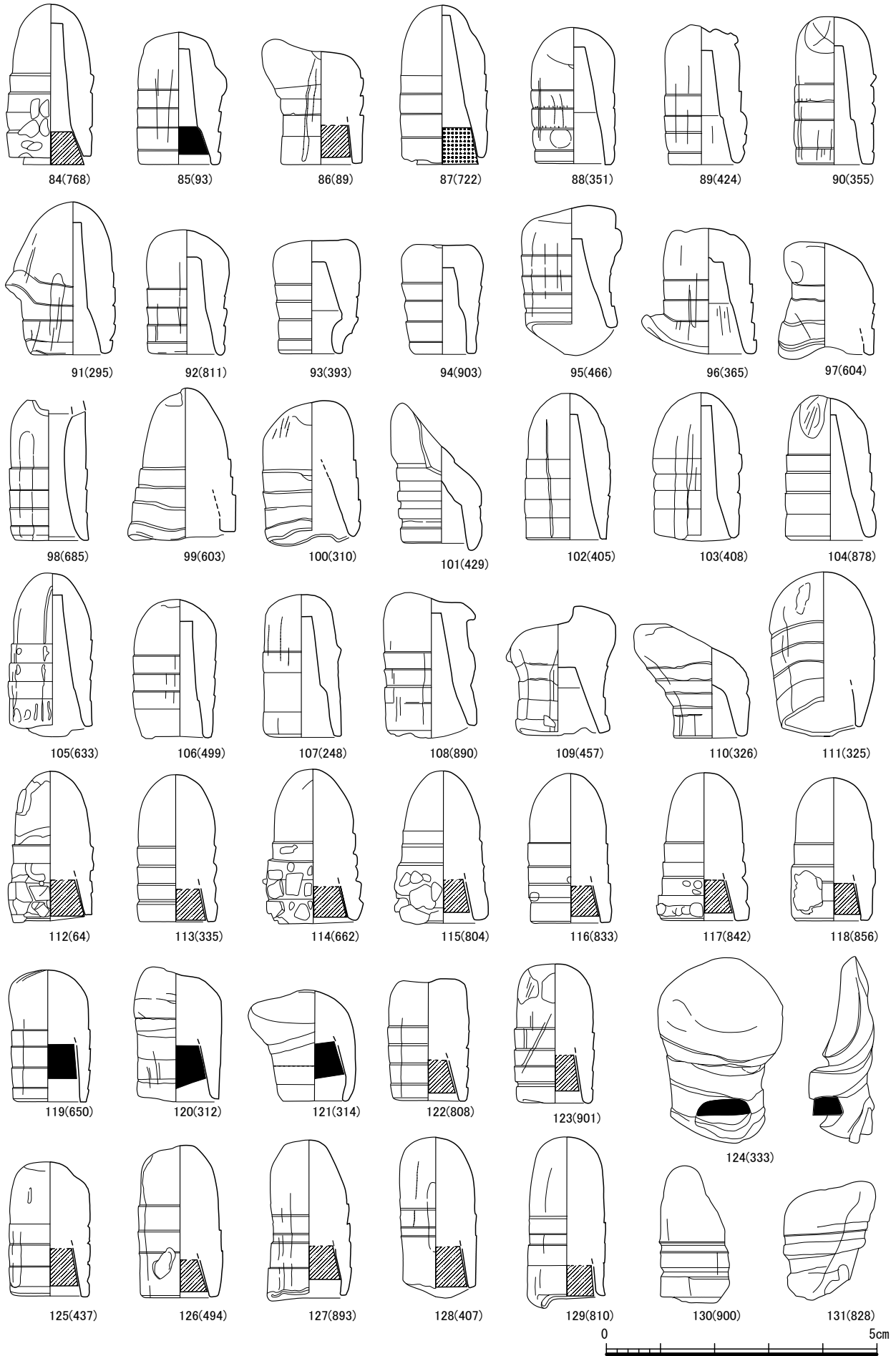
先端に木片が入らず、内部中ほどに仕切りがあるものはすべてA類とした。A類の中には、76(334)や77(416)、79(644)、80(350)のようにマッシュルームのような形状、花びらが開いたような形状を呈



第56図 横平山戦跡出土遺物実測図(エンフィールド銃弾)



第57図 横平山戦跡出土遺物実測図(スナイドル銃弾A類)



第58図 横平山戦跡出土遺物実測図(スナイデル銃弾B類等)

し、激しく潰れているものが多い。

第58図84(768)～111(325)はスナイドル銃弾B類である。84(768)は未使用弾で、山頂の塹壕より1点出土した。全長28.1mm、径15mmであり、茶色の陶栓が入っている。B類として65点抽出した内、栓の残るものは4点で、その内訳は木栓1点、茶色の陶栓2点、灰色の陶栓1点である。弾の側壁には線状の使用痕が残り、発射や衝撃により変形するが、A類ほど激しく潰れていない。

第58図112(64)～129(810)は、内部に栓が入り取れなくなっているため、弾底凹部形態により分類ができないものである。112(64)～118(856)は未使用弾である。いずれの未使用弾も側面は腐食している。118(856)には薬莖の胴部破片が付着した状態で出土した。128(407)、129(810)は縦に細長く伸びており、口径の合わない銃に装填されたものではないかと思われる。このような弾は横平山全体で9点出土しており、散在している。

130(900)、131(828)はシャープス銃弾である。スナイドル銃弾より一回り以上小型であり、三本の圈溝をもつ。栓は入らない。縁打ち式の金属薬莖と対になるが、今回の調査では薬莖は出土していない。

薬莖

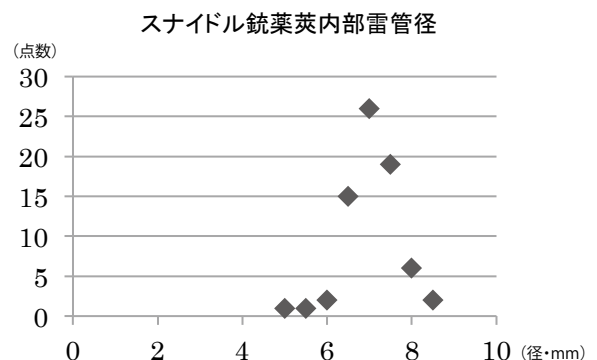
スペンサー薬莖3点が出土しているが、それ以外は全てスナイドル薬莖であり、108点出土した。前述したように、これらの薬莖は山頂部の塹壕跡や陣地遺構1、調査区西側小路沿いにおいて集中出土している。スナイドル薬莖は、底部径20mm、胴部径18mm、全長45mm程度で、すべてほぼ同規格である。胴部は真鍮を筒状に成形し、その上に紙が巻かれている。出土品にも紙片が付着していた。底部には銅製や鉄製の径20mmの円盤が付く。スナイドル実包はイギリスが原産国であり、MARKI～IXが製造された。文献によると、底部が銅製のものはMARKI～Ⅲに限られており、横平山戦跡では1点出土している(第59図132)。それ以外はすべて鉄製の底部盤であった。胴部の真鍮は薄く、内部に入る黒色火薬と反応することで腐食の進行が早まるため、ほとんどの胴部は残存していない。スナイドル薬莖は雷管一体型であり出土薬莖は内部雷管が露出しているものも多く、その大きさに差異が見られた。文献にて図示される薬莖内部雷管の径も多少の差異が見られることから、モデルチェンジにより変化している可能性が考えられる。横平山出土雷管では径7.0mmのものが最も多かった。これらがどのモデルであるか文献には詳細な記載が無い為、現在のところ不明である。

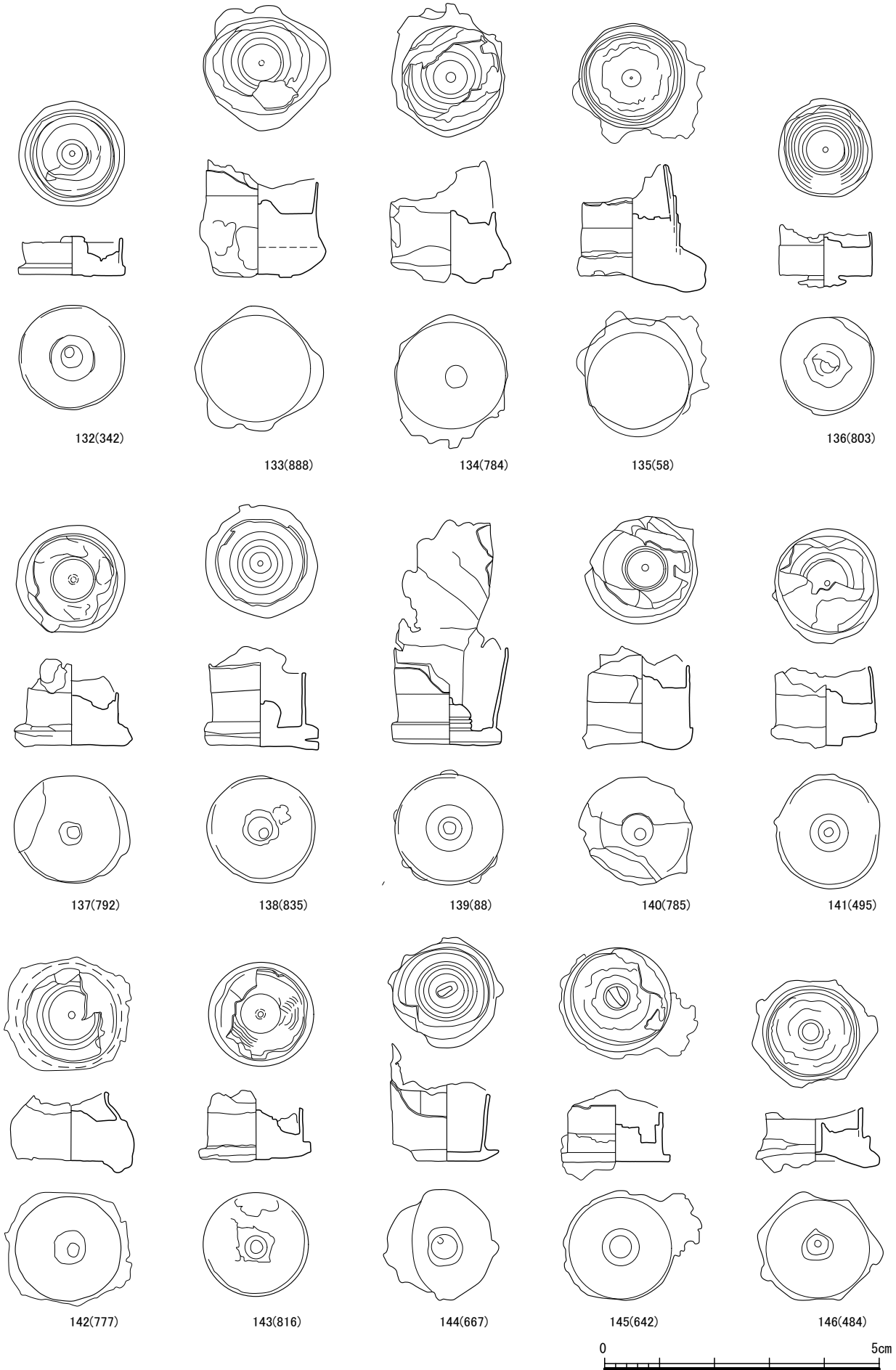
スペンサー銃薬莖はすべて銅製で、全長24mm径16mmである。底部はスナイドル薬莖のように分離していない。底部縁打ち式で発射するもので、底部に5mm幅の半円状の打痕が残る。

横平山でエンフィールド銃の火点に関する遺物は出土していない。エンフィールド銃には紙薬莖が用いられ、外付けの雷管(銅製、5mm四方)に衝撃を与えることで発射する仕組みになっている。銃弾は94点出土しているので、雷管の出土が予想されたが、一点も検出されなかった。

銃弾と薬莖の比率

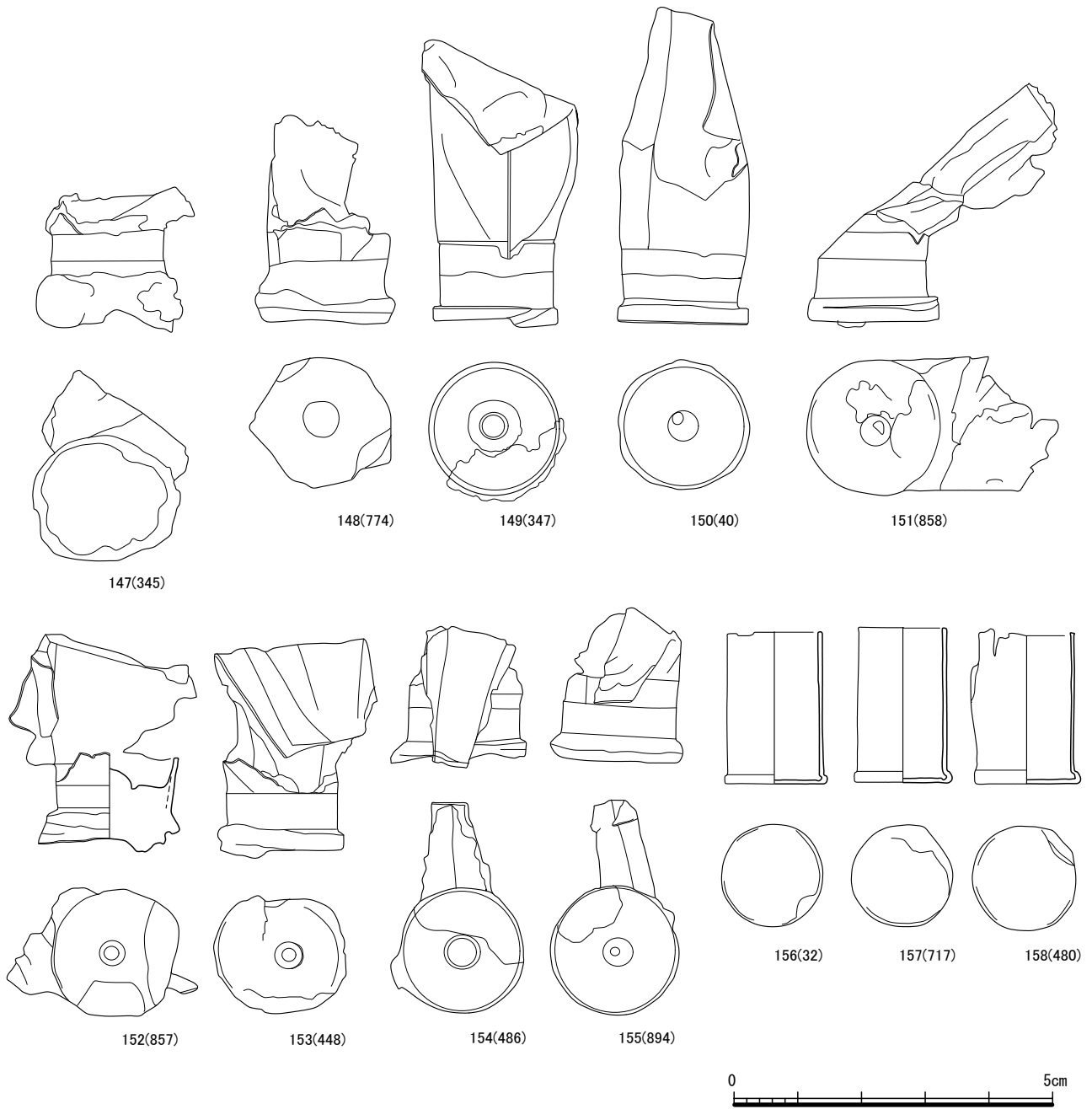
横平山では銃弾が476点、薬莖が111点出土した。その内、薬莖、銃弾の両方が出土しているのはスナイドル銃のみである。スナイドル銃だけで比較すると、薬莖:銃弾=2.2:7.8であり、銃弾が圧倒的に多い。つまり、火点が高山頂部や陣地遺構の他にあったことを示す。





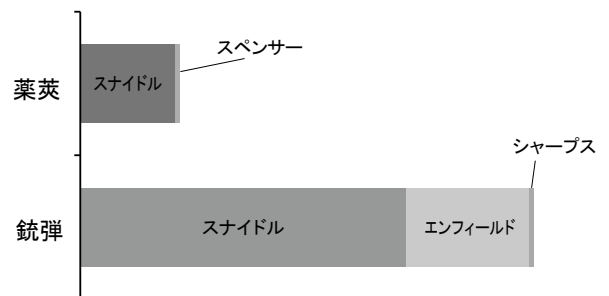
第59図 横平山戦跡出土遺物実測図(スナイドル葉莖)





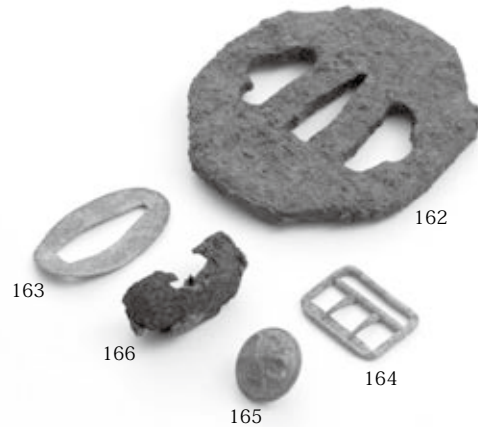
第60図 横平山戦跡出土遺物実測図(スナイドル・スペンサー薬莖)

横平山における火点は、山頂塹壕等でみられた。薬莖と銃弾が同等の比率であるとすれば、約5割は他の火点から撃ち込まれたものであることが推測される。



砲弾

第61図161(323)、160(885)、159(338)は四斤砲の榴弾破片である。161(323)は胴部であり、厚み約11mmである。160(885)、159(338)は頭部で、信管をねじ込むネジ山が刻まれている。いずれも鉄製である。横平山は、二俣の官軍砲台から1Kmも離れていないため、二俣砲台からの援護射撃があったはずであるが、出土点数は3点と少ない。



その他

第61図は162(341)は鉄製の刀の鐔である。12mm×83mmで厚みは約5mmである。X線で照射したが象嵌など装飾は見られなかった。刀身の入る部分は31.5mmである。163(669)は刀の鐔下にある切羽である。41mm×25.5mm、厚さ1mmの銅製で、細かい刻み目が縦方向に入る。刀身の入る部分は30mmと鐔とほぼ同じである。166(668)は刀の柄頭つかがしらである。鉄製である。鐔、切羽、柄頭はまとめて出土し、同一個体のもと思われる。

横平山戦跡出土 刀の部品・服飾品

164(600)は銅製のベルト金具である。厚さ2mm程度の華奢なものである。山腹の陣地遺構2で出土した。165(660)は銅製の軍服の釦である。金メッキが一部かすかに残っており、従来は金ボタンだったことがうかがえる。桜紋が内部から型押しされ、裏側には針金を丸めた留め金がつき、二つの孔があいている。



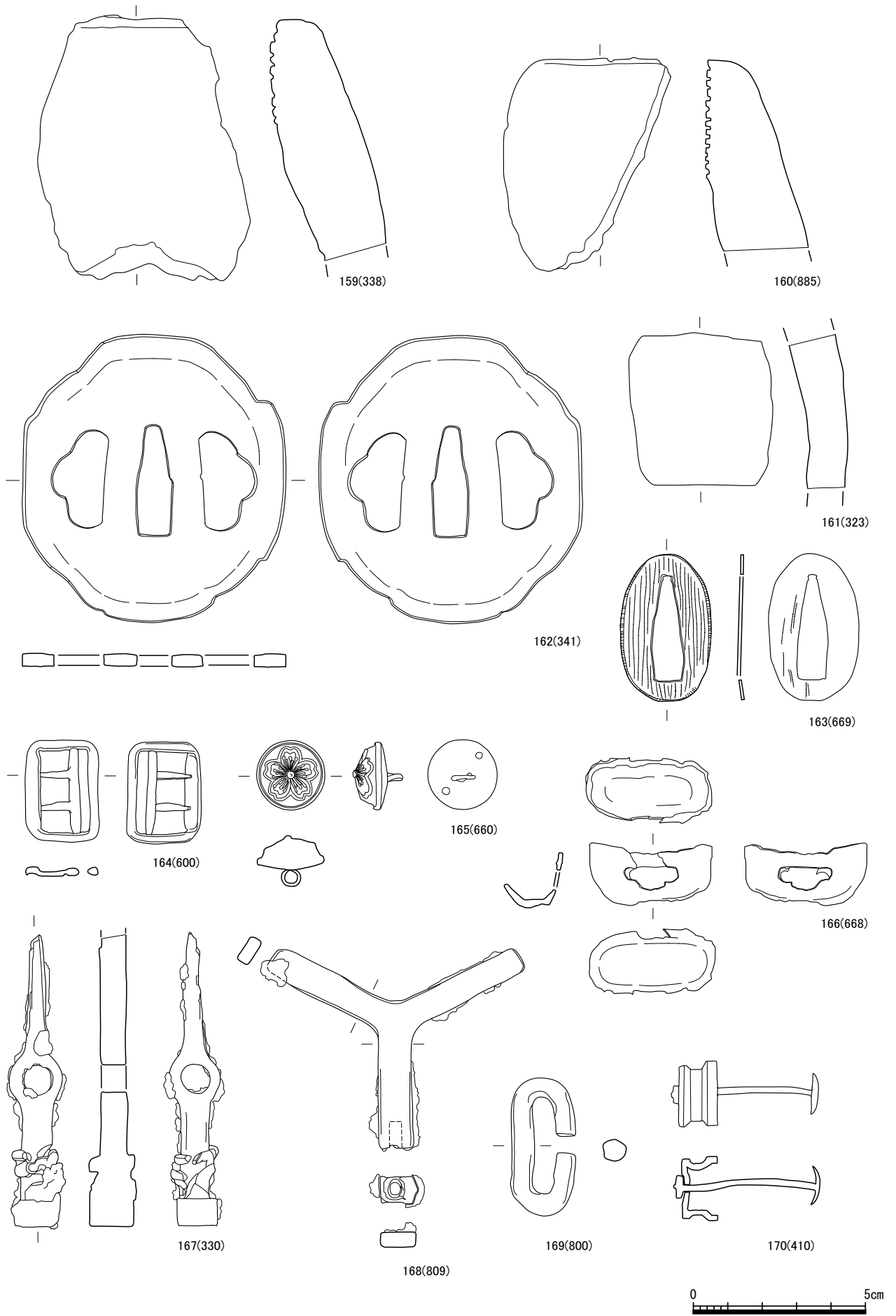
横平山戦跡出土 木ネジ・工具類

168(809)、167(330)は小銃を分解するための工具である。167(330)はI字型を呈し、中央部に7.5mmの丸い穴があり、先端部は先細りになっている。X線写真に明確なように底部には螺旋状のものが巻きついている。これは、前装式の銃で弾を抜くための転弾子と思われる。168(809)はY字型を呈す。先端部は167同様先細りする。鉄製である。三ツ又といわれるものに類似する。

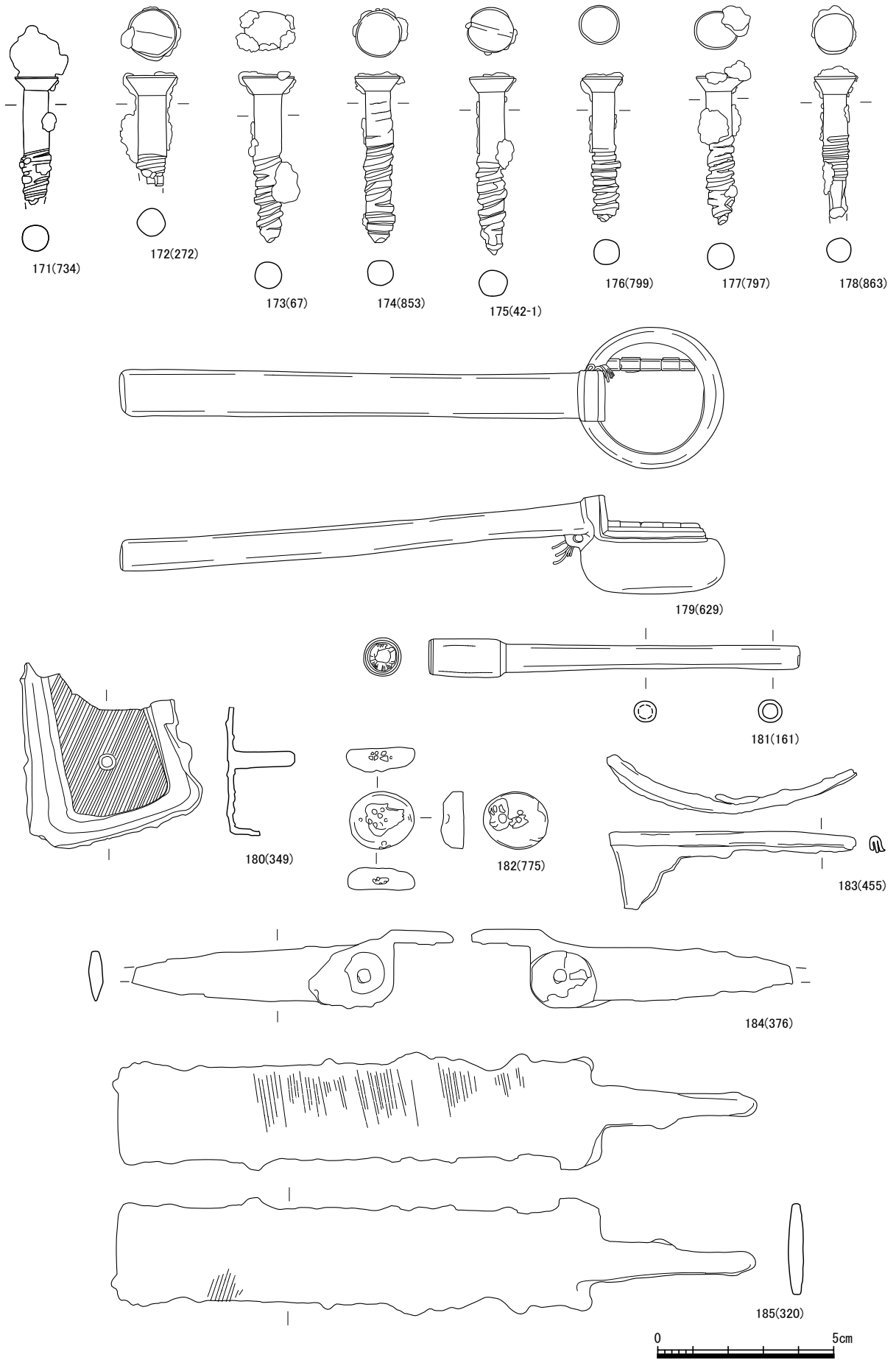
169(800)は負環である。鉄製で銃を背負う負皮の調整環である。径6mmの鉄製の棒がC字型に曲げられたものである。

170(410)は銃口蓋である。銃口に水分が入らないように特に前装式の銃の先端部に詰められたものである。針金状の部分にコルクが巻かれ、銃口に密閉するように作られていた。銅製で径18mm、全長42mmである。

第62図171(734)～178(863)は鉄製の木ネジである。錆がひどいが、ネジ山は残る。頭部径は10mmでマイナスが刻まれている。ほぼ同規格であると思われ、陣地遺構1で集中的に出土した。前述したように弾薬箱に使われているものと類似する。179(629)は銅製の矢立てである。筆入れ部分には紐が残存しており、ここに紐を通して携帯していたことがわかる。X線照射により内部に筆が残っていることが確認された。



第61図 横平山戦跡出土遺物実測図



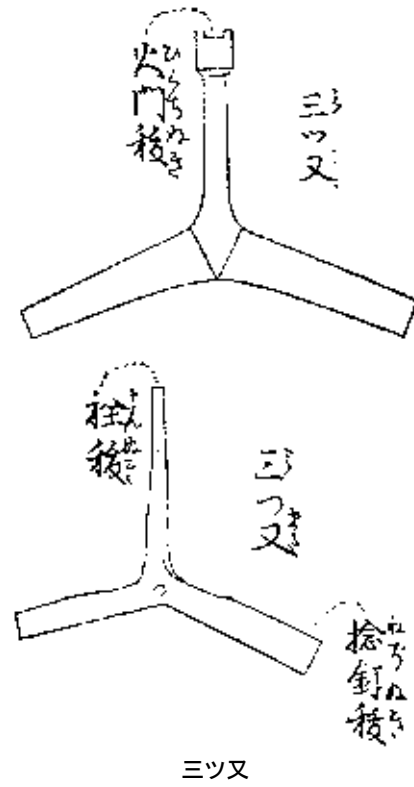
第62図 横平山戦跡出土遺物実測図

180(349)は用途不明の遺物である。鉄製で皿上になっており、突起が付く。181(161)は銅製のキセルと思われる。182(775)は露銀である。183(455)は缶の縁、184(376)は小刀(肥後守)と思われる。185(320)は鉄製のヤスリである。細いやすりの目が斜めに刻まれている。

いずれも西南戦争当時の物かは不明であるが、ブリキの缶詰は西南戦争から食糧保存に使われたものであり、当時使っていた可能性があるため、図化した。

参考文献

- 熊本市教育委員会 2011『田原坂 西南戦争遺跡・田原坂第1次調査』熊本市の文化財第5集
- 熊本市教育委員会 2012『田原坂II 西南戦争遺跡・田原坂第2次調査』熊本市の文化財第15集
- 歴史群像編集部著 2010『幕末維新人物辞典』学研
- Charles H.Yust Jr 『Snider577Cartridges』
- B.A.Temple 1977『The Boxer Cortridge in The British Service』



木ネジX線透過写真



矢立X線透過写真

第IV章 横平山戦跡の調査

第4表 横平山戦跡出土遺物観察表

※出土位置(層位)について特に記載の無い物はI層中より出土。

銃弾

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	入射角	分類	栓	潰れ方	鑄直し痕	凹溝幅	縦方向の規則的な刻み目	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	備考
		1	スナイドル銃弾	I6		A2	-	側部	凹み		(26.6)	(15.9)	28.3	
		9	スナイドル銃弾	G4		A	-	頭部			(10.9)	(26.0)	28.4	
第57回	73	10	スナイドル銃弾	G4		A	-	頭部			(23.7)	(18.8)	27.9	
		11	スナイドル銃弾	G4	S80E SW25	A2	-	側部	5mmの凹み		(24.1)	(14.1)	25.7	器壁薄い
		16	スナイドル銃弾	J6		A2/B	-	側部	3mmの凹み		(24.0)	(18.4)	27.2	
第56回	2	41	エンフィールド銃弾	K7		b	木	未使用			26.8	14.3	32.1	
第57回	65	46	スナイドル銃弾	K7		A2	-	側部	凹み		(24.0)	(19.2)	29.1	
		62	エンフィールド銃弾	K7		b	-	発射痕のみ			26.8	14.3	32.3	
		63	シャープス銃弾	K7			-	発射痕のみ			(24.3)	(12.6)	25.4	
第58回	112	64	スナイドル銃弾	K7		A2/B	陶/茶	未使用			27.5	16.1	28.7	
第57回	59	65-1	スナイドル銃弾	K7		A2	陶/茶	未使用			27.3	15.8	29.2	
第56回	37	68	エンフィールド銃弾	K7		b	-	未使用	○		27.2	14.4	32.1	灰色がかかる
		69	スナイドル銃弾	K7		A2/B	陶/茶	発射痕のみ	○		25.4	14.5	28.3	
		79	スナイドル銃弾	K8		A2/B	-	全体			(22.7)	(28.3)	28.8	
		80	スナイドル銃弾	K8		A	陶/茶	頭部	4mmの穴		(24.5)	(14.3)	29.5	
第56回	18	81	エンフィールド銃弾	J7		b	-	発射痕のみ			24.4	24.4	32.0	
		83	スナイドル銃弾	J7	S60W SW5	A2	-	側部			(26.9)	(16.3)	28.6	
		85	スナイドル銃弾	J7	S40W SW3	A	-	頭部	4mmの穴	裾部狭	(25.0)	(15.2)	27.3	
第57回	56	87	スナイドル銃弾	J8	N20W NW10	A2	陶/茶	未使用			28.5	16.5	29.3	
第58回	86	89	スナイドル銃弾	J8		B	陶/茶	頭部	穴あり 貫通		(22.3)	(19.0)	30.5	
第57回	58	90	スナイドル銃弾	J8		A2	-	未使用			27.4	15.9	30.0	
		91	スナイドル銃弾	J8	N80E SW15	A2	-	頭部			(25.3)	(14.3)	27.5	
第58回	85	93	スナイドル銃弾	J8	S70E NW8	B	木	側部		裾部狭	(24.1)	(14.9)	29.6	
		94	スナイドル銃弾	J8		A2	-	側部			(25.2)	(17.0)	28.6	
		95	スナイドル銃弾	J8		A	-	全体	穴あり 潰れ		(24.0)	(23.5)	26.7	
第57回	55	98	スナイドル銃弾	I8		A1	-	全体	穴あり 貫通		22.6	28.1	28.9	木片残る
		99	スナイドル銃弾	H7		A	-	頭部		○	(22.0)	(27.3)	26.6	
		101	エンフィールド銃弾	H6		-	-	側部			(30.4)	(20.6)	31.5	
第57回	69	104	スナイドル銃弾	H6		A2	-	頭部			(25.0)	(15.5)	28.4	側部が二重
		105	スナイドル銃弾	H7		A	-	頭部	8mmの穴		(17.5)	(21.2)	28.2	
		106	スナイドル銃弾	H7	S20W SW13	A2	-	側部	凹み		(25.8)	(14.6)	27.0	
		108	スナイドル銃弾	H7		-	-	全体			-	-	28.6	
		109	スナイドル銃弾	H7		A2/B	-	側部			(30.4)	(23.6)	27.7	
		111	スナイドル銃弾	H8		-	陶/茶	頭部			-	-	27.1	
		113	スナイドル銃弾	H8		-	-	破片			-	-	21.0	
		140	スナイドル銃弾	J9		A2/B	陶/茶	頭部	4mmの穴	裾部狭	(22.7)	(15.6)	29.5	
		141	スナイドル銃弾	J9		A2/B	陶/灰	頭部			(26.6)	(16.7)	29.9	
		142	スナイドル銃弾	J9	上向き	A	陶/茶	頭部	穴あり 潰れ		(17.3)	(22.3)	28.1	
		143	スナイドル銃弾	J9		A2/B	陶/茶	頭部	4mmの穴		(23.2)	(14.1)	27.7	
		146	スナイドル銃弾	J10		-	-	破片			-	-	4.2	
		151	スナイドル銃弾	I10		A2/B	-	全体			(28.4)	(25.0)	28.6	
		155	エンフィールド銃弾	I10		b	-	頭部			(17.9)	(19.8)	32.3	
		156	スナイドル銃弾	M10		-	陶/灰	頭部		裾部狭	(14.3)	(24.8)	29.1	
		166	スナイドル銃弾	F10		A2	-	側部			(26.8)	(15.4)	27.5	
第57回	50	169	スナイドル銃弾	F9		A1	陶/茶	頭部		裾部狭	22.7	23.1	28.1	木片残る
第56回	16	170	エンフィールド銃弾	F8		b	-	発射痕のみ	先端輪状		27.0	13.8	32.5	
		172	エンフィールド銃弾	F8		-	-	破片			-	-	22.1	
		173	スナイドル銃弾	F7		B	-	側部			(31.7)	(20.7)	27.6	
第56回	33	174	エンフィールド銃弾	F7		b	-	側面破れ			(32.7)	(15.8)	30.1	
		175	スナイドル銃弾	F6		A2	-	頭部	7mmの凹み		(22.7)	(18.1)	28.6	
		202	スナイドル銃弾	E2		A2/B	-	側部		裾部狭	(25.6)	(21.2)	28.1	
		209	スナイドル銃弾	E3		A2/B	陶/茶	頭部	凹み		(23.4)	(13.6)	28.9	
		210	スナイドル銃弾	E4		B	-	側部			(23.8)	(15.5)	29.1	
		211	スナイドル銃弾	E4		B	-	側部			(29.0)	(21.0)	27.9	
		212	スナイドル銃弾	E5		A	-	頭部	7mmの穴		(16.1)	(22.7)	26.4	
		216	スナイドル銃弾	E6		-	-	破片			-	-	10.7	
第56回	44	218	エンフィールド銃弾	E7		-	-	寸詰り			(15.5)	(14.2)	18.7	
		219	スナイドル銃弾	E7		-	陶/茶	頭部	穴あり 潰れ		(24.0)	(19.1)	29.5	
		220	スナイドル銃弾	E7		-	-	頭部		○	-	-	30.4	
		227	スナイドル銃弾	J11		B	-	側部			(27.2)	(18.6)	28.1	
		228	スナイドル銃弾	I11		A2/B	陶/茶	未使用			27.7	15.4	31.6	
		232	スナイドル銃弾	F10		A2/B	陶/茶	頭部			(23.5)	(15.5)	28.4	
		237	スナイドル銃弾	D10		A2	-	側部	マッシュルーム状		(17.6)	(22.6)	29.4	
第58回	107	248	スナイドル銃弾	D10		B	-	側部			(24.9)	(14.7)	27.9	
		279	スナイドル銃弾	D1		-	-	側部			(21.5)	(19.7)	28.0	
		280	スナイドル銃弾	D1		-	陶/灰	頭部			(24.3)	(18.3)	28.2	
		281	スナイドル銃弾	D1		A2/B	陶/茶	頭部			(19.9)	(17.0)	29.3	
第56回	41	282	エンフィールド銃弾	D2		a	-	発射痕のみ			22.7	14.7	29.6	
		283	スナイドル銃弾	D2		A2	-	側部			(27.1)	(23.4)	28.4	
		284	スナイドル銃弾	D2		A	-	頭部	7mmの穴		(22.3)	(15.8)	27.8	
		285	スナイドル銃弾	D2		A2/B	-	全体			-	-	28.2	
第56回	38	287	エンフィールド銃弾	D3		b	-	発射痕のみ	○		27.2	14.8	31.4	
		288	スナイドル銃弾	D3		-	陶/灰	頭部			(19.2)	(24.5)	26.0	
		289	エンフィールド銃弾	D2		b	-	側部			(30.5)	(20.7)	31.0	
		290	スナイドル銃弾	D4		A2	-	頭部			(24.8)	(14.4)	26.8	
		291	スナイドル銃弾	D4		A2	-	頭部	7mmの凹み		(20.5)	(18.6)	28.0	
		293	エンフィールド銃弾	D7	S50E SE9	b	-	側部			(29.7)	(16.9)	31.1	
		294	スナイドル銃弾	D9		-	-	側部		○	-	-	28.3	
第58回	91	295	スナイドル銃弾	C9	S50E SW15	B	-	側部		裾部狭	(26.6)	(19.4)	29.3	
第56回	22	296	エンフィールド銃弾	C9	S80W SW6	b	-	側部			(26.7)	(16.5)	32.0	
		297	スナイドル銃弾	C9		-	-	破片			-	-	8.6	
第56回	43	298	エンフィールド銃弾	C7		-	-	寸詰り			(19.3)	(14.4)	22.0	
第57回	71	299	スナイドル銃弾	C7		A2	-	側部	凹み		(21.9)	(19.2)	27.8	
		301	エンフィールド銃弾	C7	真上	-	-	頭部			(14.4)	(22.8)	20.7	
		302	スナイドル銃弾	C7	N20W SE32	A2	-	頭部	4mmの凹み		(23.8)	(14.8)	28.2	
		303	スナイドル銃弾	C7		-	-	側部			(24.5)	(26.5)	26.9	
第56回	3	304	エンフィールド銃弾	C6		b	木	側部			25.6	(14.8)	32.3	
第57回	81	307	スナイドル銃弾	C6	N30E SW24	A	-	頭部	穴あり 潰れ		(19.4)	(20.0)	26.4	
		308	スナイドル銃弾	C6		B	-	発射痕のみ			25.9	14.6	29.2	
		309	スナイドル銃弾	C5	S30W SW25	A2/B	-	側部			(31.8)	(19.5)	29.4	
第58回	100	310	スナイドル銃弾	C5		B	-	側部			(25.1)	(17.5)	29.2	
		311	スナイドル銃弾	C5		B	-	側部			(26.7)	(15.6)	29.3	
第58回	120	312	スナイドル銃弾	C4		A2/B	木	頭部			(24.8)	(16.5)	28.4	口徑に合わない為長く伸びる

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	入射角	分類	栓	潰れ方	鋳直し痕	圈溝幅	縦方向の規則的な刻み目	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	備考
第58回	121	314	スナイドル銃弾	C4	A2/B	木	頭部				(20.3)	(18.7)	31.6	
		315	スナイドル銃弾	C3	N80W NW39	A2/B	陶/茶	頭部	5mmの凹み		(20.4)	(14.9)	28.6	
		316	スナイドル銃弾	C3		A2/B	-	側部			(26.0)	(22.2)	24.8	
		317	スナイドル銃弾	C3		A2/B	-	側部			(24.5)	(25.2)	28.5	
第56回	1	318	エンフィールド銃弾	C2	S12W NE36	b	木	未使用			26.7	14.2	32.5	
		319	スナイドル銃弾	C1	S60E NW2	A2/B	陶/茶	側部			(25.6)	(14.6)	29.7	
		321	スナイドル銃弾	B4	N50W NW12	B	-	側部			(17.4)	(23.7)	29.2	
		322	スナイドル銃弾	B3		-	-	側部			(17.4)	(22.1)	27.9	
		324	エンフィールド銃弾	A3		b	-	全体			-	-	28.7	
第58回	111	325	スナイドル銃弾	A3		B	-	側部			(29.2)	(19.2)	28.7	
第58回	110	326	スナイドル銃弾	D11		B	-	側部			(19.9)	(21.7)	29.9	
		327	スナイドル銃弾	C1		A2	-	側部			(25.5)	(16.8)	28.1	
		328	スナイドル銃弾	A3		A2	-	側部	凹み		(19.9)	(19.4)	28.2	
		329	スナイドル銃弾	J7	N30E SW12	B	-	側部			(26.5)	(15.9)	28.2	
		331	スナイドル銃弾	J7	N50W SE13	A2/B	陶/茶	側部	5mmの凹み		(25.1)	(16.9)	28.1	
		332	スナイドル銃弾	J8	N5 N40	A2/B	陶/茶	側部	凹み		(23.2)	(14.8)	29.0	
第58回	124	333	スナイドル銃弾	J8	S50E SE5	A2/B	木	側部			(29.1)	(22.9)	28.7	
第57回	76	334	スナイドル銃弾	J8	N80W SE85	A	-	側部	マッシュルーム状		(16.1)	(25.7)	28.1	
第58回	113	335	スナイドル銃弾	J9		A2/B	陶/茶	未使用			27.5	14.0	29.8	
		337	スナイドル銃弾	H5		A2	-	側部			(20.9)	(26.2)	28.1	
第57回	82	339	スナイドル銃弾	H5		A	-	側部	穴あり潰れ		(15.4)	(22.1)	28.3	
		340	スナイドル銃弾	H6		-	-	破片			-	-	19.0	
		344	エンフィールド銃弾	G4	S50E NE4	b	木	発射痕のみ			25.7	14.1	30.2	
		346	スナイドル銃弾	G4	N32W SE31	B	-	側部			(20.5)	(16.9)	29.3	
第57回	80	350	スナイドル銃弾	F6	S73W SW33	A	-	側部	破れ		(22.8)	(25.0)	27.7	
第58回	88	351	スナイドル銃弾	F5		B	-	側部		○	(25.2)	(14.5)	28.0	
第57回	67	352	スナイドル銃弾	F7	N70W SE1	A2	-	側部	凹み		(27.0)	(14.5)	27.0	
第56回	11	353	エンフィールド銃弾	F7	S20W NE5	b	陶/茶	側部			25.7	14.5	30.0	先端尖る
		354	スナイドル銃弾	F8	S12E SE10	A2	-	側部			14.8	(25.3)	27.9	
第58回	90	355	スナイドル銃弾	F8		B	-	側部		○	(26.2)	(14.7)	29.5	
		356	スナイドル銃弾	F8	N60E NE25	A2	-	全体	6mmの凹み		-	-	25.8	
		357	スナイドル銃弾	F9		B	-	側部			(23.5)	(30.8)	26.9	
		358	スナイドル銃弾	F9		A2	-	側部			(24.1)	(16.2)	28.5	
		359	スナイドル銃弾	F9		A2/B	陶/茶	側部			(21.1)	(18.4)	28.8	
第56回	10	360	エンフィールド銃弾	F9	S46W NE7	b	木	側部			(18.2)	(22.3)	32.4	
第57回	63	361	スナイドル銃弾	F9		A2	陶/茶	側部	6mmの凹み		(25.6)	(16.1)	28.0	
		362	スナイドル銃弾	E8		A2/B	陶/茶	側部	3mmの凹み		(26.1)	(14.0)	28.7	
		363	スナイドル銃弾	E8	測定不可	-	-	全体			(10.0)	(30.9)	25.3	
		364	スナイドル銃弾	E8		A2	-	側部	凹み	○	(25.5)	(15.1)	27.6	
第58回	96	365	スナイドル銃弾	E8		B	-	側部	4mmの凹み		(22.3)	(21.4)	28.7	
		367	スナイドル銃弾	E8		A	-	全体	10mmの穴あり潰れ		(10.6)	(24.8)	25.7	
第57回	83	368	スナイドル銃弾	E9		A	-	側部	穴あり潰れ		(19.0)	(25.8)	28.9	
		369	スナイドル銃弾	E8		A1	-	側部			(28.1)	(16.6)	26.6	木片残る
		370	スナイドル銃弾	E9		A2/B	-	側部			(23.3)	(21.0)	29.0	
		371	スナイドル銃弾	E7	N19E SW21	A	-	全体	穴あり潰れ		(25.8)	(17.5)	27.5	
		372	スナイドル銃弾	E7		A	-	側部	破れ		(21.8)	(21.7)	28.1	
第57回	68	373	スナイドル銃弾	E7	S3E NW12	A2	-	側部			(25.1)	(15.9)	28.9	
		374	スナイドル銃弾	E7	N87W NW2	-	-	側部			(18.1)	(17.5)	28.6	
		375	スナイドル銃弾	E7		-	-	破片			-	-	6.9	
		377	スナイドル銃弾	E7		-	-	側部			(16.6)	(23.4)	27.5	
		378	スナイドル銃弾	E6		A2	-	側部			(26.7)	(15.0)	28.4	
		379	スナイドル銃弾	E6		A2/B	陶/茶	側部			(25.6)	(14.8)	29.2	
第56回	40	380	エンフィールド銃弾	E6	N2E SW43	a	-	発射痕のみ			24.5	(14.6)	33.2	
		381	スナイドル銃弾	E6		A2/B	陶/茶	側部	穴あり マッシュルーム状		(18.9)	(29.3)	25.1	
		382	スナイドル銃弾	E5		A	-	側部	穴あり潰れ		(25.5)	(17.9)	26.7	
		383	スナイドル銃弾	E5	S52W SW6	A2/B	陶/灰	側部			(26.6)	(15.5)	29.4	
		384	スナイドル銃弾	E5		-	-	破片			-	-	7.9	
		385	スナイドル銃弾	E5		-	-	破片			-	-	3.0	
		386	スナイドル銃弾	E5		-	-	側部	穴あり潰れ		(29.3)	(19.8)	28.9	
		387	スナイドル銃弾	E5	N30W SE23	A2/B	陶/灰	側部			(25.5)	(14.3)	28.3	
		388	スナイドル銃弾	E4	S2E NW7	A2	-	側部	凹み		(22.6)	(16.5)	28.0	
		389	エンフィールド銃弾	E3		b	-	全体			-	-	24.6	
第57回	52	390	スナイドル銃弾	E3	S3E SE3	A1	-	側部			(21.1)	(20.1)	28.4	木片残る
第56回	17	391	エンフィールド銃弾	E3	N70E NE18	b	-	発射痕のみ	先端輪状		26.8	14.6	30.7	
		392	スナイドル銃弾	E3		B	-	側部			(15.3)	(26.8)	28.8	
第58回	93	393	スナイドル銃弾	E2	N82E SW23	B	-	側部			(20.7)	(14.8)	28.4	
		395	スナイドル銃弾	D1	S50E NW70	B	-	側部			(23.0)	(14.1)	28.1	
第57回	53	397	スナイドル銃弾	D1		A1	-	側部			(22.2)	(17.2)	28.7	木片残る
		398	スナイドル銃弾	D2		A2/B	陶/茶	発射痕のみ			26.5	14.7	28.3	口径に合わない為長く伸びる
		399	スナイドル銃弾	D2		-	-	破片			-	-	5.7	
		400	スナイドル銃弾	D3		A	-	側部	10mmの穴		(23.4)	(15.7)	28.0	
第57回	66	401	スナイドル銃弾	D3		A2	-	側部	発射痕のみ		26.5	14.5	26.7	器壁薄い、灰色がかかる
		402	スナイドル銃弾	E5		A2	-	側部			(25.3)	(15.6)	28.3	
		403	スナイドル銃弾	D5	S60W NE77	-	-	側部			(15.7)	(27.6)	28.2	
		404	スナイドル銃弾	D5	S50W NE61	A	-	側部	マッシュルーム状		(18.7)	(28.8)	27.4	
第58回	102	405	スナイドル銃弾	D6	S30E SE15	B	-	側部	発射痕のみ		26.6	15.0	29.5	
		406	スナイドル銃弾	D6		B	-	側部			(24.7)	(14.6)	27.1	
第58回	128	407	スナイドル銃弾	D6		A2/B	陶/茶	側部			(14.1)	(27.2)	29.9	口径に合わない為長く伸びる
第58回	103	408	スナイドル銃弾	D7		B	-	側部			(27.0)	(15.0)	28.6	
		409	スナイドル銃弾	D7		A	-	側部	8mmの穴	○	(20.0)	(19.1)	28.3	
		411	スナイドル銃弾	D7		-	-	破片			-	-	14.0	
		412	スナイドル銃弾	D7	S20E NW1	A2	-	側部			(25.0)	(16.2)	27.4	
		413	エンフィールド銃弾	D8		-	-	全体			-	-	13.8	
		415	スナイドル銃弾	D8		A2/B	陶/灰	側部	7mmの凹み		(20.0)	(14.7)	28.7	
第57回	77	416	スナイドル銃弾	D9		A	-	側部	マッシュルーム状		-	-	27.7	
		417	エンフィールド銃弾	D9		-	-	側部	穴		(20.5)	(21.0)	29.3	
		418	スナイドル銃弾	C9		A2	陶/茶	側部			(24.7)	(17.2)	29.6	
		419	スナイドル銃弾	C8		-	-	破片			-	-	15.1	
		420	スナイドル銃弾	C8		B	-	側部			(25.7)	(14.7)	29.4	
第56回	15	421	エンフィールド銃弾	C8	S76W NE1	b	-	発射痕のみ			25.6	14.4	32.1	
		422	スナイドル銃弾	C8		B	-	側部			(24.2)	(18.3)	30.6	
		423	スナイドル銃弾	C8		A2	-	側部	2mmの凹み		(25.3)	(14.5)	28.5	
第58回	89	424	スナイドル銃弾	C7	S26E SE15	B	-	側部			(26.8)	(14.5)	29.1	
		425	スナイドル銃弾	C7		-	-	全体			(21.5)	(30.1)	20.7	
第56回	24	426	エンフィールド銃弾	C7	S50W NE4	b	-	側部			(26.7)	(15.0)	30.2	

第IV章 横平山戦跡の調査

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	入射角	分類	栓	潰れ方		鋳直し痕	圏溝幅	縦方向の規則的な刻み目	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	備考
	427	エンフィールド銃弾	C7		b	-	全体	マッシュルーム状				(29.4)	(23.9)	18.6	
	428	スナイドル銃弾	C5	S56W SW26	A2/B	陶/灰	側部					(27.2)	(14.3)	27.9	
第58国	101	429	スナイドル銃弾	C5	S40E NW15	B	-	側部				(25.5)	(15.3)	27.8	
	430	スナイドル銃弾	C5		A2/B	-	頭部					(18.5)	(23.5)	28.2	
	431	スナイドル銃弾	C4		A2	-	頭部	凹み				(25.1)	(18.5)	28.1	
第57国	48	432	スナイドル銃弾	C4		A1	陶/茶	頭部		裾部狭		(22.8)	(17.1)	30.6	木片残る
	433	スナイドル銃弾	C4		B	-	発射痕のみ					27.0	14.9	28.3	
	435	エンフィールド銃弾	C3		-	-	側部					(30.1)	(15.7)	30.4	
	436	スナイドル銃弾	C3	N10E NE22	-	-	破片					(21.8)	(26.1)	20.3	
第58国	125	437	スナイドル銃弾	C3	S62W SW41	A2/B	陶/茶	頭部				24.3	(14.7)	29.0	
	439	スナイドル銃弾	C2	S20W SW24	A2	-	頭部					(16.8)	(19.6)	27.6	
	441	スナイドル銃弾	C2		A2	-	頭部					(25.4)	(15.7)	28.4	
	442	スナイドル銃弾	C2		A2	-	側部					(28.3)	(16.1)	27.3	
第57国	70	443	スナイドル銃弾	C2	S20E NW2	A2	-	側部				(27.1)	(21.4)	27.1	側部が二重
第56国	8	444	エンフィールド銃弾	C2	S64W NE7	b	木	頭部				(26.0)	(15.3)	32.5	
第56国	19	445	エンフィールド銃弾	C2		b	-	側部				(26.9)	(15.8)	30.0	
	446	エンフィールド銃弾	C1		b	-	側部					(24.2)	(15.7)	34.9	
	447	エンフィールド銃弾	C1	S56W SW4	-	-	全体					(15.6)	(25.1)	32.8	
	449	エンフィールド銃弾	C1		b	-	側部					(24.1)	(20.9)	24.5	
	450	スナイドル銃弾	B2		-	-	頭部					(22.5)	(27.9)	26.3	
	451	スナイドル銃弾	B2		-	-	破片					-	-	8.6	
第56国	27	452	エンフィールド銃弾	B2		b	-	側部				26.0	(14.8)	31.0	
	453	スナイドル銃弾	A2		-	-	側部					(28.5)	(16.6)	24.5	
第57国	64	456	スナイドル銃弾	B3		A2	-	側部	5mmの凹み			(26.0)	(14.3)	28.4	
第58国	109	457	スナイドル銃弾	B3	S70W NE23	B	-	全部	先端部凹み	裾部狭		22.6	19.5	27.9	
	458	スナイドル銃弾	B3	S16W SW5	A2/B	-	側部					(25.5)	(19.3)	28.2	
	459	スナイドル銃弾	B3	S14E NW4	A2	-	頭部	6mmの凹み				(22.7)	(14.5)	27.9	
	460	スナイドル銃弾	B3		A2/B	-	頭部					(14.3)	(26.6)	31.7	
	461	スナイドル銃弾	B3		-	-	側部			○		(22.7)	(17.5)	28.1	
	463	スナイドル銃弾	B4	N80W SE10	B	-	側部					(26.1)	(16.5)	30.7	
	464	スナイドル銃弾	A4		-	-	全体					(20.6)	(20.3)	25.7	
第56国	23	465	エンフィールド銃弾	E5		b	-	側部				(25.0)	(15.8)	31.7	
第58国	95	466	スナイドル銃弾	B5	S50E SE61	B	-	頭部				(26.7)	(17.4)	28.5	
	467	スナイドル銃弾	O8		-	-	破片					-	-	14.3	
	470	スナイドル銃弾	O8		A2/B	陶/茶	頭部		裾部狭			(23.4)	(14.4)	27.2	
	478	エンフィールド銃弾	P8		b	-	側部					(27.2)	(15.3)	31.1	
第56国	42	481	エンフィールド銃弾	P8		-	寸詰り					(20.3)	(14.1)	22.8	
	493	スナイドル銃弾	O9		B	-	側部	4mmの穴あり 貫通				(25.2)	(18.3)	27.8	
第58国	126	494	スナイドル銃弾	O9	S10E SE4	A2/B	陶/茶	発射痕のみ				(27.1)	14.9	29.3	口径に合わない為長く伸びる
	498	スナイドル銃弾	O9	N30W NW18	A2/B	-	側部					(31.6)	(16.1)	29.5	
第58国	106	499	スナイドル銃弾	O9		B	-	側部				(25.5)	(13.2)	29.9	
第56国	12	507	エンフィールド銃弾	P9		b	-	未使用	○			26.8	14.3	32.8	
	509	エンフィールド銃弾	O9	S28E NE8	b	木	未使用					26.2	14.2	31.4	
	511	スナイドル銃弾	O9	N40W SE12	A2	-	側部					(20.1)	(19.8)	26.4	
第56国	26	522	エンフィールド銃弾	O10		b	-	頭部				(22.7)	(15.5)	32.4	
第56国	29	523	エンフィールド銃弾	O10	N18W SE16	b	-	頭部				25.1	14.8	29.8	
	561	スナイドル銃弾	N10		-	-	破片					-	-	13.6	
第56国	35	565	エンフィールド銃弾	N10	N12E NE23	-	-	側部				(29.2)	(27.3)	32.7	
	566	エンフィールド銃弾	N10		b	-	頭部					(21.2)	(18.6)	28.3	
	570	スナイドル銃弾	N9		A	陶/茶	頭部	潰れ				(17.5)	(18.9)	19.6	
第56国	39	571	エンフィールド銃弾	N9		-	側部					(24.7)	(15.4)	27.4	
	572	スナイドル銃弾	N9		A	-	頭部	マッシュルーム状				(12.5)	(33.9)	28.5	
	573	スナイドル銃弾	N9		B	-	頭部					(17.9)	(22.6)	29.8	
	576	スナイドル銃弾	N8		-	-	全体					-	-	19.7	大きく破れる
	580	スナイドル銃弾	M9	S40E NW2	A2/B	-	全体					(26.8)	(23.5)	27.2	
	581	スナイドル銃弾	M10		-	-	破片					-	-	5.7	
	584	エンフィールド銃弾	M10		-	-	側部					(25.6)	(20.5)	31.7	
	585	スナイドル銃弾	M10	S52E SE12	A2	-	側部					(25.9)	(15.8)	27.6	
	587	スナイドル銃弾	M11		A	-	頭部	マッシュルーム状		○		(12.5)	(35.2)	28.7	
	590	スナイドル銃弾	M12		A2	-	頭部					(23.3)	(19.4)	27.4	
	591	スナイドル銃弾	M12		-	木	全体					-	-	23.0	
	593	エンフィールド銃弾	M10		b	-	頭部					14.9	(22.2)	30.3	
	594	エンフィールド銃弾	M8		-	-	側部					(25.1)	(16.6)	31.1	
	598	スナイドル銃弾	F3		-	-	破片					-	-	11.3	
	599	スナイドル銃弾	F3		A	-	頭部	5mm穴				(20.8)	(16.5)	28.0	
	601	スナイドル銃弾	F3		-	-	破片					-	-	7.5	
	602	スナイドル銃弾	G3	S4E SE6	A	-	頭部	4mm穴				(24.8)	(14.3)	27.5	
第58国	99	603	スナイドル銃弾	F4		B	-	側部				(26.3)	(21.0)	29.8	
第58国	97	604	スナイドル銃弾	F4		B	-	頭部		裾部狭		(19.5)	(18.0)	28.8	
	605	スナイドル銃弾	F4	S70W NE32	A2	-	側部					(25.5)	(16.0)	28.6	
	606	スナイドル銃弾	F3		A2/B	陶/茶	頭部	6mmの凹み				(21.9)	14.5	29.4	
	607	スナイドル銃弾	F4		A2/B	-	側部					(25.9)	(15.8)	26.6	
	609	スナイドル銃弾	F5	N80W SE61	A2	-	頭部					(20.2)	(20.0)	27.7	
	610	スナイドル銃弾	F5		-	-	破片					-	-	7.4	
	611	スナイドル銃弾	F5		A2/B	-	側部					(26.5)	(16.2)	28.6	
第56国	13	613	エンフィールド銃弾	F6		b	-	発射痕のみ				26.9	13.3	32.2	
	614	エンフィールド銃弾	F6		b	-	頭部					(21.9)	(16.7)	32.0	
	615	スナイドル銃弾	F6		A2	-	頭部					(23.9)	(14.9)	28.6	
	616	スナイドル銃弾	F6		-	-	破片					-	-	8.0	
第57国	74	617	スナイドル銃弾	F6		A	-	側部	2mm穴			(23.8)	(14.5)	28.0	
	618	エンフィールド銃弾	F6		-	-	全体					(20.3)	(20.5)	22.9	
	619	スナイドル銃弾	F6		A	-	側部	6mmの穴				(26.0)	(17.5)	29.4	
	620	エンフィールド銃弾	F6		b	-	側部					27.4	14.5	32.2	先端尖る
	621	スナイドル銃弾	F6		A2	-	側部					(26.2)	(17.3)	28.5	
	622	エンフィールド銃弾	F6		-	-	破片					-	-	3.3	
	623	スナイドル銃弾	G6		-	-	破片					-	-	14.6	
	624	スナイドル銃弾	G6		B	-	頭部	凹み				(20.4)	(18.3)	29.2	
	625	スナイドル銃弾	G6		-	-	全体					(22.2)	(22.7)	29.4	
	626	エンフィールド銃弾	F7		b	木	側部					(25.9)	(15.7)	32.5	
	627	スナイドル銃弾	F7		-	-	破片					-	-	7.9	
	628	エンフィールド銃弾	F8		-	-	頭部					(23.9)	(26.6)	33.3	
	630	スナイドル銃弾	F8		B	-	側部					(25.6)	(14.5)	28.1	軽微め
	631	スナイドル銃弾	F8		B	-	頭部					(19.0)	15.3	28.8	
	632	スナイドル銃弾	F8		A2	木	側部					(25.1)	(14.7)	28.6	
第58国	105	633	スナイドル銃弾	F8		B	-	側部				(29.6)	(15.5)	29.3	灰色がかかる





第IV章 横平山戦跡の調査

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	入射角	分類	栓	潰れ方	錆直し痕	圏溝幅	縦方向の規則的な刻み目	全長 (mm)	径 (mm)	質量 (g)	備考
第58国	92	811	スナイドル銃弾	I9	B	-	頭部		裾部狭		(228)	(143)	29.2	
		812	スナイドル銃弾	I9	-	-	破片				-	-	3.6	
		813	スナイドル銃弾	J9	A2	-	頭部				(24.4)	(16.4)	28.6	
		814	スナイドル銃弾	J8	A2	-	側部	4mmの凹み			(24.1)	(15.2)	27.8	
第57国	57	815	スナイドル銃弾	J8	A2	陶/茶	未使用				27.0	15.6	29.0	
		818	スナイドル銃弾	J6	A	-	側部	破れ			(24.8)	(28.2)	28.0	
		819	スナイドル銃弾	J6	A2	-	側部				(26.3)	(15.8)	29.1	
		821	スナイドル銃弾	K8	A2/B	-	側部				(28.9)	(19.2)	28.6	
		822	スナイドル銃弾	I6	A2	-	側部	凹み			(25.2)	(14.3)	28.1	
		823	スナイドル銃弾	I6	A	-	側部	マッシュルーム状			(18.7)	(23.4)	28.6	
第56国	45	824	エンフィールド銃弾	I6	-	-	寸詰り				(14.3)	(14.4)	18.2	
		825	スナイドル銃弾	I6	-	-	破片				-	-	6.0	
		826	エンフィールド銃弾	I6	b	-	頭部				(15.2)	(25.0)	30.3	
第58国	131	828	シャープス銃弾	I6	-	-	頭部				(18.7)	(13.8)	27.6	
第56国	32	829	エンフィールド銃弾	I6	b	-	側部				(28.2)	(15.8)	31.7	
		832	スナイドル銃弾	I7	A2/B	陶/茶	頭部				(25.8)	(15.2)	29.4	
第58国	116	833	スナイドル銃弾	I7	A2/B	陶/茶	未使用				27.6	15.0	29.1	薬莢の錆付着
		834	エンフィールド銃弾	I7	-	-	頭部				(27.3)	(18.4)	27.3	
		838	スナイドル銃弾	I7	S8E SE2	A2	-	発射痕のみ			26.3	14.7	28.2	
		839	スナイドル銃弾	I8	B	-	未使用				14.0	27.2	29.6	
第57国	61	841	スナイドル銃弾	I8	A2	-	未使用	尖る			27.0	14.8	30.7	
第58国	117	842	スナイドル銃弾	I8	A2/B	陶/茶	未使用				27.1	15.8	30.0	
		843	スナイドル銃弾	I8	A	-	頭部		○		(14.6)	(24.1)	28.5	
第57国	78	844	スナイドル銃弾	J10	A	陶/茶	側部	3mmの穴			(25.6)	(14.2)	29.6	
		848	エンフィールド銃弾	K7	b	-	未使用				27.2	14.1	33.4	
		850	スナイドル銃弾	K7	-	-	破片				-	-	3.7	
		855	スナイドル銃弾	K8	-	-	破片				-	-	4.2	
第58国	118	856	スナイドル銃弾	K8	N8OE SW1	A2/B	陶/茶	未使用			26.4	14.2	27.1	
		860	スナイドル銃弾	H10	A2	-	側部				(24.0)	(21.3)	28.6	
第57国	75	861	スナイドル銃弾	H10	A	陶/茶	頭部	破れ	裾部狭	○	(22.4)	(17.6)	29.7	
第57国	62	862	スナイドル銃弾	H10	A2	陶/茶	側部				(25.9)	(14.7)	29.7	
		864	スナイドル銃弾	H10	-	-	側部				(22.7)	(23.2)	28.8	
		866	エンフィールド銃弾	G10	b	-	側部				(17.4)	(29.9)	31.4	
		867	スナイドル銃弾	G10	A	-	頭部	9mmの穴			(20.7)	(21.3)	28.5	
第57国	72	868	スナイドル銃弾	G9	A2	-	頭部	8mmの凹み			(19.0)	(20.3)	29.0	
第57国	54	869	スナイドル銃弾	F11	A1	-	頭部	穴あり 潰れ			(22.5)	(18.3)	28.4	
		870	スナイドル銃弾	F11	A2/B	陶/灰	側部	凹み			(25.8)	(14.6)	28.6	
		871	スナイドル銃弾	F10	A	-	頭部	マッシュルーム状			(9.5)	(38.6)	27.1	
		872	スナイドル銃弾	F9	A2/B	-	側部				(26.2)	(15.9)	29.2	
		873	スナイドル銃弾	F10	A2/B	陶/茶	側部	8mmの凹み			(25.2)	(14.1)	29.1	
第56国	20	874	エンフィールド銃弾	E10	b	-	側部				(24.7)	(15.2)	31.3	
		875	スナイドル銃弾	D10	-	-	側部				(34.4)	(28.2)	28.2	
第56国	5	876	エンフィールド銃弾	D10	b	木	側部				(27.0)	(15.0)	31.8	
第56国	21	877	エンフィールド銃弾	D10	b	-	側部				(26.4)	(14.8)	31.9	
第58国	104	878	スナイドル銃弾	D10	B	-	頭部				(26.2)	(16.0)	28.9	
		879	スナイドル銃弾	D11	-	-	破片				-	-	16.2	
		880	スナイドル銃弾	D10	-	-	破片				-	-	16.0	
		881	スナイドル銃弾	D11	B	-	頭部	裾部狭			(24.1)	(15.8)	28.5	
		882	スナイドル銃弾	D11	A2	-	側部				(25.3)	(15.5)	27.8	
第56国	36	887	エンフィールド銃弾	I9	b	-	側部				(30.0)	(18.2)	31.9	
第58国	108	890	スナイドル銃弾	O8	B	-	側部				(25.9)	(16.5)	28.3	灰色がかかる
		891	スナイドル銃弾	O8	-	-	破片				-	-	6.1	
		892	エンフィールド銃弾	N9	-	-	破片				-	-	11.3	
第58国	127	893	スナイドル銃弾	N9	A2/B	陶/茶	側部				(28.0)	(15.3)	29.2	口径に合わない為長く伸びる
		895	エンフィールド銃弾	N9	-	-	破片				-	-	4.5	
第56国	4	896	エンフィールド銃弾	N9	b	木	発射痕のみ	○			27.6	14.4	33.4	
		897	スナイドル銃弾	N10	-	-	破片				-	-	2.0	
		899	スナイドル銃弾	N10	A2	-	側部			○	-	-	27.4	
第58国	130	900	シャープス銃弾	K6	-	-	側部				24.8	13.5	27.8	
第58国	123	901	スナイドル銃弾	K7	A2/B	陶/茶	頭部				(25.0)	(15.3)	29.7	
第56国	6	902	エンフィールド銃弾	N10	b	木	側部				(27.6)	(13.4)	29.6	
第58国	94	903	スナイドル銃弾	N9	B	-	頭部	裾部狭			(21.0)	(13.8)	28.5	
		904	スナイドル銃弾	N9	-	-	頭部				(17.1)	(18.3)	28.6	
		906	スナイドル銃弾	N9	A2	-	発射痕のみ				27.0	14.4	28.5	
		907	スナイドル銃弾	N9	-	-	破片				-	-	1.4	
第56国	25	908	エンフィールド銃弾	N9	b	-	側部				(23.7)	(17.2)	32.3	
第56国	31	909	エンフィールド銃弾	N9	-	-	側部				(28.0)	(18.9)	30.0	
		2000	スナイドル銃弾	E2	A2	-	側部				(26.0)	15.4	27.6	
		2001	スナイドル銃弾	E2	B	-	側部				24.2	(16.9)	29.2	
		2002	スナイドル銃弾	E2	A2/B	木	側部				25.7	(16.5)	27.0	
		2003	エンフィールド銃弾	F3	b	-	頭部				(21.4)	(17.5)	31.7	
		2004	エンフィールド銃弾	F3	b	木	頭部				(25.2)	17.0	31.5	
		2005	スナイドル銃弾	F3	A2	-	頭部	穴あり 潰れ			(21.4)	(19.8)	28.3	
		2006	スナイドル銃弾	F3	A2/B	陶/茶	側部	1mmの穴			26.0	(14.6)	28.4	灰色がかかる
		2007	スナイドル銃弾	F3	A	-	頭部				(17.1)	(33.3)	26.4	
		2008	スナイドル銃弾	F3	A2/B	陶/茶	発射痕のみ	3mmの穴			25.1	14.1	28.3	
		2009	エンフィールド銃弾	F4	b	-	頭部				(21.1)	(18.7)	30.7	
		2010	エンフィールド銃弾	F4	b	-	頭部				(20.8)	14.6	21.0	
		2011	エンフィールド銃弾	F4	a	-	頭部				(11.3)	(26.2)	23.3	
		2012	エンフィールド銃弾	F4	b	-	発射痕のみ				30.0	18.2	33.2	
		2014	スナイドル銃弾	F4	B	-	頭部				(25.5)	14.4	28.0	
第57国	49	2015	スナイドル銃弾	F4	A1	陶/茶	発射痕のみ	裾部狭			25.3	14.8	29.4	木片残る
		2016	スナイドル銃弾	G4	A2/B	陶/茶	頭部	穴あり 潰れ			(24.7)	15.1	29.1	
		2017	スナイドル銃弾	F3	B	-	頭部				(23.1)	14.8	29.6	
		2018	スナイドル銃弾	E5	A2	-	側部				(26.6)	15.2	28.4	
		2019	スナイドル銃弾	E5	A	-	側部	5mmの凹み			25.9	16.3	28.7	灰プラグの跡
		一括1 - 1	エンフィールド銃弾	N9	a	-	頭部				(20.2)	(18.0)	27.7	
		一括2	スナイドル銃弾	N9	-	-	全体				-	-	28.1	
		表採1	エンフィールド銃弾	H5	-	-	側部				(18.9)	(27.8)	29.3	
		表採2	スナイドル銃弾	H5	A2	-	発射痕のみ				25.8	14.6	28.1	
		表採3	エンフィールド銃弾	-	b	-	発射痕のみ				14.5	26.9	32.5	



## 横平山戦跡の植物珪酸体分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

### 1 はじめに

横平山戦跡は西南戦争の要塞跡である。山頂部からは塹壕跡が検出されており、俵などを用いた土嚢で構築された壁体を持つ防塁などの遺構が想定されている。今回は、胸壁土構造物中の稲藁などの利用状況に関する情報を得ることを目的として、植物珪酸体分析を実施した。

### 2 試料

分析試料は、胸壁の可能性のある複数箇所から採取されている(第5表)。

分析試料の土質は、いずれの試料も類似し、暗褐～褐色を呈する粘土・シルトからなる土壌である。

### 3 分析方法

今回の調査では植物組織片や珪化組織片の産状を確認することが目的である。植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。俵などではイネ科植物が利用されていれば、その痕跡が珪化組織片などの形で残されている可能性が考えられる。そこで、今回の試料については、次のように段階的に分析調査を実施した。

第5表 分析試料

調査区	トレンチ	層位/遺構	試料	試料の状態
O-10	3Tr	1層下面	サンプリング1	ビニル袋入り
		"	"	アルミ箔入り
		"	サンプリング2	ビニル袋入り
		"	"	アルミ箔入り
		"	サンプリング3	ビニル袋入り
M-12	2Tr	"	サンプリング4	アルミ箔入り
		"	"	ビニル袋入り
		"	サンプリング5	アルミ箔入り
O-9	5Tr	2層	サンプリング①	フィルムケース入り
		2層	サンプリング②	フィルムケース入り
		1層	サンプリング③	フィルムケース入り
		SD1-9層	サンプリング④	フィルムケース入り
		SD1-13層	サンプリング⑤	フィルムケース入り
O-8	4Tr	SD1-9層	サンプリング⑥	ビニル袋入り
		1層	サンプリング⑦	ビニル袋入り
		1層	サンプリング⑧	ビニル袋入り
		2層	サンプリング⑨	ビニル袋入り
O-8	4Tr	SD1-9層	サンプリング⑥	フィルムケース入り
		1層	サンプリング⑦	フィルムケース入り
		1層	サンプリング⑧	フィルムケース入り
		2層	サンプリング⑨	フィルムケース入り

※サンプリング試料採取位置は①～⑨は69頁を参照  
 その他はトレンチ土層断面より採取

#### 1) 肉眼・実体顕微鏡による植物組織の有無に関する観察

各試料について、肉眼・実体顕微鏡下で植物遺体の有無を確認し、確認された場合、組織について灰像分析を実施する。

#### 2) 土壌試料中の珪化組織片の検出

各試料より、湿重5g前後の試料を採取し、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム,比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。

結果は、検出された分類群とその個数の一覧表で示す。

#### 3) 結果

分析結果を第6表に示す。

各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、概して検出個数が少ない。また保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

ビニール袋やアルミ箔に入れられていた土壌試料(3Tr、2Tr、4Tr)のうち、珪化組織片が確認できたのは3Trの

サンプリング②だけであり、栽培植物であるイネ属の短細胞列がわずかに見られる。4Trのサンプリング⑨では、イネ科の稈(茎)の表皮のような植物遺体が混入していたが、これには珪化組織が見られず、植物の特定は困難である。この他、単体の植物珪酸体として、イネ属、メダケ節を含むタケ亜科、ススキ属を含むウシクサ族、シバ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。また、イネ科起源の他に樹木起源の植物珪酸体として、クスノキ科の葉部に形成される植物珪酸体に似た形態もわずかに認められる。なお、アルミ箔入り土壌試料では検出個数が少なく、タケ亜科などが数個～20個程度認められるに過ぎない。

フィルムケースに入れられていた土壌試料(5Tr、4Tr)では、5Tr2層のサンプリング②でウシクサ族機動細胞列がわずかに認められるだけである。この他、イネ属、メダケ節を含むタケ亜科、ススキ属を含むウシクサ族、シバ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。

4) 考察

分析を行った試料では、3Trのサンプリング2でイネ属の珪化組織片がわずかに検出されたに過ぎなかった。この珪化組織片が依り由来するものであれば、材料のひとつとして稲藁の利用が想定されることになる。この点については、調査地点における遺構の立地や周辺に分布する土壌、稲作地の有無などを考慮して検討する必要がある。

検出された植物珪酸体の分類群の構成は、4Trや5Trの土層・溝(SD1やSD2)でも見られ、土色や土質が同様であったことを考慮すれば、胸壁の材料となった土壌が遺跡内から調達された可能性がある。なお、メダケ節を含むタケ亜科、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科、シバ属などのイネ科植物、クスノキ科の可能性のある樹木などが生育する乾燥した場所の土を利用が生育する場所で形成されたと思われる。

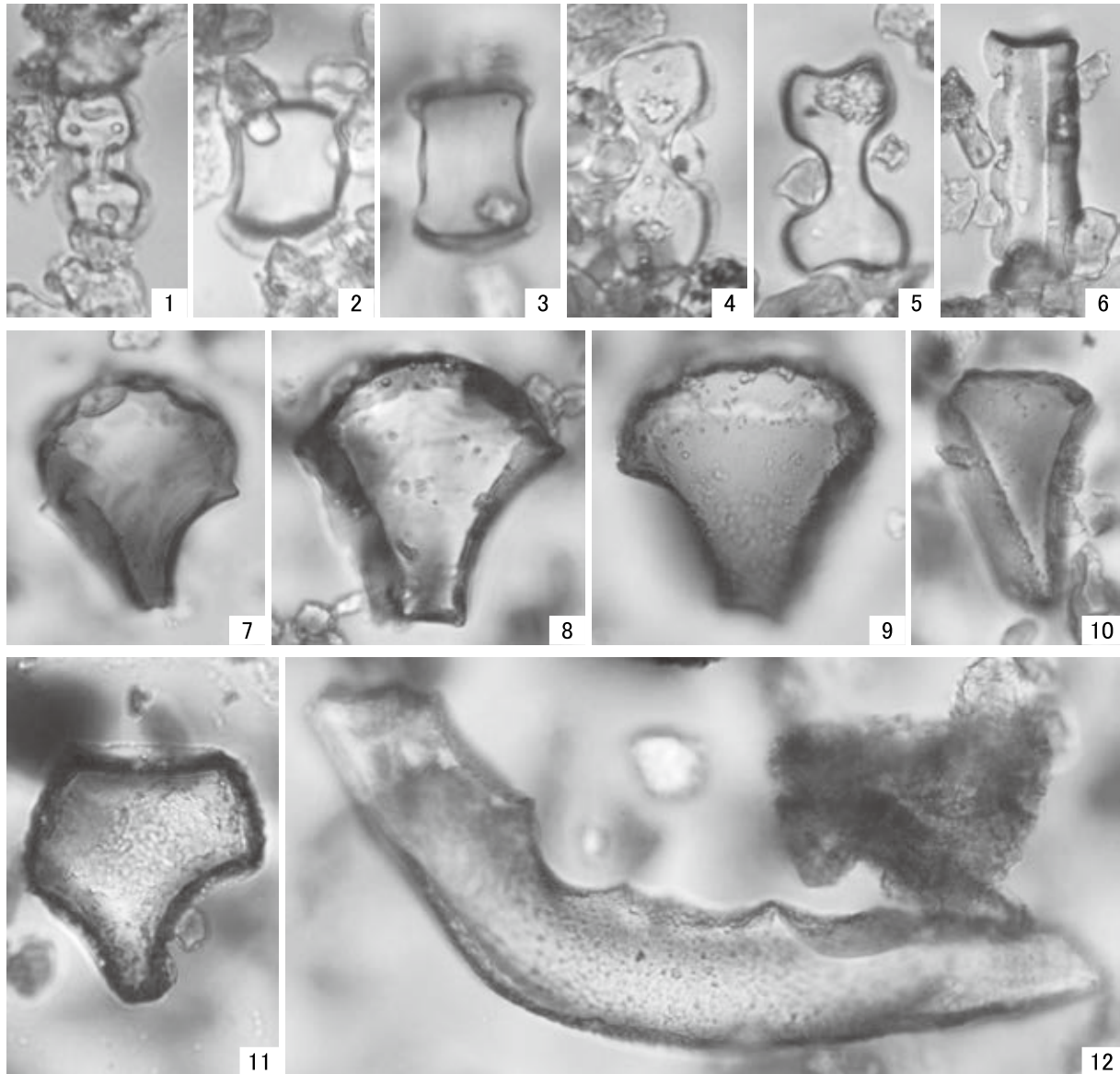
引用文献

近藤鍊三 2010『プラント・オパール図譜』北海道大学出版会 387頁

第6表 植物珪酸体分析結果

種類	3Tr						2Tr				5Tr					4Tr				4Tr									
	1	1 (7%箔)	2	2 (7%箔)	3	3 (7%箔)	4	4 (7%箔)	5	5 (7%箔)	2層	2層	1層	SD1		SD1 9層	1層	1層	2層	SD1 9層	1層	1層	2層	SD1 9層	1層	1層	2層		
														9層	13層														
														①	②													③	④
イネ科葉部短細胞珪酸体																													
イネ族イネ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
メダケ節属メダケ節	7	-	2	-	2	-	6	-	5	-	2	5	1	3	1	-	-	1	-	3	2	4	-	-	-	-	-	-	
タケ亜科	49	4	15	1	19	1	21	1	30	8	7	31	6	25	7	3	9	3	1	24	15	42	9	-	-	-	-	-	
ウシクサ族ススキ属	5	-	2	-	2	-	-	-	-	-	3	3	1	2	-	-	-	1	-	-	3	1	-	-	-	-	-	-	
イチゴツナギ亜科	-	-	-	-	2	-	1	-	2	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	
不明	20	1	6	8	3	2	2	1	5	4	6	18	3	19	3	7	6	1	1	7	16	21	2	-	-	-	-	-	
イネ科葉身機動細胞珪酸体																													
イネ族イネ属	-	-	1	-	3	-	-	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	
メダケ節属メダケ節	13	-	9	2	11	1	36	-	18	1	1	14	4	5	1	-	-	-	-	9	4	4	-	-	-	-	-	-	
タケ亜科	14	-	2	2	4	1	9	1	10	2	1	11	6	4	5	1	2	3	-	15	9	13	1	-	-	-	-	-	
ウシクサ族	3	1	6	3	4	1	15	-	3	-	-	16	-	6	1	1	-	-	-	6	4	7	1	-	-	-	-	-	
シバ属	6	-	2	-	3	2	4	-	5	2	-	6	-	1	3	-	-	-	-	7	3	5	1	-	-	-	-	-	
不明	35	2	19	5	17	3	27	1	18	8	4	31	10	11	7	3	7	6	3	36	16	36	9	-	-	-	-	-	
合計																													
イネ科葉部短細胞珪酸体	81	5	26	9	28	3	30	2	42	12	18	57	11	50	12	10	15	6	2	36	36	69	11	-	-	-	-	-	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	71	3	39	12	42	8	91	2	55	13	6	80	20	27	17	5	9	9	3	73	37	67	12	-	-	-	-	-	
総計	152	8	65	21	70	11	121	4	97	25	24	137	31	77	29	15	24	15	5	109	73	136	23	-	-	-	-	-	
珪化組織片																													
イネ属短細胞列	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ウシクサ族機動細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
樹木起源珪酸体																													
クスノキ科?	3	1	3	-	3	-	4	-	-	1	-	3	1	-	-	-	-	1	-	2	1	-	2	-	-	-	-	-	

図版 植物珪酸体



50 μm

50 μm

(1-5)

(6-12)

- |                         |                            |
|-------------------------|----------------------------|
| 1. イネ属短細胞珪酸体(2Tr;⑦)     | 2. メダケ節短細胞珪酸体(3Tr;1)       |
| 3. メダケ節短細胞珪酸体(5Tr;②2層)  | 4. ススキ属短細胞珪酸体(3Tr;3)       |
| 5. ススキ属短細胞珪酸体(5Tr;②2層)  | 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(3Tr;3)   |
| 7. イネ属機動細胞珪酸体(5Tr;②2層)  | 8. メダケ節機動細胞珪酸体(3Tr;1)      |
| 9. メダケ節機動細胞珪酸体(5Tr;②2層) | 10. ウシクサ族機動細胞珪酸体(3Tr;1)    |
| 11. シバ属機動細胞珪酸体(2Tr;5)   | 12. 樹木起源珪酸体(クスノキ科?)(2Tr;4) |

## 談話

## 玉東町大字山口 松永弥平 80才

十年の戦役当時、私の父は十七才だった、その父の話によるとその頃薩摩軍は食糧が不足していたので村の若い者で元気のよい者に刀を腰に差させて、各家を案内させ漬物を出せ、味噌を出せといいながら徴発していた。祖父はあまりうるさいので山の中に隠れていたのが祖母が仕事に行くようにして食糧を運んでいた。又非常に危険であったので、山の中や、平地では壕を掘り竹を編んで壕の上へのせ、その上から「ねこぶく」(縄で編んだむしろ)を乗せその上に土を覆い危険を避けていた。薩摩軍はこれを見て「おまんどんな、こげんとこにおとつか」と言っていた。

そのうちに官軍が、この部落を占領した。官軍は各家に二、三人宛宿泊させていたが、収容しきれないので久保田川の川原に仮小屋を数ヶ所に建てて宿泊していた。

小倉方面から来た兵は、長い間の行軍で足には豆ができて靴をはいた者は殆んどなく、草鞋をはいていた。非常に疲労して戦のできる状態ではなく見るも哀れであったと云う。

この附近(山口部落)が丁度、横平山、吉次峠、田原坂の戦いの時の兵たん地で、兵隊が大勢いたので家を焼かれずに済んだと思う。兵隊を賄うのに人夫が足りないのでもこの部落の人達は全部狩り出されていた、そうして握飯をつくったり、負傷者を運んだりさせられたと云う。

米を毎日何十俵と久保田川で洗うので川の水が真白くなっていた。米を洗うのも非常に雑で付近には随分米が落ちていたので、夜ひそかに拾いに行き持ち帰り、ごみや砂等を取り除き、米の飯を喰ったと喜んでいて。(その当時は米の飯を喰うのは珍しかった)そうして此処から兵隊が繰返し出陣して行った。出陣の際は部落の人達が歌ったり、踊ったりして励ましていた。その頃は毎日夜も昼も、豆をいるような音が絶えまなく聞こえていた。

官軍は権現山から攻められ非常に苦しい経験があるので、権現山の下方の前平という山(約五町歩位)を全部放火して焼いてしまった。これは薩摩軍の隠れ場所がないようにするためである。大正の時代になってその当時焼け残った松の大木を切り、臼にしようとしたが火事に逢った部分が黒い炭のようになっていて使用できなかった。と伝えられて居る。

## 玉東町大字原倉本村 本田末彦 88才

この部落にはその当時、三十戸ばかりの民家があったが、賊軍が部落に来ると民家が邪魔になるので全部焼いてしまうからと、官軍から連絡があった。住民は不平、不満でブツブツ云いながらも、云われるようにしないと後が「えすか」(こわい)ので山の方に運び出したが大変だった。連絡があった二、三日後に全部の家に火をつけて焼いてしまった。部落民は自分達の家が燃えるのをただ、ぼうぜんと見ていたという。

その日から住むに家なき住民の苦労が始まった。

特にこの附近の戦いは吉次峠の争奪戦の真只中に巻き込まれたので、住民の辛苦は筆舌につくせない程だった。特に賊軍の抜刀隊に官軍は、ほとほと手をやいていたという。

この戦が終わった後に、この部落の人達は家を建てたが、建築材は附近の官山から立派な木を切ってきて、それで家を建てた。官山の木を切る許可があった訳ではないが、役人も大目にみていたらしく立派な材木が手に入ったと云っていた。

出典:玉東町編 平成7年『歴史への招待』

## 出土した被服附属品の遺物について

鈴木徳臣

軍人の服装については、階級別により、正装軍装等の別により、夏冬等の気候により又平時戦時の別により、若くは使用する兵器の関係により、澤山の種類が数えあげられる。明治10(1877)年の西南戦争に際して陸軍は主に明治8(1875)年11月24日布告の「陸軍武官服制」(太政官布告第174号)で定められた服装で薩軍と戦った。

熊本県玉東町大字二俣地内に所在する「二俣瓜生田官軍砲台跡」から出土した遺物の中には明治8年の服制で制定された兵卒略帽の前章が見られた。形状は径九分の円形の中央に1個の星章を刻す。材質は下士が真鍮製、兵卒は銅製で近衛、鎮台共通である。略帽は地質が紺色の大絨。鉢巻、縫際細線の部分が近衛は緋絨、鎮台は黄絨を使用し目庇は黒革製で略帽に顎紐はつかない。

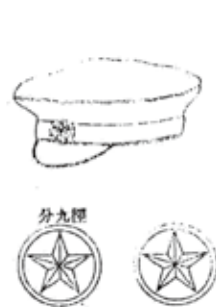


明治8年制定一等卒略装

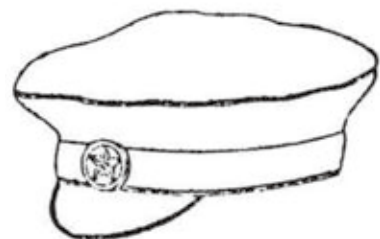


明治8年制近衛砲兵伍長略装

略帽は明治6(1873)年10月「陸軍武官略帽」(陸軍省布告第209号)で制定され明治7(1874)年に改定。明治8年の「陸軍武官服制」の布告により7年改定の略帽は消滅したが、新たに8年の服制改正で略帽が制定された。



近衛下士兵卒  
鎮台兵卒ハ銅製以下倣之



下士兵卒

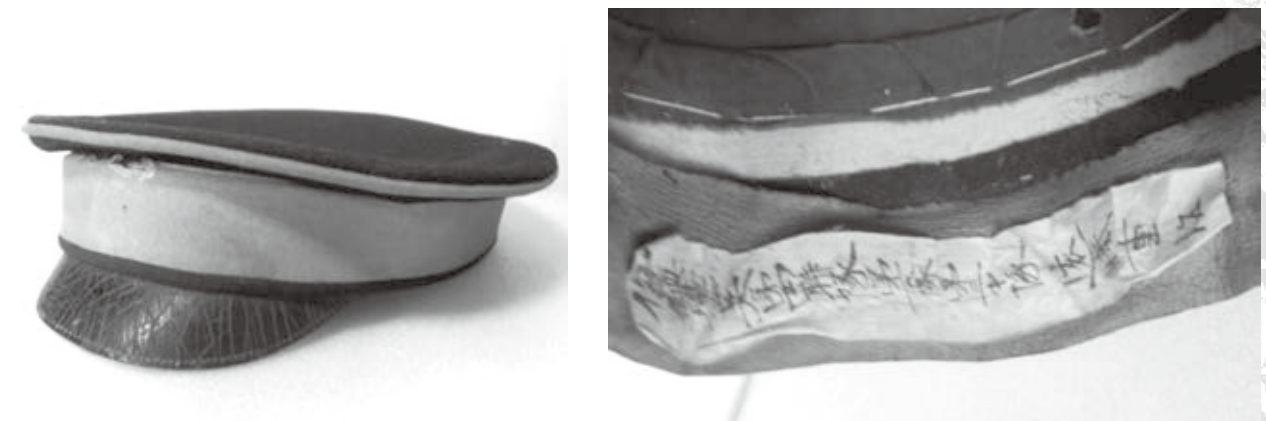
明治8年11月太政官布告第174号陸軍服制図より



前章は裏面に二つの孔、窪みに裏足を取付け帽子の鉢巻中央部分に差し込むが、真鍮製の下士官用前章と比べ兵卒用前章は重量に対して本体と裏足の接合が不十分である。

遺物が出土した「二俣瓜生田官軍砲台跡」は明治10年3月4日頃より20日まで、田原坂、船底、中久保、七本方面の薩軍陣地を砲撃した急造砲台で、東京鎮台予備砲兵第1大隊第1小隊、第2小隊左分隊を配置。第1小隊所属の兵卒は96名。第2小隊に関しては資料がなく、戦時山砲兵隊の編制から推測して1個分隊約30名と推測し合計100名前後の誰かの略帽から欠落した可能性が高いと思われる。

略帽は入営した初年度に2個支給され次年度から1個支給、徴兵期間の3年で4個支給される。保存期限6ヶ月から9ヶ月を目安に交換する事になっているが、支給時の略帽の状態により保存期限に変動が見られる。初年度に支給される数量も一度に2個支給されるか1個ずつ支給されるか所属部隊によって異なっている。



明治8年制鎮台下士・兵卒略帽 前章は欠落しているが其の箇所だけが変色していない。汗取革裏面に支給者名を書いた紙片貼付。

「二俣古閑官軍砲台跡」「横平山戦跡」では被服附属品の真鍮製金色釦が出土している。釦は円形内に桜花を附しており、西南戦争関連の遺跡では熊本市の山頭遺跡、田原坂、八代市の横手官軍墓地跡(横手村馬渡警視局墓地)の発掘調査で出土している。

陸軍が金色の桜花釦を採用したのが明治3(1871)年12月の陸軍徽章からで、士官用正衣の釦として軍曹以上が使用、明治8年制では将校用正衣、将校用外套にのみ使用。

警視官も明治6年1月27日司法省届の「東京番人規則(抄)」の服制から金色の桜花釦を使用しており、西南戦争の際には明治7年1月制定、10月改正の警視庁官員服制で定められ、正権大警視から四等巡査までが上衣の釦として使用。

陸軍、警視官のどちらも釦の大きさは七分で服制図を比較すると、陸軍は明治6年の改正で釦表面外周の縄目模様をなくし桜花も大ぶりに変化しているがそれ以外は微妙な差異があるだけで伝世品を見る限り両方とも同一の釦を使用している可能性が高い。また警視官は明治14(1881)年12月の服制改正まで釦の形状に変化が見られない。

薩軍の制服でも近衛、鎮台等に在職中だった旧制式の制服、明治3年制定「陸軍徽章」明治4(1871)年5月制定の「御親兵徽章」11月改定の「陸軍徽章」が該当するので、伍長以上の者は金色桜花釦の制服を着用している可能性が非常に高い。官薩両軍どちらも同形状の釦を使用しているので戦跡からの出土は両軍の配備状況、文献調査からの推測となる。

#### 参考文献

「太政官布告明治3年第957(陸軍徽章)」「明治4年兵部省第54(陸軍徽章)」「太政官布告明治6年第328(陸軍武官服制)」「太政官布告明治8年第174(陸軍武官服制)」「第一号戦闘略記」「兵卒口授書」「警察官及消防官ノ服制徽章」「陸軍省沿革史」

協力者 岡崎貴志

## 第V章 半高山・吉次峠戦跡の調査

### 第1節 遺跡の位置と環境

半高山・吉次峠戦跡は町の北東部に位置する隣り合う遺跡で、金峰山三ノ岳からのびる尾根上にある。ここには、熊本市の大久保から伊倉を通り高瀬に至る吉次往還が通っており、三ノ岳と半高山(294m)の間の谷間を吉次峠と呼ぶ。江戸時代には高瀬ではなく伊倉の津へと向かう道であり、伊倉の津が閉ざされた後は、熊本から玉名高瀬に行く道では最短距離であったようだ。しかし、田原坂のある三池往還と違い、険しい山道であった。

半高山、吉次峠一帯は西南戦争当時は松を中心とする官有林であったが、昭和中期までに皆伐され雑木林に変容している。また、当時はかなり急な坂だったというが、現在はその面影は無く、広域農道が緩やかに走っており、玉名・河内方面から熊本に至るアクセス道路として利用者が多い。現在、周辺地域は開墾が進み、多くの部分がミカン畑として利用されている。

半高山は輝石安山岩を基盤とする山であり巨石の露頭が多い。これらはミカン畑の石垣に利用されるために切り出されており、調査区内では石切場も数カ所確認されている。

### 第2節 半高山・吉次峠戦跡の戦況

西南戦争時には、三ノ岳から半高山、そして横平山へと連なる尾根上に薩軍が布陣した。吉次峠という要衝を守るのが半高山であった。玉名高瀬河畔の戦いに敗れた薩軍は、原倉方面、木留方面へと退き、木留に本営を置く。その後3月3日の戦いでは野津大佐率いる第二旅団の支隊は薩軍の陣地でもあった立岩を占領し、原倉に進出する。官軍の猛烈な砲撃により、立岩の薩軍は吉次峠から半高山、耳取の陣まで退いた。翌4日には第二旅団迫田大尉が半高山左翼より進撃。麓からの砲撃により一時半高山山頂に迫った。しかし、半高山山頂からの薩軍の砲撃、さらには三ノ岳中腹の薩軍一番大隊(篠原国幹率いる)が反攻に転じたため、戦局は吉次峠西側地区に移った。玉東町史によると、約1,500人の薩軍や薩軍熊本隊が滞陣したという。半高山・吉次峠を破ることのできない官軍は一個大隊を原倉に退却させ、若干を伊倉に置き守備の強化を図った。以後、吉次峠一帯は「地獄峠」として官軍に恐れられたという話は有名である。

3月20日の田原坂陥落後、前線は植木～山鹿～木留に移る。しかし、これもまた膠着戦となり、後方支援の基地となっていた半高山・吉次峠を断つために3月26日に木留を攻撃し、以前奪われた壘を



吉次峠から見た半高山(南から)



戦況図(図版22下より)

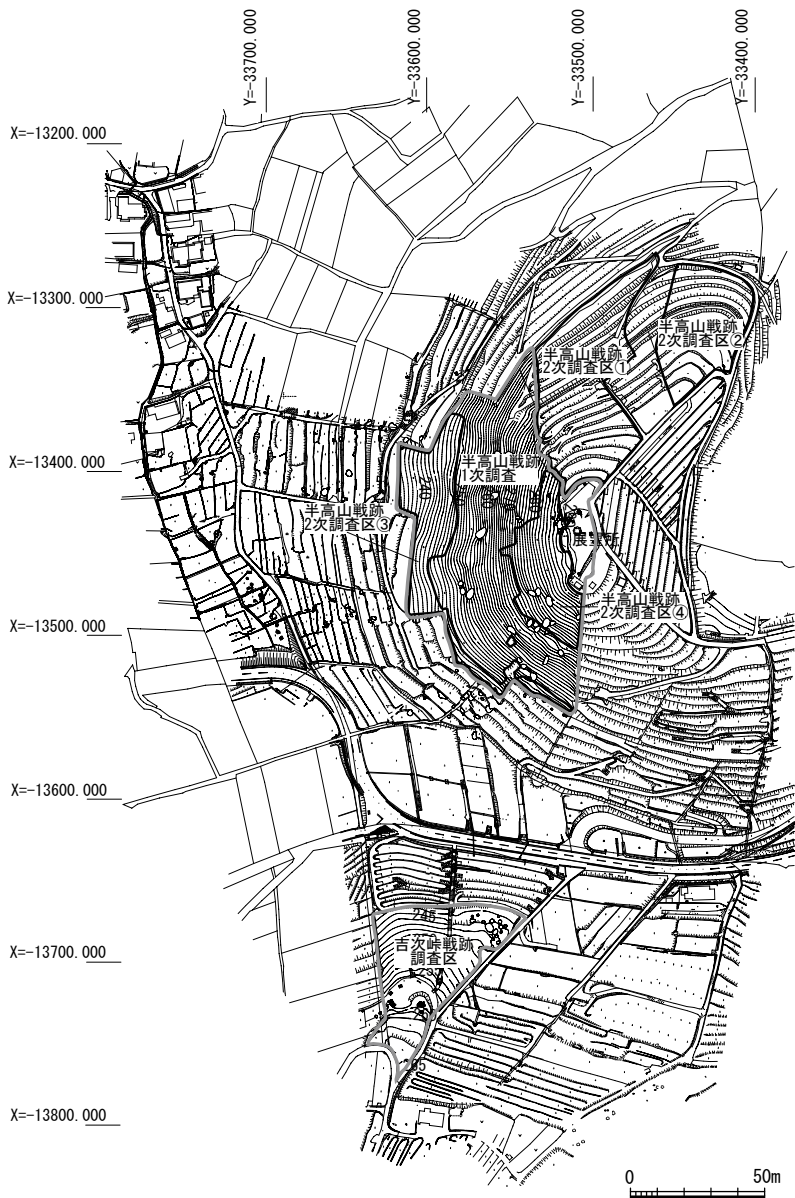
回復した。その後、4月1日に官軍は半高山、三ノ岳に布陣する薩軍を駆逐するため、一方は立岩から一方は横平山から挟撃することで遂に制圧するに至る。三ノ岳中腹にとどまった薩軍も半高山より官軍の攻撃を受け、退却することとなる。

### 第3節 調査区の設定と調査の方法

当該地区は現在、果樹園として開墾され、山頂部は公園として整備されている。平成19年度に半高山・吉次公園の公園整備開発計画が持ち上がったため、平成20年度に熊本県文化課によりトレンチ掘削による山麓の確認調査が行われたが、遺構、遺物は確認されなかった。

これをうけ、平成21年度には本来の遺跡の範囲を確定するために、半高山の西側斜面(16,330㎡)及び吉次峠公園において全面的な遺物探査等確認調査を行った。遺物探査には金属探知機を利用し、反応箇所を掘削した。その他半高山山頂部において遺構を確認する為2箇所のトレンチ、吉次峠に1箇所のトレンチを設定した。

平成23年度には半高山北側斜面(8,300㎡)における遺物分布の広がりを確認するための調査を行った。また、かねてより遺物の盗難が懸念される半高山第1次調査区の山頂部・山麓部における遺物の再探査を行い、遺物の取り上げを行った。いずれにおいても遺物を取り上げた後はレプリカを置換した。遺物は金属探知機が反応する地表面20cm以内で検出した。平成21年度の調査を第1次調査、平成23年度のものを第2次調査とし、それぞれの調査区を第63図に示した。



第63図 半高山・吉次峠戦跡調査区範囲図

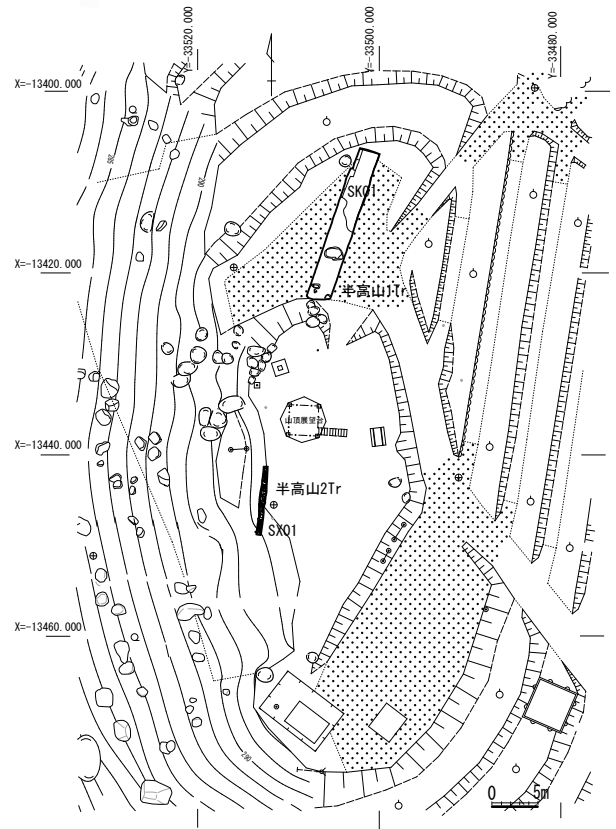
第4節 西南戦争の遺構と遺物

(1)半高山戦跡調査区遺構

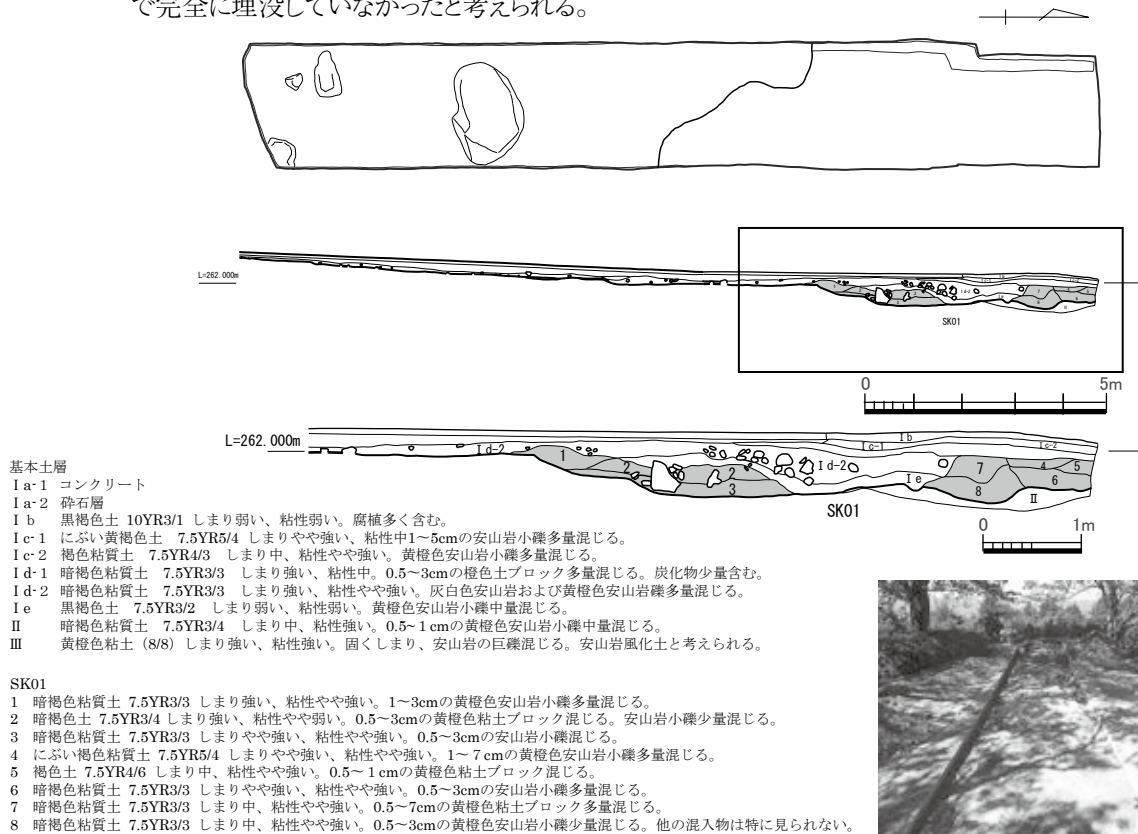
塹壕等の遺構の残存状況の確認を行うため、現在コンクリートの駐車場となっている山頂部北側端部に1.9×14.8mの1Trを設け、北東方向に広がると思われる土坑SK01を確認した。また、山頂部西側において盛土が確認されたため2Trを設け、土層の確認を行った。

(i)土坑(SK01)

遺構の推定規模は、幅約9.1m、長さ2.5m～、最大深度0.45mである。現地表面はコンクリートに覆われており、公園造成時に上部が削平されているものと思われる。本来の規模は不明であるが、幅は少なくとも9m以上ある大型の土坑であると思われる。三ノ岳中腹にある馬蹄形の塹壕跡のような構造物を思わせるが上部が削平を受けており、遺物も出土していないため、塹壕とするには根拠が薄い。埋土の質から中央部の一部は現代の層と考えられ、公園建設の時点まで完全に埋没していなかったと考えられる。



第64図 半高山戦跡トレンチ配置図



第65図 半高山戦跡1Tr北側土層断面図



1Tr遺構検出状況(南から)

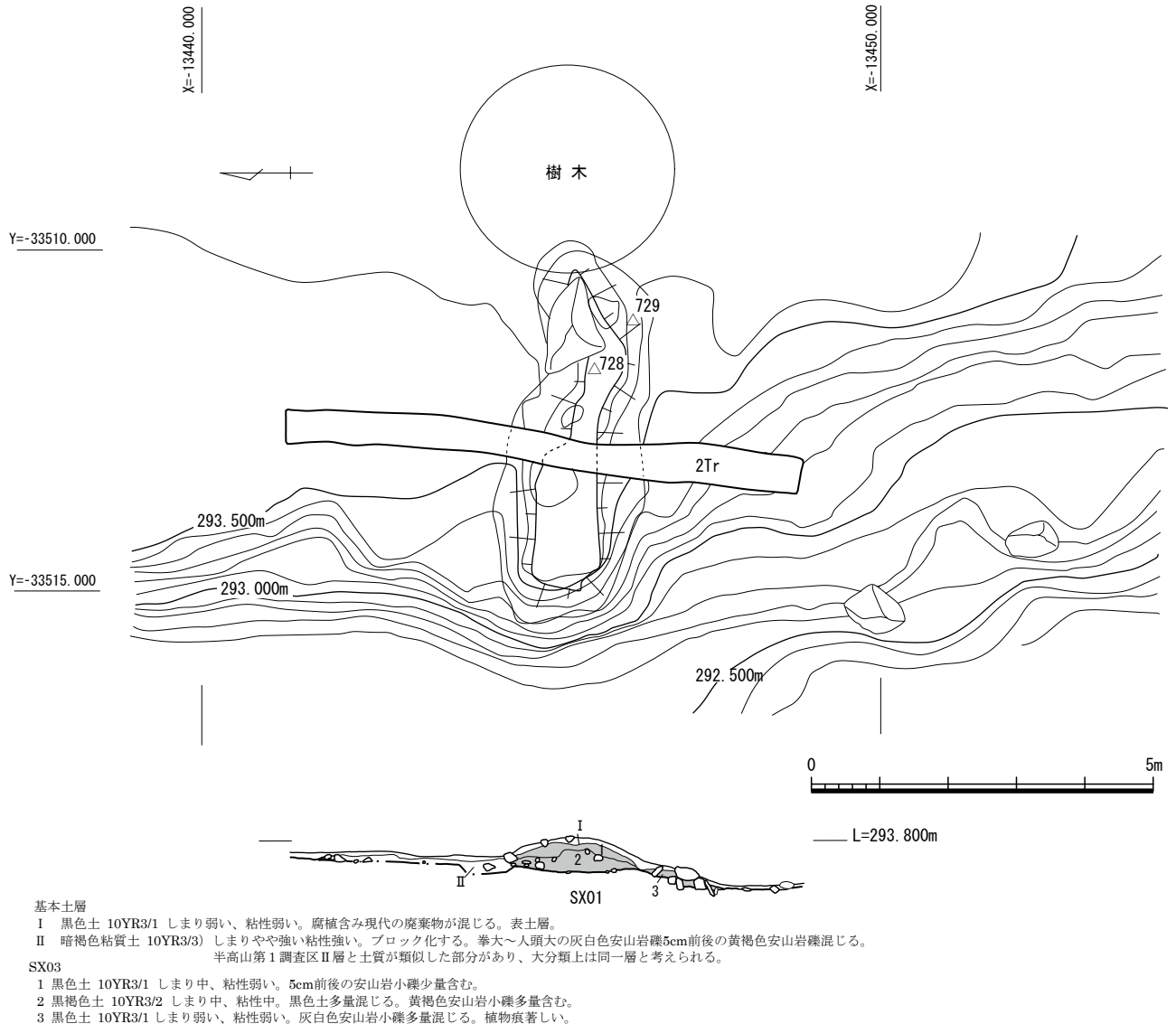
(ii) 盛土遺構(SX01)

半高山山頂部にて東西方向に長く伸びる幅約2m、長さ約4.5m、高さ約0.4mの盛土SX01を確認した。SX01は現地表面にはっきりと見ることができる。トレンチは遺構に対して垂直に設定し土層の確認を行ったところ、地山と思われる安山岩礫を多く含む暗褐色粘質土の上に1、2層黑色土の堆積が確認された。黑色土の中には安山岩の小礫が混入しており、地山を削った際に混入したものと思われる。



2Tr土層断面(南西から)

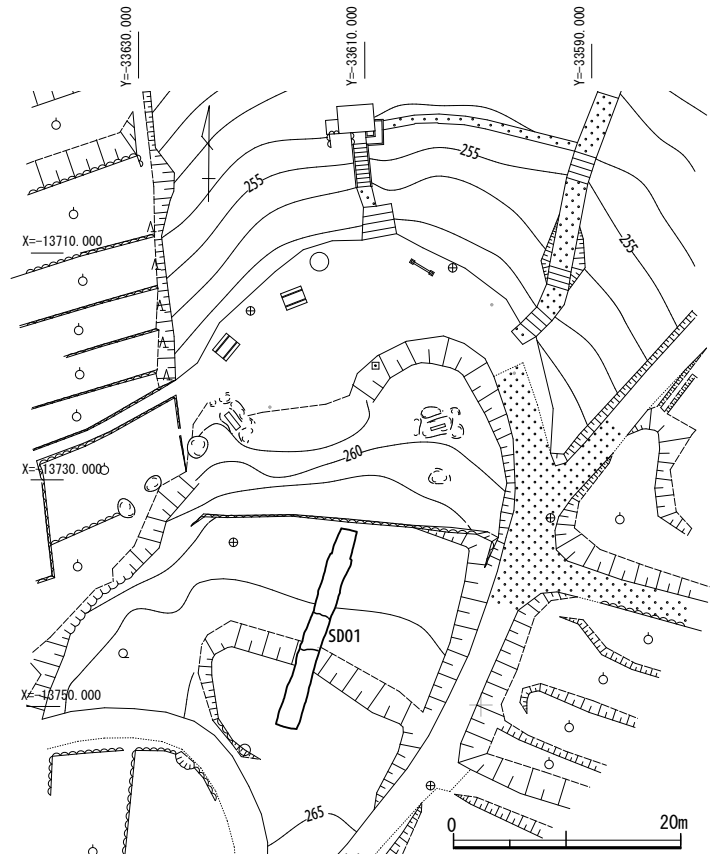
黑色土中から遺物は出土していないが、地表面よりスパンサー薬莖、スナイデル薬莖各1点が出土している。胸壁のような役割を果たした遺構かもしれないが、詳細は不明である。



第66図 半高山戦跡SX01平面図・西側壁面土層断面図

(2) 吉次峠戦跡調査区遺構

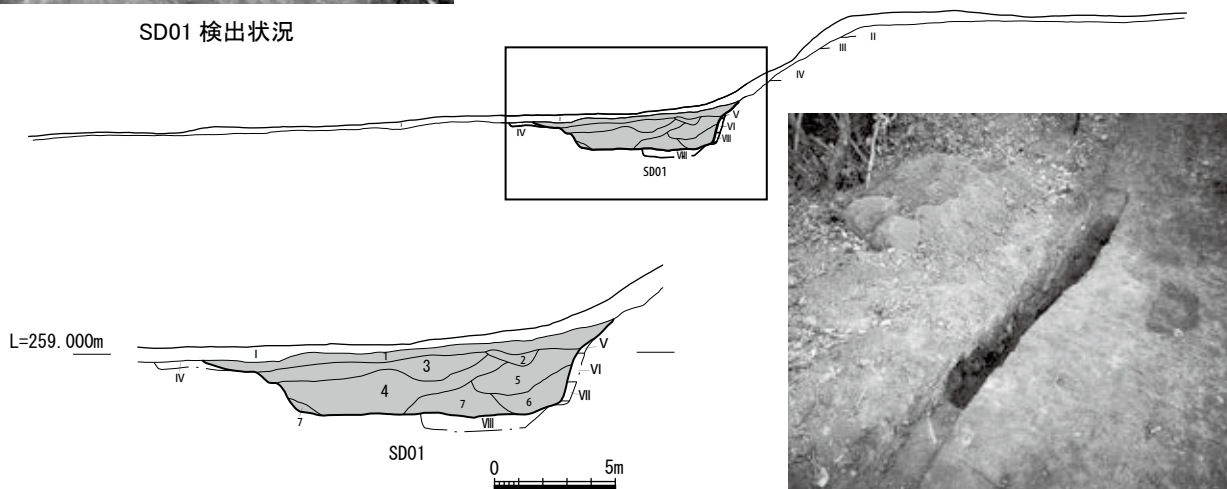
SD01 現在の公園の南側にトレンチを設定し、遺構の確認を行ない、1条の溝SD01を検出した。SD01の規模は、長さ1.5m、幅約2.9m、深さ0.5mであり、意図的に埋め戻されたような土が堆積していた。溝内から遺物の出土はなく、また現在の畑の筆界に沿うようにあるため区画溝とも考えられる。



吉次峠戦跡調査区



SD01 検出状況



SD01 土層断面

基本土層

- I 10YR3/4 暗褐色土 しまり弱い、粘性弱い。現代の耕作土で腐植多く含む。安山岩小礫多く混じる。
- II 10YR3/3 暗褐色 しまり強い、粘性やや強い。0.5~8cmの安山岩礫多量混じる。
- III 10YR3/4 暗褐色粘質土 しまり強い、粘性強い。0.5~3cm安山岩礫多量混じるがII層より少ない。
- IV 10YR3/3 暗褐色粘土 しまり強い、粘性強い。0.5~3cmの安山岩小礫少量混じる。ややブロック化する。
- V 10YR3/4 暗褐色粘質土 しまり強い、粘性強い。固くしまる。0.1~5cmの灰白色粘土ブロック少量混じる。安山岩風化土と考えられる。
- VI 10YR3/3 暗褐色粘質土 しまりやや強い、粘性やや強い。0.5~3cmの橙色粘土 (Hue7.5YR6/6) のブロック中量混じる。
- VII 10YR6/8 明黄褐色粘土 しまり強い、粘性強い。大粒のブロック状で固くしまる。鉄分若干沈着する。
- VIII 10YR4/6 褐色粘土 しまり強い、粘性強い。5~10cmの黄灰色粘土 (Hue2.5YR6/1) ・明褐色粘土 (Hue7.5YR5/8) のブロック多量混じる。

SD01

- 1 10YR4/4 褐色土 しまり強い、粘性やや強い。ローム土を主体とする。0.5~1cmのVII層ブロック、2cm以下の安山岩小礫少量混じる。
- 2 10YR3/3 暗褐色土 しまり強い、粘性強い。ローム土を主体とする0.5~5cmの灰白色粘土 (しまり強い、粘性強い)。安山岩風化土と見られるブロック少量混じる。
- 3 10YR4/3 にぶい褐色粘質土 しまり強い、粘性中。0.5~5cmの安山岩小礫、1cm前後のV層ブロック多量混じる。
- 4 10YR3/3 暗褐色土 しまりやや弱い、粘性中。安山岩礫、灰白色粘土ブロック極多量混じる。埋め戻し土と考えられる。
- 5 10YR3/3 暗褐色土 しまり強い、粘性中。0.5~5cmの安山岩小礫、5~10cmのVII層ブロック極多量混じる。埋め戻し土と考えられる。
- 6 10YR4/4 褐色土 しまり中、粘性やや弱い。VI層を主体とする。1~5cmの安山岩小礫多量混じる。埋め戻し土と考えられる。
- 7 10YR5/6 黄褐色粘質土 しまりやや弱い、粘性やや強い。VII層を主体とする。0.5~3cmの暗褐色土ブロック多量混じる。

第67図 吉次峠戦跡調査区1TrSD01東壁面土層断面図

(3)半高山戦跡調査区出土遺物

遺物出土点数 西南戦争に関連すると思われる遺物は全調査区において1,614点出土した。内訳は、銃弾1,349点、(エンフィールド26点、スナイドル1,292点、シャープス1点、スペンサー実包1点、火縄2点等)、薬莢152点(スナイドル129点、スペンサー23点)、雷管12点、砲弾破片57点、信管5点、霰弾弾子(火縄銃の弾の可能性も有)11点、古銭14点、ヒューズプラグ1点、刺包針1点、火門蓋1点、キセル7点等である。

銃弾は横平山同様に山全体で出土している。対して、火点を示す薬莢や雷管の出土は主に山頂部や北側の横平山に続く旧道沿いにおいて集中的に出土した。また、砲弾の破片は山全体に分布している。

遺物出土状況 これら遺物は、ほとんどが地表面や落ち葉の下から出土した。横平山も同様である

が、山間部という地形のため、戦後130余年の間に堆積物がほとんど無かったとあってよい。今回検出した遺物はほとんど金属製品であるため多少の腐食はあるものの、薄い真鍮板を巻いて作られているスナイドル薬莢でも胴部が比較的良い残存状態で残っていた。このことは、当初開発をうけていると思われていた山頂部の公園部分においてもあまり踏み荒らされることなく今日に至っていることが考えられ、地形や地物も大きな改変がなされていないものと考えられる。また、半高山北側の開墾部においても約100点の遺物が出土しており、(昭和40年代の果樹園開墾の際には多くの弾が回収されたという)いまだ半高山全体には多くの遺物が残存しているものと考えられる。

遺物出土状況については調査区全体図を第71図に示し、詳細分布図は分割して示す。章末に付した遺物観察表には第71図に示すグリッド区割に基づいた出土位置を記す。

(i)山頂部薬莢出土状況

半高山では第69図のように山頂部標高290mラインにおいて、スナイドル薬莢やスペンサー薬莢、雷管の集中区が見られた。その中には、前述するように岩陰に集中するものも見られた。半高山山頂部においてどのような陣地が構築されたか現在では判然としないが、現存する巨石はしっかりと地山に食い込んでおり、戦争当時からそのままの状態であったと考えられ、これらが胸壁としての役割を果たしたと思われる。そして、薬莢の分布等火点の示すように、陣地が半高山山頂部より少し下った標高290mラインを取り囲むようにあったことが推測できる。半高山における出土銃弾がスナイドル銃弾を中心とするのに対し薬莢は多種にわたり、最低でも3種類以上の火器が利用されたことは明らかである。この状況は熊本市北区植木町の田原坂や山頭遺跡の陸軍壘と類似するものである。つまり、ここ



第68図 半高山戦跡遺物出土状況図



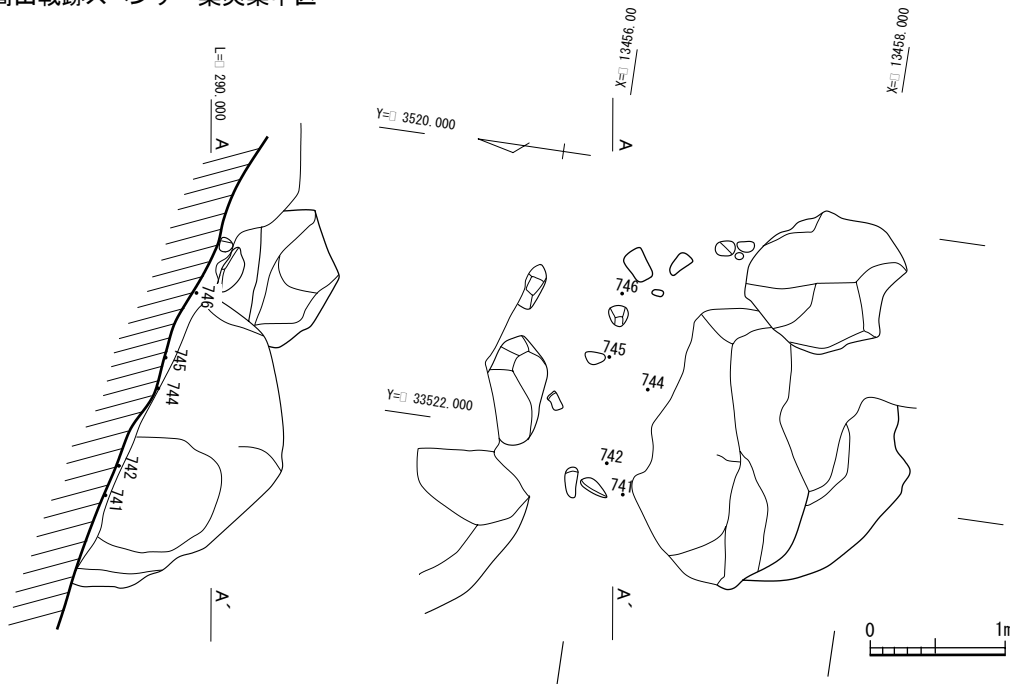
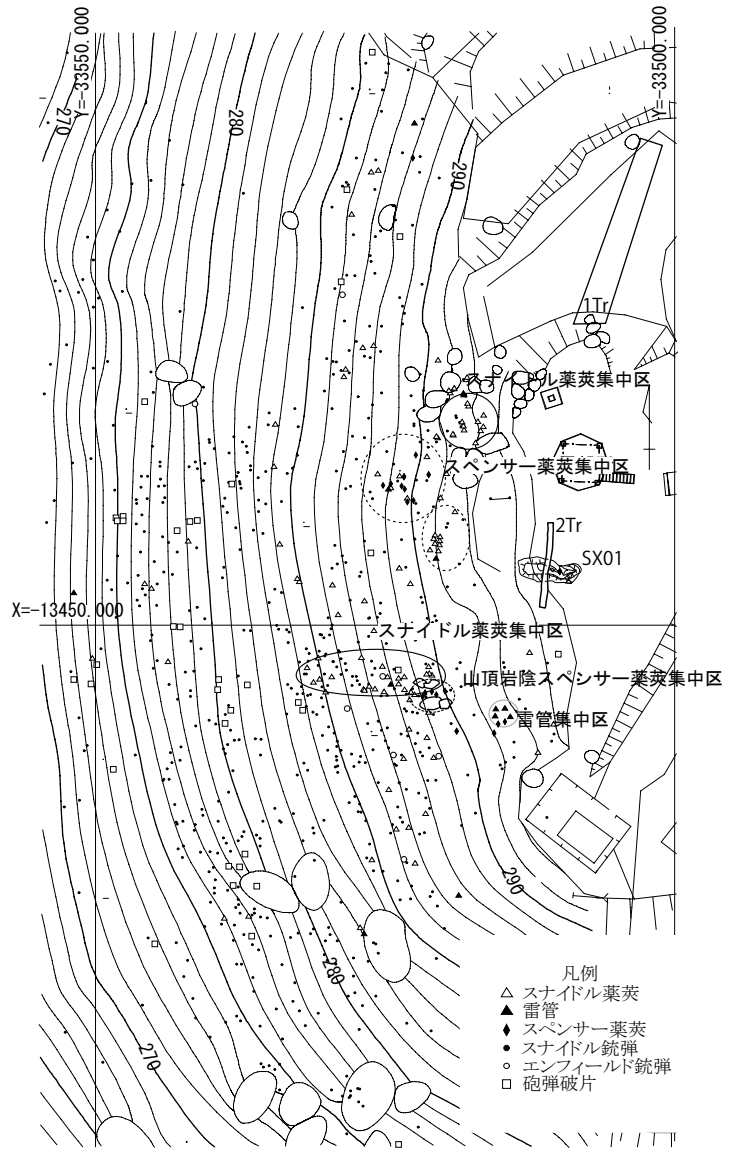
も薩軍塁であり、彼らが多種多様な銃器を携えていたことを示すものといえる。

山頂岩陰  
スペンサー  
薬莖集中区

半高山山頂部の標高約290m地点における安山岩の巨石陰からスペンサー薬莖が5点まとまって出土した。おそらく、大型の岩を胸壁として銃撃戦が行われていたものと思われる。スペンサー薬莖は全て山頂から出土しており、きわめて限られた範囲に分布する。なお、岩陰において銃弾は出土していない。



半高山戦跡スペンサー薬莖集中区



第69図 半高山山頂部薬莖等分布図(上)・山頂岩陰スペンサー薬莖出土状況(下)



(ii) 古銭出土地点

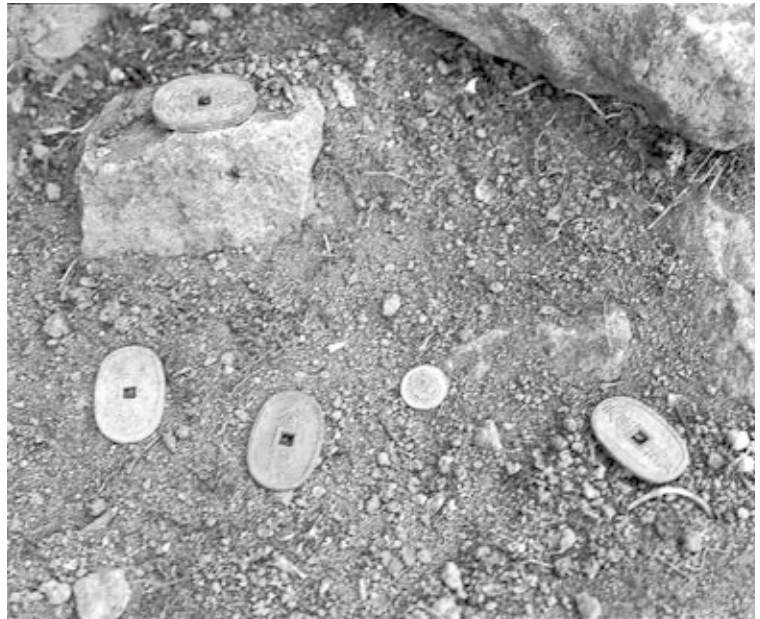
半高山の西側斜面標高260m地点において天保通宝4枚と半銭1枚が集中して出土した。ここには堆積物はほとんど無く、落ち葉をかきわける程度で遺物は出土している。遺物の実測図は第84図に示す。天保通宝は198(1429-4)以外同規格であり、薩摩天保銭との指摘がある<sup>(1)</sup>。半銭は明治7年製のものであり、両者とも明治10年段階で使用されていた可能性が高い貨幣である。いずれも極めて近くで出土することからも、一括性が高いと考えられる。

註

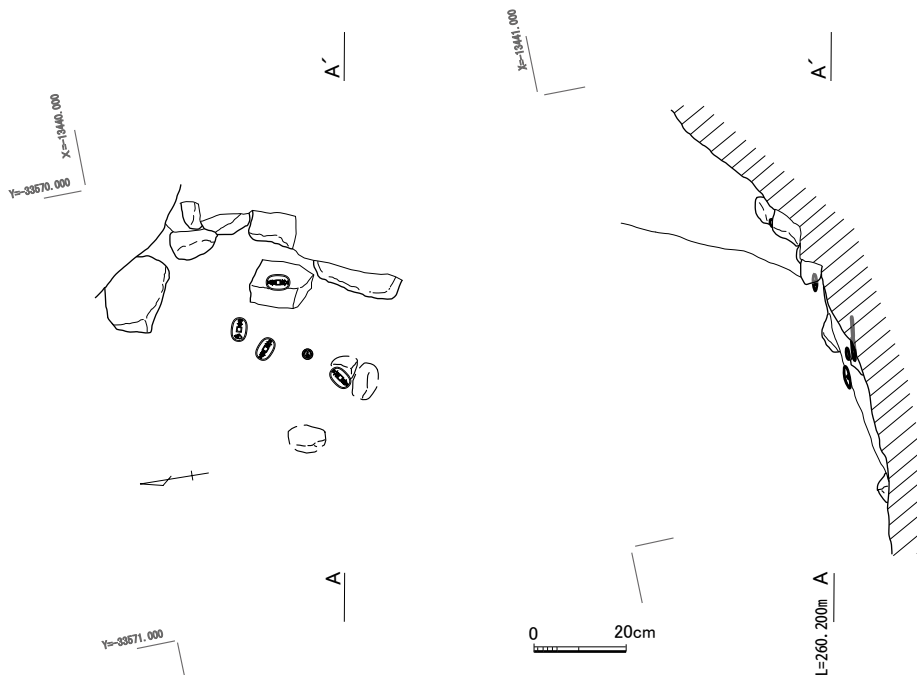
(1) 神園 紘 2011「西南戦争軍用貨幣-まほろしの金銀銅貨を追う-」『敬天愛人』76頁



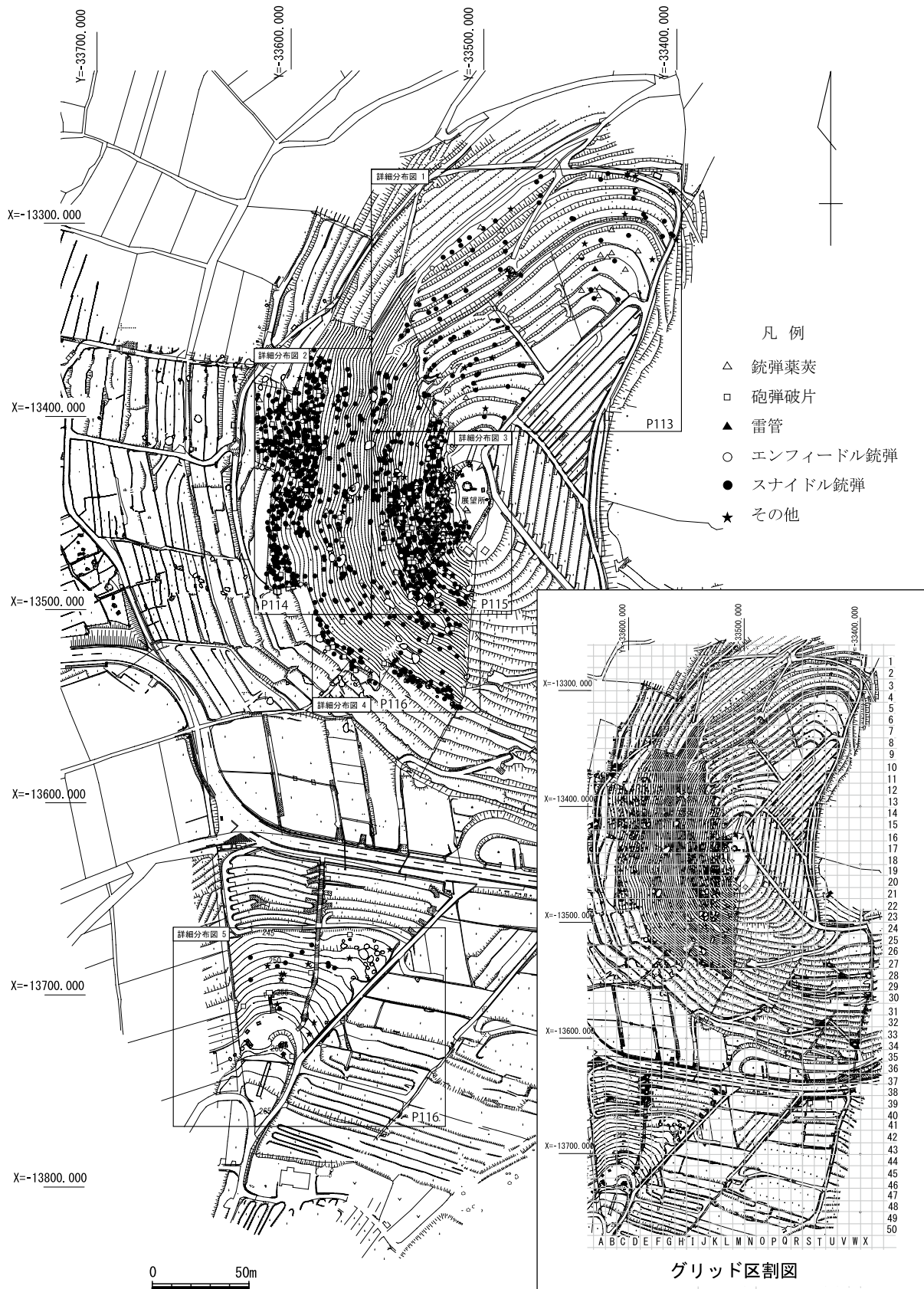
半高山戦跡出土古銭



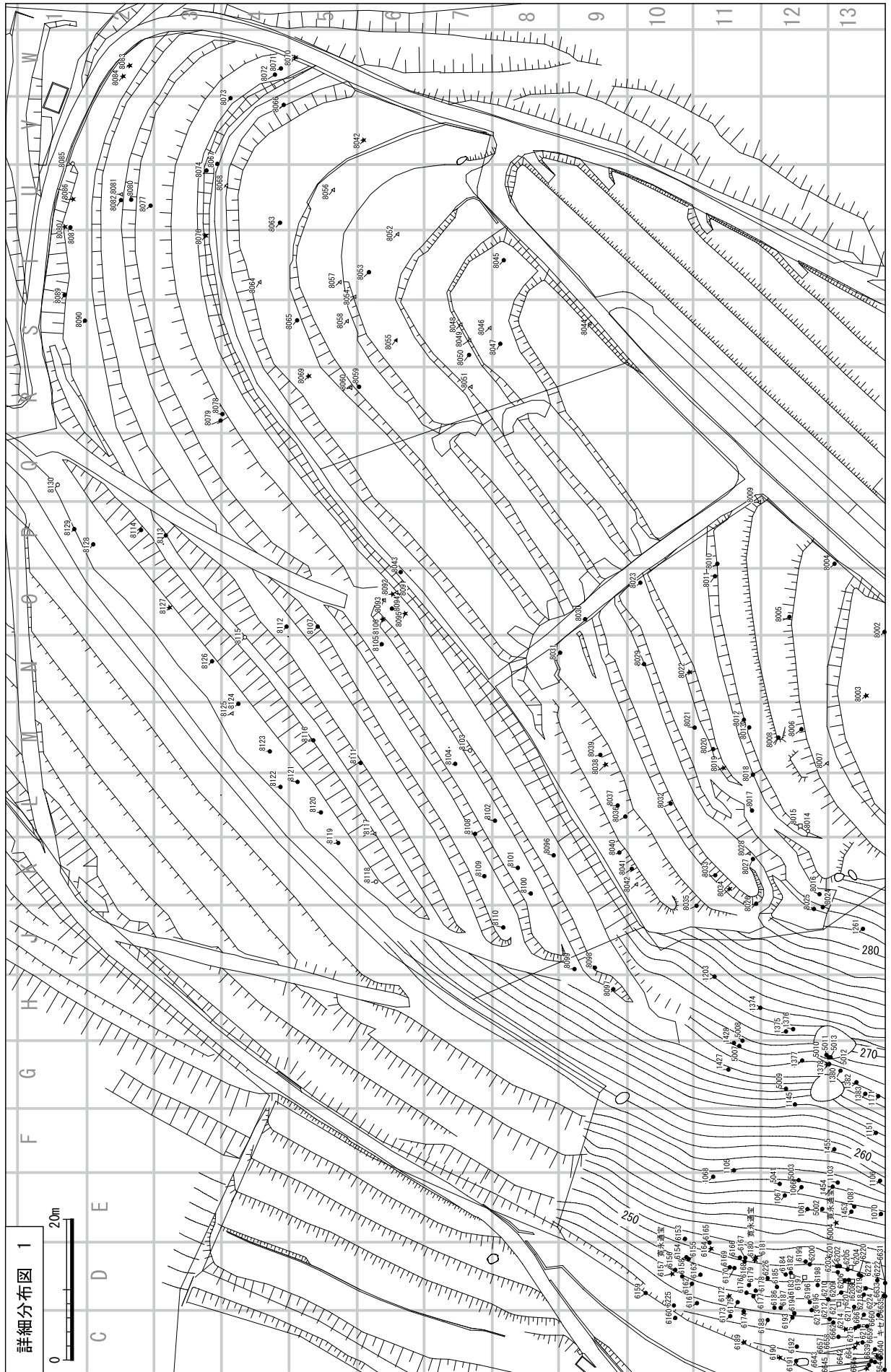
半高山戦跡古銭出土状況

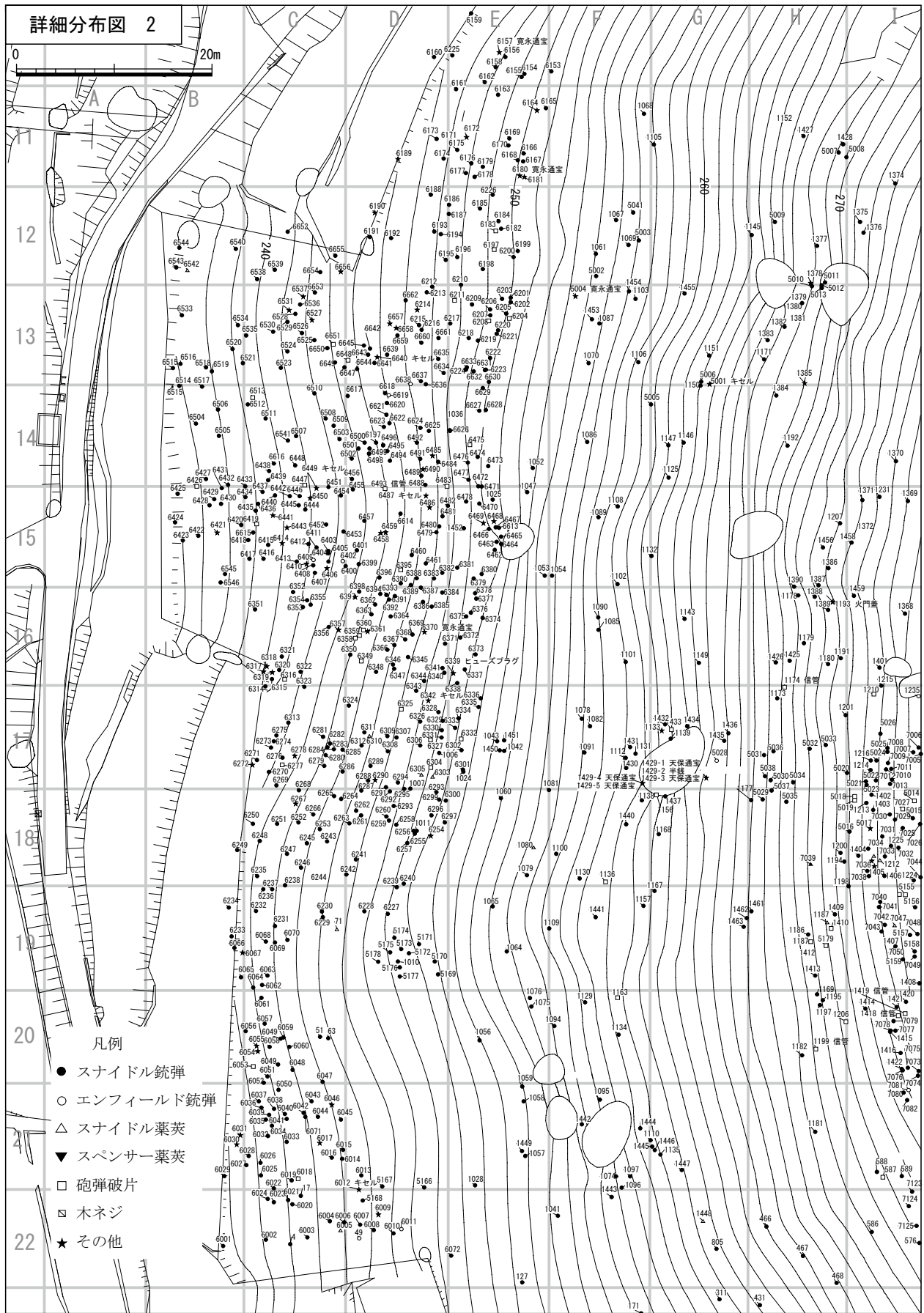


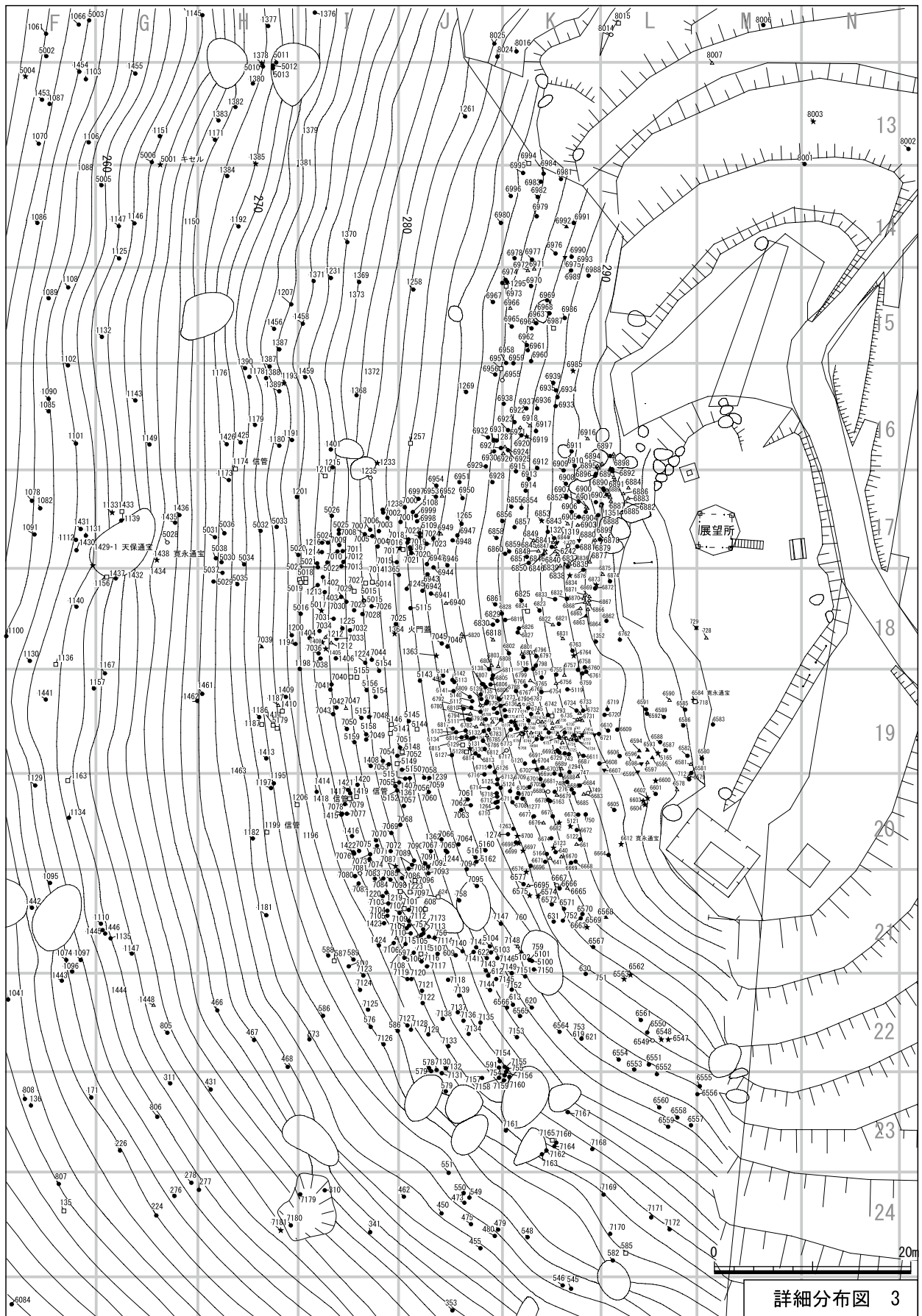
第70図 半高山戦跡調査区古銭出土状況



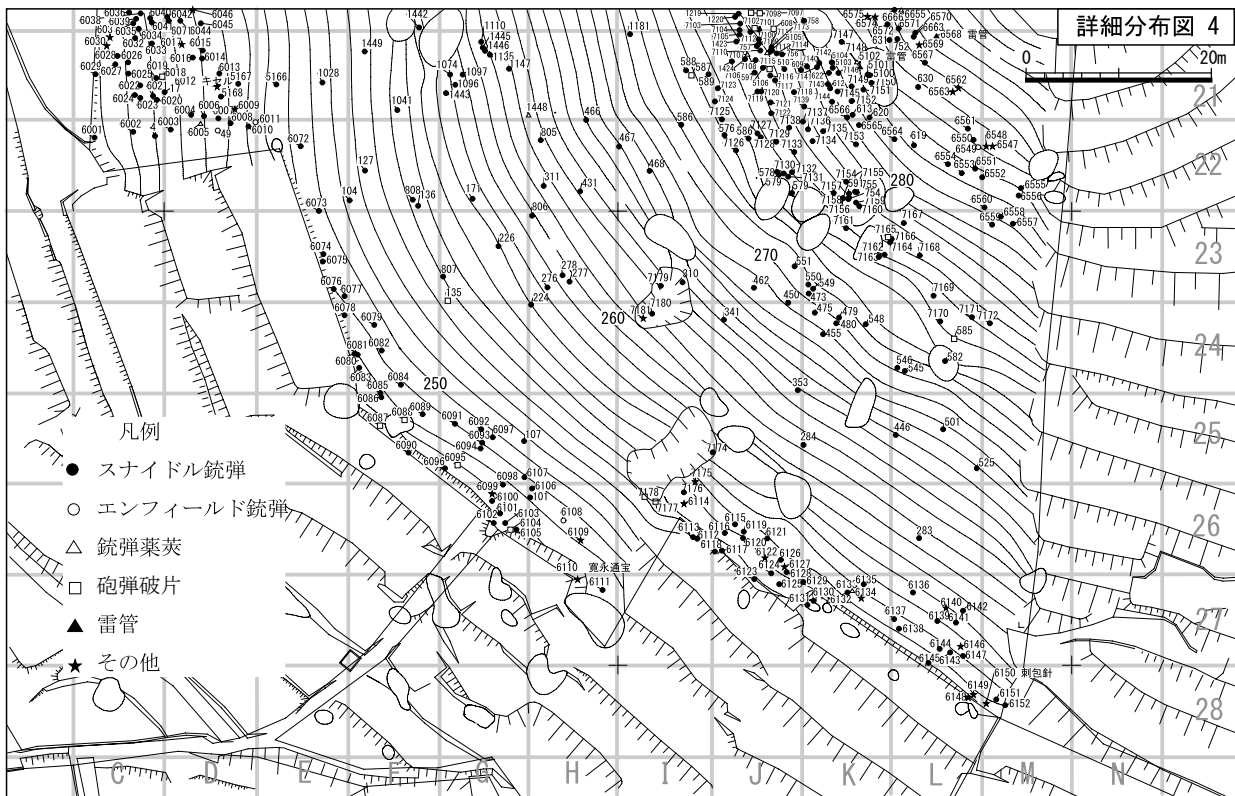
第71図 半高山・吉次峠戦跡遺物分布図・詳細図







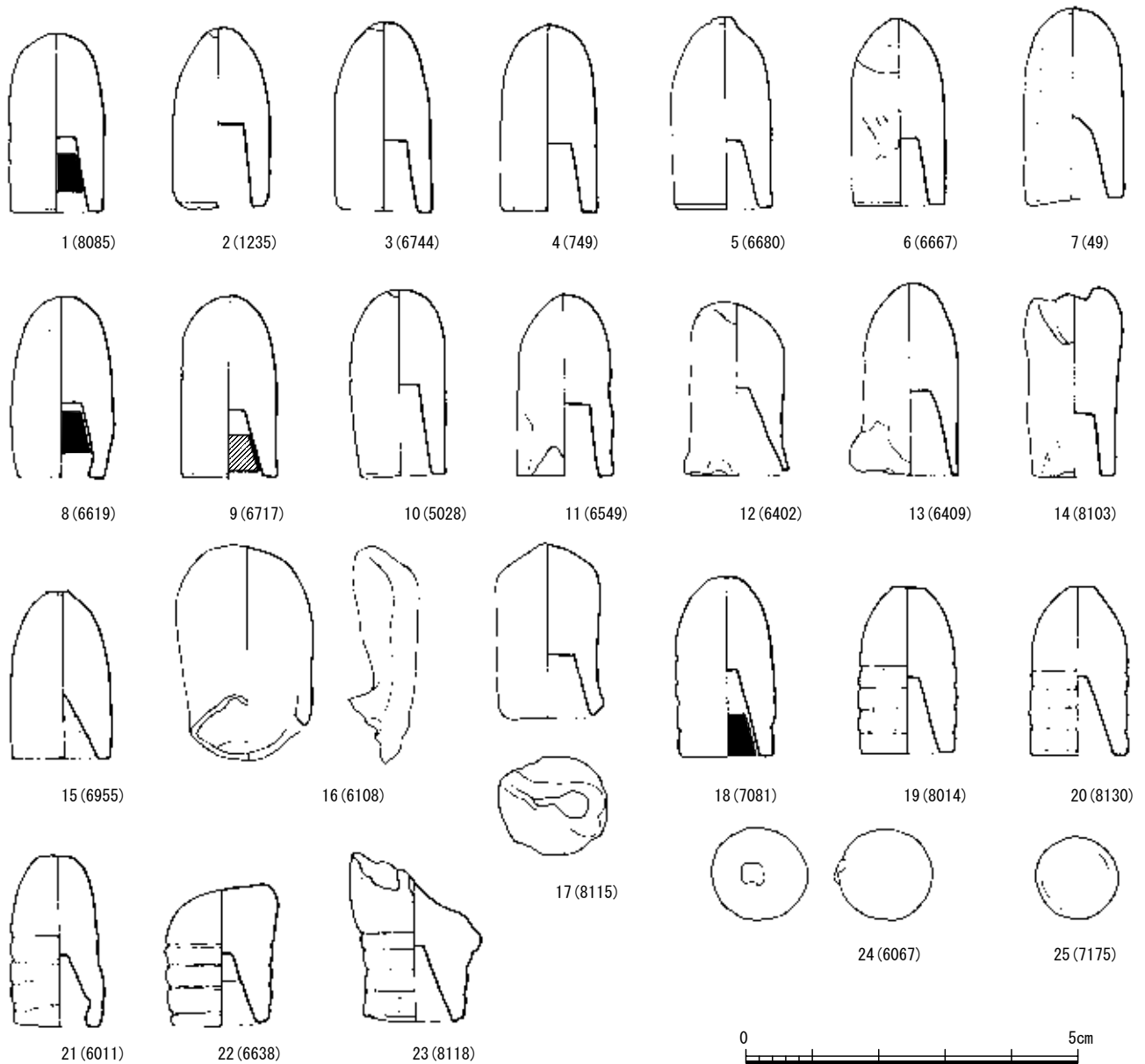
詳細分布図 3



エンフィールド銃弾

第72図1(8085)～23(8118)はエンフィールド銃に使用された弾である(図版12上)。鉛製で表面に圈溝のないタイプと4条の溝のあるタイプ2種類がある。溝のないタイプは弾底部断面形態が円錐形(a類)と台形(b類)のものに分けられ、ほとんどがb類である。b類の中には、4(749)や5(6680)、7(49)、9(6717)のように、弾鑄型のバリ(表面に縦方向の筋が入り、一部先端部に突起がある)がそのまま残っているものがある。これらのほとんどは未使用弾であった。茶色の陶栓の挿入されているもの1点、木栓が挿入されているもの2点が認められた。15(6955)は弾底部断面円形態が錐形のa類である。プリチェット弾といわれるもので、圧入のための栓を必要としない。これも未使用弾である。18(7081)～23(8118)は4条の圈溝が入り、弾底凹部が円椎状でミニエー弾といわれるエンフィールド銃に使用された銃弾の一種である。弾鑄型で製作された際のスパーク・カッターの痕跡で、先端部が平たく潰れている。18には木栓が残っている。

半高山戦跡では、横平山戦跡に比べるとエンフィールド銃弾の出土点数が少なく、且つバリが残存する手作り弾と思われるものが未使用で遺棄されている。これらには銃口に合わない等何らかの欠点があったとも考えられる。



第72図 半高山戦跡出土遺物実測図(エンフィールド銃弾等)

第72図24(6067)～25(7175)は火縄銃の弾である。24は径より判断すると、4匁5分玉、25は3匁玉である。

スナイドル銃弾

第73図～第75図はスナイドル銃弾である。この内、第73図26(7143)～46(1058)は先端部に木片が入り、弾底部断面形態が台形を成すA1類である。半高山で出土したA1類には、そのほとんどに茶色の圧入陶栓が残在しており、灰色のものは1点のみであった。34(6350)、35(5136)、36(7033)、45(6792)の先端部は木片が取れている。すべて筋状に施条痕が残る。A1類については4条の圏溝の内、裾の幅が狭いものが多い。発射や着弾によりこのように変形したのだろうか。変形が著しく原形を留めていないためはっきりとしたことは言えない。37(6440)は圏溝の間に細かい刻み目が縦方向にはいる。出土銃弾の中でも特にA類に多数見ることができこの特徴は、発射の際についた発射痕か生産工場の違いに起因するものともいわれている。

第73図47(5159)～65(1443)は弾底部断面形態は台形で、先端部は中空である(と思われる)A2類である。茶色や灰色の陶製の圧入栓が入る。54(712)や55(1129)のように先端部に数mmの凹みのあるものも多く、64のようにマッシュルーム状に先端部が潰れているものも多く見受けられる。

第74図はスナイドルA類である。先端部がひどく潰れてA1、A2の判断のつかないものをA類としている。これにも茶や灰色の陶栓が入る。スナイドル銃弾は先端部が着弾のときに潰れ易いように、先端部を中空にしたり、穴に木片を入れたりしてあるようだが、実際に遺跡から出土する銃弾は先端部がマッシュルームのように潰れたものや花卉状に開いたものが多い。

第75図83(1351)～109(1006)は弾底凹部の断面形態が柱状のB類である。83(1351)～85(8059)は未使用弾であり、灰色の陶製圧入栓が入る。内部の空洞はかなり深い。B類には木製栓、茶・灰色の陶製栓すべての種類の圧入栓が使われている。また、A1類で見られたように、圏溝の裾部幅が狭いものが見受けられる。いずれも施条痕が残っており、やはり発射や着弾の勢いで短くなっているものと思われる。

同図110(748)～123(7137)はA2類かB類と思われるもので、圧入栓が詰まっていることにより分類不可能なものである。110(748)～112(6577)は未使用弾である。111(791)は錆でふくれており、112(6577)は薬莖の破片が付着した状態で出土した。

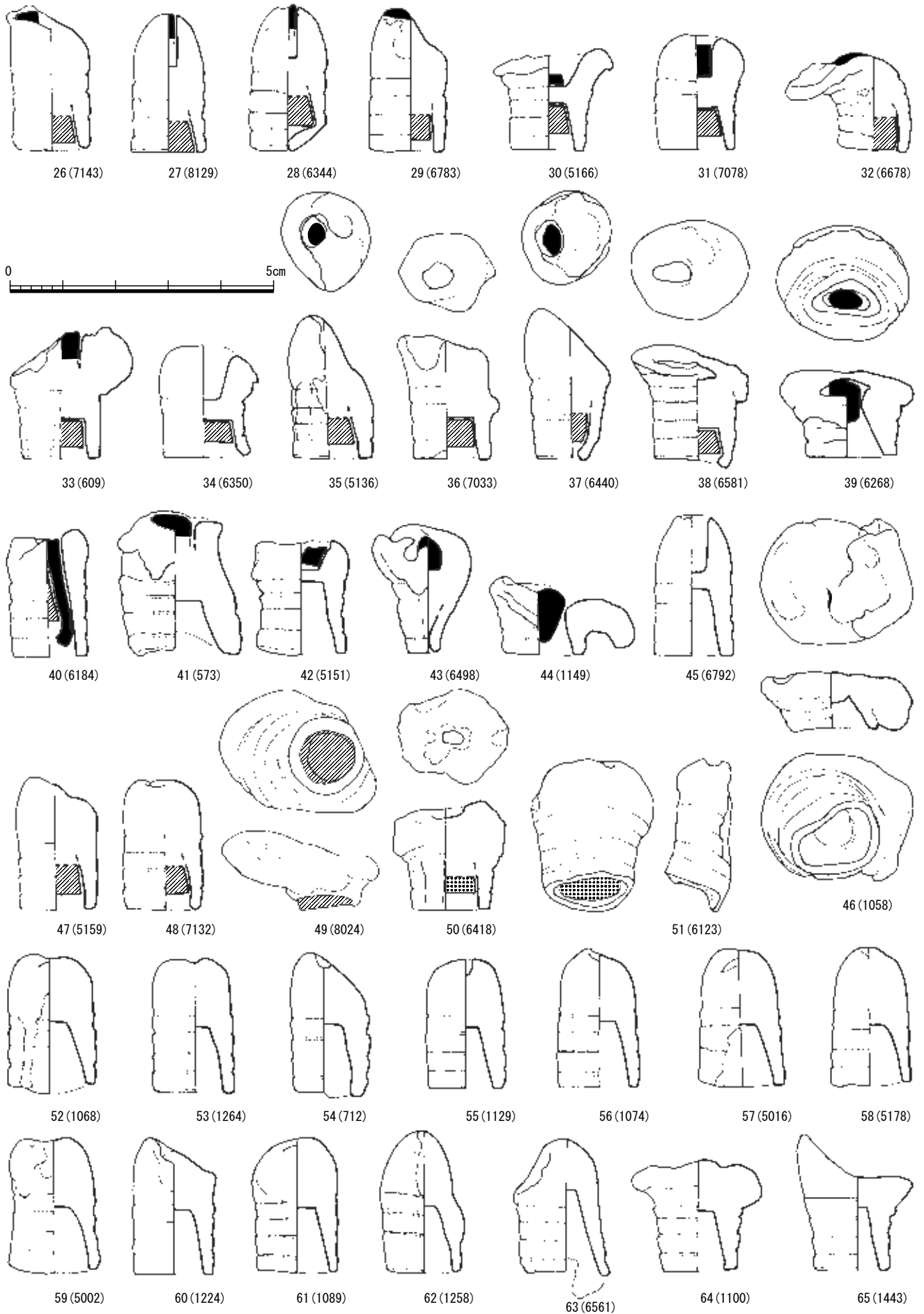


半高山戦跡出土エンフィールド銃弾等

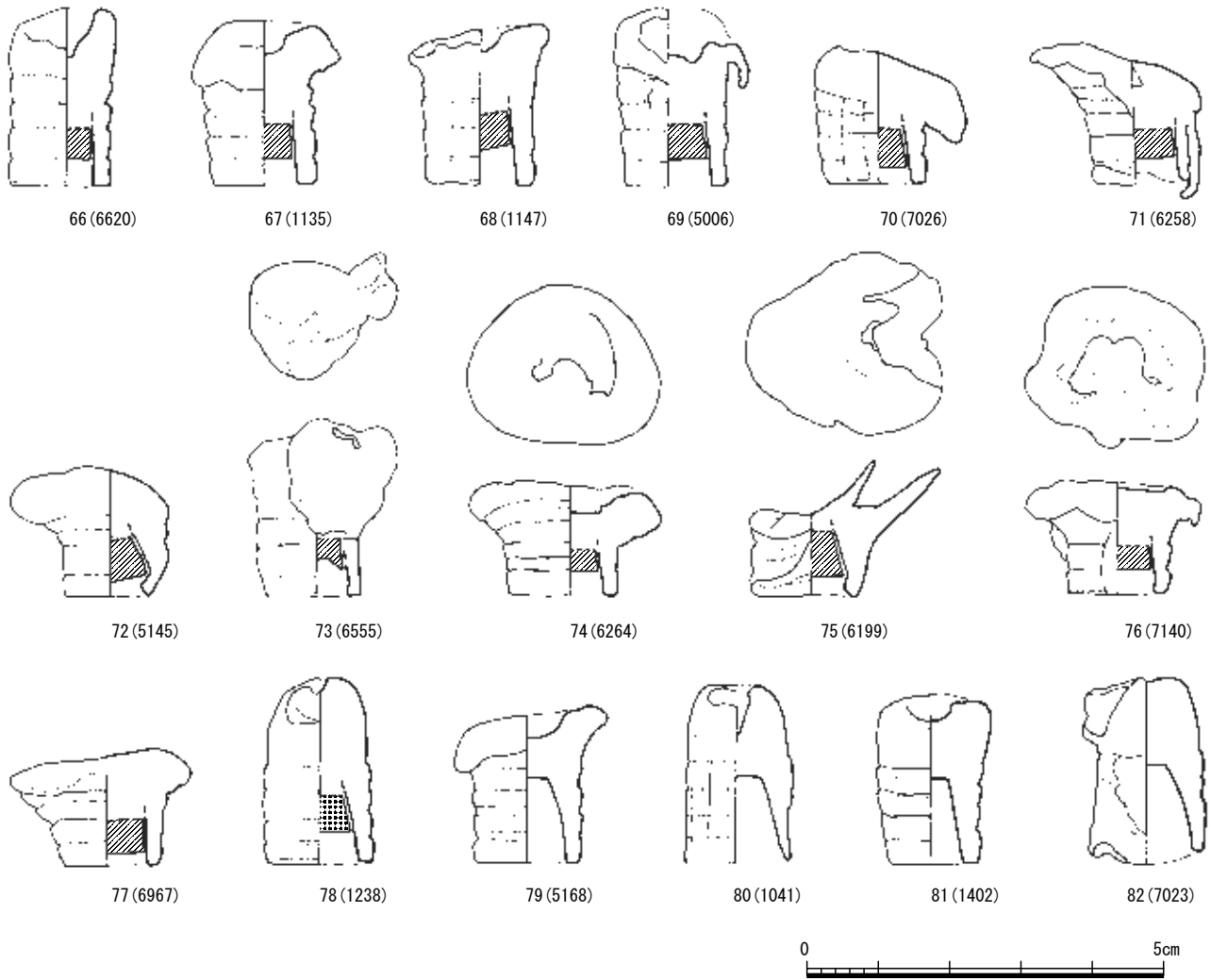


半高山戦跡出土スナイドル銃弾





第73図 半高山戦跡出土遺物実測図(スナイドル銃弾A1・A2類)



第74図 半高山戦跡出土遺物実測図(スナイドル銃弾A類)

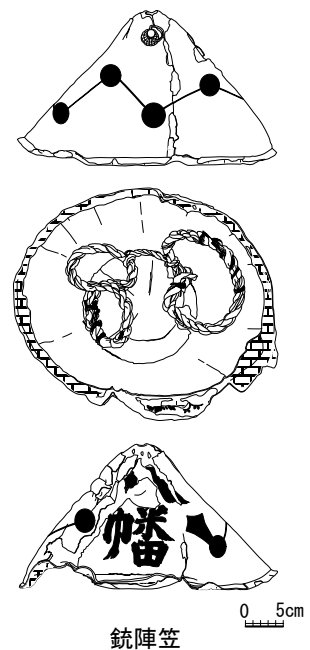
資料紹介1

銃陣笠

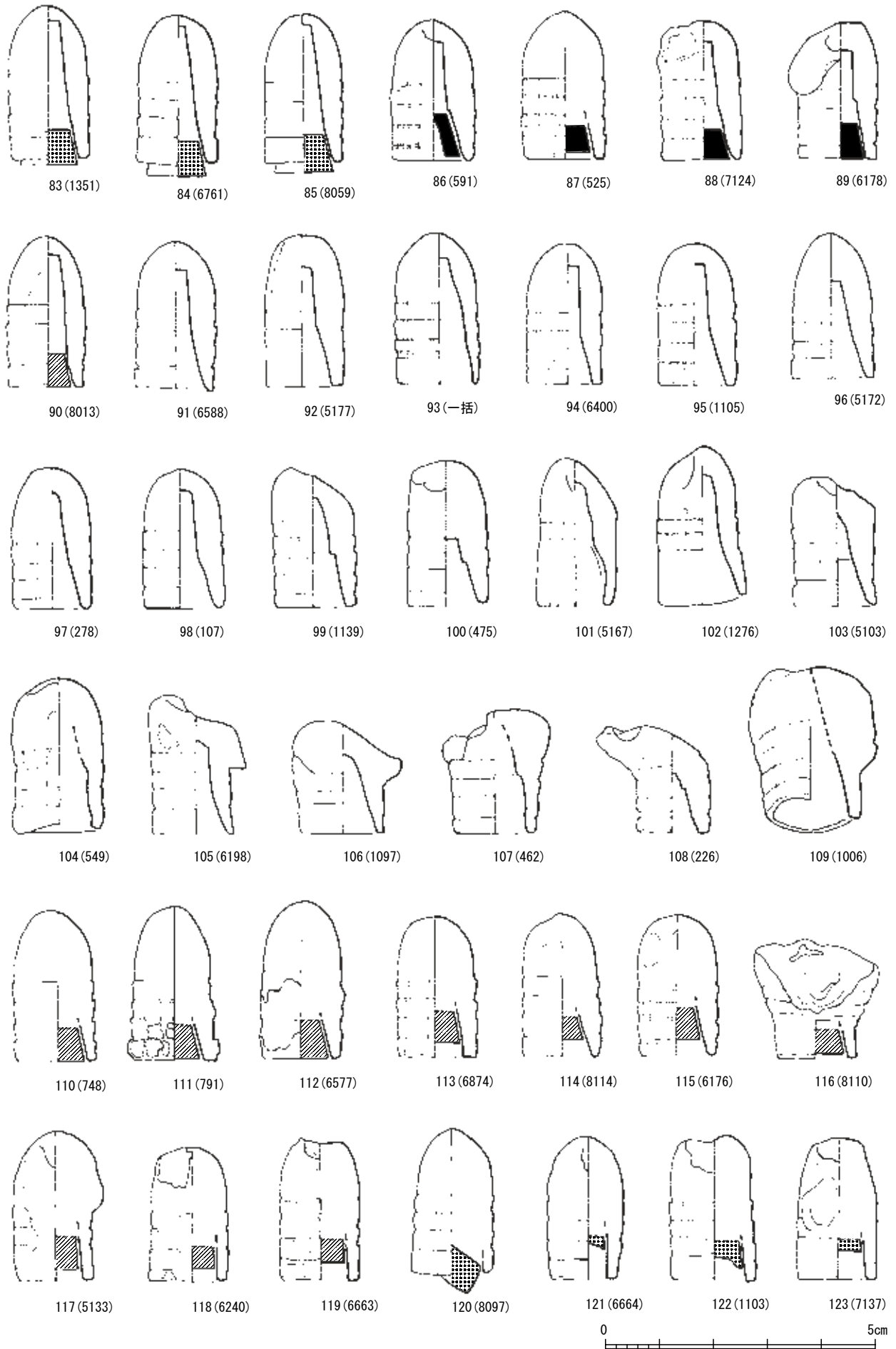
西南戦争100周年記念事業の際に町民から玉東町教育委員会に寄贈を受けた銃陣笠である(薩摩藩では「半首<sup>はっぶり</sup>」という)。多少歪みがあるが円錐形を呈し、正面に真底が付く。長径34cm、短径31cm、高さ18cmである。革に布が貼られ、その上に黒の漆、内側には赤の漆が塗られている。外側表面には「八幡」の金色の二文字が正面に記され、周辺に径3cmの円が七つ線で結ばれるように描かれる。笠の先端には二重の菊紋の金具が取り付けられている。真底は笠の端に切り込みを入れて作られており、内側には金色で唐草文様が描かれる。顎紐には布を依った布が使われている。錦絵等の薩摩藩兵によく見られる物で、薩軍を象徴する遺物といえる。

参考文献

幕末軍事史研究会著2008『武器と防具 幕末編』新紀元社



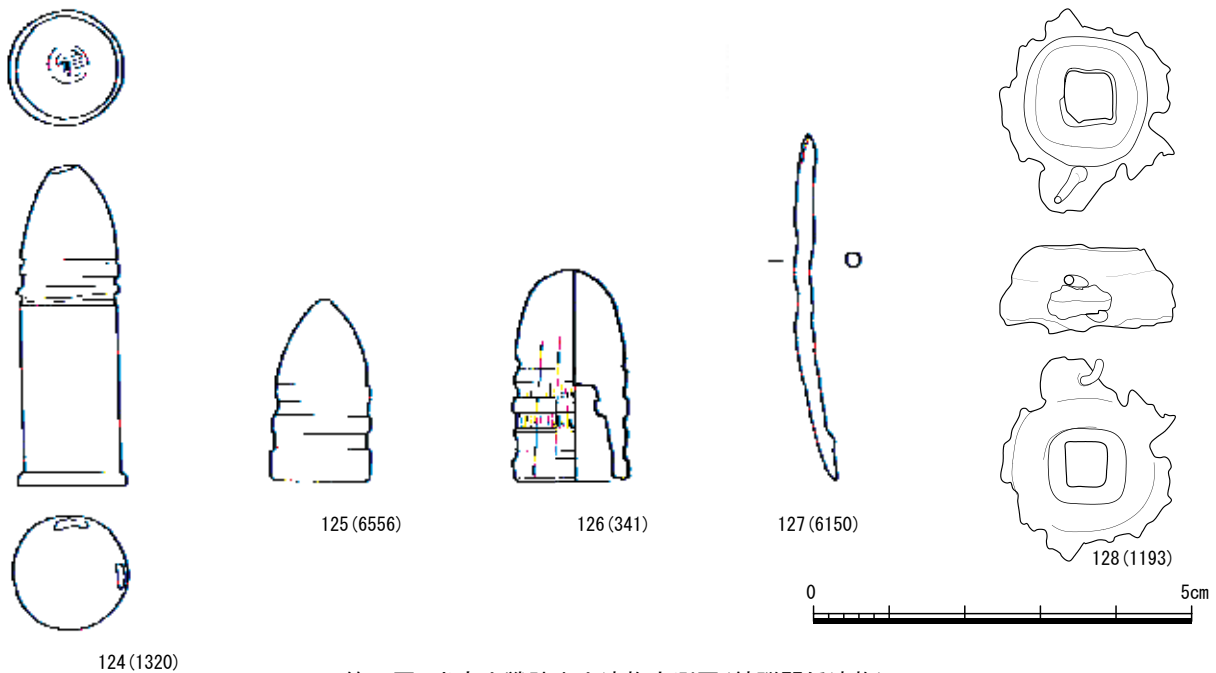
銃陣笠



第75図 半高山戦跡出土遺物実測図(スナイドル銃弾B・A2/B類)

第76図124(1320)はスペンサー実包である。薬莖が付いているので未使用の状態と思われるが、薬莖底部2箇所には打痕と思われる凹みが見られる。スペンサー銃薬莖には底部縁に雷汞があり、縁を敲打することで発射する。縁に打痕があるということは、発砲するも不発のために遺棄された可能性がある。125(6556)はシャープス銃弾である。スナイドル銃弾よりは小型で先端部が鋭る。圈構は断面凹状であり、胴部周縁に2本入る。

第76図126(341)はスナイドル銃弾と思われるが弾底部断面形態が他のものと異なり台形にくびれる。横平山戦跡でも1点出土している。側部圈溝も鋸歯状というより凸状で他と様相が異なる。127(6150)は刺包針である。銃のメンテナンスに使うものである。128(1193)は火門蓋である。エンフィールド銃の火門を保護する為のもので用心鉄の鉸から鎖で結ばれている。出土したものは鉄製で、方形の孔があく。側面には銅線(鎖)が残っている。



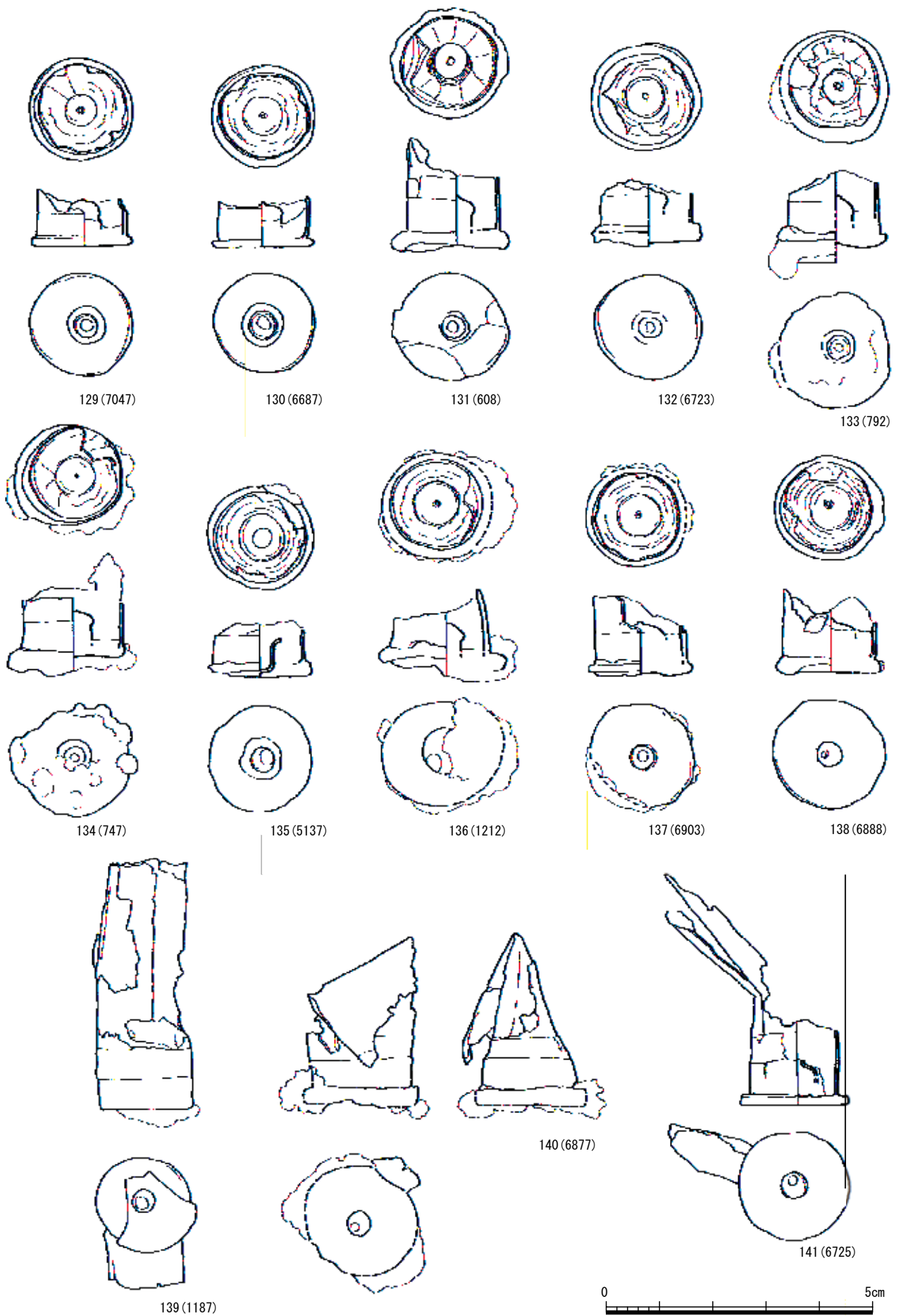
第76図 半高山戦跡出土遺物実測図(銃弾関係遺物)

薬莖

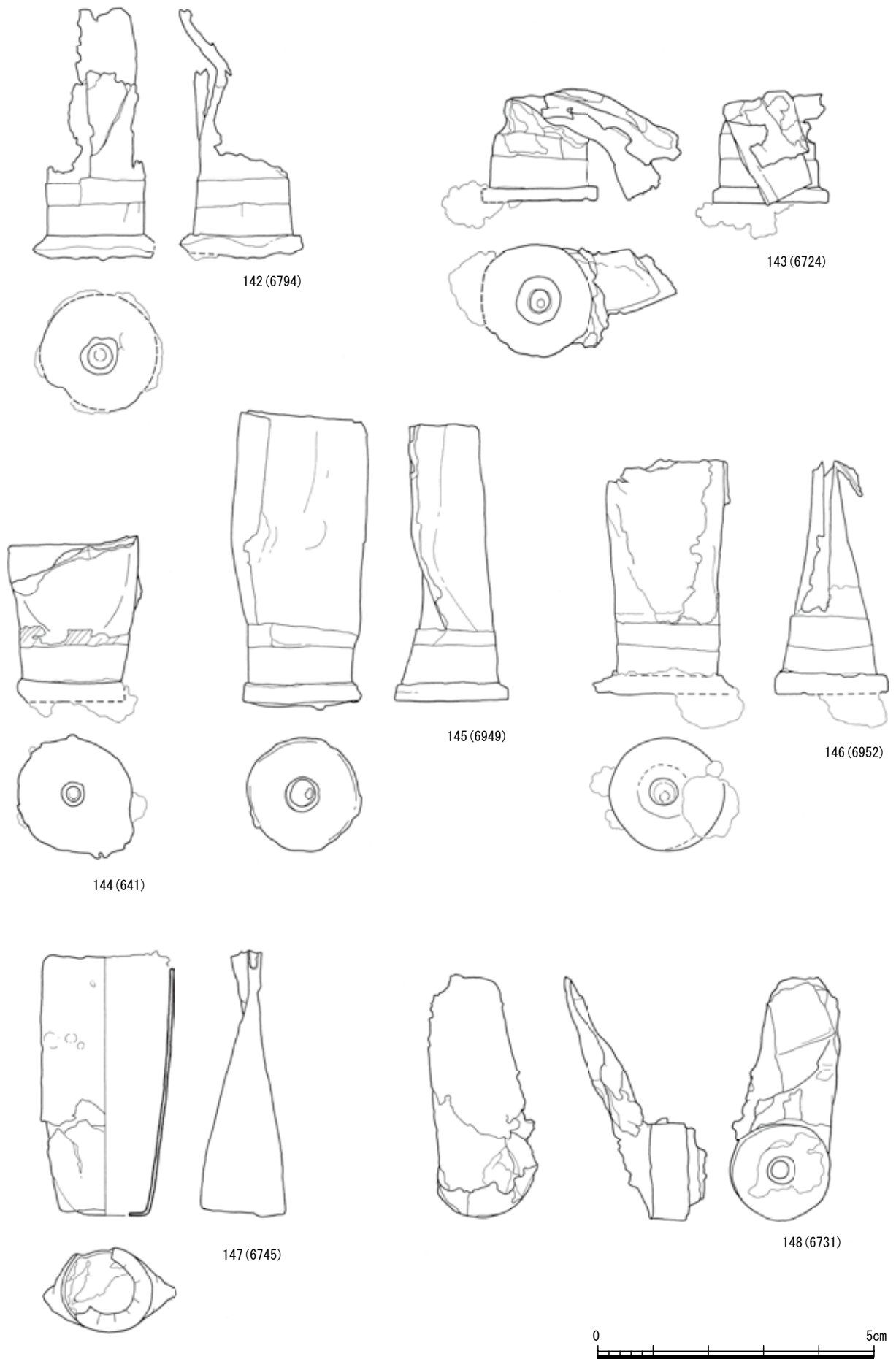
半高山戦跡ではスナイドル薬莖129点、スペンサー薬莖23点が出土した。

第77図～第79図はスナイドル銃の金属薬莖である。第77図129(7047)、130(6687)は底部盤が銅製で、その他はすべて鉄製である。銅製のものはMARKII～IIIであると思われる。131(608)～135(5137)は雷管径が6.5mm～7.0mmのもので、136(1212)～138(6888)は径8mmのものである。前述したようにこの径の大きさの変化は型式の変化に伴うものと思われる。第77図139(1187)～第79図155(6665)は金属薬筒部が残存する。金属の上から紙が巻かれていたと思われるが、それはほとんど残っていない。149(6765)や、150(661)、152(6801)、155(6665)はインナーカップの長さが他に比べて11mmと少し長い。これもまた、型式の変化に伴うものと思われ、MARKIXではないかと思われる。スナイドル銃実包は薬莖と雷管が一体になったもので、中心打撃式である。すべてに打痕があり、中心部に凹みが残る。

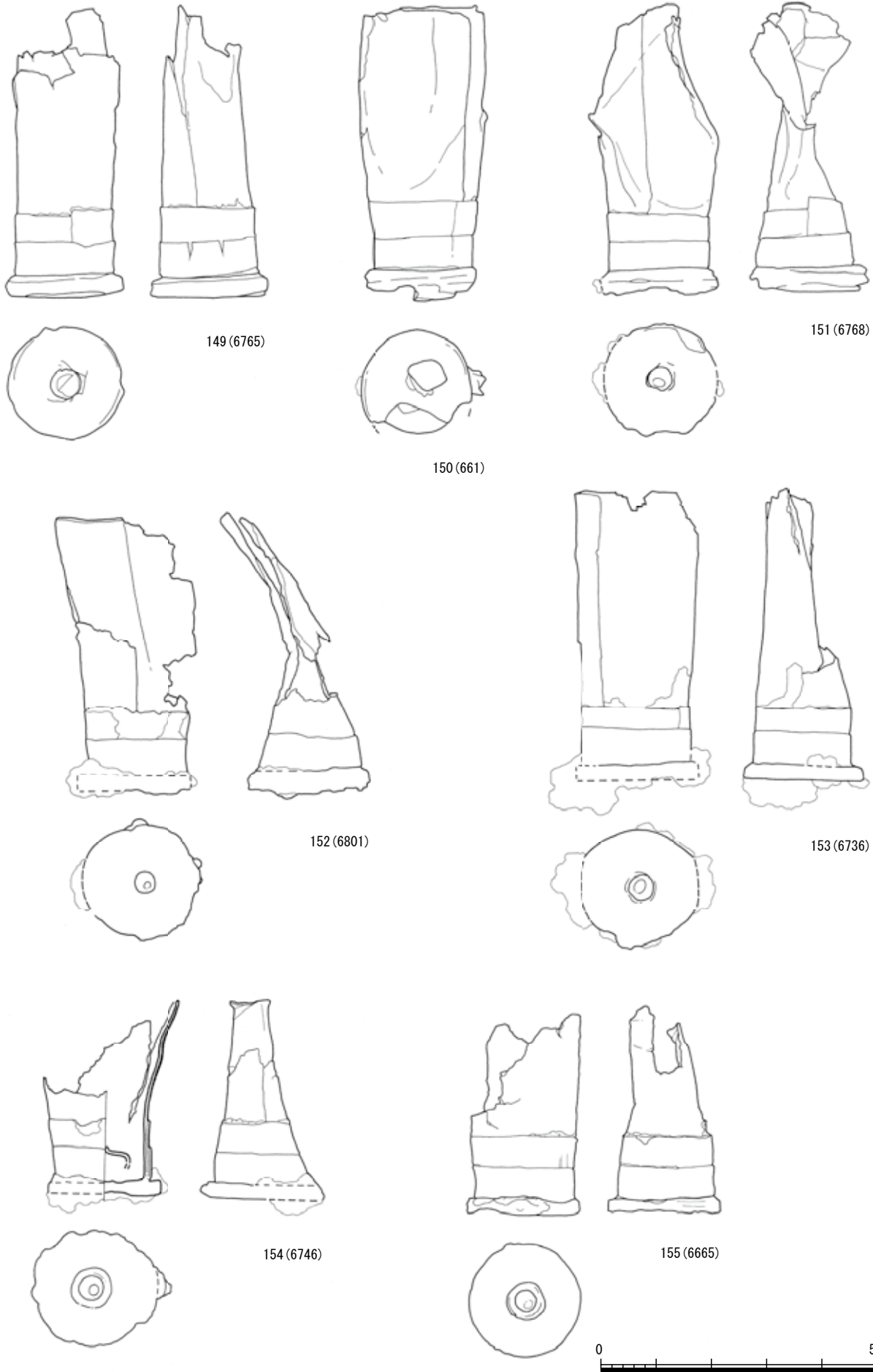
第80図156(6597)は56-50のスペンサー実包の薬莖である。157(746)～167(6839)は56-56のスペンサー実包の薬莖である。157～162は底部打痕が半円形を呈するが、163～167は長方形である。銃器の違いによるものだろうか。161(741)には薬筒部の中央周辺に何かを巻いたような跡が残っている。



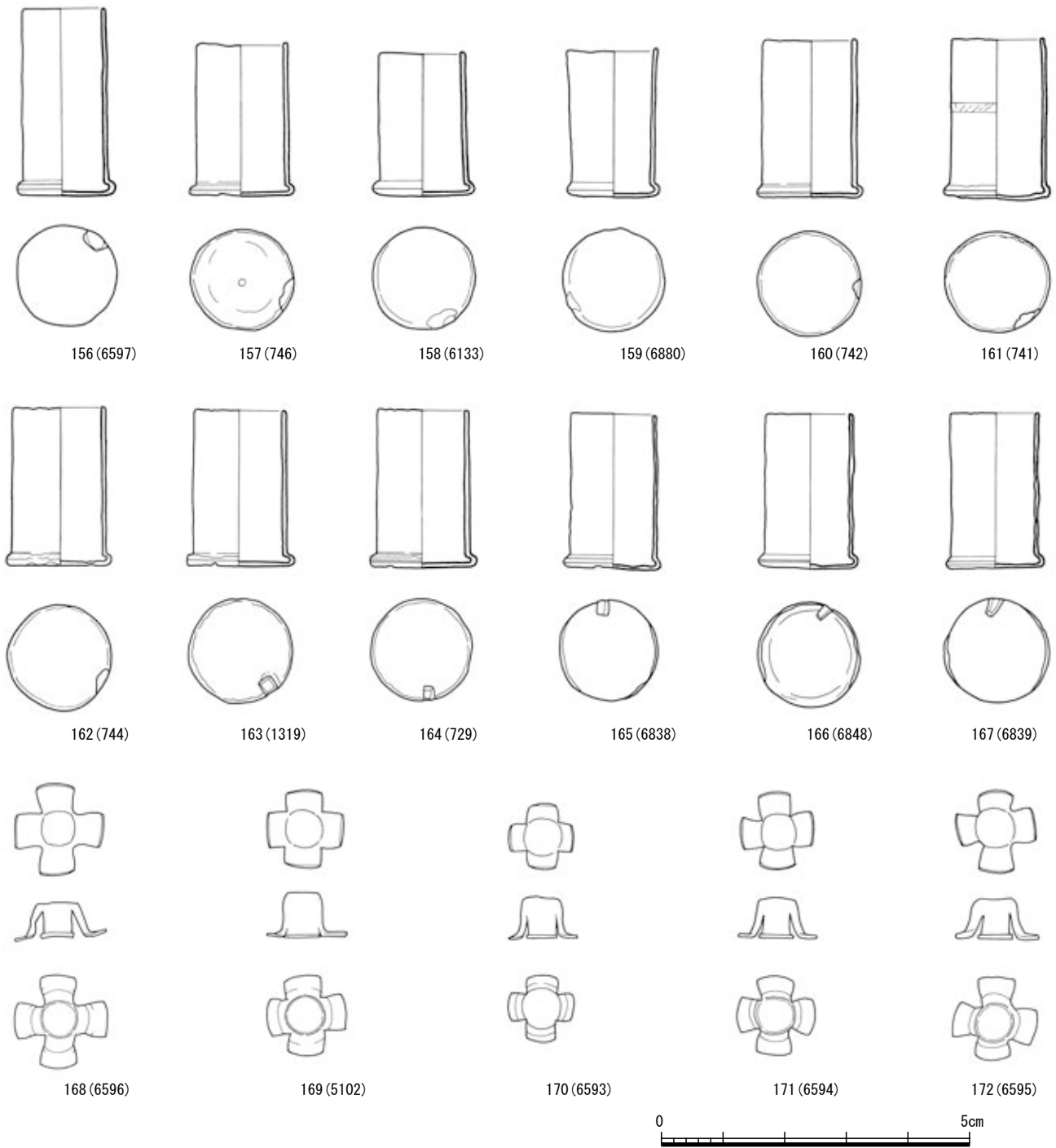
第77図 半高山戦跡出土遺物実測図(スナイドル葉莖)



第78図 半高山戦跡出土遺物実測図(スナイドル葉莢)



第79図 半高山戦跡出土遺物実測図(スナイドル葉莢)



第80図 半高山戦跡出土遺物実測図(スペンサー薬莖・雷管)

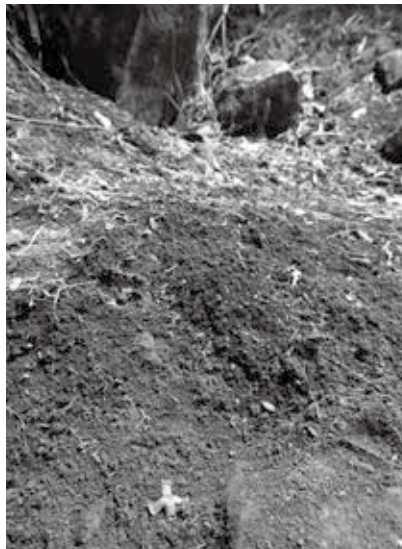
雷管

第80図168(6596)～172(6595)は管打式銃の雷管である。半高山戦跡山頂部を中心に12点出土している。銅製でシルクハット形を呈し、裾部が四俣に別れる。169(5102)は裾部に割れ目がなく、未使用であると思われる。当町の遺跡では半高山以外に出土例はないが、田原坂の薩軍陣地や山頭遺跡の薩軍陣地においても数点出土している。

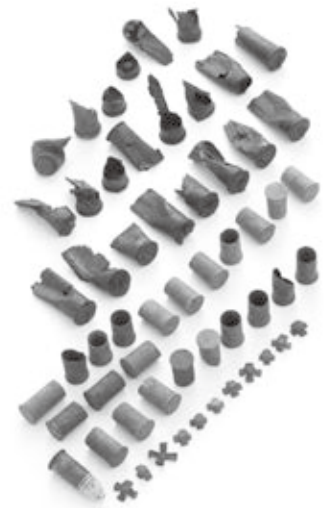




半高山戦跡スペンサー薬莖出土状況



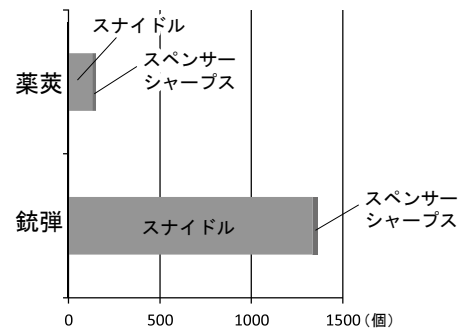
半高山戦跡雷管出土状況



半高山戦跡出土薬莖・雷管

銃弾と薬莖の比率

銃弾と薬莖の出土割合は右図のとおりである。半高山では銃弾1,349点出土しているのに対し、薬莖(雷管含む)は164点と1割程度である。半高山における陣地は主に山頂部であり、相対する陣地の調査を行っていないために銃弾に対する薬莖の数が少ないものと推測される。それにしても銃弾の数量は圧倒的に多い。



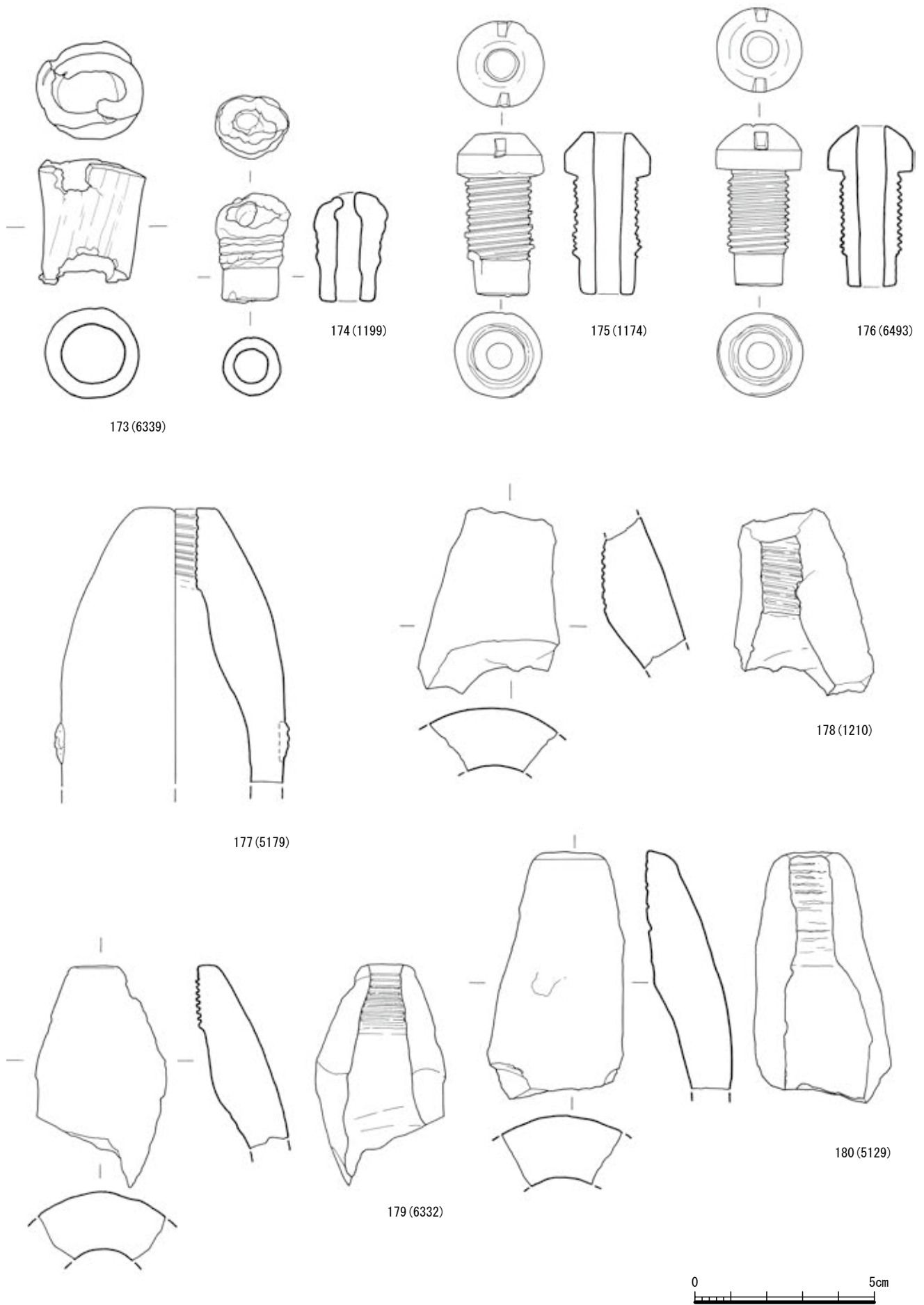
半高山戦跡出土銃弾・薬莖比率

第81図173(6339)はヒューズプラグである。金属製で筒状をなす。白砲に挿入して使われるもので、半高山中腹部で出土した。白砲に関する遺物は町内遺跡の調査においてこの1点のみである。174(1199)～176(6493)はデマレー式信管である。174は腐食が激しく頭部の形状ははっきりしない。175、174は頭部円形筒状をなし、砲弾にねじ込むためのネジ山がはっきりと刻まれる。電子顕微鏡による元素分析によると主成分は亜鉛であり、わずかに鉛が検出された。

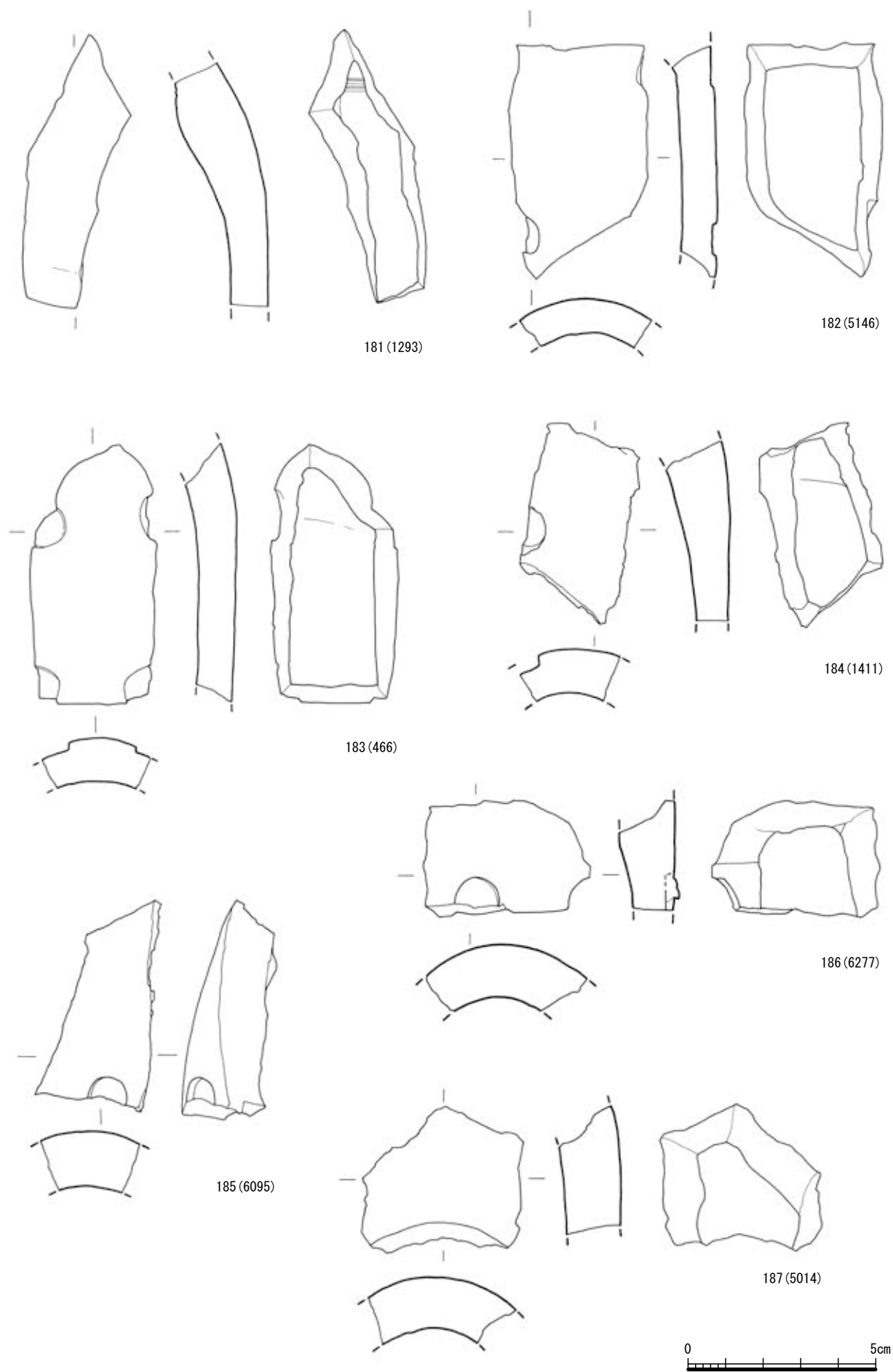
砲弾

第81図177(5179)～第82図187(5014)は四斤砲弾破片である。半高山では57点の破片が西側斜面から出土した。四斤砲弾は着発式信管を利用しており、着弾すると爆発し、砲弾がバラバラにはじけ飛ぶ。爆風効果と破片効果を併せ持つ榴弾である。第81図177(5179)～第82図181(1293)は頭部から胴部であり、182(5146)～187(5014)は胴部、第83図188(5018)～195(6648)は底部である。すべて鉄製である。胴部には8つの亜鉛製のスタッド(筒翼)が埋め込まれ、このスタッドが大砲の腔内に施された施条(ライフリング)に食い込む仕組みになっている。図化していないが、スタッドも単体で4点出土している。四斤砲弾はある程度規格性をもって作られたものと思われるが、何故かこれら砲弾の復元径は80mm～86mmと一定していない。

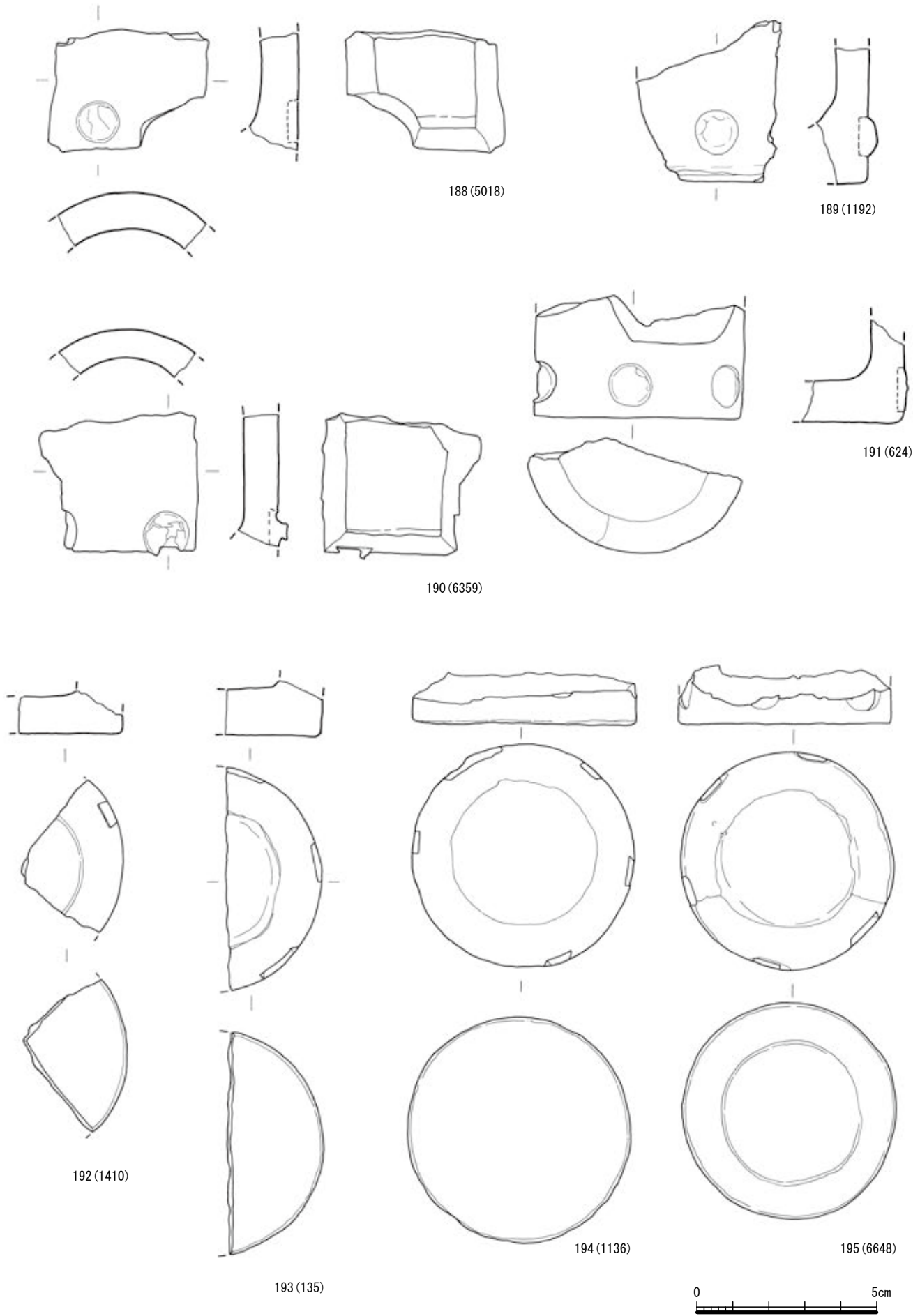
第84図196(1429-1)～199(1429-5)は天保通宝である。書体の特徴から薩摩銭と呼ばれる薩摩で製造されたという偽金ではないかと推測されている。200(1133)は半銭である。明治7年製と刻まれている。これらは12頁に示すように、半高山山腹より出土しており一括性が高い。第84図203(6278)～207(6449)はキセルの雁首である。206(6012)は他と比べて、脂返しの湾曲が大きく、首の接合部に補強帯が付く。二俣瓜生田官軍砲台跡中世の遺物で記載したものと類似する。第85図208(6640)、209(5001)は羅字キセルの吸い口である。209(5001)には銀メッキが残っている。



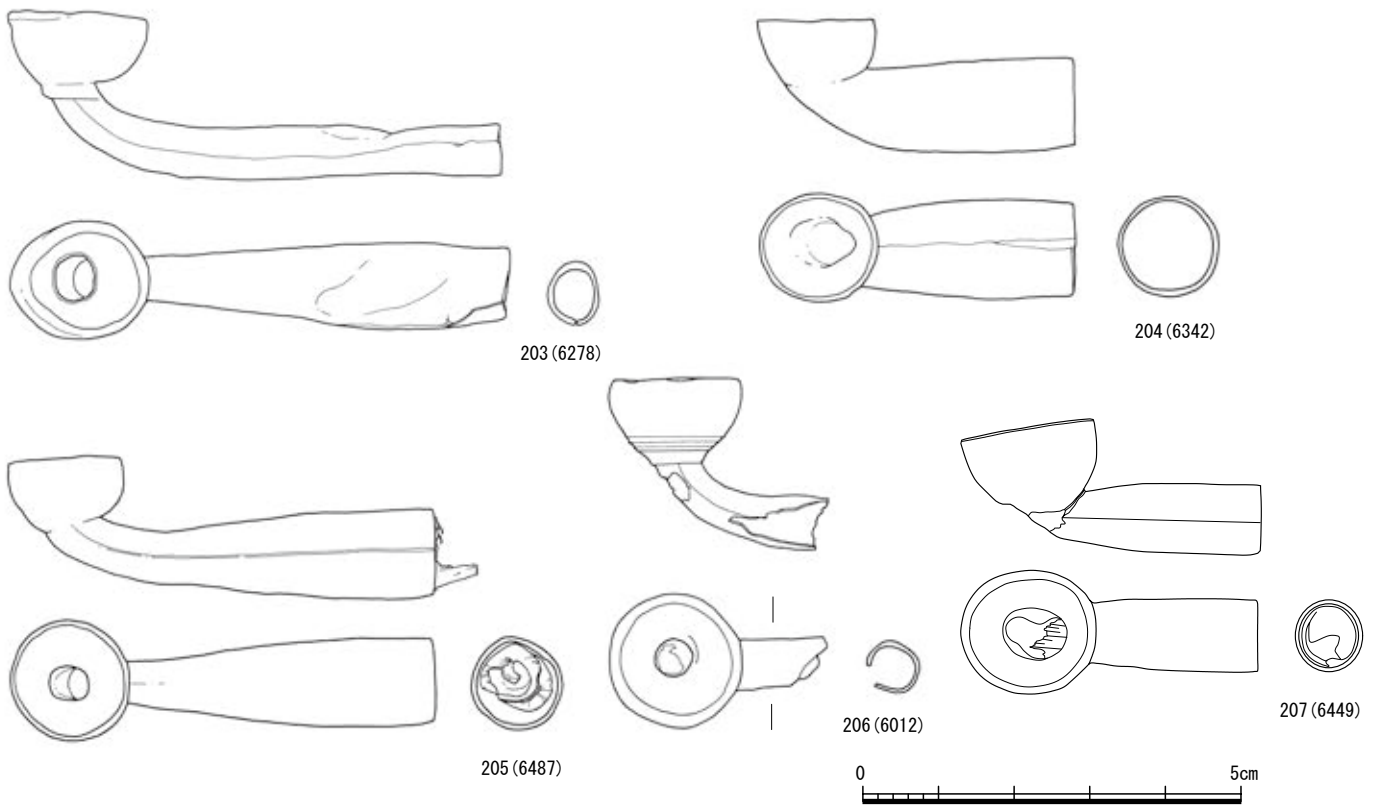
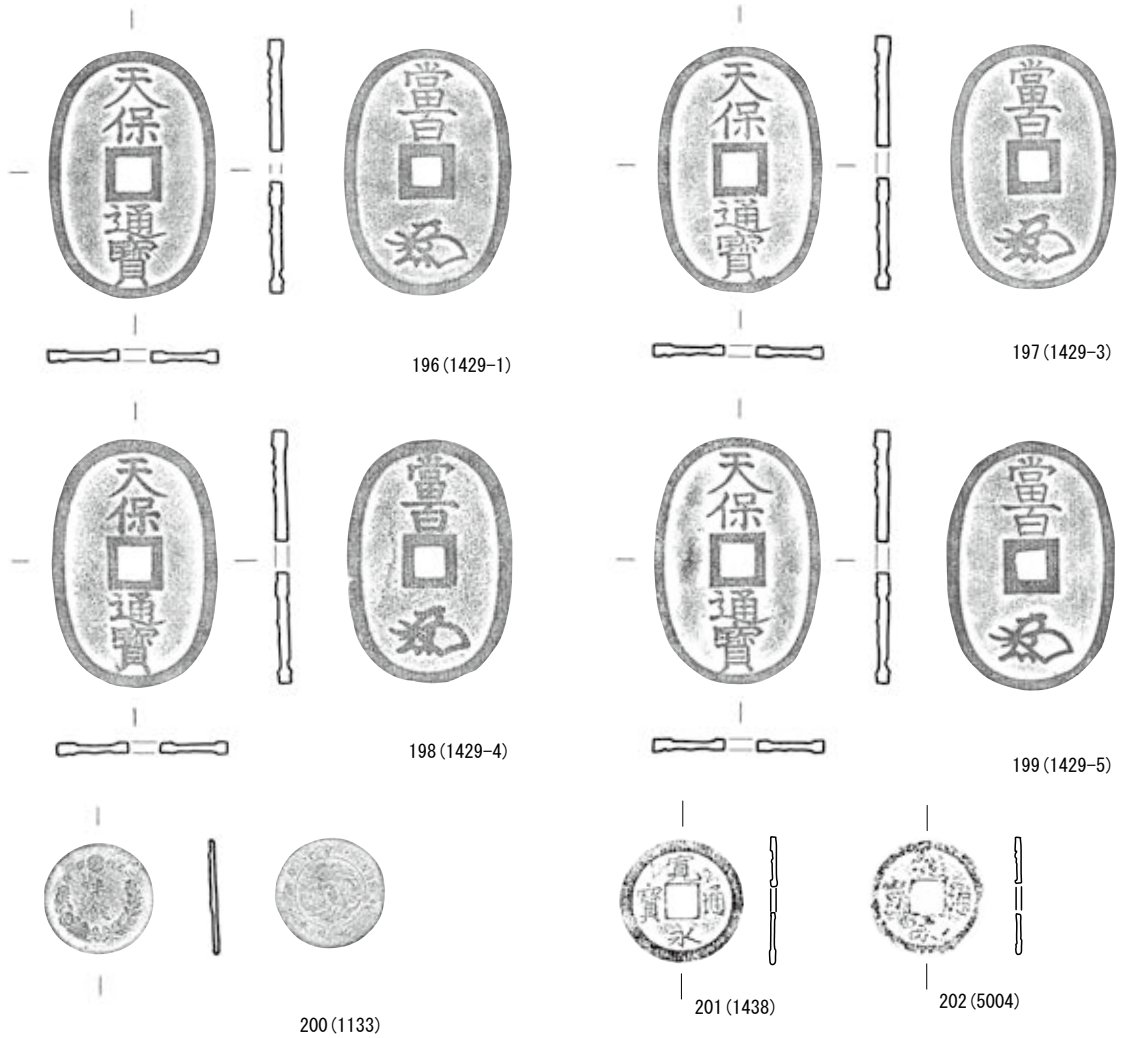
第81図 半高山戦跡出土遺物実測図(砲弾)



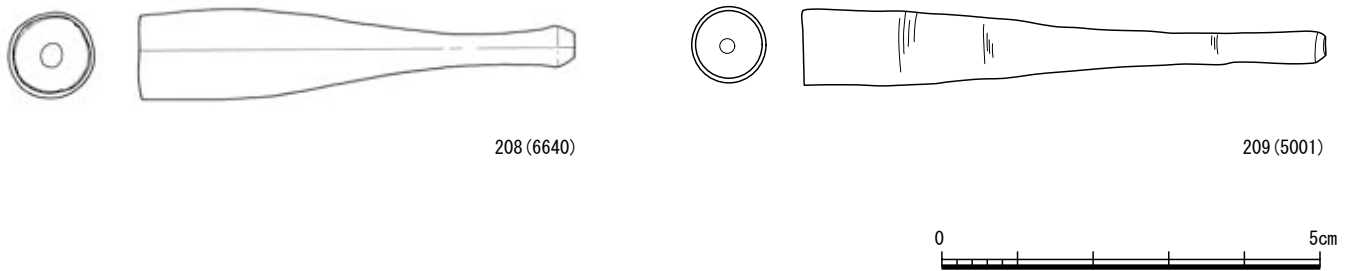
第82図 半高山戦跡出土遺物実測図(砲弾)



第83図 半高山戦跡出土遺物実測図(砲弾)



第84図 半高山戦跡出土遺物実測図(古銭・キセル)



第85図 半高山戦跡出土遺物実測図(キセル)

(4) 吉次峠戦跡調査区出土遺物

遺物は18点出土しており、銃弾13点(内破片1点)、火縄銃弾1点、四斤砲弾破片2点、スタッド1点、蹄鉄1点である。遺物は、公園地内の北側斜面にて出土した。公園には桜が植樹され、芝が貼られているが、地表面から遺物が出土することを考えると、大きく土地の改変は行われていないようである。

第86図210(3079)～221(3083)はスナイデル銃弾である。210(3079)は先端に木片の入るA1類で陶栓が挿入されている。211(2069)～217(3116)はA2類、219(3502)はA類、220(3093)はB類、221(3083)は分類できないほど潰れがひどい。222(2007)、223(3117)は四斤砲弾破片である。222(2007)はスタッドのついた大きな破片で、223(3117)はスタッドは残っていない。224(2241)はスタッド単体である。225(3090)は蹄鉄である。全長120mm、幅120mm、厚み8mmで鉄製である。9箇所釘を打ち込む穴があいており、4本の釘が残ったままである。二俣古閑官軍砲台跡で出土した蹄鉄よりも少し大きいが見て小さい印象を受ける。西南戦争の遺物であるかどうかは不明である。

談話

玉東町大字上木葉 田畑茂雄 85才

私の家の仏壇の引出しの手引き処に弾丸の入ったまま使用しておりますが、これは附近の山にあった杉を切ったところ、弾丸が込っていたので記念にすると同時に仏壇の引出しに使用すれば仏も浮かばれると思って使っております。

この左手に山がありますが、この山の頂上付近で両軍が衝突して切り合いをして両方共三人ずつ戦死した。

私の家の近所に田辺正八という者がいたが、片足が小さく、びっこしていた。原因は流れ弾丸に当り負傷して不具合になっていた。

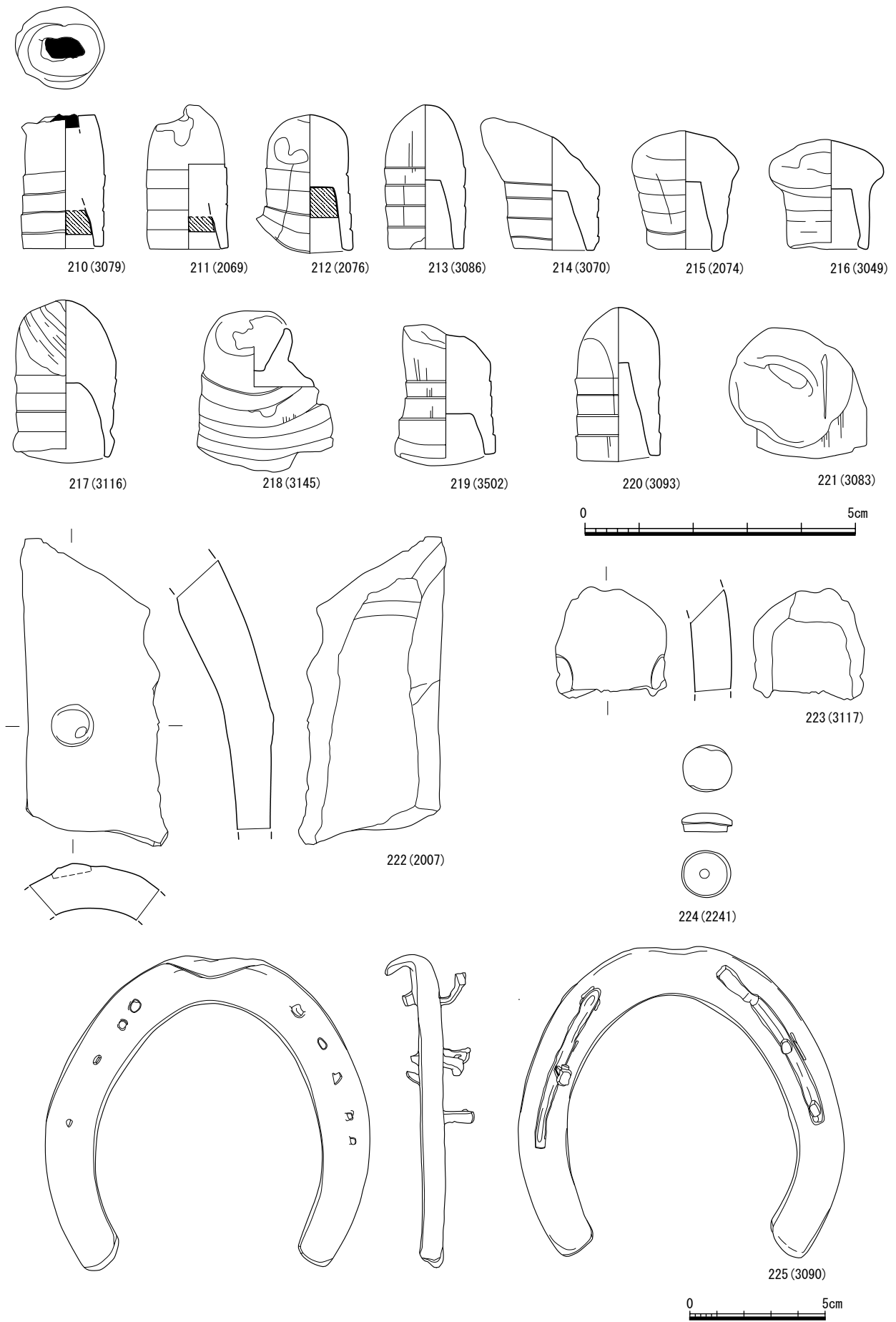
大本營のあった高田家の源蔵さんという人は偉い人で官軍の高官と話をしておられた、自分は「バツ

チョ笠」をかぶり戦場の模様を詳しく調べ報告していたので重宝がられた。

天草に「バクチ」打ちに行き、予め船頭を買収して勝ったら逃げて帰る用意をしていた。仲々の智者で駆け引きも強く、金儲けも上手だったらしい、勝逃げすると相手が追ってくるので追手を遅らせるために道路に金をばらまいて逃げたという話もある。

戦役中は女性が非常に苦労したらしい。兵隊が女を見ると、悪さをするので、女の人ではできるだけ姿を見せないようにしていた。未婚者も「オハグロ」(既婚者は歯を黒く染めていた)をしてできるだけ難をのがれようとした。

出典:玉東町編 平成7年『歴史への招待』



第86図 吉次峠戦跡出土遺物実測図





## 第V章 半高山・吉次峠戦跡の調査

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	入射角	分類	柱	潰れ方	鍍直し痕	圏溝幅	縦方向の規則的な刻み	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	備考
	1060	スナイドル銃弾	E18	-	-	-	全体				-	-	27.7	
	1061	スナイドル銃弾	F12	-	A2	-	頭部				(27.6)	(16.7)	28.4	
	1064	スナイドル銃弾	E19	-	-	-	側部				(30.1)	(18.0)	30.1	
	1065	スナイドル銃弾	E19	-	B	-	側部				(29.5)	(18.9)	28.8	
	1067	スナイドル銃弾	F12	-	-	-	破片				-	-	20.2	
第73 国	52	1068	スナイドル銃弾	F11	-	A2	-	側部			(25.7)	(16.8)	28.4	
	1069	スナイドル銃弾	F12	-	A1	-	木				(23.9)	14.3	29.6	
	1070	スナイドル銃弾	F13	-	A	-	陶/茶	頭部			(16.8)	(15.9)	29.2	
第73 国	56	1074	スナイドル銃弾	F21	-	A2	-	側部			(25.8)	(15.1)	28.5	
	1075	スナイドル銃弾	E20	-	A1	-	陶/茶	側部			(26.8)	(22.2)	30.0	
	1076	スナイドル銃弾	E20	-	A2	-	側部				(26.4)	(15.8)	29.1	
	1078	スナイドル銃弾	F17	-	-	-	全体				-	-	28.0	
	1079	スナイドル銃弾	E18	-	A2/B	-	側部				(27.1)	(18.8)	28.7	
	1081	スナイドル銃弾	F18	-	-	-	陶/茶	頭部			(16.3)	(15.5)	30.0	
	1082	スナイドル銃弾	F17	-	-	-	側部				(26.5)	(18.0)	28.6	
	1085	スナイドル銃弾	F16	-	-	-	陶/茶	全体			-	-	30.6	
	1086	スナイドル銃弾	F14	-	-	-	全体				-	-	27.5	
	1087	スナイドル銃弾	F13	-	A	-	側部				(20.5)	14.1	29.4	
第73 国	61	1089	スナイドル銃弾	F15	-	A2	-	側部		○	(25.4)	(15.9)	29.2	
	1090	スナイドル銃弾	F16	-	A1	-	側部				(19.5)	(18.1)	28.7	先端部木片あり
	1091	スナイドル銃弾	F17	-	-	-	全体				(12.0)	(14.8)	28.8	
	1094	スナイドル銃弾	F20	-	B	-	全体				(28.4)	(27.0)	28.2	
	1095	スナイドル銃弾	F21	-	-	-	破片				-	-	13.9	
	1096	スナイドル銃弾	F21	-	A2/B	-	側部				(27.0)	(16.0)	27.7	
第75 国	106	1097	スナイドル銃弾	F21	-	B	-	側部			(20.3)	(19.5)	29.7	
第73 国	64	1100	スナイドル銃弾	F18	-	A2	-	側部			(19.9)	(24.2)	29.1	
	1101	スナイドル銃弾	F16	-	B	-	側部				(22.9)	(18.0)	29.1	
	1102	スナイドル銃弾	F15	-	-	-	全体				-	-	21.9	
第75 国	122	1103	スナイドル銃弾	F13	-	A2/B	-	陶/灰	側部		(25.9)	(16.2)	28.8	
第75 国	95	1105	スナイドル銃弾	G11	-	B	-	発射痕のみ			26.3	(14.6)	30.5	
	1106	スナイドル銃弾	F13	-	A2	-	側部				(26.4)	(16.0)	29.4	
	1108	スナイドル銃弾	F15	-	A2	-	側部				(26.7)	(17.3)	32.7	
	1109	スナイドル銃弾	F19	-	A2	-	側部				(26.2)	(18.1)	28.7	
	1110	スナイドル銃弾	G21	-	-	-	破片				-	-	17.2	
	1112	スナイドル銃弾	F17	-	-	-	破片				-	-	4.7	
	1125	スナイドル銃弾	G14	-	A1	-	全体				-	-	17.8	先端部木片あり
第73 国	55	1129	スナイドル銃弾	F20	-	A2	-	側部			(23.8)	14.8	28.7	
	1130	スナイドル銃弾	F18	-	-	-	全体				-	-	27.9	
	1131	スナイドル銃弾	F17	-	B	-	側部				(21.5)	(24.4)	30.9	
	1132	スナイドル銃弾	G15	-	A2	-	側部				(26.4)	(14.6)	27.6	
	1134	スナイドル銃弾	F20	-	-	-	陶/灰	側部			(20.1)	(16.4)	29.6	
第74 国	67	1135	スナイドル銃弾	G21	-	A	-	陶/茶	側部		(21.4)	14.8	28.9	
第75 国	99	1139	スナイドル銃弾	G17	-	B	-	側部			(26.0)	(15.1)	29.7	
	1143	スナイドル銃弾	G16	-	-	-	全体				-	-	27.9	
	1145	スナイドル銃弾	H12	-	-	-	全体				-	-	27.8	
	1146	スナイドル銃弾	G14	-	A	-	側部				(17.6)	(15.2)	29.0	
第74 国	68	1147	スナイドル銃弾	G14	-	A	-	陶/茶	側部		(22.3)	14.8	29.2	
第73 国	44	1149	スナイドル銃弾	G16	-	A1	-	側部			(13.2)	(26.0)	29.0	先端部木片あり
	1151	スナイドル銃弾	G13	-	-	-	全体				-	-	29.4	
	1157	スナイドル銃弾	F19	-	-	-	破片				-	-	16.8	
	1167	-	G19	-	-	-	破片				-	-	3.4	
	1171	スナイドル銃弾	H13	-	A	-	側部				(18.0)	(15.0)	29.0	
	1173	スナイドル銃弾	H17	-	A2	-	側部				(23.2)	(15.2)	27.9	
	1178	スナイドル銃弾	H16	-	A	-	側部				-	-	31.4	
	1179	-	H16	-	-	-	破片				-	-	8.6	
	1180	スナイドル銃弾	H16	-	A	-	側部				(19.5)	(15.0)	29.2	
	1181	スナイドル銃弾	H21	-	-	-	破片				-	-	7.5	
	1182	スナイドル銃弾	H20	-	A2	-	側部				(27.0)	(19.8)	27.6	
	1186	-	H19	-	-	-	破片				-	-	4.8	
	1191	スナイドル銃弾	H16	-	A	-	側部				(29.0)	(21.9)	28.7	
	1194	スナイドル銃弾	H18	-	-	-	破片				-	-	9.5	
	1195	スナイドル銃弾	H20	-	-	-	破片				-	-	9.5	
	1197	スナイドル銃弾	H20	-	-	-	側部				(29.4)	(20.2)	29.2	
	1198	スナイドル銃弾	H18	-	-	-	破片				-	-	8.5	
	1200	スナイドル銃弾	H18	-	-	-	全体				-	-	27.0	
	1201	スナイドル銃弾	H17	-	-	-	全体				-	-	28.5	
	1203	-	H11	-	-	-	全体				-	-	28.1	
	1207	スナイドル銃弾	H15	-	A2	-	側部				(20.6)	(18.0)	29.4	
	1213	スナイドル銃弾	H18	-	-	-	破片				-	-	19.5	
	1214	スナイドル銃弾	H17	-	A2	-	側部				(27.0)	(17.7)	28.9	
	1215	スナイドル銃弾	H17	-	-	-	破片				-	-	3.0	
	1216	スナイドル銃弾	H17	-	A2	-	側部				(24.8)	(14.9)	29.4	
	1219	スナイドル銃弾	H21	-	-	-	破片				-	-	22.8	
	1220	スナイドル銃弾	H21	-	A2	-	側部				(26.0)	(19.2)	28.4	
	1223	スナイドル銃弾	J21	-	A	-	側部				(17.0)	(15.2)	29.4	
第73 国	60	1224	スナイドル銃弾	H18	-	A2	-	側部			(25.3)	(14.9)	29.0	
	1225	-	H18	-	-	-	破片				-	-	19.0	
	1231	スナイドル銃弾	H15	-	A	-	側部				(28.0)	(19.2)	29.9	
第72 国	2	1235	エンフィールド銃弾	H17	-	b	-	未使用		○	26.5	14.6	28.5	先端尖る
第74 国	78	1238	スナイドル銃弾	H17	-	A	-	陶/灰	側部		25.5	14.9	30.1	
	1244	スナイドル銃弾	J20	-	-	-	破片				-	-	8.3	
第73 国	62	1258	スナイドル銃弾	J15	-	A2	-	側部			(27.2)	(16.4)	28.8	
	1261	スナイドル銃弾	J13	-	-	-	破片				-	-	8.3	
	1263	スナイドル銃弾	K20	-	B	-	側部				(26.8)	(19.7)	27.3	
第73 国	53	1264	スナイドル銃弾	J20	-	A2	-	側部			(24.8)	(15.7)	29.6	
	1265	スナイドル銃弾	J17	-	A2	-	側部				(29.5)	(13.0)	27.8	
	1269	スナイドル銃弾	J16	-	A2/B	-	側部				(33.0)	(20.5)	27.7	
	1273	スナイドル銃弾	K19	-	-	-	破片				-	-	22.0	
	1274	スナイドル銃弾	K20	-	B	-	側部				(28.7)	(19.1)	31.2	
第75 国	102	1276	スナイドル銃弾	K20	-	B	-	側部			(15.9)	16.0	30.3	
	1287	スナイドル銃弾	J16	-	B	-	側部				(24.4)	(15.2)	30.2	
	1294	スナイドル銃弾	K20	-	A2	-	側部				(26.9)	(14.8)	29.2	
	1295	スナイドル銃弾	K15	-	B	-	側部				(30.2)	(23.7)	24.0	

第V章 半高山・吉次峠戦跡の調査

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	入射角	分類	柱	潰れ方	鎌直し痕	圏溝幅	縦方向の規則的な刻み	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	備考	
第76図	124	1320	スベンスカー銃弾	K17	-	-	未使用				41.6	16.3	29.30	実包	
第75図	83	1351	スタイドル銃弾	L17	B	陶/灰	未使用				27.4	14.5	31.8		
		1352	スタイドル銃弾	K18	A	陶/灰	頭部				(21.8)	14.5	30.1		
		1361	スタイドル銃弾	I20	A	-	頭部			○	(24.0)	14.0	28.9		
		1365	スタイドル銃弾	I18	-	-	破片				-	-	8.4		
		1367	スタイドル銃弾	J17	-	-	破片				-	-	20.6		
		1368	スタイドル銃弾	I16	-	-	全体				-	-	26.3		
		1369	スタイドル銃弾	I15	-	-	全体				-	-	28.4		
		1370	スタイドル銃弾	I14	-	-	破片				-	-	6.3		
		1371	スタイドル銃弾	I15	-	-	破片				-	-	10.5		
		1374	スタイドル銃弾	I11	-	-	破片				-	-	11.1		
		1375	スタイドル銃弾	I11	-	-	破片				-	-	8.9		
		1376	エンフィールド銃弾	I12	-	-	全体				-	-	32.4		
		1377	スタイドル銃弾	H12	-	-	破片				-	-	12.1		
		1380	スタイドル銃弾	H13	A2	-	側部				(29.6)	(21.8)	33.4		
		1382	スタイドル銃弾	H13	A	-	側部				(29.0)	(17.2)	31.0		
		1383	スタイドル銃弾	H13	-	-	破片				-	-	12.3		
		1384	スタイドル銃弾	H14	A1	-	側部	木片あり			(23.2)	(18.0)	28.9	先端部木片あり	
		1386	スタイドル銃弾	H15	A	-	全体	マッシュルーム状	裾部狭	○	(17.0)	(20.0)	30.9		
		1387	スタイドル銃弾	H15	-	-	破片				-	-	16.2		
		1388	スタイドル銃弾	H16	A	-	頭部				(18.5)	(15.0)	27.2		
		1389	スタイドル銃弾	H16	-	-	全体				-	-	27.4		
		1390	スタイドル銃弾	H16	-	-	破片				-	-	13.7		
		1401	スタイドル銃弾	I16	-	-	破片				-	-	6.4		
第74図	81	1402	スタイドル銃弾	I18	A	-	頭部				(23.8)	(15.3)	29.2		
		1403	スタイドル銃弾	I18	A2	-	側部				(24.8)	(16.7)	27.4		
		1404	スタイドル銃弾	I18	-	-	全体				-	-	28.9		
		1406	スタイドル銃弾	I18	-	-	破片				-	-	26.5		
		1408	スタイドル銃弾	I19	-	-	破片				-	-	7.0		
		1409	スタイドル銃弾	H19	B	-	側部				(27.1)	(16.6)	27.9		
		1413	-	H19	-	-	破片				-	-	5.4		
		1414	スタイドル銃弾	I20	A	-	頭部	5mmの穴 マッシュルーム状		○	(15.5)	(15.0)	24.8		
		1415	スタイドル銃弾	I20	-	-	全体				-	-	30.1		
		1416	スタイドル銃弾	I20	-	陶/灰	側部				(30.4)	(17.7)	28.7		
		1417	スタイドル銃弾	I20	-	-	全体				-	-	27.6		
		1420	スタイドル銃弾	I20	-	-	破片				-	-	7.3		
		1421	スタイドル銃弾	I20	-	-	破片				-	-	16.0		
		1422	スタイドル銃弾	I20	-	-	破片				-	-	28.4		
		1423	スタイドル銃弾	I21	A2	-	側部				(26.0)	(26.0)	26.0		
		1424	スタイドル銃弾	I21	-	-	破片				-	-	7.4		
		1425	スタイドル銃弾	H16	-	-	破片				-	-	8.9		
		1426	スタイドル銃弾	H16	-	-	破片				-	-	11.6		
		1427	スタイドル銃弾	H11	B	-	全体				(29.5)	(22.1)	28.9		
		1428	スタイドル銃弾	H11	A2/B	-	側部				(27.1)	(17.8)	28.0		
		1430	スタイドル銃弾	F17	B	-	側部				(23.1)	(18.6)	29.6		
		1431	スタイドル銃弾	F17	A2	-	側部				(26.2)	(19.3)	28.5		
		1435	スタイドル銃弾	G17	A1	-	側部	木片あり			(24.0)	(15.5)	29.7	先端部木片あり	
		1436	スタイドル銃弾	G17	A2/B	-	側部				(30.2)	(22.4)	29.3		
		1437	スタイドル銃弾	G18	-	-	破片		裾部狭		-	-	7.0		
		1440	スタイドル銃弾	F18	-	-	全体				-	-	28.6		
		1441	スタイドル銃弾	F19	-	-	破片				-	-	4.4		
		1442	スタイドル銃弾	F21	-	-	破片				-	-	13.2		
第73図	65	1443	スタイドル銃弾	F22	A2	-	頭部				(25.6)	(20.7)	27.8		
		1445	スタイドル銃弾	G21	-	-	破片				-	-	11.1		
		1446	スタイドル銃弾	G21	-	-	破片				-	-	3.3		
		1447	スタイドル銃弾	G21	B	-	側部					(26.1)	(18.7)	29.4	
		1449	-	E21	-	-	破片					-	-	6.6	
		1450	スタイドル銃弾	E17	A2	-	側部					(25.6)	(16.2)	28.5	
		1451	スタイドル銃弾	E17	A2	-	側部					(25.9)	(17.6)	28.4	
		1452	スタイドル銃弾	E15	-	-	全体					-	-	25.5	
		1453	スタイドル銃弾	F13	-	-	破片					-	-	12.5	
		1454	スタイドル銃弾	F13	-	-	破片					-	-	3.1	
		1455	スタイドル銃弾	G13	-	-	破片					-	-	14.5	
		1456	-	H15	-	-	破片					-	-	10.2	
		1457	スタイドル銃弾	E15	A2/B	-	側部					(27.8)	(18.4)	27.7	
		1458	スタイドル銃弾	I15	A2/B	-	全体					-	-	26.3	
1459	スタイドル銃弾	I16	A	-	側部	マッシュルーム状				(29.0)	(18.5)	28.2			
1461	スタイドル銃弾	H19	-	-	破片					-	-	15.7			
1462	スタイドル銃弾	G19	A	-	頭部	5mmの穴 マッシュルーム状				(23.0)	(15.0)	28.5			
第73図	59	5002	スタイドル銃弾	F12	A2	-	頭部				(25.2)	(17.3)	28.6		
		5003	スタイドル銃弾	F12	A	-	側部				(24.5)	-	26.3		
		5005	スタイドル銃弾	G14	A1	陶/茶	頭部			○	(22.5)	(20.7)	28.8		
		5006	スタイドル銃弾	G13	A	陶/茶	頭部				(24.4)	(15.7)	29.2		
		5007	スタイドル銃弾	H11	-	-	全体				-	-	28.1		
5008	スタイドル銃弾	H11	-	-	破片					-	-	29.0			
5009	スタイドル銃弾	H12	-	-	全体					-	-	27.2			
5010	-	H13	-	-	破片					-	-	6.1			
5011	-	H12	-	-	破片					-	-	15.1			
5012	スタイドル銃弾	H12	-	-	破片					-	-	16.6			
5013	スタイドル銃弾	H13	-	-	破片					-	-	7.5			
5015	スタイドル銃弾	I18	-	-	全体					-	-	25.8			
第73図	57	5016	スタイドル銃弾	I18	A2	-	側部				(25.9)	(16.4)	29.1		
		5020	スタイドル銃弾	H17	-	-	全体				-	-	25.2		
		5021	スタイドル銃弾	I17	-	-	破片				-	-	5.6		
		5022	スタイドル銃弾	I17	-	-	破片					-	-	6.7	
		5023	スタイドル銃弾	I17	-	-	破片					-	-	6.9	
		5024	スタイドル銃弾	I17	A1	-	側部					(26.1)	(19.1)	28.8	
		5025	スタイドル銃弾	I17	A2	-	側部					(26.8)	(16.8)	28.8	
		5026	スタイドル銃弾	I17	-	-	全体					-	-	28.7	
第72図	10	5028	エンフィールド銃弾	G17	b	-	側部				27.2	(16.0)	33.2		
		5029	スタイドル銃弾	H18	A2	-	側部				(19.8)	(18.9)	29.3		
		5030	スタイドル銃弾	H17	A2/B	-	頭部				(30.4)	(21.7)	29.2		
		5031	スタイドル銃弾	H17	A2/B	陶/茶	頭部					25.4	14.3	27.9	

第V章 半高山・吉次峠戦跡の調査

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	入射角	分類	柱	潰れ方	鎌直し痕	圏溝幅	縦方向の規則的な刻み	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	備考
	5033	スナイドル銃弾	H17		-	-	破片				-	-	9.7	
	5034	スナイドル銃弾	H17		-	-	全体				-	-	21.0	
	5035	スナイドル銃弾	H18		-	-	破片				-	-	17.8	
	5036	スナイドル銃弾	H17		A2/B	-	側部				(29.8)	(22.0)	29.9	
	5037	スナイドル銃弾	H18		A2	-	未使用				26.9	15.4	28.5	
	5041	スナイドル銃弾	F12		A2	-	側部			○	(25.0)	(19.2)	28.2	
	5100	スナイドル銃弾	K21		-	-	破片				-	-	24.2	
	5101	スナイドル銃弾	K21		-	-	破片				-	-	7.5	
第75図	103	5103	スナイドル銃弾	J21	B	-	頭部		裾部広		(23.3)	(16.5)	30.5	
		5105	スナイドル銃弾	J21	A2	-	頭部				(24.3)	(15.6)	28.0	
		5106	スナイドル銃弾	J21	A2	-	側部				(25.7)	(17.8)	28.6	
		5107	スナイドル銃弾	J21	A2/B	-	頭部				(26.5)	(15.3)	29.7	
		5108	スナイドル銃弾	J17	-	-	破片				-	-	2.3	
		5109	スナイドル銃弾	J17	-	-	全体				-	-	26.2	
		5110	スナイドル銃弾	I21	A2	-	頭部				(24.8)	(14.7)	27.7	
		5111	スナイドル銃弾	J19	A2	-	頭部				(24.7)	(15.3)	28.3	
		5112	スナイドル銃弾	J19	-	-	破片				-	-	25.6	
		5113	スナイドル銃弾	J19	-	-	側部				(26.7)	(19.2)	31.1	
		5114	スナイドル銃弾	J19	A	-	頭部				(25.0)	14.8	28.6	
		5115	スナイドル銃弾	J18	A2/B	-	側部				(25.1)	(20.8)	29.5	
		5116	スナイドル銃弾	K18	-	-	破片				-	-	27.3	
		5117	スナイドル銃弾	K19	-	-	破片				-	-	8.3	
		5118	スナイドル銃弾	K19	-	-	破片				-	-	15.3	
		5119	スナイドル銃弾	K19	-	-	破片				-	-	5.6	
		5120	スナイドル銃弾	K19	-	-	破片				-	-	7.7	
		5124	スナイドル銃弾	K20	-	-	破片				-	-	5.8	
		5125	スナイドル銃弾	J20	A	-	全体				(24.5)	(17.2)	28.9	
		5127	スナイドル銃弾	J19	-	-	破片				-	-	4.5	
		5131	スナイドル銃弾	J19	A2/B	-	側部		裾部狭		(28.1)	(17.5)	28.7	
		5132	スナイドル銃弾	J19	-	-	破片				-	-	1.9	
第75図	117	5133	スナイドル銃弾	J19	A2/B	陶/茶	側部		裾部狭	○	(26.6)	(15.4)	30.7	
		5134	スナイドル銃弾	J19	-	-	破片				-	-	12.6	
		5135	スナイドル銃弾	J19	A2	-	側部				(26.7)	(16.6)	29.1	
第73図	35	5136	スナイドル銃弾	K19	A1	陶/茶	側部				(26.4)	14.9	31.2	先端部木片あり
		5138	スナイドル銃弾	J19	A	-	発射痕のみ		裾部狭		25.4	14.9	29.1	
		5139	スナイドル銃弾	J19	A2	陶/灰	頭部	マッシュルーム状			(22.3)	(15.7)	29.0	
		5141	スナイドル銃弾	J19	A2/B	陶/茶	頭部				(25.2)	15.0	29.5	
		5142	スナイドル銃弾	J19	A2/B	-	側部				(30.1)	(26.1)	27.6	
		5143	スナイドル銃弾	J19	A	-	発射痕のみ				26.2	14.3	28.7	
第74図	72	5145	スナイドル銃弾	J19	A	陶/茶	頭部	マッシュルーム状			(19.1)	(15.4)	30.0	
		5150	スナイドル銃弾	J20	-	-	破片				-	-	5.3	
第73図	42	5151	スナイドル銃弾	J20	A1	-	頭部				(20.8)	(17.7)	28.6	先端部木片あり
		5152	-	I20	-	-	破片				-	-	1.5	
		5153	スナイドル銃弾	I19	A2/B	陶/茶	頭部		裾部狭		(26.8)	(15.5)	30.2	
		5154	スナイドル銃弾	I19	-	-	全体				-	-	28.4	
		5156	スナイドル銃弾	I19	A2	-	側部	3mmの凹み			(25.6)	(14.7)	28.7	
		5157	スナイドル銃弾	I19	-	-	破片				-	-	23.9	
		5158	スナイドル銃弾	I19	-	-	破片				-	-	20.6	
第73図	47	5159	スナイドル銃弾	I19	A2	陶/茶	頭部				(24.4)	(15.1)	29.9	
		5160	スナイドル銃弾	J20	-	-	全体				-	-	24.9	
		5161	スナイドル銃弾	J20	A	-	頭部	マッシュルーム状			(24.0)	14.2	28.3	
		5162	-	J20	-	-	破片				-	-	6.7	
		5163	スナイドル銃弾	K20	A2/B	-	頭部				(23.3)	(23.9)	26.8	
		5164	スナイドル銃弾	K20	A2	-	側部				(23.9)	(15.0)	28.6	
第73図	30	5166	スナイドル銃弾	D21	A1	陶/茶	頭部		裾部狭	○	(19.2)	(19.2)	30.3	先端部木片あり
第75図	101	5167	スナイドル銃弾	D21	B	Jan-74	側部				(27.8)	(14.8)	30.5	
第74図	79	5168	スナイドル銃弾	D22	A	-	頭部	5mmの穴		○	(20.8)	14.2	28.3	
		5169	スナイドル銃弾	D19	-	-	全体				-	-	29.9	
		5170	スナイドル銃弾	D19	A2	-	側部				(26.3)	(16.8)	32.5	
		5171	スナイドル銃弾	D19	A2/B	陶/茶	頭部		裾部狭		25.7	14.7	29.5	
第75図	96	5172	スナイドル銃弾	D19	B	-	発射痕のみ				26.4	(14.6)	29.2	
		5173	スナイドル銃弾	D19	-	-	破片				-	-	7.5	
		5174	スナイドル銃弾	D19	A2	-	側部			○	(25.8)	(17.4)	28.1	
		5174-1	スナイドル銃弾	D19	B	木	側部		裾部狭		25.3	14.6	27.9	
		5175	スナイドル銃弾	D19	A	陶/茶	頭部	マッシュルーム状 15mmの穴			(21.5)	(14.5)	28.8	
		5176	スナイドル銃弾	D19	-	-	全体				-	-	27.7	
第75図	92	5177	スナイドル銃弾	D19	B	-	側部				26.8	(15.9)	28.3	
第73図	58	5178	スナイドル銃弾	D19	A2	-	側部				(25.9)	(15.2)	28.2	
		6001	スナイドル銃弾	B22	-	-	側部				(22.9)	(18.8)	28.5	
		6002	スナイドル銃弾	C22	-	-	破片				-	-	3.3	
		6003	スナイドル銃弾	C22	-	-	破片				-	-	9.9	
		6004	スナイドル銃弾	C22	A2	-	側部			○	(25.5)	(18.8)	29.1	
		6006	スナイドル銃弾	C22	-	陶/茶	全体				(13.9)	(34.9)	28.2	
		6007	スナイドル銃弾	D22	-	-	破片				-	-	6.5	
		6008	-	D22	-	-	破片				-	-	4.6	
		6010	スナイドル銃弾	D22	-	-	破片				-	-	10.2	
第72図	21	6011	エンフィールド銃弾	D22	A'	-	側部				(25.5)	(14.8)	32.1	
		6013	スナイドル銃弾	D21	A	-	頭部	マッシュルーム状			(18.1)	14.5	28.4	
		6014	スナイドル銃弾	C21	A2/B	-	全体				(22.5)	(21.7)	29.4	
		6015	スナイドル銃弾	C21	-	-	全体				-	-	25.0	
		6016	スナイドル銃弾	C21	A1	-	頭部	マッシュルーム状			(18.0)	14.1	27.7	
		6019	スナイドル銃弾	C21	-	-	全体				-	-	24.0	
		6020	スナイドル銃弾	C22	-	-	破片				(25.7)	(16.9)	26.9	
		6021	スナイドル銃弾	C22	A2	-	側部				-	-	24.3	
		6022	スナイドル銃弾	C22	A1	-	頭部	7mmの穴			-	-	29.0	
		6023	スナイドル銃弾	C22	A2/B	-	側部				(28.6)	(19.3)	29.0	
		6024	スナイドル銃弾	C22	A2	-	側部				(27.5)	(17.6)	28.9	
		6025	スナイドル銃弾	C21	-	-	破片				-	-	10.2	
		6026	スナイドル銃弾	C21	-	-	破片				-	-	6.2	
		6027	スナイドル銃弾	C21	-	-	全体				-	-	27.4	
		6028	スナイドル銃弾	C21	-	-	全体				(25.7)	(16.0)	26.7	
		6029	スナイドル銃弾	B21	A2	-	側部				(28.0)	(18.2)	28.2	器壁薄い
		6032	スナイドル銃弾	C21	-	-	破片				-	-	7.7	

第V章 半高山・吉次峠戦跡の調査

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	入射角	分類	柱	潰れ方	鎌直し痕	圍溝幅	縦方向の規則的な刻み	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	備考
	6033	スナイドル銃弾	C21		-	-	破片						3.3	
	6034	スナイドル銃弾	C21		B	-	側部				(26.0)	(16.8)	29.8	
	6035	スナイドル銃弾	C21		A2/B	-	側部				(20.6)	(19.4)	30.0	
	6036	スナイドル銃弾	C21		A	-	頭部				(17.0)	(13.1)	28.1	
	6037	スナイドル銃弾	C21		-	-	破片						4.0	
	6038	スナイドル銃弾	C21		A	-	頭部				(25.0)	(16.0)	25.9	
	6039	スナイドル銃弾	C21		-	-	破片						6.4	
	6040	スナイドル銃弾	C21		-	-	破片						8.8	
	6041	スナイドル銃弾	C21		-	-	破片						10.3	
	6042	スナイドル銃弾	C21		A2	-	側部			○	(30.3)	(20.5)	27.3	
	6043	スナイドル銃弾	C21		A	-	頭部				(22.9)	(15.8)	27.9	
	6044	スナイドル銃弾	C21		A2/B	-	側部				(32.2)	(18.5)	29.0	
	6045	スナイドル銃弾	C21		A	-	側部				(30.9)	(14.5)	26.4	
	6047	スナイドル銃弾	C20		-	-	全体						26.6	
	6048	スナイドル銃弾	C20		A2	-	頭部				(27.1)	(16.0)	28.0	器壁薄い
	6049	スナイドル銃弾	C20		A	-	頭部				(21.5)	(19.0)	27.7	
	6050	スナイドル銃弾	C21		A	-	全体				(23.2)	(15.1)	28.3	
	6051	スナイドル銃弾	C20		-	-	破片						1.2	
	6052	スナイドル銃弾	C20		-	-	破片						6.5	
	6056	スナイドル銃弾	C20		A	-	側部				(19.5)	(13.1)	28.6	
	6057	スナイドル銃弾	C20		-	陶/茶	側部				(25.9)	(15.0)	29.3	
	6058	スナイドル銃弾	C20		A	-	全体						25.0	
	6059	スナイドル銃弾	C20		A2/B	-	側部				(33.6)	(19.1)	29.8	
	6060	スナイドル銃弾	C20		-	-	全体						28.5	
	6061	スナイドル銃弾	C20		-	-	全体						17.9	
	6062	スナイドル銃弾	C19		A2	-	頭部			○	(27.0)	(15.0)	28.5	
	6063	スナイドル銃弾	C19		-	-	全体						20.5	
	6064	スナイドル銃弾	C20		A2	-	頭部				(25.9)	(17.3)	27.5	
	6065	スナイドル銃弾	B19		-	-	破片						6.3	
	6066	スナイドル銃弾	B19		A2	-	側部				(23.5)	(15.0)	29.1	
第72図	24	6067	火縄銃弾	B19	-	-	-				14.0	14.0	15.9	
	6068	スナイドル銃弾	C19		A1	-	頭部				(24.4)	(19.5)	29.2	
	6069	スナイドル銃弾	C19		A2	-	側部				(20.0)	(15.1)	29.0	
	6070	スナイドル銃弾	C19		-	-	破片						4.9	
	6071	スナイドル銃弾	C21		-	-	全体						25.3	
	6072	スナイドル銃弾	D22		-	-	破片						13.8	
	6073	スナイドル銃弾	E23		A2/B	-	側部				(25.6)	(17.2)	31.9	
	6074	スナイドル銃弾	E23		-	-	全体						28.9	
	6075	スナイドル銃弾	E23		A2	-	頭部				(25.7)	(15.0)	28.3	
	6076	スナイドル銃弾	E24	E42E	A2	-	頭部				(26.5)	(17.5)	28.8	
	6077	スナイドル銃弾	E24	N51E	A2	-	側部				(25.8)	(14.9)	28.5	
	6078	スナイドル銃弾	E24	N58E	A2/B	陶/茶	側部				(26.1)	(15.0)	29.7	
	6079	スナイドル銃弾	E24		A2/B	-	側部				(38.3)	(22.4)	28.2	
	6080	スナイドル銃弾	E24		A	-	全体				(13.0)	(15.2)	28.7	
	6081	スナイドル銃弾	E24		A	-	側部				(25.9)	(16.3)	29.1	
	6082	スナイドル銃弾	E24		A2/B	-	側部				(25.0)	(21.0)	28.5	
	6083	スナイドル銃弾	E25		B	-	頭部				(26.9)	14.5	28.8	
	6084	スナイドル銃弾	F25		A1	-	頭部				(25.7)	(16.2)	29.1	
	6085	-	E25		-	-	破片						4.9	
	6086	スナイドル銃弾	E25		-	-	全体				(16.8)	(18.8)	28.9	
	6089	スナイドル銃弾	F25		B	-	側部				(24.4)	(16.2)	29.6	
	6090	スナイドル銃弾	F26		A	-	頭部				(20.3)	(16.0)	27.1	
	6091	スナイドル銃弾	F25		A2	-	頭部				26.1	14.7	29.0	
	6092	スナイドル銃弾	G25		A2	-	側部				(25.4)	(15.3)	28.9	
	6093	スナイドル銃弾	G25		A	陶/茶	頭部				(25.5)	14.0	28.8	
	6094	スナイドル銃弾	G26		-	-	破片						15.7	
	6096	スナイドル銃弾	F26		-	-	破片						1.5	
	6097	スナイドル銃弾	G25		A2/B	-	側部				(35.0)	(17.4)	28.9	
	6098	スナイドル銃弾	G26		A2	-	側部				(27.1)	(18.7)	28.4	
	6100	スナイドル銃弾	G26		-	-	全体						29.2	
	6101	スナイドル銃弾	G26		A	-	側部				(28.2)	(18.9)	28.9	
	6102	スナイドル銃弾	G26		A2/B	陶/茶	側部				(14.6)	(15.3)	28.8	
	6103	スナイドル銃弾	G26		A	-	頭部				(13.2)	14.5	28.3	
	6105	スナイドル銃弾	G26		A2	-	側部				(28.2)	(17.0)	29.3	
	6106	スナイドル銃弾	G26		-	-	破片						11.0	
	6107	スナイドル銃弾	G26		-	-	側部				(29.1)	(18.7)	27.7	
第72図	16	6108	エンフィールド銃弾	G26	-	-	側部				(30.5)	(17.0)	31.3	
	6111	スナイドル銃弾	H27		A	-	頭部				(21.2)	(15.9)	29.2	
	6112	スナイドル銃弾	I27		-	-	全体						27.4	
	6113	スナイドル銃弾	I26		A	-	頭部			○	(20.5)	(15.0)	29.2	
	6115	スナイドル銃弾	I26		A2	-	側部				(18.2)	(18.0)	27.6	器壁薄い
	6116	スナイドル銃弾	I26		A2	-	側部				(25.4)	(17.0)	27.8	
	6117	スナイドル銃弾	I27		A2	-	側部				(13.5)	(17.0)	28.9	
	6118	スナイドル銃弾	I27		-	-	全体						28.7	
	6119	スナイドル銃弾	I26		-	-	全体						28.9	
	6120	スナイドル銃弾	I26		N75W	B	-	発射痕のみ			25.9	15.1	29.6	
	6121	スナイドル銃弾	J27		-	-	破片						7.9	
第73図	51	6123	スナイドル銃弾	J27	A2	陶/灰	側部			○	(28.5)	(22.2)	29.3	
	6124	スナイドル銃弾	J27		A2/B	-	側部				(20.6)	(16.4)	29.1	
	6125	スナイドル銃弾	J27		-	-	破片						2.2	
	6126	スナイドル銃弾	J27		B	木	側部				(23.7)	14.9	29.1	
	6128	スナイドル銃弾	J27		A2	-	側部				(24.0)	14.8	28.1	
	6129	スナイドル銃弾	J27		-	陶/灰	側部			○	(27.0)	(19.5)	25.8	
	6130	スナイドル銃弾	J27		A	陶/茶	頭部				(25.5)	(15.0)	28.7	
	6131	スナイドル銃弾	J27		-	-	破片						15.4	
	6132	スナイドル銃弾	K27	S70E	A2	-	側部				(26.0)	14.2	28.6	
	6135	スナイドル銃弾	K27		B	-	側部				(32.0)	(17.6)	27.9	
	6136	スナイドル銃弾	K27	N28E	A2/B	陶/茶	側部				(25.0)	14.8	28.5	
	6137	スナイドル銃弾	K27		A	-	頭部				(23.9)	(19.1)	28.9	
	6138	スナイドル銃弾	K27		-	-	破片						9.5	
	6139	スナイドル銃弾	L27		-	-	破片						8.3	
	6141	スナイドル銃弾	L27		A2/B	陶/灰	側部				(24.3)	(14.1)	29.2	
	6142	スナイドル銃弾	L27		-	-	破片						5.4	





第V章 半高山・吉次峠戦跡の調査

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	入射角	分類	柱	潰れ方	鎌直し痕	圏溝幅	縦方向の規則的な刻み	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	備考
		6375	スナイドル銃弾	E16		A	-	全体		○	(21.0)	(16.8)	27.8	
		6376	スナイドル銃弾	E16		-	-	破片			-	-	6.2	
		6377	スナイドル銃弾	E16		A	-	全体	3mmの穴		(17.5)	(17.2)	28.5	
		6378	スナイドル銃弾	E16		A2	-	頭部			(25.2)	(17.2)	29.3	
		6379	スナイドル銃弾	E15	N70E	B	-	頭部	7mmの凹み	裾部狭	(24.0)	(15.4)	27.7	
		6380	スナイドル銃弾	E15		A2	-	頭部			(24.6)	(14.8)	27.8	
		6381	スナイドル銃弾	E15		A2	-	全体	5mmの凹み		(26.7)	(17.5)	28.2	
		6382	スナイドル銃弾	D15		-	-	全体			-	-	15.7	
		6383	スナイドル銃弾	D15		A2/B	陶/茶	頭部			(18.2)	14.8	28.4	
		6384	スナイドル銃弾	D16		-	-	破片			-	-	6.1	
		6385	スナイドル銃弾	D16		A	-	頭部	マッシュルーム状		(13.1)	(14.1)	28.9	
		6386	スナイドル銃弾	D16		A	-	全体			(24.0)	(15.6)	27.7	
		6387	スナイドル銃弾	D16		A2	-	頭部		裾部狭	(23.4)	(15.6)	31.6	
		6388	スナイドル銃弾	D15		B	-	側部			(24.8)	(15.1)	27.6	
		6389	スナイドル銃弾	D15		A	陶/茶	頭部	マッシュルーム状		(18.6)	(15.5)	29.8	
		6390	スナイドル銃弾	D15		B	-	頭部		裾部狭	(25.0)	(16.1)	26.7	
		6391	スナイドル銃弾	D16		-	-	破片			-	-	7.7	
		6392	スナイドル銃弾	D16		A	-	側部			(29.0)	(17.2)	27.9	
		6393	スナイドル銃弾	D16		-	-	破片			-	-	6.6	
		6394	スナイドル銃弾	D16		-	-	破片			-	-	5.5	
		6396	スナイドル銃弾	D15		-	-	破片			-	-	15.6	
		6398	スナイドル銃弾	D16		A2	-	側部	5mmの穴		(26.6)	(19.6)	29.6	
		6399	スナイドル銃弾	D15		A2/B	-	側部			(28.6)	(18.5)	28.9	
第75図	94	6400	スナイドル銃弾	C15		B	-	発射痕のみ			25.4	14.7	28.7	
		6401	スナイドル銃弾	D15		A	-	頭部	マッシュルーム状		(17.1)	(15.2)	30.1	
第72図	12	6402	エンフィールド銃弾	C15		b	-	頭部			(25.5)	13.9	26.7	器壁薄い
		6403	スナイドル銃弾	C15		A2	-	頭部			(15.3)	(20.7)	22.7	
		6404	スナイドル銃弾	C15		A1	-	頭部			(22.1)	(15.7)	28.2	
		6405	スナイドル銃弾	C15		-	-	破片			-	-	6.8	
		6407	スナイドル銃弾	C15		-	-	破片			-	-	3.8	
		6408	スナイドル銃弾	C15		-	-	全体			-	-	26.2	
第72図	13	6409	エンフィールド銃弾	C15		b	-	側部			(28.1)	14.2	26.1	先端尖りきみ 器壁薄い
		6411	スナイドル銃弾	C15		A1	陶/灰	頭部	マッシュルーム状		(16.0)	(14.9)	29.8	
		6412	スナイドル銃弾	C15		A2/B	陶/茶	頭部		裾部狭	24.8	14.8	29.7	
		6413	スナイドル銃弾	C15		A	-	側部			(20.0)	(18.0)	28.9	
		6415	スナイドル銃弾	C15		A2	-	頭部			(22.1)	(19.2)	29.8	
		6416	スナイドル銃弾	C15		-	-	全体			-	-	24.4	
		6417	スナイドル銃弾	C15		-	-	全体			-	-	29.9	
第74図	50	6418	スナイドル銃弾	C15		A2	陶/灰	頭部			(20.6)	(20.9)	30.0	
		6420	スナイドル銃弾	B15		-	-	破片			-	-	6.0	
		6422	スナイドル銃弾	B15		-	-	破片			-	-	8.3	
		6423	スナイドル銃弾	B15		A1	-	頭部	マッシュルーム状	○	(19.1)	(24.3)	27.2	
		6424	スナイドル銃弾	B15		A1	-	全体	7mmの穴		-	-	30.8	先端部木片あり
		6425	スナイドル銃弾	B15		B	-	発射痕のみ			25.1	14.3	28.4	
		6427	スナイドル銃弾	B14		A2	-	側部			(26.3)	(17.0)	29.0	
		6428	スナイドル銃弾	B15		A2/B	-	側部			(29.8)	(21.1)	28.5	
		6429	スナイドル銃弾	B15		-	-	破片			-	-	3.7	
		6430	スナイドル銃弾	B15		A2	-	側部			(28.9)	(18.1)	28.6	
		6431	スナイドル銃弾	B15		A1	陶/茶	頭部		裾部狭	(18.4)	(22.5)	30.3	
		6432	スナイドル銃弾	B14		A2/B	陶/茶	頭部			(25.2)	14.6	28.7	
		6433	スナイドル銃弾	B14		-	-	全体			(21.9)	(15.0)	27.4	
		6434	スナイドル銃弾	B15		A2/B	-	頭部		裾部狭	(25.5)	(17.6)	28.9	
		6435	スナイドル銃弾	C15		A	-	側部			(20.0)	(16.0)	29.9	
		6436	スナイドル銃弾	C15		A1	-	側部			(29.9)	(17.5)	26.6	
		6437	スナイドル銃弾	C15		-	-	破片			-	-	5.8	
		6438	スナイドル銃弾	C14		A2/B	-	側部			(26.6)	(21.5)	29.0	
		6439	スナイドル銃弾	C14		A2/B	陶/茶	頭部			(25.1)	(14.7)	26.8	
第73図	37	6440	スナイドル銃弾	C15		A1	陶/茶	側部			(29.3)	(16.3)	31.5	先端部木片あり
		6442	スナイドル銃弾	C15		-	-	全体			-	-	28.7	
		6444	スナイドル銃弾	C15		-	-	全体			-	-	28.3	
		6445	スナイドル銃弾	C15		-	-	破片			-	-	16.2	
		6446	スナイドル銃弾	C15		-	-	全体			-	-	22.4	
		6448	スナイドル銃弾	C14		A2	-	発射痕のみ			28.0	26.8	27.1	器壁薄い
		6451	スナイドル銃弾	C15		A2	-	頭部			(24.8)	(16.7)	27.8	
		6452	スナイドル銃弾	C15		A1	-	頭部	マッシュルーム状	裾部狭	(16.6)	(25.6)	28.2	
		6453	スナイドル銃弾	C15		A2	-	頭部	裾部狭		(25.1)	(14.7)	28.4	
		6454	スナイドル銃弾	C15		A2	-	側部			(26.7)	(18.8)	27.0	
		6455	スナイドル銃弾	D15		A2	-	頭部	マッシュルーム状		(16.2)	(19.8)	30.4	
		6456	スナイドル銃弾	D14		A	-	頭部	8mmの穴		(21.0)	(16.0)	27.4	器壁薄い
		6457	スナイドル銃弾	D15		-	-	破片			-	-	5.9	
		6460	スナイドル銃弾	D15		-	-	破片			-	-	5.7	
		6461	スナイドル銃弾	D15		-	-	破片			-	-	6.9	
		6462	スナイドル銃弾	E15		A	-	頭部	マッシュルーム状		(15.0)	(15.1)	28.7	
		6463	-	E15		-	-	破片			-	-	3.9	
		6464	スナイドル銃弾	E15		-	-	破片			-	-	6.7	
		6465	スナイドル銃弾	E15		-	-	破片			-	-	5.9	
		6466	スナイドル銃弾	E15		-	-	全体			-	-	14.8	
		6467	スナイドル銃弾	E15		-	-	破片			-	-	15.5	
		6470	スナイドル銃弾	E15		-	-	全体			-	-	28.7	
		6471	スナイドル銃弾	E15		A2	-	頭部			(26.9)	(14.8)	28.5	
		6472	スナイドル銃弾	E15		A2	-	側部			(19.8)	(19.5)	29.0	
		6473	スナイドル銃弾	E14		B	-	側部	裾部狭		(26.7)	(23.2)	28.4	
		6474	スナイドル銃弾	E14		-	-	破片			-	-	9.6	
		6476	スナイドル銃弾	E14		-	-	破片			-	-	4.6	
		6477	スナイドル銃弾	E14		A2	-	頭部			(25.5)	14.3	28.7	
		6478	スナイドル銃弾	E15		A	-	側部			(16.5)	(16.5)	30.0	
		6479	スナイドル銃弾	D15		-	-	破片			-	-	10.4	
		6480	スナイドル銃弾	D15		A2	-	側部			(26.4)	(18.5)	29.3	
		6481	スナイドル銃弾	D15		-	-	破片			-	-	12.0	
		6482	スナイドル銃弾	E15		A2	-	全体			-	-	27.6	
		6483	スナイドル銃弾	E15		-	-	破片			-	-	10.1	
		6484	スナイドル銃弾	D14		A	-	頭部	3mmの穴		(20.8)	(16.0)	29.0	
		6488	スナイドル銃弾	D14		-	-	破片			-	-	5.4	





実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	入射角	分類	柱	潰れ方	鍍直し痕	圏溝幅	縦方向の規則的な刻み	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	備考
		6618	スナイデル銃弾	D14	S70E	B	木 頭部		裾部狭		(21.4)	(15.9)	29.1	
第72図	8	6619	エンフィールド銃弾	D14		b	木 側部				(27.0)	(13.8)	32.2	新型
第74図	66	6620	スナイデル銃弾	D14		A	陶 / 茶 頭部				(24.9)	(15.3)	29.6	
		6621	-	D14		-	破片				-	-	5.4	
		6622	スナイデル銃弾	D14		B	発射痕のみ		裾部狭		25.3	(15.2)	28.6	
		6623	スナイデル銃弾	D14		A2	発射痕のみ				25.3	14.2	27.6	
		6624	スナイデル銃弾	D14		B	全体				(24.1)	(20.5)	28.4	
		6625	スナイデル銃弾	D14		A2	側部				(26.1)	(19.4)	26.6	
		6626	スナイデル銃弾	E14		A2	頭部				(24.8)	(15.8)	29.1	
		6627	スナイデル銃弾	E14		A2	発射痕のみ				25.5	14.6	28.4	
		6628	スナイデル銃弾	E14		B	頭部		裾部狭		(23.8)	14.7	28.9	
		6629	スナイデル銃弾	E14		-	全体				-	-	28.0	
		6630	スナイデル銃弾	E13		B	頭部				(21.6)	(21.0)	29.6	
		6631	スナイデル銃弾	E13		A2/B	頭部				(24.6)	(18.9)	27.4	
		6632	スナイデル銃弾	E13		-	破片				-	-	1.3	
		6633	スナイデル銃弾	E13		A2/B	陶 / 茶 頭部				(18.6)	(15.5)	28.3	
		6634	スナイデル銃弾	D13		A	頭部	マッシュルーム状			(20.5)	(16.0)	28.4	
		6635	スナイデル銃弾	D13		-	破片				-	-	7.0	
		6636	スナイデル銃弾	D13		-	破片				-	-	10.4	
		6637	スナイデル銃弾	D13		-	全体				-	-	26.9	
第72図	22	6638	エンフィールド銃弾	D13		A'	頭部				(20.6)	15.6	31.3	
		6639	スナイデル銃弾	D13		-	全体				(24.5)	-	29.2	
		6641	スナイデル銃弾	D13		-	破片				-	-	5.0	
		6642	スナイデル銃弾	D13		-	破片				-	-	4.1	
		6643	スナイデル銃弾	D13		-	全体				-	-	29.4	
		6644	スナイデル銃弾	D13		-	全体				-	-	27.5	
		6645	スナイデル銃弾	D13		-	破片				-	-	9.6	
		6647	スナイデル銃弾	C13		A	頭部	マッシュルーム状			(19.8)	(15.5)	27.2	
		6649	スナイデル銃弾	C13		B	側部		裾部狭		(29.0)	(19.1)	30.0	
		6650	スナイデル銃弾	C13		-	全体				-	-	14.7	
		6652	スナイデル銃弾	C12		-	全体				-	-	20.5	
		6654	スナイデル銃弾	C12		-	破片				-	-	2.6	
		6655	スナイデル銃弾	C12		-	全体				-	-	29.0	
		6659	スナイデル銃弾	D13		A	頭部			○	(23.5)	(16.5)	28.8	
		6660	スナイデル銃弾	D13		-	破片				-	-	6.9	
		6661	スナイデル銃弾	D13		A	陶 / 茶 頭部	マッシュルーム状			(20.4)	14.4	30.0	
		6662	スナイデル銃弾	D13		-	破片				-	-	5.6	
第75図	119	6663	スナイデル銃弾	K21		A2/B	陶 / 茶 頭部		裾部狭	○	(25.5)	14.7	30.1	
第75図	121	6664	スナイデル銃弾	L20		A2/B	陶 / 灰 側部				(26.1)	(16.1)	29.4	
		6666	スナイデル銃弾	K21		A2	頭部				(19.2)	(19.3)	29.1	
第72図	6	6667	エンフィールド銃弾	K21		b	未使用				27.9	13.9	33.1	先端尖りきみ
		6668	スナイデル銃弾	K20		A	全体	マッシュルーム状			-	(12.0)	24.3	
		6669	スナイデル銃弾	K20		-	全体				-	-	21.9	
		6671	スナイデル銃弾	K20		-	破片				-	-	9.7	
		6672	スナイデル銃弾	K20		A2	頭部				(25.5)	(14.7)	27.9	
		6673	スナイデル銃弾	K20		-	破片				-	-	7.6	
		6674	スナイデル銃弾	K20		-	破片				-	-	15.7	
		6675	スナイデル銃弾	K20		A2	側部				(25.1)	(20.0)	29.3	
		6677	スナイデル銃弾	K20		-	破片				-	-	4.5	
第73図	32	6678	スナイデル銃弾	K20		A1	陶 / 茶 頭部				(17.7)	(22.5)	30.5	先端部木片あり
第72図	5	6680	エンフィールド銃弾	K20		b	未使用	○			27.8	14.6	35.9	
		6681	スナイデル銃弾	K20		-	破片				-	-	2.4	
		6684	スナイデル銃弾	K20		A	全体				(15.0)	(19.5)	29.3	
		6685	スナイデル銃弾	K20		A2/B	陶 / 茶 頭部				25.7	14.9	30.2	
		6686	スナイデル銃弾	K20		-	破片				-	-	4.8	
		6688	スナイデル銃弾	K20		-	破片				-	-	5.5	
		6690	スナイデル銃弾	K20		-	破片				-	-	10.7	
		6691	スナイデル銃弾	K19		-	破片				-	-	6.5	
		6692	スナイデル銃弾	K19		-	破片				-	-	5.1	
		6693	スナイデル銃弾	K19		A2	陶 / 茶 側部				(27.3)	(18.3)	26.9	
		6694	スナイデル銃弾	K19		-	破片				-	-	3.1	
		6696	スナイデル銃弾	K20		A2	側部				(25.0)	(19.7)	24.2	
		6698	スナイデル銃弾	K20		A2/B	陶 / 茶 頭部		裾部狭		(24.2)	14.6	18.8	
		6701	スナイデル銃弾	K20		A2/B	陶 / 茶 側部				(24.2)	(14.2)	29.6	
		6702	スナイデル銃弾	K20		A1	側部			○	(25.0)	(17.0)	28.9	
		6703	スナイデル銃弾	K19		A2	側部				(26.4)	(15.2)	28.9	
		6704	スナイデル銃弾	K19		-	破片	マッシュルーム状			-	-	6.1	
		6705	スナイデル銃弾	K20		-	頭部				(13.5)	(16.5)	30.5	
		6706	スナイデル銃弾	K20		-	破片				-	-	4.8	
		6707	スナイデル銃弾	K20		-	破片				-	-	4.3	
		6708	スナイデル銃弾	K20		-	破片				-	-	4.1	
		6709	スナイデル銃弾	K20		A	頭部	マッシュルーム状			(17.0)	(16.1)	29.3	
		6710	スナイデル銃弾	J20		-	破片				-	-	6.6	
		6711	スナイデル銃弾	J20		-	破片				-	-	1.2	
		6712	スナイデル銃弾	J20		-	破片				-	-	18.4	
		6713	スナイデル銃弾	J20		-	破片				-	-	1.6	
		6714	スナイデル銃弾	J20		-	破片				-	-	10.0	
		6715	スナイデル銃弾	J19		-	破片				-	-	5.8	
		6716	スナイデル銃弾	J20		-	側部	5mmの穴			(26.7)	(19.9)	29.7	
第72図	9	6717	エンフィールド銃弾	K19		b	陶 / 茶 発射痕のみ				26.9	14.3	31.2	
		6718	スナイデル銃弾	J20		-	破片				-	-	7.2	
		6719	スナイデル銃弾	L19		A2	頭部				(26.9)	(15.6)	29.1	
		6720	スナイデル銃弾	L19	N48E	A2/B	陶 / 茶 未使用か				26.3	14.6	28.5	
		6721	スナイデル銃弾	K19		-	全体				-	-	23.7	
		6727	スナイデル銃弾	K19		-	破片				-	-	1.2	
		6729	スナイデル銃弾	K19		-	破片				-	-	2.8	
		6733	スナイデル銃弾	K19		A2/B	側部				(29.7)	(16.7)	29.6	
		6734	スナイデル銃弾	K19		B	側部				(27.2)	(16.5)	30.8	
		6739	スナイデル銃弾	K19		A2/B	陶 / 茶 頭部			○	(23.2)	(15.0)	30.0	
		6742	スナイデル銃弾	K19		A	頭部				(24.3)	14.5	30.0	
第72図	3	6744	エンフィールド銃弾	K19		b	未使用				28.0	14.7	34.8	
		6747	スナイデル銃弾	K19		A	全体				-	-	28.3	
		6748	スナイデル銃弾	K19		-	破片				-	-	4.9	

第V章 半高山・吉次峠戦跡の調査

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	入射角	分類	柱	潰れ方	鋳直し痕	圍溝幅	縦方向の規則的な刻み	全長 (mm)	径 (mm)	質量 (g)	備考
	6749	スナイドル銃弾	K19		-	-	破片				-	-	4.1	
	6752	スナイドル銃弾	K19		-	-	全体				-	-	28.8	
	6753	スナイドル銃弾	K19		-	-	破片				-	-	9.7	
	6754	スナイドル銃弾	K19	N70E	A2/B	陶/茶	側部				(25.0)	(15.5)	30.1	
	6755	スナイドル銃弾	K19		-	-	全体				-	-	30.4	
	6758	スナイドル銃弾	K19		-	-	全体				-	-	13.2	
	6759	スナイドル銃弾	K19		A2	-	頭部				(25.6)	(14.7)	28.1	
	6760	スナイドル銃弾	K18		A2/B	-	側部				(29.6)	(18.4)	29.1	
第75図	84	6761	スナイドル銃弾	K19		B	陶/灰	未使用			27.4	14.4	31.0	
	6763	スナイドル銃弾	K18		A2/B	陶/茶	頭部		裾部狭	○	25.5	14.7	30.4	
	6766	スナイドル銃弾	K19		A	-	全体				(24.5)	(18.2)	30.0	
	6767	スナイドル銃弾	K19		-	-	破片				-	-	6.1	
	6770	スナイドル銃弾	K19		-	-	破片				-	-	7.4	
	6771	スナイドル銃弾	K19		-	-	破片				-	-	5.9	
	6773	スナイドル銃弾	K19		-	-	破片				-	-	5.5	
	6774	スナイドル銃弾	K19		-	-	破片				-	-	2.5	
	6775	スナイドル銃弾	K19		A	-	頭部				(13.8)	14.8	28.3	
	6776	スナイドル銃弾	K19		-	-	破片				-	-	7.2	
	6777	スナイドル銃弾	K19		-	-	破片				-	-	16.7	
	6778	スナイドル銃弾	K19		-	-	全体				-	-	20.4	
	6780	スナイドル銃弾	J19		-	-	破片				-	-	4.5	
第73図	29	6783	スナイドル銃弾	J19		A1	陶/茶	頭部		裾部狭	(26.9)	14.6	29.1	先端部木片あり
	6784	スナイドル銃弾	J19		A	-	全体				(19.4)	(17.3)	27.8	
	6786	スナイドル銃弾	J19		-	-	破片				-	-	5.5	
	6787	スナイドル銃弾	K19		A2	-	頭部		裾部狭		(21.8)	(16.3)	28.9	
	6788	スナイドル銃弾	K19		A	-	側部				(15.0)	(15.0)	29.1	
	6789	スナイドル銃弾	J19		A1	-	側部				(24.0)	(17.9)	25.6	
	6790	スナイドル銃弾	J19		-	-	破片				-	-	1.3	
	6791	スナイドル銃弾	J19	N75E	A2	-	頭部				(24.6)	(15.8)	28.9	
第73図	45	6792	スナイドル銃弾	J19		A1	-	頭部			(26.2)	(14.8)	29.7	
	6793	スナイドル銃弾	J19		A	-	全体				-	-	26.0	
	6795	スナイドル銃弾	J19		A2	陶/茶	側部				(26.3)	(15.6)	29.5	
	6796	スナイドル銃弾	K18		-	-	破片				-	-	18.0	
	6797	スナイドル銃弾	K18		-	-	全体				-	-	29.7	
	6798	スナイドル銃弾	K18		-	-	破片				-	-	4.3	
	6799	スナイドル銃弾	K19		A2/B	-	全体				(24.0)	(22.9)	27.0	
	6800	スナイドル銃弾	K18		A2/B	-	全体				(27.5)	(24.2)	30.1	
	6802	スナイドル銃弾	K18		-	-	破片				-	-	14.8	
	6804	スナイドル銃弾	J19		-	-	破片				-	-	5.8	
	6805	スナイドル銃弾	J19		-	-	破片				-	-	6.6	
	6806	スナイドル銃弾	J19		A2	-	側部				(21.2)	(17.3)	29.0	
	6807	スナイドル銃弾	J19		A2/B	陶/茶	頭部		裾部狭	○	(24.2)	15.0	27.1	
	6808	スナイドル銃弾	K19		-	-	破片				-	-	13.3	
	6809	スナイドル銃弾	J19		B	-	側部				(25.7)	(18.4)	28.9	
	6810	スナイドル銃弾	J19		-	-	破片				-	-	6.5	
	6811	スナイドル銃弾	K19		-	-	破片				-	-	2.7	
	6812	スナイドル銃弾	J19		-	-	破片				-	-	15.9	
	6813	スナイドル銃弾	J19		-	-	破片				-	-	2.0	
	6814	スナイドル銃弾	J19		-	-	破片				-	-	5.5	
	6815	スナイドル銃弾	J19		A2	-	頭部				(26.1)	(15.2)	27.6	
	6816	スナイドル銃弾	J19		-	陶/茶	全体				-	-	16.8	
	6817	スナイドル銃弾	J19		-	-	破片				-	-	9.9	
	6819	スナイドル銃弾	K18		-	-	全体				-	-	23.9	
	6821	スナイドル銃弾	K18		-	-	破片				-	-	1.7	
	6823	スナイドル銃弾	K18		A	-	側部				-	-	2.7	
	6825	スナイドル銃弾	K18		A2/B	-	側部			○	(23.1)	(18.4)	28.0	
	6826	スナイドル銃弾	K18		A2	-	頭部				(26.8)	(22.9)	28.7	
	6827	スナイドル銃弾	K18		-	-	全体				-	-	24.7	
	6828	スナイドル銃弾	K18		-	-	破片				-	-	8.2	
	6829	スナイドル銃弾	J18		-	-	全体				-	-	25.7	
	6830	スナイドル銃弾	J18		-	-	全体				-	-	22.2	
	6832	スナイドル銃弾	K18		-	-	全体				-	-	15.8	
	6833	スナイドル銃弾	K18		-	-	破片				-	-	8.5	
	6835	スナイドル銃弾	K17		-	-	破片				-	-	2.1	
	6842	スナイドル銃弾	K17		A	-	全体				(14.4)	(17.9)	27.4	
	6843	スナイドル銃弾	K17		-	-	破片				-	-	15.4	
	6850	スナイドル銃弾	K17		-	-	破片				-	-	7.2	
	6851	スナイドル銃弾	K17		A	-	側部				(21.5)	(22.0)	29.1	
	6852	スナイドル銃弾	K17		-	-	破片				-	-	5.6	
	6854	スナイドル銃弾	K17		-	-	全体				-	-	26.5	
	6855	スナイドル銃弾	K17		-	-	破片				-	-	1.9	
	6856	スナイドル銃弾	K17		-	-	全体				-	-	27.9	
	6857	スナイドル銃弾	K17		-	-	破片				-	-	7.9	
	6858	スナイドル銃弾	J17		-	-	側部				(28.1)	(21.0)	29.0	
	6859	スナイドル銃弾	K17		A2	-	側部				(27.2)	(21.2)	29.3	
	6860	スナイドル銃弾	K17		A	-	側部				(30.2)	(18.9)	28.3	
	6861	スナイドル銃弾	J18		A1	-	全体		裾部狭		-	-	29.8	
	6862	スナイドル銃弾	L18		A2/B	-	全体				(27.5)	(20.9)	29.0	
	6872	スナイドル銃弾	K18		B	-	頭部				(25.2)	14.3	29.0	
第75図	113	6874	スナイドル銃弾	L18		A2/B	陶/茶	側部			26.0	15.0	29.8	
	6876	スナイドル銃弾	K18		A1	陶/茶	側部				(32.2)	(17.9)	29.0	
	6878	スナイドル銃弾	K17		-	-	破片				-	-	5.4	
	6881	スナイドル銃弾	K17		A2	-	側部				(26.7)	(15.8)	29.7	
	6889	スナイドル銃弾	L17		A2	-	側部				(27.5)	(17.8)	29.7	
	6890	スナイドル銃弾	L17		A2	-	発射痕のみ				27.5	17.0	27.4	器壁薄い
	6892	スナイドル銃弾	L17		-	-	破片				-	-	5.4	
	6896	スナイドル銃弾	K17		-	-	破片				-	-	3.7	
	6897	スナイドル銃弾	L16		A2/B	-	頭部		裾部狭		(19.9)	(18.7)	30.0	
	6899	スナイドル銃弾	K17		A	-	側部				-	-	6.0	
	6900	スナイドル銃弾	K17		-	-	破片			○	(23.0)	(18.0)	29.7	
	6904	スナイドル銃弾	K17		A2/B	陶/茶	側部				25.9	15.1	30.2	
	6906	スナイドル銃弾	K17		-	-	破片				-	-	3.5	
	6907	スナイドル銃弾	K17		-	-	破片				-	-	18.8	

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	入射角	分類	柱	潰れ方	鋳直し痕	圏溝幅	縦方向の規則的な刻み	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	備考
	6908	スナイドル銃弾	K17		A2	-	側部				(26.6)	(17.0)	29.2	
	6909	スナイドル銃弾	K17		-	-	全体				-	-	27.1	
	6910	スナイドル銃弾	K16		-	-	全体				-	-	24.5	
	6911	スナイドル銃弾	K16		A	-	頭部				(24.8)	(16.2)	29.5	5mmの穴
	6912	スナイドル銃弾	K17		-	-	破片				-	-	8.6	
	6913	スナイドル銃弾	K17		A	-	側部				(26.0)	(22.7)	27.4	裾部狭
	6914	スナイドル銃弾	K7		B	-	側部				27.9	15.1	28.5	
	6915	スナイドル銃弾	K17		A2/B	-	側部				(27.8)	(19.5)	28.8	
	6917	スナイドル銃弾	K16		-	-	破片				-	-	6.6	
	6920	スナイドル銃弾	K16		-	-	破片				-	-	9.3	
	6922	スナイドル銃弾	K16		A2/B	-	側部				(30.4)	(23.0)	30.2	
	6923	スナイドル銃弾	K16		-	-	全体				-	-	26.0	
	6925	スナイドル銃弾	K16		-	-	破片				-	-	2.8	
	6927	スナイドル銃弾	K16		-	-	破片				-	-	4.6	
	6928	スナイドル銃弾	J17		A	-	頭部				(23.1)	14.0	28.9	
	6929	スナイドル銃弾	J16	N85E	B	-	頭部				(27.2)	(16.1)	29.0	裾部狭
	6930	スナイドル銃弾	J16		-	-	破片				-	-	6.6	
	6931	スナイドル銃弾	J16		-	-	破片				-	-	5.9	
	6932	スナイドル銃弾	J16		A2	-	側部				(26.8)	(16.7)	29.5	
	6933	スナイドル銃弾	K16		-	-	破片				-	-	23.2	
	6934	スナイドル銃弾	K16		-	-	破片				-	-	8.6	
	6935	スナイドル銃弾	K16		A2	-	頭部				(23.1)	(14.3)	29.5	
	6936	スナイドル銃弾	K16		-	-	全体				-	-	18.1	
	6937	スナイドル銃弾	K16		A	-	頭部	マッシュルーム状			(19.5)	(16.0)	28.9	
	6938	スナイドル銃弾	K16		-	-	破片				-	-	8.0	
	6939	スナイドル銃弾	K16		-	-	全体				-	-	20.6	
	6941	スナイドル銃弾	J18		A2	-	側部				(28.7)	(19.6)	28.4	
	6942	スナイドル銃弾	J18		A2	-	側部				(23.5)	(17.0)	29.3	
	6943	スナイドル銃弾	J18		-	-	破片				-	-	7.2	
	6944	スナイドル銃弾	J18		A2	-	側部				(33.3)	(22.8)	27.5	
	6945	スナイドル銃弾	J17		-	-	破片				-	-	3.6	
	6946	スナイドル銃弾	J17		-	-	破片				-	-	5.7	
	6947	スナイドル銃弾	J17		A	-	頭部	マッシュルーム状			(15.6)	(16.3)	28.3	
	6948	スナイドル銃弾	J17		-	-	破片				-	-	16.8	
	6950	スナイドル銃弾	J17		-	-	破片				-	-	7.6	
	6951	スナイドル銃弾	J17		A2	-	頭部				(25.2)	(15.8)	27.8	
	6953	スナイドル銃弾	J17		A2/B	陶 / 茶	側部				(23.7)	(18.2)	30.1	
	6954	スナイドル銃弾	J17		B	-	側部				(24.8)	(18.5)	29.3	
第72回	15	6955 エンフィールド銃弾	K16	N80E	a	-	未使用	○			24.5	14.6	31.7	
		6956	スナイドル銃弾	J16	-	-	破片				-	-	19.3	
		6958	スナイドル銃弾	K15	A2	-	頭部		○		(26.3)	14.5	29.4	
		6959	スナイドル銃弾	K15	A2/B	-	頭部				(16.7)	(21.8)	29.4	
		6960	スナイドル銃弾	K15	-	-	破片				-	-	18.0	
		6961	スナイドル銃弾	K15	S75E	A2/B	陶 / 茶	側部			(26.7)	(15.4)	29.3	
		6962	スナイドル銃弾	K15	-	-	破片				-	-	23.3	
		6963	スナイドル銃弾	K15	-	-	全体				-	-	24.3	
		6964	スナイドル銃弾	K15	-	-	破片				-	-	5.1	
		6965	スナイドル銃弾	K15	A2	-	頭部				(25.0)	14.9	30.0	
第74回	77	6967	スナイドル銃弾	J15	A	陶 / 茶	頭部	マッシュルーム状			(14.2)	14.0	23.1	
		6968	スナイドル銃弾	K15	-	-	破片				-	-	2.3	
		6969	スナイドル銃弾	K15	-	-	破片				-	-	7.4	
		6970	スナイドル銃弾	K15	A2	-	頭部				(22.3)	(20.3)	29.4	
		6974	スナイドル銃弾	K15	-	-	破片				-	-	3.2	
		6976	スナイドル銃弾	K14	A2/B	-	頭部				(15.5)	(23.6)	29.6	
		6977	スナイドル銃弾	K14	A	-	側部				(24.0)	(18.0)	29.2	5mmの穴
		6978	スナイドル銃弾	K14	-	-	全体				-	-	26.2	
		6979	スナイドル銃弾	K14	-	-	破片				-	-	7.0	
		6980	スナイドル銃弾	K14	A2/B	陶 / 茶	全体				(25.2)	(15.2)	29.0	
		6981	スナイドル銃弾	K14	A	-	頭部	マッシュルーム状	裾部狭	○	(11.0)	(19.5)	29.2	
		6982	スナイドル銃弾	K14	-	-	破片				-	-	5.9	
		6983	スナイドル銃弾	K14	B	-	側部				(26.9)	(17.1)	29.2	
		6984	スナイドル銃弾	K14	A	-	頭部	マッシュルーム状			(7.8)	15.5	28.5	
		6986	スナイドル銃弾	K15	A2/B	-	頭部				(22.6)	(16.2)	32.0	
		6988	スナイドル銃弾	K15	-	-	破片				-	-	11.3	
		6989	スナイドル銃弾	K15	-	-	側部				-	-	29.0	
		6990	スナイドル銃弾	K14	A2	-	頭部		裾部狭	○	(28.3)	(20.4)	29.0	
		6991	スナイドル銃弾	K14	A2/B	陶 / 茶	未使用				(25.3)	(18.0)	29.2	
		6995	スナイドル銃弾	K14	-	-	破片				-	-	6.1	
		6996	スナイドル銃弾	K14	-	-	全体				-	-	26.8	
		6997	スナイドル銃弾	J17	-	-	破片				-	-	3.8	
		6998	スナイドル銃弾	J17	-	-	全体				-	-	26.1	
		6999	スナイドル銃弾	J17	-	-	破片				-	-	11.2	
		7000	スナイドル銃弾	J17	A	-	頭部				(24.4)	15.0	26.8	
		7001	スナイドル銃弾	J17	-	-	破片				-	-	9.6	
		7002	スナイドル銃弾	J17	A	-	側部				(23.7)	(18.0)	29.9	
		7003	スナイドル銃弾	J17	-	-	全体				-	-	23.4	
		7004	スナイドル銃弾	J17	-	-	全体				-	-	23.5	
		7005	スナイドル銃弾	J17	-	-	破片				-	-	2.3	
		7006	スナイドル銃弾	J17	-	-	破片				-	-	12.8	
		7007	スナイドル銃弾	J17	-	-	破片				-	-	9.3	
		7008	スナイドル銃弾	J17	-	-	全体				-	-	24.5	
		7009	スナイドル銃弾	J17	A	-	頭部	マッシュルーム状			(17.0)	15.4	28.8	
		7010	スナイドル銃弾	J17	-	-	全体				-	-	24.0	
		7011	スナイドル銃弾	J17	A2	-	側部				(30.7)	(18.8)	29.2	
		7012	スナイドル銃弾	J17	-	-	破片				-	-	1.1	
		7013	スナイドル銃弾	J17	-	-	破片				-	-	2.5	
		7014	スナイドル銃弾	J18	-	-	全体				-	-	29.5	
		7015	スナイドル銃弾	J17	-	-	全体				-	-	17.4	
		7016	スナイドル銃弾	J17	-	-	破片				-	-	7.2	
		7018	スナイドル銃弾	J17	A2	-	頭部				(26.6)	(17.4)	29.4	
		7019	スナイドル銃弾	J17	-	-	破片				-	-	11.7	
		7020	スナイドル銃弾	J17	A	-	全体				(17.9)	(20.8)	29.6	7mmの穴
		7021	スナイドル銃弾	J17	-	-	破片				-	-	15.6	

第V章 半高山・吉次峠戦跡の調査

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	入射角	分類	栓	潰れ方	鎌直し痕	圏溝幅	縦方向の規則的な刻み	全長 (mm)	径 (mm)	質量 (g)	備考
		7022	スナイドル銃弾	J17	-	-	破片				-	-	14.7	
第74	82	7023	スナイドル銃弾	J17	A	-	頭部				(25.3)	(15.9)	28.9	
		7024	スナイドル銃弾	J17	A2/B	-	頭部		裾部狭		(28.9)	(18.6)	30.7	
		7025	スナイドル銃弾	I18	A2/B	-	頭部				(26.7)	(18.7)	27.4	
第74	70	7026	スナイドル銃弾	I18	A	陶/茶	頭部				(18.1)	14.8	30.2	
		7028	スナイドル銃弾	I18	-	-	破片				-	-	6.0	
		7029	スナイドル銃弾	I18	-	-	破片				-	-	3.5	
		7030	スナイドル銃弾	I18	-	-	破片				-	-	5.3	
		7031	スナイドル銃弾	I18	A	-	全体				(11.3)	(16.2)	26.1	
		7032	スナイドル銃弾	I18	-	-	破片				-	-	3.7	
第73	36	7033	スナイドル銃弾	I18	A1	陶/茶	頭部				(22.8)	(14.8)	29.6	先端部木片あり
		7034	スナイドル銃弾	I18	B	-	頭部		裾部広		(23.2)	(17.3)	30.5	
		7036	スナイドル銃弾	I18	-	-	破片				-	-	8.9	
		7038	スナイドル銃弾	I18	-	-	破片				-	-	5.6	
		7040	スナイドル銃弾	I19	A2	-	破片				(25.0)	14.5	29.2	
		7041	スナイドル銃弾	I19	A2/B	陶/茶	頭部		裾部狭		25.8	14.8	31.0	
		7042	スナイドル銃弾	I19	A2	-	頭部				(24.0)	14.6	29.3	
		7043	スナイドル銃弾	I19	-	-	破片				-	-	7.8	
		7044	スナイドル銃弾	I18	-	-	破片				-	-	5.2	
		7045	スナイドル銃弾	J18	-	-	破片				-	-	6.2	
		7046	スナイドル銃弾	J18	-	-	破片				-	-	6.2	
		7048	スナイドル銃弾	I19	-	-	破片				-	-	6.4	
		7049	スナイドル銃弾	I19	-	-	破片				-	-	4.1	
		7050	スナイドル銃弾	I19	-	-	破片				-	-	4.9	
		7051	スナイドル銃弾	J19	-	-	破片				-	-	12.3	
		7052	スナイドル銃弾	I19	-	-	破片				-	-	4.4	
		7053	スナイドル銃弾	I19	-	-	破片				-	-	4.5	
		7054	スナイドル銃弾	I19	A	-	破片				-	-	11.1	
		7055	スナイドル銃弾	I20	A2	-	頭部				(25.5)	(16.7)	29.1	
		7056	スナイドル銃弾	J20	A2/B	陶/茶	頭部		裾部狭		(23.3)	14.9	30.1	
		7057	スナイドル銃弾	J20	A	-	頭部		裾部狭		11.0	14.7	25.8	
		7058	スナイドル銃弾	J20	A2	-	側部				(28.5)	(15.9)	33.1	
		7059	スナイドル銃弾	J20	A	-	頭部				-	(16.1)	25.5	
		7060	スナイドル銃弾	J20	-	-	破片				-	-	4.9	
		7061	スナイドル銃弾	J20	-	-	破片				-	-	4.1	
		7062	スナイドル銃弾	J20	-	-	破片				-	-	3.4	
		7063	スナイドル銃弾	J20	A	-	破片				-	-	5.9	
		7064	エンフィールド銃弾	J20	-	-	全体				-	-	28.9	
		7065	スナイドル銃弾	J20	-	-	破片				-	-	6.0	
		7066	スナイドル銃弾	J20	-	-	破片				-	-	5.3	
		7067	スナイドル銃弾	J20	A	-	頭部			○	(25.0)	(15.5)	26.0	
		7068	スナイドル銃弾	J20	-	-	全体				-	-	23.0	
		7069	スナイドル銃弾	J20	-	-	破片				-	-	13.6	
		7070	スナイドル銃弾	J20	A2	-	頭部				(26.1)	(14.6)	28.9	
		7071	スナイドル銃弾	J20	B	-	頭部				(25.0)	(14.5)	29.7	器壁薄い
		7072	スナイドル銃弾	J20	-	-	破片				-	-	8.2	
		7073	スナイドル銃弾	J20	-	-	破片				-	-	3.2	
		7074	スナイドル銃弾	J20	-	-	全体				-	-	23.5	
		7075	スナイドル銃弾	J20	-	-	全体				-	-	16.9	
		7076	スナイドル銃弾	J20	A2/B	-	側部		裾部狭		(26.4)	(21.3)	30.4	
		7077	スナイドル銃弾	J20	-	-	破片				-	-	2.9	
第73	31	7078	スナイドル銃弾	J20	A1	陶/茶	頭部				(21.7)	(15.8)	30.9	先端部木片あり
		7079	スナイドル銃弾	J20	-	-	全体				-	-	9.3	
		7080	スナイドル銃弾	J21	A2/B	-	全体		裾部狭		(33.8)	(24.3)	29.3	
第72	18	7081	エンフィールド銃弾	J21	A'	木	未使用				26.7	15.0	35.4	
		7082	スナイドル銃弾	J21	A2/B	-	側部				(25.8)	(18.9)	21.7	
		7083	スナイドル銃弾	J21	-	-	破片				-	-	6.4	
		7084	スナイドル銃弾	J21	-	-	破片				-	-	6.5	
		7085	スナイドル銃弾	J21	-	-	破片				-	-	7.2	
		7086	スナイドル銃弾	J21	-	-	破片				-	-	7.1	
		7088	スナイドル銃弾	J20	-	-	破片				-	-	2.9	
		7089	スナイドル銃弾	J20	-	-	破片				-	-	2.5	
		7090	スナイドル銃弾	J20	-	-	破片				-	-	4.1	
		7091	スナイドル銃弾	J20	-	-	破片				-	-	9.2	
		7092	スナイドル銃弾	J20	A	-	破片				-	-	7.2	
		7093	スナイドル銃弾	J21	A2/B	陶/茶	頭部		裾部狭		(23.8)	(17.3)	31.3	
		7094	スナイドル銃弾	J20	A2/B	陶/茶	頭部				(26.0)	14.9	29.6	
		7095	スナイドル銃弾	J21	-	-	破片				-	-	0.9	
		7100	スナイドル銃弾	J21	A1	-	側部		裾部狭		(26.8)	(18.9)	27.0	
		7102	スナイドル銃弾	J21	-	-	破片				-	-	5.9	
		7103	-	I21	-	-	破片				-	-	15.4	
		7104	スナイドル銃弾	I21	-	-	全体				-	-	18.4	
		7105	スナイドル銃弾	J21	A2/B	-	側部		裾部狭		(29.2)	(22.9)	23.3	
		7106	スナイドル銃弾	J21	-	-	破片				-	-	5.8	
		7108	スナイドル銃弾	J21	A2	-	発射痕のみ				26.0	14.1	27.1	
		7109	スナイドル銃弾	J21	-	-	破片				-	-	3.1	
		7110	スナイドル銃弾	J21	-	-	破片				-	-	11.7	
		7111	スナイドル銃弾	J21	-	-	破片				-	-	5.0	
		7112	スナイドル銃弾	J21	-	-	破片				-	-	9.6	
		7113	スナイドル銃弾	J21	-	-	破片				-	-	14.3	
		7114	スナイドル銃弾	J21	-	-	破片				-	-	7.2	
		7115	スナイドル銃弾	J21	-	-	破片				-	-	2.5	
		7116	スナイドル銃弾	J21	-	-	破片				-	-	2.6	
		7117	スナイドル銃弾	J21	-	-	破片				-	-	2.1	
		7118	スナイドル銃弾	J22	-	-	破片				-	-	2.9	
		7119	スナイドル銃弾	J22	-	-	側部				(31.4)	(18.2)	28.3	
		7120	スナイドル銃弾	J22	-	-	破片				-	-	14.4	
		7121	スナイドル銃弾	J22	-	-	破片				-	-	6.1	
		7122	スナイドル銃弾	J22	A	-	全体				-	-	29.0	
		7123	スナイドル銃弾	J22	-	-	破片				-	-	6.3	
第75	88	7124	スナイドル銃弾	J22	B	木	頭部				(25.8)	14.7	30.5	
		7125	スナイドル銃弾	J22	-	-	破片				-	-	7.8	
		7126	スナイドル銃弾	J22	A2	-	頭部				(25.6)	(15.5)	28.6	

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	入射角	分類	柱	潰れ方	鎌直し痕	圏溝幅	縦方向の規則的な刻み	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	備考
	7127	スナイデル銃弾	J22	-	-	側部					(27.9)	(16.3)	29.5	
	7128	スナイデル銃弾	J22	-	A2/B	-	頭部		裾部狭		(25.6)	(17.2)	29.4	
	7129	スナイデル銃弾	J22	-	-	破片					-	-	5.2	
	7130	スナイデル銃弾	J22	-	-	破片					-	-	2.5	
	7131	スナイデル銃弾	J23	-	A	-	全体				(30.2)	(16.4)	28.2	
第73図	48	7132	スナイデル銃弾	J22	-	A2	陶/茶	頭部			(23.7)	(14.4)	30.3	
	7133	スナイデル銃弾	J22	-	-	全体					(28.8)	(20.2)	28.1	
	7134	スナイデル銃弾	J22	-	-	破片					-	-	3.5	
	7135	スナイデル銃弾	J22	-	-	破片					-	-	5.7	
	7136	スナイデル銃弾	J22	-	-	破片					-	-	5.4	
第75図	123	7137	スナイデル銃弾	J22	-	A2/B	陶/灰	頭部			(25.5)	(14.7)	28.5	
	7138	スナイデル銃弾	J22	-	B	-	頭部		裾部狭		(23.8)	14.6	30.2	
	7139	スナイデル銃弾	J22	-	-	破片					-	-	4.6	
第74図	76	7140	スナイデル銃弾	J21	-	A	陶/茶	頭部	マッシュルーム状		(19.0)	(14.0)	29.6	
	7141	スナイデル銃弾	J21	-	A2/B	-	側部				(29.1)	(18.0)	29.3	
	7142	スナイデル銃弾	J21	-	A2	-	発射痕のみ				25.4	14.9	28.1	
第73図	26	7143	スナイデル銃弾	J22	-	A1	陶/茶	頭部			(26.9)	(15.3)	30.5	先端部木片あり
	7144	スナイデル銃弾	J22	-	-	破片					-	-	5.6	
	7145	スナイデル銃弾	J22	-	-	破片					-	-	7.2	
	7146	スナイデル銃弾	J21	-	A2/B	-	側部				(26.8)	(18.3)	29.3	
	7147	スナイデル銃弾	K21	-	-	破片					-	-	5.4	
	7149	-	K22	-	-	破片					-	-	5.5	
	7150	スナイデル銃弾	K21	-	-	全体					-	-	28.9	
	7151	スナイデル銃弾	K22	-	A	-	全体				-	-	29.5	
	7152	スナイデル銃弾	K22	-	-	側部			○		(26.8)	-	26.2	
	7153	スナイデル銃弾	K22	-	A2/B	陶/茶	頭部		裾部狭		(26.4)	(16.1)	27.8	
	7154	スナイデル銃弾	K23	-	-	破片					-	-	2.6	
	7155	スナイデル銃弾	K23	-	-	破片					-	-	20.7	
	7156	スナイデル銃弾	K23	-	-	破片					-	-	4.8	
	7157	スナイデル銃弾	J23	-	A	-	全体				(26.8)	(18.2)	28.2	
	7158	スナイデル銃弾	K23	-	A	-	頭部				(25.0)	15.0	28.1	
	7159	スナイデル銃弾	K23	-	-	破片					-	-	6.4	
	7160	スナイデル銃弾	K23	-	-	破片					-	-	1.0	
	7161	スナイデル銃弾	K23	-	-	破片					-	-	4.4	
	7162	スナイデル銃弾	K23	-	A	-	全体	マッシュルーム状			-	(14.5)	24.9	
	7163	スナイデル銃弾	K23	-	-	破片					-	-	6.7	
	7164	スナイデル銃弾	K23	-	-	破片					-	-	2.4	
	7166	スナイデル銃弾	K23	-	A2/B	-	頭部				(21.5)	(16.9)	29.5	
	7167	スナイデル銃弾	K23	-	A2/B	陶/茶	頭部				(24.3)	(14.5)	29.1	
	7168	スナイデル銃弾	K23	-	A2/B	-	全体				(25.3)	(15.9)	29.0	
	7169	スナイデル銃弾	L24	-	A	-	頭部	6mmの穴			(22.8)	(16.1)	29.5	
	7170	スナイデル銃弾	L24	-	B	-	頭部				26.9	14.6	30.2	
	7171	スナイデル銃弾	L24	-	A2	-	側部				(26.1)	(18.0)	28.9	
	7172	スナイデル銃弾	L24	-	A	-	頭部	マッシュルーム状			(21.2)	(16.7)	29.2	
	7173	スナイデル銃弾	J21	-	-	破片					-	-	3.6	
	7174	スナイデル銃弾	I26	-	A2/B	陶/茶	頭部				(26.0)	(15.0)	29.8	
第72図	25	7175	火縄銃弾	I26	-	-	側部				12.3	12.3	9.1	
	7176	スナイデル銃弾	I26	-	A	-	側部				(25.8)	(16.1)	29.0	
	7179	スナイデル銃弾	I24	-	-	破片					-	-	4.5	
	7180	スナイデル銃弾	H24	-	-	破片					-	-	2.8	
	8001	スナイデル銃弾	N13	-	-	破片					-	-	0.4	
	8002	スナイデル銃弾	O13	-	-	全体					-	-	25.9	
	8004	スナイデル銃弾	P13	-	A2/B	陶/茶	発射痕のみ				26.5	14.8	29.9	
	8005	スナイデル銃弾	O12	-	A2/B	-	側部				(30.0)	(21.4)	27.3	
	8006	スナイデル銃弾	M12	-	A2/B	-	側部				(28.7)	(22.4)	29.0	
	8008	スナイデル銃弾	M12	-	-	破片					-	-	26.9	
	8010	スナイデル銃弾	P11	-	A2/B	-	側部				(30.4)	(20.7)	29.5	
	8011	スナイデル銃弾	O11	-	-	側部					(25.1)	(18.1)	28.4	
	8012	スナイデル銃弾	M12	-	-	破片					-	-	5.1	
第75図	90	8013	スナイデル銃弾	M11	-	B	陶/茶	発射痕のみ			27.3	(14.8)	30.1	
第72図	19	8014	エンフィールド銃弾	L12	-	A'	-	発射痕のみ			24.9	14.4	32.7	
	8016	スナイデル銃弾	K12	-	A2	陶/茶	頭部				(23.2)	14.0	29.0	
	8017	スナイデル銃弾	L11	-	-	破片					-	-	14.2	
	8018	スナイデル銃弾	L11	-	A2/B	-	側部				(22.8)	(18.3)	28.4	
	8020	スナイデル銃弾	M11	-	A2/B	-	頭部				(23.2)	(18.9)	27.0	
	8021	スナイデル銃弾	M11	-	A2	-	頭部	マッシュルーム状			(19.0)	14.0	29.0	
	8023	スナイデル銃弾	O10	-	A2	-	側部				(25.4)	(18.2)	27.5	
第73図	49	8024	スナイデル銃弾	J12	-	A2	陶/茶	頭部	マッシュルーム状		(11.5)	14.2	29.6	
	8025	スナイデル銃弾	J25	-	A2/B	陶/茶	側部				(25.9)	(14.8)	28.8	
	8026	スナイデル銃弾	K11	-	A2	-	発射痕のみ				25.8	14.8	28.6	
	8027	スナイデル銃弾	K11	-	-	破片					-	-	10.9	
	8029	スナイデル銃弾	N10	-	A2	-	側部				(25.0)	(15.0)	27.7	
	8030	スナイデル銃弾	O9	-	-	全体					-	-	22.9	
	8031	スナイデル銃弾	N8	-	A2	-	側部				(27.5)	(19.1)	28.6	
	8032	スナイデル銃弾	L10	-	A2	-	側部				(25.2)	(18.2)	28.8	
	8033	スナイデル銃弾	K11	-	A2/B	陶/茶	頭部		裾部狭		(22.8)	(16.4)	30.4	
	8035	スナイデル銃弾	K11	-	-	側部					(27.0)	(17.5)	27.9	
	8036	スナイデル銃弾	L9	-	A2	-	側部				(25.1)	(16.3)	27.8	
	8037	スナイデル銃弾	L9	-	-	破片					-	-	27.0	
	8039	スナイデル銃弾	M9	-	A2	-	発射痕のみ				24.7	14.2	27.1	
	8040	スナイデル銃弾	K9	-	A2	-	側部				(26.6)	(14.6)	27.9	
	8041	スナイデル銃弾	K10	-	A2/B	陶/茶	頭部				(25.2)	14.6	29.0	
	8043	スナイデル銃弾	O6	-	-	破片					-	-	4.9	
	8045	スナイデル銃弾	T8	-	-	破片					-	-	5.1	
	8047	スナイデル銃弾	S8	-	A	-	全体	マッシュルーム状			(16.3)	(23.7)	27.8	
	8050	スナイデル銃弾	S7	-	A	-	頭部	10mmの穴			(25.4)	(20.3)	27.5	
	8053	スナイデル銃弾	T6	-	A2	-	側部				(30.0)	(16.9)	27.9	
第75図	85	8059	スナイデル銃弾	R6	-	B	陶/灰	未使用			27.3	15.5	31.0	
	8063	スナイデル銃弾	U4	-	-	破片					-	-	1.2	
	8065	スナイデル銃弾	S5	-	-	破片					-	-	4.5	
	8066	スナイデル銃弾	V4	-	A2	-	発射痕のみ				26.8	14.4	27.6	
	8067	スナイデル銃弾	V3	-	A	-	頭部	4mmの穴			(19.0)	(15.0)	28.2	
	8071	スナイデル銃弾	W4	-	A2/B	-	全体	6mmの穴貫通 マッシュルーム状	裾部狭		(27.1)	(25.3)	27.9	





第V章 半高山・吉次峠戦跡の調査

実測No.	遺物No.	遺物名	部位	出土位置	a(mm)	b(mm)	c(mm)	(c) (mm)	d(mm)	e(mm)	f(mm)	g(mm)	質量(g)	
	6087	砲弾破片	側壁?	E25	-	-	-	-	-	-	-	-	183	
	6088	砲弾破片	底部	F25	(30.0)	-	-	(33.0)	-	-	11.0	-	31.7	
第82図	185	6095	砲弾破片	頭部・側壁	F26	(86.0)	-	84.0	(50.0)	-	20.0	-	232.2	
		6204	砲弾破片	頭部・側壁	E13	(96.0)	-	-	(51.0)	-	20.0	11.0	287.1	
		6208-1	砲弾破片	側壁	E13	-	-	-	-	-	-	-	104.5	
	6208-2	砲弾破片	頭部・側壁	E13	(45.0)	-	-	(41.0)	10.0	20.0	-	-	129.8	
	6208-3	砲弾破片	側壁	E13	-	-	-	-	-	-	-	-	71.3	
	6208-4	砲弾破片	側壁	E13	(55.0)	-	-	(40.0)	-	-	-	-	142.4	
	6211	砲弾破片	側壁	E13	-	-	-	-	-	-	12.5	-	21.0	
第82図	186	6277	砲弾破片	底部・側壁	C17	(43.0)	-	84.0	(62.0)	-	-	13.0	14.5	407.1
		6316	砲弾破片	頭部・側壁	C16	(66.0)	-	-	(53.0)	10.0	22.0	-	-	204.3
		6325	砲弾破片	側壁	D17	(65.0)	-	-	(59.0)	-	-	13.0	-	233.3
	6327	砲弾破片	側壁	D17	-	-	-	-	-	-	-	-	23.9	
第81図	179	6332	砲弾破片	頭部・側壁	E17	(80.0)	-	80.0	(53.0)	9.0	16.0	-	-	265.4
		6349	砲弾破片	側壁	D16	(25.0)	-	-	(62.0)	-	-	12.0	-	75.1
第83図	190	6359	砲弾破片	底部・側壁	D16	(57.0)	-	84.0	(62.0)	-	-	12.0	-	198.9
		6360	砲弾破片	不明	D16	-	-	-	-	-	-	-	-	52.4
	6395-1	砲弾破片	頭部	D15	(43.0)	-	-	(49.0)	10.0	21.0	-	-	126.8	
	6395-2	砲弾破片	頭部・側壁	D15	(76.0)	-	-	(42.0)	-	(24.0)	13.0	-	163.0	
	6426	砲弾破片	側壁	B15	(50.0)	-	-	(53.0)	-	-	-	-	110.9	
	6447	砲弾破片	側壁	C14	-	-	-	-	-	-	-	-	45.5	
	6513	砲弾破片	側壁	C14	(105.0)	-	-	(80.0)	-	-	-	-	521.2	
第83図	195	6648	砲弾破片	底部	D13	(23.0)	-	80.0	100.0	-	-	15.0	-	490.5
		6651	砲弾破片	側壁	C13	(64.0)	-	-	(52.0)	-	-	12.0	-	187.7
		6824	砲弾破片	頭部・側壁	K18	(82.0)	-	-	(70.0)	8.0	-	17.0	-	404.3
	6957	横断破片	側壁	K16	(61.0)	-	-	(50.0)	-	-	12.5	-	154.4	
	7098	砲弾破片	側壁	J21	(70.0)	-	-	(62.0)	-	-	13.0	-	202.2	

信管

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	全長(mm)	頭部径(mm)	胴部径(mm)	空洞部径(mm)	質量(g)	
第81図	175	1174	信管	H17	63.0	33.0	20.0	10.5	131.4
第81図	174	1199	信管	H20	(40.0)	(27.0)	20.0	10.0	61.5
		1418	信管	I20	(20.0)	(29.0)	-	-	18.0
		1419	信管	I20	(24.0)	(18.0)	-	-	10.3
第81図	176	6493	信管	D15	61.0	32.0	19.0	10.5	111.5

スタッド

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	径(mm)	厚み(mm)	質量(g)
	1448	スタッド	G22	18	6	7.8
	5147	スタッド	I19	17	5	5.4
	6053	スタッド	C20	16	7	8.5
	6358	スタッド	D16	17	7	9.7

霰弾・銃弾

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	径(mm)	質量(g)	備考	
	6164	鉄霰弾	E11	11.2	6.6		
	6181	鉄霰弾 / 火縄銃弾	E11	(11.4)	5.2	気泡により形が歪	
	6272	鉄霰弾 / 火縄銃弾	C17	10.7	4.6		
	6475	鉄霰弾 / 火縄銃弾	E14	10.0	5.2		
P147	72	25	7175	鉄霰弾 / 火縄銃弾	I26	12.4	9.1
		8019	鉄霰弾 / 火縄銃弾	M11	9.2	4.6	
		8034	鉄霰弾 / 火縄銃弾	K11	10.8	6.6	
	8083	鉄霰弾	W2	12.6	6.4		
	8092	鉄霰弾	O6	9.6	2.8		
	8106	鉄霰弾	O6	12.2	7.2		
	8127	鉄霰弾	O3	13.0	7.8		
P138	72	24	6067	鉄霰弾 / 火縄銃弾	B19	14.0	15.9

古銭

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	外縁外径(mm)	外縁内径(mm)	内郭外径(mm)	内郭内径(mm)	外縁厚(mm)	質量(g)	備考	
第84図	200	1133	半銭	G17	22.2	20.0	-	-	1.3	3.5	明治7年製
第84図	196	1429-1	天宝宝	F17	40.8	35.8	11.3	7.0	2.0	21.6	薩摩天保銭か
第84図	197	1429-3	天宝宝	F17	40.5	35.5	10.9	7.0	2.0	19.9	薩摩天保銭か
第84図	198	1429-4	天宝宝	F17	40.8	35.0	11.0	6.8	2.0	19.0	
第84図	199	1429-5	天宝宝	F17	40.8	35.0	11.3	7.0	2.1	20.5	薩摩天保銭か
第84図	201	1438	寛永通宝	G17	24.2	17.2	7.3	5.5	1.1	3.0	
第84図	202	5004	寛永通宝	F13	22.8	18.0	7.5	5.8	1.1	2.0	
	6110	寛永通宝	H27	22.6	17.6	8.7	6.6	1.0	1.9		
	6157	寛永通宝	E10	24.4	18.3	8.5	5.8	1.3	2.6		
	6180	寛永通宝	E10	25.6	19.8	7.6	5.4	1.3	3.4		
	6370	寛永通宝	D16	22.7	18.7	8.4	6.2	1.2	2.4		
	6443	寛永通宝	C15	24.2	19.3	7.1	5.5	1.3	3.0		
	6584	寛永通宝	L19	24.6	19.7	7.1	5.5	1.3	2.6		
	6612	寛永通宝	L20	22.6	17.2	7.7	6.3	0.8	1.8		

その他の遺物

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	全長(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	質量(g)	備考	
第76図	128	1193	火門蓋	H16	-	24.2	12.1	9.8	
第85図	209	5001	キセル	G13	68.5	9.7	-	5.3	吸い口 銀メッキ残存
第84図	206	6012	キセル	D22	29.0	11.5	-	5.2	雁首
第76図	127	6150	刺包針	L28	-	2.0	(45.7)	0.7	
第84図	203	6278	キセル	C17	66.0	8.0	-	7.6	雁首
第81図	173	6339	ヒューズプラグ	E16	23.0	21.0	17.0	17.4	
第84図	204	6342	キセル	D17	42.0	13.0	-	7.1	雁首
第84図	207	6449	キセル	C15	39.0	9.5	-	4.0	雁首
第84図	205	6487	キセル	D15	56.0	12.0	-	7.7	雁首
第85図	208	6640	キセル	D13	57.5	10.1	-	5.0	吸い口



第8表 吉次峠戦跡出土遺物観察表

銃弾

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	入射角	分類	栓	潰れ方		鑄直し痕	圏溝幅	縦方向の規則的な潰れ	全長(mm)	径(mm)	質量(g)	備考
第86図	207	2069	スナイドル銃弾	F43	A2	木	頭部			裾部狭		(25.8)	14.7	28.3	先端部木片あり
第86図	211	2074	スナイドル銃弾	F44	A2	-	頭部					(17.4)	(16.6)	28.1	
第86図	208	2076	スナイドル銃弾	F43	A2	陶/茶	頭部	先端部に凹みあり				(24.0)	(18.0)	29.1	
第86図	212	3049	スナイドル銃弾	E42	A2	-	頭部					(19.1)	(21.8)	27.3	
第86図	210	3070	スナイドル銃弾	D43	A2	-	頭部			裾部狭		(23.7)	(21.1)	28.6	
第86図	206	3079	スナイドル銃弾	A43	A1	陶/茶	頭部			裾部狭		(23.7)	(14.2)	29.0	
第86図	217	3083	スナイドル銃弾	D43	A2/B	-	全体					-	(20.0)	28.0	
第86図	209	3086	スナイドル銃弾	D43	A2	-	側縁					(25.9)	(14.6)	28.0	
第86図	216	3093	スナイドル銃弾	C43	B	-	側縁			裾部狭		(27.5)	(14.9)	29.6	
第86図	213	3116	スナイドル銃弾	C43	A2	-	側縁					(29.2)	(18.6)	27.5	
第86図	214	3145	スナイドル銃弾	A44	A2	-	頭部					(25.1)	(24.9)	28.7	
		3471	スナイドル銃弾	A46	-	-	破片					-	-	4.9	
		3371	火縄銃弾	C45	-	-						-	(14.7)	13.9	
第86図	215	3502	スナイドル銃弾	C46	A2	陶/茶	頭部					(24.8)	(18.4)	28.4	

砲弾関係遺物

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	a(mm)	b(mm)	c(mm)	c'(mm)	d(mm)	e(mm)	f(mm)	g(mm)	質量(g)	
第86図	222	2007	砲弾破片	G41	(117.0)	-	88.0	55.0	-	-	11.5	-	365.5
	223	3117	砲弾破片	E43	(36.5)	-	(39.7)	-	-	-	13.8	-	87.7

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	径(mm)	厚み(mm)	質量(g)	備考	
第86図	224	2241	スタッド	D48	(18.2)	6.4	7.9	

その他の遺物

実測No.	遺物No.	遺物名	出土位置	全長(mm)	幅(mm)	厚み(mm)	質量(g)	備考
第86図	225	3090	蹄鉄	D43	115	120	7.0	246.5

資料紹介2

弾薬箱

西南戦争では弾薬の運搬に図のような木製の箱が使われていた。図化した弾薬箱は玉東町二俣の本村地区の個人宅に永年保管されていたものである。本村地区は二俣古閑官軍砲台跡に隣接する。

弾薬箱は外部寸法875mm、奥行155mm、深さ260mmであり、厚さ15mmの5枚の板材を組み合わせて作られた箱部分と厚さ15mmの蓋部分からなる。箱の接合部分には鉄板が被さり、一角につき10本のマイナスの木ネジで留められている。短辺の側面には木製の把手がマイナス木ネジで固定され、直径10mmの孔に運搬用の縄が付く。長辺の側面には鎖のようなものが二ヶ所に付けられている。また、正面には施錠用の金具が一ヶ所に付き、蓋側面周辺には釘孔(?)があいている。革か帆布が貼られていたのだろう。底にはネジが残っており、下駄のような構造になっていたと思われる。総じて丈夫な構造である。

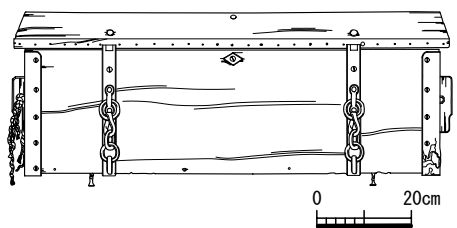
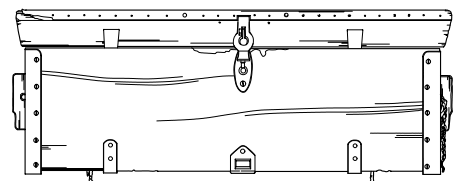
内部には中央に板の仕切りがあり、二ヶ所に区切られている。箱の中には次のようなラベルが入っていた。「10 Boxer Ammunition For 577...SNIDER RI...ELEY BROS,LONDON.」

「拾...」

「弾...ス」「明治七歳四月」  
ラベルが箱に貼りついていたものならば、遺跡で最も多く出土したスナイドル銃弾が入っていたと思われる。



ラベル



弾薬箱

# 第VI章 戦場遺跡出土銃弾の分類と検討

## 第1節 出土銃弾の分類

西南戦争では大量の武器が使用された。その中でも、歩兵各人が携帯し、数量的にも最も多く利用されたのが小銃である。戦闘の激しい時は「一日32万発」といわれる程の大量の弾薬が使用された。『従征日記』の弾薬受払表にも最低でも10万発の弾薬が使用された記録があり(第9表)、兵卒は1日200発を支給された。これを示すように、各遺跡における調査でも多くの銃弾が出土している。また、その発火の痕跡である薬莖や雷管が陣地跡から出土する。では、どのような銃弾がどれほど戦闘で使用されたのだろうか。当町出土の遺物を中心に検討したい。

当町の西南戦争遺跡で出土した銃弾は第10表のとおりで、スナイドル銃弾がもっとも多く出土している。次にエンフィールド銃弾、シャープス銃弾、その他火縄銃が続く。また、薬莖も小銃弾ほど数は多くないが同様の傾向を示す。

戦跡から出土する銃弾のほとんどは使用済みのものであり、主成分が鉛であるため、発射と着弾の衝撃より、その原型をとどめていない。しかしその中でも未使用弾や、ある程度形が残っているものは、外形や内部の断面形態に依って数種類に分類することが可能である。この章では遺跡で最も多く出土するスナイドル、エンフィールド銃弾と呼ばれるものについて、改めて分類を示す。

分類は、銃弾表面の圈溝の有無、内部断面の形態によって行った。

第9表 第一第二旅団後装銃弾薬受払表 (明治10年3月3日より13日まで)

月 日	受	払		差引	備 考
		本街道	二俣口		
3月3日	137,000	72,000		65,000	72,000 発は安楽寺下村に於て射費す
3月4日	96,000	86,000		75,000	
3月5日	206,000	128,000		153,000	
3月6日	49,760	110,500	63,000	29,260	
3月7日	325,000	81,000	106,000	167,260	
3月8日	194,000	50,000	63,000	248,260	
3月9日	172,520	50,880	119,600	250,300	19,600 発の内 10,000 発は原倉村に分配す
3月10日		23,000	38,000	189,300	
3月11日	139,200	12,000	186,100	130,400	
3月12日	270,000	50,000	203,000	147,400	
3月13日			40,000	107,400	
合計	1,589,480	663,380 1,482,080	818,700	107,400	1日平均 134734.5455

川口武定『従征日記』より作成

第10表 玉東町西南戦争遺跡出土銃弾関係遺物一覧







		二俣瓜生田官軍砲台跡		二俣古閑官軍砲台跡		横平山戦跡		半高山戦跡		吉次峠戦跡		合計	
		点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)	点数	質量 (g)
銃弾	エンフィールド	6	161.6	4	103.4	94	2690.4	26	548.6	0	0	130	3504.0
	スナイドル	7	157.4	1	30.0	378	9916.9	1292	1820.6	13	340.6	1691	12265.5
	シャープス	0	0	0	0	3	80.8	1	29.3	0	0	4	110.1
	スペンサー	1	20.0	0	0	0	0	1	28.2	0	0	2	48.2
	火縄銃弾	2	14.1	0	0	0	0	2	24.1	1	13.9	5	52.1
	不明	0	0	0	0	1	2.1	27	223.4	0	0	28	225.5
	小計	16	353.1	5	133.4	476	12690.2	1349	2674.2	14	354.5	1860	16205.4
薬莖等	スナイドル	20	90.5	4	13.0	108	611.7	129	733.8	0	0	261	1449.0
	スペンサー	1	3.9	0	0	3	10.9	23	96.6	0	0	27	111.4
	シャープス	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	雷管	0	0	0	0	0	0	12	6.7	0	0	12	6.7
		小計	21	94.4	4	13	111	622.6	164	837.1	0	0	300

【銃弾の分類】

- ・圏溝が無く、先端部は丸みを帯びる。
  - a 類 弾底部断面形態が三角(円錐状)。
  - b 類 弾底部断面形態が台形(円柱状)。
- ・圏溝が有り(4本)、先端部は丸みを帯びるが、やや平たい。
  - A' 類 弾底部断面形態が三角(円錐状)。
- ・圏溝が有り(4本)、先端部は丸みを帯びる。
  - A1類 弾底部断面形態が台形(円柱状)。  
 先端に円柱状の孔があき、木栓が詰められる。弾底部と先端部の間には仕切りがある。弾底部には木製、陶製(茶色)の圧入栓が詰められる。  
 圏溝の幅は基本的に等間隔であるが、裾部の間隔が他と比べて狭いものもある。  
 発射や着弾による衝撃の為に变形したものか、製造元の違いによるものか、未使用弾が出土していない為、不明である。
  - A2類 弾底部断面形態台形(円柱状)。  
 先端部は中空状と思われる。断定部には木製、陶製(茶色、灰色)の圧入栓が入る。圏溝の幅は等間隔である。
  - B 類 弾底部断面形態長い先細りの台形(円柱状)。A1類と同様裾部の溝の幅が他と比べて狭いものもある。原因は不明である。

※A、B類の名称に関しては熊本市教育委員会『田原坂』『田原坂II』を参考にした。

第11表 玉東町西南戦争遺跡の銃弾の分類

分類	圏溝の有無	弾頭断面形態	弾底断面形態	圧入栓の種類	模式図	適合銃器
a 類	無		三角	無		エンフィールド銃 (前装式)
b 類	無		台形	陶栓 (茶色・灰色)		
A' 弾	有(4本)		三角	木栓		
A1類	有(4本)	柱状の穴有り 木片がはいる	台形	陶栓 (茶色)		スナイデル銃 (後装式)
A2類	有(4本)	中空	台形	陶栓 (茶色・灰色)		
B類	有(4本)		柱形	木栓 陶栓(茶色・灰色)		

第2節 出土銃弾の検討

浅川道夫(浅川2011)によると幕末維新期に欧米諸国から多量にもたらされた武器弾薬類は、明治4(1871)年の廃藩置県の後には兵器還納が行われ、同年に大阪で新規編成した辛未徴兵より携帯火器の統一が始まった。この時、歩兵銃はエンフィールド(エンフィールド銃)と定められ、その後の明治7年には前年に行われた徴兵令による諸兵に対し、歩兵、工兵用にスナイデル銃、アルビニー銃、エンフィールド銃。騎兵、砲兵、輜重兵用にスペンサー、スタール銃が選定されたという。そして、西南戦

争においては火力を重視した作戦により、さらなる小銃の統一が図られた。特に2~3月にかけて行われた戦いにおいては、主力にはスナイドル銃やアルビニー銃といった後装式単発銃が支給された<sup>(1)</sup>。

この後装式単発銃2種にはスナイドル実包が用いられた。スナイドル実包とはボクサー実包であり、銃弾には圈溝を有する。当町で出土する銃弾は圈溝の無いものと4本の圈溝を有するものと二種類がある。前者をエンフィールド銃弾、後者をスナイドル銃弾として記載してきたが、改めてこれらがいつ頃から造られ、西南戦争で消費されたのかを示したい。

B.A.Templeはスナイドル銃のボクサー実包の変遷を第12表のように示す。ボクサー実包は薬莖と銃弾が一体化したものである。しかし、薬莖・銃弾とも厳密に言えばそれぞれは若干の時期差をもって

第12表 スナイドル実包変遷表

<p><b>MARK I</b> 銃弾 type1 公認：1866/8/20</p> <p>ディスク銅製(～MARKIII) ケース厚:0.076</p>	<p><b>MARK II</b> 銃弾 type1 公認：1866/12/8</p> <p>ケース厚:0.076mm インナーコイル厚:0.076mm アウターカップ厚:0.356mm リム厚:1.143～1.27mm</p>	<p><b>MARK III</b> 銃弾 type2, 3 公認：1867/5/4</p> <p>ケース厚:0.076mm インナーコイル厚:0.076mm アウターカップ厚:0.356mm リム厚:1.143～1.27mm</p>	<p><b>MARK IV</b> 銃弾 type3 公認：1867/7/8</p> <p>ディスク鉄製(～MARKIV) ケース厚:0.076mm インナーコイル厚:0.076mm アウターカップ厚:0.356mm リム厚:1.143～1.27mm</p>	<p><b>MARK V</b> 銃弾 type4 公認：1867/7/8</p> <p>ケース厚:0.076mm インナーコイル厚:0.127mm アウターカップ厚:0.178,0.254mm リム厚:1.143～1.27mm</p>
<p><b>MARK VI</b> 銃弾 type4 公認：1867/10/8</p> <p>ケース厚:0.127mm インナーコイル厚:0.127mm アウターカップ厚:0.356mm リム厚:1.143～1.27mm</p>	<p><b>MARK VII</b> 銃弾 type5 公認：1868/3/1</p> <p>ケース厚:0.127mm インナーコイル厚:0.127mm アウターカップ厚:0.356mm リム厚:1.145～1.27mm</p>	<p><b>MARK VIII</b> 銃弾 type6 公認：?</p> <p>ケース厚:0.127mm インナーコイル厚:0.127mm アウターカップ厚:0.356mm リム厚:1.145～1.27mm</p>	<p><b>MARK IX</b> 銃弾 type7 公認：1871</p> <p>ケース厚:0.127mm インナーコイル厚:0.127mm アウターカップ厚:0.356mm リム厚:1.145～1.27mm</p>	

銃弾	エンフィールド	スナイドル							
		type1	type2	type3	type4	type5	type6	type7	
全長 (mm)	27.7	28.45	26.4	26.4	26.4	26.4	27.05	26.4	
径 (mm)	13.97	14.55	14.55	14.55	14.55	14.55	14.55	14.55	
圈溝	無	4本丸み	3本丸み	3本鋸歯状	4本鋸歯状	4本鋸歯状	4本鋸歯状	3本鋸歯状	
質量 (mm)	34.34	34	31.1	31.1	31.1	31.1	31.1	31.1	

参考文献

B.A.Temple「The Boxer Cartridge in the British Service」(British:Watson Ferguson andCo,1977)  
Charles H.Yust,Jr"Snider577 Cartridges"Gun Digest Treasury III:The Gun Digest Company

変化しているようだ。当町で出土するスナイドル銃弾は先述のように大きく三種類に分けることができ、それをこの表と比較すると、A1類は先端の孔に木栓が入り圏溝が4本であることから左表type1か4に絞られる。出土するA1類はほとんどが使用済みであるため全長による分類が出来ないが、type1のように大きな物は少ない。つまり、多くはtype4であり、MARKVかVIであることが考えられる。A2類は先端に孔が無く圏溝が4本であるためtype5かtype6であり、MARKVIIかVIIIに対応するものと考えられる。B類は第12表中には無いものである。表で示されるものはイギリス政府公認のオリジナルのものであることから、B類はA1やA2より後に作られたものと考えられる。なお、出土するスナイドルA1、A2類には茶か灰色の陶栓が認められる。Charls H.Yust,Jrによるとオリジナルであるイギリスで作られた銃弾には陶栓が認められるとのことであり、B類には陶栓の他、木栓が詰まった状態で出土することもあり、オリジナルではないことは明らかである。B類については、これまで出自が不明であったが、蛍光X線分析や浅川(166頁)より新型であることが明らかになっている。A'類としたものは半高山戦跡で5点出土しているものである。表のいずれにも当てはまらないが、浅川氏よりエンフィールド弾の一種であるとのこと指摘をいただいた。

また、圏溝の無いb類はエンフィールド銃弾で圧入栓を持つ。スナイドルtype1に先行するものである。なお、a類は圧入栓を必要としない初期型のもので、b類より古式のプリチェット弾と思われる。エンフィールド銃の実包は紙で銃弾と装薬を包んだものであり、弾鑄型さえあれば手工業で作る事が可能であった。出土する銃弾には(特にb類)鑄型の痕のような筋が入るものがある。銃弾不足に悩まされた薩軍は鍋ややかんを溶かして銃弾を作っていたという話が残っているが、そのように戦場や兵站において手作りされたものもあったと思われる。

西南戦争中、官軍は日々32万発<sup>(2)</sup>という大量の銃弾消費に対応するため、東京や大阪の砲兵本廠(イギリスから購入したスナイドル弾製造機械を所蔵していた)において急ピッチで製造が進められ、不足を補う為に輸入も行われたようである。当町における遺跡では、古式のエンフィールド銃弾からスナイドル銃弾の各種型式、さらには新型と思われるものが出土している。これらは出土状況より一括性の高いものと考えられ、幕末の輸入品や新型の国産品に至るありとあらゆる武器弾薬が西南戦争においてかき集められたことが伺える。

### 主要銃器の説明

エンフィールド銃 (Enfield Rifle) イギリス軍が1853年に採用したもので、西南戦争では主に短エンフィールド銃(1860年制式化)が用いられた。前装式施条銃で、全長49インチ、重量8.5ポンド、銃身には5条の腔綫が施され、最大射程距離は1,250ヤードであった。口径0.577インチ。当初は圧入栓を使用しない弾底部円錐形のプリチェット弾が使用されたが、1852年に圧入栓を用いる底部拡張式先頭弾(圏溝を有しない)が開発された。日本では短エンフィールド銃が用いられていた。

スナイドル銃 (Snider-Enfield Rifle) イギリス軍が1866年に採用。スナッフボックス式の遊底をもつ蓐囊式後装銃であり、エンフィールド銃を低コストで改修することができた。西南戦争では長短二種類が使われている。長スナイドル銃は全長55インチ、重量11ポンド、腔綫は3条、最大射程距離は1,000ヤードであった。短スナイドル銃は全長49インチ、重量8.5ポンド、腔綫5条で最大射程距離1,250ヤードであった。口径0.577インチで、弾、装薬、雷管、薬莖が一体となった中心打撃式のボクサー型実包を使用する。

註

- (1) 西南戦争では12種類の銃器、8種類の実包が使われた。当初は本文にあるようにスナイデル、アルビニー銃が使われていたが、武器弾薬の激しい消耗により4月上旬にはエンフィールド銃の準用が始まっている(『征西戦記稿 中』より)。  
(2) 参謀本部陸軍部編纂課 1880 『明治十年征討軍團記事』97頁

参考文献

浅川道夫 2011「建国期の日本陸軍にみる兵器統一への試み-国産小銃採用までを中心に-」『軍事史学』第47号  
Charls H Yust, Jr『Snider577Cartridges』

談話

玉東町大字白木 平井九平

谷村計介が高瀬の官軍に連絡をとり、再び戦闘に参加して木葉の横町の通りがかりで水を飲ませてくれと言って来たので、店の奥さんが柄杓に水を汲んでやったところ、それを飲んで柄杓を返そうとすると、柄杓の先がポトリと落ちた。計介さんは有難うと言って二、三歩行くと流れ弾丸にあたって戦死された。

その当時、本営は木葉の横町の菊屋という家があったが、その後二俣に移された。

それから賊軍の一人が逃げ遅れて上古閑に居たので、このままにしておくで官軍に知られては放火され、全部落の家が焼かれるので、二俣方面に逃がしたので、火災から免れたが、その当時の住民は、とてもあわれであった、話しにならない程みじめな生活だったらしい。

戦死者の処理の状況を祖父が言っていたが、高月の官軍墓地に塹壕を掘って、そこにどンドン埋めて赤いケツを覆い、その上に名札を書いて立てていたと言うことであった。

出典:玉東町編 平成7年『歴史への招待』

## 西南戦争遺跡出土遺物の蛍光X線分析

熊本大学埋蔵文化財調査センター 大坪志子  
平木 琢

### はじめに

西南戦争については文献資料・伝承も多く、戦いの様子は詳細に語られている。反面、それらが前提となっているためにかえって実状を分かりにくくしているきらいもある。政府がスナイデル銃弾薬製造設備を鹿児島から搬出したため、薩摩軍はスナイデル銃を使用することができず、旧式のエンフィールド銃での戦いを余儀なくされたといわれるが、両軍の使用火器をそのように限定することに疑問がもたれているのはその好例である<sup>(1)</sup>。

田原坂は、西南戦争の激戦地として最も知られた戦場の一つである。田原坂をめぐる攻防において、両軍にとって戦局の鍵となった要地が横平山である。薩摩軍との激しい戦いの末、横平山を奪った官軍は、ここを足がかりとして薩摩軍の田原坂防衛線を破ることとなった。西南戦争の戦跡からは数多くの銃弾が出土しているが、両軍の使用火器の問題や布陣の入れ替わりなど、出土位置や形態のみからだけでは銃弾がどちらの陣営のものかを判断するのは非常に難しいとされてきた。しかし、横平山の場合は一度の戦闘(官軍による占領)によって生じた遺物である可能性が高く、両軍が使用した火器の特定が期待される<sup>(2)</sup>。

ここでは銃弾の成分分析を行い、物資の面から横平山の戦いにおける両軍の戦況を知る手がかりを得ることを目的とする。薩摩軍は物資不足を補うために鉛以外の金属を収集して銃弾を製造したという通説がある。また、両軍が使用した銃弾の正規品は外国産か国内産かという疑問もある。分析を通してこのような通説や疑問を検証し、西南戦争の初期の戦闘の様子を探りたい。

### 1 分析対象

分析の対象としたのは、横平山戦跡・半高山戦跡で出土した小銃の銃弾と関連遺物である。西南戦争で使用された主な火器には上述のようにエンフィールド銃とスナイデル銃がある。エンフィールド銃は前装式で、スナイデル銃はこれを改造した後装式である。両者の銃弾には溝の有無という特徴的な違いがある。また、それぞれにも細部に違いがあるものがある。そこで、分類をもとに分析を行い、結果を示している。また、スナイデル銃の銃弾の分析については薬莖の影響が予想されるため、薬莖の成分分析も行った。このほか、比較試料として江戸時代後期に日本国内で製造されたと考えられる鉛製品・銃弾についても分析を行った。

#### 分析対象資料

・横平山戦跡出土スナイデル銃弾	203点
・横平山戦跡出土スナイデル薬莖	12点
・横平山戦跡出土エンフィールド銃弾	56点
・半高山出土スナイデル銃弾	64点
・半高山出土エンフィールド銃弾	2点

#### 比較資料(資料提供:浅川道夫氏・高橋信武氏)

・粗製脇差金具(縁金鏢側・頭金・柄頭)/江戸時代後期(GYOKU001、001-2)	1点
・火縄銃弾(A烏口伝世品)/江戸時代後期(GYOKU002)	1点
・火縄銃弾(B革袋伝世品)/江戸時代後期(GYOKU003)	1点

- ・4匁5分玉(会津鶴ヶ城採集品)/江戸時代後期(GYOKU004) …………… 2点
- ・銃弾(ツンナール)/明治時代(GYOKU005、005-2) …………… 1点
- ・銃弾(三十年式-1)/明治30年代(GYOKU006) …………… 1点
- ・銃弾(三十年式-2)/明治30年代(GYOKU007) …………… 1点

## 2 分析方法

エンフィールド銃・スナイデル銃の弾は上半部を分析した。特にスナイデル銃の弾は上述のとおり下半部が薬莖に接しているため、薬莖由来の成分が検出される恐れがあり、極力先端部を分析した。その他の製品については、任意に部位を選定して分析を行った。

使用した分析機器は、米国Innov-x Systems社製ハンドヘルド蛍光X線分析計(エネルギー分散型)で、合金(Analytical)モードで分析を行った。照射時間は8秒、照射範囲は約φ7mm、電圧・電流は任意である。正確な分析のためには新鮮な面での測定が望ましいが、文化財でもあるため特別な処理は行わず、水による洗浄を行った状態での測定である。



## 3 結果

分析結果を第13～17表に示す。

まず、スナイデル銃の弾から検出された主要な成分としては、鉛(Pb)・鉄(Fe)・銅(Cu)・錫(Sn)・亜鉛(Zn)をあげることができる(第13・15表)。これ以外に検出された成分(表中Bi～Hf)は、弾の構成成分というよりは、弾の表面に付着した土壌によると考えられる。スナイデル銃では鉛を主成分としており、鉄もほぼどの固体からも検出されている。

エンフィールド銃の銃弾についても、主成分はやはり鉛であり、鉄も半数程度の固体から検出されている(第14・15表)。スナイデル銃の弾と比較すると、鉛・鉄以外の金属成分の検出は非常に少ない。

薬莖は、銅と亜鉛を主成分とするものが多いが、数値にはややバラつきがある(第16表)。また、鉄の含有率が高いものが数点ある。これは薬莖底部のディスク部分の成分である。

比較試料(第17表)である脇差の金具(GYOKU001、001-2)は、鉛と錫が約6対4の割合で合金されたいわゆる半田めっき金属である。国内産の銃弾とみられるGYOKU002～007のうち、002～005は微量に鉄(銅)が混入するのみの鉛製である。GYOKU006・007は銅とニッケルの合金でいわゆる白銅である。



第13表 蛍光X線による横平山戦跡出土スナイドル銃弾分析値

分類はP153第11表による Sn=スナイドル、En=エンフィールド

遺物番号	分類	栓	Pb	Fe	Bi	Ta	Ti	Mn	Re	Sb	Hf	Cu	Sn	Zn
714	Sn	A1	茶陶	99.440	0.560									
432	Sn	A1	茶陶	97.000	1.750							0.051	1.200	
658	Sn	A1	茶陶	98.940	1.020							0.039		
169	Sn	A1	茶陶	99.390	0.550							0.055		
798	Sn	A1	無	99.960								0.038		
390	Sn	A1	無	99.870	0.072							0.061		
397	Sn	A1	無	99.890								0.110		
677	Sn	A1	無	98.640	0.330							0.075	0.960	
98	Sn	A1	無	99.290	0.630							0.081		
237	Sn	A2	木	100.000										
401	Sn	A2	茶陶	99.870	0.090							0.039		
720	Sn	A2	茶陶	98.510	0.470							0.040	0.980	
1	Sn	A2	茶陶	98.760	0.680							0.045	0.510	
684	Sn	A2	茶陶	99.310	0.160							0.045	0.480	
648	Sn	A2	茶陶	98.470	1.480							0.047		
402	Sn	A2	茶陶	99.510	0.440							0.047		
815	Sn	A2	無	99.950								0.048		
291	Sn	A2	無	99.310	0.088							0.048	0.550	
442	Sn	A2	無	99.000								0.050	0.950	
615	Sn	A2	無	99.450	0.490							0.056		
388	Sn	A2	無	99.850	0.100							0.057		
299	Sn	A2	無	98.760		0.520						0.060	0.660	
104	Sn	A2	無	99.840	0.100							0.062		
621	Sn	A2	無	98.310	0.960							0.063	0.670	
456	Sn	A2	無	95.200	2.760			0.680				0.065	1.300	
632	Sn	A2	無	98.450	0.770							0.066	0.720	
431	Sn	A2	無	96.790	1.380							0.067	1.760	
813	Sn	A2	無	97.840	0.140							0.074	1.950	
822	Sn	A2	無	98.540	0.520							0.079	0.860	
590	Sn	A2	無	99.670	0.250							0.079		
94	Sn	A2	無	99.160	0.190							0.080	0.560	
868	Sn	A2	無	99.820	0.090							0.082		
290	Sn	A2	無	99.010	0.500							0.084	0.410	
166	Sn	A2	無	99.910								0.088		
459	Sn	A2	無	97.960	0.740							0.090	1.200	
806	Sn	A2	無	99.900								0.100		
46	Sn	A2	無	99.310	0.590							0.100		
862	Sn	A2	無	99.580	0.320							0.110		
83	Sn	A2	無	99.820	0.340							0.110	0.740	
175	Sn	A2	無	98.790	0.450							0.120	0.640	
373	Sn	A2	無	99.780	0.200							0.120		0.900
646	Sn	A2	無	97.830								0.120	2.050	
352	Sn	A2	無	99.750	0.120							0.130		
412	Sn	A2	無	99.200	0.090							0.140	0.580	
358	Sn	A2	無	99.320								0.140	0.540	
361	Sn	A2	無	95.970	2.690							0.200	1.140	
65-1	Sn	A2	無	97.750	1.510							0.680		0.065
90	Sn	A2	無	97.700	1.520							0.730		0.060
87	Sn	A2	無	97.130	1.410							0.990		0.110
585	Sn	A2	無	100.000				0.350						
906	Sn	A2	無	100.000										
91	Sn	A2	無	97.380	2.110								0.510	
443	Sn	A2	無	97.260	1.800								0.940	
423	Sn	A2	無	98.890	1.110									
860	Sn	A2	無	98.630	0.530				0.380				0.460	
882	Sn	A2	無	98.810	0.420				0.260				0.510	
838	Sn	A2	無	99.650	0.350									
841	Sn	A2	無	99.650	0.350									
11	Sn	A2	無	98.530	0.210		0.250						1.010	
899	Sn	A2	無	99.790	0.210									
819	Sn	A2	無	99.850	0.150									
302	Sn	A2	無	98.120	0.120				0.330				1.430	
378	Sn	A2	無	98.350	0.120				0.250				1.290	
364	Sn	A2	無	98.770					0.220				1.010	
441	Sn	A2	無	98.780					0.220					
284	Sn	A	茶陶	99.860	0.100							0.041		
10	Sn	A	茶陶	98.260	0.510							0.044	1.080	0.100
409	Sn	A	茶陶	99.530	0.430							0.044		
698	Sn	A	茶陶	98.740	0.970							0.049	0.240	
867	Sn	A	茶陶	98.860	1.090							0.049		
735	Sn	A	無	98.450	0.600							0.051	0.900	
339	Sn	A	無	99.040	0.900							0.061		
350	Sn	A	無	98.430	0.320							0.062	1.190	
602	Sn	A	無	99.940								0.064		
80	Sn	A	無	99.350	0.073	0.490						0.077		
382	Sn	A	無	98.100		0.520						0.081	1.300	
142	Sn	A	無	98.420	0.240							0.086	1.250	
599	Sn	A	無	99.590	0.280							0.130		
619	Sn	A	無	99.340	0.130							0.170	0.350	
400	Sn	A	無	97.080								0.190	2.720	
861	Sn	A	無	98.310	0.130			0.330					1.230	
844	Sn	A	無	98.820	0.120	0.500							0.450	
869	Sn	A	無	99.140	0.860									
85	Sn	A	無	99.790				0.210						
823	Sn	A	無	97.140	1.870								0.990	
105	Sn	A	無	94.500	4.800				0.710					
654	Sn	A	無	95.860	2.550				0.370				1.230	
368	Sn	A	無	96.570	2.650				0.780					
372	Sn	A	無	98.140	0.990								0.880	
307	Sn	A	無	98.220					0.470	0.700			0.610	
843	Sn	A	無	98.370					0.420				1.210	
334	Sn	A	無	98.650	0.170				0.250				0.930	
617	Sn	A	無	99.700					0.300					
603	Sn	B	茶陶	98.260	0.510					1.050		0.039		0.140
325	Sn	B	灰陶	99.590										0.052
311	Sn	B	灰陶	99.580	0.340				0.360					0.080
93	Sn	B	灰陶	99.910										0.090
457	Sn	B	無	99.830										0.170
408	Sn	B	無	99.430	0.390									0.180
811	Sn	B	無	99.790										0.210
424	Sn	B	無	99.270								0.076		0.660
365	Sn	B	無	99.180	0.150								0.670	
688	Sn	B	無	96.780	0.950				0.620				1.660	
295	Sn	B	無	97.060	0.200									1.860
890	Sn	B	無	95.830					1.060				0.630	2.480

第Ⅵ章 戦場遺跡出土銃弾の分類と検討

遺物番号	分類	栓	Pb	Fe	Bi	Ta	Ti	Mn	Re	Sb	Hf	Cu	Sn	Zn
604	Sn	B	無	96.400	0.120		0.800							
329	Sn	B	無	99.140	0.530									
633	Sn	B	無	99.440		0.250						0.110	0.220	2670
211	Sn	B	無	99.170	0.210		0.270						0.320	
351	Sn	B	無	98.360	0.760		0.240						0.340	
740	Sn	B	無	98.250	0.610		0.220						0.640	
881	Sn	B	無	98.470	1.480							0.051	0.920	
663	Sn	B	無	99.900								0.100		
326	Sn	B	無	100.000										
631	Sn	B	無	99.570	0.430									
768	Sn	B	無	100.000										
722	Sn	B	無	100.000										
89	Sn	B	無	99.420	0.210		0.360							
398	Sn	B	無	100.000										
422	Sn	B	無	97.810	2.190									
210	Sn	B	無	100.000										
393	Sn	B	無	100.000										
395	Sn	B	無	100.000										
685	Sn	B	無	100.000										
701	Sn	B	無	100.000										
760	Sn	B	無	100.000										
406	Sn	B	無	99.900	0.100									
466	Sn	B	無	99.860	0.140									
624	Sn	B	無	99.860	0.140									
630	Sn	B	無	99.860	0.140									
903	Sn	B	無	99.840	0.160									
308	Sn	B	無	99.820	0.180									
346	Sn	B	無	99.780	0.220									
310	Sn	B	無	99.660	0.084		0.250							
878	Sn	B	無	99.660			0.340							
405	Sn	B	無	99.540	0.100		0.360							
493	Sn	B	無	99.500	0.500									
321	Sn	B	無	99.480	0.520									
715	Sn	B	無	99.440	0.560									
420	Sn	B	無	99.440	0.120						0.450			
649	Sn	B	無	99.320	0.680									
355	Sn	B	無	99.170	0.830									
759	Sn	B	無	99.120		0.530	0.350							
499	Sn	B	無	99.080	0.550		0.360							
731	Sn	B	無	98.770	1.230									
779	Sn	B	無	98.660	1.340									
606	Sn	A2/B	木	99.220	0.630			0.100				0.048		
319	Sn	A2/B	茶陶	99.830	0.120							0.048		
281	Sn	A2/B	茶陶	99.130	0.830							0.050		
387	Sn	A2/B	茶陶	99.840	0.110							0.054		
870	Sn	A2/B	茶陶	99.660								0.070	0.270	
335	Sn	A2/B	茶陶	98.870	0.130							0.073	0.930	
143	Sn	A2/B	茶陶	99.920								0.081		
69	Sn	A2/B	茶陶	99.170	0.079							0.089	0.660	
140	Sn	A2/B	茶陶	98.970	0.940							0.090		
362	Sn	A2/B	茶陶	99.160	0.089							0.090	0.660	
873	Sn	A2/B	茶陶	98.580	0.410							0.090	0.920	
232	Sn	A2/B	茶陶	99.910								0.090		
804	Sn	A2/B	茶陶	98.140	0.190					0.300		0.100	1.280	
16	Sn	A2/B	茶陶	98.070								0.110	1.820	
331	Sn	A2/B	茶陶	99.270								0.110	0.620	
332	Sn	A2/B	茶陶	97.210	1.200							0.110	1.470	
209	Sn	A2/B	茶陶	99.710	0.160							0.130		
872	Sn	A2/B	茶陶	99.280	0.150							0.130	0.440	
64	Sn	A2/B	茶陶	97.370	0.850							0.140	1.640	
671	Sn	A2/B	茶陶	99.600	0.180							0.220		
662	Sn	A2/B	茶陶	95.860	2.220							0.290	0.980	0.054
652	Sn	A2/B	茶陶	99.950	0.046									
856	Sn	A2/B	茶陶	99.660			0.340							
418	Sn	A2/B	茶陶	98.780	0.400		0.250						0.570	
228	Sn	A2/B	茶陶	98.540	0.140		0.420						0.900	
694	Sn	A2/B	茶陶	98.270	0.300	0.500							0.930	
415	Sn	A2/B	茶陶	100.000										
494	Sn	A2/B	茶陶	100.000										
470	Sn	A2/B	茶陶	99.740										
842	Sn	A2/B	茶陶	99.130	0.190		0.290							
379	Sn	A2/B	灰陶	96.840	1.010							0.046	0.380	
607	Sn	A2/B	無	99.900	0.100								2.110	
458	Sn	A2/B	無	99.850	0.150									
750	Sn	A2/B	無	99.500			0.500							
316	Sn	A2/B	無	93.700	0.400	0.540		1.660						3.700
650	Sn	A2/B	無	100.000										
808	Sn	A2/B	無	100.000										
810	Sn	A2/B	無	100.000										
437	Sn	A2/B	無	99.760	0.240									
893	Sn	A2/B	無	99.670	0.150				0.180					
407	Sn	A2/B	無	99.670			0.330							
901	Sn	A2/B	無	97.450	2.050		0.500							
141	Sn	A2/B	無	100.000										
383	Sn	A2/B	無	100.000										
680	Sn	A2/B	無	100.000										
664	Sn	A2/B	無	99.860					0.140					
832	Sn	A2/B	無	99.780			0.220							
370	Sn	A2/B	無	99.640	0.360									
219	Sn	-	灰陶	98.170	0.890							0.078	0.800	0.067
386	Sn	-	灰陶	99.450			0.550							
450	Sn	-	灰陶	94.490	1.850							0.054	3.610	
757	Sn	-	灰陶	99.820	0.180									
279	Sn	-	灰陶	98.070			0.240						1.690	
425	Sn	-	灰陶	99.730	0.210							0.067		
363	Sn	-	灰陶	99.090	0.190							0.076	0.650	
461	Sn	-	灰陶	97.270	1.760		0.330						0.640	
692	Sn	-	灰陶	97.330	0.470		0.430				0.670		1.090	

Pb鉛 Fe鉄 Cu銅 Snスズ Taタンタル Biビスマス Tiチタン Zn亜鉛 Mnマンガン Reレニウム Sbアンチモン Hfハフニウム

第14表 蛍光X線による横平山戦跡出土エンフィールド銃弾分析値

遺物番号	分類	栓	Pb	Fe	Ti	Bi	Zn	Mn	Re	Sb	Hf	Cu	Ta	Sn	備考
877	En	b	木	99.720	0.280										
478	En	b	木	99.680	0.320										
593	En	b	木	99.600	0.400										
626	En	b	木	99.940	0.064										
902	En	b	木	99.930	0.071										
509	En	b	木	99.900	0.100										
360	En	b	木	99.820	0.180										
41	En	b	木	99.360	0.640										
773	En	b	木	99.370	0.630										
452	En	b	木	99.550							0.450				
620	En	b	木	99.500	0.079						0.420				
68	En	b	茶	83.420	0.210							0.009		16.280	鋳直し
287	En	b	-	97.850	1.560							0.040		0.540	鋳直し
896	En	b	-	99.620	0.140								0.240		鋳直し
874	En	b	-	94.760	0.170							2.130		2.940	
724	En	b	-	96.260								0.110		3.630	
507	En	b	-	100.000											鋳直し
304	En	b	-	100.000											
344	En	b	-	100.000											
444	En	b	-	100.000											
723	En	b	-	100.000											
876	En	b	-	100.000											
353	En	b	-	100.000											
62	En	b	-	100.000											
81	En	b	-	100.000											
174	En	b	-	100.000											
293	En	b	-	100.000											
296	En	b	-	100.000											
391	En	b	-	100.000											
446	En	b	-	100.000											
522	En	b	-	100.000											
523	En	b	-	100.000											
613	En	b	-	100.000											
614	En	b	-	100.000											
445	En	b	-	99.730										0.270	
421	En	b	-	99.780										0.220	
829	En	b	-	99.770										0.230	
886	En	b	-	99.770										0.230	
887	En	b	-	99.650	0.071									0.280	
751	En	b	-	99.800										0.200	
848	En	b	-	99.910	0.090										
465	En	b	-	99.880	0.120										
690	En	b	-	99.870	0.130										
908	En	b	-	99.860	0.140										
170	En	b	-	99.830	0.170										
426	En	b	-	99.830	0.170										
318	En	b	-	99.660	0.340										
571	En	-	-	96.750	0.430							0.069		2.750	鋳直し
101	En	-	-	100.000											
565	En	-	-	100.000											
752	En	-	-	100.000											
756	En	-	-	100.000											
909	En	-	-	99.650										0.350	
636	En	-	-	99.890	0.110										
282	En	a	木	100.000											
380	En	a	木	100.000											

#### 4 考察

まず、スナイデル銃の銃弾についてである。鉛(Pb)以外に検出された成分は、鉄(Fe)・銅(Cu)・錫(Sn)・亜鉛(Zn)である。このうち鉄(Fe)は、弾に含まれる成分である可能性のほか、弾が銃腔内を通過する際に付着した可能性が最も高いと考えられる。注目されるのは銅・錫・亜鉛である。このうち、銅と錫はスナイデル銃の弾のうちA類に分類されるものから検出される傾向があり、B類からはほとんど検出されていない。逆にB類からは、A類ではほとんど検出されていない亜鉛が検出される傾向にある(第13・15表)。これは横平山戦跡の銃弾に顕著である。全体としてみれば、B類は鉛・鉄以外の成分の混入が少ないといえる(第17表)。薬莖は銅と亜鉛を主成分としている(第16表)。文献資料(Purdon1990)にもスナイデル銃の薬莖は「真鍮(銅と亜鉛の合金)」と記されており、それを裏付けている。A類の銅が薬莖に由来するものであれば亜鉛との相関関係が認められ、当然亜鉛も検出されなければならないが、A類ではそれが認められない。A類の銅は薬莖に由来するものではなく、弾そのものに由来すると考えられる。このようなA類とB類に使用された鉛を主とする金属成分が異なる原因の一つとしては、鉛の製錬・精錬の方法の違いにあると考えられるだろう。比較試料のうち、GYOKU002~005は、エンフィールド銃やスナイデル銃以前の古式の銃(火縄銃)に使用されたと思われる弾で、日本国内で生産されたと考えられるものである。これらは、僅かに鉄や銅を含むが(鉄は銃腔内の付着の可能性あり)、ほぼ100%に近い鉛製である(第18表)。スナイデル銃弾のB類は亜鉛を僅かに検出するが、A類と比較すると鉛(鉄)以外の成分検出が少ない。鉛の含有量は横平山戦跡A類が98.754%、B類が99.249%、半高山戦跡A類98.829%、B類99.467%とB類の純度が高いことが分かる。これは、比較試料と同様の傾向を示す。また、英国の文献では、A類の弾は確認できるもののB類が確認できないとのことである<sup>(3)</sup>。これらのことから、スナイデル銃の弾の

第15表 蛍光X線による半高山戦跡出土エンフィールド銃弾分析値

遺物番号	分類	栓	Pb	Fe	Bi	Ta	Ti	Mn	Re	Sb	Hf	Cu	Sn	Zn
5136	Sn	A1	茶陶	99.18	0.77							0.048		
808	Sn	A1	茶陶	98.53	0.66							0.04	0.77	
5005	Sn	A1	茶陶	99.39									0.61	
609	Sn	A1	茶陶	99.33	0.67									
573	Sn	A1	無	96.25	2.94			0.74						0.081
1058	Sn	A1	無	99.1								0.084	0.82	
1380	Sn	A2	無	100										
1264	Sn	A2	無	99.33	0.6							0.071		
5106	Sn	A2	無	99.66	0.29							0.049		
1443	Sn	A2	無	98.82	0.77							0.059	0.35	
1265	Sn	A2	無	97.1	2.21			0.4				0.046	0.24	
1047	Sn	A2	無	99.43	0.51							0.06		
1294	Sn	A2	無	99.16								0.048	0.79	
5164	Sn	A2	無	99.87	0.069							0.059		
1258	Sn	A2	無	97.63	2.09							0.063	0.22	
5170	Sn	A2	無	100										
1214	Sn	A2	無	99.37	0.063							0.084	0.49	
5037	Sn	A2	無	99.67	0.12							0.21		
5025	Sn	A2	無	100										
467	Sn	A2	無	98.35	1.27							0.056	0.33	
1061	Sn	A2	無	99.22	0.27							0.046	0.47	
1224	Sn	A2	無	98.77	0.29							0.1	0.84	
1216	Sn	A2	無	96.63	3.27							0.1		
5002	Sn	A2	無	98.82	0.71									0.47
1089	Sn	A2	無	97.16	1.38							0.041	1.42	
5041	Sn	A2	無	98.38	1.57							0.048		
1423	Sn	A2	無	98.81	0.1							0.1	0.99	
479	Sn	A	茶陶	99.77	0.18							0.05		
1135	Sn	A	茶陶	99.29	0.21		0.45					0.051		
1238	Sn	A	灰陶	99.23	0.77									
5143	Sn	A	無	98.5	1.16								0.34	
1223	Sn	A	無	99.37	0.63									
468	Sn	A	無	99.08	0.44									0.48
1178	Sn	A	無	99.33	0.41	0.26								
5138	Sn	A	無	98.25	0.74							0.059	0.95	
341	Sn	A	無	96.24	1.1							0.13	1.98	
1087	Sn	A	無	99.09			0.55					0.043	0.86	
5168	Sn	A	無	98.71	0.45							0.11	0.73	
1011	Sn	A	無	99.52								0.041	0.44	
1351	Sn	B	灰陶	100										
1006	Sn	B	無	99.48	0.47							0.053		
226	Sn	B	無	99.81	0.19									
462	Sn	B	無	100										
1274	Sn	B	無	99.86	0.14									
1097	Sn	B	無	100										
1094	Sn	B	無	98.77	0.47							0.055	0.71	
1430	Sn	B	無	98.97	0.18							0.85		
5103	Sn	B	無	100										
1409	Sn	B	無	98.64	1.35									
588	Sn	B	無	98.23	1.77									
525	Sn	B	木	99.85					0.15					
5153	Sn	A2/B	茶陶	98.88	0.32				0.22		0.58			
5171	Sn	A2/B	茶陶	97.47	2.53									
748	Sn	A2/B	茶陶	99.18	0.28								0.53	
791	Sn	A2/B	茶陶	99.11	0.48							0.21		0.2
1269	Sn	A2/B	無	99.01	0.41							0.058	0.53	
1059	Sn	A2/B	無	100										
5036	Sn	A2/B	無	98.6	0.41					0.37			0.61	
1096	Sn	A2/B	無	99.25									0.75	
1457	Sn	A2/B	無	98.78	1.22									
1134	Sn	-	灰陶	98.65	0.53			0.38				0.071	0.37	
1416	Sn	-	灰陶	95.49	3.74								0.27	
1082	Sn	-	無	98.22			0.5					0.069	1.42	0.3
1064	Sn	-	無	99.64	0.36									

遺物番号	分類	栓	Pb	Fe	Bi	Ta	Ti	Mn	Re	Sb	Hf	Cu	Sn	Zn
1235	En	b	無	100										
749	En	b	無	100										

うちA類は外国産、B類は日本国産と推定できよう。

エンフィールド銃の弾はほぼ100%鉛製品といえる結果となったが、この中の5点から銅と錫が検出された。この成分の傾向は、スナイドル銃の弾A類に共通している。調査担当者の観察所見からはこのうち3点(No.68、No.287、No.571)は鑄直した弾であることが確認されており、スナイドル銃弾A類を鑄直したのと考えられる。弾薬に困窮した薩摩軍は田原坂・吉次峠の戦いにおいて、官軍が放った弾を村民に拾わせ、1個二厘五毛で買い取ったという伝承がある<sup>(4)</sup>。スナイドル銃を使用したのが官軍のみとは限らず、またエンフィールド銃を使用したのが薩摩軍のみとは限らないが、薩摩軍が戦場において金属・弾を収集し弾を製造したということを裏付ける一つの手がかりとなろう。

第16表 蛍光X線による横平山戦跡出土スナイドル薬莢分析値

No.	遺物名	Pb	Fe	Bi	Ta	Ti	Mn	Mo	Ni	Co	Zr	Cu	Zn	Sn
342	スナイドル薬莢	1.760	7.140			0.870		0.033				83.600	6.600	
801	スナイドル薬莢	1.660	15.420			0.660	0.170	0.036				70.150	11.740	0.170
803	スナイドル薬莢	0.560	2.200					0.02				88.700	8.220	0.300
86	スナイドル薬莢	0.360	1.560			0.180	0.029					94.750	3.130	
483	スナイドル薬莢	1.300	50.860			1.030	0.120					43.030	3.480	0.170
485	スナイドル薬莢	6.790	50.160			1.570	0.180			0.430	0.110	36.940	3.820	
577	スナイドル薬莢		96.710			0.360	0.089			0.500	0.025	1.860	0.460	
766	スナイドル薬莢	0.780	0.610					0.021				89.890	8.690	
764	スナイドル薬莢	0.780	0.930			0.130		0.038	0.061			85.720	12.210	0.140
781	スナイドル薬莢	0.470	0.430					0.042	0.100			76.690	22.270	
149	スナイドル薬莢	0.540	5.730			0.880	0.100	0.032	0.043			80.190	12.480	
487	スナイドル薬莢	0.090	88.370			0.380						10.700	0.450	

第17表 スナイドル銃弾における型別主要元素の発現率及び平均含有率

## 横平山戦跡

	Cu		Sn		Zn	
	発現率 (個)	平均含有率 (%)	発現率 (個)	平均含有率 (%)	発現率 (個)	平均含有率 (%)
スナイドルA類	66.66% (62/93)	0.125	50.53% (47/93)	0.96	5.37% (5/93)	0.247
スナイドルB類	9.43% (5/53)	0.075	11.32% (6/53)	0.512	24.52% (13/53)	0.84

## 半高山戦跡

	Cu		Sn		Zn	
	発現率 (個)	平均含有率 (%)	発現率 (個)	平均含有率 (%)	発現率 (個)	平均含有率 (%)
スナイドルA類	69.23% (27/39)	0.07	53.84% (21/39)	0.69	2.56% (1/39)	0.19
スナイドルB類	17.64% (3/12)	0.319	8.3% (1/12)	0.71	0% (0/12)	0

第18表 蛍光X線による比較資料分析値

資料名	資料番号	Pb	Sn	Fe	Cu	Ni	Mo	Co	所見・備考
粗製脇差金具 (縁金鐔側)	GYOKU001	63.180	36.320	0.200	0.310				鉛・錫 (ハンダめっき) 合金
粗製脇差金具 (頭金・柄頭側)	GYOKU001 - 2	56.110	43.280	0.380	0.240				鉛・錫 (ハンダめっき) 合金
火縄銃弾 (A 烏口伝世品)	GYOKU002	99.420		0.580					鉛製
火縄銃弾 (B 革袋伝世品)	GYOKU003	99.950			0.053				鉛製
4匁5分玉 (会津鶴ヶ城採集品)	GYOKU004	99.730		0.270					鉛製
4匁5分玉 (会津鶴ヶ城採集品)	GYOKU004 - 2	99.830		0.170					鉛製
鉄砲弾 (白色 223)	GYOKU005	99.340		0.660					鉛製
鉄砲弾 (三十年式 - 1)	GYOKU006	1.810		0.280	79.110	18.560	0.230	0.230	銅製 (所謂白銅)
鉄砲弾 (三十年式 - 2)	GYOKU007	0.075		0.140	82.440	17.230	0.011	0.120	銅製 (所謂白銅)

## 5 まとめ

今回の分析で、スナイドル銃の銃弾には外国産と国内産の二者がある可能性が高まった。政府の海外からの弾薬調達に動きが見られるのは3月末である<sup>(5)</sup>。経過からすると、官軍は開戦当時から外国産・国内産の両者の弾薬を使用したようである。また、外国産の銃弾を薩摩軍も使用していたとすれば、薩摩軍が開戦時あるいは戦中にどのような物資の調達を行ったかをより詳細に知る手がかりになるだろう。

エンフィールド銃の銃弾の成分がほとんど一定であり、かつその中に鑄直した弾が確認できたことも成果である。山田拓伸による銃弾の分析成果では、薩摩軍が使用した銃弾は鉛を使用したものから、青銅、鉄を主成分にするものまであり、銃弾に困窮した薩摩軍が金属を収集して銃弾を補給したことを伺わせる(山田2005)。山田が分析した銃弾は、西南戦争も中・終盤を迎え薩摩軍には敗戦色が濃くなり始めた黒土峠・和田越等で採集されたもので、西南戦争初期の戦場である横平山戦跡・半高山戦跡出土の銃弾とは対照的な結果である。横平山戦跡出土のエン

フィールド銃弾の分析結果は、これらが薩摩軍のものとするれば薩摩軍がまだある程度物資を蓄えた中で戦っていたこと、しかしながら余裕がさほどあったわけではないこと、田原坂一帯での激戦は薩摩軍に物資の面で大きな打撃を与えた可能性が高いことを示唆する。

このような戦跡ごとの銃弾の分析と陣営の関係の解明が進めば、西南戦争における両軍の戦況をより克明に描く手がかりになるだろう。

註

- (1)三月二十四日には山縣有朋は各団に弾の無駄な使用を控えるように、そして「漸次後装銃ヲ以テ夜比耳銃ニ交換シ以テ弾薬缺乏ニ備フ可シ」と発している。四月二十三日、弾薬の窮状に対し西郷従道は「…後装銃ノ外ニモ小銃弾薬ノ準備ハ整ヘリ」と発している。また、官軍がその日の戦果として略奪した薩摩軍の銃及び弾薬量の記録が記されており、官軍は様々な火器を使用した可能性が高い。『征西戦記稿』卷廿四 1-3頁、『明治十年征討軍団記事 全』97頁
- (2)ただし、官軍が横平山を占領するまで、山腹・山麓各所の『壘(とりで)』は争奪を繰り返した模様であり、また官軍の横平山占領後の三月十七日には、官軍第十四聯隊第二大隊第三中隊が横平山を守って戦ったとされる。『征西戦記稿』卷六～八
- (3)B.A.Temple『The Boxer Cartridge in the British Service』にはスナイドルB類の記載は無いが、陸軍士官学校の『兵器学教程 卷一』には同弾薬が図入りで示されている。
- (4)実際、戦闘開始から間もない3月7日には、官軍・薩摩軍ともに弾薬に困り後退したり、攻撃に出られずにいる。『征西戦記稿』卷七 9頁
- (5)山縣有朋から鳥尾小弥太他への報せ。「(三月)三十一日・略・聞ク印度地方屯在ノ英国兵ハ後装銃ヲ携帯スト其弾薬ヲ購買スル能ハサルカ且ツ香港上海等ヘモ着手アリタシ・略・」。『征西戦記稿』卷廿四 3頁

参考文献

- Charles J.Purdon The Snider-Enfield Rifle(NY:Museum Restoration Service1990)
- 山田拓伸 2005「銃弾の分析」『西南戦争之記録 第三号』西南戦争を記録する会
- 参謀本部陸軍部編纂課編 1887『征西戦記稿』陸軍文庫
- 参謀本部陸軍部編纂課著・高野和人編 1997『明治十年 征討軍団記事 全』青潮社
- B.A.Temple 1977『The Boxer Cartridge in the British Service』(Brisbane:Watson Ferguson and Co,1977)
- 陸軍士官学校編 1895『兵器学教程 卷一』陸軍士官学校

## 西南戦争関係の出土遺物

浅川 道夫

今回、玉東町における一連の西南戦争遺跡の発掘調査により、戦闘に拘わる多数の遺物が出土した。これらの遺物は、戦闘の実相を直接的に物語る物証であり、従来文書史料と地表からの現地観察によってのみ解説されて来た戦史を、実証的に敷衍するための新たな材料といえる。玉東町の西南戦争遺跡は、征討軍の砲兵陣地である二俣砲台跡と、野戦の戦跡である横平山ならびに半高山・吉次峠戦跡に大別される。本稿では、この区分にしたがって、それぞれの出土遺物の大要を述べたい。

### 二俣瓜生田・古閑官軍砲台跡

二俣砲台には8門の火砲が配備され<sup>(1)</sup>、谷を挟んだ対岸の田原坂に砲撃を加えたといわれる。征討軍では、当初砲兵隊の出征にあたって全隊を山砲編成としており<sup>(2)</sup>、四斤山砲が標準装備されていた。四斤山砲は、前装施条式の青銅砲で、その諸元は砲身長96cm、口径86.5mm、口綫6条、全備重量218kg、最大射程2600mである。砲の操作は、砲手3名と照準手1名で行う。このうち撞薬杖を持った砲手1名が砲口前に位置して弾薬を装填し、照準手が砲尾の火門孔に摩擦管を挿して発火させる。発砲時、砲が砲架ごと後退するので、次弾の装填と再照準にあたっては砲を複座させなければならない。二俣瓜生田砲台跡から検出された遺構(硬化面と轍痕)は、こうした四斤山砲の操作過程と合致している。因みに同砲の「車轍ノ距離」は74cmとされ<sup>(3)</sup>、後退・複座の繰り返しに伴う痕跡の重複によって生じた誤差を考慮すると、2条の轍痕の実測値と概ね一致しているといえよう。

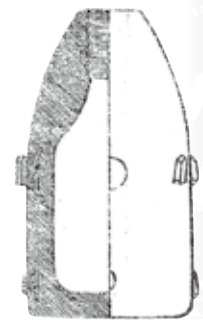
発火に際して用いられる摩擦管は、瓜生田・古閑の両砲台跡で多数出土しており、その中には、環線(ワイヤーループ)を横方向に引く「L字型」と、縦方向に引く「I字型」が混在する。前者は1860年代に米・英軍で採用されていた形式、後者は同時期の仏・蘭軍で採用されていた形式だが、これらが併用された理由については詳らかでない。点火用の環線は、瓜生田砲台跡で1点出土している。また、摩擦管を発火させる際、環線に掛けて引くためのランヤードに付けられていたS字フックも、両砲台跡でそれぞれ1点ずつ出土した。

砲弾については、弾着地点となった対岸の田原坂で、四斤榴弾の弾殻片が見い出されており、二俣砲台から発射された弾種をうかがうことができる<sup>(4)</sup>。四斤榴弾は、垂鉛製箭翼12個が付けられた鑄鉄製の尖頭弾で、黒色火薬の炸薬200gを内蔵した、着発式の炸裂弾である。全備重量は4.035kgで、デマレー式信管を装着し、定装薬300gを用いて発射した。

なお、西南戦争において征討軍が使用した四斤山砲の総数は45門、消費弾薬数は62104発であった<sup>(5)</sup>。この数字をもとに単純計算すると、四斤山砲1門あたりの弾薬消費は平均1380発余となる。二俣官軍本営出張所跡の敷地内から、弾薬庫と思われる石造建物跡が検出されているが、こうした龐大な弾薬消費を考えた時、17日間の田原坂攻防戦においても相当な弾薬の補給と備蓄を要したであろうことが容易に想像でき、それに対応すべく設けられた施設である可能性を否定できない。



第1図 摩擦管(I字型)



第2図 四斤榴弾



第3図 デマレー式信管

※第1～3図の出典  
山中敬叟『砲術新篇11・12』(山城屋佐兵衛1866年)図解第6版

横平山、半高山・吉次峠戦跡

何れの戦跡においても多数の小銃弾が出土しており、征討軍と西郷軍が銃火を交えた痕跡を示している。また、薬莖や雷管が検出されていることから、調査区域内での発砲位置の特定もある程度可能となろう。検出された銃弾の種別を示すと次の表の通りである。

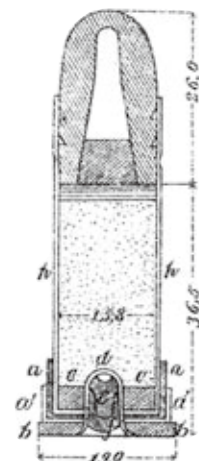
表1 出土小銃弾分類表

種別	横平山	半高山	吉次峠
エンフィールド弾	79	26	-
スナイデル弾	389	1291	12
スペンサー弾	(薬莖 3)	(実包 1、薬莖 23)	-
シャープス弾	3	1	-
和筒の球形弾	-	2	1
不明弾	-	27	-

エンフィールド弾は、イギリスで採用された前装施条式のエンフィールド銃に適合する底部拡張式の尖頭弾(ミニエー弾)で、圧入プラグを用いないタイプ(プリチェット弾)と、木栓ないし陶栓を用いるタイプに区分される。エンフィールド銃は、公称口径0.577インチの外火式小銃で、弾丸と装薬を薬包紙で包んだペーパーカートリッジと銅製の雷帽キャップを使用して射撃を行った。同銃は、弾鑄型で作った弾丸を用いて弾薬包を手製でまかなうことができるため、西郷軍が盛んに使用した。他方、征討軍でも後装銃の弾薬消費をおさえるためにエンフィールド銃を交付し、「遠い処やさぐりうちといふ様な場合は、先ず以てエンフィールドを用ゐ、イザといふ時にスナイデルを有効に用ゐる」<sup>(6)</sup>という使い分けがなされた。因みに征討軍側では、東京の砲兵本廠と大阪の砲兵支廠で製造されたエンフィールド実包の供給を受けており、その総計は1,953万850発(うち294万1780発を消費)に及んだ<sup>(7)</sup>。

スナイデル弾とあるのは、イギリスで開発されたボクサー実包の弾頭をさすもので、各戦跡からの出土数が最も多い。西南戦争で使用された小銃のうち、公称口径0.577インチのスナイデル銃とアルビニー銃に共用された<sup>(8)</sup>。ボクサー実包は、弾頭・装薬・薬莖・雷管を一体化した完全弾薬筒で、発掘調査により弾丸と共に相当数の薬莖が出土している。同実包には、MKI~IXまでのバリエーションがあり、「スナイデルA類」として一括されている出土品を、個々に比定することが今後の課題となろう。ここでは、「スナイデルB類」に分類された弾丸について私見を述べておきたい。この「B類」の弾丸は、弾底凹部が深い柱状に形成されている例品で、イギリスで制式化されたボクサー実包の弾頭には類例をみないものであり、当時日本国内で製造された可能性が考えられる。スナイデル実包の国産化は、東京の砲兵本廠で明治9(1876)年から始まり、西南戦争勃発と同時に製造機械を増設して生産量の拡大が図られた<sup>(9)</sup>。その際、明治10(1877)年2月24日付で発せられた「スナイデル弾々量改定ニ付改定ノ分(弾ノ尖頭稍々鈍ナルモノ)ヲ以テ軍用ニ供スルモノト定メラル」<sup>(10)</sup>との記録がある。もともとスナイデル弾は、弾丸の先端に小木栓を嵌入させたり(MKI~VI)、先端部分を中空に成形(MKVII~IX)したりして、目標に命中した際先端が潰れて殺傷力を高めるマッシュルーミング効果が、より効率的に発揮されるよう設計されていた。「B類」の例品は弾丸の先端部を幾分肉厚にしてこの効果を低減させているようであり、「弾ノ尖頭稍々鈍ナルモノ」とは、そうした設計変更を意味しているものと考えられる。なお、「スナイデルB類」の弾薬筒の制式図は、陸軍士官学校編・刊『兵器学教程』に掲載されている<sup>(11)</sup>。

筒薬弾ルセクホ



第4図 ボクサー実包 (スナイデルB類)

陸軍士官学校「兵器学教程 卷一」  
(陸軍士官学校,1895年)附図第3版。



スペンサー弾は、アメリカで開発された後装連発式のスペンサー銃に適合するものである。スペンサー実包は、弾頭・装薬・縁打式銅製薬莖が一体となった金属弾薬筒であり、公称口径0.52インチで薬莖長の短い「56-56実包」、公称口径0.50インチでボトルネック型薬莖の「56-52実包」と薬莖長が長い「56-50実包」に区分される。出土した薬莖のほとんどは「56-56実包」のもので、「56-50実包」の薬莖が若干混じっている。

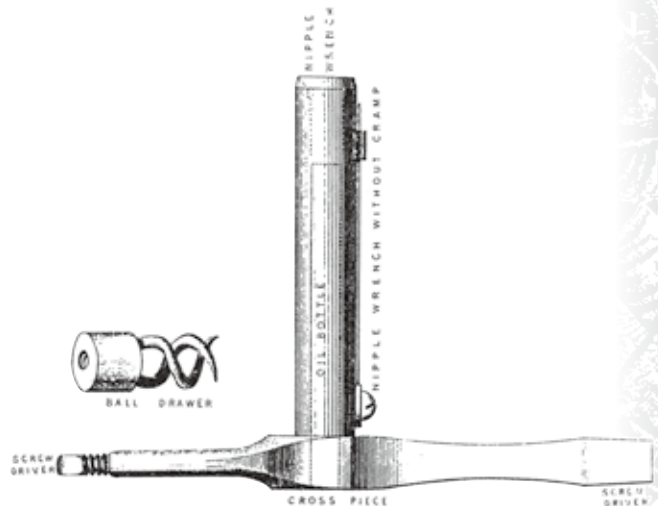
シャープス弾については、何れも公称口径0.52インチの外火式シャープス銃に適合するものである。このタイプのシャープス実包は、装薬をリンネル(または薬包紙)に包んで弾丸に結合した可燃式で、弾鑄型があれば手製で作ることができた。銃本体はアメリカ製だが、弾薬は国産していたと思われる。

砲弾に関しては、横平山と半高山・吉次峠何れの戦跡でも、四斤榴弾の弾殻破片が出土している。また、半高山では球形榴弾用の金属製ヒューズプラグが出土したが、砲弾そのものの弾殻片等は見い出されていない。

その他特筆すべきものとしては、横平山戦跡から出土した、銃口栓(スナイドル銃またはエンフィールド銃用)1点と分解工具2点がある。分解工具のうち1点はイギリス軍制式のT字型工具の部品で、転弾子がねじ込まれた状態で残っている。他の1点はY字型工具で、下端が火門抜きとなった例品である。何れも外火式前装銃の分解・結合に用いられたものと考えられる。

#### 註

- (1) 陸上自衛隊北熊本修親会『新編 西南戦史』(原書房、1977年)227頁。
- (2) 陸軍省『兵器沿革史 第一輯』(陸軍省、1913年)204頁。
- (3) 同上書、192頁。
- (4) 熊本市教育委員会『田原坂 I・II』(熊本市教育委員会、2011・12年)。
- (5) 参謀本部『征西戦記稿 附表』(陸軍文庫、1877年)の「銃砲損廃表」と「弾薬消耗表」による。
- (6) 金子空軒『陸軍史談』(陸軍画報社、1943年)72頁。
- (7) 前掲「弾薬消耗表」による。
- (8) 前掲「弾薬消耗表」にはアルビニー実包が録上されていないことから、西南戦争で使われたアルビニー銃は、スナイドル実包(ボクサー実包)を用いる、エンフィールド銃からの改修型であったと考えられる。
- (9) 工学会『明治工業史 火兵・鉄鋼編』(啓明会、1929年)298頁～299頁。
- (10) 「東京陸軍兵器本廠歴誌稿 前記」(防衛研究所図書館蔵)。
- (11) 陸軍士官学校『兵器学教程 卷一』(陸軍士官学校、1895年)附図第3版。



第5図 小銃用分解工具

Henry James, *Equipment of Infantry* (London: The Superintendent of Her Majesty's Stationery Office, 1866), Plate VI.

## 第七章 病院跡の調査

### 第1節 西南戦争における病院施設

西南戦争では多数の負傷者がでた。戦死者は14,000余人といわれるが、負傷者はその3～5倍といわれている。その負傷者を手当てする施設は戦線の移り変わりと共に各所に設置された。『征西戦記稿』によると前線に小繙帯所、大繙帯所が置かれ、後方に病院が置かれたという。小繙帯所や大繙帯所では、弾を抜く、消毒、骨をつぐといった応急的な手当てが行われた。また、大阪や久留米、長崎といった戦線から離れた病院には重傷者が運ばれ手術等、高度な医療が施されたという。

さて、大激戦地となった玉東町には官軍の繙帯所が置かれた。繙帯所の移り変わりについて『征西戦記稿』の病院繙帯所地名表を元に関係箇所を第19表に示した。これによると玉東町には「西吉次」、「木葉」、「二俣」に大繙帯所。「吉次越」「木葉」に小繙帯所が設置されている。この内、木葉に関しては後述する官軍墓地にも「木葉病院」と刻まれており<sup>(1)</sup>、田原坂や二俣における大激戦の際に治療が行われた場所と推定される。このように戦時において重要な施設であったと思われるが、これまで具体的な検証がなされないままであった。

この章では、官軍が治療施設とした「木葉病院」(繙帯所)について検討を行う。

### 第2節 木葉病院跡の推定

『征西戦記稿』の病院繙帯所地名表によると、木葉には明治10年3月4日に小繙帯所が置かれ、翌日には大繙帯所が置かれている。またその翌日の3月6日には「各隊合併」とあるように第一、第二旅団合併の繙帯所となっている。さらに3月18日に小繙帯所が設置され、以後、4月18日に木葉大繙帯所が熊本城内に移された後、4月22日に閉じるとある。また、3月30日には「正念寺ニ病舎ヲ置ク」との記載が見られる。大小の繙帯所が戦況に応じて細かく移っているようであるが、木葉の各所に繙帯所が設置されたとも考えられる。そこで、繙帯所が設置された場所について考えてみたい。

水野公寿によると、当時大勢の戦傷者を収容できる施設は主に寺院であった。また、大勢の負傷者の収容には周辺民家も使われたと思われる。この中でも現在まで建物が残っている寺院を対象に検証を行いたい。現在、玉東町大字木葉には、正念寺、徳成寺、興隆寺が存在する。しかし、明治33年発行(明治13年7月6日調べ)の『玉名郡村誌』によると肥後国玉名郡木葉町には、正念寺、徳成寺、世尊寺の寺があったという。現在、世尊寺は廃寺となっており<sup>(2)</sup>、検証することが出来ないが、以下に在りし日の姿を記す。

『玉名郡村誌』より抜粋

世尊寺 東西七間、南北十四間四合。面積三畝十一歩。本町南字世尊寺四百十一番地ニアリ。開基創立年月不詳。真言宗ナリ。中世無住の際、修験玉養院了順、豊後国ヨリ来リテ住職ス。于時慶長十八年癸丑四月ナリ。爾米相承、第十世玉養院歎道、明治五年壬申九月修験廃止。是ニ於テ同六年癸酉七月古老ノ伝ニ往古ニ復リ真言宗トナル。

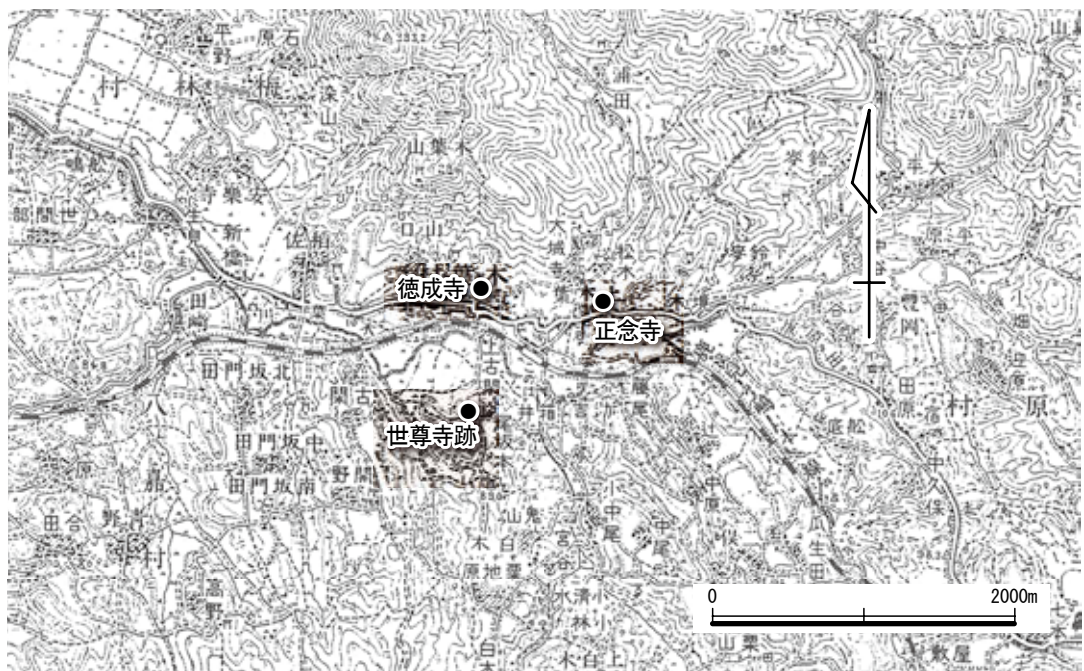
正念寺 東西十三間、南北二十間七合。面積八畝二十九歩。真宗本願寺末派ナリ。町ノ東字土生野ニアリ。承応三年甲午僧祐全開基、熊本西光寺末二属ス。明治十三年庚辰四月本派宗規綱領ニ基キ本山末派直末ニ偏入ス。

徳成寺 東西九間四合、南北三十一間五合。面積九畝二十六歩。真宗本願寺ノ末派ナリ。町ノ中央字寺ノ前ニアリ。明暦元年乙未三月開基、祐円創立。初メ同郡伊倉南方ニ在テ、同所北方来光寺末ヲリ。寛文五年乙己本寺ヲ熊本西光寺ニ改メ、元禄八年乙亥八月故有テ更ニ熊本延寿寺末ニ転ス。同十五年壬午八月今ノ地ニ移リ、後復西光寺末トナル。明治十三年庚辰四月本派宗規綱領ニ基キ本山ノ直末ニ編入ス。

寺の位置関係 正念寺、徳成寺の位置について考えると、いずれも旧三池往還沿いにあり、その間、直線距離にして700mである。正念寺は、旧三池往還に面し木葉山裾部の低地(標高24m)に位置する。戦時の他の関連施設との位置関係を見ると、明治10年3月4日に本営、会計本部がおかれた木葉本営(窪田家)から500m、3月6日に本営がおかれた上木葉(高田家)まで200m余り、本営出張所が置かれた二俣まで約2,000m。また前線であった堺木まで750mの距離にある。そして高月官軍墓地まではわずか400mである。高月官軍墓地には「木葉病院ニテ死亡」と刻まれた墓石が51基ある。

徳成寺については、旧三池往還より少し奥まった木葉山の山麓に位置する。上木葉本営から700m、木葉本営まで400m、前線の置かれた堺木まで1,500mとやや遠く、宇蘇浦官軍墓地は北方300mに位置する。なお、宇蘇浦官軍墓地には「木葉病院ニテ死亡」と刻まれた墓石は40基ある。正念寺、徳成寺とも図版19下に示す「玉名郡木葉町附近両軍配置図」に記載があり当時も存在することは確かである。

世尊寺廃寺は三ノ岳から伸びる尾根の裾部、標高約30mに位置する。正念寺、徳成寺との距離はそれぞれ約1kmである。ちょうど二等辺三角形を成す位置にある。上木葉本営まで1,200m、木葉本営まで700m、堺木まで1,750mである。戦地から少し奥まった位置にある印象を受ける。図版21下「玉名郡白木村両軍配置図」に記載も無いため、当時存在していたかどうかは不明である。大正13年に発行された「戦跡案内」によると徳成寺の紹介があり三つの寺があったことが書かれている。いずれの寺院も前線より少し離れた場所に位置しており、繃帯所が設置されてもおかしくはない。



明治10年寺院の位置(大日本帝国陸地測量部発行 明治33年測図より)



玉東町上木葉より南東方向を臨む（明治十年撮影か？）

3つの寺院の内、正念寺については、前述の『征西戦記稿』にも「病舎ヲ置ク」といった記載がなされるように寺の名前が明示されている。また、軍夫として従軍した五野保萬の日記『明治十年丁丑日記』の3月5日の記載<sup>(3)</sup>には次のようにある。「今日モ雨降り也。或朝護送兵自ラ列人員調査シ、斯テ是ヨリ境木町へ送ル、依テ境木ニ至リ各々散々トナリ、時ニ自ラハ山口県ノ人夫ト当境木ヨリ葉武野（土生野）ノ寺迄、数度官軍ノ手負ヲカツギ、連日ノ雨ニテ道路大ニ悪シ、葉武野ノ寺ニ於テ、陸軍病院官軍ノ傷者ヲ治療アリ、自ラ寺中ニ入、右負傷人ヲ治療手伝シ、該寺ニ手負ノモノ何程ノ数ヲ知ラズ。重傷ノモノ即死ス、軽傷ノモノハ暫時ノ休日ニテ戦地ニ赴ク、即死ハ即チ直ニ埋蘇アリ、時ニ自ラ恐怖ニタエズ、密ニ脱走ヲ極メ、境木ヨリ只独り浦田村ノ谷ニ入り、逃去リ…」この葉武野の寺は、現在小字土生野<sup>はぶの</sup>に所在する正念寺のことである。『征西戦記稿』によると、木葉に繃帯所が設置されるのが3月4日以降であることから正念寺にて戦闘当初から官軍の戦傷者の治療が行われていたことは確かである。

正念寺については当時の写真が残されている。出自は不明であるが、上野彦馬らが撮影したものと思われる。北西側から正念寺本堂と田原坂一帯が写しこまれた遠景写真であり、おそらく、当時の激戦地と主要な施設を記録したものと思われる。

一方、徳成寺についてははっきりとした記載は、大正年間に作られた『戦蹟案内』にあるのみである。史料は少ないものの、伝承も残ることから、正念寺、徳成寺が現存する木葉病院跡と考えてよいだろう。

註

- (1) 官軍墓地の墓石には繃帯所ではなく病院と刻まれる。特に記載の別は無かったのだろう。
- (2) 平成7年の発掘調査では世尊寺推定地（御堂跡）の調査が行われ、18～19世紀末の陶磁器が出土している。
- (3) 高木誠治 校訂1983『明治十年丁丑日記 五野保萬日記 第一輯』

参考文献

- 田邊哲雄 1900『玉名郡村誌』
- 玉東町教育委員会 1995『(伝)世尊寺跡』玉東町文化財調査報告書第3号
- 徳永伊平 1924『田原坂付近戦蹟案内』帝国在郷軍人会木葉分会
- 参謀部・陸軍部『征西戦記稿 附録』青潮社

第19表 玉東町における病院繙帯所地名表及び官軍墓地における木葉病院死者の推移

	大繙帯所	小繙帯所	病院病舎等廃置	備考	宇蘇浦 官軍墓地	高月 官軍墓地
3月1日	西吉次 海馬茶屋		瀬高病院ヲ廃ス			
3月2日		山鹿 下村	福岡城内兵営ニ病院ヲ置ク			
3月3日	高瀬 肥猪町	吉次越 肥猪町 岩村			1	
3月4日	肥猪村 高瀬	木葉 (下村ヲ)				
3月5日	木葉	平山 (海馬茶屋ヲ) 平野村				
3月6日	木葉 各隊合併			田原・二俣の傷者に備え木葉に各隊合併の大繙帯所を設ける	1	
3月7日			久留米ニ病舎ヲ開ク	昨日田原・二俣の激戦あり。 1日100名ほどの負傷者あり。		6
3月8日			高瀬ニ病舎ヲ開ク		1	
3月9日	二俣			木葉・高瀬の両村に埋葬地を選定。	1	1
3月10日			鹿児島ニ仮病院ヲ置ク			1
3月11日				木葉大繙帯所における負傷者176人(死者8人)		5
3月12日		南関				1
3月13日				埋葬地を木葉高高原に設ける。死体が累積。士気に関わる為、病院課に命じて竹垣をつくらせる。		2
3月14日		千葉城 京街ヲ病院ニ合併		田原・吉次から高瀬においての負傷者260余名(刀傷最も多い)。	1	4
3月15日						7
3月16日						
3月17日		境木 (木葉ヲ)	福岡県病院ヲ改メテ第二軍団病院ト称ス			7
3月18日		白石				1
3月19日		木葉 植木 (二俣ヲ)				1
3月20日		境木(高瀬ヲ) 山鹿(平野ヲ) 宮原	八代ニ病院ヲ置キ繁根本ニ病舎ヲ置ク			4
3月21日				二俣小繙帯所を木葉に併せる。		2
3月22日						4
3月23日	山鹿 (肥猪ヲ)				1	5
3月24日		山鹿 (味取ヲ) 野辺田				
3月25日		須田村 鏡町			2	
3月26日		小川 立神村 阿弥陀山		木葉繙帯所における負傷者87人(死者7人)。	6	
3月27日		埋門 七本 (原倉ヲ)				
3月28日		木葉 (南関ヲ) 福岡近傍		木葉病院に病室を築きこの日竣工。さらなる負傷者受け入れのために木葉の負傷者100人を高瀬に送る。	4	
3月29日		味取	鏡町ニ病院ヲ置ク		2	
3月30日	鏡町 (中間ヲ)	小川、豊福、福田、宇土、松橋、三軒屋				
3月31日	山鹿下町 本部	肥前ノ諸地 久具 浦河内 仲田 村山	正念寺ニ病舎ヲ開ク			
4月1日		中田山 宇土 (松橋ヲ)	長崎立山英学校ニ大阪ニ臨時病院ヲ置キ高瀬ニ病舎ヲ置ク	木葉大繙帯所の患者100余名を高瀬に送る。	3	
4月2日					1	
4月3日		日田	福岡病院ヲ閉ツ		1	
4月4日	松橋	橋田 (山鹿ヲ)				
4月5日		辺田 八代	長崎本蓮寺ニ病舎ヲ置ク			
4月6日	松合		松合 別働第1第2旅団合併ニ病院ヲ置ク	木葉における3月6日以降その繙帯所に送られた死傷者を通算すると負傷者1781人(内、死傷者は115人) 死者1115人	6	
4月7日						
4月8日	宇土	松橋 南田島	高瀬ニ第10病舎ヲ開ク		7	
4月9日		隈ノ庄			1	

## 第七章 病院跡の調査

	大繻帯所	小繻帯所	病院病舎等廃置	備考	宇蘇浦 官軍墓地	高月 官軍墓地
4月10日		八代 宇土 隈ノ庄 水次 村				
4月11日		滴水 (七本ヲ) 新開 笹原				
4月12日			長崎ニ病舎ヲ開ク			
4月13日	橋田 (山鹿ヲ) 走潟	下平城 走潟 緑川西岸				
4月14日	東走潟 (第3旅団)	東走潟			1	
4月15日		水前寺 片川瀬 (隈府ヲ)	山鹿病院ヲ廢シ長崎ニ第8 病舎ヲ開ク			
4月16日	中間 八代	大久保 山室 八代 高橋				
4月17日		隈ノ庄 松合 九品寺村				
4月18日	熊本城内 (木葉ヲ) 坪井 隈府	原倉 水次 山室 萩原				
4月19日	住吉 竹迫 見性寺 松院 町 九品寺 隈府 (橋田ヲ)	住吉 保田窪 竹迫 枯木 砂取 大江 高森 片川瀬 井萩				
4月20日	八代 (宇土ヲ)	立田口 小関橋 宮ノ原				
4月21日	砂取 (九品寺ヲ) 大津	下弓削 (竹迫ヲ) 竹迫 大 津 松永 湯舟 杉水	熊本鎮台病院ヲ軍団病院ト 称ス			
4月22日	木葉ヲ閉ツ	長嶺	連隊病室ヲ第2病院ト称ス			
		計			40	51

参謀部・陸軍部「征西戦記稿 付録」の表を抜粋。備考欄は本文中より抜粋  
 ※(〜ヲ)とは、〜を廃止したという意味。  
 ※官軍墓地の数字は玉東町の官軍墓地に刻まれた木葉病院における戦死日をカウントしたもの。

### 第3節 正念寺山門について

#### (1) 正念寺山門に残る銃弾痕

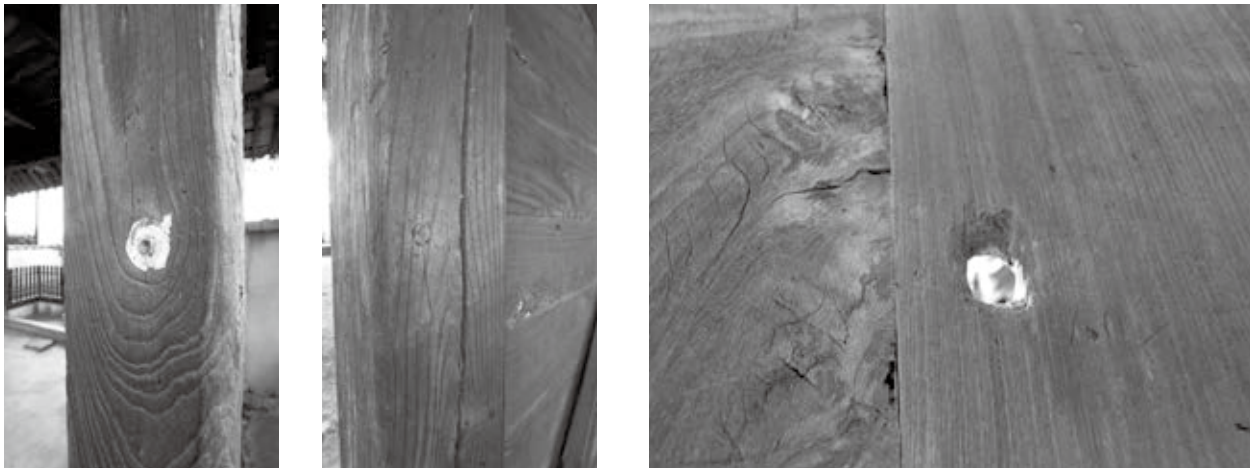
正念寺は戦時に病院繻帯所が置かれたことは前述したとおりだが、明治10年2月22日～3月3日の間は戦場の真っ只中にあった。それを証明するように正念寺の山門には弾痕が残っている。銃弾痕は全部で22箇所であり、その内2つは銃弾が刺さったままになっている。銃弾痕については建造物の調査第92～97図に示す。2つの銃弾は太い柱に喰い込むように残っている。1つは北から南に撃たれたもので、ひとつは西から東へ撃たれたものだ。門や側面には円形にあいた銃弾の貫通痕が残っており、分厚い板材を撃ちぬく程の近距離で銃撃戦があったことを示している。貫通痕より、当時、門は閉められていたものと思われる。



正念寺山門(表)



正念寺山門(裏)



山門に残る銃弾痕

(2) 正念寺山門の石段について

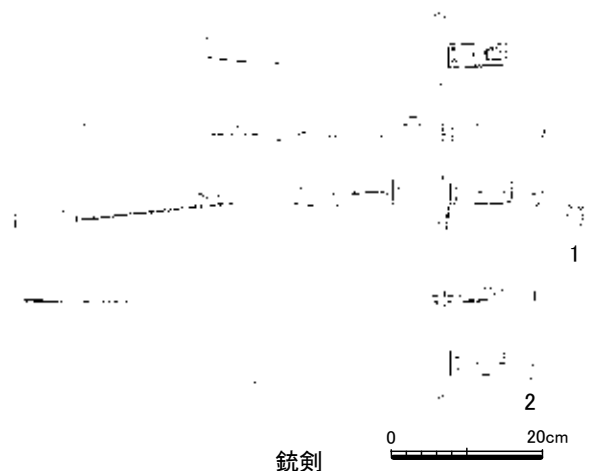
正念寺山門は南に面する。現在、国道208号線(旧三池往還)は山門正面に東西方向に通る、それに接するように9段の石段がある。元住職によると、かつては11段あったそうだが、下2段は国道の舗装によって埋まってしまったらしい。

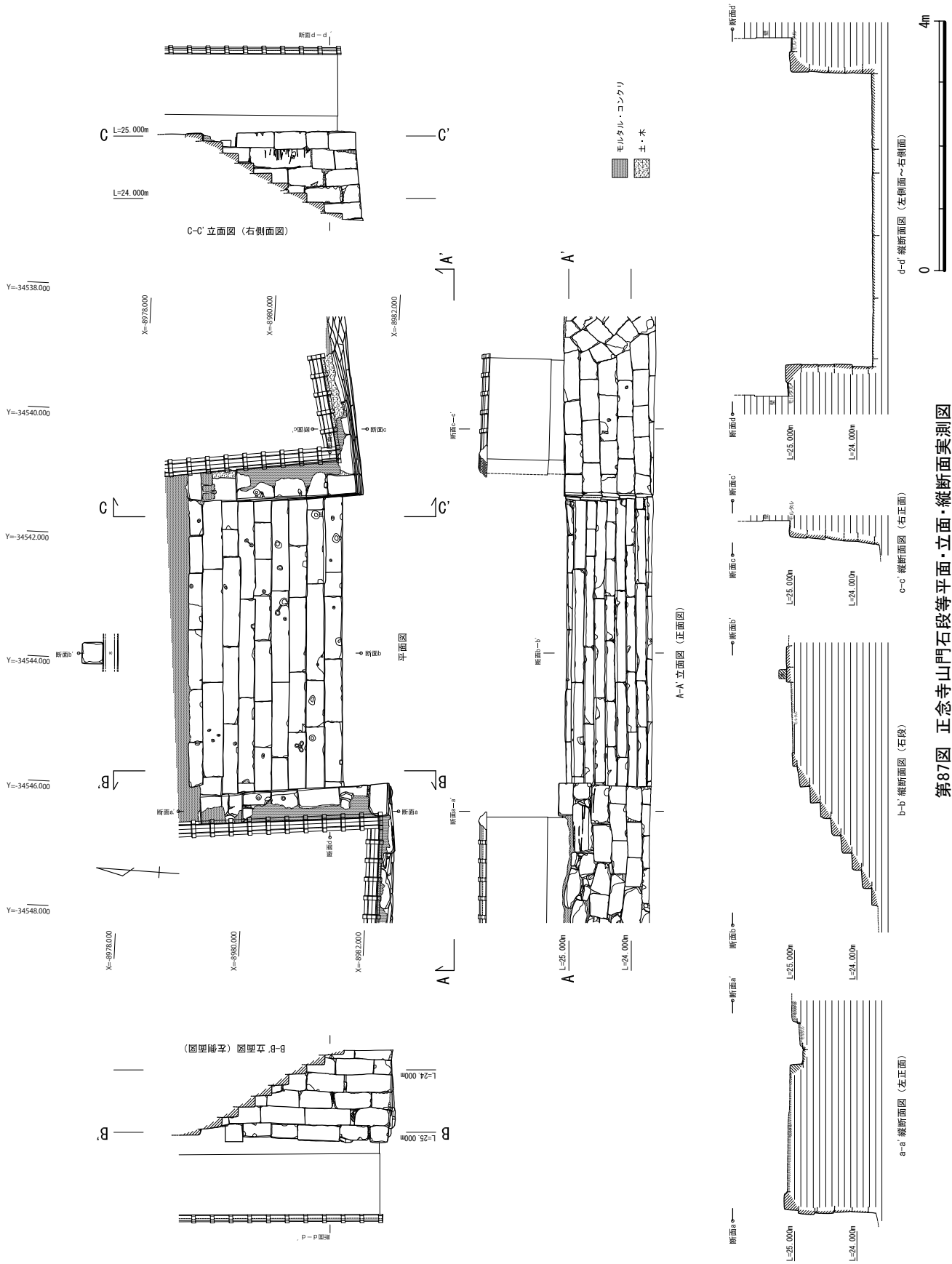
石段は幅4.7m、奥行き2.5mであり、30cm×20cm×120cm程度の直方体の凝灰岩の切石を接いだものである。切石には1つにつき二箇所の矢穴らしきものがある。矢の幅は摩滅によりわかりにくい、約8cmである。石段の表面は経年により滑らかであり、雨溜まりのような凹部が所々に残る。石段の両袖には30cm×30cm×54cm程度の直方体の凝灰岩を垂直方向に積み上げた石垣が積まれる。おそらく石垣は寺域にそって積まれていたと思われるが、現在は途中で切れている。石段・石垣ともに、矢の跡や直方体の石材を利用した構築物であることから江戸時代に造られたものと思われる。伊東龍一によると(177頁)山門の建立年代は文政6(1823)年以前に遡るということであり、付随する石段や石垣は、若干の時期差はあるもののおそらく近い時期に造られたものと思われる。

資料紹介3

ヤタガン式銃剣

1は由来不明であるが、2は木葉地域の民家に保管されていたものである。西南戦争時に使用されていたと思われる銃剣である。全長707mm、剣幅30mm、剣背幅8mm、持ち手の長さ122mm、持ち手の厚み25mmでヤタガン式と呼ばれる。銃先に装着して利用したもので、刃は二重の反りをもつ。鏢には銃口を通す為の21mmの孔があく。鉄製で、柄の部分には革の柄皮が鋸で留められている。





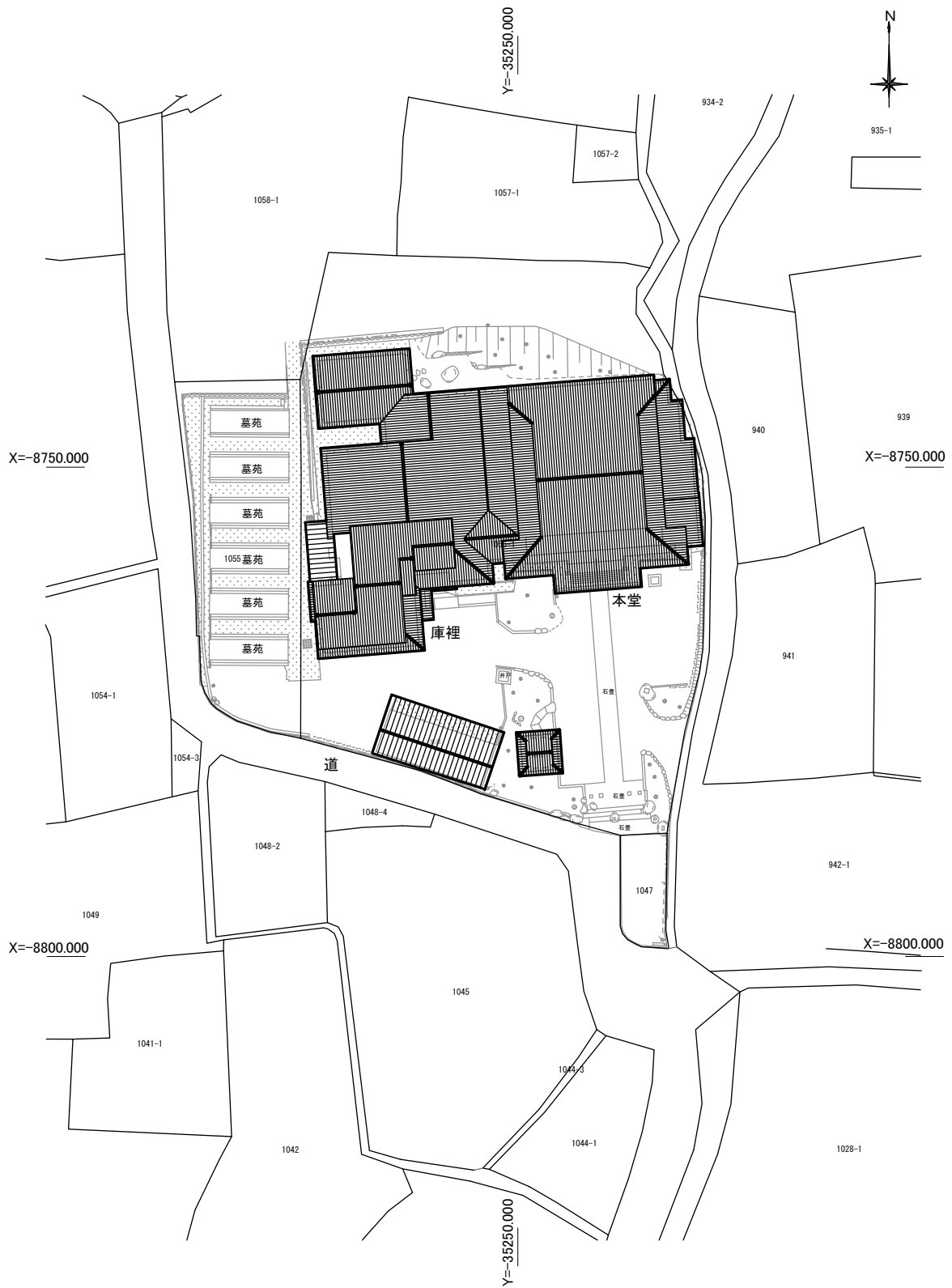
第87図 正念寺山門石段等平面・立面・縦断面実測図





熊本大学伊藤龍一作成図を元に作成。

第88図 正念寺建物配置図



熊本大学伊藤龍一作成図を元に作成。

第89図 徳成寺建物配置図

## 木葉病院の検証－正念寺・徳成寺－建造物の調査

伊 東 龍 一

## 1 霊雨山 正念寺

当寺は、「肥後国誌」によると、真宗西派西光寺の末寺で承応3(1654)年の開基とされる。『玉名郡内田手永寺院本末間数御改帳』には、延享4(1747)年に火災により記録が焼失したと記される。

境内はほぼ南面し、南の境内入口に山門が建ち、その西に鐘楼が建つ。そこから北に参道が伸び、奥に霊堂があり、西側に転法輪堂、西側奥から西尊院と浄土院、東側に庫裡が建つ。

山門

1間1戸、薬医門、切妻造、棧瓦葺である。唐居敷上に親柱(面取り角柱)を立て、控柱(面取り角柱)を方形切石礎石の上に立てる。親柱間に蹴放を入れ、親柱上に冠木を渡す。控柱どうしは虹梁型貫を入れ、柱上に台輪を載せる。これらの上に梁(男梁)を載せ親柱と控柱とつないで、その内に鏡天井を張る。このほか親柱と控柱は、2本の貫で固める。梁は正面側に持ち出して桁を受けるが、持ち出す梁下には繰型のついた持ち送り(女梁)を付ける。妻の梁上には棟束を載せ、棟木を受ける。妻では、この束は断面形状を円形として大瓶東風とし、左右の妻板は縦板張りとする。屋根は一軒、拝懸魚が付く。

現在の建物には、角釘の使用が認められ、部材の経年感も十分にあって、江戸時代後期の特色を備える。文政6(1823)年の『玉名郡内田手永寺院本末間数御改帳』(永青文庫所蔵)によると、寛政以前は「九尺四方」、以降「入七尺五寸 横壱丈五尺」とあって、ほぼ現在に残される。

建物と一致することより、現在の建物の建立年代は、文政6(1823)年以前に遡る可能性がある。なお、明治10(1877)年の銃弾痕が36ヵ所残る。

鐘楼

桁行1間、梁間1間、切妻造、棧瓦葺である。切石で高い基壇を造り、その上に礎石を置いて几帳面取り角柱4本を内に転ばせて立てる。柱下部は足固貫で固める。柱上部は虹梁型頭貫で固め、東に獅子、西に猿、南北に渦をもつ木鼻を付ける。組物は出三ツ斗、中備は曇股である。曇股には、東に飛竜、西に獅子に牡丹、南に海馬、北に波に宝珠の彫物を施す。組物上に梁を架け、大曇股で棟木を支持する。吹き放しで、天井もない。屋根は一軒、拝懸魚が付く。

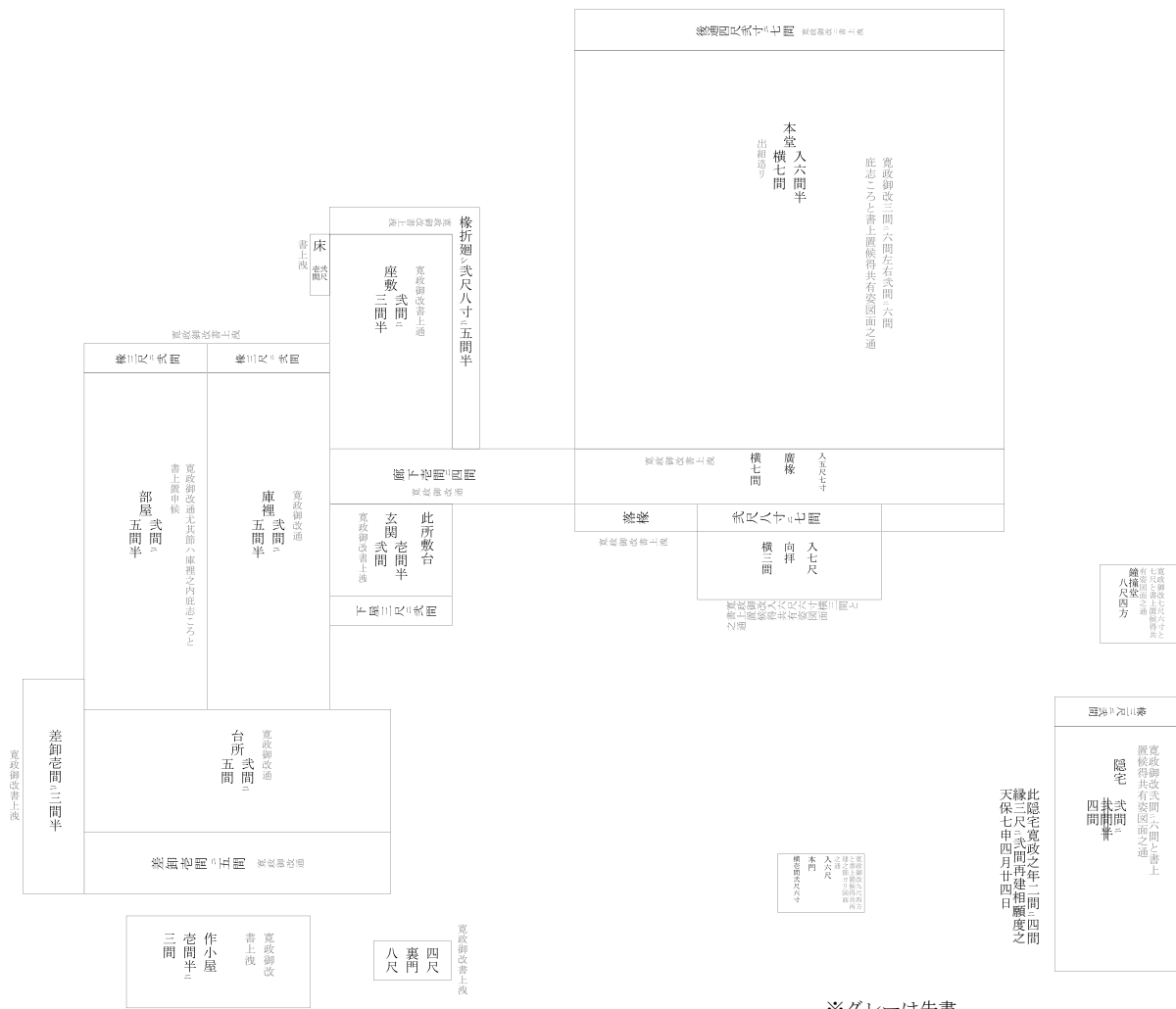
基壇の定礎には昭和53(1978)年竣工とあり、このときの古写真によると、古くなった基壇を解体していることが知られる。このときの修理に木工事も含まれていた可能性もあるが、多くの部材は、それ以前のものだと判断される。ちなみに、文政6(1823)年の『玉名郡内田手永寺院本末間数御改帳』(永青文庫所蔵)には、寛政以前の調査では「七尺四方」であったが、この文政の調査では「八尺八寸方」であったと記される。しかし、現在の建物は、曇股を止める釘も洋釘であって、建立年代が明治初期まで遡る可能性は少ないと考えられる。

庫裡

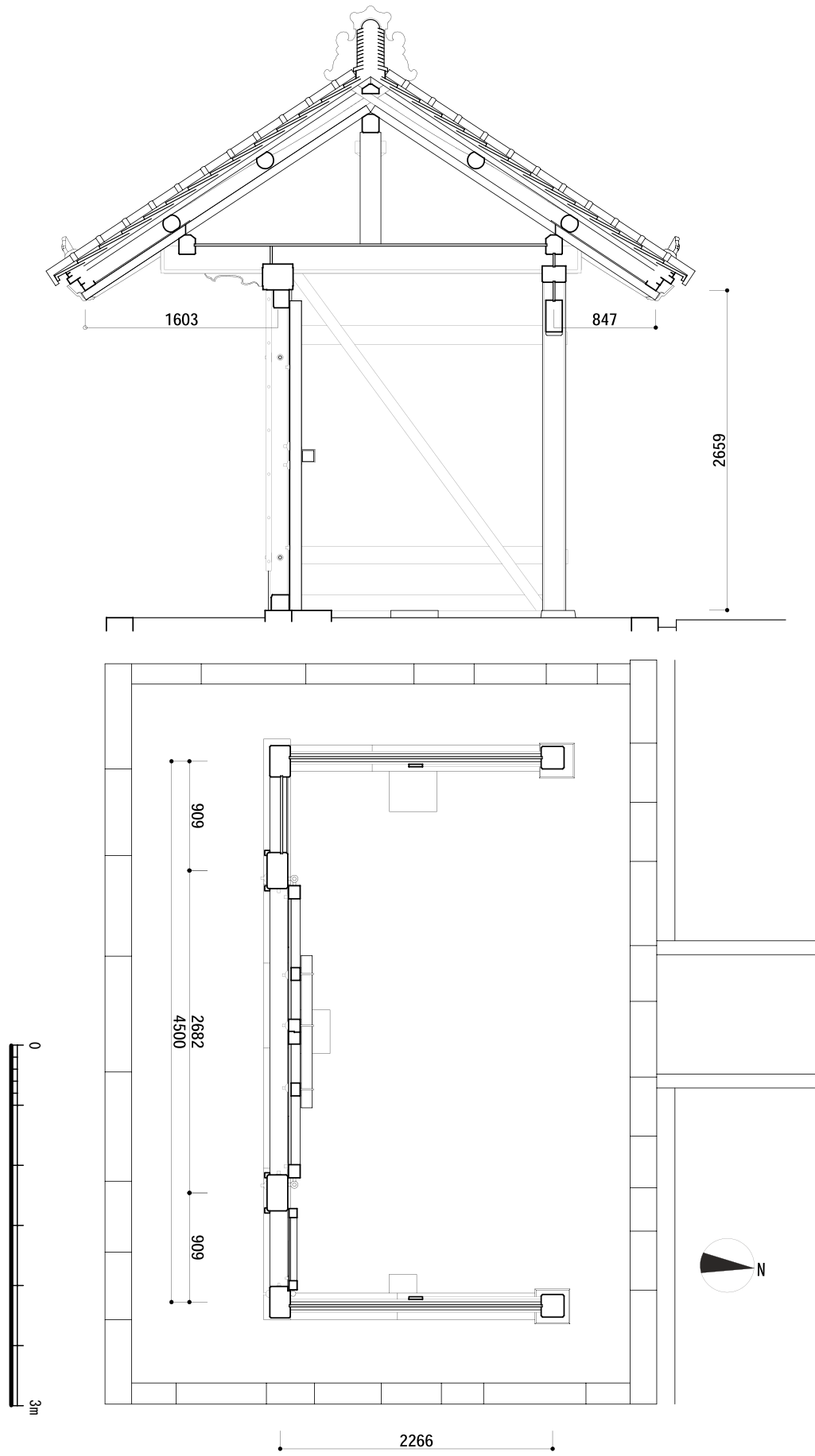
現在の庫裡は切妻造、棧瓦葺であるが、そのうちの桁行3間、梁間2間は、江戸時代以前に遡る古い建物である。面取り角柱で、差鴨居・貫で固め、部屋境を襖と障子で仕切る。北側にも鴨居が残っていることから、元々、北側にも部屋があり、南北に大梁が架かる大屋根があったと考えられる。南西の柱の外側には土壁の痕が残っており、そこまでが縁であったと思われる。随所に角釘が残されており、部材の経年感からも江戸時代以前に遡る可能性が強い建物である。

文政6(1823)年の『玉名郡内田手永寺院本末間数御改帳』にも庫裡の平面や規模が記されるが、直接対応関係が見いだされる部分はない。また、現存する庫裡のものといわれる瓦には「天保拾年 亥

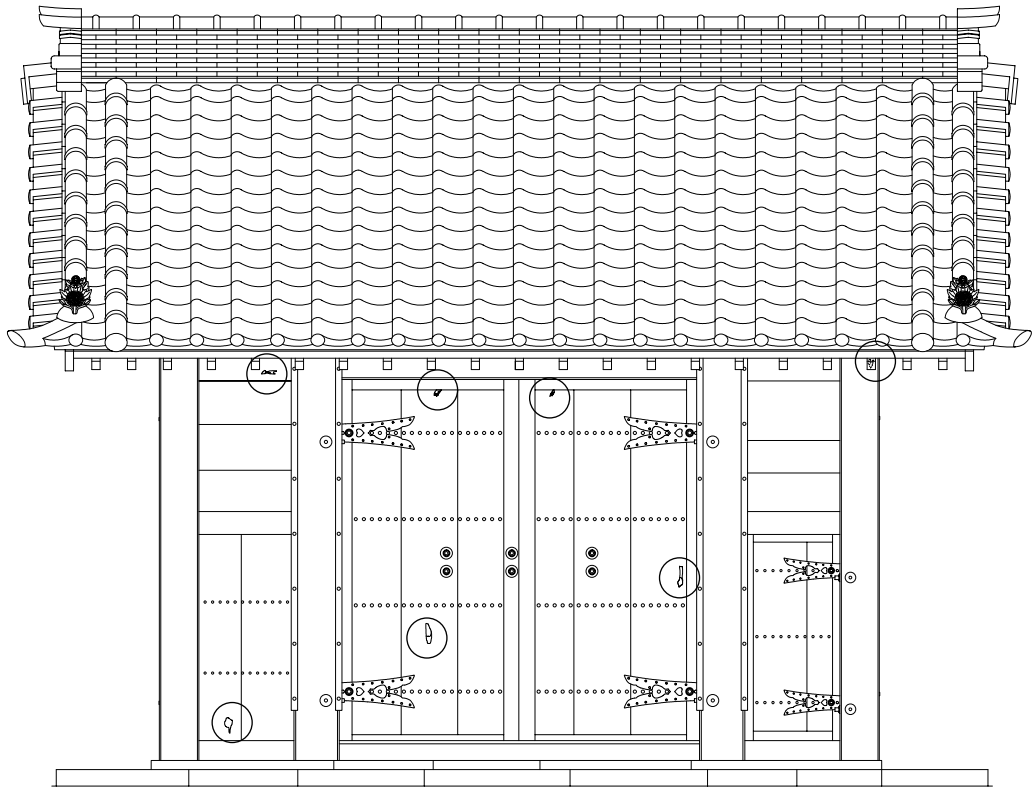
八月/作 是/芦原氏」(/は改行位置)と箋書があるから、庫裡の建立年代として、天保10(1839)年を  
考えることができる。



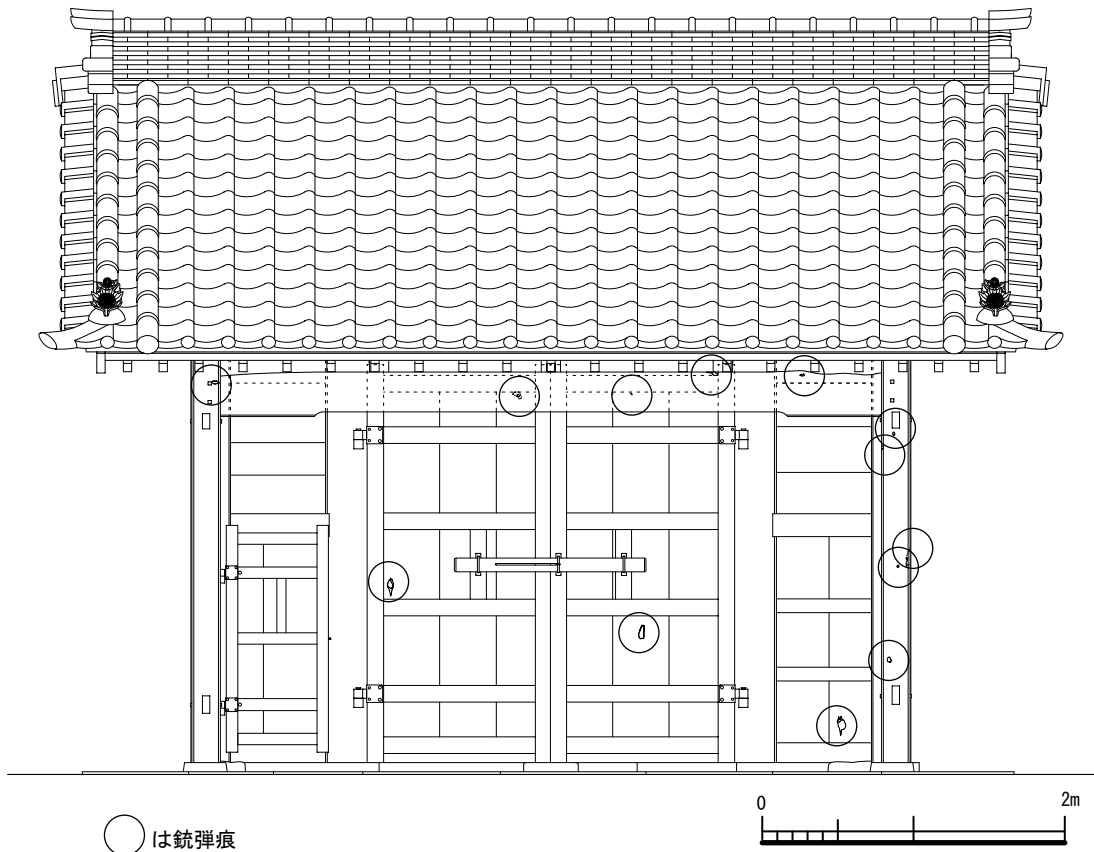
第90図 玉名郡内田手永寺院本末間敷御改帳(永青文庫所蔵)より作図「正念寺」



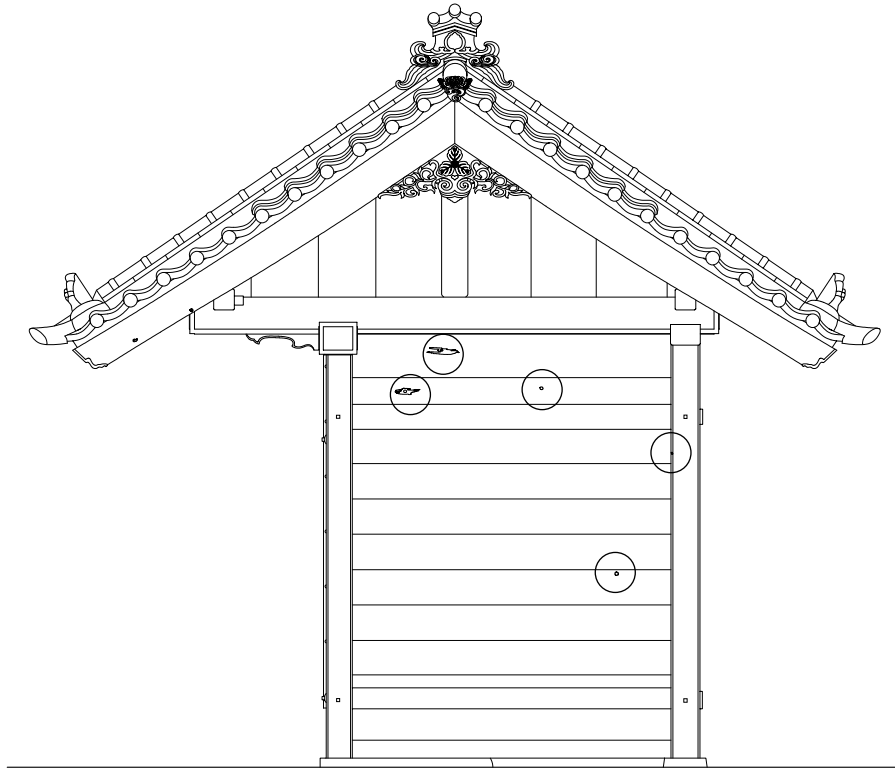
第91図 正念寺山門平面図・断面図



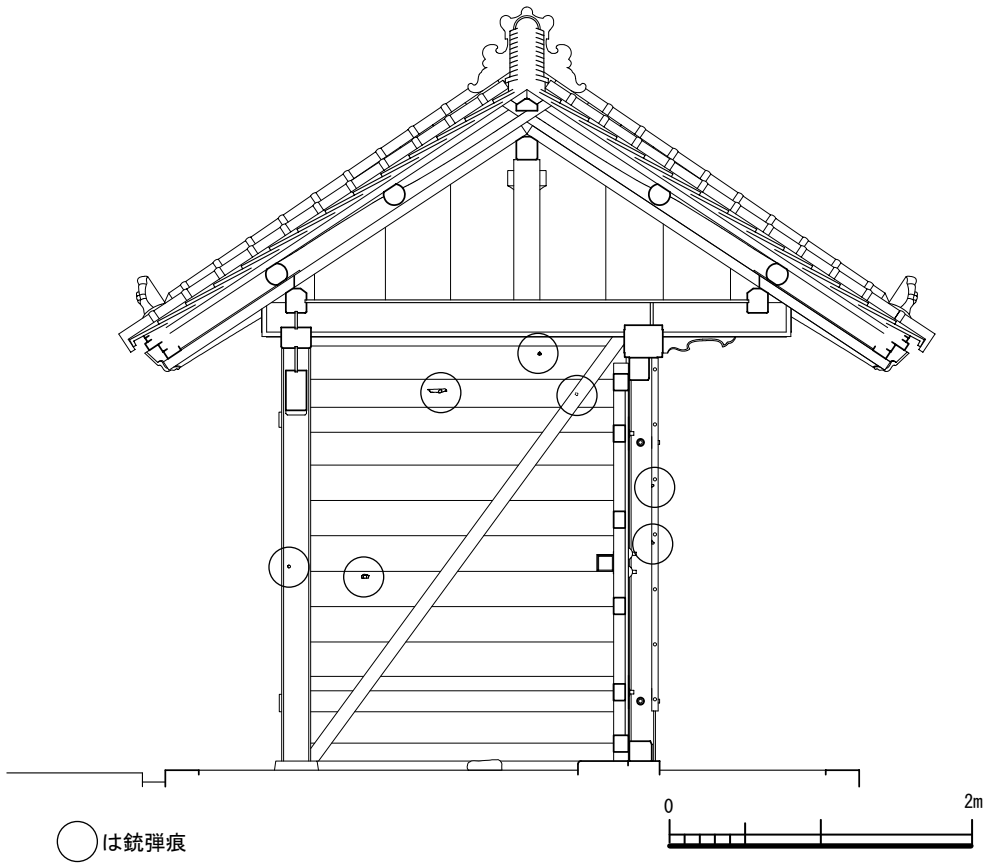
第92図 正念寺山門正面立面図



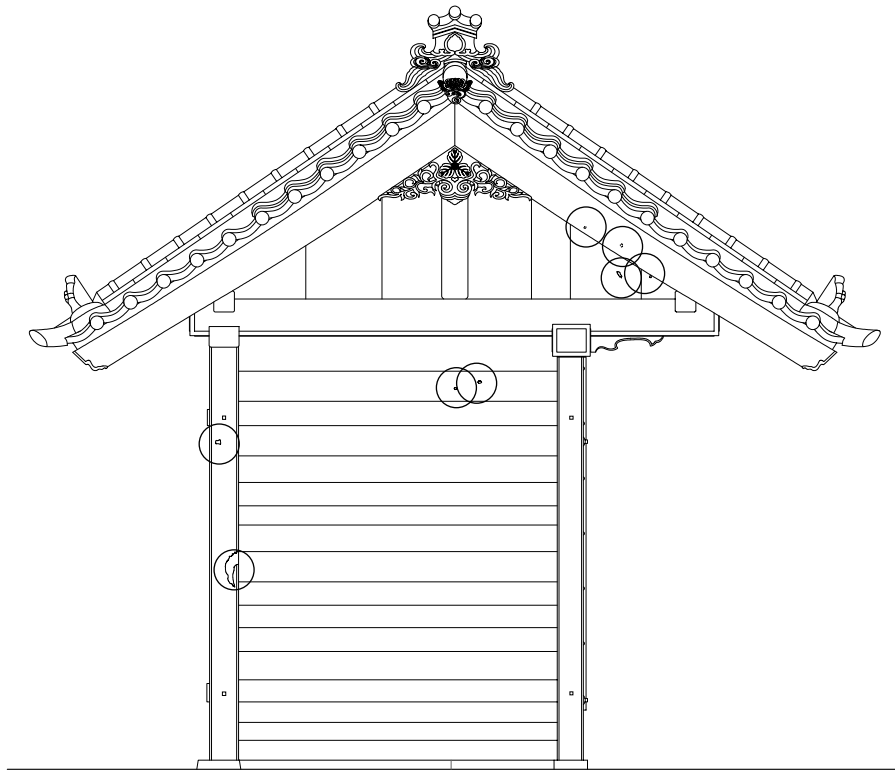
第93図 正念寺山門背面立面図



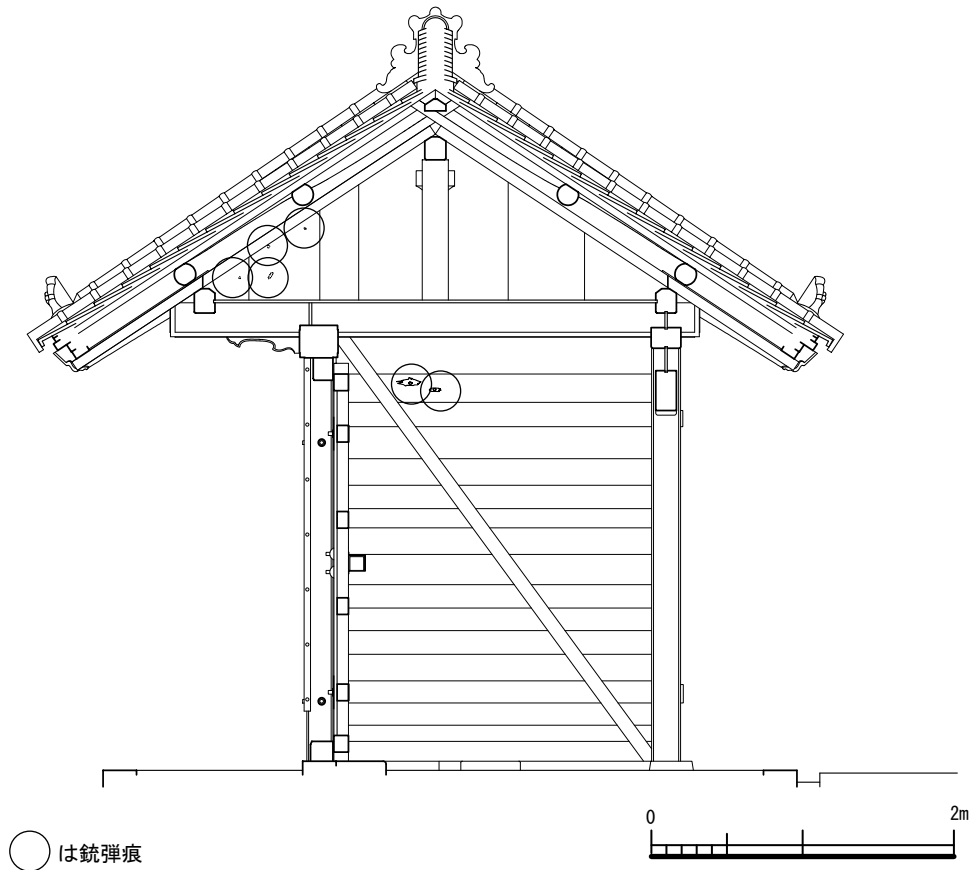
第94図 正念寺山門東立面図



第95図 正念寺山門東断面図

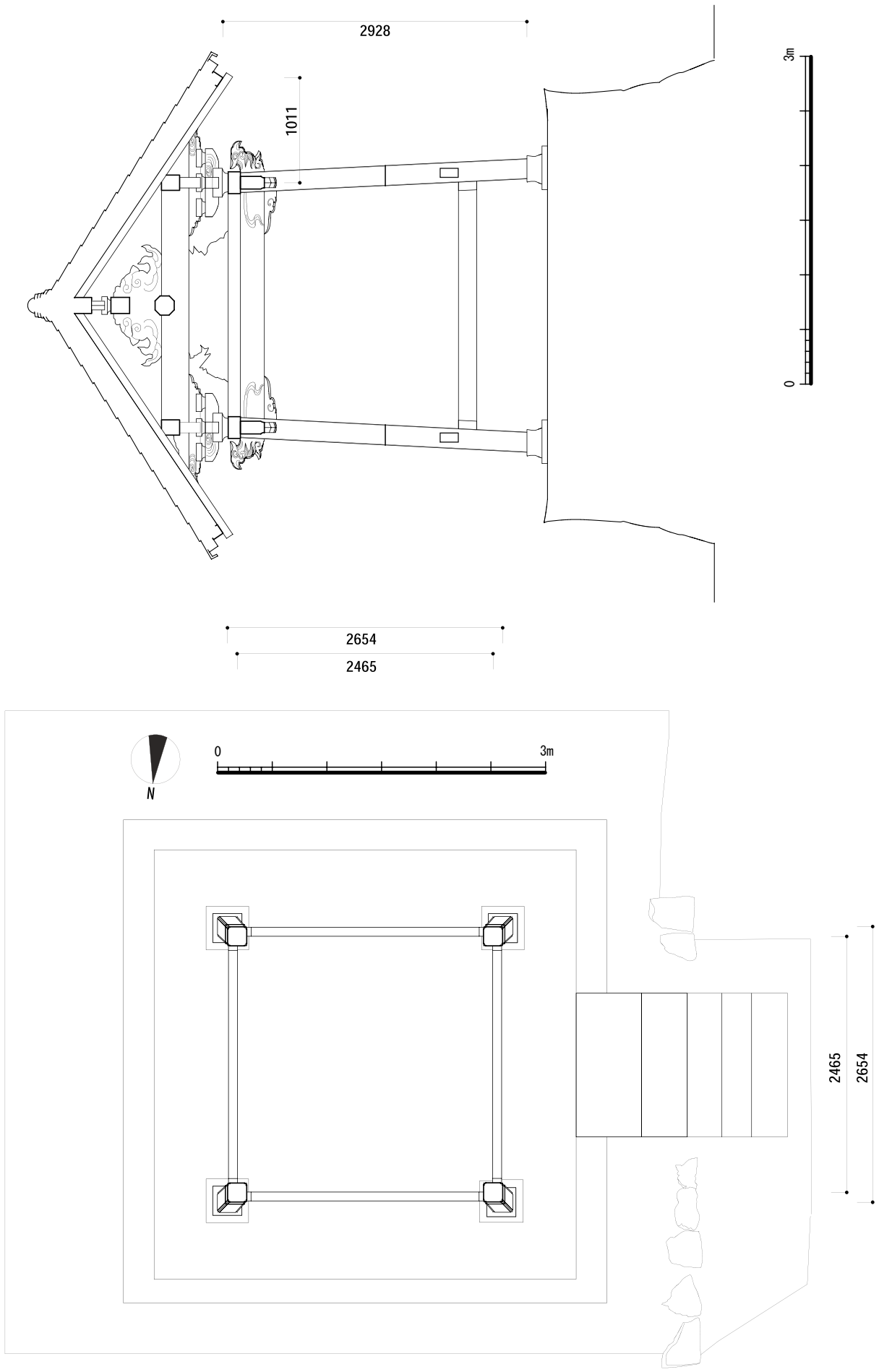


第96図 正念寺山門西立面図



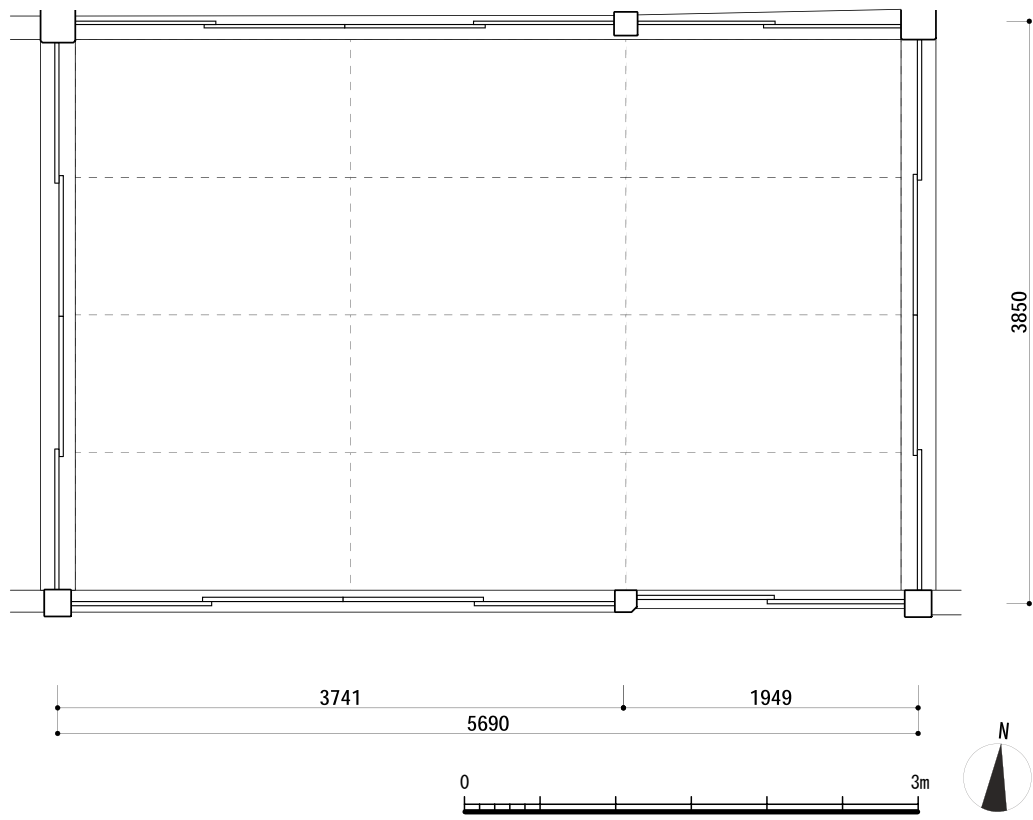
第97図 正念寺山門西断面図





第99図 正念寺鐘楼断面図

第98図 正念寺鐘楼平面図



第100図 正念寺庫裡平面図



鐘楼修理時の(昭和53年)写真



山門正面



山門裏面



山門内観



山門持ち出し



山門小屋組



山門懸魚



鐘楼 外観



鐘楼 懸魚



鐘楼 西側見上げ



鐘楼 東側見上げ



庫裡外観



庫裡東西側内観



庫裡東側内観

## 2 誠光山 徳成寺

当寺は、慶長2(1597)年創立とされる浄土真宗本願寺派の寺院で阿弥陀如来を本尊とする。「肥後国誌」によると、寛文5(1665)年に真宗西派西光寺の末寺となり、元禄8(1695)年に延寿寺に属した後、再び西光寺の末寺となっている。

境内はほぼ南面する。南の入口には4本の石柱が立ち並び、その間から参道が北へ伸びて本堂に至る。本堂の西側には庫裡があり、その南には鐘楼が建つ。なお、西側奥が墓苑となっている。

### 本堂

本堂は桁行7間、梁間6間半、入母屋造、平入、棧瓦葺、一間(本堂柱間の3間分に相当)向拝付である。自然石礎石を置いて柱を立てる。ただし、内陣の地盤は周囲よりも一段高くつくる。内陣の柱は丸柱(床下8角)とするが、他はすべて面取り角柱である。足固貫・切目長押・内法長押・頭貫(虹梁型)で固め、台輪を置く。組物は、外陣は出組、内陣は尾垂木付き二手先、中備は幕股である。

正面には切目縁を付け、縁先に角柱を立てて、正面の柱と虹梁でつなぎ、大瓶束を載せて大斗肘木を載せて桁を受ける。縁の内には棹縁天井を張る。

向拝は、礎石上に礎盤を置き、几帳面取り角柱を立てる。組物は連三ツ斗で、手挟を入れる。向拝柱は互いに水引虹梁で堅め、木鼻は側面が獺、正面は獅子とする。また、前面縁先に立つ柱と虹梁でつなぎ、上に大瓶束を載せ、そこから海老虹梁でもつながれる。垂木は、二軒目を打越し、正面ではさらに一軒を加えて二軒とする。

内部は手前から、3間の外陣、1間の矢来内、2間の内陣に大きく分かれる。内陣の左右を間口2間の余間とする。また外陣の内陣両脇筋には中柱が2本ずつ立ち、縦横に虹梁で側柱と連結され、また無目の敷居が入る。

内陣は、床を外陣より一段上げた黒漆塗りの板敷で、天井は折上格天井である。後方から半間の位置に来迎柱を立て、来迎壁を設け、その前面に須彌壇を置いて本尊を安置する。内陣正面には双折金障子を入れる。余間は、外陣よりも高いが、内陣よりは床を低くつくる。畳敷、棹縁天井で後方に仏壇を設ける。余間と矢来内境、内陣境には襖を引違いに入れる。

矢来内は畳敷で、天井は格天井である。外陣は、畳敷で、中央間が格天井、両脇間は棹縁天井であるが、大きく4つに区画して、棹縁の向きを変える意匠とする。

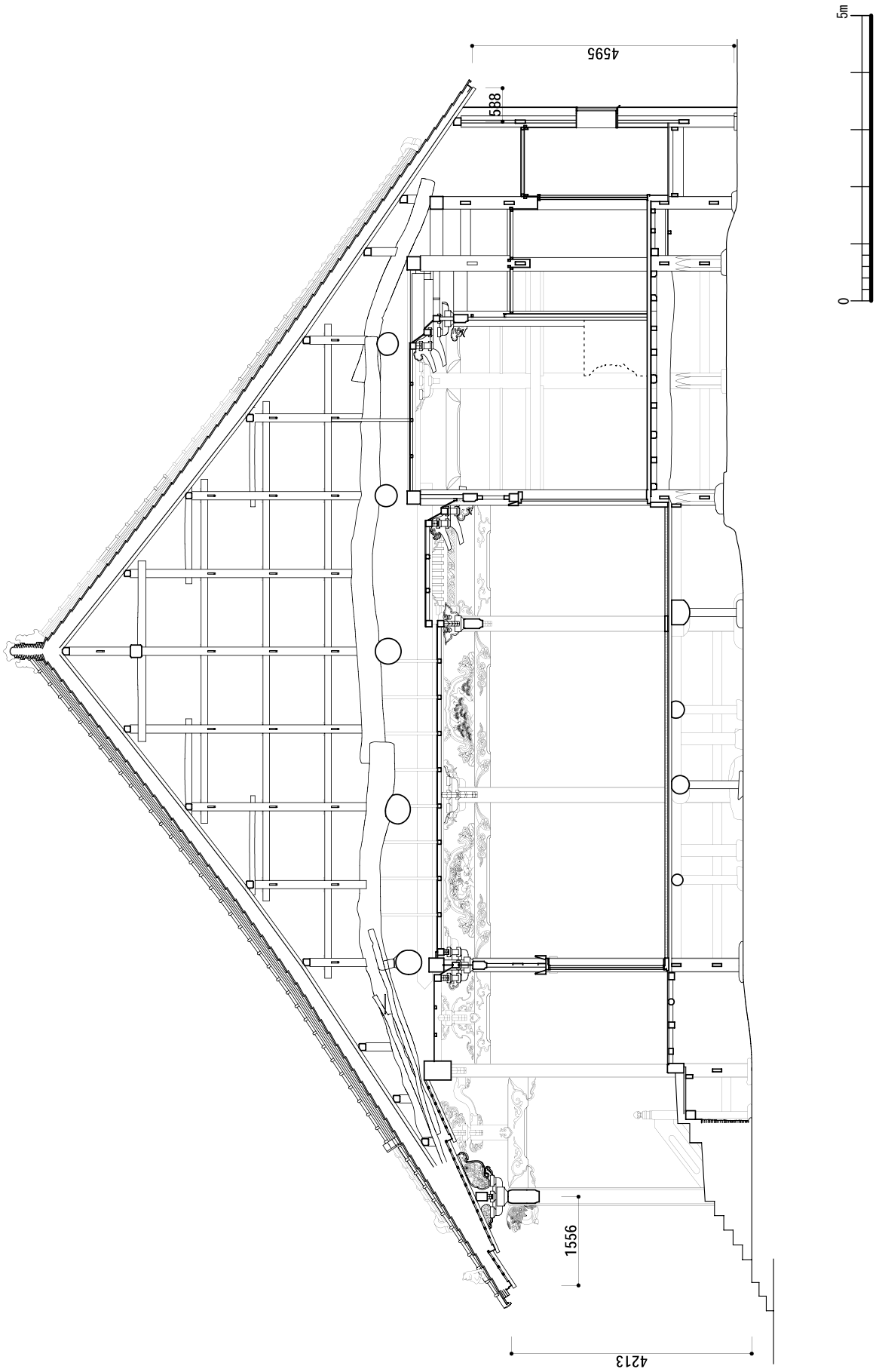
本堂は、随所に近世建築らしい特色をみせる。柱を組物下で止めずに、組物内部や見えない部分で天井の上まで立ち上がらせ梁・桁を受ける立ち登せ柱とする点、外陣格天井の格間に描かれた花々や外陣縦横に架け渡された虹梁上の大幕股を華やかにする点、前面の縁先の柱や向拝柱の間に虹梁や海老虹梁が架け渡された構成とする点などである。

### 建立年代の推定

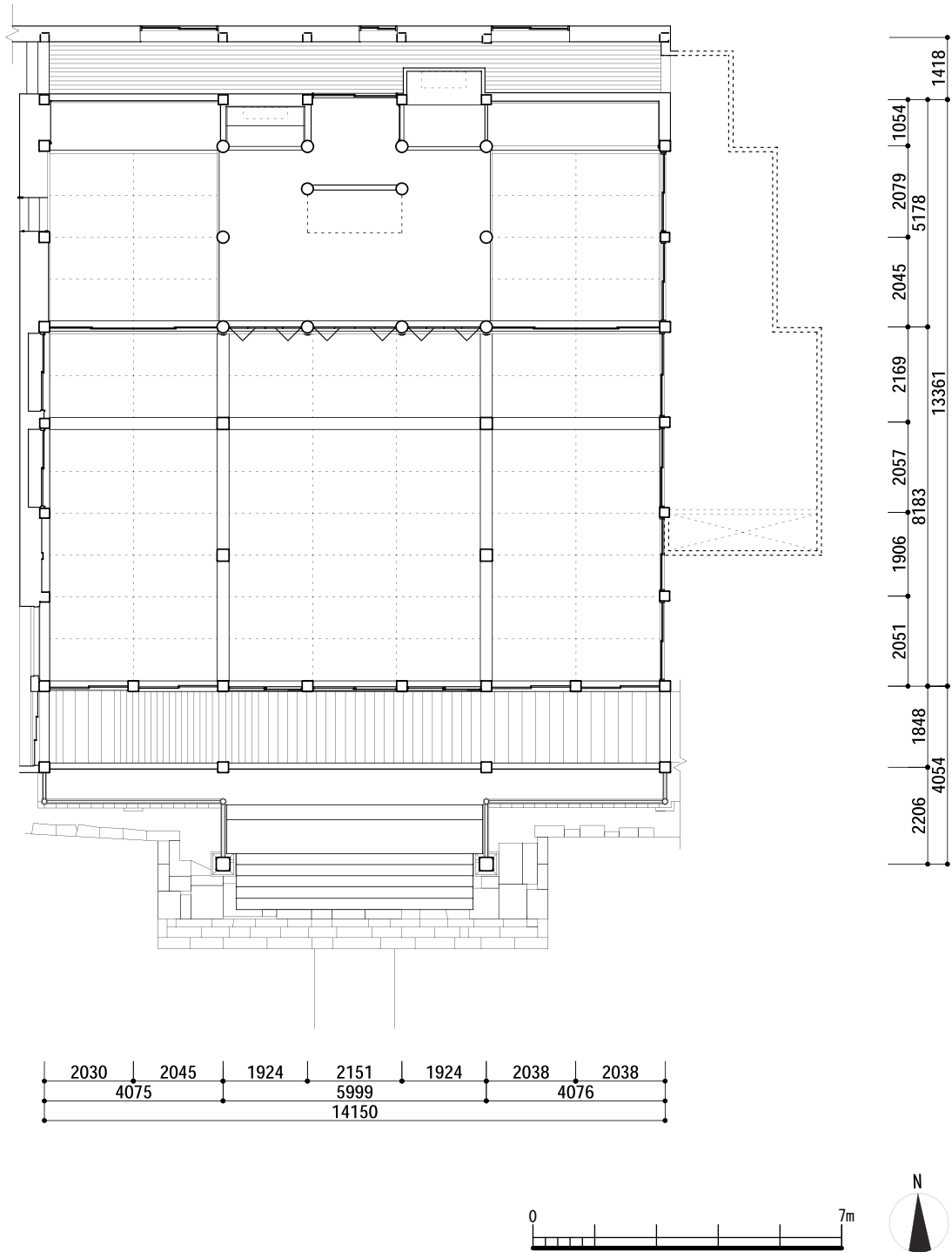
『徳成寺記録』(昭和28年)によると、明暦元(1655)年開基とされ、本堂再建年号として明和7(1770)年とある。現在の本堂は、角釘の仕事で、上述したような近世中期の特色をよく備えていて、文政6年(1823)の記録『玉名郡内田手永寺院本末間数御改帳』(文政6(1823)年、永青文庫所蔵)に描かれる平面や規模と、すなわち「向拝 入七尺」、「本堂 (入)六間」、以降「向拝 入六尺六寸」、「本堂 (入)六間半」とほぼ一致する。したがって、本堂の建立年代は明和7(1770)年とみてよい。なお、『徳成寺記録』(昭和28年)には、「本堂模様替大修繕 明治四十四年二月着手し、翌年五月完成す。従前は方形屋根瓦葺であったが、それを今回千鳥破風に模様替大修繕をなした。大工は、横島村権藤喜蔵、左官は山北村山野与三郎、山野巳之吉、中川次市、山野七郎。」とある。小屋束の多くは江戸時代に遡ることが明白な古い束であるが、両妻側の束は新しく、この記録にあるような屋根形式の変更が明治44(1911)年に行われた可能性がある。







第102図 徳成寺本堂断面図



第103図 徳成寺本堂平面図



向拝見上げ



外陣内観



外陣より内陣を見る



内陣正面



外陣見上げ



外陣余間見上げ



失来内見上げ



本尊



小屋組



床下

## 西南戦争と正念寺

正念寺前住職 隈部 広 宣

正念寺は山号を靈雨山と称し、天正年間に祐説と云う隈部家一門の僧に依って開闢された浄土真宗の寺院である。当時の御本尊は蓮如上人筆と伝える十字名号本尊であった(図1)。江戸時代になり徳川幕府の本末制度により、第三代積祐金に至り西本願寺派に所属し公認と成ったのは、承応三年二月十三日と古文書(図2)に記す。当境内地からは鎌倉時代の布目瓦片(図3)や中国明時代の陶磁器片(図4)中世須恵器片(図5)が出土しているので何らかの建造物が以前存在し、廃絶後に正念寺が創建されたものと思われる。

大鐘楼が造立完成したのは、天文二年第四代積芳瑞の時であった。第六代積廣融の時、近隣火災の類焼に遭い本堂、庫裡、書院、法宝物及び文書等灰燼に帰す、時に延享四年二月の頃であった。数年を経て本堂等再建の運びとなり、宝暦元年九月四日には小屋入りし、翌二年十一月四日上棟再建された。其の全容は寛政二年十二月に記載された文書(図6)に依り

伺い知る事が出来る。明治十年の西南の役では官軍病院として三月四日より、四月二十三日迄の五十日間使用されている。当時の住職は、第十二代積志実で私の祖父にあたる。その時境内は傷兵の出血により血の海と化し傷兵の呻く声と、苦痛のあまり「殺してくれ」の悲痛な叫び声が消える事は無かったと伝えられている。当病院で施療に当たった医師の一人として、上木葉(土生野現住)の安成宗寿さんが負傷者を治療されていた事が、当時官軍の賦役にとられていた近所の十八歳の土山熊次さんが言い伝えた処である。官軍の川口武定の「従征日記」三月十三日に「初め死者稀少なるを以て正念寺境内に埋葬せり、然るに遂日増加し、復た之を葬るの地なきを以て高月原に設く」と記す。亦野津道貫が田中国重に語った事として「日清戦争は戦いじゃない、あれは遊びだ、田原坂の戦いに比べたらなんでもないよ」との言からも田原坂戦の凄まじさが想像出来る。此の状況下生まれたのが「博愛社」である。有栖川熾仁親王が木葉に入られたのが四月十七日其の夜、上木葉大城戸家土蔵に一泊され翌十八日熊本市へお発ち成っている。当然官軍病院の傷兵を見舞われた事は疑い無い事であろう。四月六日に明治政府に提出された博愛社設立願いは四月十九日付け却下され、五月一日熊本城内のジェンズ館にて親王に直訴の形で三日に許可された

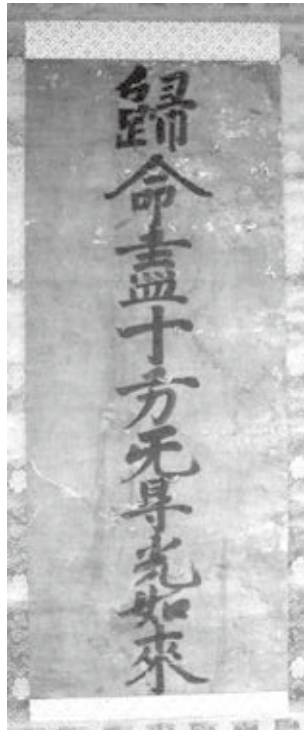


図1

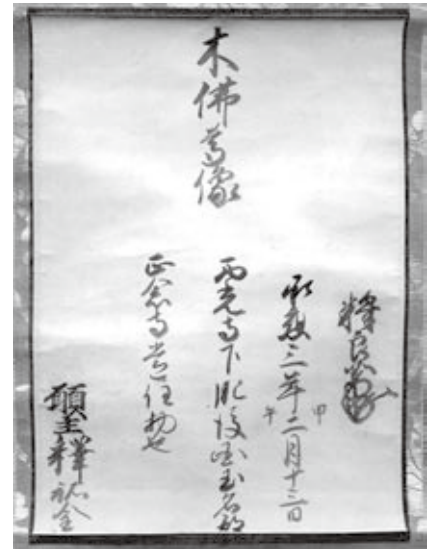


図2



図3



図4



図5

事は、戦場現場を直視された親王ならではの御決断であつたらう。博愛社の活動に就いては「西南戦争と薩軍の看護活動」と題する宮下満郎氏の稿に「五月二十七日から玉名郡玉東町木葉の正念寺で治療活動を始めた」とある。戦争は鹿児島城山で終結した。当山では、明治十三年四月二十四日、住職釈志実によって西南の役戦死者招魂祭が勤修されている。その時熊本鎮台より清酒五樽が供備された目録(図7)が伝来する。誠に残念乍ら、昭和八年八月失火で本堂全焼、庫裡も一部焼失し、山門と鐘楼のみ類焼を免れ現在に至っている。第十六代釈唯信が現住職で有る。

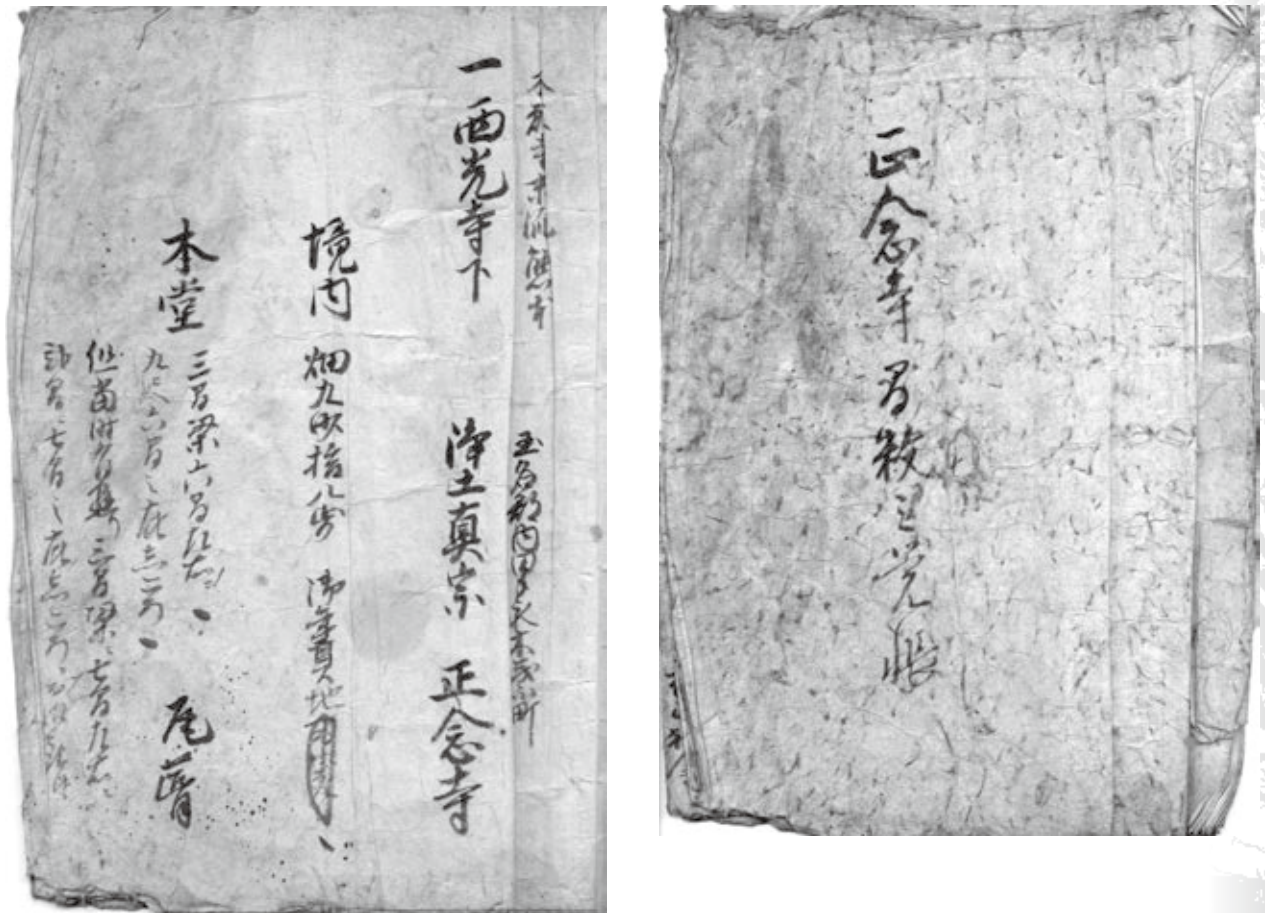


図6

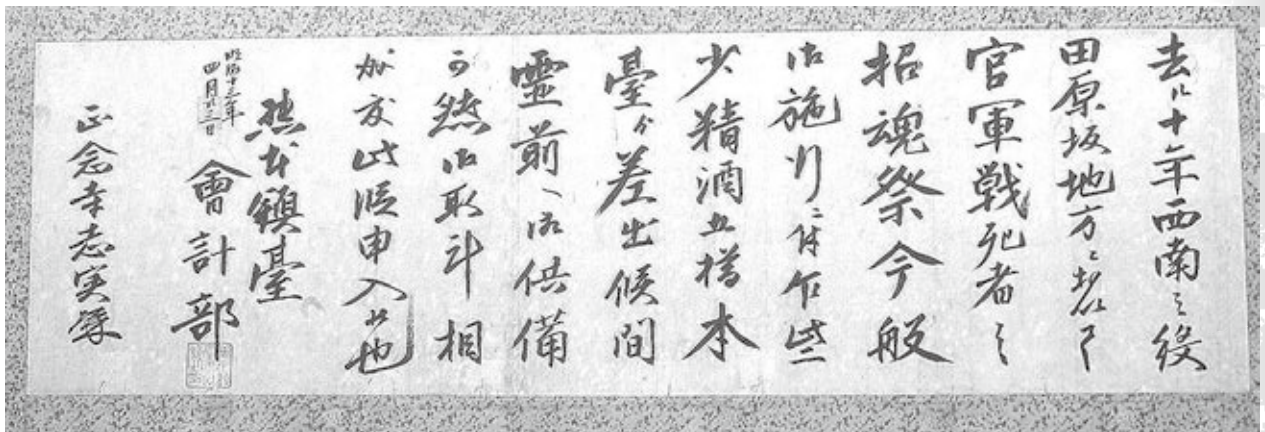


図7

## 第VIII章 官軍墓地の調査

### 第1節 遺跡の位置と環境及び調査の方法

高月官軍墓地は、玉東町木葉680番地に所在し、町の北に位置する木葉山の尾根から舌状に派生した丘陵地標高29mに位置する。現在の国道208号よりは少し奥まっているが旧三池往還に面する場所にあり、繙帯所や仮埋葬地にされたといわれる正念寺との距離は400mである。現存する官軍墓地の中では被葬者数が最大であり、士官44名、下士官168名、兵卒764名、軍夫4名の計980名が葬られている。

宇蘇浦官軍墓地は、玉東町木葉903番1に所在する。木葉山の麓、標高約87～96mの山中に位置する。戦時の繙帯所として利用されていたと伝わる徳成寺の北方約300mに位置する。士官25名、下士官47名、兵卒250名、軍夫13名。そして、警視隊64名の計399名が埋葬されている。

これらを将来に亘って保存、管理するために、平成23年度に詳細な墓石配置図の作成及び墓石の碑銘照合等、現況の記録を行った。配置図作成には光波測距儀を用い、遺構実測支援システム「遺構くんcubic」を利用した。

### 第2節 官軍墓地の成立

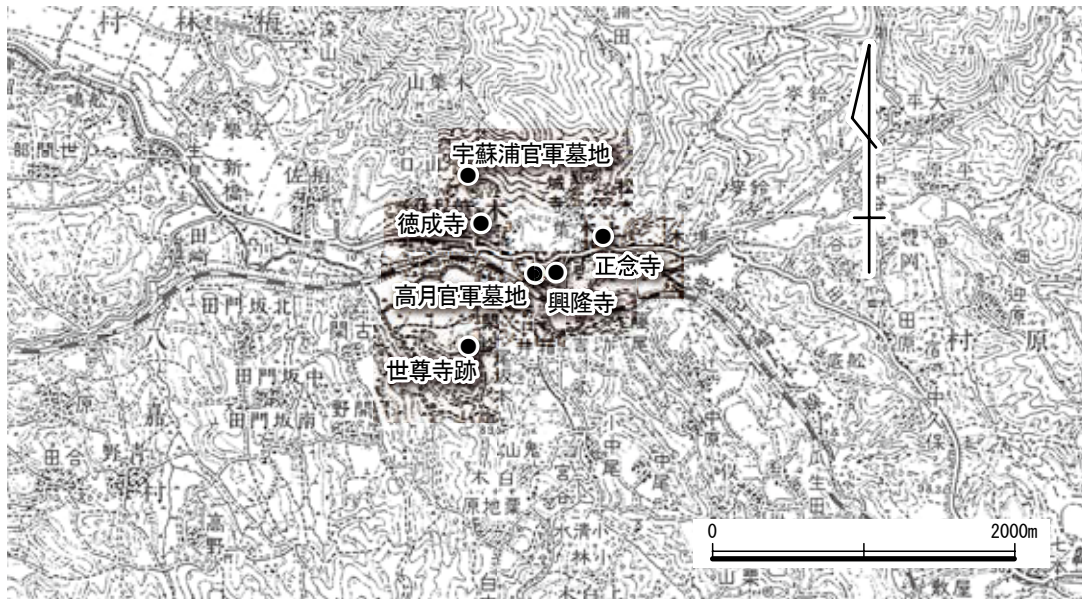
西南戦争の戦死者を埋葬した施設を官軍墓地という。設立当初は陸軍が土地を買収し管理をしたので官修墓地や陸軍墓地とも呼ばれる。

西南戦争での死者は両軍合わせて14,000人を越え、政府軍だけでも6,948余名以上を数える<sup>(1)</sup>。戦死者は当初繙帯所として使われた正念寺の境内に葬られたが、すぐに収容できなくなり、附近に埋葬場所が確保された。『征西戦記稿』3月9日の記載には木葉・高瀬の両村に埋葬地を選定して戦死者を葬るとあり、『従征日記』巻一の3月13日によると、「埋葬地ハ木葉字高月原ニ設ケタリ、初メ、死者稀少ナルヲ以テ正念寺上木葉村境内ニ埋葬セリ、然ルニ遂日増加シ復タ之ヲ葬ルノ地ナキヲ以テ高月原ニ設ク、嗣後死者日ニ一日ヨリモ増加シ死體積壘阜を為シ、通行兵隊ノ旁ヲ経過スルモノヲシテ之ヲ見セシメハ、恐ヲクハ膽ヲ寒シ気ヲ沮ムノ患アラン、乃チ病院課ニ命シテ竹垣ヲ周圍ニ環ヲシ、之ヲ蔽ハシム」とあるように、最初に選定されたのは高月や高瀬の地であったようだ。その後、高月もいっぱいになると宇蘇浦や熊本市植木町の七本が選定された。当初は207頁に示すような木製の墓標が建てられていたようである<sup>(2)</sup>が、戦争後の明治11年、現在の形に整備された。宇蘇浦官軍墓地の傍には徳成寺、高月官軍墓地の傍には興隆寺、正念寺がある。興隆寺は西南戦争後に建立された寺院であるが、高月官軍墓地の管理をするということで建設許可がおりたという話が残っている。

第22表に示すように、西南戦争に関連する墓所は政府軍関係のものだけでも43箇所確認されている<sup>(3)</sup>。戦争が中九州から南東九州で展開されたため、九州各地に点在するのはもちろん、軍団病院の置かれた大阪や長崎、福岡にも官製の墓地が造られた。その中でも当町にある高月官軍墓地には墓石980基、宇蘇浦官軍墓地には399基が建ち並んでおり、最大級である。

両墓地は、昭和52年10月11日に熊本県の史跡に指定を受けた。その後、墓石の石材が風化に耐えず町が数回の修復を行っている。





町内における官軍墓地・寺院の位置(大日本帝国陸地測量部発行 明治33年測図より)

### 第3節 墓石の配置と種類

**高月官軍墓地** 高月官軍墓地は北面し、東西方向に70m南北方向に35mの長方形の平坦に整理された土地に設置されている。入り口の2本の石柱は後に建てられたものと思われるが、その脇には凝灰岩製の土塁留めが設けられている。これは、劣化具合から判断して当時のものと思われる。現在、土塁はない。北側の壁には一部石垣が設置されている。これは、最近建てられた戦死者慰霊碑の建設の際に造られたものとも思われるが、一部当時のものと考えて良いものがある<sup>(4)</sup>。その中間に石製のコの字型の樋がある。地域では“地流しの樋”と伝わっている。発掘調査が行われた八代市の横手官軍墓地の発掘調査では暗渠が検出されている。多量の戦死者を土葬するために排水等の考慮がなされていたようだ。当該地においても同様の施設があると考えられ、樋も当時造られた可能性がある。

第106図に示すように、墓石は32のブロックに分けられる。この区画を整理するのが墓石と同じ石で造られた仕切り石である。この中には、墓石と同規格のものもあれば、短いものもある。また、稀に墓碑銘が刻まれたものもある。設立当初から使われていたものか、修復の際に敷きこまれたものかどうかは不明である。入り口から右奥に位の高い尉官の墓があり、左手前に軍夫の墓がある。南北方向を主軸に隙間なく整列しており、それぞれの墓石正面<sup>(5)</sup>は、墓地の中央を向くように配置されている。つまり、東側と西側の墓石群が対面するような配置になっている。

#### 宇蘇浦 官軍墓地

宇蘇浦官軍墓地は南西方向に向く。木葉山の斜面を段状に拓き、21のブロックが設置され、高月同様墓石ブロックには仕切り石が利用される。入り口から最も遠い位置に上長官である吉松秀枝少佐の墓があり、尉官の墓、軍曹・兵卒の墓がある。いずれも正面は入り口側(南東)を向く。宇蘇浦には警視隊の墓が64基所在する。これらは、入り口の正面にあり、陸軍とは逆で位の高い警部・警部補が先頭で奥側が巡查の墓となっている。配置の差は何に起因するのだろうか。当時の発注の記録を見る<sup>(6)</sup>と、陸軍と警視局は別々に墓石等の発注がなされたようであり、それぞれの組織の慣例の違いが表れているものと思われる。

両墓地とも区分けは位階を基準に行われており、これは絶対的なルールであるようだが、軍曹以下兵卒は同等であるようだ。これらはある程度死亡日が近い集団が特に決まりなく羅列されている印象を受ける。

ここには、武勲で有名な谷村計介の墓がある(宇蘇浦No.124)。彼の武勲にあやかりたいと、墓石を削って持ち帰る人が多かったため破損が激しく、現在は鉄枠がはめられた状態となっている。

**墓石の種類** 墓標は士官から軍夫にいたるまで個々人に造られた。第104図に示すように階級によって大小の差があり、陸軍と警視局は墓石の形や石材が異なる。

陸軍に関するものは、頭部が四画錐形であり、墓石のパターンは佐官、尉官、軍曹・伍長、兵卒、軍夫の5種である。佐官や尉官のものは基壇が二段設けられる。下段は鍵状に石材を組み合わせ、正方形を成す。その他は一段の台石の上に墓石が載る構造である。八代市横手官軍墓地の墓石基壇にはホゾ穴が設けられ、細くすぼまった墓石基部を差し込むような形状になっている。当墓地も同様の構造をなすと思われる。墓石には正面に階級・姓名、右側面に死亡年月日・死亡場所、背面に出身地、左側面に所属と身分が刻まれている。すべて天草下浦石といわれる砂岩製である<sup>(7)</sup>。石材の性質と経年劣化の為、すでに読めなくなっているものもあり、近年一部建替えが行われている。切り出したばかりの下浦石は青々として非常に美しく加工もしやすいため、当時は墓石として多用されていたようである。しかし、経年劣化により赤みをおび剥落しやすくなる欠点がある。当町における官軍墓地には警視局の墓石以外はすべてこの石材が利用されており、県下の墓地も同様である<sup>(8)</sup>。

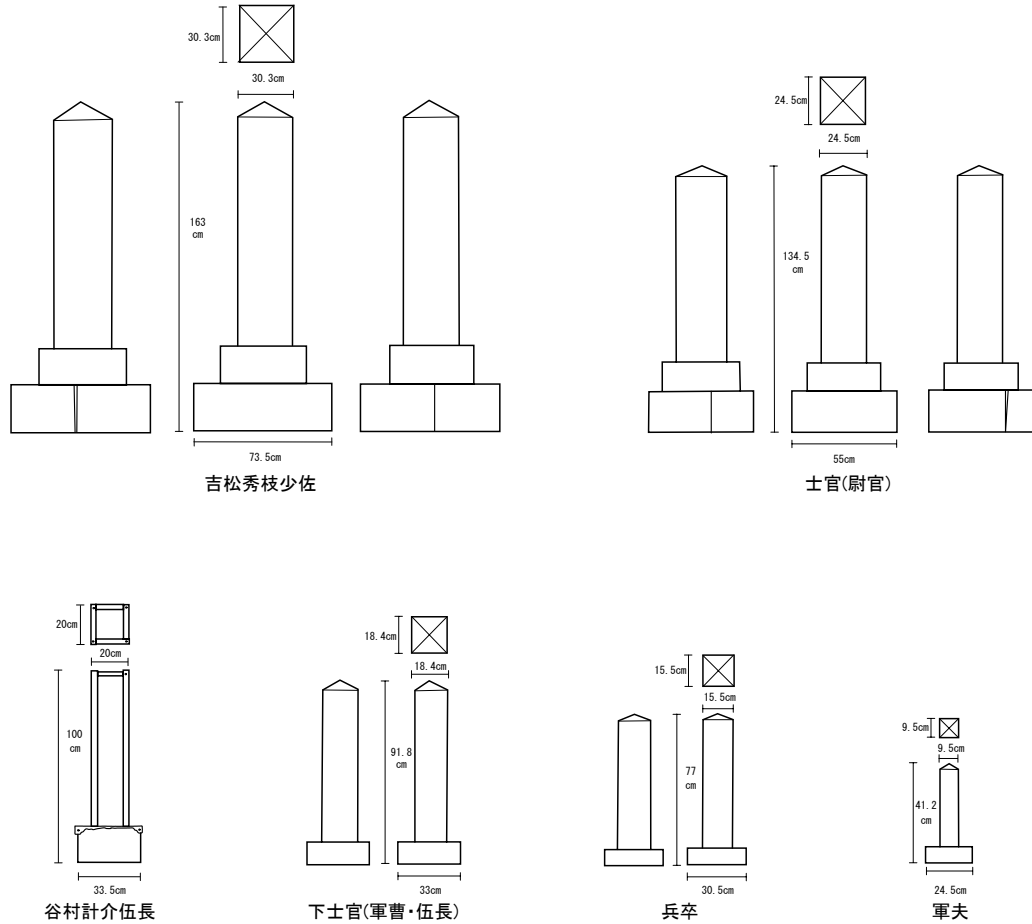
警視局に関するものは頭部が蒲錐形で、墓石のパターンは警部・警部補と巡査の2種である。基壇は両者とも二段であるが、陸軍のものとは異なり一枚石である。墓石には正面に階級・姓名、右側面に死亡年月日・死亡場所・死亡年齢が刻まれ、裏面に所属、右側面に出身県と身分、建立年月が刻まれている。石材は島崎石といわれる安山岩で、欠損は少ない。墓碑に刻まれる文字は毛筆体で、筆跡は細いものと肉太いものの2種類がある。



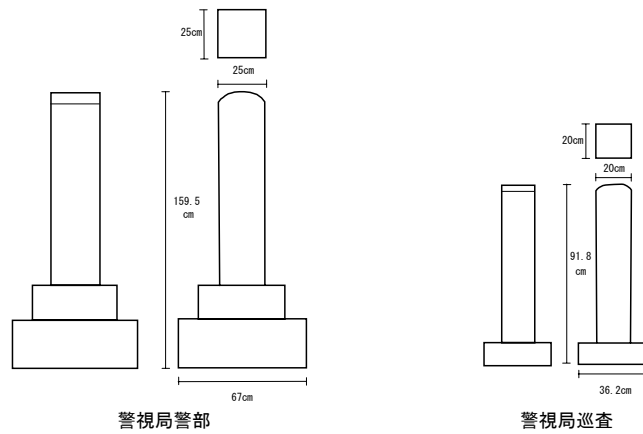
大正年間絵葉書(鈴木徳臣氏所蔵)



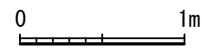
現在の谷村計介碑(坂田幸之助氏撮影)



陸軍墓石



警視局墓石



第104図 高月・宇蘇浦官軍墓地墓石実測図

#### 第4節 墓石に見る官軍戦死者について

それぞれの墓石の配置、名簿は第106、107図と第23、24表に示す。これらの表はそれぞれ、木葉村役場で保管する管理名簿『明治十一年 官軍墓地碑石全写』木葉村役場に基いて作成。しかし、まれに墓石と名簿の記載内容が異なるものがある。真偽はわからない為、現存する墓石銘を記載している。(建替えられたものは管理名簿を基準とする)。

『明治十一年 官軍墓地碑石全写』木葉村役場

熊本県玉名郡木葉村大字木葉字高月・宇蘇浦(式ヶ所)

第二十三区官修墳墓

一 設置ノ沿革

明治十一年八月官設全十年丁丑戦役ニ於ケル官軍戦病死者ヲ埋葬ス

氏名及戦死事故等別紙ノ如シ

一 境内

千式拾坪八合 字高月

四百七拾式坪五合 字宇蘇浦

高月官軍墓地、宇蘇浦官軍墓地に刻まれる情報は多岐にわたる。この中でも、戦死地と戦死日に関する情報を抽出し、第20、21表にまとめた。

高月官軍墓地に葬られた初めての戦死者は2月7日であり、3月15日をピークに4月6日までの戦死者が葬られている。一方、宇蘇浦官軍墓地には3月25日をピークに2月13日から4月20日までの戦死者が葬られている。両墓地には埋葬戦死者の戦死日のピークのずれが見られ、文献<sup>(9)</sup>にも明らかのように高月の墓地が先に建設されたことを裏付ける。さて、前述したように高月が墓地として選定されたのは3月9日のことである。それ以前は、正念寺の境内に埋葬したという記録があるように仮埋葬が行われていたと思われるが、後に墓地として選定された宇蘇浦の地に2月中旬ごろの戦死者が葬られているのは何故だろうか。正念寺に葬られていたものを改葬したとすれば、何故、宇蘇浦まで運ぶ必要があったのだろうか。宇蘇浦官軍墓地傍には当時木葉病院だったといわれる徳成寺がある。正念寺同様、境内に埋葬されていた遺体を改葬したとも考えられるが、その根拠はまだない。



陸軍の墓石

註

- (1) 高野和人編『靖国神社忠魂史 西南の役』287頁より。実際は第22表にあるように、もっと多いと思われる。
- (2) 井桜直美著 2010『-古写真に見る西南戦争の記録-「彦馬が見た西南戦争」』JCIフォトサロン23頁の曾於市官軍墓地の古写真には木製の墓標を見ることができる。
- (3)、(6) 前川清一氏 252頁
- (4) 高瀬哲郎氏による。
- (5) 階級・姓名が刻まれる面を正面とする。
- (7) 石材の鑑定は前川清一氏による。
- (8) 県内でも高千穂や、県外の一部の地域は砂岩以外の凝灰岩や花崗岩を用いる所がある。
- (9) 川口武定 『従征日記』上巻 青潮社138頁

参考文献

- 八代市教育委員会 2002『若宮官軍墓地・横手官軍墓地』八代市文化財報告書第16集  
木葉村役場 1878『官軍墓地碑石全写』



警視局の墓石







第105図 官軍墓地分布図

第Ⅷ章 官軍墓地の調査

第22表 官軍墓地一覧

No.	名称	所在地	階級								参考文献	備考	
			士官	下士官	兵卒	軍夫	警視隊	海軍	その他	合計			
1	高月官軍墓地	玉名郡玉東町木葉 679 番地 .680 番地	44	168	764	4					980	①	
2	宇蘇浦官軍墓地	玉名郡玉東町木葉 903 番地 1	25	47	250	13	64				399	①	
3	七本官軍墓地	熊本市植木町大字轟字多尾 2105	21	39	216	10	14				300	②	
4	高瀬官軍墓地	玉名市高瀬	28	75	270	4	18				395	③	
5	城ノ原官軍墓地	玉名郡南関町南関 1063 番地	14	14	49						77	③	
6	肥猪町官軍墓地	玉名郡南関町大字肥猪町 216 番地、217 番地	12	29	139						180	④	
7	下岩官軍墓地	玉名郡和水町岩河井ヶ浦	4	23	107	16					150	⑤	
8	宥明堂陸軍墓地	山鹿市山鹿字宥明堂	12	21	120						153	⑥	
9	月見殿官軍墓地	菊地市大字隈府月見殿	3	12	83	2					100	⑦	
10	明德官軍墓地	熊本市北部町大字明德 1277 番地 4	4	17	96	6					123	⑧	
11	寄鶴官軍墓地	熊本市北部町大字明德字寄鶴				30					30	⑧	明德官軍墓地にて合葬 氏名・出身等不明
12	小峯官軍墓地	熊本市黒髪四丁目 10 番地	555			16	71				642	⑨	642名埋葬されたといわれるが、大正2年12月に移転される。現在は記念塔になり明細不明
13	花岡山陸軍埋葬地	熊本市横手二丁目 13 番地	1								1	⑩	熊本県八等属 青山輝正を葬る
14	城山上代官軍墓地	熊本市城山上代町北浦 1100 番地						7			7	⑩	寂昭院境内
15	若宮官軍墓地	八代市塩屋町 10 - 35	23	61	283	25					392	⑪	
16	横手官軍墓地跡	八代市大手町				15	255				270	⑪	若宮官軍墓地に記念碑を建て合祀
17	永尾官軍墓地	宇土郡不知火町大字永尾字河添 704 番地 6	10	23	114						147	⑫	
18	田浦官軍墓地	芦北郡田浦町大字田浦			1						1	⑩	大坂鎮台第二大隊兵卒 小鳥喜之助を葬る
19	峰崎官軍墓地	芦北郡芦北町大字花岡字峰崎	3	18	65						86	⑬	
20	陣内官軍墓地	水俣市古城一丁目 436 番地	4	5	31	2			2		42	⑬	
21	尾の上官軍墓地	牛深市牛深町舟津					1				1	⑭	警視局四等巡查 木村脩を葬る
22	山川招魂社	福岡県久留米市山川町良山中学校北隣	12	24	144	1	9				190	⑮	
23	福岡県殉難警察官之碑	福岡県中央区平和五丁目 14 番地 1					2				2	⑩	福岡警察署二等巡查柴田社太郎 同二等巡查竹下純兵合祀
24	佐古招魂社	長崎県長崎市西小島二丁目 5 番地					671				671	⑩	
25	西南の役軍人墓地	大分市牧 松栄山	32	57	367	17	15		40		528	⑯	その他は臼杵士族
26	西南の役警察官墓地	大分市牧 松栄山				5	98				103	⑯	
27	佐伯官軍墓地	佐伯市白坪区 岡の谷招魂所			134		14				148	⑩	
28	高千穂官軍墓地	西臼杵郡高千穂町大字三田井 1354 番地口	1	3	34	7			1		46	⑩	
29	坂元官軍墓地	えびの市坂元		31		6					37	⑩	
30	細島官軍墓地	日向市大字日知屋字遠ヶ崎 2489 番地	14	29	170	15	80	1	11		320	⑰	255体の墓 軍夫26名、21名、21名は各合葬
31	岡富官軍墓地	延岡市北小路 3739 番地							1	1		⑩	
32	岩川官軍墓地	鹿兒島県曾於郡大隅町大字岩川字東馬場	3	8	54	7			2		74	⑩	
33	祇園洲官軍墓地	鹿兒島市清水町	39	65	683	184	353	28	13		1365	⑱	慰霊塔が建てられ合祀
34	大阪靖國軍人墓地	大阪府大阪市玉造本町	923								923	⑩	数百人と記載

※現在51箇所確認されている官軍墓地の内、詳細のわかっているものを記載している。



参考文献

- ①玉東町編 1981『歴史への招待 西南の役と玉東町』玉東町
- ②植木町教育委員会編 1990『西南の役 植木地区における官薩両軍戦死者名簿』植木町
- ③玉名市史編集委員会編 1994「史料篇6文書(近・現代)」『玉名市史』玉名市
- ④「玉名郡肥猪町字十字陸軍墓碑銘全寫」
- ⑤三加和町教育委員会編 1994「上巻」『三加和町史』三加和町
- ⑥「山鹿郡山鹿町字宥明堂陸軍墓碑銘寫」
- ⑦「菊池郡隈府町字月見殿陸軍墓碑銘寫」
- ⑧北部町史編纂委員会編 1979『北部町史』北部町
- ⑨「飽田郡下立田警視墓碑銘寫」
- ⑩『靖国神社 史魂史西南の役』
- ⑪2002 「若宮官軍墓地跡・横手官軍墓地跡」『八代市文化財調査報告書』第16集 八代市教育委員会
- ⑫不知火町史編さん委員会編 1972『不知火町史』不知火町
- ⑬「葦北郡陣内村官軍墓碑銘寫」
- ⑭「天草郡牛深村字加世浦警視墓地碑銘」
- ⑮山川校区郷土研究会編 1999『山川招魂社誌』山川招魂社一三〇年祭記念事業実行委員会
- ⑯大分県護国神社社務所編 『西南の役百年祭しおり』
- ⑰日向市教育委員会編 1996『西南の役 細島官軍墓地—整備事業報告書—』
- ⑱「祇園洲墓地人名録」鹿児島県立図書館所蔵

資料紹介4

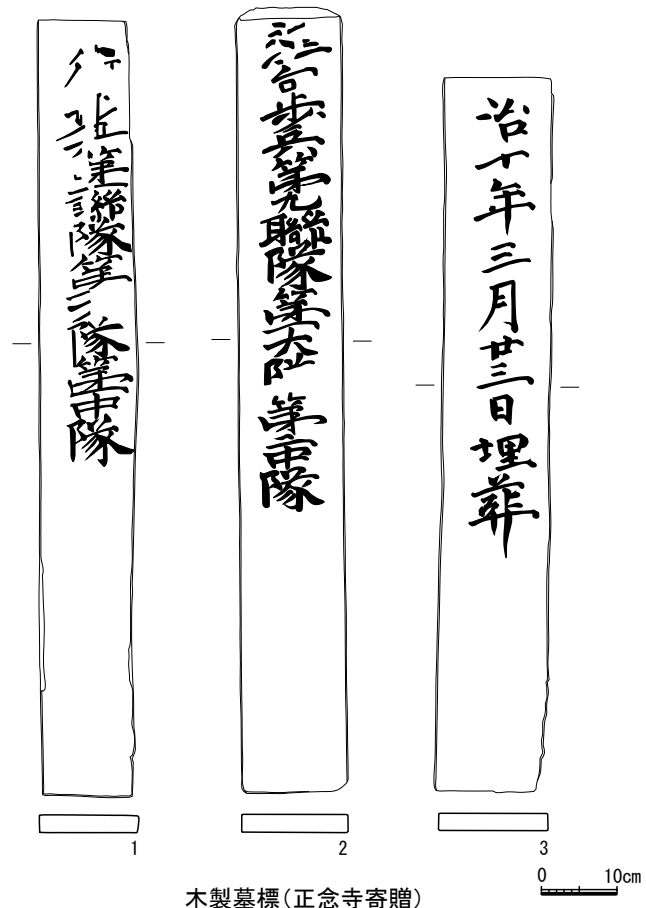
木製墓標

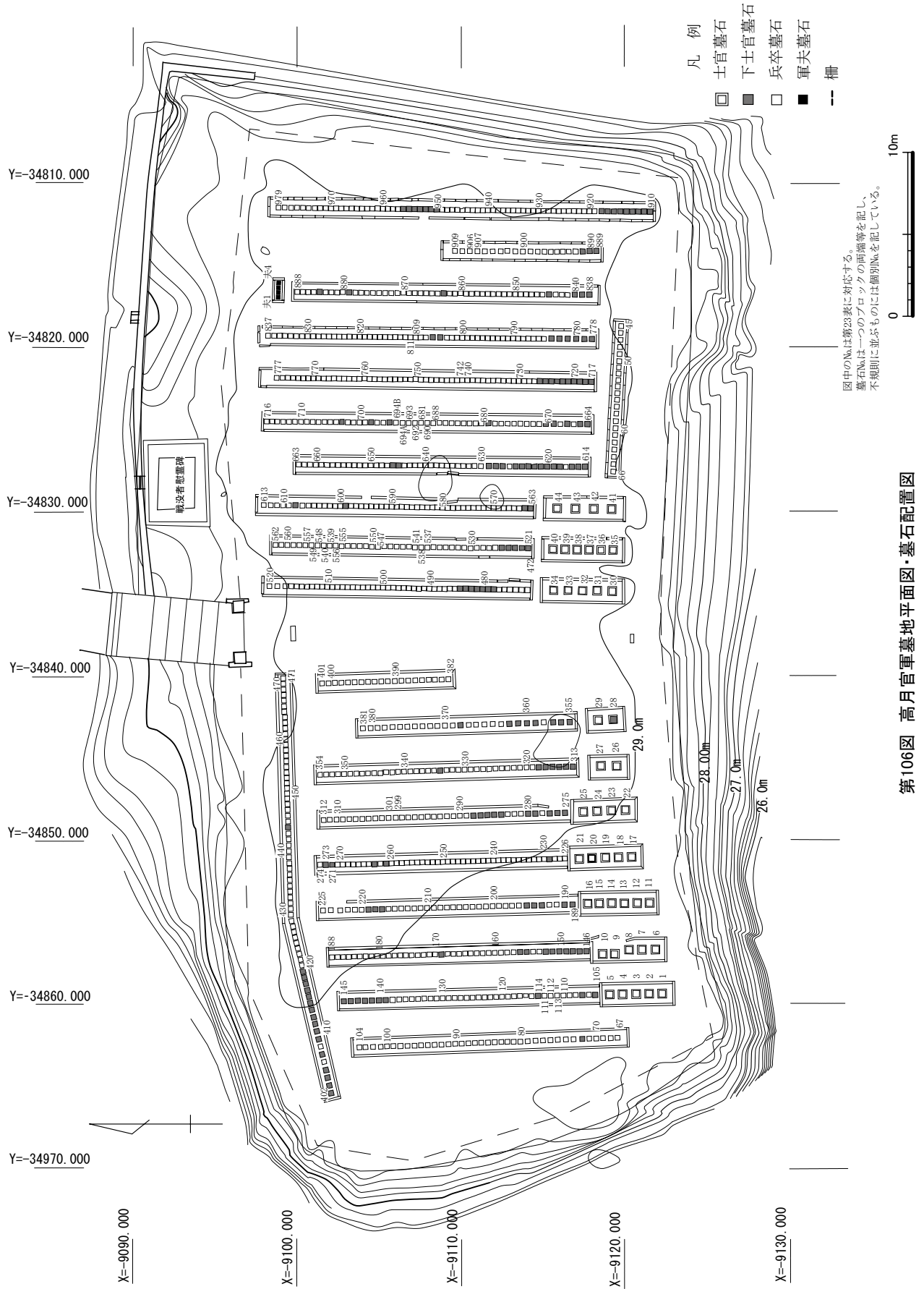
右図1～3は木製の墓標を製材した板である。3枚まとめて正念寺より御寄贈いただいた。明治11年に官軍墓地に現在の石製の墓標が建てられたため、不要になった木製の墓標が払い下げになった。その時に、当時の正念寺の住職が買い付け、寺の壁材等に利用していたらしい。

幅120～140mm、厚み25mm、全長102mm程度の板で、壁材に使われていたため、壁の内側として使われていた部分には煤が着く。元の断面は正方形に近かったと思われる、それを数枚に分割したものであるようだ。先端部は、かつて四角錐だった名残があるが、切断されている。文字は墨で書かれており、以下のとおりである。

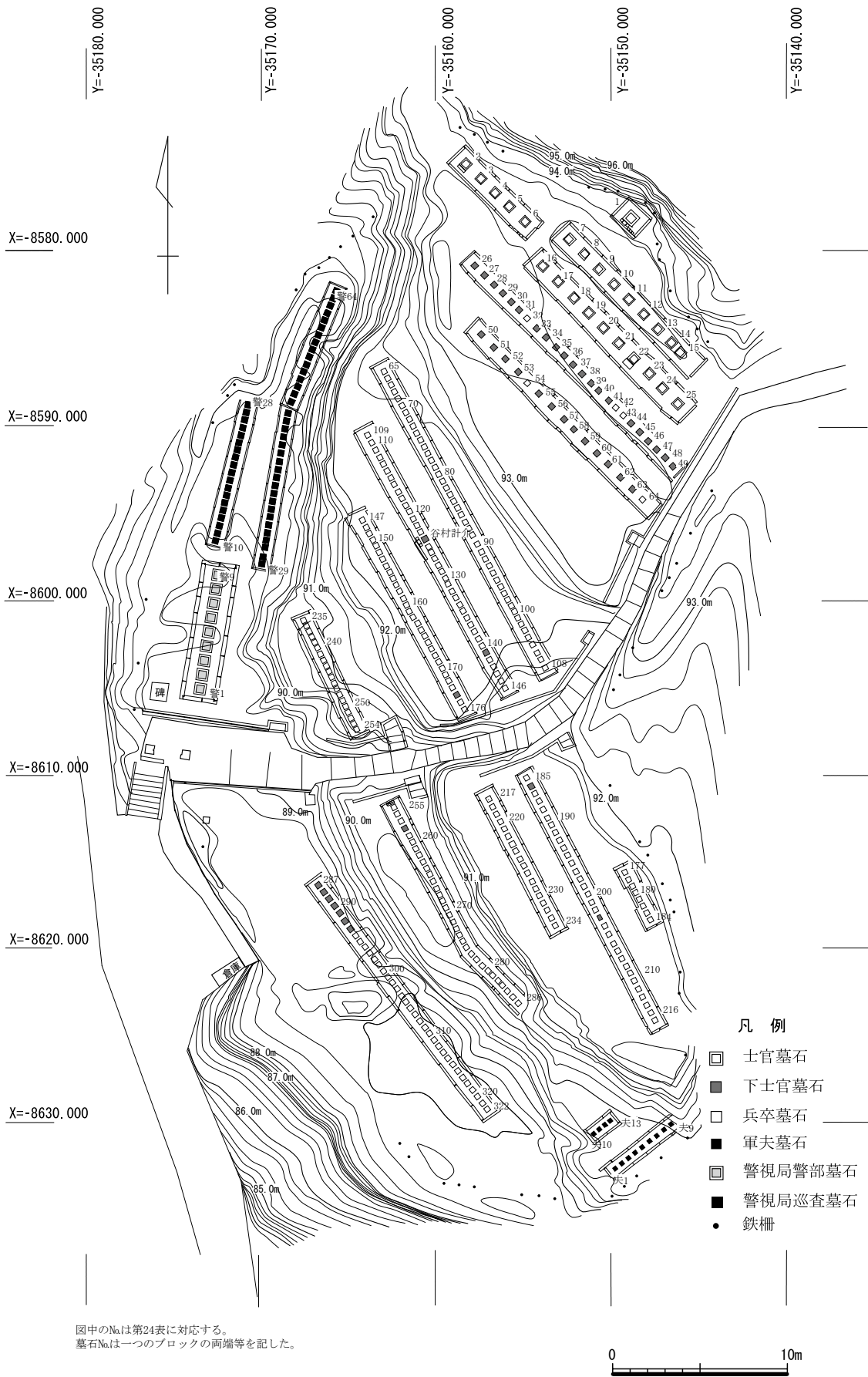
- 「□歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊」
- 「□台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊」
- 「□治十年三月廿三日埋葬」

このように墓標には中隊名及び埋葬日が記されている。埋葬日は戦死の日とは限らないことがわかる。





第106図 高月官軍墓地平面図・墓石配置図



第107図 宇蘇浦官軍基地平面図・墓石配置図

第VIII章 官軍墓地の調査

第23表 高月官軍墓地石碑名簿

凡例：( ) 内は記入なし。太ゴシック、網掛けは造字  
 石材劣化状況：0 劣化無し、建て替え済のもの。 1 表面がやや劣化している。 2 赤みを帯び、亀裂が入るなど劣化が著しい。

No.	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分		
1	陸軍大尉正七位	伊達 一民	明治十年三月六日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊長	山口縣	長門國阿武郡萩	士族	0 建替え
2	陸軍中尉從七位	外崎 敬武	明治十年三月四日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	青森縣	陸奥國津輕郡高野村	士族	0 建替え
3	陸軍少尉正八位	田原 篤敬	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後國玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	鹿児島縣	薩摩國鹿児島郡高麗町	士族	0 建替え
4	陸軍少尉試補	藤井 成高	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後國玉名郡二俣負傷後同日同国同郡木業病院ニ於テ死ス	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	山口縣	長門國美祿郡秋吉	士族	0 建替え
5	陸軍少尉試補	阿武 信忠	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後國玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	山口縣	長門國阿武郡萩河添	士族	1 赤みを帯びる
6	陸軍少尉正八位	喜多川 正方	明治十年三月七日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	島根縣	出雲國楢橋郡西野村	士族	1 赤みを帯びる
7	陸軍少尉正八位	西原 行藏	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	熊本鎮台歩兵第十三聯隊第三大隊第三中隊	長崎縣	肥前國養父郡轟木	士族	0 建替え
8	陸軍少尉試補	菅 裕	明治十年三月八日於熊本縣下肥後國玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	茨城縣	常陸國茨城郡新屋敷櫻小路	士族	2
9	陸軍大尉正七位	志岐 守行	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後國玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	鹿児島縣	薩摩國鹿児島郡武村	士族	0 建替え
10	陸軍中尉從七位	多田 彌吉	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	大坂鎮台豫備砲兵第二大隊第二小隊長心得	和歌山縣	紀伊國名草郡和歌山屋形町	士族	0 建替え
11	陸軍中尉從七位	福谷 義貞	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後國玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	山口縣	周防國都濃郡徳山	士族	0 建替え
12	陸軍中尉從七位	長江 貞恒	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後國山本郡七本戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	高知縣	阿波國名東郡下助任村	士族	1
13	陸軍少尉正八位	今泉 直門	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後國山本郡七本戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	山形縣	羽前國田川郡鶴ヶ岡馬場町	士族	1 赤みを帯びる
14	陸軍少尉正八位	乾 直作	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後國玉名郡二俣戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	石川縣	第十一大區四小区横山町	士族	0 建替え
15	陸軍少尉正八位	永久 直教	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	山口縣	長門國阿武郡萩河添	士族	0
16	陸軍少尉試補	進沼 浩	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	秋田縣	羽後國秋田郡中島本町	士族	0 建替え
17	陸軍士官見習	田原 明義	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後國玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	鹿児島縣	薩摩國鹿児島郡鹿児島本	士族	1 赤みを帯びる
18	陸軍少尉正八位	佐々 茂正	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後國玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	島根縣	因幡國邑美郡鳥取吉方村	士族	0 建替え
19	陸軍大尉正七位	諫早 清春	明治十年三月七日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	大坂鎮台工兵第二大隊第一小隊長	山口縣	長門國阿武郡萩	士族	0 建替え
20	陸軍中尉從七位	鳥羽 大作	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後國玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第四中隊	愛知縣	三河國額田郡岡崎	士族	0 建替え
21	陸軍士官見習	田中 元永	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後國玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	兵庫縣	攝津國河邊郡尼ヶ崎	士族	0 建替え
22	陸軍中尉從七位	石澤 忠厚	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後國山本郡判壺山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	高知縣	阿波國名東郡住吉島	士族	0 建替え
23	陸軍少尉試補	林 知安	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後國玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	新潟縣	越後國葦羽郡惟谷町	士族	0 建替え
24	陸軍少尉正八位	前田 善積	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	島根縣	因幡國邑美郡湯斯村	士族	0 建替え
25	陸軍少尉正八位	大西 定道	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後國山本郡植木戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	岡山縣	備前國御野郡七番町	士族	0 建替え
26	陸軍中尉從七位	河野 道良	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後國山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第三中隊	鹿児島縣	薩摩國鹿児島郡鹿児島	士族	0 建替え
27	陸軍少尉試補	夏川 重芳	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後國山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	滋賀縣	近江國犬上郡彦根中敷五丁目	士族	0 建替え
28	陸軍中尉從七位	和田 正英	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後國山本郡留戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第四中隊	和歌山縣	紀伊國名草郡和歌山	士族	2 赤みを帯びる
29	陸軍少尉試補	矢野 恵音	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後國山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	福岡縣	筑前國珂那郡第十三大区一小区三十四番地	士族	0 建替え
30	陸軍少尉正八位	原 親宗	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後國山本郡松底山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	岡山縣	備前國佐野郡美野村	士族	- 建替え
31	陸軍少尉正八位	横田 正徳	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂負傷後全日全国玉名郡木業病院ニ於テ死ス	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊	岡山縣	備中国窪屋郡中原	士族	- 建替え
32	陸軍中尉從七位	高坂 知次	明治十年三月六日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	山形縣	羽前國田川郡大泉鍛冶町	士族	- 赤みを帯びる
33	陸軍少尉試補	原田 眞敏	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後國玉名郡二俣戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	熊本縣	肥後國飽田郡京町	士族	- 赤みを帯びる
34	陸軍少尉試補	上村 行徳	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後國玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊	鹿児島縣	薩摩國鹿児島郡鹿児島	士族	- 建替え
35	陸軍中尉從七位	寺島 直道	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後國山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	山口縣	長門國阿武郡萩	士族	0 建替え
36	陸軍少尉正八位	岡崎 忠良	明治十年三月七日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	山口縣	長門國豊浦郡瀧部	士族	1 赤みを帯びる
37	陸軍中尉從七位	印牧 誠篤	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後國玉名郡二俣負傷後全日全国全部木業病院ニ於テ死ス	熊本鎮台歩兵第十三聯隊第二大隊第四中隊	石川縣	加賀國石川郡金澤横山町	士族	0 建替え
38	陸軍少尉試補	内藤 傳吉	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後國玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	青森縣	陸奥國津輕郡小人町	士族	0 建替え
39	陸軍少尉正八位	有井 雅之函	明治十年三月二十日於熊本縣下肥後國山本郡植木向坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第一中隊	山口縣	長門國阿武郡萩	士族	0 建替え
40	陸軍大尉正七位	内田 武宗	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後國玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊長	熊本縣	肥後國飽田郡熊本	士族	1 赤みを帯びる
41	陸軍少尉正八位	内田 為成	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後國山本郡留戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	山口縣	長門國豊浦郡豊浦	士族	0 建替え
42	陸軍少尉正八位	岡 良頼	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後國山本郡留戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	山口縣	長門國阿武郡萩	士族	0 建替え

	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考	
	階級	姓名	死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分			
43	陸軍中尉従七位	内藤 延慈	明治十年二月廿日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	廣島縣	備後国深津郡福山	士族	0	建替え
44	陸軍少尉試補	塩見 董信	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	滋賀縣	若狭國遠敷郡西津村	士族	1	赤みを帯びる
45	陸軍兵卒	深渡 仙之助	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	和歌山縣	紀伊国那賀郡三尾川村	平民	0	建替え
46	陸軍兵卒	三宅 幾三郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	岡山縣	備前国御野郡福駕村	平民	3	赤みを帯びる
47	陸軍兵卒	村井 弥吉	明治十年四月一日於熊本縣下肥後国山本郡吉次越戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	滋賀縣	近江国蒲生郡大森村	平民	0	建替え
48	陸軍兵卒	長井 留吉	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	堺縣	大和國添下郡砂村	平民	1	
49	陸軍兵卒	小坂 次大夫	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	和歌山縣	紀伊国名草郡森小午穂村	平民	0	建替え
50	陸軍兵卒	井上 留五郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	神奈川縣	武藏国多摩郡小金井	平民	1	建替え
51	陸軍兵卒	吉田 成秀	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	和歌山縣	紀伊国日高郡志賀組江駒村	平民	1	建替え
52	陸軍兵卒	南京 民藏	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	嶋根縣	出雲国飯石郡三刀屋村	平民	2	赤みを帯びる
53	陸軍兵卒	細澤 幸藏	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡舞尾村戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	静岡縣	駿河国庵原郡中河内村	平民	0	建替え
54	陸軍兵卒	日下部 久吉	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	岐阜縣	美濃国郡上郡戸川村	平民	0	建替え
55	陸軍兵卒	佐々木 權藏	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	岩手縣	陸中国閉伊郡下宮森村	平民	0	建替え
56	陸軍兵卒	佐々木 丑松	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	福島縣	磐城国行方郡鹿島村	平民	0	建替え
57	陸軍兵卒	鈴木 卯之吉	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	埼玉縣	武藏国埼玉郡尾曾根村	平民	0	建替え
58	陸軍兵卒	阪本 義太郎	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	石川縣	加賀国石川郡金澤長土堀	士族	0	建替え
59	陸軍兵卒	大鳥 恒次郎	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	埼玉縣	武藏国埼玉郡慈恩寺村	平民	0	建替え
60	陸軍兵卒	久保 富藏	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	堺縣	大和国吉野郡谷瀬村	士族	3	赤みを帯びる
61	陸軍兵卒	黒谷 傳助	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	和歌山縣	紀伊国牟婁郡津荷村	平民	0	建替え
62	陸軍兵卒	今井 庄藏	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	堺縣	大和国添上郡柳生村	平民	0	建替え
63	陸軍兵卒	上田 錦太郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	和歌山縣	紀伊国海士郡港北土佐殿丁	平民	2	赤みを帯びる
64	陸軍兵卒	原 石松	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊(第三中隊)	岡山縣	備前国児島郡植松村	平民	1	所属部隊が表面、出身地が左
65	陸軍兵卒	木村 長之助	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	(近衛)歩兵第一聯隊(第一大)隊第一中隊	石川縣	越前国南條郡清水村	平民	3	赤みを帯びる
66	陸軍兵卒	田中 滝藏	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	廣瀨縣	安藝国豊田郡萬里村	平民	2	赤みを帯びる
67	陸軍兵卒	小杉 武五郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	高知縣	阿波国名東郡富田浦	士族	0	建替え
68	陸軍兵卒	森 徳松	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	千葉縣	安房国安房郡相濱村	平民	0	
69	陸軍兵卒	潮見 伊之吉	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	京都府	丹後国加佐郡杉山村	平民	0	建替え
70	陸軍兵卒	佐野 傳藏	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	三重縣	第八大区三小区神納村	平民	1	
71	陸軍喇叭卒	松場 弥藏	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	三重縣	伊勢国奄藝郡三宅村	平民	0	建替え
72	陸軍伍長	青戸 建衛	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	嶋根縣	出雲国意宇郡和多村	士族	1	赤みを帯びる
73	陸軍兵卒	長澤 由藏	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊	-	-	-	0	建替え
74	陸軍兵卒	竹下 熊吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	京都府	丹波国天田郡笹尾村	平民	1	赤みを帯びる
75	陸軍兵卒	岡村 弥兵衛	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第一大隊第三中隊	山口縣	周防国吉敷郡下郷村	平民	1	赤みを帯びる
76	陸軍兵卒	山田 斧三郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	岐阜縣	美濃国郡上郡鳥馬場村	平民	0	建替え
77	陸軍兵卒	青木 虎太郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第四中隊	滋賀縣	近江国蒲生郡池田村	平民	0	建替え
78	陸軍兵卒	内田 卯助	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡鈴妻村負傷後全日全国玉名郡木葉病院に於てス	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第三中隊	長崎縣	肥前国第二十大区五小区	平民	0	建替え
79	陸軍兵卒	貞安 房吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	山口縣	周防国熊毛郡伊保庄村	平民	1	赤みを帯びる
80	陸軍兵卒	瀬尾 米藏	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣島縣	備後国奴可郡又代村	平民	1	赤みを帯びる
81	陸軍兵卒	竹内 富藏	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第四中隊	三重縣	伊勢国一志郡山田野村	平民	1	赤みを帯びる
82	陸軍兵卒	佐々木 普之助	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣島縣	備後国安那郡北山村	平民	1	赤みを帯びる
83	陸軍兵卒	辻本 庭次郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	三重縣	伊勢国一志郡小阿坂村	平民	0	建替え
84	陸軍兵卒	森 佐一郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡舟底山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	三重縣	伊勢国貞弁郡下野尻村	平民	0	建替え
85	陸軍喇叭卒	小林 亀太郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊	-	-	-	1	赤みを帯びる

第Ⅷ章 官軍墓地の調査

	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分		
86	陸軍喇叭卒	原田 常吉	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	愛媛縣 讚岐國三木郡田中村	平民	0	建替え
87	陸軍兵卒	湯本 正晴	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂負傷後全月八日全国玉名郡木葉病院ニ於テ死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	島根縣 因幡国邑美郡湯村	士族	0	建替え
88	陸軍兵卒	山川 仙吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂負傷後全月八日全国玉名郡木葉病院ニ於テ死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	三重縣 伊勢國度會郡迫門浦	平民	0	建替え
89	陸軍兵卒	村木 平三郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡舟底山戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	三重縣 伊勢國度會郡宮石村	平民	0	建替え
90	陸軍兵卒	中西 喜市	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	三重縣 伊勢國多氣郡栗谷村	平民	1	赤みを帯びる
91	陸軍兵卒	原山 兼次	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台騎兵第一大隊	長野縣 信濃国水内郡下桶川村	平民	0	建替え
92	陸軍兵卒	竹中 安次郎	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第三中隊	和歌山縣 紀伊国宍粟郡滝河原村	平民	1	赤みを帯びる
93	陸軍兵卒	山本 龜吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第一中隊	滋賀縣 近江国甲賀郡上池田村	平民	1	赤みを帯びる
94	陸軍兵卒	稲増 傳次郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂負傷後全日全国玉名郡木葉病院ニ於テ死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	三重縣 伊勢國伊賀郡上林	平民	1	赤みを帯びる
95	陸軍兵卒	山口 石松	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	石川縣 越中国砺波郡高築嶺	平民	0	建替え
96	陸軍兵卒	平川 須摩吉	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	福岡縣 筑後国生業郡橋田村	平民	1	赤みを帯びる
97	陸軍兵卒	朝永 辰次郎	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第二中隊	長崎縣 肥前国彼杵郡龜浦村	平民	0	建替え
98	陸軍曹長	大山 英二	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	高知縣 阿波国名東郡佐古村	士族	0	建替え
99	陸軍兵卒	古田 幸悪	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	廣島縣 安藝國沼田郡小河内村	平民	1	赤みを帯びる
100	陸軍兵卒	中村 松藏	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	廣島縣 安藝國浪田郡長東村	平民	2	赤みを帯びる
101	陸軍兵卒	安藤 仁左エ門	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	愛知縣 尾張國春日井郡上土村	平民	2	赤みを帯びる
102	陸軍兵卒	細谷 治之吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡瓶割坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	兵庫縣 但馬國朝来郡岩津村	平民	1	赤みを帯びる
103	陸軍兵卒	天沼 吉五郎	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	埼玉縣 武藏國比企郡一本松村	平民	2	赤みを帯びる
104	陸軍兵卒	助川 龜吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	茨城縣 常陸國茨城郡常磐	平民	0	建替え
105	陸軍伍長	岩田 鉦藏	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	廣島縣 安藝國高田郡吉田村	士族	0	建替え
106	陸軍兵卒	金澤 卯之助	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	長野縣 信濃國伊那郡中箕輪村	平民	1	赤みを帯びる
107	陸軍伍長	森田 直方	明治十年三月十日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第四中隊	堺縣 大和國式上郡芝村	士族	0	建替え
108	陸軍喇叭卒	小池 金作	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	山梨縣 甲斐國山梨郡神金村	平民	0	建替え
109	陸軍兵卒	小島 弥章	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	石川縣 加賀國石川郡金澤揚地町	士族	0	建替え
110	陸軍兵卒	河村 豊吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	山口縣 長門國大津郡三隅下村	平民	1	赤みを帯びる
111	陸軍兵卒	清水 清五郎	明治十年三月十日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	滋賀縣 近江國高島郡藥園村	平民	1	赤みを帯びる
112	陸軍兵卒	渡邊 吉政	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	山形縣 羽前國置賜郡左家	士族	1	赤みを帯びる
113	陸軍兵卒	佐竹 乙八	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	岐阜縣 美濃國安八郡豊濃新田	平民	0	赤みを帯びる
114	陸軍軍曹	庄田 庸一	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	石川縣 加賀國石川郡上弓野町	士族	0	建替え
115	陸軍兵卒	河井 常太郎	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	和歌山縣 紀伊國那賀郡西坂本村	平民	1	赤みを帯びる
116	陸軍兵卒	三本 八百吉	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	愛媛縣 讚岐國大内郡三本松村	平民	1	赤みを帯びる
117	陸軍兵卒	阿部 幸治	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	宮城縣 陸前國栗原郡栗原村	平民	1	赤みを帯びる
118	陸軍兵卒	谷奥 萬次郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	三重縣 第十九大区木津呂村	平民	0	建替え
119	陸軍兵卒	工藤 秀作	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	山形縣 羽前國田川郡大泉中畑	士族	1	赤みを帯びる
120	陸軍兵卒	清水 又次郎	明治十年三月十日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	兵庫縣 但馬國第二大区六小区鍛冶中村	平民	0	建替え
121	陸軍兵卒	東條 常吉	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	滋賀縣 近江國滋賀郡家田村	平民	1	赤みを帯びる
122	陸軍兵卒	中村 多七	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	滋賀縣 近江國神崎郡神郷村	平民	1	赤みを帯びる
123	陸軍兵卒	津田 卯之助	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	和歌山縣 紀伊國名草郡新魚町	平民	0	建替え
124	陸軍兵卒	上野 定藏	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	山梨縣 甲斐國八代郡八千藏村	平民	1	赤みを帯びる
125	陸軍兵卒	加藤 伊三郎	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次越戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	神奈川縣 相模國足柄郡掛川村	平民	0	建替え
126	陸軍兵卒	今井 勇藏	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	新潟縣 越後國蒲原郡下関新田	平民	0	建替え
127	陸軍兵卒	白井常吉	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	山口縣 周防國吉敷郡本郷村	平民	1	赤みを帯びる

	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分		
128	陸軍兵卒	平澤 常友	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	三重縣 伊勢国桑名郡矢田河原村	士族	1	赤みを帯びる
129	陸軍兵卒	木田 忠五郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	堺縣 大和高市郡柏森村	平民	0	
130	陸軍兵卒	市原 守衛	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡向坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第四中隊	石川縣 加賀国石川郡下百々女町	士族	-	建替え
131	陸軍兵卒	三橋 重吉	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊	東京府 第一大区四小区永富町	平民	0	建替え
132	陸軍兵卒	所 喜兵衛	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	岐阜縣 美濃国池田郡瀧村	平民	2	赤みを帯びる
133	陸軍兵卒	佐田 留吉	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	三重縣 伊勢国度會郡山日辻久苗村	平民	2	赤みを帯びる
134	陸軍兵卒	森 武男	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	島根縣 石見国安濃郡多根村	平民	0	建替え
135	陸軍兵卒	田中 幸太郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	三重縣 伊勢国一志郡榎原村	平民	0	建替え
136	陸軍兵卒	岡本 弥三郎	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第三中隊	和歌山縣 紀伊国名草郡名高村	平民	0	建替え
137	陸軍兵卒	寺島 國之助	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊	-	-	0	
138	陸軍伍長	平田 延秋	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	石川縣 加賀国石川郡金澤新坂町	士族	0	建替え
139	陸軍軍曹	小林 友喜	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊	石川縣 加賀国石川郡金澤町	士族	0	
140	陸軍伍長	赤尾 秀雄	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	三重縣 伊勢国一志郡久居下大手町	士族	2	
141	陸軍伍長	鯨井 亀男	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	石川縣 越中国新川郡富山千石町	士族	0	
142	陸軍軍曹	楠本 定楠	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	和歌山縣 紀伊国名草郡和歌山弁財天下	平民	2	赤みを帯びる
143	陸軍伍長	宮崎 正教	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	山口縣 長門国豊浦郡豊浦	士族	0	建替え
144	陸軍軍曹	石原 義忠	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死、負傷後全月十日全国玉名郡本葉病院ニ於テ死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	山口縣 長門国厚狭郡稲倉村	士族	2	赤みを帯びる
145	陸軍軍曹	相良 壽雄	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	石川縣 越前国足羽郡福井	士族	2	赤みを帯びる
146	陸軍曹長	中村 豊五郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	島根縣 出雲国意宇郡雜賀町	士族	-	建替え
147	陸軍曹長	岩本 金忠	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台豫備砲兵第二大隊	石川縣 加賀国石川郡金澤	士族	-	建替え
148	陸軍軍曹	恩田 實滋	明治十年三月十二日於熊本縣下肥後国山本郡白木村戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第二中隊	山口縣 周防国玖珂郡第二大区四小区三百七拾八番地	士族	-	
149	陸軍伍長	栗山 一直	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台豫備砲兵第二大隊	石川縣 加賀国石川郡金澤並木町	士族	1	赤みを帯びる
150	陸軍伍長	湯川 喜蘇次郎	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	和歌山縣 紀伊国日高郡比井村	平民	-	建替え
151	陸軍軍曹	富田 定雄	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	石川縣 加賀国石川郡金澤	士族	1	赤みを帯びる
152	陸軍伍長	牧 庄次郎	明治十年三月十二日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊	-	-	2	赤みを帯びる
153	陸軍兵卒	飛田 好太	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	岡山縣 備中国後月郡青野村	平民	-	建替え
154	陸軍兵卒	菅野 春松	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	和歌山縣 紀伊国名草郡廣瀬西紺屋町	平民	-	建替え
155	陸軍兵卒	中村 幸	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡二俣負傷後全月十二日同国玉名郡本葉病院ニ於テ死ス	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	石川縣 加賀国石川郡島田町	平民	0	建替え
156	陸軍軍曹	芦田 釘吾	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台豫備砲兵第二大隊	岡山縣 備中国加陽郡西村	士族	0	建替え
157	陸軍兵卒	二松 喜三郎	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	石川縣 加賀国石川郡御小人町	士族	1	赤みを帯びる
158	陸軍兵卒	中島 幸七	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	京都府 丹波国桑田郡神吉村	平民	2	赤みを帯びる
159	陸軍兵卒	芳岡 文藏	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死、負傷後全日全国玉名郡本葉病院ニ於テ死ス	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	山口縣 長門国厚狭郡吉田村	平民	2	赤みを帯びる
160	陸軍兵卒	村上 為一郎	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後国玉名郡本葉戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	福岡縣 豊前国田川郡黒田村	平民	2	赤みを帯びる
161	陸軍兵卒	黒谷 友松	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	和歌山縣 紀伊国名草郡湊大工町	平民	0	建替え
162	陸軍兵卒	田中 庄吉	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	滋賀縣 近江国滋賀郡衣川	平民	2	赤みを帯びる
163	陸軍兵卒	肥塚 政吉	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	島根縣 石見国那賀郡黒川村	平民	0	建替え
164	陸軍兵卒	政尾 竹次郎	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	島根縣 因幡国邑美郡馬取	士族	0	建替え
165	陸軍兵卒	太田 是一	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	和歌山縣 紀伊国海士郡今福村	平民	1	赤みを帯びる
166	陸軍兵卒	亀井 弥太郎	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	和歌山縣 紀伊国名草郡廣瀬西紺屋町	平民	2	赤みを帯びる
167	陸軍兵卒	富岡 松次郎	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台砲兵第四大隊第二小隊	滋賀縣 近江国坂田郡新庄馬場村	平民	1	
168	陸軍兵卒	松井 作太郎	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	大坂府 攝津国東成郡天王寺邑	平民	1	赤みを帯びる
169	陸軍伍長	柳 幸三郎	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	山口縣 周防国佐波郡新田村	平民	0	建替え

第Ⅷ章 官軍墓地の調査

	表面		右側面 死亡月日・死亡場所	左側面 所属部隊	表面		石材 劣化 状況	備考	
	階級	姓名			出身地	旧身分			
170	陸軍兵卒	友田 喜七	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	石川縣	越前国坂井郡上関村	平民	0	建替え
171	陸軍兵卒	池田 伴藏	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	山口縣	長門国厚狭郡西吉部村	平民	3	赤みを帯びる
172	陸軍兵卒	松本 若松	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	山口縣	周防国大島郡地家室	平民	2	赤みを帯びる
173	陸軍兵卒	木下 留藏	明治十年三月十二日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	滋賀縣	近江国伊香郡杵野中村	平民	2	赤みを帯びる
174	陸軍兵卒	木虎 藤七	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	堺縣	大和国添上郡邑地下村	平民	1	赤みを帯びる
175	陸軍兵卒	杉田 音吉	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	堺縣	河内国茨田郡對馬江村	平民	0	建替え
176	陸軍兵卒	平田 松藏	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	東京府	武藏国第十大區四小區千住地組	平民	0	建替え
177	陸軍兵卒	今西 正敬	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	和歌山縣	紀伊国日高郡小熊村	平民	1	
178	陸軍兵卒	村岡 豊藏	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	山口縣	長門国阿武郡宇田村	平民	0	建替え
179	陸軍兵卒	阪倉 能道	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	和歌山縣	紀伊国名草郡鷹通町	士族	1	
180	陸軍兵卒	佐々木 千一	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第二中隊	長崎縣	肥前国石川郡外屋村	平民	1	赤みを帯びる
181	陸軍兵卒	森田 音松	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	京都府	山城郡葛野郡西九條村	平民	1	赤みを帯びる
182	陸軍兵卒	五反田 順六	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣島縣	安藝国豊田郡鍛冶屋村	平民	2	赤みを帯びる
183	陸軍兵卒	北川 清太郎	明治十年三月十日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	堺縣	和泉国南部内畑村	平民	0	建替え
184	陸軍兵卒	本多 了勝	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	堺縣	大和国葛上郡室村	平民	0	建替え
185	陸軍兵卒	小田 伸次郎	明治十年三月十日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣島縣	備後国奴可郡戸宇村	平民	0	建替え
186	陸軍兵卒	植田 音吉	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第四中隊	堺縣	大和国高市郡四分村	平民	2	赤みを帯びる
187	陸軍兵卒	麓木 義忠	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死後全月十日全国玉名郡木葉病院ニ於テ死ス	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	石川縣	加賀国石川郡金澤町	士族	2	赤みを帯びる
188	陸軍兵卒	上岡 米吉	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死後全月十一日同国同郡木葉病院ニ於テ死ス	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣島縣	安藝国豊田郡椋梨村	平民	0	建替え
189	陸軍軍曹	矢島 芳太郎	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡豊岡村戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	京都府	丹波国桑田郡龟岡荒塚村十一番地	士族	0	建替え
190	陸軍軍曹	丸田 峯介	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	石川縣	越前国足羽郡佐佐枝町	士族	0	建替え
191	陸軍兵卒	吉野 鳥太郎	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	大分縣	豊後国速水郡内滝村	平民	2	赤みを帯びる
192	陸軍兵卒	田中 谷藏	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	神奈川縣	武藏国多摩郡小川村	平民	3	赤みを帯びる
193	陸軍軍曹	杉本 惣次郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第一中隊	堺縣	大和国添上郡小泉村	士族	0	建替え
194	陸軍伍長	坪川 正務	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	石川縣	越前国足羽郡地蔵町	士族	1	赤みを帯びる
195	陸軍軍曹	堀口 辰次郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第四中隊	石川縣	加賀国江沼郡大聖寺藤木	士族	-	建替え
196	陸軍兵卒	太田 勘四郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死後全月十四日同国同郡木葉病院ニ於テ死ス	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	岐阜縣	美濃国厚見郡第一大區八小區若森	平民	-	建替え
197	陸軍兵卒	加戸 英勝	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	高知縣	阿波国名東郡沖ノ須	士族	-	建替え
198	陸軍兵卒	吉野 寅吉	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	千葉縣	下総国相馬郡大井村	平民	-	建替え
199	陸軍兵卒	矢船 亀次郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国宍粟郡湯浅村	平民	3	赤みを帯びる
200	陸軍兵卒	平尾 與三松	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	三重縣	伊勢国一志郡丹生俣村	平民	2	赤みを帯びる
201	陸軍兵卒	吉本 音三郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	山口縣	長門国厚狭郡万倉村	平民	2	赤みを帯びる
202	陸軍兵卒	濱岡 勝太郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣島縣	安藝国豊田郡向田野浦村	平民	1	赤みを帯びる
203	陸軍兵卒	藤井 安吉	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊	-	-	-	0	建替え
204	陸軍兵卒	道谷 好松	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡倉坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣島縣	安藝国豊田郡大濱村	平民	0	
205	陸軍兵卒	大島 茂吉	明治十年三月十二日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	山口縣	周防国佐波郡西ノ浦	平民	0	建替え
206	陸軍兵卒	畑中 菊次郎	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第一中隊	和歌山縣	紀伊国第七大區十四小區西屋敷村	平民	1	赤みを帯びる
207	陸軍兵卒	信原 富太郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡原倉坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	岡山縣	備中国川上郡福地村	平民	2	赤みを帯びる
208	陸軍兵卒	竹野 金藏	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	山口縣	周防国都農郡豊井村	平民	2	赤みを帯びる
209	陸軍兵卒	小林 政吉	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国那賀郡西坂本村	平民	2	赤みを帯びる
210	陸軍兵卒	武井 熊太郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊	-	-	-	3	赤みを帯びる
211	陸軍兵卒	関口 弥三郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	群馬縣	上野国新田郡赤堀村	平民	2	赤みを帯びる



	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分		
212	陸軍兵卒	藤井 光晴	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	島根縣	因幡国邑美郡行徳村	士族	3 赤みを帯びる
213	陸軍兵卒	宮藤 多三郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	島根縣	石見国鹿足郡森村	士族	1
214	陸軍兵卒	中東 音一	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	山口縣	周防国佐波郡東佐波村	平民	0 建替え
215	陸軍兵卒	東窪 伊平	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	堺縣	大和国添上郡長引村	平民	2 赤みを帯びる
216	陸軍兵卒	中川 善次郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	三重縣	伊勢国飯高郡岡本村	平民	0 建替え
217	陸軍軍曹	寺田 篤三郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第四中隊	愛媛縣	伊豫国越知郡藏敷村	平民	0 建替え
218	陸軍軍曹	山科 律次	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	熊本縣	肥後国飽田郡寺原財木町	士族	0 建替え
219	陸軍伍長	島崎 信義	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	熊本縣	肥後国託摩郡神水村	士族	0 建替え
220	陸軍兵卒	上岡 久米助	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣島縣	安藝国高田郡北村	平民	1 赤みを帯びる
221	陸軍兵卒	今本 平太	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	三重縣	伊勢国伊賀郡猪田	-	0 建替え
222	陸軍兵卒	日野 元助	明治十年三月十二日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣島縣	備後国深津郡吉津村	平民	0 建替え
223	陸軍兵卒	岩本 甚五郎	明治十年三月十二日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台工兵第一大隊第二小隊	静岡縣	伊豆国加茂郡伊豆山村	平民	0 建替え
224	陸軍兵卒	板持 豊藏	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	島根縣	出雲国大原郡寺領村	平民	0 建替え
225	陸軍兵卒	山中 倉次郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	廣島縣	備後国芦田郡河西村	平民	1 赤みを帯びる
226	陸軍兵卒	西 三郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	三重縣	紀伊国牟婁郡神木村	平民	- 建替え
227	陸軍兵卒	大森 六藏	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	滋賀縣	近江国高島郡伊井村	平民	1 赤みを帯びる
228	陸軍兵卒	山下 村藏	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	岡山縣	備中国阿賀郡此口部村	平民	0 建替え
229	陸軍伍長	瀧 幸藏	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台砲兵第四大隊	福島縣	岩城国安達郡二本松御徒土町	士族	0 建替え
230	陸軍兵卒	笹田 三郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	石川縣	加賀国石川郡金澤町	士族	0 建替え
231	陸軍兵卒	菱川 富三郎	明治十年三月十二日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	愛知縣	尾張国春日井郡出来町	士族	2 赤みを帯びる
232	陸軍兵卒	皿井 虎三郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	愛知縣	尾張国知多郡廣目村	平民	2 赤みを帯びる
233	陸軍兵卒	仙波 七馬	明治十年三月十二日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	愛媛縣	伊豫国風早郡本谷村	平民	2 赤みを帯びる
234	陸軍兵卒	田川 虎吉	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	滋賀縣	近江国伊香郡椿坂村	平民	0 建替え
235	陸軍兵卒	小島 繁次	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	滋賀縣	近江国野洲郡小島村	平民	2 赤みを帯びる
236	陸軍兵卒	山田 友吉	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	神奈川縣	武藏国都築郡岡上村	平民	1 赤みを帯びる
237	陸軍兵卒	菅 元三郎	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	東京府	武藏国豊島郡谷中村	平民	0 建替え
238	陸軍兵卒	鳥田 忠三郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	石川縣	加賀国石川郡運上島村	士族	0 建替え
239	陸軍兵卒	西村 利兵衛	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国那賀郡安井村	平民	0 建替え
240	陸軍兵卒	鹿島 喜代松	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	神奈川縣	武藏国久良郡富岡村	平民	2 赤みを帯びる
241	陸軍兵卒	山下 彌三郎	明治十年三月廿二日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	山梨縣	甲斐国山梨郡平等村	平民	1
242	陸軍兵卒	臺頭 菊次	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	福島縣	磐城国行方郡鹿島村	平民	0
243	陸軍兵卒	木崎 敬次郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	埼玉縣	武藏国埼玉郡柏崎村	平民	2 赤みを帯びる
244	陸軍兵卒	池田 義則	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	和歌山縣	紀伊国名草郡新堀片原	士族	2 赤みを帯びる
245	陸軍兵卒	山口 雷藏	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	三重縣	志摩国荅志郡鳥羽藤之郷村	平民	0 建替え
246	陸軍兵卒	西田 興吉	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	兵庫縣	攝津国川邊郡平野村	平民	1
247	陸軍兵卒	上田 捨次郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	大坂府	攝津国島上郡唐崎村	平民	0 建替え
248	陸軍兵卒	道古 音次郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	堺縣	和泉国泉南郡第三大区一小區	平民	0 建替え
249	陸軍兵卒	片岡 基次	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	岡山縣	備前国御野郡第一大区一小區山下	士族	2 赤みを帯びる
250	陸軍兵卒	浦木 幸八	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	和歌山縣	紀伊国牟婁郡朝来村	平民	0 建替え
251	陸軍兵卒	藤浦 辰藏	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	山口縣	周防国玖珂郡室木村	平民	1
252	陸軍兵卒	坂井 音松	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	三重縣	第十六大区惠利原村	平民	0 建替え
253	陸軍兵卒	薬科 熊之助	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	静岡縣	駿河国益頭郡八楠田村	平民	1

第Ⅷ章 官軍墓地の調査

	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考	
	階級	姓名	死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分			
254	陸軍兵卒	川口 光藏	明治十年三月十二日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	山口縣	周防国熊毛郡岩田村	平民	0	建替え
255	陸軍兵卒	豊岡 松之助	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	大坂府	攝津国東成郡	平民	2	赤みを帯びる
256	陸軍兵卒	藤川 柳助	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	廣島縣	安藝国高田郡下入口村	平民	0	建替え
257	陸軍兵卒	平田 知節	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	和歌山縣	紀伊国牟婁郡田邊	平民	0	建替え
258	陸軍兵卒	太田 伊勢藏	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	三重縣	伊勢国一志郡雲出村	平民	0	建替え
259	陸軍兵卒	西村 富七	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡松底山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	京都府	山城国愛宕郡下京東姉小路	平民	0	建替え
260	陸軍兵卒	中田 谷藏	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	静岡県	駿河国志太郡彌左エ門新田	平民	0	建替え
261	陸軍伍長	友高 安信	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡舞尾戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	石川縣	越前国大野郡大野	士族	0	建替え
262	陸軍兵卒	梶間 平四郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡原倉坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	山口縣	周防国吉敷郡東坂波村	平民	2	赤みを帯びる
263	陸軍軍曹	川合 生太郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	石川縣	加賀国石川郡金澤荒町	士族	0	建替え
264	陸軍兵卒	宮道 弁藏	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国名草郡毛見村	平民	0	建替え
265	陸軍兵卒	重裕 末吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	長崎縣	肥前国養父郡立石村	-	3	赤みを帯びる
266	陸軍兵卒	三橋 要藏	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	千葉縣	下總国千葉郡冬田村	平民	1	赤みを帯びる
267	陸軍兵卒	酒井 安次郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	福岡縣	筑後国三潞郡瀬下村	平民	2	赤みを帯びる
268	陸軍兵卒	西村 菊次郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	山口縣	周防国大島郡和佐村	平民	0	建替え
269	陸軍兵卒	松本 長藏	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国玉名郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	高根縣	因幡国邑美郡鳥取呂以村	士族	0	建替え
270	陸軍兵卒	石濱 直男	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	兵庫縣	淡路国津名郡安平下村	士族	0	建替え
271	陸軍伍長	岡田 長太郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	滋賀縣	若狭国遠敷郡府中村	平民	0	建替え
272	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番
273	陸軍伍長	青柳 重生	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	福岡縣	筑前国早良郡地行米田橋	士族	0	建替え
274	陸軍兵卒	小泉 磯太郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	神奈川縣	武藏国久良岐郡戸辺村	平民	0	建替え
275	陸軍曹長	廣田 喜次	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	熊本縣	肥後国飽田郡花園村	士族	-	建替え
276	陸軍軍曹	石田 契知	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	石川縣	筑前国足羽郡鏡川上町	士族	0	建替え
277	陸軍軍曹	油原 良致	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国海士郡小雑賀村	士族	0	建替え
278	陸軍兵卒	近藤 清五郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	神奈川縣	相模国鎌倉郡和泉村	平民	1	
279	陸軍伍長	高桑 以敬	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	石川縣	加賀国石川郡金澤石坂角場二丁目	士族	2	赤みを帯びる
280	陸軍伍長	岡田 保之	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	埼玉縣	武藏国埼玉郡忍同心町	士族	1	赤みを帯びる
281	陸軍兵卒	水原 伊藏	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	堺縣	大和国葛下郡五位堂村	平民	1	
282	陸軍兵卒	米山 竹五郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	神奈川縣	武藏国都築郡新羽村	平民	2	赤みを帯びる
283	陸軍兵卒	青内 太平	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	長崎縣	肥前国神埼郡大回村	平民	2	赤みを帯びる
284	陸軍伍長	富田 藤吉	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡舞尾村戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	埼玉縣	武藏国秩父郡大田村	平民	0	建替え
285	陸軍伍長	加田 扶齊	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	高根縣	出雲国意宇郡雑賀町横濱	士族	0	建替え
286	陸軍伍長	吉田 要人	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	和歌山縣	紀伊国海士郡塩田村	士族	0	建替え
287	陸軍伍長	吉野 貞裕	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	堺縣	大和国葛上郡榑羅村	士族	2	赤みを帯びる
288	陸軍伍長	有具 常吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊	-	-	-	0	建替え
289	陸軍兵卒	内田 嘉平	明治十年三月二十日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	静岡県	駿河国富士郡吉原	平民	3	赤みを帯びる
290	陸軍兵卒	菊地 金之助	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊	-	-	-	2	赤みを帯びる
291	陸軍兵卒	荒井 政藏	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡舞尾村戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	東京府	武藏国豊島郡神田大和町	平民	2	赤みを帯びる
292	陸軍兵卒	向井 清之助	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	三重縣	志摩国英虞郡立神村	平民	2	赤みを帯びる
293	陸軍兵卒	小野田 弥三郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣村戦死	東京鎮台工兵第一大隊第二小隊	神奈川縣	武藏国多摩郡小川村	平民	1	建替え
294	陸軍兵卒	喜多 健之助	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第一中隊	和歌山縣	紀伊国那賀郡川尻村	平民	3	赤みを帯びる
295	陸軍兵卒	大坪 峰次郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	長崎縣	肥前国佐賀郡永田村	平民	0	建替え
296	陸軍兵卒	吉田 助太郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	石川縣	越中国礪波郡安居村	平民	2	赤みを帯びる

	表面		右側面 死亡月日・死亡場所	左側面 所属部隊	裏面		石材 劣化 状況	備考	
	階級	姓名			出身地				旧身分
297	陸軍兵卒	松村 澤吉	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	島根縣	因幡国邑美郡鳥取	平民	1	
298	陸軍兵卒	瀧本 藤藏	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	石川縣	越中国婦負郡布谷村	平民	0	建替え
299	陸軍兵卒	福田 金次郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊	東京府	第十六區三小區浅草橋場町	平民	1	
300	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番
301	陸軍兵卒	鎌野 岩松	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	堺縣	和泉国日根郡佐野村	平民	0	建替え
302	陸軍兵卒	前川 雷兵衛	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	三重縣	伊勢国多気郡平谷村	平民	1	
303	陸軍兵卒	駒井 三四郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	滋賀縣	近江国栗田郡十里村	平民	0	建替え
304	陸軍兵卒	森 辰五郎	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次越戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第四中隊	和歌山縣	紀伊国日高郡原日浦村	平民	3	赤みを帯びる、大きき違う
305	陸軍兵卒	高野 他五郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	石川縣	越前国足羽郡奥町	士族	1	
306	陸軍兵卒	藤田 友三郎	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	廣島縣	安藝国安藝郡牛田村	平民	3	赤みを帯びる
307	陸軍兵卒	平井 友二郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡原倉坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	岡山縣	備後国後月郡井山村	平民	1	赤みを帯びる
308	陸軍兵卒	堀 慶助	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	京都府	丹波国船井郡塩谷村	平民	1	建替え
309	陸軍兵卒	古家 茂吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	兵庫縣	摂津国川邊郡上佐曾利村	平民	1	建替え
310	陸軍兵卒	藤井 清吉	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	堺縣	大和国十一郡池尻村	平民	0	建替え
311	陸軍兵卒	古谷 為吉	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第一中隊	堺縣	和泉国日根郡下郷村	平民	3	赤みを帯びる
312	陸軍兵卒	平野 千代藏	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	愛媛縣	讃岐国香川郡東濱	士族	3	赤みを帯びる
313	陸軍曹長	中島 鐵藏	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	京都府	丹波国與佐郡宮津鶴賀町	士族	0	建替え
314	陸軍軍曹	竹中 勝行	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	石川縣	加賀国石川郡金澤町	士族	0	建替え
315	陸軍軍曹	木田 宗近	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	熊本縣	肥後国飽田郡糸山村	士族	1	
316	陸軍曹長	赤星 武由	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	熊本縣	肥後国飽田郡浄行寺町河部巴彦同居	士族	0	建替え
317	陸軍伍長	三引 継之	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	石川縣	加賀国石川郡金澤芳齊町	士族	0	建替え
318	陸軍伍長	塩路 平七	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国日高郡藤井村	平民	0	建替え
319	陸軍兵卒	秋山 浪五郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	静岡縣	駿河国安邊郡枝ヶ島村	平民	0	建替え
320	陸軍兵卒	園部 三芳	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次越戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊	東京府	第四大區五小區牛込稜町	士族	3	赤みを帯びる
321	陸軍兵卒	金子 長藏	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊	埼玉縣	武蔵国新座郡野大止村	平民	2	赤みを帯びる
322	陸軍兵卒	石部 兵吉	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次越戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	福島縣	岩代国那摩郡大寺村	平民	3	赤みを帯びる
323	陸軍兵卒	寺内 知方	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊（第二大隊第四中隊）	高知縣	(阿波国名東郡佐古村)	士族	1	所属部隊が右、死亡月日・場所が左
324	陸軍兵卒	清水 弥八	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊（第一大隊第二中隊）	石川縣	(加賀国石川郡白銀町)	士族	1	所属部隊が右、死亡月日・場所が左
325	陸軍兵卒	柴川 勝太郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	島根縣	伯耆国会見郡川崎村	平民	0	建替え
326	陸軍兵卒	神谷 政吉	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊（第二大隊第二中隊）	和歌山縣	(紀伊国名草郡松江村)	平民	1	所属部隊が右、死亡月日・場所が左
327	陸軍兵卒	内貴 亀次郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	滋賀縣	近江国伊香郡飯野浦村	平民	0	建替え
328	陸軍兵卒	松下 友吉	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	堺縣	河内国丹北郡清水村	平民	2	赤みを帯びる
329	陸軍兵卒	宮地 求男	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	愛知縣	尾張国愛知郡西杉村	平民	0	建替え
330	陸軍兵卒	藤井 伊之吉	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	三重縣	第二大區一小區羽津村	平民	0	建替え
331	陸軍兵卒	上原 貞五郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡原倉坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣嶋縣	安藝国沼田郡上安村	平民	1	赤みを帯びる
332	陸軍兵卒	岩品 留吉	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	愛媛縣	讃岐国香川郡東濱	士族	1	所属部隊が右、死亡月日・場所が左
333	陸軍兵卒	水口 喜左衛門	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	京都府	丹波国中郡久住村	平民	1	赤みを帯びる
334	陸軍伍長	松下 良信	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	-	-	-	0	建替え
335	陸軍兵卒	岡田 紋次	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	廣瀨縣	備後国品治郡江良村	平民	1	赤みを帯びる
336	陸軍兵卒	西村 秀四郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	滋賀縣	近江国蒲生郡大窪村	平民	0	建替え
337	陸軍兵卒	竹岡 若松	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡原倉坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣嶋縣	安藝国安藝郡山田村	平民	0	建替え
338	陸軍兵卒	後藤 利助	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第四中隊	三重縣	伊勢国朝羽郡垂坂村	平民	0	建替え
339	陸軍兵卒	本庄 作市	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡橋本戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第三中隊	長崎縣	肥前国第一大區一少區中町	士族	3	赤みを帯びる

第Ⅷ章 官軍墓地の調査

	表面		右側面 死亡月日・死亡場所	左側面 所属部隊	表面		石材 劣化 状況	備考	
	階級	姓名			出身地	旧身分			
340	陸軍兵卒	楠見 幸楠	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国名草郡新魚町	平民	2	赤みを帯びる
341	陸軍兵卒	関口 宇之助	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊	東京府	第十一大區五小區西ノ江村	平民	1	
342	陸軍兵卒	柳田 為吉	明治十年三月十日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣負傷後全日送致中死	東京鎮台歩兵第一聯隊(第三大隊第一中隊)	東京府	第七大區用賀村	平民	2	墓石の幅細い
343	陸軍兵卒	福岡 清七	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	三重縣	伊勢国桑名郡矢田村	平民	0	建替え
344	陸軍兵卒	馬場 佐市	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣負傷後全日全国全郡木業病院ニ於テ死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	長崎縣	肥前国第十大區五小區伊本乃村	平民	2	赤みを帯びる
345	陸軍兵卒	住江 常作	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	兵庫縣	播磨国第七大區二小區藍町村	平民	1	赤みを帯びる
346	陸軍兵卒	道上 鶴松	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	和歌山縣	紀伊国宍粟郡押手村	平民	1	赤みを帯びる
347	陸軍兵卒	中島 兼治郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次越戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊	東京府	第七大区三小区上和久ヶ原村	平民	0	建替え
348	陸軍兵卒	飯室 鎮八郎	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次越戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	東京府	第三大区六小区市ヶ谷桑王寺前町	士族	3	赤みを帯びる
349	陸軍兵卒	山田 萬之助	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	三重縣	伊勢国奄藝郡三行村	平民	3	赤みを帯びる
350	陸軍兵卒	居村 善吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	堺縣	河内国石川郡第二大區一小區円明村	平民	0	建替え
351	陸軍兵卒	高橋 歌松	明治十年四月六日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊	神奈川縣	武藏国多摩郡戸倉村	平民	3	赤みを帯びる
352	陸軍兵卒	長岡 庄吉	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊	群馬縣	上野国勢多郡上三原田	平民	0	建替え
353	陸軍兵卒	野村 文之助	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第四中隊	-	-	-	1	
354	陸軍兵卒	岩崎 林弥	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	滋賀縣	近江国阪田郡石田村	平民	0	建替え
355	陸軍軍曹	堀江 義保	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	三重縣	伊勢国桑名郡桑名寺町	士族	0	建替え
356	陸軍軍曹	野寄 泉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡蜂別坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第二中隊	鹿児島縣	日向国諸縣郡都城	士族	0	建替え
357	陸軍軍曹	山下 祐藏	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡舟底山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	兵庫縣	丹波国多気郡笹山	士族	2	赤みを帯びる
358	陸軍兵卒	石橋 常松	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	堺縣	和泉国日根郡男里村	平民	0	建替え
359	陸軍軍曹	三宅 督義	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡蜂別坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第二中隊	滋賀縣	若狭国遠敷郡第七大区二小區五十四番地	平民	0	建替え
360	陸軍伍長	木村 豊一	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	高根縣	因幡国邑美郡品治町	士族	0	建替え
361	陸軍伍長	元永 松次郎	明治十年二月十五日於熊本縣下肥後国山本郡蜂別坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第二中隊	大分縣	豊前国下毛郡東屋形村	士族	0	建替え
362	陸軍伍長	木梨 權次郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国海部郡芝ノ丁	士族	0	建替え
363	陸軍兵卒	田代 茂吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡蜂別坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第二中隊	長崎縣	肥前国第廿一大區一小區別府村	平民	0	
364	陸軍兵卒	東川 與市	(明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死)	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	堺縣	(大和国宇知郡大鳥村)	平民	1	死亡月日・場所が左、所属部隊が裏出身地が右
365	陸軍兵卒	東 傳吉	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第一中隊	長崎縣	肥前国松浦郡伊萬里	平民	2	赤みを帯びる
366	陸軍兵卒	矢島 梅吉	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次越戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊	埼玉縣	武藏国新座郡片山村	平民	2	赤みを帯びる
367	陸軍兵卒	稻川 吉次	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	東京鎮台工兵第一大隊第二小隊	茨城縣	常陸国眞壁郡下館	士族	1	赤みを帯びる
368	陸軍伍長	中尾 萬一郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡蜂別坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第二中隊	長崎縣	肥前国第十五大区一小區八戸村	士族	0	建替え
369	陸軍兵卒	和泉 熊藏	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	京都府	丹波国竹野郡濱詰村	平民	2	赤みを帯びる
370	陸軍兵卒	山口 茂七	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国山本郡七本戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第一大隊第一中隊	福岡縣	筑前国第十一大區九小區森山村	平民	1	赤みを帯びる
371	陸軍兵卒	山門 太郎吉	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	兵庫縣	攝津国馬郡志手原村	平民	0	建替え
372	陸軍兵卒	佐々木 平四郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡半壺山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	島根縣	伯耆国第十六區新屋村	平民	1	赤みを帯びる
373	陸軍兵卒	入木 未吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	静岡縣	遠江国敷知郡新居宿	平民	1	赤みを帯びる
374	陸軍兵卒	三浦 源内	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	宮城縣	陸前国栗原郡若根村	平民	1	赤みを帯びる
375	陸軍兵卒	峰村 石松	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	長野縣	信濃国第十七大区一小區保科村	平民	2	赤みを帯びる
376	陸軍兵卒	井上 浪藏	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	京都府	丹波国天田郡加用村	平民	1	建替え
377	陸軍兵卒	谷口 佐吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	兵庫縣	淡路国津名郡廣石中村	平民	2	赤みを帯びる
378	陸軍兵卒	尾上 周平	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	兵庫縣	播磨国神西郡福崎新村	平民	0	建替え
379	陸軍兵卒	畑中 仙吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	兵庫縣	攝津国川邊郡別折村	平民	0	建替え
380	陸軍兵卒	奥田 吉五郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡蜂別坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第二中隊	福岡縣	筑前国第六大区四小區中泉村	平民	0	建替え
381	陸軍兵卒	山田 喜多男	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国舟底山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	石川縣	加賀国石川郡金澤尻垂坂	士族	1	赤みを帯びる
382	陸軍兵卒	栗原 喜藏	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	三重縣	第十八大区四小區平尾村	平民	0	建替え

	表面		右側面 死亡月日・死亡場所	左側面 所属部隊	裏面		石材 劣化 状況	備考	
	階級	姓名			出身地	旧身分			
383	陸軍兵卒	工藤 政吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣負傷後全日全国全部木薬病院にてア死ス	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	東京府	第一大區七小區南榎町	平民	1	建替え
384	陸軍兵卒	福田 甚四郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	岡山縣	美作国東北條郡下高倉村	平民	1	
385	陸軍兵卒	三橋 政吉	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	静岡縣	伊豆国加茂郡梨本村	平民	2	赤みを帯びる
386	陸軍兵卒	川多 外吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	-	-	-	2	赤みを帯びる
387	陸軍兵卒	沖本 治太郎	明治十年三月二十日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	岡山縣	備前国児島郡胸上村	平民	2	赤みを帯びる
388	陸軍兵卒	稻垣 伊助	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	兵庫縣	播摩国第四大區別所村	平民	2	赤みを帯びる
389	陸軍兵卒	末吉 偽八	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	-	-	-	0	建替え
390	陸軍兵卒	新井 米吉	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	埼玉縣	武蔵国巨摩郡文須美村	平民	2	赤みを帯びる
391	陸軍兵卒	石田 磯次郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第一中隊	大坂府	攝津国西成郡東新瓦屋町	平民	2	赤みを帯びる
392	陸軍兵卒	本地 繁吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	島根縣	伯耆国第十三區條津村	平民	0	建替え
393	陸軍兵卒	大牧 石松	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	京都府	丹波国来田郡江和村	平民	1	建替え
394	陸軍兵卒	西田 安次郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第一中隊	堺縣	河内国高安郡萬願寺村	平民	1	赤みを帯びる
395	陸軍兵卒	谷口 安吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第一中隊	和歌山縣	紀伊国名草郡船尾浦村	平民	2	赤みを帯びる
396	陸軍兵卒	谷本 三輪吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	兵庫縣	丹波国水上郡常楽村	平民	2	赤みを帯びる
397	陸軍兵卒	鷹村 金五郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第四中隊	埼玉縣	武蔵国足立郡鴨宮村	平民	2	赤みを帯びる
398	陸軍兵卒	平尾 松藏	明治十年三月十六日於熊本縣下肥後国山本郡船底山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	三重縣	第一大區四小區山田村	平民	0	建替え
399	陸軍兵卒	福田 金衛	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	東京鎮台工兵第一大隊第二小隊	千葉縣	第十四區金江津村	平民	1	赤みを帯びる
400	陸軍兵卒	長畑 臺藏	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	岡山縣	美作国勝北郡梶並東谷村	平民	0	建替え
401	陸軍兵卒	山崎 新太郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	岡山縣	美作国西條郡富東谷村	平民	0	建替え
402	陸軍軍曹	山縣 銀治	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	秋田縣	羽後国秋田郡保戸野御諏訪町	士族	0	建替え
403	陸軍軍曹	林 正任	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡橋本戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第三中隊	島根縣	因幡国邑美郡内吉方村	士族	1	赤みを帯びる
404	陸軍軍曹	石原 濤季	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大(隊第一中)隊	静岡縣	遠江国敷知郡三方原	士族	2	赤みを帯びる
405	陸軍軍曹	押切 篤道	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊	山形縣	羽前国田川郡大泉	士族	2	赤みを帯びる
406	陸軍兵卒	石原 之衛	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	島根縣	出雲国意宇郡雜賀町	士族	2	赤みを帯びる
407	陸軍軍曹	河合 静太	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	京都府	丹後国與謝郡宮津	-	0	建替え
408	陸軍兵卒	高橋 長太郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	埼玉縣	武蔵国足立郡狐塚村	平民	0	建替え
409	陸軍軍曹	岩崎 柳士	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	滋賀縣	近江国犬上郡中組西町	士族	0	建替え
410	陸軍伍長	立野 久義	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡船底山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	石川縣	加賀国石川郡金澤入坂町	士族	1	赤みを帯びる
411	陸軍伍長	布施 政恒	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	堺縣	大和国葛上郡籬塚村	士族	0	建替え
412	陸軍伍長	石原 義盈	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第一中隊	滋賀縣	近江国犬上郡中組東町北村嘉保同居	士族	0	建替え
413	陸軍伍長	岡崎 禹胤	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	愛媛縣	讃岐国香川郡西濱丁	士族	0	建替え
414	陸軍伍長	安井 総藏	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第四中隊	-	-	-	1	赤みを帯びる
415	陸軍軍曹	工藤 傳次郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣村戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	大分縣	豊後国速見郡日出村	士族	1	赤みを帯びる
416	陸軍伍長	小野 孫四郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	岡山縣	備前国窪屋郡沖村	平民	0	建替え
417	陸軍伍長	渡邊 温	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次越戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊	山梨縣	甲斐国山梨郡郭内裏	士族	1	赤みを帯びる
418	陸軍伍長	山田 政之丞	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国海部郡今福村	士族	1	赤みを帯びる
419	陸軍軍曹	山崎 乾	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡峰別坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第二中隊	茨城縣	常陸国茨城郡第二大區一小區二百七十九番地	士族	3	赤みを帯びる
420	陸軍兵卒	野村 勳藏	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	廣島縣	安藝国沼田郡廣瀬村	士族	0	建替え
421	陸軍兵卒	藤井 政藏	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	兵庫縣	淡路国津名郡鳥飼中村	平民	2	赤みを帯びる
422	陸軍兵卒	寺見 恒太郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	岡山縣	備前国盤梨郡二日市村	平民	2	赤みを帯びる
423	陸軍兵卒	渡邊 作平	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	静岡縣	駿河国富士郡原田村	平民	0	建替え
424	陸軍兵卒	加藤 傳吉	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第三中隊	栃木縣	下野国芳賀郡下延生村	平民	0	建替え

第VIII章 官軍墓地の調査

	表面		右側面	左側面	表面			石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分			
425	陸軍兵卒	福本 平藏	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	兵庫縣	淡路国三原郡上内膳村	平民	0	建替え
426	陸軍兵卒	則安 章吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	岡山縣	備前国津高郡大月村	平民	0	建替え
427	陸軍兵卒	濱岸 久松	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	岡山縣	備前国和氣郡西片上村	平民	1	赤みを帯びる
428	陸軍兵卒	篠原 恒三郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	兵庫縣	淡路国津名郡興隆寺村	平民	0	建替え
429	陸軍兵卒	新井 作助	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第四中隊	-	-	-	1	赤みを帯びる
430	陸軍兵卒	小林 佐市	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	三重縣	伊勢国鈴鹿郡徳原村	平民	0	建替え
431	陸軍兵卒	古林 勝太郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	兵庫縣	播摩国第十三大區田井村	平民	1	赤みを帯びる
432	陸軍兵卒	松本 五郎一	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	嵩根縣	伯耆国汗入郡茶畑村	平民	0	建替え
433	陸軍兵卒	萩野 宇吉	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	兵庫縣	丹波国水上郡乙河内村	平民	0	建替え
434	陸軍兵卒	高田 常三郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	兵庫縣	播摩国加西郡綱引村	平民	2	赤みを帯びる
435	陸軍兵卒	吉岡 由助	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	京都府	丹波国竹野郡木津村	平民	0	建替え
436	陸軍兵卒	渡邊 浪治	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第三中隊	茨城縣	常陸国新治郡上野村	平民	3	赤みを帯びる
437	陸軍兵卒	谷山 弥吉	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	京都府	丹波国船井郡曾我谷村	平民	0	建替え
438	陸軍兵卒	松田 卯市	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	兵庫縣	播摩国赤穂郡年禮東村	平民	2	赤みを帯びる
439	陸軍兵卒	市 安藏	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	岡山縣	美作国第二十八大區中山手里村	平民	0	建替え
440	陸軍喇叭卒	江本 又五郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	岡山縣	備前国津高郡尾上村	平民	0	建替え
441	陸軍兵卒	佐々木 代次郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	岡山縣	備前国児島郡柳田村	平民	1	
442	陸軍兵卒	杉内 常次	明治十年三月十六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊	嵩根縣	岩見国美濃郡多田村	平民	1	赤みを帯びる
443	陸軍兵卒	清水 関藏	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第三中隊	神奈川縣	武藏国多摩郡大久野村	平民	1	赤みを帯びる
444	陸軍軍曹	荒武 直守	明治十年三月卅日於熊本縣下肥後国山本郡有泉村戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第四中隊	鹿児島縣	日向国諸縣郡野尻	士族	1	赤みを帯びる
445	陸軍騎卒	黒木 知之助	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一小隊	長野縣	信濃国第九大(區五小區下武)石村	平民	2	赤みを帯びる
446	陸軍兵卒	小川 孫兵衛	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第四中隊	-	-	-	0	建替え
447	陸軍兵卒	上田 太吉	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	大坂府	攝津国島上郡芝生村	平民	0	建替え
448	陸軍兵卒	長谷川 卯之吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	兵庫縣	播摩国印南郡成井村	平民	0	建替え
449	陸軍兵卒	守谷 半次郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	-	-	-	1	赤みを帯びる
450	陸軍兵卒	内田 弥助	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	-	-	-	1	赤みを帯びる
451	陸軍兵卒	小山 政次郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	京都府	山城国愛宕郡下京堂前町	平民	0	建替え
452	陸軍兵卒	森岡 春吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	山形縣	羽前国村山郡楯北村	平民	0	建替え
453	陸軍兵卒	椎野 市五郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第四中隊	-	-	平民	0	建替え
454	陸軍兵卒	八軒 由松	明治十年三月十六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	滋賀縣	近江国滋賀郡本堅田村	平民	0	建替え
455	陸軍兵卒	須川 音五郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	三重縣	紀伊国牟婁郡成川村	平民	0	建替え
456	陸軍兵卒	猪又 豊三郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	宮城縣	陸前国登米郡米谷村	平民	0	建替え
457	陸軍兵卒	小嶋 福太郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第四中隊	-	-	平民	0	建替え
458	陸軍兵卒	湯畑 莊松	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	嵩根縣	伯耆国第十六大區六小區国坂村	平民	0	建替え
459	陸軍兵卒	澤井 佐兵衛	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	静岡縣	駿河国安部郡岡宮ヶ崎村	平民	0	建替え
460	陸軍兵卒	木全 菊次郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡吉次越戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	愛知縣	尾張国中嶋郡西荻原村	平民	0	建替え
461	陸軍兵卒	横川 茂三郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	埼玉縣	武藏国大里郡肥塚村	平民	0	建替え
462	陸軍兵卒	澤 末吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	滋賀縣	近江国神崎郡小川村	平民	0	建替え
463	陸軍兵卒	吉水 真聰	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	三重縣	伊賀国阿拜郡新堂村	僧	0	建替え
464	陸軍兵卒	中村 八代吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	愛知縣	三河国八名郡牛川村	平民	0	建替え
465	陸軍兵卒	牧野 基之助	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	兵庫縣	播摩国印南郡北脇村	平民	0	建替え
466	陸軍兵卒	西川 五郎吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	兵庫縣	播摩国赤穂郡赤松村	平民	0	建替え
467	陸軍兵卒	金光 作治	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	岡山縣	備前国赤坂郡仁堀東村	平民	0	建替え

	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分		
468	陸軍兵卒	福田 安市	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	兵庫縣 播摩国第三大区下小田村	平民	0	建替え
469	陸軍兵卒	奥道 柳吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	岡山縣 備前国和气郡福浦村	平民	1	
470	陸軍兵卒	高橋 佐右衛門	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第四中隊	-	-	1	
471	陸軍生卒	糸永 富太郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	大分縣 豊後国第二大區十二小區吉野渡村	平民	0	建替え
472	陸軍軍曹	青木 兼次郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	静岡県 駿河国河津郡静岡大鋸町	士族	0	建替え
473	陸軍軍曹	竹村 質直	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	石川縣 加賀国石川郡金沢河原村	士族	0	建替え
474	陸軍伍長	意東 熊次郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊	島根縣 出雲国島根郡南田村	士族	0	建替え
475	陸軍伍長	竹下 文亮	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第四中隊	長崎縣 肥前国佐賀郡本庄村	士族	0	建替え
476	陸軍兵卒	八木 幸一	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	兵庫縣 播摩国揖東郡香山村	平民	0	建替え
477	陸軍兵卒	高橋 彦七	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	宮城縣 陸前国宮城郡荒井村	平民	1	赤みを帯びる
478	陸軍伍長	秋山 文吾	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	福岡縣 筑後国御原郡岩田村	士族	0	建替え
479	陸軍伍長	吉岡 臺藏	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	嵩根縣 出雲国意宇郡西津田村	平民	0	建替え
480	陸軍伍長	夏川 勝太	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第四中隊	-	-	0	建替え
481	陸軍伍長	金森 戈次郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	和歌山縣 紀伊国海邊郡新堀北ノ丁	士族	0	建替え
482	陸軍伍長	河村 重照	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡船底山負傷後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	石川縣 加賀国石川郡金澤寺村	士族	2	赤みを帯びる
483	陸軍伍長	小山 盛典	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡船底山負傷後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	石川縣 加賀国石川郡西堀川村	士族	0	建替え
484	陸軍伍長	清水 新太郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	三重縣 伊勢国鈴鹿郡龜山	士族	0	建替え
485	陸軍喇叭卒	月田 清次郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	岡山縣 備前国後月郡七日市村	平民	0	建替え
486	陸軍兵卒	久村 豊之助	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊	山口縣 周防国都濃郡上村	平民	0	※：氏名が先、死亡日・場所が表、所属部隊が横、自身地位が右 建替え
487	陸軍兵卒	坂口 知之祐	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	堺縣 和泉国大島郡草部村	平民	2	赤みを帯びる
488	陸軍兵卒	町田 權之丞	明治十年三月卅日於熊本縣下肥後国山本郡有泉村戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第四中隊	埼玉縣 (武藏国埼玉郡鷲宮村)	平民	1	所属部隊が裏、出身地が右
489	陸軍兵卒	未宗 孫造	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山負傷後同日同国同郡木葉病院ニ於テ死ス	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	岡山縣 美作国英田郡川北村	平民	3	赤みを帯びる
490	陸軍兵卒	久保 虎次郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第一中隊	長崎縣 肥前国袴野村	平民	3	赤みを帯びる
491	陸軍兵卒	中尾 長右衛門	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	三重縣 伊賀国山田郡平田村	平民	0	建替え
492	陸軍兵卒	徳吉 勝藏	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣負傷後同日同国同郡木葉病院ニ於テ死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	山口縣 周防国熊毛郡堅ヶ濱村	平民	0	
493	陸軍兵卒	岩岸 勇次	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣負傷後同日同国同郡木葉病院ニ於テ死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	京都府 丹後国加佐郡別所村	平民	0	
494	陸軍兵卒	野中 裕藏	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第三中隊	長崎縣 肥前国小城郡永田村	平民	1	建替え
495	陸軍兵卒	荒川 浅之助	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣負傷後同日同国同郡木葉病院ニ於テ死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	茨城縣 常陸国眞壁郡女方村	平民	1	
496	陸軍兵卒	亀井 勲平	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山負傷後同日同国同郡木葉病院ニ於テ死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	岡山縣 備前国児嶋郡塩生村	平民	1	
497	陸軍兵卒	平井 寅吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	京都府 山城国紀伊郡伏見直達橋八丁目	平民	0	建替え
498	陸軍兵卒	米谷 權四郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂負傷後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	山口縣 長門国大津郡戸崎村	平民	0	建替え
499	陸軍兵卒	白木 吉藏	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	滋賀縣 近江国愛知郡政所村	平民	0	建替え
500	陸軍兵卒	芳岡 義光	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	和歌山縣 紀伊国室上郡石座須江村	平民	0	建替え
501	陸軍兵卒	喜多条 岸藏	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣負傷後同日同国同郡木葉病院ニ於テ死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	高知縣 阿波国海部郡阿部村	平民	0	建替え
502	陸軍兵卒	小坂 千座	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣負傷後同日同国同郡木葉病院ニ於テ死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	岡山縣 美作国北條郡中坪和谷村	平民	0	
503	陸軍兵卒	稲谷 音次郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第四中隊	和歌山縣 紀伊国牟婁郡岡村	平民	0	建替え
504	陸軍兵卒	森尾 政次郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山負傷後同日同国同郡木葉病院ニ於テ死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	兵庫縣 播摩国第一大區藤江村	士族	0	建替え
505	陸軍兵卒	大石 源十	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣負傷後同日同国同郡木葉病院ニ於テ死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	静岡県 遠江国山名郡下太村	平民	0	建替え
506	陸軍兵卒	木津 留裕	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣負傷後同日同国同郡木葉病院ニ於テ死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	和歌山縣 紀伊国牟婁郡下田原浦	平民	2	赤みを帯びる

第VIII章 官軍墓地の調査

	表面		右側面	左側面	表面			石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分			
507	陸軍兵卒	田中 虎千代	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	山口縣	長門国厚狹郡舟木村	平民	1	死亡月日・場所が左、所属部隊が右 細い
508	陸軍兵卒	河合 萬七	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	-	-	-	2	赤みを帯びる
509	陸軍兵卒	森田 弥三郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮臺歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	堺縣	大和国式上郡	平民	2	赤みを帯びる
510	陸軍兵卒	木村 豊三郎	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	堺縣	大和国十市郡味間村	平民	0	建替え
511	陸軍兵卒	溝口 正秀	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	愛知縣	尾張国愛知郡名古屋古井村	士族	0	建替え
512	陸軍兵卒	松永 卯三郎	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	石川縣	加賀国石川郡火除町	士族	0	建替え
513	陸軍兵卒	加藤 重吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第四中隊	-	-	-	1	
514	陸軍兵卒	山田 四郎	明治十年三月三十日於熊本縣下肥後国山本郡有泉村戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第四中隊	新潟縣	越後国蒲原井戸場新田	平民	0	建替え
515	陸軍兵卒	水野 梅裕	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	堺縣	和泉国和泉郡大澤村	平民	2	赤みを帯びる
516	陸軍兵卒	浅野 袈裟吉	明治十年三月卅日於熊本縣下肥後国山本郡有泉村戦死	東京鎮臺歩兵第三聯隊第三大隊第四中隊	長濃縣	信濃国水内郡小錫村	平民	1	赤みを帯びる
517	陸軍兵卒	新坂 裕	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	三重縣	第十大區三小區梁村	平民	0	建替え
518	陸軍兵卒	南部 由裕	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	滋賀縣	近江国高島郡中小路町	平民	1	赤みを帯びる
519	陸軍兵卒	中田 市太郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	三重縣	紀伊国牟婁郡小坂村	平民	1	死亡月日・場所が左、所属部隊が右 細い
520	陸軍兵卒	谷 猪之助	明治十年三月十二日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	高知縣	土佐国安藝郡羽根村	平民	0	建替え
521	陸軍伍長	佐藤 勝次郎	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡本留戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第四中隊	福岡縣	筑後国第四大区小塩村	平民	0	建替え
522	陸軍軍曹	川口 藤左衛門	明治十年三月十六日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国名草郡新富町	士族	2	
523	陸軍軍曹	芝萬 吉郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡船底山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	愛媛縣	伊豫国宇和郡元徒掛	士族	0	建替え
524	陸軍軍曹	飯田 友重	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	島根縣	出雲国島根郡洞光寺	士族	0	建替え
525	陸軍伍長	須佐 長行	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国名草郡和歌山	士族	0	建替え
526	陸軍伍長	桑原 善雄	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台砲兵第四大隊	嶋根縣	因幡国村美郡吉方村	士族	0	建替え
527	陸軍兵卒	大馬 久五郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国山本郡七本戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	福岡縣	豊前国第二大區九小區池尾村	平民	1	赤みを帯びる
528	陸軍兵卒	田中 総吉	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	大坂府	攝津国豊島郡野田村	平民	1	細い
529	陸軍兵卒	梅澤 為次郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	島根縣	因幡国村美郡行徳	平民	0	建替え
530	陸軍兵卒	村上 實太	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	京都府	攝津国西城郡北堀江通寄留	平民	0	建替え
531	陸軍兵卒	西川 福裕	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	滋賀縣	近江国飯田郡金星町	平民	0	建替え
532	陸軍兵卒	北川 捨松	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	和歌山縣	紀伊国名草郡岩橋村	平民	0	建替え
533	陸軍兵卒	千早 茂平太	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	三重縣	第一大區山田宮川町	平民	0	建替え
534	陸軍兵卒	石井 卯之助	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台工歩第二大隊第二中隊	兵庫縣	攝津国宍粟郡上山口村	平民	0	建替え
535	陸軍兵卒	西口 佐五郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	三重縣	伊勢国度會郡中須村	平民	3	赤みを帯びる
536	陸軍兵卒	清水 光藏	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	山口縣	周防国都濃郡末武下村	平民	0	建替え
537	陸軍兵卒	竹内 仁平	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	廣嶋縣	安藝国高田郡羽佐竹村	平民	2	赤みを帯びる
538	陸軍兵卒	久保田 萬九郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	山口縣	長門国阿武郡大井村	平民	0	建替え
539	陸軍兵卒	岸川 平藏	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第四中隊	長崎縣	肥前国第十九大区一小區牛尾村	平民	0	建替え
540	陸軍兵卒	岸本 宇吉	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	堺縣	和泉国大高郡家原寺町	平民	3	赤みを帯びる
541	陸軍兵卒	畑口 利十郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	山口縣	周防国玖珂郡長谷村	平民	0	建替え
542	陸軍兵卒	原田 安五郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	山口縣	周防国佐波郡上右田村	平民	2	赤みを帯びる
543	陸軍兵卒	竹田 米藏	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	新潟縣	越後国頸城郡杉ノ瀬村	平民	0	建替え
544	陸軍兵卒	番近 寅吉	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	兵庫縣	攝津国宍粟郡山田村	平民	2	赤みを帯びる
545	陸軍兵卒	植田 寅吉	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	堺縣	大和国葛下郡磯壁村	平民	3	赤みを帯びる
546	陸軍兵卒	堀 政次郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	堺縣	大和国芳野郡黒瀬村	平民	3	赤みを帯びる
547	陸軍兵卒	小内 濱吉	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	群馬縣	上野国新田郡鹿田村	平民	-	建替え
548	陸軍兵卒	岡野 興助	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	三重縣	志摩国荅志郡坂崎村	平民	3	赤みを帯びる
549	陸軍兵卒	成木 弥藤太	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	岡山縣	備前国津高郡杉谷村	平民	0	建替え



	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分		
550	陸軍兵卒	佐藤 兵三郎	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	三重縣	第三大區二小區矢田	0	建替え
551	陸軍兵卒	中川 重二郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	兵庫縣	播摩国第五大区野田村	0	建替え
552	陸軍兵卒	西村 善次郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	兵庫縣	但馬国二方郡古市村	0	建替え
553	陸軍兵卒	吉岡 尙藏	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	京都府	丹後国中郡久住村	0	建替え
554	陸軍兵卒	鈴木 茂吉	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	宮城縣	磐城国刈田郡藏本村	0	建替え
555	陸軍兵卒	芝 七兵衛	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国日高郡南谷村	3	赤みを帯びる
556	陸軍兵卒	加藤 吉松	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	三重縣	紀伊国度會郡村山村	3	赤みを帯びる
557	陸軍兵卒	東野 松次郎	明治十年三月十九日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	大坂府	攝津国西成郡薬師堂村	2	赤みを帯びる
558	陸軍兵卒	古川 權十郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	岡山縣	美作国勝南郡中山村	0	建替え
559	陸軍兵卒	上平 太八	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	三重縣	伊勢国第二十大區井田村	0	建替え
560	陸軍兵卒	前田 治平	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	嵐根縣	伯耆国河内郡方地村	0	建替え
561	陸軍兵卒	内藤 弥吉	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	兵庫縣	播摩国第九大区西川邊村	0	建替え
562	陸軍兵卒	吉澤 辰五郎	明治十年三月十九日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	崎玉縣	武蔵国足立郡赤嶺村	1	死亡日・場所が裏、両側面が左、田舎地が黒くなっている
563	陸軍軍曹	関 強雄	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	大坂鎮臺工兵第二大隊	熊本縣	肥後国玉名郡川辺田村	0	建替え
564	陸軍伍長	高橋 長興	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	石川縣	越後国足羽郡福井	0	建替え
565	陸軍兵卒	横山 平助	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	-	-	0	建替え
566	陸軍兵卒	高橋 米吉	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊	-	-	2	赤みを帯びる
567	陸軍兵卒	滝井 伊三吉	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	大坂府	攝津国第九大区二小區上邊村	0	建替え
568	陸軍兵卒	美馬 道次郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	高知縣	阿波国名東郡佐古村	2	赤みを帯びる
569	陸軍兵卒	中嶋 彦吉	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊	-	-	0	建替え
570	陸軍兵卒	畠山 常三郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	茨城縣	常陸国茨城郡東大野村	2	赤みを帯びる
571	陸軍兵卒	木船 鶴吉	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	京都府	山城国何鹿郡故屋岡林	0	建替え
572	陸軍兵卒	林 楠太郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	和歌山縣	紀伊国名草郡第一大區二小區二十五番地	0	建替え
573	陸軍兵卒	宇田 熊吉	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊	-	-	0	建替え
574	陸軍兵卒	鳥崎 喜笠	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	石川縣	国石川郡松浦丁	0	建替え
575	陸軍兵卒	林 興吉	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	神奈川縣	武蔵国多摩郡府中本町	0	建替え
576	陸軍兵卒	古田 丑太郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	福岡縣	磐城国標葉郡西井村	0	建替え
577	陸軍兵卒	上城 清藏	明治十年三月廿二日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第二中隊	大分縣	豊前国九大区二跡田林	0	建替え
578	陸軍兵卒	神山 斧吉	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	新潟縣	越後国蒲原郡道金村	0	建替え
579	陸軍兵卒	奥村 如之助	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	三重縣	紀伊国牟婁郡引本浦	0	建替え
580	陸軍兵卒	森本 峯三	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	岡山縣	備前国磐梨郡鈞井村	0	建替え
581	陸軍兵卒	木村 兼吉	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡向坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	京都府	山城国葛野郡下京荒神町	2	赤みを帯びる
582	陸軍兵卒	山腰 富右衛門	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	岐阜縣	美濃国大野郡飯島村	2	建替え
583	陸軍兵卒	大賀 新兵衛	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	嵐根縣	石見国美濃郡美濃地村	1	赤みを帯びる
584	陸軍生卒	赤司 竹二郎	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第三中隊	福岡縣	築前国第十二大区二日市村	2	赤みを帯びる
585	陸軍兵卒	清水 儀一郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	嶋根縣	伯耆国日野郡吉原村	2	赤みを帯びる
586	陸軍兵卒	小倉 寅吉	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	堺縣	和泉国和泉郡豊中村	2	赤みを帯びる
587	陸軍兵卒	菅原 喜内	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	宮城縣	陸前国栗原郡若柳村	0	建替え
588	陸軍兵卒	金澤 幸次郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣傷後同月廿一日木葉病院ニ於テ死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	嶋根縣	因幡国村美郡田中	0	建替え
589	陸軍兵卒	廣瀬 栢次	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第四中隊	福岡縣	筑後国御原郡平田村	0	建替え
590	陸軍兵卒	鳥崎 滝藏	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	神奈川縣	相模国第十八大区三小區愛宕村	0	建替え
591	陸軍兵卒	木内 孫作	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	山梨縣	甲斐国八代郡築村	0	赤みを帯びる
592	陸軍兵卒	岸本 小三郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	東京府	武蔵国豊島郡浅草駒形町	2	

第Ⅷ章 官軍墓地の調査

	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考	
	階級	姓名	死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分			
593	陸軍兵卒	中西 与七郎	明治十年二月二十日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	京都府	丹後国中郡菅村	平民	1	建替え
594	陸軍兵卒	内田 力藏	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	埼玉縣	武藏国南第六大区四小区平沢村	平民	0	建替え
595	陸軍兵卒	齊藤 喜一郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	新潟縣	越後国魚沼郡寫新田	平民	0	建替え
596	陸軍兵卒	大高 弥作	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	栃木縣	下野国都賀郡下草村	平民	0	建替え
597	陸軍兵卒	森川 善五郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡船底山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	三重縣	第八大区四小区殿村	平民	0	建替え
598	陸軍兵卒	望月 兵治郎	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	山梨縣	甲斐国巨摩郡睦合村	平民	0	建替え
599	陸軍伍長	上阪 将一	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第一中隊	石川縣	越前国南條郡武生河原町	士族	0	赤みを帯びる
600	陸軍兵卒	藤原 新吉	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	岡山縣	備前国御野郡東古拾村	平民	1	
601	陸軍兵卒	大塚 要介	明治十年三月十三日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	埼玉縣	武藏国足立郡鴻巣	平民	0	建替え
602	陸軍兵卒	大嶋 辨次郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	新潟縣	越後国魚沼郡下船渡村	平民	1	赤みを帯びる
603	陸軍兵卒	枚垣 春治	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	群馬縣	上野国佐位郡下垣木村	平民	0	建替え
604	陸軍兵卒	箴鳥 重太郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国山本郡七本戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	福岡縣	筑後国三浦郡中古賀村	平民	0	建替え
605	陸軍兵卒	小池 芳松	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	和歌山縣	紀伊国日高藤井村	平民	0	建替え
606	陸軍兵卒	尾崎 豊藏	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	嵩根縣	伯耆国川村郡西小鹿村	平民	2	
607	陸軍兵卒	荒木 伊三郎	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第四中隊	長崎縣	肥前国第六大区一小区大町村	平民	0	建替え
608	陸軍伍長	山口 隆	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	石川縣	越前国南条郡河原町	士族	0	建替え
609	陸軍兵卒	竹谷 大吉	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	堺縣	河内国石川郡北加納村	平民	0	建替え
610	陸軍兵卒	北村 愛次郎	明治十年三月十二日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	神奈川縣	相模国大住郡大槻村	平民	0	建替え
611	陸軍兵卒	泰 半七	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	福岡縣	筑前国第三大区二十三小区下原村	平民	0	建替え
612	陸軍兵卒	茂田 清見	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第四中隊	嵩根縣	因幡国法美郡失津村	平民	1	赤みを帯びる
613	陸軍兵卒	中村 久藏	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	三重縣	第一大区三小区川尻村	平民	1	赤みを帯びる
614	陸軍軍曹	今泉 鏡	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	山形縣	羽前国置賜郡元籠町	士族	0	建替え
615	陸軍軍曹	落合 倭又建	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	熊本縣	肥後国託摩郡本庄村	士族	2	赤みを帯びる
616	陸軍軍曹	谷口 永経	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	滋賀縣	若狭国遠敷郡西津村	士族	0	建替え
617	陸軍兵卒	酒井 兼吉	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一聯隊第二中隊	兵庫縣	丹波国多紀郡波賀野	平民	0	建替え
618	陸軍軍曹	鷺野 一翁	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	滋賀縣	若狭国遠敷郡西小川村	平民	0	建替え
619	陸軍軍曹	坂井 幸男	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第三中隊	嵩根縣	因幡国村美郡湯所村	士族	2	赤みを帯びる
620	陸軍伍長	森栗 秀吉	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	和歌山縣	紀伊国牟婁郡南新町	平民	2	赤みを帯びる
621	陸軍軍曹	坪井 栄次郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	高知縣	阿波国第一大区一小区寺島	士族	0	建替え
622	陸軍軍曹	伊東 啓之	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	京都府	丹後国與佐郡宮津	士族	1	赤みを帯びる
623	陸軍軍曹	山本 寛八	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	長崎縣	肥前国佐賀郡第八大区一小区	士族	0	建替え
624	陸軍伍長	山岡 文樹	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	嵩根縣	出雲国島根郡内中原町	士族	3	赤みを帯びる
625	陸軍伍長	田淵 真哉	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡向坂戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	嵩根縣	因幡国邑美郡鳥取	士族	0	建替え
626	陸軍兵卒	中島 藤市	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第四中隊	福岡縣	豊前国第七大区五小区中畑村	平民	3	赤みを帯びる
627	陸軍伍長	養輪 喜光	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	石川縣	越前国足羽郡福井御駕町	士族	2	赤みを帯びる
628	陸軍伍長	安田 十九麿	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	三重縣	志摩国荅志郡鳥羽奥谷	士族	0	建替え
629	陸軍伍長	阪井 一純	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	熊本縣	肥後国第十三大区一小区千番屋敷	士族	0	建替え
630	陸軍兵卒	藤田 富藏	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	三重縣	伊勢国飯野郡西黒部村	平民	3	赤みを帯びる
631	陸軍兵卒	曾弥 光利	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国那賀郡相谷村	平民	2	建替え
632	陸軍兵卒	小川 巳之吉	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国七本村戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	埼玉縣	武藏国入間郡川越村	平民	3	赤みを帯びる
633	陸軍兵卒	西尾 石五郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	岡山縣	美作国東北條郡知和村	平民	0	赤みを帯びる
634	陸軍兵卒	村田 虎之助	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	茨城縣	常陸国第一大区二小区八番地	平民	3	赤みを帯びる
635	陸軍兵卒	加磨 幾平	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第三中隊	長崎縣	肥前国第四大区六小区森山村	平民	0	建替え

	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分		
636	陸軍兵卒	角 寛之助	明治十年三月十二日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	島根縣	出雲国寛宇郡雜賀村	士族	0 建替え
637	陸軍兵卒	豊泉 梅吉	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	埼玉縣	武蔵国入間郡勝榮寺村	平民	0 建替え
638	陸軍兵卒	助中 寅藏	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	兵庫縣	摂津国武庫郡鳴尾村	平民	0 建替え
639	陸軍兵卒	落合 兵次郎	(明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡舞尾村戦死)	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	神奈川縣	(相模国津久井郡山倉村)	平民	0 所属部隊が裏、出身地が左 建替え
640	陸軍兵卒	中川 定吉	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	滋賀縣	近江国野洲郡八丈村	平民	0 建替え
641	陸軍兵卒	小林 芳藏	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	群馬縣	上野国綠埜郡立石村	平民	0 建替え
642	陸軍兵卒	三澤 惣三郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	福島縣	岩代国大沼郡下小沢村	平民	0
643	陸軍兵卒	雨宮 徳次郎	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	山梨縣	甲斐国山梨郡上萩原村	平民	1 赤みを帯びる
644	陸軍兵卒	中井 伊三郎	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	山口縣	周防国玖珂郡裝束村	平民	2 赤みを帯びる
645	陸軍軍曹	石川 熊二	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	島根縣	因幡国法美郡立川	士族	0 建替え
646	陸軍伍長	三浦 定次郎	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	和歌山縣	紀伊国名草郡寺内村	士族	0 建替え
647	陸軍兵卒	小宮 松五郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡本村戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第四中隊	-	-	-	0 建替え
648	陸軍兵卒	河本 佐吉	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	岡山縣	第十四大区二小區西幸崎村	平民	0 建替え
649	陸軍兵卒	富澤 幸平	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	群馬縣	上野国第二十二大区十一小區四十三番地	平民	0 建替え
650	陸軍兵卒	山田 龍江	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	愛知縣	尾張国愛知郡名古屋呉服町	士族	2 赤みを帯びる
651	陸軍兵卒	稲鶴 久次	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡船底山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	三重縣	第九大区五小區野村	平民	0 建替え
652	陸軍兵卒	森田 増太郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡轟村戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第三中隊	堺縣	大和国添下郡鹿ノ畑村	平民	0 建替え
653	陸軍兵卒	森 源太郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡轟村戦死	東京鎮臺歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	静岡縣	駿河国菟原郡能島村	平民	3 赤みを帯びる
654	陸軍兵卒	竹本 吉次郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国玉名郡吉次越戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第一中隊	三重縣	伊勢国度會郡小保村	平民	0 建替え
655	陸軍兵卒	益田 福一	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国玉名郡半高山戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第三中隊	長崎縣	肥前国大里村	平民	2 赤みを帯びる
656	陸軍兵卒	原木 房太郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	静岡縣	駿河国志太郡五十海村	平民	0 建替え
657	陸軍喇叭卒	永田 政吉	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	三重縣	第八大区一小區極楽村	平民	2 赤みを帯びる
658	陸軍喇叭卒	小野田 幾太郎	明治十年三月廿二日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	静岡縣	駿河国富士郡羽籠村	平民	0 建替え
659	陸軍兵卒	守屋 時藏	明治十年三月廿二日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	神奈川縣	武蔵国多摩郡澤村	平民	3 赤みを帯びる
660	陸軍兵卒	寺門 教行	(明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死)	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第三中隊	茨木縣	(常陸国茨木郡濱田村)	士族	0 所属部隊が裏、出身地が右
661	陸軍兵卒	藤野 長吉	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	京都府	丹後国加佐郡西屋村	平民	0 建替え
662	陸軍兵卒	鶴田 孫八	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	神奈川縣	武蔵国多摩郡田無村	平民	0 建替え
663	陸軍兵卒	渡邊 豊定	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡半壱山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	愛知縣	尾張国愛知郡清水二葉村	平民	0 建替え
664	陸軍曹長	辻野 知房	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	大坂鎮台參謀部書記	和歌山縣	紀伊国名草郡廣瀬南片原	士族	0 建替え
665	陸軍軍曹	柴垣 則裕	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	石川縣	加賀国石川郡金澤上本多町	士族	0 建替え
666	陸軍兵卒	松井 光秀	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	山口縣	長門国阿武郡萩八丁	士族	3 赤みを帯びる
667	陸軍伍長	山口 掇直	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	石川縣	加賀国石川郡金沢上本多町	士族	0 建替え
668	陸軍兵卒	谷井 浅次郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	石川縣	越中国新川郡中布目村	平民	3 赤みを帯びる
669	陸軍伍長	橋本 昌當	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	滋賀縣	若狭国遠敷郡西津	士族	1 赤みを帯びる
670	陸軍伍長	新庄 秀輔	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	山口縣	周防国玖珂郡大内廻	士族	0 建替え
671	陸軍兵卒	辻井 喜藏	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	堺縣	大和国添下郡小南村	平民	0 建替え
672	陸軍兵卒	西田 善之丞	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	三重縣	伊勢国阿拜郡大谷村	平民	0 建替え
673	陸軍兵卒	小内 李次郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	群馬縣	下野国山田郡籠舞村	平民	0 建替え
674	陸軍兵卒	馬場 與吉	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	滋賀縣	近江国蒲生郡林村	平民	0 建替え
675	陸軍兵卒	須永 鶴吉	明治十年三月二十日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	-	-	-	1 赤みを帯びる
676	陸軍兵卒	平島 百作	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	山梨縣	甲斐国摩多郡秋田村	-	0 建替え
677	陸軍兵卒	裕田 啓藏	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	新潟縣	越後国蒲原郡一本杉村	平民	0 建替え
678	陸軍兵卒	矢野 才次郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	滋賀縣	近江国栗田郡南山田岡村	平民	3 赤みを帯びる

第Ⅷ章 官軍墓地の調査

	表面		右側面 死亡月日・死亡場所	左側面 所属部隊	表面		石 材 劣 化 状 況	備 考	
	階級	姓名			出身地	旧身分			
679	陸軍伍長	尾越 一	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	山口縣	長門國阿武郡第二十二大區第一区千三百四番地	士族	3	赤みを帯びる
680	陸軍兵卒	中村 佐賀太郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	愛媛縣	伊豫国温泉郡勝原村	平民	0	建替え
681	陸軍兵卒	岡田 梅吉	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	山口縣	防国熊毛郡室積浦	平民	0	建替え
682	陸軍兵卒	柔原 麻次郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第四中隊	廣島縣	安藝国沼田郡上九野軒丁	士族	0	建替え
683	陸軍兵卒	伊勢野 傳吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	三重縣	伊勢国一志郡井中村	平民	0	建替え
684	陸軍兵卒	古殿 喜藏	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	山口縣	長門國豊浦郡栗野村	平民	0	建替え
685	陸軍兵卒	亀川 彦四郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	岡山縣	美作国西北条郡寺和田村	平民	0	建替え
686	陸軍兵卒	和田 源次郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	嵩根縣	伯耆国久米郡鳥村	平民	2	
687	陸軍兵卒	柳山 森藏	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	神奈川県	相模国鎌倉郡瀬谷村	平民	0	建替え
688	陸軍兵卒	吉川 芳三郎	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第老聯隊第一大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国宇都郡粉川村	平民	1	建替え
689	陸軍兵喇叭卒	杉本 音市	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡植木貞場後同日同国玉名郡木葉病院ニ於死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	兵庫縣	播磨国第三大區喜多村	平民	0	建替え
690	陸軍兵卒	橋本 源兵衛	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	三重縣	伊勢国員部郡楚原村	平民	0	赤みを帯びる
691	陸軍兵卒	牧野 源次郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	愛知縣	三河国額田郡折地	平民	2	建替え
692	陸軍兵卒	飛田 志兼	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	茨木縣	常陸国茨木郡吉田村	平民	1	
693	陸軍兵卒	並木 金五郎	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	埼玉縣	武藏国新座郡下片山村	平民	1	建替え
694	陸軍兵卒	佐々木 他助	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	愛知縣	尾張国海西郡狐地新田	平民	3	建替え
695	陸軍軍曹	鍋田 成一	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡松底山戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	宮城縣	陸前国宮城郡荒巻村	士族	2	
696	陸軍兵卒	藤岡 仙太郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	東京府	武藏国豊島郡小石川富坂町	平民	0	建替え
697	陸軍兵卒	山根 虎之助	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	山口縣	周防国大嶋郡油良村	平民	0	建替え
698	陸軍軍曹	吉樹 寛	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	石川縣	越前国足羽郡城之橋	士族	3	赤みを帯びる
699	陸軍兵卒	中尾 音楠	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	和歌山縣	紀伊国海士郡加茂組小松原	平民	0	建替え
700	陸軍兵卒	山本 源十	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	長野縣	信濃国安曇郡第十一小區二小區二百五十八番地	平民	2	赤みを帯びる
701	陸軍兵卒	増田 丑祐	明治十年三月三日於熊本縣下肥後国山本郡吉次峠戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	静岡縣	遠江国捺原郡白羽村	平民	0	建替え
702	陸軍兵卒	岩橋 鐘之助	明治十年三月三日於熊本縣下肥後国山本郡吉次峠戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	和歌山縣	紀伊国名草郡今福村	士族	0	建替え
703	陸軍伍長	堀 義紹	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	和歌山縣	紀伊国名草郡和歌山廣所栄町	-	0	建替え
704	陸軍兵卒	酒井 憲隆	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	愛媛縣	伊豫国宇和郡山財村	平民	0	建替え
705	陸軍兵卒	和田 元次郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	廣島縣	安藝国沼田郡廣島	士族	0	建替え
706	陸軍兵卒	宮永 定	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	嵩根縣	伯耆国曾見郡宮前村	平民	0	建替え
707	陸軍兵卒	原 兼吉	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊(第二大隊第二中隊)	山口縣	(周防国都濃郡富田村)	平民	1	死亡月日・場所が左、所属部隊が右
708	陸軍兵卒	渡部 金藏	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第三中隊	福島縣	磐城国宇田郡中村	平民	0	建替え
709	陸軍兵卒	茶屋 甚之助	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	石川縣	加賀国石川郡金澤沼田町	士族	0	建替え
710	陸軍兵卒	吉田 弥三郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	京都府	山城国愛宕郡下京第十九区	平民	0	建替え
711	陸軍兵卒	堀田 磯五郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	石川縣	越中国砺波郡赤倉村	平民	3	赤みを帯びる
712	陸軍兵卒	谷口 佐藏	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	滋賀縣	近江国甲賀郡下田村	平民	0	建替え
713	陸軍兵卒	中西 義之	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	(石川縣)	(加賀国石川)郡安藤町	士族	3	赤みを帯びる
714	陸軍兵卒	宮原 辰八郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	廣嶋縣	安藝国沼田郡廣御村	平民	3	赤みを帯びる
715	陸軍兵卒	小林 勘七	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	(埼玉縣)	(武藏国埼玉)郡間口村	(平民)	3	赤みを帯びる
716	陸軍兵卒	都留 繁作	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第一中隊	福岡縣	豊前国第九大區二小區高森村	平民	0	建替え
717	陸軍軍曹	谷川 幾遠	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第四中隊	岡山縣	備前国御野郡岡山塩元町	士族	0	建替え
718	陸軍軍曹	高橋 静男	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	岐阜縣	美濃国安八郡大垣	士族	0	建替え
719	陸軍軍曹	江村 博典	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第一中隊	長崎縣	肥前国松浦郡第五大區四小區	士族	0	建替え
720	陸軍軍曹	中嶋 積善	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊附	石川縣	越前国足羽郡福井日ノ出上町	士族	0	建替え
721	陸軍軍曹	佐藤 鉄三郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第一大隊第四中隊	岡山縣	備前国御野郡岡山二番町	士族	0	建替え

	表面		右側面	左側面	裏面		石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分		
722	陸軍軍曹	平岩 廣道	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	愛知縣 尾張国愛知郡廣村	士族	0	建替え
723	陸軍軍曹	有田 正路	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	島根縣 因幡国邑美郡村上町	士族	0	建替え
724	陸軍軍曹	管 敏政	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	熊本縣 肥後国飽田郡琵琶崎村	士族	0	建替え
725	陸軍軍曹	野村 信朔	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	石川縣 加賀国河北郡御歩町	士族	0	建替え
726	陸軍伍長	加藤 賢章	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	石川縣 加賀国石川郡金沢櫻島	士族	0	建替え
727	陸軍兵卒	室野 増藏	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡向坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	京都府 丹後国第十大区二小区百五十九番地	平民	0	建替え
728	陸軍兵卒	田中 裕五郎	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木負傷後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	埼玉縣 武蔵国高麗郡上鹿山村	平民	0	建替え
729	陸軍兵卒	吉田 清吉	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	和歌山縣 紀伊国海士郡宇治杉野馬場	平民	0	建替え
730	陸軍兵卒	武田 政太郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊	-	-	0	建替え
731	陸軍兵卒	瀬川 徳松	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	堺縣 和泉国大郷郡堺九軒町東三ノ丁	平民	0	建替え
732	陸軍兵卒	中川 寅藏	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	滋賀縣 近江国高島郡知内村	平民	0	建替え
733	陸軍兵卒	尼子 只市	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	廣島縣 備後国三谿郡長田村	平民	0	建替え
734	陸軍兵卒	岩中 市松	明治十年三月十九日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	和歌山縣 紀伊国那賀郡中道村	平民	2	赤みを帯びる
735	陸軍兵卒	橋田 松吉	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	山梨縣 甲斐国山梨郡勝沼村	平民	0	建替え
736	陸軍兵卒	忝本 音吉	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	愛媛縣 伊豫国宇摩郡津根村	平民	3	赤みを帯びる
737	陸軍兵卒	南部 音松	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	滋賀縣 近江国栗田郡堂村	平民	0	建替え
738	陸軍兵卒	西澤 藤藏	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	嶋根縣 因幡国第五大区五小区河津原村	平民	0	建替え
739	陸軍兵卒	谷 庄次郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	和歌山縣 紀伊国日高郡田尾村	平民	2	赤みを帯びる
740	陸軍兵卒	藤林 関太郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊	山口縣 周防国玖珂郡祖生村	平民	0	建替え
741	陸軍兵卒	岩花 長次郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	三重縣 伊勢国員弁郡石碓村	平民	0	建替え
742	陸軍兵卒	伊東 茂平	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	長崎縣 肥前国第一大區一小區酒井東村	平民	0	建替え
743	陸軍兵卒	古岸 嘉七	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	福岡縣 筑前国第十三大区二十一小区堅粕村	平民	0	建替え
744	陸軍兵卒	岩口 元行	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第四中隊	愛媛縣 伊豫国宇和郡元結掛	士族	0	建替え
745	陸軍兵卒	吉川 米藏	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	京都府 丹後国加佐郡東吉原町	平民	0	建替え
746	陸軍兵卒	手嶋 寅吉	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊	山口縣 周防国吉敷郡上少鱈村	平民	0	建替え
747	陸軍兵卒	白子 梅吉	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	埼玉縣 武蔵国足立郡山山村	平民	0	建替え
748	陸軍兵卒	家藤 龍藏	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	鳥取縣 因幡国湊美郡鳥取	士族	0	建替え
749	陸軍兵卒	杉山 米次郎	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	三重縣 第三大区六小区霞ヶ須新田	平民	0	建替え
750	陸軍兵卒	中嶋 庄藏	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊	山口縣 周防国玖珂郡玖珂村	平民	0	建替え
751	陸軍喇叭卒	林 光信	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第四中隊	岡山縣 伯耆国會見郡米子立崎村	平民	0	建替え
752	陸軍兵卒	森田 房吉	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	大坂府 攝津国住吉郡平野郷	平民	1	赤みを帯びる
753	陸軍兵卒	楯身 貫一	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第四中隊	島根縣 伯耆国八橋郡由良村	平民	1	
754	陸軍兵卒	石川 作次郎	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡舞尾村戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	神奈川縣 武蔵国多摩郡宮村	平民	3	赤みを帯びる
755	陸軍兵卒	大庭 末太	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊	島根縣 石見国美濃郡美濃村	平民	0	
756	陸軍兵卒	則武 顕信	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	岡山縣 備前国第三大区一小區	士族	2	
757	陸軍兵卒	伊藤 直衛	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	高知縣 阿波国名東郡下助任村	士族	2	赤みを帯びる
758	陸軍兵卒	新田 保太郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	石川縣 能登国羽咋郡北川尻村	平民	2	赤みを帯びる
759	陸軍兵卒	宇野 文作	明治十年三月三日於熊本縣下肥後国山本郡吉次峠戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	愛媛縣 伊豫国周布郡長野村	平民	0	建替え
760	陸軍兵卒	星野 容言	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	山口縣 長門国阿武郡萩石屋町	士族	2	赤みを帯びる
761	陸軍兵卒	菱山 紋五郎	(明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡植木町戦死)	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	山梨縣 (甲斐国八代郡蕎麦塚村)	平民	0	所属部隊が裏、出身地が右
762	陸軍兵卒	花光 未三郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡植木負傷後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	和歌山縣 紀伊国海部郡芝之町	士族	0	建替え
763	陸軍兵卒	大西 華太郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	兵庫縣 播磨国加東郡下三草村	平民	3	赤みを帯びる

第Ⅷ章 官軍墓地の調査

	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考	
	階級	姓名	死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分			
764	陸軍兵卒	勝間田 耕助	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木負傷後同月廿二日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死ス	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	山口縣	長門国阿武郡紫福村	士族	0	建替え
765	陸軍兵卒	横川 萬吉	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	静岡縣	遠江国山名郡反取村	平民	0	建替え
766	陸軍兵卒	木村 千賀藏	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国田原坂負傷後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死ス	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	埼玉縣	武蔵国入門郡馬場村	平民	0	建替え
767	陸軍兵卒	安田 喜藏	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	三重縣	第四大區四小區東具野村	平民	0	建替え
768	陸軍兵卒	鈴木 邦太	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国玉名郡吉次峠戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	静岡縣	遠江国榛原郡金谷村	平民	3	赤みを帯びる
769	陸軍兵卒	北谷 由太郎	(明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死)	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	兵庫縣	(淡路国三原郡神道村)	平民	1	所属部隊が裏、出身地が右
770	陸軍兵卒	谷口 筆杢	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	滋賀縣	近江国高島郡山中村	平民	2	赤みを帯びる
771	陸軍兵卒	田中 傳之助	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第四中隊	三重縣	伊勢国一志郡八知村	平民	0	建替え
772	陸軍兵卒	八野 嘉四郎	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	嶋根縣	伯耆国第十三區福原村	平民	0	建替え
773	陸軍兵卒	藤谷 寛	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第四中隊	廣島縣	安藝国安藝郡尾長村	士族	3	赤みを帯びる
774	陸軍兵卒	平林 吉次郎	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国飽託郡向坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	愛知縣	尾張国中島郡一宮村	平民	0	建替え
775	陸軍兵卒	吉本 品吉	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	山口縣	長門国厚狭郡木田村	平民	0	建替え
776	陸軍兵卒	森 佐次郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	和歌山縣	紀伊国海士郡和歌山湊廣小路	士族	2	赤みを帯びる
777	陸軍兵卒	坂尻 次郎	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次峠戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	石川縣	能登国珠洲郡寺家村	平民	0	建替え
778	陸軍曹長	日原 宜曜	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	岡山縣	備前国御野郡岡山	士族	0	建替え
779	陸軍軍曹	野口 龍壽	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第二中隊	福岡縣	豊前国仲津郡横瀬町	士族	0	建替え
780	陸軍軍曹	水上 鑾藏	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	和歌山縣	紀伊国名草郡和歌山廣瀬中ノ丁	士族	1	
781	陸軍伍長	富永 清治	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	三重縣	伊勢国桑名郡新矢名田	士族	0	建替え
782	陸軍伍長	竹嶋 繁保	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	熊本縣	肥後国八代郡第十三區一小區	士族	0	建替え
783	陸軍伍長	宮崎 保忠	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	-	-	-	0	建替え
784	陸軍兵卒	吉田 栄平	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第二大隊第二中隊	新潟縣	越後国蒲原郡横川濱村	平民	0	建替え
785	陸軍兵卒	森田 萬次郎	(明治十年三月二十日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死)	東京鎮台歩兵第一聯隊第四中隊	東京府	(武蔵国豊島郡上板橋)	平民	1	所属部隊が裏、出身地が右
786	陸軍兵卒	池川 七左衛門	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	山梨縣	甲斐国八代郡山家村	平民	2	
787	陸軍兵卒	菅原 覚之助	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	長崎縣	肥前国第二十三區一小區福田村	平民	0	建替え
788	陸軍兵卒	山崎 永吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	群馬縣	上野国甘楽郡天引村	平民	0	建替え
789	陸軍兵卒	笠木 定次郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	嶋根縣	第十七大區五小区今津村	平民	0	建替え
790	陸軍兵卒	安達 嘉藏	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	京都府	丹後国佐賀郡福来村	平民	0	建替え
791	陸軍兵卒	森 倉藏	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	岡山縣	備前国兒島郡塩生村	平民	0	建替え
792	陸軍兵卒	田村 良清	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次峠戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	高知縣	阿波国名東郡富田浦	士族	1	赤みを帯びる
793	陸軍兵卒	藤浪 留松	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	堺縣	和泉国泉南郡新在家村	平民	1	
794	陸軍兵卒	吉延 新吉	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	岡山縣	備前国和氣郡西片上村	平民	0	建替え
795	陸軍兵卒	紙森 元三郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	堺縣	大和国芳野郡中黒村	平民	0	建替え
796	陸軍兵卒	伊藤 仁三松	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡船底山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	三重縣	第一大區三小區塩濱村	平民	0	建替え
797	陸軍兵卒	川原 常助	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	廣嶋縣	備後国深津郡吉津町	平民	0	建替え
798	陸軍兵卒	北川 裕右衛門	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第四中隊	兵庫縣	但馬国二方郡飯野村	平民	0	建替え
799	陸軍兵卒	今村 長杢	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次峠戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	石川縣	加賀国石川郡西倉新保村	平民	1	
800	陸軍兵卒	濱野 源藏	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第四中隊	滋賀縣	近江国犬上郡小川原村	平民	1	赤みを帯びる
801	陸軍兵卒	北井 市太郎	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	東京府	武蔵国豊島郡浅草壽丁	平民	0	建替え
802	陸軍兵卒	野本 繁次郎	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	埼玉縣	武蔵国足立郡風渡野村	平民	2	赤みを帯びる
803	陸軍兵卒	鎌 芳次郎	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	東京府	武蔵国豊島郡鍛冶町	平民	1	赤みを帯びる
804	陸軍伍長	村井 政之丞	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	和歌山縣	紀伊国海士郡小笠町	士族	0	建替え
805	陸軍伍長	有働 信定	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	熊本縣	肥後国託摩郡本庄村	士族	0	建替え

	表面		右側面	左側面	裏面		石材劣化状況	備考	
	階級	姓名	死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分			
806	陸軍兵卒	山田 弥四郎	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	-	-	0	建替え	
807	陸軍兵卒	中西 國裕	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	堺縣	和泉国大島郡田園村	平民	0	建替え
808	陸軍兵卒	山野 新五郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	三重縣	伊勢国一志郡木造村	平民	0	建替え
809	陸軍兵卒	西島 萬吉	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	兵庫縣	丹波国多氣郡木津村	平民	-	建替え
810	-	-	-	-	-	-	-	-	欠番
811	陸軍兵卒	根岸 平五郎	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	-	-	-	-	建替え
812	陸軍兵卒	小山 重次郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	東京府	武藏国豊島郡神田西町	平民	-	建替え
813	陸軍兵卒	疋田 久五郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	滋賀縣	近江国犬上郡濱越村	平民	-	建替え
814	陸軍兵卒	笠原 啓之進	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	岡山縣	備中国浅口郡佐方村	平民	0	建替え
815	陸軍兵卒	小林 源三郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	三重縣	伊勢国桑名郡小山村	平民	0	建替え
816	陸軍兵卒	後藤 半三郎	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡横平山戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第三中隊	-	-	-	1	死亡月日・場所が左、出身地が右
817	陸軍兵卒	長岡 卯太郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣島縣	備後国御調郡菅村	平民	0	建替え
818	陸軍兵卒	小林 熊太郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡向坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	山梨縣	甲斐国巨摩郡豊岡村	平民	2	赤みを帯びる
819	陸軍兵卒	中川 小三郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	滋賀縣	近江国愛知郡山川原村	平民	0	建替え
820	陸軍兵卒	大石 金七	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第二中隊	山口縣	周防国大島郡日前村	平民	0	建替え
821	陸軍兵卒	佐藤 才治	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次峠戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	千葉縣	安房国長狹郡竹平村	平民	3	赤みを帯びる
822	陸軍兵卒	向 巳之助	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	兵庫縣	播磨国宍粟郡深谷村	平民	0	建替え
823	陸軍兵卒	安藤 鶴藏	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	滋賀縣	若狭国遠敷郡西勢村	平民	0	建替え
824	陸軍兵卒	藤村 八十吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	三重縣	伊勢国飯高郡塚本村	平民	0	建替え
825	陸軍兵卒	角村 庄作	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	山口縣	周防国吉敷郡本郷村	平民	0	建替え
826	陸軍兵卒	古我 梅次郎	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次峠戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	滋賀縣	近江国高島郡大供村	平民	2	赤みを帯びる
827	陸軍兵卒	下村 虎市	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮臺歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	兵庫縣	播磨国福原村	平民	0	建替え
828	陸軍兵卒	大澤 梅吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	滋賀縣	近江国蒲生郡平林村	平民	0	建替え
829	陸軍喇叭卒	上仲 浅五郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	京都府	丹波国船井郡垣内村	平民	0	建替え
830	陸軍兵卒	中村 譽左右	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次峠戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	山形縣	羽前国置賜郡膳仲町	士族	0	建替え
831	陸軍兵卒	村木 福裕	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	兵庫縣	播磨国第十四大区中村	平民	0	建替え
832	陸軍兵卒	浅沼 豊太郎	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	静岡縣	伊豆国賀茂郡上賀茂村	平民	3	赤みを帯びる
833	陸軍兵卒	石井 勳十郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮臺歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	神奈川県	武藏国都築郡奈良村	平民	1	死亡月日・場所が左、出身地が右
834	陸軍兵卒	加藤 弥太郎	明治十年三月十九日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	大坂府	播磨国高下郡八番組太田村	平民	0	建替え
835	陸軍兵卒	古屋 友吉	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国日高郡切目川多村	士族	0	建替え
836	陸軍兵卒	鈴木 丈之助	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	栃木縣	下野国都賀郡上稲葉村	平民	1	赤みを帯びる
837	陸軍兵卒	中川 善吉	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	新潟縣	越後国蒲原郡酒屋村	平民	0	建替え
838	陸軍曹長	芝 務喜	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	和歌山縣	紀伊国日高郡野島	士族	0	建替え
839	陸軍軍曹	春永 精一	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第一中隊	堺縣	大和国式上郡柳本村	士族	0	建替え
840	陸軍伍長	久米 寛正	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	東京鎮台歩兵参聯隊第三大隊第二中隊	愛媛縣	讃岐国第十八大区一小區宮脇村	平民	2	赤みを帯びる
841	陸軍兵卒	中橋 文五郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	滋賀縣	近江国坂田郡庄蔵寺村	平民	0	建替え
842	陸軍兵卒	三林 庄右エ門	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	三重縣	伊勢国桑名郡本願寺村	平民	0	建替え
843	陸軍喇叭卒	中村 増次郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	三重縣	伊勢国員辨郡大木村	平民	0	建替え
844	陸軍伍長	岩俎 正澄	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国宍粟郡長谷村	平民	0	建替え
845	陸軍兵卒	土谷 直作	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	石川縣	加賀国石川郡久原村	士族	0	建替え
846	陸軍兵卒	小堀 弥五七	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	滋賀縣	近江国大上郡大堀村	平民	0	建替え
847	陸軍兵卒	吉川 良藏	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	滋賀縣	近江国坂田郡上野村	平民	0	建替え
848	陸軍兵卒	中西 宗三郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	兵庫縣	摂津国宍原郡熊内村	平民	0	建替え

第Ⅷ章 官軍墓地の調査

	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考	
	階級	姓名	死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分			
849	陸軍兵卒	矢作 鎌太郎	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	東京府	武藏国豊島郡小豆澤村	平民	0	建替え
850	陸軍兵卒	北浦 伊三吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	堺縣	河内国若江郡高井田村	平民	0	建替え
851	陸軍兵卒	川口 善作	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	和歌山縣	紀伊国日高郡羽六村	平民	0	建替え
852	陸軍兵卒	大村 繁三郎	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	滋賀縣	近江国浅井郡五村	平民	0	建替え
853	陸軍兵卒	大坂 一二	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	-	高知縣	阿波國名東郡下助任	士族	0	建替え
854	陸軍兵卒	上田 弥三治	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	滋賀縣	近江国甲賀郡永野村	平民	0	建替え
855	陸軍兵卒	小谷 源弥	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊(九聯隊)第二大隊第二中隊	滋賀縣	近江國(坂田郡藤川村)	平民	3	赤みを帯びる
856	陸軍兵卒	荒井 龍乘	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	滋賀縣	近江国蒲生郡八幡北元町	増(ママ)	2	赤みを帯びる
857	陸軍兵卒	大坪 金藏	明治十年三月二十日於熊本縣下肥後国向坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	静岡縣	駿河國志太郡道原村	平民	0	
858	陸軍兵卒	二宮 源十郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	三重縣	伊勢國員辨郡片植村	平民	2	赤みを帯びる
859	陸軍兵卒	丸山 菊之進	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第三中隊	山口縣	周防國佐岐郡牟禮村	平民	0	建替え
860	陸軍兵卒	南上 庄三郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	堺縣	大和国山邊郡蘭生村	平民	0	建替え
861	陸軍兵卒	土屋 謙	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	石川縣	越前国足羽郡福井田原町	士族	0	建替え
862	陸軍兵卒	鈴木 治三郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	石川縣	加賀国金澤野町三間道	士族	2	赤みを帯びる
863	陸軍軍曹	三重 俊房	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	熊本縣	肥後国八代郡塩屋町	士族	0	建替え
864	陸軍兵卒	岡田 信吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	岐阜縣	美濃國可兒郡伏見	平民	2	赤みを帯びる
865	陸軍兵卒	宮本 屋馬太郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	兵庫縣	播磨国加古郡細工町	平民	0	建替え
866	陸軍兵卒	野呂 平三郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	三重縣	伊勢国飯高郡下仁柿村	平民	0	建替え
867	陸軍兵卒	川口 虎吉	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第三中隊	大坂府	播津国嶋下郡味舌下村	平民	0	建替え
868	陸軍兵卒	袖山 新三郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	茨城縣	常陸国真壁郡鯨村	平民	0	建替え
869	陸軍兵卒	西村 磯吉	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡邊田ノ山戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第三大隊第一中隊	長崎縣	肥前国第四大區崎村	平民	0	建替え
870	陸軍兵卒	市川 興助	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	神奈川縣	武藏国多摩郡四ッ谷村	平民	0	
871	陸軍兵卒	中村 次吉	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	石川縣	加賀国石川郡西新町	平民	2	赤みを帯びる
872	陸軍兵卒	谷口 良造	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	滋賀縣	近江国高島郡野口村	平民	0	建替え
873	陸軍兵卒	飯草 興吉	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	神奈川縣	武藏国都築郡栗木邑	平民	0	建替え
874	陸軍兵卒	川濱 重太郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	兵庫縣	但馬国養父郡岡宮村	平民	0	建替え
875	陸軍兵卒	宮崎 岨藏	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	千葉縣	下総国海士郡高田村	平民	2	赤みを帯びる
876	陸軍兵卒	渡邊 啓二郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	鳥根縣	出雲国飯石郡八幡村	平民	0	建替え
877	陸軍兵卒	外谷 亀万大	明治十年三月三日於熊本縣下肥後国山本郡吉次峠戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	兵庫縣	摂津国川邊郡尼ヶ岬田町	士族	1	
878	陸軍兵卒	岸 嘉七	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	滋賀縣	近江国高嶋郡西萬木村	平民	0	
879	陸軍伍長	渡邊 誠發	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	三重縣	伊勢国桑名郡三之丸	士族	0	建替え
880	陸軍兵卒	有田 藤楠	明治十年三月廿二日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国名草郡苦山	平民	0	建替え
881	陸軍兵卒	志賀 長右工門	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮臺歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	京都府	丹後国加佐郡在田村	平民	0	建替え
882	陸軍兵卒	福田 勳次郎	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮臺歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	岡山縣	美作国勝北郡櫛原村	平民	0	建替え
883	陸軍兵卒	野中 新八	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国山本郡七本戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	長崎縣	肥前国第十大区二小区宇良村	士族	0	建替え
884	陸軍軍曹	藤田 延忠	明治十年三月十一日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺豫備砲兵第二大隊	鳥根縣	因幡国村美郡本村	士族	0	建替え
885	陸軍兵卒	豊田 治兵衛	明治十年三月十八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮臺歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	大坂府	播津国住吉郡第二大區八番地	平民	0	建替え
886	陸軍兵卒	高橋 勇助	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	宮城縣	陸前国宮城郡岡田村	士族	0	建替え
887	陸軍兵卒	江原 次郎吉	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	山口縣	長門国大津郡日置邑	平民	1	赤みを帯びる
888	陸軍兵卒	中島 金五郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	滋賀縣	近江国蒲生郡東村	平民	2	
889	陸軍曹長	片山 百合吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊附	山口縣	周防国都濃郡福川村	士族	0	建替え
890	陸軍軍曹	高橋 園次	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	京都府	丹波国天田郡福知山	士族	0	建替え



	表面		右側面 死亡月日・死亡場所	左側面 所属部隊	裏面		石材 劣化 状況	備考	
	階級	姓名			出身地				旧身分
891	陸軍伍長	高橋 甚吉	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	石川縣	加賀国石川郡松本町	士族	0	建替え
892	陸軍喇叭卒	宮本 重助	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第三中隊	和歌山縣	紀伊国牟婁郡浦神村	平民	2	
893	陸軍兵卒	松田 留吉	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死(負傷後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死)	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第一中隊	堺縣	大和国式下郡中村	平民	3	
894	陸軍兵卒	松本 恒次郎	明治十年三月五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	大分縣	豊前国宇佐郡山口村	平民	0	建替え
895	陸軍兵卒	野田 忠次郎	(明治十年三月十二日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死(負傷後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死))	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	長岑縣	(肥前国勝ヶ里)	平民	1	所属部隊が裏、出身地が右
896	陸軍兵卒	三木 文平	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	高知縣	阿波国名東郡沖之須浦	士族	2	
897	陸軍兵卒	大杉 留吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	三重縣	伊勢国飯高郡羽見村	平民	3	赤みを帯びる
898	陸軍兵卒	江波 喜三太	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	滋賀縣	若狭国遠敷郡竹原村	士族	0	
899	陸軍兵卒	野間 恒吉	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死(負傷後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死)	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第四中隊	大坂府	攝津国島上郡直上村	平民	0	
900	陸軍兵卒	下山 貞一	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	嵐根縣	因幡国邑美郡新藏町	士族	2	赤みを帯びる
901	陸軍兵卒	速水 正孝	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡船底山戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第三中隊	三重縣	伊賀国阿拜郡上野忍丁	士族	0	建替え
902	陸軍兵卒	柿本 豊次郎	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	堺縣	河内国茨田郡出口村	平民	1	
903	陸軍兵卒	山野 好實	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死(負傷後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死)	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	廣島縣	安藝国沼田郡段原村	平民	0	死亡月日・場所が左、所属部隊が右 建替え
904	陸軍兵卒	財津 永清	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡船底山戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	熊本縣	肥後国飽田郡九寺寺村新屋敷	士族	0	建替え
905	陸軍兵卒	神村 清裕	明治十年二月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	群馬縣	上野国邑楽郡北大島村	平民	0	建替え
906	陸軍兵卒	上野 作次郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第一中隊	滋賀縣	近江国栗太郡関津村	平民	0	建替え
907	陸軍兵卒	向 清太郎	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	兵庫縣	但馬国養父郡中村	平民	0	建替え
908	陸軍兵卒	蒲田 庄七	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊	京都府	丹後国興佐郡岩瀧村	平民	0	建替え
909	陸軍兵卒	福村 秀一	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	石川縣	加賀国石川郡金澤杉浦丁	士族	0	建替え
910	陸軍曹長	上原 尚儀	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡木留村戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	鹿児島縣	日向国諸縣郡都城	士族	0	建替え
911	陸軍軍曹	鈴木 昌光	明治十年三月十三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	茨木縣	常陸国多賀郡大久保村	士族	0	建替え
912	陸軍軍曹	大田尾 秀冬	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	茨木縣	常陸国茨木郡笠間	士族	0	建替え
913	陸軍軍曹	小田 信國	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国山本郡滴水彩戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	山口縣	長門国豊浦郡金谷	士族	0	建替え
914	陸軍軍曹	佐藤 文忠	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡木留村戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	三重縣	伊勢国桑名郡桑名矢田嶺	士族	0	建替え
915	陸軍伍長	大垣 正成	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	石川縣	加賀国石川郡金澤町	平民	3	
916	陸軍伍長	宮部 宗章	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国山本郡圓大寺戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第三中隊	鳥根縣	(因幡国邑美郡湯所村)	士族	1	死亡月日・場所が左、所属部隊が裏、出身地が右
917	陸軍伍長	古川 濱弥	明治十年三月十三日於熊本縣下肥後国山本郡平蓋山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	滋賀縣	近江国犬上郡九院村	平民	2	
918	陸軍伍長	三分一 幸三郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡那智村戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	山口縣	周防国玖珂郡和木村	平民	0	建替え
919	陸軍兵卒	永尾 富三郎	明治十年三月二日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	長岑縣	肥前国神浦村	平民	0	建替え
920	陸軍兵卒	和久井 刃吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡滴水彩戦死	近衛工兵第二小隊	新潟縣	越後国魚沼郡浦佐村	平民	1	
921	陸軍兵卒	廣木 善三郎	明治十年三月十三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第三中隊	鳥根縣	伯耆国河邑郡中谷邑	平民	0	所属部隊が右、出身地が裏 建替え
922	陸軍兵卒	小松 米吉	(明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死)	名古屋鎮台歩兵第六聯隊第三大隊第四中隊	長岑縣	(信濃国筑摩郡塩尻村)	平民	1	所属部隊が裏、出身地が右
923	陸軍兵卒	中嶋 福太郎	明治十年三月十三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第三中隊	鳥根縣	出雲国意宇郡和田見町	平民	1	赤みを帯びる
924	陸軍兵卒	福嶋 政吉	明治十年三月十三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	静岡縣	遠江国捺原郡柏原村	平民	1	赤みを帯びる
925	陸軍兵卒	西脇 石裕	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	兵庫縣	攝津国八部郡神戸	平民	2	赤みを帯びる
926	陸軍兵卒	吉野 庄五郎	明治十年三月十三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第三中隊	兵庫縣	播磨国揖西郡劫尾村	平民	1	赤みを帯びる
927	陸軍兵卒	麓 兼捨	明治十年三月十三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	岐阜縣	美濃国第八大区十四小区原原村	平民	0	建替え
928	陸軍兵卒	米田 信次郎	明治十年三月十三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第三中隊	鳥根縣	因幡国邑美郡勿垣村	士族	0	建替え
929	陸軍兵卒	佐藤 成一	明治十年三月十三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第三中隊	(青森縣)	(陸奥国津軽郡弘前)	士族	1	赤みを帯びる
930	陸軍兵卒	杉野 豊八	明治十年三月十三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	愛媛縣	伊豫国桑村郡国安村	平民	1	赤みを帯びる
931	陸軍兵卒	鈴木 留次	明治十年三月十三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	福島縣	磐城国村山郡菅谷村	平民	0	建替え
932	陸軍兵卒	森口 直吉	明治十年三月十三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	和歌山縣	紀伊国日高郡江川村	平民	1	赤みを帯びる

第Ⅷ章 官軍墓地の調査

	表面		右側面	左側面	裏面		石材劣化状況	備考	
	階級	姓名	死亡日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分			
933	(陸軍)兵卒	大乘 彦太郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第三中隊	静岡縣	伊豆国加茂郡柿暮村	平民	3	赤みを帯びる
934	陸軍兵卒	村田 満房	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡瀧水戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	山口縣	長洲国阿武郡萩	士族	1	赤みを帯びる
935	陸軍兵卒	市村 善五郎	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次越戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	石川縣	加賀国江沼郡中島村	平民	0	死亡日・場所が左、所属部隊が右 建替え
936	陸軍兵卒	松永 兼次郎	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡瀧水戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	山口縣	(周防国玖珂郡玖珂村)	(平民)	1	
937	陸軍兵卒	上山 寅楠	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第四中隊	和歌山縣	紀伊国日高郡山笠村	平民	0	建替え
938	陸軍兵卒	春木 寅吉	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡門大寺村戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	岡山縣	美作国西北條郡西今村	平民	0	建替え
939	陸軍兵卒	高野 卯之吉	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	福岡縣	筑前国第十二大区四小区山口村	平民	0	建替え
940	陸軍兵卒	横溝 藤太郎	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡瀧水戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	岡山縣	備後国浅口郡口林村	平民	0	死亡日・場所が左、所属部隊が右 建替え
941	陸軍兵卒	吉野 末市	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡瀧水戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	廣島縣	備後国三次郡戸内河村	平民	0	建替え
942	陸軍兵卒	野寄 茂助	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛工兵第一小隊	(千葉縣)	(下総)国葛飾(郡久真門村)	平民	3	赤みを帯びる
943	陸軍兵卒	加藤 鱧	明治十年三月廿二日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	嶋根縣	因幡国氣多郡土井村	士族	2	赤みを帯びる
944	陸(軍兵)卒	長石 瀧五郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡門大寺村戦死	大坂鎮臺歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	岡山縣	美作国西尾郡小座村	平民	2	赤みを帯びる
945	陸軍兵卒	駒田 弥三郎	明治十年三月廿二日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	東京府	武藏国荏原郡芝通新町	平民	3	赤みを帯びる
946	陸軍兵卒	大森 善三郎	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡原負傷後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	岡山縣	備前国赤坂郡太田村	平民	2	赤みを帯びる
947	陸軍兵卒	大久保 新作	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡大月原負傷後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	廣島縣	安藝国豊田郡松木村	平民	2	赤みを帯びる
948	陸軍兵卒	脇坂 平七	明治十年三月廿二日於熊本縣下肥後国山本郡鈴麦村負傷後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊	廣島縣	安藝国加茂郡上三永村	平民	2	赤みを帯びる
949	陸軍兵卒	長嶋 七三郎	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	名古屋鎮台歩兵第六聯隊第一大隊第四中隊	岐阜縣	美濃国第八大区十二小区坂東村	平民	0	死亡日・場所が左、所属部隊が右 建替え
950	陸軍軍曹	美野 正	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	高知縣	阿波国名東郡助任	士族	0	建替え
951	陸軍軍曹	村山 清脩	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国玉名郡吉次越戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第一中隊	嵐根縣	因幡国邑美郡橋町	士族	2	赤みを帯びる
952	陸軍軍曹	高見 小文太	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国玉名郡遠合寺村戦死	熊本鎮台歩兵第十三聯隊第二大隊第四中隊	熊本縣	肥後国下益城郡杉島村	士族	2	赤みを帯びる
953	陸軍軍曹	小野 恒忠	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国玉名郡半壺山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第四中隊	石川縣	加賀国石川郡高用町	士族	0	建替え
954	陸軍軍曹	馬淵 弟七郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	宮城縣	陸前国仙台東二番丁	士族	2	赤みを帯びる
955	陸軍曹長	宮地 翼郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡大月原戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	滋賀縣	若狭国遠敷郡竹原村	士族	3	赤みを帯びる
956	陸軍軍曹	北澤 種正	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡長浦村戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	石川縣	加賀国石川郡木ノ新保元公事場丁	士族	1	赤みを帯びる
957	陸軍兵卒	佐園 徳藏	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	兵庫縣	丹波国多紀郡松村	平民	1	赤みを帯びる
958	陸軍兵卒	佐藤 豊吉	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	神奈川縣	武藏国久良郡北方村	平民	0	死亡日・場所が左、所属部隊が右 建替え
959	陸軍兵卒	山本 勳次郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	滋賀縣	近江国滋賀郡坂本村	平民	0	建替え
960	陸軍兵卒	内貴 竹次郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	滋賀縣	近江国坂田郡瀬戸町	平民	2	赤みを帯びる
961	陸軍兵卒	松澤 榮藏	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	東京府	武藏国豊島郡駒込浅嘉町	平民	2	死亡日・場所が左、所属部隊が右、赤みを帯びる
962	陸軍兵卒	横谷 弥藏	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	兵庫縣	丹波国水上郡小野村	平民	0	建替え
963	陸軍兵卒	北川 善六	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	滋賀縣	近江国犬上郡松原村	平民	0	死亡日・場所が左、所属部隊が右 建替え
964	陸軍兵卒	河本 常次郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡瀧水戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊	鳥根縣	出雲国意宇郡魚町	平民	0	死亡日・場所が左、所属部隊が右 建替え
965	陸軍兵卒	和田 源藏	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡瀧水戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	山口縣	長門国豊浦郡原村	平民	0	死亡日・場所が左、所属部隊が左 建替え
966	陸軍兵卒	岸 乙吉	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	神奈川縣	相模国三浦郡林村	平民	0	建替え
967	陸軍兵卒	藤岡 卯三郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡大月原戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	山口縣	周防国玖珂郡金田村	平民	0	死亡日・場所が左、所属部隊が右 建替え
968	陸軍兵卒	持丸 元次郎	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	(神奈川縣)	相模国高(座郡)内村	平民	2	赤みを帯びる
969	陸軍兵卒	徳波 米吉	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	(静岡縣)	(駿河)国志田郡御戸(谷村)	(平民)	2	赤みを帯びる
970	陸軍兵卒	道順 富次郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	大坂府	攝津国能勢郡余野村	平民	2	赤みを帯びる
971	陸軍兵卒	宇陀 末吉	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡吉次越戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第四中隊	三重縣	伊勢国安濃郡安都村	平民	0	死亡日・場所が左、所属部隊が右 建替え
972	陸軍兵卒	吉見 竹藏	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡原坂戦死	東京鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	京都府	丹波国天田郡野田村	平民	0	建替え
973	陸軍兵卒	山川 常吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	滋賀縣	近江国野洲郡大條原村	神官	1	

	表面		右側面	左側面	裏面		石材劣化状況	備考	
	階級	姓名	死亡日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分			
974	陸軍兵卒	山岡 即照	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	滋賀縣	近江国蒲生郡第八区	僧	2	赤みを帯びる
975	陸軍兵卒	後藤田 久藏	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次峠戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	高知縣	阿波国名西郡左右内村	平民	1	赤みを帯びる
976	陸軍兵卒	青柳 廣吉	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊	千葉縣	下總国印旛郡小林村	平民	1	赤みを帯びる
977	陸軍兵卒	山形 幸一郎	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡吉次峠戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊	兵庫縣	攝津国川邊郡尼ヶ崎風呂辻町	士族	3	赤みを帯びる
978	陸軍兵卒	巨勢 廣吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	三重縣	伊勢国一志郡太郎生村	平民	2	赤みを帯びる
979	陸軍兵卒	糸川 勳次郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	三重縣	紀伊国牟婁郡錦浦	平民	2	赤みを帯びる

軍夫 1	軍夫	坂本 作右工門	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣即死	征討軍團輜重部	福岡縣	筑後国柳川間村	-	0	建替え
軍夫 2	軍夫	内田 年裕	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣即死	征討軍團輜重部	廣島縣	備後国芦田郡有地村	-	0	建替え
軍夫 3	軍夫	花田 勝助	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣即死	征討軍團輜重部	福岡縣	第三大区四小区勝浦	-	0	建替え
軍夫 4	軍夫	八尋 清一	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡滴水即死	征討軍團輜重部	福岡縣	筑前国御笠郡天山村	-	0	建替え

第Ⅷ章 官軍墓地の調査

第24表 宇蘇浦官軍墓地石碑名簿

凡例：( ) 内は記入なし。太ゴシック、網掛けは造字  
 石材劣化状況：0 劣化無し、建て替え済のもの。 1 表面がやや劣化している。 2 赤みを帯び、亀裂が入るなど劣化が著しい。

No.	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分		
1	陸軍少佐従六位	吉松 秀枝	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊長	高知縣	土佐国土佐郡本町	士族	1
2	陸軍大尉正五位	難枝 宗明	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第一中隊長	東京府	第三大區三小区三番丁廿三番地	華族	0 建替え
3	陸軍大尉正七位	北橋 利盛	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第一中隊長	山形縣	羽前国田川郡大泉元長泉寺村	士族	0 建替え
4	陸軍大尉正七位	杉岡 政一	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第一中隊長	石川縣	加賀国石川郡金澤小立野白山町	士族	1
5	陸軍少尉試補	伴 昭周	明治十年四月一日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第三中隊	千葉縣	下総国印旛郡鉤木村	士族	0 建替え
6	陸軍少尉正八位	栗屋 才次	明治十年四月九日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第一中隊長	山口縣	周防国都濃郡徳山	士族	1 赤みを帯びる
7	陸軍大尉正七位	引頭 高倫	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣負傷後同日同郡木葉病院ニ於テ死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊長	山口縣	長門国阿武郡萩	士族	1 赤みを帯びる
8	陸軍大尉正七位	彦坂 為一	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊長	和歌山縣	紀伊国名草郡廣瀬元奉行町	士族	0
9	陸軍大尉正七位	佐々木 昌武	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣負傷後同日同郡木葉病院ニ於テ死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊長	嶋根縣	因幡国法美郡吉方村	士族	3 赤みを帯びる
10	陸軍大尉正七位	永田 由謨	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊長	岡山縣	備前国御野郡岡山四番町	士族	2 赤みを帯びる
11	陸軍中尉従七位	大谷 利章	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	山口縣	長門国阿武郡福井	士族	3 赤みを帯びる
12	陸軍少尉正八位	門田 正壽	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡船底山戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	山口縣	長門国阿武郡福井	士族	2 赤みを帯びる
13	陸軍少尉正八位	原田 菴	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	山口縣	長門国阿武郡萩	士族	0 建替え
14	陸軍少尉正八位	竹下 正司	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	教導團歩兵第二大隊第三中隊	山口縣	周防国玖珂郡横山村	士族	0 建替え
15	陸軍少尉試補	藤井 親賢	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊長	鹿児島縣	薩摩国鹿兒島郡荒田村	士族	0 建替え
16	陸軍大尉正七位	曾爾 忠一	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊長心得	嶋根縣	出雲国島根郡外中原町	士族	0
17	陸軍大尉正七位	五藤 正誼	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第一中隊長	高知縣	土佐国土佐郡久萬村	士族	0 建替え
18	陸軍大尉正七位	小谷 義忠	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡船底山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊長	嶋根縣	因幡国邑見郡鳥取立川	士族	1 赤みを帯びる
19	陸軍中尉従七位	森 周真	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第四中隊長	岡山縣	備前国御野郡岡山	士族	0 建替え
20	陸軍少尉正八位	片山 殷俊	明治十年三月三日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊長	山口縣	長門国阿武郡萩	士族	3 赤みを帯びる
21	陸軍少尉正八位	山本 居周	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊長	鹿児島縣	薩摩国鹿兒島郡鹿兒島	士族	0 建替え
22	陸軍少尉正八位	加藤 三郎	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊長	石川縣	越中国新川郡富山	士族	2 赤みを帯びる
23	陸軍少尉正八位	加藤 成顕	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣負傷後同日同郡木葉病院ニ於テ死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊長	愛媛縣	伊豫国喜多郡大洲村	士族	3 赤みを帯びる
24	陸軍少尉正八位	村上 辰之助	明治十年三月三日於熊本縣下肥後国山本郡萩追負傷後同月十三日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	東京鎮台土兵第一大隊第二中隊長	和歌山縣	紀伊国海士郡塩道嶋崎町	士族	1 赤みを帯びる
25	陸軍少尉試補	井手 利見	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊長	福岡縣	筑後国下妻郡小田村	士族	3 赤みを帯びる
26	陸軍々曹	森山 康之丞	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡大月原戦死	廣嶋鎮台歩兵第一聯隊第二大隊第四中隊長	嶋根縣	出雲国意宇郡雜賀町	士族	1
27	陸軍伍長	相場 桂重	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊長	熊本縣	肥後国飽田郡熊本水道町	士族	1 赤みを帯びる
28	陸軍伍長	大狭 吉實	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第三中隊長	山形縣	羽前国置賜郡龍宮町	士族	3 赤みを帯びる
29	陸軍軍曹	西村 安直	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡大月原負傷後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊長	山口縣	長門国豊浦郡印内村	士族	1 赤みを帯びる
30	陸軍伍長	鈴木 庄平	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡萩追村戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第三大隊第二中隊長	岡山縣	美作国勝北郡綿原村	平民	2 赤みを帯びる
31	陸軍軍曹	田村 平右衛門	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊長	茨城縣	常陸国那珂郡湊村本町	士族	1 赤みを帯びる
32	陸軍兵卒	金子 福松	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊長	東京府	第三大區五小區市ヶ谷田町	平民	1 赤みを帯びる
33	陸軍伍長	山澤 信正	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊長	山形縣	羽前国田川郡大泉天室寺外形	士族	0 建替え
34	陸軍軍曹	中村 一貫	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第三中隊長	嶋根縣	因幡国村美郡去方	士族	0 建替え
35	陸軍軍曹	野村 龜久太郎	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国門台寺村戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊長	石川縣	加賀国石川郡金沢	士族	0 建替え
36	陸軍伍長	佐野 省三	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	名古屋鎮台歩兵第六聯隊第一大隊第四中隊長	愛知縣	三河国額田郡岡崎唐生町	士族	1 赤みを帯びる
37	陸軍伍長	平瀬 富義	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊長	新潟縣	越後国蒲原郡新発田	士族	0 建替え
38	陸軍軍曹	澤 重治	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国玉名郡生野村戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊長	嶋根縣	出雲国嶋根郡南田町	士族	2 赤みを帯びる
39	陸軍伍長	竹田 義佑	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第一中隊長	大分縣	豊後国海部郡佐伯	士族	2 赤みを帯びる
40	陸軍伍長	宮竹 源作	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊長	新潟縣	越後国刈羽郡大沼村	平民	1 赤みを帯びる
41	陸軍伍長	宮島 正之	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	名古屋鎮台歩兵第六聯隊第一大隊第四中隊長	石川縣	加賀国河北郡金沢三十人町	士族	2 赤みを帯びる

	表面		右側面	左側面	裏面		石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分		
42	陸軍兵卒	原 大四郎	明治十年三月二十八日於熊本縣下肥後國山本郡木田戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第一中隊	福岡縣 筑後国山本郡放元寺村	平民	1	
43	陸軍兵卒	梶山 文吉	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後國山本郡木田負傷後同月廿九日同國王名郡木葉病院ニ於テ死	名古屋鎮台歩兵第六聯隊第一大隊第四中隊	静岡県 遠江国榛原郡藤川村	平民	1	
44	陸軍軍曹	榎間 榮茲	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後國山本郡植木負傷後同月廿九日同國王名郡木葉病院ニ於テ死	東京鎮台歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	三重縣 伊勢国桑名郡桑名一色町	士族	1	赤みを帯びる
45	陸軍伍長從五位	大久保 忠良	明治十年三月廿九日於熊本縣下肥後國山本郡木田留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第三中隊	東京府 下芝濱松町	華族	3	赤みを帯びる
46	陸軍曹長	山本 正富	明治十年四月一日於熊本縣下肥後國山本郡半高山戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	和歌山縣 紀伊国海部郡源藏馬場	士族	3	赤みを帯びる
47	陸軍伍長	佐伯 八十郎	明治十年四月三日於熊本縣下肥後國山本郡吉次越戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	京都府 丹波国桑田郡上弓削村	平民	3	赤みを帯びる
48	陸軍軍曹	不破 安定	明治十年四月二日於熊本縣下肥後國山本郡吉次越戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	福岡縣 筑前国那珂郡博多大濱町	士族	2	赤みを帯びる
49	陸軍伍長	杉山 雄吉	明治十年四月三日於熊本縣下肥後國山本郡瀧水村戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	山口縣 長門国厚狭郡吉部村	平民	0	建替え
50	陸軍軍曹	栢嶋 十三郎	明治十年四月一日於熊本縣下肥後國山本郡木田留戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣嶋縣 安藝国安藝郡原村	士族	2	赤みを帯びる
51	陸軍伍長	堀谷 紋藏	明治十年四月一日於熊本縣下肥後國山本郡吉次越戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第四中隊	堺縣 大和国吉野郡高原村	平民	1	赤みを帯びる
52	陸軍軍曹	小黑 吉武	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後國山本郡木田留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第三中隊	山形縣 羽前国置賜郡無足村	士族	1	赤みを帯びる
53	陸軍伍長	小澤 元次郎	明治十年四月一日於熊本縣下肥後國山本郡半高山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	滋賀縣 近江国蒲生郡中小森村	平民	3	赤みを帯びる
54	陸軍兵卒	大野 留吉	明治十年二月廿日於熊本縣下肥後國山本郡木田留戦死	( ) 兵第三聯隊 第三大隊	- 武蔵國 ( ) 郡 檜原村	平民	3	
55	陸軍伍長	平山 太郎	明治十年四月六日於熊本縣下肥後國山本郡植木負傷後同日同國王名郡木葉病院ニ於テ死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊	静岡県 伊豆国加茂郡下流村	平民	1	赤みを帯びる
56	陸軍伍長	油布 為三郎	明治十年四月六日於熊本縣下肥後國山本郡植木負傷後同日同國王名郡木葉病院ニ於テ死	大阪鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第二中隊	大分縣 豊後国海部郡福良村	士族	0	建替え
57	陸軍伍長	岡田 寅助	明治十年四月八日於熊本縣下肥後國山本郡平野村負傷後同日同國王名郡木葉病院ニ於テ死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	廣嶋縣 安藝国豊田郡惣定村	平民	3	赤みを帯びる
58	陸軍伍長	吉田 廣	明治十年二月廿七日於熊本縣下肥後國山本郡植木戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第四中隊	京都府 丹後国與佐郡宮津靄賀町	士族	2	赤みを帯びる
59	陸軍伍長	三木 力	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後國山本郡木田留戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第四中隊	大分縣 豊後国海士郡佐伯村	士族	2	赤みを帯びる
60	陸軍伍長	岸井 甚太郎	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後國山本郡木田留戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	熊本縣 肥後国飽田郡第二大區一小區	士族	3	赤みを帯びる
61	陸軍軍曹	渋谷 勲太郎	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後國山本郡木田留戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第二中隊	福岡縣 豊前国仲津郡辻垣村	士族	2	赤みを帯びる
62	陸軍軍曹	垣川 猛五郎	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後國山本郡木田留戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	大分縣 豊後国速見郡日出村	士族	0	建替え
63	陸軍軍曹	山下 道矢	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後國山本郡木田留戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第一中隊	福岡縣 筑前国那珂郡大工町	士族	2	赤みを帯びる
64	陸軍兵卒	鳥村 新八	明治十年三月廿五日於山本郡木田留戦死	近衛歩兵第一聯隊 (第一大隊第一中隊)	新瀉縣 (越後国蒲原郡新津町)	平民	1	
65	陸軍兵卒	村山 要藏	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後國山本郡木田留戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	大坂府 摂津国島下郡小川村	平民	2	赤みを帯びる
66	陸軍兵卒	松本 八藏	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後國山本郡木田留戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	廣嶋縣 備後国芦田郡中須村	平民	3	赤みを帯びる
67	陸軍兵卒	中村 亀太郎	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後國山本郡大日原戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	鳥根縣 石見国那賀郡ノノ村	平民	0	建替え
68	陸軍兵卒	中川 武右衛門	明治十年三月廿九日於熊本縣下肥後國山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	滋賀縣 近江国犬上郡坂村	平民	0	建替え
69	陸軍兵卒	藤掛 鶴吉	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後國山本郡植木負傷後同日同國王名郡木葉病院ニ於テ死	名古屋鎮台歩兵第六聯隊第三大隊第四中隊	岐阜縣 美濃国第十二大區六小區飯羽間村	平民	1	赤みを帯びる
70	陸軍兵卒	吉田 為吉	明治十年三月五日於熊本縣下肥後國山本郡原坂負傷後同月廿八日同國王名郡木葉病院ニ於テ死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第四中隊	福岡縣 筑前国第四大區一小區赤間村	平民	2	赤みを帯びる
71	陸軍兵卒	勢力 菊五郎	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後國山本郡國臺寺村負傷後同月廿八日同國王名郡木葉病院ニ於テ死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第二中隊	三重縣 志摩国荅志郡荅志村	平民	2	赤みを帯びる
72	陸軍兵卒	高橋 覺雲	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後國山本郡植木戦死	名古屋鎮台歩兵第六聯隊第三大隊第四中隊	岐阜縣 美濃国第八大區二小區宮上村	平民	1	赤みを帯びる
73	陸軍喇叭卒	渡邊 利平	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後國山本郡木田留戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊	静岡県 駿河国駿東郡平沼村	平民	2	赤みを帯びる
74	陸軍兵卒	白石 伊三八	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後國山本郡木田留戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	新瀉縣 第二大區九小區腰細村	平民	0	建替え
75	陸軍兵卒	足立 權六	明治十年四月一日於熊本縣下肥後國山本郡古閑村戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	鳥根縣 伯耆国会見郡佐神村	平民	2	赤みを帯びる
76	陸軍兵卒	坂口 嘉十郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後國山本郡半高山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	三重縣 第十大區一小區老川村	平民	3	赤みを帯びる
77	陸軍兵卒	吉村 圓藏	明治十年四月一日於熊本縣下肥後國山本郡盤木山戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第三中隊	長崎縣 肥前国第五大區七小區入野村	平民	1	赤みを帯びる
78	陸軍喇叭卒	森 伊之助	明治十年四月一日於熊本縣下肥後國山本郡半高山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	三重縣 第三大區六小區葎ヶ須新田	平民	2	赤みを帯びる
79	陸軍兵卒	谷口 多右エ門	明治十年四月一日於熊本縣下肥後國山本郡吉次越戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	和歌山縣 紀伊国那須郡真国宮村	平民	2	赤みを帯びる
80	陸軍兵卒	岩上 儀助	明治十年四月一日於熊本縣下肥後國山本郡吉次越戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第一大隊第三中隊	和歌山縣 紀伊国那須郡真国宮村	平民	2	赤みを帯びる
81	陸軍兵卒	井田 永造	明治十年四月一日於熊本縣下肥後國山本郡半高山戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	岐阜縣 美濃国郡上郡頼子村	平民	1	赤みを帯びる

第Ⅷ章 官軍墓地の調査

	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考	
	階級	姓名	死亡日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分			
82	陸軍兵卒	岩崎 亀次郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡半高山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	滋賀縣	近江国浅井郡野村	平民	0	建替え
83	陸軍兵卒	丸山 菊五郎	明治十年四月三日於熊本縣下肥後国山本郡吉次越戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	新潟縣	越後国頸城郡鳥屋村	平民	1	赤みを帯びる
84	陸軍兵卒	堀田 文吉	明治十年四月一日於熊本縣下肥後国山本郡半高山戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第三中隊	山口縣	周防国玖珂郡中津村	平民	1	建替え
85	陸軍兵卒	田中 市三郎	明治十年四月一日於熊本縣下肥後国玉名郡盤木山戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第三中隊	福岡縣	筑後国生業郡流川村	平民	1	赤みを帯びる
86	陸軍兵卒	渡邊 榮	明治十年四月一日於熊本縣下肥後国山本郡半高山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	三重縣	伊勢国一志郡本村	平民	2	赤みを帯びる
87	陸軍兵卒	山本 裕兵衛	明治十年四月一日於熊本縣下肥後国山本郡半高山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	滋賀縣	近江国神壽郡神御村	平民	1	赤みを帯びる
88	陸軍兵卒	鯉淵 由造	明治十年四月一日於熊本縣下肥後国山本郡半高山戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	茨城縣	常陸国茨城郡下坏村	平民	0	建替え
89	陸軍兵卒	高宮 秀吉	明治十年四月一日於熊本縣下肥後国玉名郡盤木山戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第三中隊	福岡縣	筑前国第十五大区十三小區新田村	平民	0	建替え
90	陸軍兵卒	小高 小右エ門	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	山梨縣	甲斐国都留郡七保村	平民	1	赤みを帯びる
91	陸軍兵卒	吉安 辰二郎	明治十年四月一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	名古屋鎮台歩兵第六聯隊第三大隊第四中隊	岐阜縣	第五大区一小區室村	平民	2	赤みを帯びる
92	陸軍兵卒	今井 清四郎	明治十年三月三十日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	埼玉縣	武藏国藤原郡町田村	平民	2	赤みを帯びる
93	陸軍兵卒	新納 豊吉	明治十年三月三十日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	東京府	武藏国豊島郡馬喰町	平民	0	建替え
94	陸軍兵卒	阿久津 繁八	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	福島縣	岩城国会津郡井桁村	平民	2	赤みを帯びる
95	陸軍兵卒	駒場 万五郎	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	宮城縣	陸前国志田郡舟越村	平民	0	建替え
96	陸軍兵卒	神谷 松次郎	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	名古屋鎮台歩兵第六聯隊第一大隊第四中隊	愛知縣	尾張国第七大区九小區寺本央新田	平民	0	建替え
97	陸軍兵卒	廣田 重左エ門	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	名古屋鎮台歩兵第六聯隊第一大隊第四中隊	愛知縣	第二大區六小區名古屋新田	平民	2	赤みを帯びる
98	陸軍兵卒	清田 伊三郎	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	神奈川縣	相模国大江郡平塚	平民	2	赤みを帯びる
99	陸軍兵卒	鶴本 甚之助	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	京都府	山城国愛宕下京	平民	0	建替え
100	陸軍兵卒	丸山 久吉	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	長野縣	信濃国水内郡荒田村	平民	0	建替え
101	陸軍兵卒	宮田 関弥	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第四中隊	長野縣	信濃国筑摩郡荒田村	平民	3	赤みを帯びる
102	陸軍兵卒	奥永 武吉	明治十年四月八日於熊本縣下肥後国山本郡邊田野山戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第一中隊	大分縣	豊前国第八大区一小區清水村	平民	2	赤みを帯びる
103	陸軍兵卒	山口 庄藏	明治十年四月八日於熊本縣下肥後国山本郡平野村負傷後同日同国玉名郡木業病院於死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	廣嶋縣	安藝国佐伯郡玖波村	平民	2	赤みを帯びる
104	陸軍兵卒	美山 善四郎	明治十年四月八日於熊本縣下肥後国山本郡吉次越負傷後同日同国玉名郡木業病院ニ於テ死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	茨城縣	常陸国那賀郡戸村	平民	0	建替え
105	陸軍兵卒	中村 作次郎	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡大月原戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	嶋根縣	出雲国島根郡鍛冶町	士族	1	赤みを帯びる
106	陸軍兵卒	梅田 半次	明治十年四月八日於熊本縣下肥後国山本郡木苗負傷後同日同国玉名郡木業病院ニ於テ死	東京鎮台歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	千葉縣	安房国平部三坂村	平民	2	赤みを帯びる
107	陸軍兵卒	酒井 善七	明治十年四月八日於熊本縣下肥後国山本郡平野村負傷後同日同国玉名郡木業病院ニ於テ死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	廣嶋縣	安藝国高田郡小越村	平民	1	赤みを帯びる
108	陸軍兵卒	奥野 千代栢	明治十年四月八日於熊本縣下肥後国山本郡木苗負傷後同日同国玉名郡木業病院ニ於テ死ス	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第四中隊	堺縣	和泉国泉南郡稲葉村	平民	1	赤みを帯びる
109	陸軍兵卒	渡邊 源藏	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	山形縣	羽前国村山郡土橋村	平民	1	赤みを帯びる
110	陸軍兵卒	小川 平太郎	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	新潟縣	越後国蒲原郡温村	平民	0	建替え
111	陸軍兵卒	富田 美代志	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	宮城縣	陸前国志田郡青生村	平民	0	建替え
112	陸軍兵卒	井口 常吉	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡滴水積塚戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	兵庫縣	播磨国第十三大区真砂村	平民	1	赤みを帯びる
113	陸軍兵卒	高辺 徳太郎	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	福岡縣	下第一大区二十小區西町	士族	0	建替え
114	陸軍兵卒	佐々木 傳重	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	長野縣	第八大区七小區岩下村	平民	0	建替え
115	陸軍兵卒	塚本 文藏	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	千葉縣	下総国香取郡志高村	平民	0	建替え
116	陸軍兵卒	伊藤 三藏	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	岩手縣	陸中国和賀郡横川目村	平民	2	赤みを帯びる
117	陸軍兵卒	水谷 庄次	明治十年四月一日於熊本縣下肥後国山本郡吉次越戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	三重縣	伊勢国一志郡下ノ川村	平民	1	赤みを帯びる
118	陸軍兵卒	藤谷 常藏	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	滋賀縣	若狭国第三大区九小區日登村	平民	2	赤みを帯びる
119	陸軍兵卒	山本 壯藏	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	千葉縣	下総国印旛郡下勝田村	平民	0	建替え
120	陸軍兵卒	上田 萬藏	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	長野縣	信濃国筑摩郡筑摩村	平民	1	赤みを帯びる
121	陸軍兵卒	山田 勝之助	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	新潟縣	越後国蒲原郡新発田	士族	3	赤みを帯びる
122	陸軍兵卒	小林 増五郎	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	東京府	武藏国豊島郡谷木村	士族	2	赤みを帯びる
123	陸軍兵卒	長井 半四郎	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木苗戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	新潟縣	越後国蒲原郡奥野村	平民	1	赤みを帯びる

	表面		右側面	左側面	裏面		石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分		
124	陸軍伍長從五位	谷村 計介	明治十年三月四日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	熊本鎮臺歩兵第十三聯隊第一大隊第二中隊	鹿児島縣 日向國諸縣郡會岡	士族	1	
125	陸軍兵卒	牧田 仁太郎	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後國山本郡吉次越戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	愛媛縣 讃岐国多度郡葛原村	平民	1	赤みを帯びる
126	陸軍兵卒	三好 美太郎	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後國玉名郡橋木戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第三大隊第三中隊	長崎縣 肥前国第十大區二小区宇良村	平民	1	赤みを帯びる
127	陸軍兵卒	峰岸 喜三郎	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後國山本郡木留戦死	東京鎮臺歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊	東京府 第八大區二小区中渋谷村	平民	1	赤みを帯びる
128	陸軍兵卒	草間 熊吉	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後國山本郡木留戦死	東京鎮臺歩兵第三聯隊第三大隊第一中隊	新潟縣 越後国頸城郡平谷村	平民	1	赤みを帯びる
129	陸軍兵卒	岡村 勝次	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後國山本郡木留戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	愛媛縣 伊豫国宇和郡山財村	平民	1	赤みを帯びる
130	陸軍兵卒	高石 市十郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後國山本郡植木戦死	東京鎮臺歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	山梨縣 甲斐国巨摩郡湯澤村	平民	0	建替え
131	陸軍兵卒	清水 讓朝	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後國山本郡木留戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	廣嶋縣 安藝国佐伯郡大竹村	平民	1	赤みを帯びる
132	陸軍兵卒	永裕 猪子吉	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後國山本郡木留戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊(第三大隊第一中隊)	福岡縣 (筑後国竹野郡朝婦村)	平民	1	死亡月日・場所が左、所属部隊が右
133	陸軍兵卒	吉原 仁作	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後國山本郡木留戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	長野縣 第廿二大區岩草村	平民	2	修理、赤みを帯びる
134	陸軍兵卒	畔柳 弥七	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後國山本郡植木戦死	東京鎮臺歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	静岡県 駿河国富士郡西増川村	平民	2	修理、赤みを帯びる
135	陸軍兵卒	小川 菊藏	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後國山本郡植木戦死	東京鎮臺歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	埼玉縣 武蔵国秩父郡三沢村	平民	2	死亡月日・場所が左、所属部隊が右 赤みを帯びる
136	陸軍兵卒	姫野 宗五郎	明治十年四月一日於熊本縣下肥後國山本郡木留戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第二大隊第一中隊	大分縣 豊後国第四大区三小区政所村	平民	1	
137	陸軍兵卒	大槻 周次	明治十年三月七日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	京都府 丹波国天田郡正明寺村	平民	1	赤みを帯びる
138	陸軍兵卒	中村 片五郎	明治十年三月七日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	三重縣 紀伊国牟婁郡平谷村	平民	0	建替え
139	陸軍兵卒	宮崎 安太郎	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後國山本郡木留戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第二大隊第一中隊	長崎縣 肥前国藤津郡不動山村	平民	2	赤みを帯びる
140	陸軍兵卒	山本 恭平	明治十年四月一日於熊本縣下肥後國山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	三重縣 伊勢国第六大区一小區龜山東	士族	0	
141	陸軍軍曹	藤井 新作	明治十年三月七日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺砲兵第四大隊	廣嶋縣 備後国深津郡吉津村	平民	2	赤みを帯びる
142	陸軍兵卒	吹上 武七	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後國山本郡木留戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第二大隊第一中隊	大分縣 豊前国宇佐郡西高家村	平民	1	
143	陸軍兵卒	篠原 團作	明治十年四月一日於熊本縣下肥後國山本郡木留戦死	東京鎮臺歩兵第三聯隊第三大隊第三中隊	長野縣 信濃国第三大区三小区本間川村	平民	2	赤みを帯びる
144	陸軍兵卒	福田 庄藏	明治十年四月一日於熊本縣下肥後國山本郡吉次越戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第一大隊第四中隊	京都府 丹波国桑田郡安掛村	平民	1	
145	陸軍兵卒	柴田 福太郎	明治十年三月十二日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	大分縣 豊前国下毛郡藤ノ木村	平民	1	赤みを帯びる
146	陸軍兵卒	辻 浅裕	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後國山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第四中隊	三重縣 第二大区東原村	平民	1	赤みを帯びる
147	陸軍兵卒	光森 鶴之助	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後國山本郡大月原戦死	廣嶋縣歩兵第十一聯隊第二大隊第二中隊	岡山縣 備前国加湯郡川東村	平民	1	赤みを帯びる
148	陸軍兵卒	前田 馬吉	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後國山本郡大月原戦死	廣嶋縣歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	廣嶋縣 備後国御調郡坂井原村	平民	0	建替え
149	陸軍兵卒	山本 耕平	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後國山本郡木留戦死	東京鎮臺歩兵第三聯隊第三大隊第三中隊	長野縣 信濃国更級郡二ツ柳村	平民	2	赤みを帯びる
150	陸軍兵卒	渡 佐平	明治十年三月廿七日於熊本縣下肥後國玉名郡平野村戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第三大隊第一中隊	福岡縣 筑前国第三大区廿二小区上府村	平民	0	建替え
151	陸軍兵卒	三村 喜代裕	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後國山本郡荻迎村戦死	大坂鎮臺歩兵第十聯隊第三大隊第二中隊	兵庫縣 播磨国赤穂郡西有平村	平民	0	建替え
152	陸軍兵卒	泉 豊平	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後國山本郡滴水橋塚戦死	大坂鎮臺歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	京都府 丹波国熊野郡口馬地村	平民	0	建替え
153	陸軍兵卒	河村 八藏	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後國山本郡轟村戦死	廣嶋縣歩兵第十一聯隊第三大隊第三中隊	山口縣 周防国大島郡東安下庄	平民	2	赤みを帯びる
154	陸軍兵卒	大野 留吉	明治十年三月二十五日於熊本縣下肥後國山本郡木留戦(死)	東京鎮臺歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	神奈川縣 武蔵国玉名郡檜原村	平民	0	死亡月日・場所が左、所属部隊が右
155	陸軍兵卒	丸川 金五郎	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後國山本郡滴水村戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第四中隊	愛媛縣 讃岐国三木郡高岡村	平民	0	建替え
156	陸軍兵卒	佐々木 裕太郎	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後國山本郡大月原戦死	廣嶋縣歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	島根縣 石見国那賀郡上府村	平民	0	建替え
157	陸軍兵卒	清水 元三郎	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後國山本郡木留戦後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	大坂鎮臺歩兵第八聯隊第二大隊第三中隊	大阪府 摂津国東大組糸屋町	平民	1	赤みを帯びる
158	陸軍兵卒	長谷部 源五郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後國山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第三中隊	石川縣 越前国阪井郡清瀧村	平民	2	修理、赤みを帯びる
159	陸軍兵卒	杉本 熊次郎	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後國山本郡木留戦後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	東京鎮臺歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	栃木縣 下野国都賀郡小葉村	平民	1	赤みを帯びる
160	陸軍兵卒	杉本 兪次郎	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後國山本郡植木戦後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	名古屋鎮臺歩兵第六聯隊第三大隊第四中隊	愛知縣 三河国碧海郡川谷村	平民	2	修理、赤みを帯びる
161	陸軍兵卒	加藤 元平	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後國山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	愛知縣 三河国八名郡庭野村	平民	0	建替え
162	陸軍兵卒	柴田 與平	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後國山本郡滴水戦後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	大坂鎮臺歩兵第十聯隊第三大隊第二中隊	三重縣 伊勢国桑名郡萱町	平民	0	
163	陸軍兵卒	杉本 榮藏	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後國山本郡植木戦後三月廿六日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	大坂鎮臺歩兵第八聯隊第三大隊第一中隊	堺縣 大和国廣瀬郡平尾村	平民	0	
164	陸軍兵卒	前田 伊八	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後國山本郡平野村戦後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	大坂鎮臺歩兵第十聯隊第三大隊第二中隊	岡山縣 備前国児嶋郡神田村	平民	2	赤みを帯びる

第Ⅷ章 官軍墓地の調査

	表面		右側面 死亡月日・死亡場所	左側面 所属部隊	表面		石材 劣化 状況	備考	
	階級	姓名			出身地				旧身分
165	陸軍兵卒	宝田 寅次	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡植木負傷後同日同国玉名郡本葉病院ニ於テ死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊	東京府	第九大區四小區上坂橋宿	平民	1	赤みを帯びる
166	陸軍兵卒	林 泉次	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第二大隊第三中隊	栃木縣	下野国那須郡酒主村	平民	0	
167	陸軍兵卒	釜井 伊之吉	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	栃木縣	下野国芳賀郡岡本村	平民	1	赤みを帯びる
168	陸軍兵卒	片野 吉五郎	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第三中隊	神奈川県	相模国第二大區二小區大磯宿	平民	2	赤みを帯びる
169	陸軍兵卒	高山 房吉	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡木留負傷後七本病院輸送途中同日同国同郡ニ於テ死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第三中隊	群馬縣	上野国新田郡下田嶋村	平民	1	赤みを帯びる
170	陸軍兵卒	植田 龜吉	明治十年三月七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	堺縣	大和国吉野郡小森村	士族	2	赤みを帯びる
171	陸軍兵卒	高嶋 丑松	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第一中隊	堺縣	河内国交野郡第三大區四小區	平民	2	赤みを帯びる
172	陸軍兵卒	長野 仙太郎	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第一中隊	堺縣	河内国交野郡秋村	平民	2	赤みを帯びる
173	陸軍兵卒	籠谷 寅吉	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第一中隊	堺縣	大和国吉野郡片入村	平民	1	赤みを帯びる
174	陸軍軍曹	野村 續	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第三中隊	石川縣	加賀国石川郡金沢島田町	士族	1	赤みを帯びる
175	陸軍兵卒	山口 音吉	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	堺縣	大和国吉野郡善城村	平民	1	赤みを帯びる
176	陸軍兵卒	近藤 善三郎	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡円臺寺戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	兵庫縣	播摩国第三大區一小區太郎太夫村	平民	2	赤みを帯びる
177	陸軍兵卒	鮎川 源治郎	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第三中隊	福岡縣	筑前国第三大區六小區猪野村	平民	2	赤みを帯びる
178	陸軍兵卒	佐藤 利三郎	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	福岡縣	筑後国生業郡山北村	平民	2	赤みを帯びる
179	陸軍兵卒	本山 忠三郎	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第三中隊	長崎縣	肥前国第二十三大區二小區秀津村	平民	0	建替え
180	陸軍喇叭卒	川内 八郎次	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第三中隊	長崎縣	肥前国第三十三大區三小區水島村	士族	0	
181	陸軍兵卒	山口 辰藏	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	堺縣	大和国高市郡見瀬村	平民	1	赤みを帯びる
182	陸軍兵卒	佐々木 保吉	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣島縣	安芸国沼田郡小河内村	平民	0	建替え
183	陸軍兵卒	早川 栄三郎	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第三中隊	福岡縣	筑後国上妻郡湯田村	平民	1	赤みを帯びる
184	陸軍兵卒	村上 直吉	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣島縣	備後国御調郡向島西村	平民	0	赤みを帯びる
185	陸軍兵卒	前川 權四郎	明治十年四月二日於熊本縣下肥後国山本郡平野村戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	長崎縣	肥前国第五大區十二小區大里村	平民	1	細い字で見えにくい
186	陸軍伍長	玉置 實	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第三中隊	和歌山縣	紀伊国海士郡和歌山	士族	2	赤みを帯びる
187	陸軍兵卒	田中 一利	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	廣島縣	安芸国佐伯郡古江村	士族	0	建替え
188	陸軍兵卒	大島 留吉	明治十年四月一日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	椋木縣	下野国芳賀郡杉山村	平民	2	赤みを帯びる
189	陸軍兵卒	國領與 惣次郎	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡平野村戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第一中隊	滋賀縣	近江国愛知郡吉田村	平民	2	赤みを帯びる
190	陸軍兵卒	浦谷 三太郎	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第一中隊	長崎縣	肥前国第二大區六小區川原村	平民	1	赤みを帯びる
191	陸軍兵卒	竹田 芳裕	明治十年四月一日於熊本縣下肥後国上古閑村戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	兵庫縣	播摩国赤穂郡下山村	平民	0	建替え
192	陸軍兵卒	川原 佐吉	明治十年三月十七日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第一中隊	和歌山縣	紀伊国名草郡三葛村	平民	2	赤みを帯びる
193	陸軍兵卒	濱田 善之助	明治十年四月一日於熊本縣下肥後国山本郡吉次越負傷後同日同国玉名郡本葉病院ニ於テ死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	兵庫縣	播摩国印南郡大宗村	平民	2	赤みを帯びる
194	陸軍兵卒	倉島 清吾	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	長野縣	第八大區九小區横澤村	平民	0	建替え
195	陸軍兵卒	田中 駒吉	明治十年三月十二日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第二中隊	堺縣	河内国第一大區一小區一津屋村	平民	3	赤みを帯びる
196	陸軍兵卒	服部 政輔	明治十年四月一日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣島縣	備後国州羅郡下津田村	平民	2	赤みを帯びる
197	陸軍兵卒	谷向 傳吉	明治十年四月二日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第四中隊	堺縣	大和国第十大區五小區辻ノ上村	士族	0	建替え
198	陸軍兵卒	山尾 常吉	明治十年四月二日於熊本縣下肥後国山本郡満水村戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊	嶋根縣	石見国安濃郡波根西村	平民	2	赤みを帯びる
199	陸軍兵卒	東内 丑太郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡半高山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	三重縣	第十大區一小區勝地村	平民	1	赤みを帯びる
200	陸軍兵卒	佐藤 徳太郎	明治十年四月一日於熊本縣下肥後国山本郡古閑原負傷後同日同国玉名郡本葉病院ニ於テ死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	岡山縣	備前国和氣郡伊部村	平民	上1下3	赤みを帯びる、白石割れて小さく丸い
201	陸軍兵卒	神吉 岩裕	明治十年四月一日於熊本縣下肥後国山本郡古閑原負傷後同日同国玉名郡本葉病院ニ於テ死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第四中隊	兵庫縣	播摩国印南郡神吉村	平民	3	赤みを帯びる
202	陸軍兵卒	歳田 利吉	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡平高山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	三重縣	下第十大區二小區下郡村	平民	0	建替え
203	陸軍兵卒	田中 代助	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣島縣	安藝国佐伯郡玖波村	平民	1	赤みを帯びる
204	陸軍兵卒	松本 坂太郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣島縣	安藝国加茂郡熊野趾村	平民	3	赤みを帯びる
205	陸軍兵卒	野々口 勝次郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡半高山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	京都府	丹波国船井郡小山村	平民	2	赤みを帯びる
206	陸軍兵卒	谷川 乙裕	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡平高山戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	三重縣	伊賀国山田郡高山村	平民	0	建替え



	表面		右側面	左側面	裏面		石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分		
207	陸軍兵卒	宮崎 大四郎	(明治十年二月十三日於熊本縣下肥後国山本郡半高山戦死)	大坂鎮台歩兵第九聯隊第三大隊第二中隊	三重縣 (第六大区四小区岩森村)	平民	0	所属部隊が裏、出身地が右
208	陸軍兵卒	山口 勘次郎	明治十年三月八日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣嶋縣 備後国芦田郡久佐村	平民	2	赤みを帯びる
209	陸軍兵卒	吉田 為吉	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	三重縣 伊勢国安濃郡野田村	平民	0	
210	陸軍兵卒	香月 圓作	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第一中隊	福岡縣 筑前国遠賀郡香月村	平民	1	
211	陸軍兵卒	竹中 徳次郎	明治十年四月三日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第一中隊	和歌山縣 紀伊国宍粟郡滝川村	平民	-	墓石がない
212	陸軍兵卒	梶山 平四郎	明治十年三月廿一日於熊本縣下肥後国山本郡半高山戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第二中隊	長崎縣 肥前国第五大区三小区佐里村	平民	2	赤みを帯びる
213	陸軍兵卒	沼水 賢明	明治十年四月二日於熊本縣下肥後国山本郡木留負傷後同月三日同国王名郡木葉病院ニ於テ死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	廣嶋縣 安藝国豊田郡本市村	僧	2	赤みを帯びる
214	陸軍兵卒	梶川 裕市	明治十年二月廿三日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第三中隊	大分縣 豊前国下毛郡今津村	平民	2	赤みを帯びる
215	陸軍兵卒	山口 富藏	明治十年四月六日於熊本縣下肥後国玉名郡三嶽戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第三中隊	三重縣 志摩国荅志郡鳥羽藤ノ郷町	平民	1	赤みを帯びる
216	陸軍兵卒	西島 市奈	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡瀧水戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第三中隊	福岡縣 豊前国第五大区四小区上り杓村	平民	2.5	赤みを帯びる
217	陸軍兵卒	高橋 三藏	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第二中隊	長野縣 信濃国第廿大区四小区越村	平民	1	赤みを帯びる
218	陸軍兵卒	中島 政吉	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第一中隊	東京府 武蔵国第七大区二小区西川浅行新宿	平民	1	赤みを帯びる
219	陸軍兵卒	小島 市杓	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第四中隊	大阪府 第四大区王江町一丁目	平民	0	建替え
220	陸軍兵卒	田中屋 末吉	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	石川県 越前国足羽郡中立矢町	平民	0	建替え
221	陸軍兵卒	安西 萬次郎	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	神奈川県 相模国鎌倉郡和泉村	平民	1	赤みを帯びる
222	陸軍兵卒	橋高 清吉	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡大月原戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	廣嶋縣 備後国沼隈郡神村	平民	3	赤みを帯びる
223	陸軍軍曹	喜多川 為功	(明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死)	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	堺縣 (大和国葛上郡御羅村)	士族	0	
224	陸軍兵卒	入江 常藏	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第三中隊	埼玉縣 武蔵国埼玉郡上崎村	平民	0	
225	陸軍兵卒	加地 市太郎	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	和歌山縣 紀伊国海士郡向村	平民	0	
226	陸軍兵卒	伊藤 竹杓	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡圓臺寺村戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第三中隊	和歌山縣 第六大区三小区野口村	平民	2	赤みを帯びる
227	陸軍兵卒	小久保 小四郎	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第三中隊	埼玉縣 武蔵国南第十大区定峯村	平民	0	建替え
228	陸軍兵卒	中村 作二郎	明治十年四月八日於熊本縣下肥後国山本郡瀧田戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第一中隊	長崎縣 肥前国第四大区六小区有喜村	平民	3	赤みを帯びる
229	陸軍兵卒	宮下 房吉	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	長野縣 信濃国伊那郡福典村	平民	2	赤みを帯びる
230	陸軍兵卒	鈴木 勝次郎	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	静岡縣 伊豆国賀茂郡白岩村	平民	1	赤みを帯びる
231	陸軍兵卒	北澤 直太郎	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第三中隊	長野縣 信濃国第十六大区五小区中水鉋村	平民	0	建替え
232	陸軍兵卒	村本 仁三郎	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡瀧水村戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第四中隊	石川県 加賀国能美郡徳久村	平民	0	建替え
233	陸軍兵卒	吉野 彌藏	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	神奈川県 武蔵国多摩郡八幡宿	平民	2	赤みを帯びる
234	陸軍兵卒	畑 仲右衛門	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡向坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第四中隊	兵庫縣 丹波国多紀郡畑富村	平民	3	赤みを帯びる
235	陸軍兵卒	木村 定七	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	千葉縣 下総国猿島郡生了村	平民	0	建替え
236	陸軍兵卒	尾崎 恒吉	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第二中隊	熊本縣 肥後国第二大区七小区白濱村	平民	2	赤みを帯びる
237	陸軍兵卒	新屋 興藏	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡轟村戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	兵庫縣 播磨国加古郡長砂村	平民	0	建替え
238	陸軍兵卒	池光 金助	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国玉名郡生野村戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第三中隊	廣嶋縣 備後国三上郡板橋村	平民	2	赤みを帯びる
239	陸軍兵卒	三村 佐吉	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡大月原戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	岡山縣 備中国川上郡三澤村	平民	2	赤みを帯びる
240	陸軍兵卒	杉本 政吉	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡大月原戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	廣嶋縣 備後国御調郡向島東村	平民	0	建替え
241	陸軍兵卒	上宮 虎次郎	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡瀧水村戦死	大坂鎮台工兵第二大隊第二小隊	兵庫縣 淡路国津名郡尾崎村	平民	2	赤みを帯びる
242	陸軍兵卒	寺口 傳十郎	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡瀧水榑塚戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第一大隊第三中隊	島根縣 因幡国岩井郡陸上村	平民	0	建替え
243	陸軍兵卒	大石 今藏	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡瀧水村戦死	名古屋鎮台歩兵第六聯隊第一大隊第四中隊	静岡縣 遠江国第三大区十八小区三栗村	平民	0	建替え
244	陸軍喇叭卒	海老原 綱五郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	千葉縣 下総国猿島郡神田山村	平民	2	赤みを帯びる
245	陸軍兵卒	富田 松太郎	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	埼玉縣 武蔵国秩父郡横濱村	平民	3	赤みを帯びる
246	陸軍兵卒	樹田 金藏	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡瀧水村戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊	山口縣 周防国玖珂郡通津村	平民	2	赤みを帯びる
247	陸軍兵卒	木島 辰藏	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡大月原戦死	廣嶋鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	島根縣 石見国鹿足郡須津村	神官	2	赤みを帯びる
248	陸軍兵卒	中村 萬五郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	埼玉縣 武蔵国秩父郡野牧村	平民	3	赤みを帯びる
249	陸軍兵卒	横内 留吉	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	山梨縣 甲斐国巨摩郡瀧岡村	平民	2	赤みを帯びる

第Ⅷ章 官軍墓地の調査

	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分		
250	陸軍兵卒	垣田 庄吉	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	山口縣	周防国吉敷郡嘉川村	平民	0 建替え
251	陸軍兵卒	小川 保藏	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	廣島縣	備後国安那郡法城寺村	平民	2
252	陸軍兵卒	森 藤五郎	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死	名古屋鎮台歩兵第六聯隊第一大隊第四中隊	愛知縣	尾張国中嶋郡山崎村	平民	2 赤みを帯びる
253	陸軍兵卒	安休 重次良	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡平野戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	三重縣	伊勢国一志郡肥留村	平民	0 建替え
254	陸軍兵卒	寺山 萬吉	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	山口縣	長門国阿武郡紫福村	平民	2 赤みを帯びる
255	陸軍兵卒	中川 友吉	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊	鳥根縣	石見国邇摩郡福光村	平民	2 赤みを帯びる
256	陸軍兵卒	小林 三吉	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	岡山縣	備中国浅口郡黒崎村	平民	0 建替え
257	陸軍兵卒	西田 武八	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	山口縣	周防国玖珂郡柳井村	平民	0 建替え
258	陸軍軍曹	渡邊 温良	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮台歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	愛知縣	尾張国愛知郡上宿御庭町	士族	2 赤みを帯びる
259	陸軍兵卒	武田 豊次郎	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	山口縣	周防国佐波郡富海村	平民	1 赤みを帯びる
260	陸軍兵卒	河内 寅松	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	大阪府	播磨国西成郡神崎村	平民	2 赤みを帯びる
261	陸軍兵卒	菅原 子之吉	明治十年三月十二日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	長崎縣	肥前国第三大区四小区大草郡	平民	0 建替え
262	陸軍兵卒	八田 仁平	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡萩迫村戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第三大隊第二中隊	兵庫縣	播磨国鹿東郡龜山村	平民	0 建替え
263	陸軍兵卒	難波 総吉	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	山口縣	周防国大嶋郡臼井田村	平民	0 赤みを帯びる
264	陸軍兵卒	中嶋 弥太郎	明治十年三月廿四日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊	山口縣	周防国大島郡遠崎村	平民	3 赤みを帯びる
265	陸軍兵卒	淵原 秀裕	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第一中隊	堺縣	和泉国日根郡淡輪村	平民	2 赤みを帯びる
266	陸軍兵卒	沖田 政助	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡大月原戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第二大隊第四中隊	嶋根縣	安藝国沼田郡廣瀬村	平民	1 赤みを帯びる
267	陸軍兵卒	一宮 惣吉	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡萩迫村戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第三大隊第二中隊	兵庫縣	播磨国多可郡越智村	平民	2 赤みを帯びる
268	陸軍兵卒	神谷 佐七	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡岩野村戦死	名古屋鎮台歩兵第六聯隊第一大隊第四中隊	静岡縣	遠江山国山名郡二宮村	平民	2 赤みを帯びる
269	陸軍兵卒	神代 常吉	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡萩迫村戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊(第三大隊第二中隊)	兵庫縣	(淡路国津名郡中川原村)	平民	1
270	陸軍兵卒	増成 桂藏	明治十年三月廿五日於山本郡滴水村戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊(第三大隊第四中隊)	岡山縣	(備中国小田郡西大戸村)	平民	0
271	陸軍兵卒	坂口 寅吉	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊(第三大隊第二中隊)	堺縣	(和泉国大島郡小坂村)	平民	1
272	陸軍兵卒	湯淺 嘉五郎	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第一中隊	岡山縣	美作国西北条郡搦社村	平民	2 赤みを帯びる
273	陸軍兵卒	中島 栄吉	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国海辺郡久保町	平民	3 赤みを帯びる
274	陸軍兵卒	寺嶋 久藏	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第二大隊第三中隊	鳥根縣	因幡国高草郡福井村	平民	3 赤みを帯びる
275	陸軍兵卒	伊藤 勘藏	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	山口縣	周防国熊毛郡大河内村	平民	1
276	陸軍兵卒	才木 寅吉	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	神奈川縣	武藏国倉城郡伊勢町	平民	1
277	陸軍兵卒	坂口 裕太郎	明治十年三月廿五日於熊本縣下肥後国山本郡萩迫村戦死	大坂鎮台歩兵第十聯隊第三大隊第二中隊	堺縣	河内国泉郡尾井村	平民	2 赤みを帯びる
278	陸軍兵卒	飯田 俊太郎	明治十年三月廿六日於熊本縣下肥後国山本郡木田戦死	東京鎮台歩兵第三聯隊第三大隊第三中隊	神奈川縣	相模国大住郡今泉村	平民	0 建替え
279	陸軍兵卒	萬代 吉直	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死	近衛歩兵第二聯隊第二大隊第三中隊	山形縣	羽前国置賜郡鎗山	士族	2 赤みを帯びる
280	陸軍兵卒	天飼 小市	明治十年四月六日於熊本縣下肥後国山本郡萩迫村戦死後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊	鳥根縣	出雲国飯石郡畑村	平民	2 赤みを帯びる
281	陸軍兵卒	荒川 安太郎	明治十年四月六日於熊本縣下肥後国山本郡平野村戦死後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第四中隊	山口縣	周防国玖珂郡長谷村	平民	2 赤みを帯びる
282	陸軍兵卒	宍戸 兼次	明治十年四月六日於熊本縣下肥後国山本郡植木戦死後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	福島縣	岩代国信夫郡荒井村	平民	3 赤みを帯びる
283	陸軍兵卒	樋森 仁三郎	明治十年四月六日於熊本縣下肥後国山本郡萩迫村戦死後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	廣島鎮台歩兵第十一聯隊第三大隊第一中隊	山口縣	長門国豊浦郡椋野村	平民	0 建替え
284	陸軍兵卒	山田 万吉	明治十年四月八日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	大坂鎮台歩兵第八聯隊第二大隊第四中隊	大坂府	摂津国豊島郡杵木村	平民	1 赤みを帯びる
285	陸軍兵卒	岩内 興助	明治十年四月十三日於熊本縣下肥後国山本郡滴水村戦死後同日同国玉名郡木葉病院ニ於テ死	東京鎮台歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	千葉縣	下総国相馬郡青山村	平民	0 建替え
286	陸軍兵卒	森田 由藏	明治十年三月廿日於熊本縣下肥後国山本郡向坂戦死	東京鎮台歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	神奈川縣	武藏国多摩郡菅生村	平民	1 赤みを帯びる
287	陸軍軍曹	亀井 潮	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	熊本鎮台豫備砲兵第三大隊第一小隊	(大分縣)	(豊後国速見郡杵築村)	士族	1
288	陸軍軍曹	吉川 弥三郎	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	石川縣	賀加国石川郡金澤町	士族	0 建替え
289	陸軍伍長	石川 輝男	明治十年三月五日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	茨城縣	常陸国茨城郡北三ノ丸	士族	2 赤みを帯びる
290	陸軍軍曹	中村 信兄	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	熊本鎮台歩兵第十四聯隊第三大隊第一中隊	鳥根縣	因幡国邑美郡鳥取	士族	0 建替え

	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考	
	階級	姓名	死亡月日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分			
291	陸軍軍曹	大衆 守忠	明治十年三月五日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	山口縣	長門国阿武郡萩	士族	3	赤みを帯びる
292	陸軍軍曹	松田 直次郎	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡船底山戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	三重縣	伊勢国桑名郡矢河原	士族	0	建替え
293	陸軍軍曹	近藤 卯三郎	明治十年三月三日於熊本縣下肥後国玉名郡安楽寺戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第四中隊	愛媛縣	伊豫国宇和島郡阿原	平民	-	赤みを帯びる
294	陸軍兵卒	川添 男依	明治十年三月五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	高知縣	阿波国名東郡藏本村	士族	-	建替え
295	陸軍兵卒	橋尾 秀造	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡船底山戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	島根縣	因幡国村美郡鑄物町	士族	2	赤みを帯びる
296	陸軍兵卒	野中 定吉	明治十年三月三日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	長崎縣	肥前国第四大区小松村	平民	-	赤みを帯びる
297	陸軍兵卒	横山 秀長	明治十年三月六日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第一中隊	山形縣	羽前国置賜郡鉄砲屋町	士族	3	赤みを帯びる
298	陸軍兵卒	穂吉 兼吉	明治十年三月三日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	大分縣	豊後国第八大区一小區羽田村	平民	2	赤みを帯びる
299	陸軍兵卒	小田 甚吉	明治十年三月十五日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	長崎縣	肥前国第二十八大区二小區福江村	平民	0	建替え
300	陸軍兵卒	山中 吉松	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	三重縣	伊勢国一吉郡第十三大区下多氣村	平民	1	赤みを帯びる
301	陸軍兵卒	竹内 春裕	明治十年三月九日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	大坂鎮臺歩兵第九聯隊第二大隊第二中隊	三重縣	志摩国英虞郡利吳村	平民	1	赤みを帯びる
302	陸軍兵卒	渡邊 繁	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第三中隊	京都府	山城国愛宕郡栗田口村	士族	0	建替え
303	陸軍兵卒	荒木 慶三郎	明治十年三月三日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉村戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	長崎縣	肥前国第五大区二小區木堀村	平民	2	赤みを帯びる
304	陸軍兵卒	梅津 弥四郎	明治十年三月五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	福岡縣	筑前国中島村	平民	3	赤みを帯びる
305	陸軍兵卒	川島 長次郎	明治十年三月五日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第一中隊	静岡縣	遠江国豊由郡東平松村	平民	1	赤みを帯びる
306	陸軍兵卒	前田 甚右衛門	明治十年三月五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	長崎縣	肥前国神埼郡津田村	平民	1	赤みを帯びる
307	陸軍兵卒	堀田 又五郎	明治十年三月五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	長崎縣	肥前国神埼郡大川野村	平民	0	建替え
308	陸軍兵卒	平野 庄造	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡豊倉村戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第二大隊第二中隊	福岡縣	豊前国第五大区四小區真如寺村	平民	0	建替え
309	陸軍兵卒	岩佐 和平	明治十年三月五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	福岡縣	筑前国第四大区十七小區吉田村	平民	1	赤みを帯びる
310	陸軍兵卒	松永 四太郎	明治十年三月五日於熊本縣下肥後国山本郡豊岡村戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第二大隊第四中隊	福岡縣	筑後国三瀧郡江下村	平民	1	赤みを帯びる
311	陸軍兵卒	小島 富士松	明治十年三月三日於熊本縣下肥後国玉名郡木葉戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	岐阜縣	美濃国第二大区一小區松倉村	平民	2	死亡月日・場所が左、所属部隊が右 赤みを帯びる
312	陸軍兵卒	三勢 佐助	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第二聯隊第一大隊第二中隊	石川縣	越前国坂井郡串野村	平民	1	
313	陸軍兵卒	那須 佐吉	明治十年三月十四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	大坂鎮臺歩兵第八聯隊第三大隊第二中隊	和歌山縣	紀伊国牟婁郡紺屋町	平民	1	赤みを帯びる
314	陸軍兵卒	山崎 喜八	明治十年三月廿八日於熊本縣下肥後国山本郡木留戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第二大隊第一中隊	福岡縣	筑前国第十六大区十四小區加布里村	平民	0	建替え
315	陸軍兵卒	中根 義春	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	近衛歩兵第一聯隊第一大隊第二中隊	静岡縣	駿河国有波郡根古屋村	平民	2	
316	陸軍兵卒	田川 右七	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第二大隊第三中隊	長崎縣	肥前国第十六大区三小區面高村	平民	1	赤みを帯びる
317	陸軍兵卒	吉野 仙造	明治十年三月五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	千葉縣	上総国市原郡二日市場	平民	1	
318	陸軍兵卒	高橋 次郎	明治十年三月五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	廣嶋縣	安藝国豊田郡由万里村	士族	1	赤みを帯びる
319	陸軍兵卒	岡田 虎市	明治十年三月四日於熊本縣下肥後国山本郡田原坂戦死	東京鎮台工兵第一大隊第二小隊	和歌山縣	紀伊国在田郡千田村	士族	1	赤みを帯びる
320	陸軍兵卒	大武 義夫	明治十年三月五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	近衛歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊	茨城縣	常陸国茨城郡西谷村	平族	3	赤みを帯びる
321	陸軍兵卒	中尾 傳作	明治十年三月五日於熊本縣下肥後国玉名郡二俣戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第二大隊第三中隊	長崎縣	肥前国第五大区九小區田代村	平民	1	
322	陸軍兵卒	中山 種三郎	明治十年三月廿三日於熊本縣下肥後国山本郡邊田山戦死	熊本鎮臺歩兵第十四聯隊第三大隊第一中隊	大分縣	豊前国第八大区七小區南宇佐村	平民	1	

軍夫1	軍夫	水落 又左衛門	明治十年四月三日於熊本縣下肥後国山本郡滴水ニテ即死	軍団輜重部	福岡縣	筑後国三瀧郡中木室村	-	0	
軍夫2	軍夫	江崎 栄藏	明治十年四月六日肥後国山本郡平野村ニテ負傷ノ未死	軍団輜重部	福岡縣	筑後国下妻郡島田村	-	0	
軍夫3	軍夫	近藤 嘉助	明治十年三月廿日熊本縣下肥後国山本郡植木ニテ即死	軍団輜重部	福岡縣	筑前国御笠郡五十川村	-	0	
軍夫4	軍夫	中山 弥平	明治十年四月廿日肥後国立田口新錫村ニテ負傷ノ未死	軍団輜重部	熊本縣	肥後国第七大区江田村	-	0	
軍夫5	軍夫	永野 五平	明治十年三月廿五日熊本縣下肥後国山本郡植木死	征討軍団輜重部	福岡縣	筑前国上座郡八地村	-	0	
軍夫6	軍夫	井上 文七	明治十年三月廿五日熊本縣下肥後国山本郡滴水ニテ死	征討軍団輜重部	福岡縣	第一大区大名村	-	0	
軍夫7	軍夫	東田 吉三郎	明治十年四月三日熊本縣下肥後国山本郡木留ニテ即死	軍団輜重部	熊本縣	肥後国玉名郡上坂下村	-	0	
軍夫8	軍夫	月 弥平	明治十年三月廿四日熊本縣下肥後国山本郡滴水ニテ死	軍団輜重部	福岡縣	筑前国下座郡吉江村	-	0	
軍夫9	軍夫	広田 久作	明治十年三月廿五日熊本縣下肥後国山本郡滴水ニテ死	征討軍団輜重部	福岡縣	第一大区大名村	-	0	
軍夫10	軍夫	後藤 金石衛門	明治十年三月廿五日熊本縣下肥後国山本郡滴水ニテ死	征討軍団輜重部	福岡縣	筑前国御笠郡安德村	-	0	

第Ⅷ章 官軍墓地の調査

	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分		
軍夫11	軍夫	山川 幸平	明治十年三月廿八日熊本縣下肥後国山本郡瀧水ニテ死	征討軍団輜重部	熊本縣	肥後国玉名郡横島村	-	0
軍夫12	軍夫	三隅 留吉	明治十年四月八日於熊本縣下肥後国山本郡木留ニテ死	征討軍団輜重部	山口縣	第二十大区	-	0
軍夫13	軍夫	平川 庄七	明治十年三月十五日於熊本縣肥後国玉名郡二俣ニテ即死	軍団輜重部	熊本縣	肥後国第八大区三川村	-	0

警視1	二等中警部	内村 直義	明治十年三月十五日戰死干肥後国山本郡横平山 齡卅三年	植木口警視「隊副官」	福島縣	明治十一年八月建立	士族	0	「」内は削つて修正
警視2	一等少警部	小俣 義方	明治十年三月廿日戰死干肥後国山本郡田原阪 齡卅二年二月	植木口警視一番小隊分隊長	群馬縣	明治十一年八月建立	士族	0	
警視3	二等少警部	緒方 惟一	明治十年三月十五日戰死干肥後国山本郡横平山 齡卅二年五月	植木口警視二番小隊分隊長	福岡縣	明治十一年八月建立	士族	0	
警視4	二等少警部	杉田 成章	明治十年三月廿三日戰死干肥後国山本郡植木 齡卅三年七月	植木口警視「隊副官」	石川縣	明治十一年八月建立	士族	0	「」内は削つて修正
警視5	警部補	小暮 信近	明治十年三月十四日戰死干肥後国玉名郡二俣村 齡廿八年十月	植木口警視三番小隊軍曹勤務	新潟縣	明治十一年八月建立	士族	0	
警視6	警部補	小笠原 光敬	明治十年三月十四日戰死干肥後国玉名郡二俣村 齡廿六年六月	植木口警視一番小隊軍曹勤務	群馬縣	明治十一年八月建立	士族	0	
警視7	警部補	伊知地 季利	明治十年三月十四日戰死干肥後国玉名郡二俣村 齡卅七年四月	植木口警視二番小隊軍曹勤務	鹿児島縣	明治十一年八月建立	士族	0	
警視8	警部補	本堂 圭	明治十年三月十七日戰死干肥後国山本郡田原阪 齡廿七年五月	植木口警視二番小隊軍曹勤務	岩手縣	明治十一年八月建立	士族	0	
警視9	警部補	一色 孝吉	明治十年三月廿日戰死干肥後国山本郡田原阪 齡廿九年三月	植木口警視一番小隊軍曹勤務	東京府	明治十一年八月建立	平民	0	
警視10	警視局四等巡査	牧野 志津之助	明治十年三月十四日戰死干肥後国玉名郡二俣 齡廿五年二月	植木口警視三番小隊	埼玉縣	明治十一年八月建立	士族	1	
警視11	警視局三等巡査	川畑 種盈	明治十年三月十四日戰死干肥後国玉名郡二俣 齡廿三年三月	植木口警視一番小隊	鹿児島縣	明治十一年八月建立	士族	1	
警視12	警視局二等巡査	相良 榮輔	明治十年三月十五日戰死干肥後国山本郡横平山 齡廿五年九月	植木口警視一番小隊	鹿児島縣	明治十一年八月建立	士族	1	
警視13	警視局二等巡査	西牟田 彦二	明治十年三月十四日戰死干肥後国玉名郡二俣村 齡廿一年一月	植木口警視一番小隊伍長勤務	鹿児島縣	明治十一年八月建立	士族	1	
警視14	警視局二等巡査	桑山 三七	明治十年三月十四日戰死干肥後国玉名郡木葉 齡卅八年二月	植木口警視三番小隊伍長勤務	鹿児島縣	明治十一年八月建立	士族	1	
警視15	警視局二等巡査	伊藤 巖杓	明治十年三月十五日戰死干肥後国山本郡横平山 齡廿七年二月	植木口警視一番小隊	茨城縣	明治十一年八月建立	士族	1	
警視16	警視局四等巡査	吉川 七郎	明治十年三月廿五日戰死干肥後国山本郡木留 齡廿一年一月	植木口警視五番小隊	福島縣	明治十一年八月建立	士族	-	
警視17	警視局二等巡査	松嶋 喜右衛門	明治十年三月十五日戰死干肥後国山本郡横平山 齡廿二年三月	植木口警視一番小隊伍長勤務	鹿児島縣	明治十一年八月建立	士族	-	
警視18	警視局三等巡査	伊藤 悦之進	明治十年三月十五日戰死干肥後国山本郡横平山 齡卅七年十月	植木口警視二番小隊	宮城縣	明治十一年八月建立	士族	-	
警視19	警視局三等巡査	邑山 重清	明治十年三月十四日戰死干肥後国玉名郡二俣村 齡卅年十月	植木口警視一番小隊	鹿児島縣	明治十一年八月建立	士族	-	
警視20	警視局二等巡査	寺澤 重二	明治十年三月十四日戰死干肥後国玉名郡二俣 齡卅四年二月	植木口警視一番小隊	愛知縣	明治十一年八月建立	士族	-	
警視21	警視局四等巡査	吉田 尚二	明治十年三月廿三日戰死干肥後国山本郡植木 齡卅一年十一月	植木口警視三番小隊	石川縣	明治十一年八月建立	平民	-	
警視22	警視局四等巡査	關口 孝久	明治十年四月十五日戰死干肥後国山本郡横山 齡廿二年四月	植木口警視三番小隊	千葉縣	明治十一年八月建立	士族	-	
警視23	警視局一等巡査	高橋 昂	明治十年三月廿三日戰死干肥後国山本郡植木口 齡卅年八月	植木口警視四番小隊軍曹勤務	高知縣	明治十一年八月建立	平民	1	
警視24	警視局四等巡査	村上 祐義	明治十年三月十五日戰死干肥後国山本郡横平山 齡卅七年十月	植木口警視三番小隊	東京府	明治十一年八月建立	士族	0	
警視25	警視局四等巡査	友成 為則	明治十年三月廿日戰死干肥後国山本郡田原阪 齡卅六年	植木口警視三番小隊	東京府	明治十一年八月建立	士族	0	
警視26	警視局二等巡査	大濱 矩亮	明治十年三月廿五日戰死干肥後国山本郡田原阪 齡卅年四月	植木口警視二番小隊伍長勤務	山口縣	明治十一年八月建立	士族	0	
警視27	警視局二等巡査	内藤 兼才	明治十年三月廿八日戰死干肥後国山本郡木留 齡卅三年八月	植木口警視一番小隊伍長勤務	鹿児島縣	明治十一年八月建立	士族	1	
警視28	警視局四等巡査	宮田 祐四郎	明治十年三月十四日戰死干肥後国玉名郡二俣 齡卅三年九月	植木口警視三番小隊	東京府	明治十一年八月建立	士族	0	
警視29	警視局三等巡査	太田 禪翁	明治十年三月廿五日戰死干肥後国山本郡木留 齡卅九年一月	植木口警視五番小隊	埼玉縣	明治十一年八月建立	士族	1	
警視30	警視局四等巡査	多賀谷 信重	明治十年三月廿六日戰死干肥後国山本郡木留 齡卅二年四月	植木口警視四番小隊伍長勤務	茨城縣	明治十一年八月建立	士族	1	
警視31	警視局三等巡査	森 一馬	明治十年三月廿五日戰死干肥後国山本郡木留 齡卅六年四月	植木口警視五番小隊	静岡縣	明治十一年八月建立	士族	1	
警視32	警視局四等巡査	高橋 幸安	明治十年三月廿三日戰死干肥後国山本郡植木 齡卅八年十月	植木口警視五番小隊	東京府	明治十一年八月建立	士族	0	
警視33	警視局三等巡査	齋藤 重徳	明治十年三月廿五日戰死干肥後国山本郡横平山 齡廿八年六月	植木口警視二番小隊	山形縣	明治十一年八月建立	士族	0	
警視34	警視局三等巡査	岡 藏一	明治十年三月廿三日戰死干肥後国山本郡木留 齡卅三年十月	植木口警視五番小隊	山口縣	明治十一年八月建立	士族	0	
警視35	警視局四等巡査	石川 義施	明治十年三月廿三日戰死干肥後国山本郡木留 齡廿六年十一月	植木口警視五番小隊	東京府	明治十一年八月建立	士族	1	
警視36	警視局三等巡査	下妻 勇太	明治十年三月廿五日戰死干肥後国山本郡木留 齡卅八年十月	植木口警視二番小隊	新潟縣	明治十一年八月建立	士族	0	
警視37	警視局二等巡査	木村 定勝	明治十年三月廿八日戰死干肥後国山本郡木留 齡廿六年二月	植木口警視一番小隊伍長勤務	東京府	明治十一年八月建立	平民	0	
警視38	警視局三等巡査	高木 新六	明治十年三月廿八日戰死干肥後国山本郡木留 齡十九年三月	植木口警視一番小隊	青森縣	明治十一年八月建立	士族	1	
警視39	警視局三等巡査	宮川 正成	明治十年三月廿八日戰死干肥後国山本郡木留 齡廿四年一月	植木口警視一番小隊	滋賀縣	明治十一年八月建立	士族	1	

	表面		右側面	左側面	表面		石材劣化状況	備考
	階級	姓名	死亡日・死亡場所	所属部隊	出身地	旧身分		
警視40	警視局一等巡査	森 良徳	明治十年三月廿五日戦死干肥後國山本郡植木 齢四十年八月	植木口警視五番小隊伍長勤務	東京府	明治十一年八月建立	士族	1
警視41	警視局一等巡査	天海 政	明治十年三月廿八日戦死干肥後國山本郡植木 齢卅九年九月	植木口警視一番小隊軍曹勤務	茨城縣	明治十一年八月建立	士族	1
警視42	警視局三等巡査	常木 廣順	明治十年三月廿八日戦死干肥後國山本郡植木 齢卅七年十一月	植木口警視三番小隊	福島縣	明治十一年八月建立	平民	1
警視43	警視局二等巡査	杉江 直道	明治十年三月廿三日戦死干肥後國山本郡植木 齢卅四年四月	植木口警視三番小隊伍長勤務	東京府	明治十一年八月建立	士族	1
警視44	警視局二等巡査	竹下 景吉	明治十年三月十八日戦死干肥後國山本郡七本 齢四十二年一月	植木口警視三番小隊伍長勤務	鹿児島縣	明治十一年八月建立	士族	1
警視45	警視局二等巡査	大石 高美	明治十年三月廿日戦死干肥後國山本郡田原坂 齢卅九年三月	植木口警視二番小隊伍長勤務	静岡縣	明治十一年八月建立	士族	1
警視46	警視局二等巡査	榎津 金治	明治十年三月廿日戦死干肥後國山本郡田原坂 齢卅六年	植木口警視二番小隊	福島縣	明治十一年八月建立	士族	1
警視47	警視局二等巡査	小高 信茂	明治十年三月廿日戦死干肥後國山本郡田原坂 齢卅六年二月	植木口警視二番小隊伍長勤務	東京府	明治十一年八月建立	士族	0
警視48	警視局二等巡査	今村 角九郎	明治十年三月十七日戦死干肥後國山本郡田原坂 齢卅一年十月	植木口警視二番小隊	滋賀縣	明治十一年八月建立	士族	1
警視49	警視局二等巡査	國又 明政	明治十年三月十七日戦死干肥後國山本郡田原坂 齢卅二年十一月	植木口警視二番小隊伍長勤務	東京府	明治十一年八月建立	士族	1
警視50	警視局三等巡査	山口 庄五郎	明治十年三月廿日戦死干肥後國山本郡田原坂 齢三十八年二月	植木口警視二番小隊	福島縣	明治十一年八月建立	士族	1
警視51	警視局三等巡査	小池 銀三郎	明治十年三月廿日戦死干肥後國山本郡田原坂 齢卅七年一月	植木口警視二番小隊	茨城縣	明治十一年八月建立	士族	0
警視52	警視局三等巡査	大木 清治	明治十年三月廿日戦死干肥後國山本郡横平山 齢卅四年六月	植木口警視二番小隊	東京府	明治十一年八月建立	士族	1
警視53	警視局三等巡査	藤原 正明	明治十年三月廿日戦死干肥後國山本郡田原坂 齢卅四年	植木口警視二番小隊	東京府	明治十一年八月建立	士族	1
警視54	警視局四等巡査	籠谷 楯三	明治十年三月十七日戦死干肥後國山本郡七本 齢卅五年五月	植木口警視三番小隊	兵庫縣	明治十一年八月建立	士族	0
警視55	警視局三等巡査	茅埜 八百治	明治十年三月廿三日戦死干肥後國山本郡田原坂 齢卅五年四月	植木口警視二番小隊	長野縣	明治十一年八月建立	平民	0
警視56	警視局四等巡査	和田 勝吉	明治十年三月廿三日戦死干肥後國山本郡植木 齢卅六年九月	植木口警視六番小隊	岐阜縣	明治十一年八月建立	平民	0
警視57	警視局三等巡査	田中 録之助	明治十年三月十五日戦死干肥後國山本郡横平山 齢卅七年三月	植木口警視二番小隊	東京府	明治十一年八月建立	士族	0
警視58	警視局二等巡査	片石 純美	明治十年三月廿三日戦死干肥後國山本郡植木 齢卅一年五月	植木口警視一番小隊伍長勤務	東京府	明治十一年八月建立	士族	0
警視59	警視局三等巡査	向井 但明	明治十年三月廿三日戦死干肥後國山本郡植木 齢卅二年四月	植木口警視三番小隊	東京府	明治十一年八月建立	士族	1
警視60	警視局三等巡査	荒木 新作	明治十年三月十五日戦死干肥後國山本郡横平山 齢卅二年	植木口警視一番小隊	群馬縣	明治十一年八月建立	士族	1
警視61	警視局二等巡査	齋藤 少作	明治十年三月十八日戦死干肥後國山本郡七本 齢卅四年九月	植木口警視二番小隊	岡山縣	明治十一年八月建立	士族	2
警視62	警視局三等巡査	矢島 長直	明治十年三月廿六日戦死干肥後國山本郡植木 齢卅九年十一月	植木口警視四番小隊	高知縣	明治十一年八月建立	士族	1
警視63	警視局三等巡査	青柳 古壽	明治十年三月十五日戦死干肥後國山本郡横平山 齢卅三年三月	植木口警視三番小隊	新潟縣	明治十一年八月建立	士族	1
警視64	警視局三等巡査	三枝 道廣	明治十年三月十五日戦死干肥後國山本郡横平山 齢卅七年六月	植木口警視三番小隊	静岡縣	明治十一年八月建立	士族	1

談話

玉東町大字上木葉 藤山常次郎 85才

十年の戦役の時は、私の家は、今の境木部落の東北の斜面にあった。そこには田尻俊男の先祖が居たが、その兄が流れ弾丸にあたって死んだ。

祖父は夫方にとられ昼は鶏殺しが仕事だった。夜は寝る暇もない忙しさであったので閣下(乃木少佐)に仕事を変えてもらった。

瓜生田の本陣に土嚢を頭の高さより高く積み上げ、内側に「ねこぶく」を張って乃木さんがその中に入り、土嚢の隙間から望遠鏡で戦況を見ていた。「閣下」御飯ですと言って、やかんに赤酒を入れ、鶏肉や、魚を持って行くと「うん」「そこに置け」という。閣下が東京抜刀隊に「戦闘の準備をせ」という。どうするかと思うと日本刀を「ば板」の先に結びつけて、薙刃のように作っていた。

準備が終ると、飲ませ、喰せしてから「第一抜刀隊切り込め」と号令をかけると、一斉に突入していった。薩軍は不意をつかれて退却した。部下が閣下「見事にやりました」と報告すると「うん」御苦労といわれた。

その時の突入の有様は、後鉢巻に二重の「わらじ」をはいていた。

第二回目は薩軍が充分準備していたので切込隊は散々に切りまくられた。特に若手の十七才位の青年に日本刀で右に左に切りまくられ、見事なものであった。部下が閣下失敗しましたという「何たることか」としかられた。

境木(田原坂の登り口)目がね橋の側の水田は食

歌 田原坂

- 一、水乞う軍馬の いなきに 風が高瀬の 川ほとり 備え立てたる 百千の 軍は名に負う 都勢
- 二、重囲の城を 救わんと 南を指せる 旗印 道をさえざる 敵あらば 踏にしがんと 進みくる
- 三、通しはせじと 隼の 薩摩男子は 幾万 刻つ潮の 逆寄せる 都の軍を 迎えたり
- 四、砦で堅し 中堅は 要塞堅固の 田原坂 左翼は連なる 三の岳 右翼は米の岳 霜の越
- 五、三月三日を 手始めに 大砲小銃の 絶間なく 十八昼夜の 打ち続け 天はゆるぎつ 地は裂けつ
- 六、戦の後を 訪い来れば 闘かと驚く 松の風 昔ながらの 山谷に 思い深し 記念石

糧置場で握飯が山のように積んであった。

そこで飲んだり喰ったりして元気づけて田原坂を攻撃していた。

瓜生田に行くと、肉を焼いて喰っていた。「御前も喰わんか」と言うたが、人間の肉のようであったので喰わなかった。

大きな肉をじゅうじゅういわせながら焼いていた。人間を喰うと度胸がつくと言って「人を喰うというてね」と云っていた。ぜい沢だったと思ったのは、死んだ鶏は官軍は喰わずに捨てていたので附近の百姓は、奪い合って拾っていた。

官軍は大砲が不足するので松の木を二つに割って、それをくり抜いて二つ合せて竹の輪でしばり、火薬を中に入れて打った。瓜生田から田原坂を射ったが、弾は田原坂に届かず下方の鉄道を越えて中久保の土手にあたって「どーん」とにぶい音をたてて破裂していた。

薩軍も小銃が少なく、弾も少ないので一発必中の狙い射ちをしていたので命中率はよかった。

一方官軍は一人三百発射たないと休憩できないのでめくら射ちであった。

西郷さんは城山で死んだことになっているが、実際は明治十年には死んでいない。城山で負傷すると十年先を見ないと死ねないと云って支那の上海に逃げた。そうして明治二十年に帰り西郷の従弟が斬った、それまでは墓だけだった。

私が小学二年の時、学校の先生が、西南の役の唄を教えていたが、今も記憶している。

出典:玉東町編 平成7年『歴史への招待』

# 第IX章 考察



二俣瓜生田官軍砲台跡発掘調査

## 「二侯官軍本営出張所跡」の石造建物について

－熊本県玉名郡玉東町「西南戦争遺跡」関係－

高瀬 哲郎

玉東・植木地域は、西南戦争の一大激戦地となったところである。この地域での官軍と薩摩軍の戦いは、明治10年(1877)2月22日～4月15日の約二カ月にも及んでおり、「向坂」「木葉」「横平山」「田原坂」「吉次峠」などの各地が主な戦場となったという。なかでも、最大の攻防戦が繰り広げられたのが植木台地の「田原坂」であり、この戦略要衝地での戦いに際し、官軍は田原坂の西側に位置する二侯台地に本営出張所や砲台を据え置いている。

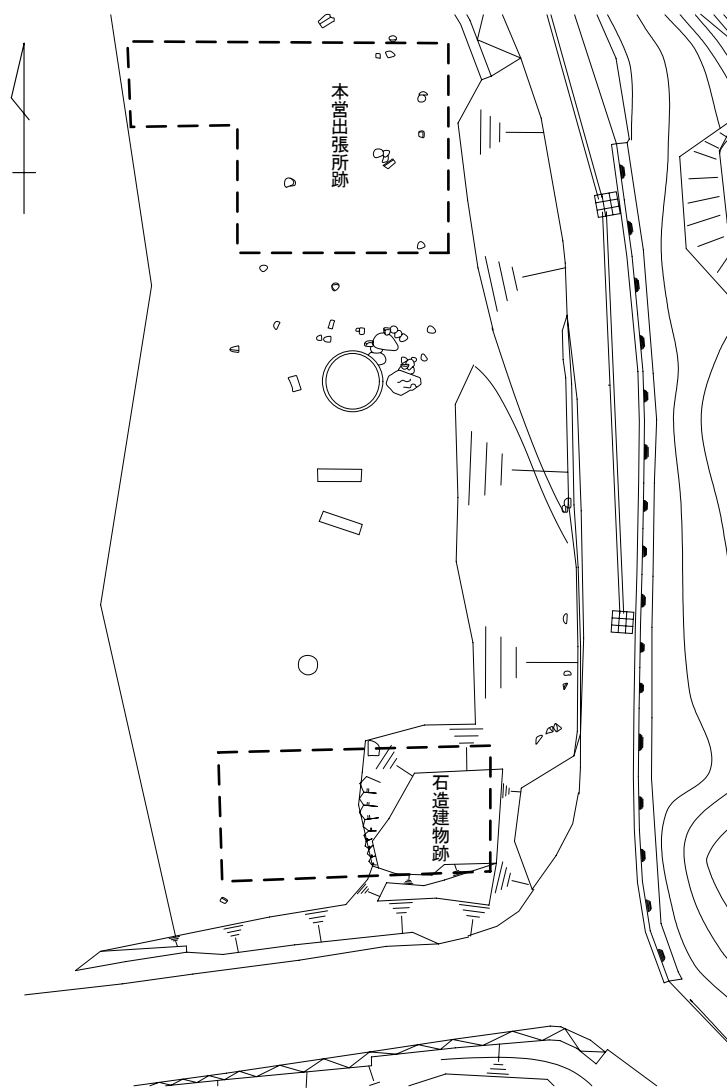
今回、この「二侯官軍本営出張所跡」で、地元の玉東町教育委員会が実施した発掘調査に於いて、敷地の一面から石造りの建物跡が発見されている。この謎の石造建物跡に関し、全体構造・構築技法、そして加工技術などの特徴を以下に示していく。

### 全体構造について

官軍は、田原坂一帯での攻防を想定するに当たり、この地域の状況を直に捉え得る二侯台地を攻撃の中核拠点と定め、その東側斜面に所在していた個人宅に本営出張所を構え、使用している。この敷地内では、本拠となる出張所は北側の屋敷(昭和50年代に焼失)に置かれていたようであるが、問題の石造建物は、その出張所から80m程南に離れた地点に建てられている。

まず、特徴的なこととして、この建物が出張所と同一の地面上ではなく、2mほど掘り下げたところに構築されている点が挙げられる。つまり、平地ではなく、労力を要する半地下構造を、わざわざ、この建物に採用しているのであり、これには何らかの強い意図が働いていたと考えざるを得ない。

さらに、もうひとつの特徴としては、建物全体を頑丈な石造りとしている点にも留意する必要がある。現状としては、建物の床面と西側の側壁部分が良好に残存しており、その石



本営出張所 配置図



造りの支柱(三本)の配置や側壁の石積みみの構築状況から、内部は南北二区画の構成で為されている。北側奥の広い方が主たる目的の空間であり、南側手前の狭い造りは附属するものと推定される。

その規模は、北側が柱間4×4m(2×2間)・内部床面を南北3.6×東西3.6mとし、南側は柱間を南北0.9m(東西は未調査)としており、また、北側の床面は0.2mほど低い。それぞれの天井部は欠落しているが、側壁の残存高は2.2m程であることから、それほど高い建物ではなかったようである。

なお、南側には為されていないが、北側の床面は漆喰状の白土(厚さ約10cm)で敷き固めており、相当に重厚な仕上げを施している。漆喰は「不燃素材」であり、「防水・防湿機能」にも優れている点をも考慮すると、やはり、建物の性格を検討するうえに於いて、この作業内容も看過できないものがある。



石造建物 西側壁の構築状況(東から)

### 建物の石造技術について

本建物跡に関し、最も特徴的な状況は、その構築に用いた石材に様々な加工技術を駆使している点である。

#### (1) 石材の加工技術の特徴

まず、側壁と石柱に用いられた石材(凝灰岩)はすべて精緻な割石であり、一部のものには、その割際の矢穴も残っている。矢穴は幅10×深さ6cm程度の台形状を為しており、明らかに近現代の技術のもの(いわゆる豆矢、幅3×深さ3cmほど)ではない。そして、それら割石の石面にはノミ加工が施され、丁寧な表面調整が為されているが、その加工痕をみると、一定方向のいわゆる「スタレ状の加工」だけではなく、左右両側から斜め方向にノミを入れる「綾杉状の加工」も為されており、特に、石柱の調整には見事な「綾杉文」が刻まれている。また、石柱には、角を明瞭に仕上げる「金場取り残し」の技も使うなど、これら石材の加工には、単なる積む仕事というだけでなく、建物に対する職人の美意識さえも窺い知れる。



「矢穴痕」と「スタレ状のノミ加工」



「綾杉状のノミ加工」

さらに、それら石材同士を合わせる合端は、現地での加工・調整を要する「現場合わせ」とするだけではなく、いくつかの箇所には隣り合った石材を加工し合う「割り込み」や、石柱部との隙間合わせの調整(北隅部の2~5段目)に石材の落としや縦使いの技も使うなど、側壁面の全体を密着させるために精緻な加工技術を駆使している。このように、設計に対応すべき現場の臨機応変な在り様には、石工衆の技術レベルの高さが明確に示されている。



石材の「現場合わせ」と「割り込み」



石材の「落とし」と「縦使い」



(参考) 鹿児島市「鶴丸城の石垣」



(参考)「同城 綾杉状のノミ加工」

また、三本の石柱であるが、北側の側壁に配置された二本は、石材の大きさもほぼ同規格であり、幅31×奥行31cm・高さ180cmとしている。互いの天端高さを揃えていることから、その上部に一体的な屋根構造などを架けていたようである。また、石柱の最下部には礎石を据えているが、その礎石には石柱の形状に合わせた方形の浅い掘り込みを施すなど、相当の荷重に対する石柱の安定も図っている。

残る南端の石柱は高さ120cmであり、北側のものよりも低い。当然、南北の両区画の上部構造が異なる設計を採っていたことに依るものであろう。

## (2) 石垣の積み方の特徴

それら側壁石の構築状況であるが、南側と北側の区画では、用いた技術の様相がかなり違っている。北側では、厚さは30cmほどに整えているものの、横幅は全て異なる石材を用いており、それらを横方向に並べ、計七段の布積みとしている。但し、その六段目と最上段の七段目の状況をみると、六段目ですべての石積みの天端を高さ1.8mに揃え、そのうえで七段目を積み上げていることが分かる。これは、側壁は六段目までとし、七段目は上部の屋根構造に伴う構築であることを意味している。当然、その七段目の据え付けに際しては屋根構造に合わせており、側壁とは勾配を変えている。



西側壁の構築状況

また、その側壁の勾配であるが、現状では少々孕んでおり、約83度とやや傾斜している。と

ところが、南側石柱の北側面には、何と、構築の基準勾配とした「直線の当たり」が刻まれており、それは85度を示していることから、これが本来の勾配であろう。このような勾配基準線の実例は、全国的にも丸亀城で唯一確認されているにすぎず、石垣構築の作業工程を窺ううえでは大変に貴重なものである。

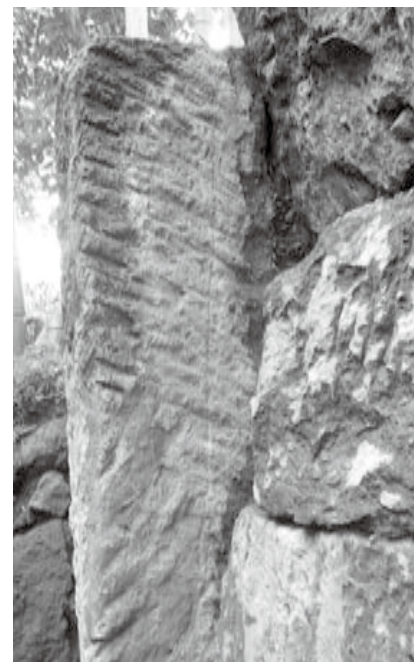
一方、南側では、厚さと横幅を50cmほどの方形に整え、やや大きめに規格した石材を「重ね積み」とし、さらに、その最上段石材の左下端部には南側に据わる柱を刳り込ませる仕事も為している。その勾配は約88度を採っており、ほぼ垂直に積み上げられている。これらの構築状況と南北方向の奥行が狭いことを併せると、やはり、出入口の配置を検討せざるを得ない。



北側石柱と「綾杉文」



南側石柱と両区画の積み方の違い



南側石柱の「勾配基準線」

### 全体評価

以上のことから、まず、建物全体としては、「半地下構造」「全体が石造り」「床は漆喰仕上げ」の特徴をもっていることが判断できる。また、構造自体については、その側壁石材の規格・積み方・勾配、さらに石柱の高さなどの特徴を比較すると、南と北の区画では明らかに構築内容が異なっていることから、両区画の本来の設計・構造がまったく違っていたことも理解できよう。

そこで、これらの諸特徴を改めて検討してみると、まず、「建物全体」の類似事例としては「石造りの蔵」の用途のほとんどであり、さらに「万一の爆発に対処する、半地下構造」と「湿気を防ぐ、厚い漆喰の床」という点を読み取ると、いわゆる「煙硝蔵」が強く推定されるのではないだろうか。とすると、他には、江戸時代に構築された「大坂城(大阪市、江戸期前半に幕府再建、国特別史跡)」「魚見岳台場(長崎市、1810年に福岡藩が構築、国史跡)」「平戸城(平戸市、松浦氏の居城)」に煙硝蔵の遺構例を確認できるだけであり、本例は極めて貴重なものといえよう。



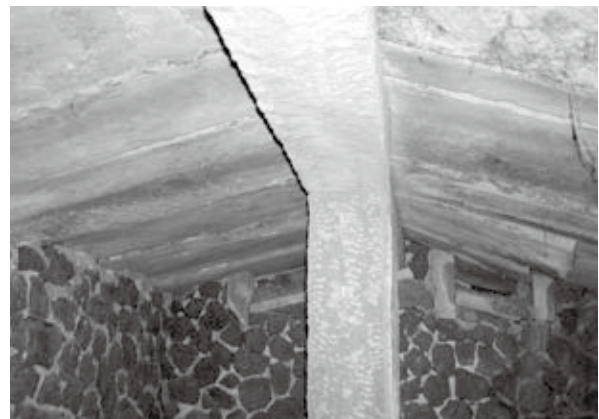
(参考)長崎市「魚見岳台場の煙硝蔵」



(参考)「同 煙硝蔵の内部」



(参考)平戸市「平戸城の煙硝蔵・出入口」



(参考)「同 煙硝蔵の内部」

次に、「構築技術の内容」として、これらの優れた構造の在り様を捉えると、単なる一個人の造り方ではなく、相当の計画・設計に基づき、相応の伝統的技術を保持する石工衆によって為された仕事であることが分かる。さらに、「石材の精緻加工による現場合わせとその布積み」・「角部の金場取り残し」の石積み及び加工技術という点を鑑みると、石垣構築技術の変遷過程に於いて、これらを通用に使用する時期としては江戸期後半～明治期が推定されているのであり、本例もこれに準じる段階として検討を為すべきであろう。

つまり、以上のように「煙硝蔵」並びに「江戸期後半～明治期」と推定し得る石造建物の全容を捉えると、やはり、西南戦争に関係した施設の可能性がかなり高いと思われる。ただ、「田原坂の戦い」自体は3月4～20日(17日間)で終わっていることから、その結果だけを見ると、この堅固な施設の必要性の有無或いは短期構築の可否なども課題のひとつとはなろう。しかし、当時のいつ終わるとも知れぬ「植木・玉東地域の激戦」のなかで、要衝地「田原坂」を制圧し続ける戦略上の必要性が考慮されるならば、この「煙硝蔵」は、「田原坂の戦い」の実態そのものに新たな再検討を迫る遺構として重要視されていくのではないだろうか。

## 西南戦争における官軍墓地の成立と現状について

前川 清一

### はじめに

官軍墓地とは、戊辰戦争以降において国のために犠牲になった政府軍の人々を弔った墓地を指す。本稿では、これらの墓地のうち、西南戦争に関連した墓地について、その成立と現状について記すものだ。

なお、当初は「西南ノ役戦没セシ軍人軍属遺骸埋葬地」「西南ノ役戦没軍人軍属埋葬地」「西南ノ役戦死人墳墓」などと呼ばれたが、本稿では地元で慣れ親しんだ「官軍墓地」の呼称を使用する。

ところで、官軍墓地の管理は、明治12年度より内務省から該当県へ管理費を令達し該当地で管理を行ってきたが、戦後GHQの下、このような制度は廃止された。

さらに、サンフランシスコ平和条約締結後も官軍墓地への管理費支給は回復されず、以後、該当地の行政、または地元住民等による善意の管理下に置かれたまま、今日に至る墓地も多い。

この間、国は国有墓地の払い下げや無償譲渡などの働きかけを行うなど、国家としての役割を放棄したかに見える。

戦後、国家としての管理が放棄された状況下、墓地の墓石は傾き或いは壊され、荒廃が進んだ結果、合葬して供養塔を建立したり、英霊の合祀を行うなど、墓地の整理や破壊がなされたところも多い。

本稿では、西南戦争における官軍墓地の成立と現状について記すもので、今後の管理活用の一助となれば幸いである。

### 1 官軍墓地の成立について

わが国初の陸軍墓地とされる真田山軍人墓地(大阪靖国軍人墓地)は、明治4年(1871)4月10日に大阪城の南に位置する小高い丘に造成された。ここには、西南戦争はじめ、日清・日露戦争で戦死した軍人軍属の戦没者等を弔った墓地として、確たる地位を占めている。

さて、西南戦争の主戦場となった九州、なかでも激戦地となった熊本県の田原坂・半高山・吉次峠周辺や終焉の地となった鹿児島県の城山周辺では、両軍ともに多くの戦死者を出した。

戦死者は仮墓に埋められ、後に正式な墓地へと葬られるが、この間の経緯については本報告書記載の水野公寿氏の「西南戦争と玉東町―戦場・基地・墓地」において玉東町関連の論考に詳しい。

ところで、西南戦争における官軍墓地を造ったのは明治政府であるが、陸軍の埋葬地の建造は陸軍省、海軍は海軍省、警視隊<sup>(1)</sup>は内務省が担当した。このために、官軍墓地が造られた時期も、若干の時間的な開きが見られる。

また、官軍墓地は、早い段階においても場所の移動や吸収合併などが見られる。

現在確認できた墓地は、第1表「西南戦争に於ける官軍墓地」のとおり51カ所になる。これらのうち、早い時期に移転や吸収されたものがある。長崎県の梅ヶ崎招魂社は手狭となったために明治14年に佐古招魂社へ移転された。鹿児島県の城山脇官軍墓地は明治17年に墓地の荒廃を理由に大規模な祇園洲官軍墓地へと移転吸収された。

大分県の松栄山官軍墓地は、警視隊103人の墓地である。現在、大分県護国神社の社地になっている。墓地は、大鳥居から入った石段の右脇に位置するものだ。

なお、当護国神社には警視隊の墓地とは別に211人の陸軍墓地がある。石段を上った右手駐車場の南側梅林の中に造営されている。この二カ所の墓地は、明治15年の時点では住所の表記も違い、別々な墓地として扱われたものだ。

ところで、第1表の墓数は、明治15年8月19日付けの「戦死人墳墓修善並掃除費ノ金額ヲ定ム」より引用したものである。所在地の欄で( )が付されたものは記載されたままの表記であり現在表記の住所ではない。また、墓数に

第1表 西南戦争に於ける官軍墓地

No.	名 称	所 在 地 (旧住所表記)	墓数	現 状	指 定
1	寄鶴官軍墓地	熊本県下関国飽田郡同村字寄鶴	30	明德官軍墓地に合葬墓	
2	明德官軍墓地	熊本県熊本市北区北部町大字明德 1277 - 4	123	良好	県
3	小峯官軍墓地	熊本県熊本市中央区黒髪四丁目 10	71	合葬・忠霊塔	
4	七本官軍墓地	熊本県熊本市北区植木町轟字多尾 2105	300	良好	県
5	宥明堂官軍墓地	熊本県山鹿市山鹿字宥明堂	153	合葬	
6	高瀬官軍墓地	熊本県玉名市高瀬	395	消滅・忠霊塔	
7	肥猪町官軍墓地	熊本県玉名郡南関町大字肥猪町 216・217	180	良好	県
8	下岩官軍墓地	熊本県玉名郡和水町大字岩 4151 - 2	150	良好	県
9	城ノ原官軍墓地	熊本県玉名郡南関町南関 1063	77	良好	県
10	月見殿官軍墓地	熊本県菊池市大字隈府月見殿	100	改修	
11	高月官軍墓地	熊本県玉名郡玉東町木葉 679・680	981	良好	県
12	宇蘇浦官軍墓地	熊本県玉名郡玉東町木葉 903 - 1	399	良好	県
13	永尾官軍墓地	熊本県下宇城市不知火町大字永尾村字河添 704 - 6	149	合葬・忠霊塔	
14	若宮官軍墓地	熊本県八代市塩屋町 10 - 35	399	合葬・記念碑	
15	横手官軍墓地	熊本県八代市大手町	270	消滅 (若宮官軍墓地に合葬)	
16	陣内官軍墓地	熊本県水俣市古城一丁目 436	42	良好	県
17	峯崎官軍墓地	熊本県葦北郡芦北町花園村字峯崎	86	改修	
18	尾の上官軍墓地	熊本県天草市牛深町舟津尾の上墓地	1	良好 (警視隊墓地)	市
19	城山上代海軍墓地	熊本県熊本市中央区城山上代町北浦 1100	<7>	改修 (海軍墓地)	
20	花園山陸軍埋葬地	熊本県熊本市中央区横手二丁目 13	<1>	良好	市
21	田浦官軍墓地	熊本県葦北郡芦北町田浦町大字田浦	<1>	良好	
22	祇園洲官軍墓地	鹿児島県鹿児島市祇園洲	1066	消滅	
23	城ヶ尾墓地	(鹿児島県指宿郡今和郷岩本村字城ヶ尾)	1	未調査	
24	野首山墓地	(鹿児島県伊佐郡宮城町字野首山)	1	未調査	
25	大平寺墓地	(鹿児島県高城郡水引郷大小路村字大平寺跡)	8	未調査	
26	岩川官軍墓地	鹿児島県曾於市大隅町大字岩川字東馬場	85	良好	市
27	城山脇官軍墓地	鹿児島県城山脇	< >	祇園洲へ移設 (明治 17 年)	
28	細島官軍墓地	宮崎県日向市日知屋字遠ヶ崎 2489 番地	251	良好	市
29	三田井官軍墓	宮崎県西臼杵郡高千穂町大字三田井	40	良好	町
30	台雲寺墓地	宮崎県延岡市北小路 3738 台雲寺境内	<1>	未調査	
31	坂元官軍墓地	宮崎県えびの市坂元	34	消滅・記念塔	
32	正覚寺墓地	(日向国児湯郡高松村美々津正覚寺内)	1	未調査	
33	今町官軍墓地	(日向国那珂郡福島今町)	2	未調査	
34	真光寺墓地	(日向国那珂郡恒久村真光寺)	1	未調査	
35	無量地墓地	(日向国宮崎郡大塚村官有地字無量地)	1	未調査	
36	三福寺墓地	宮崎県延岡市北町三福寺 2 - 1 三福寺	1	消滅	
37	大分県護国神社	大分県大分市大字牧 護国神社	211	良好	
38	松栄山官軍墓地	(豊後國大分郡牧村字松栄山)	103	警視隊 (護国神社内)	
39	佐伯招魂所	大分県佐伯市白坪区 岡の谷招魂所	133	良好	
40	佐賀閩海軍墓地	大分県大分市佐賀閩地蔵寺山	5	移設	
41	鑄物師町官軍墓地	(豊前国金牧郡鑄物師町)	188	未調査	
42	山川招魂社	福岡県久留米市山川町	19	良好	
43	福岡県殉難警察官之碑	福岡県福岡市中央区平和五丁目 14 番 1 号	<2>	未調査	
44	佐古招魂社	長崎県長崎市西小島二丁目 5 番	567	改葬	
45	梅ヶ崎招魂社	長崎県長崎市梅ヶ崎 梅ヶ崎招魂社	< >	佐古に移設合葬	
46	真田山軍人墓地	大阪府大阪市天王寺区玉造本町真田山	6	未調査	
47	門跡墓地	(兵庫県摂津神戸港字門跡)	3	未調査	
48	引接寺墓地	山口県下関市中之町引接寺 11 番 9	1	未確認	
49	追浜官修墓地	神奈川県横須賀浦郷町 3 丁目	48	移設 (大正 2 年)	
50	久保山墓地	神奈川県横浜市西区元久町	<5>	未調査	
51	青山霊園	東京都港区南青山	<70>	警視隊 (明治 12 年) 未調査	

< >が付けられたものは、同時点で管理費が支払われていない墓地であることを示している。

### その1 陸軍省による官軍墓地

陸軍省は、明治11年11月30日付けで西南戦争における官軍墓地を把握し、適切な管理を行うために、工兵第六方面本署管内に次のような通達<sup>(2)</sup>を出している。この通達文は、翌年の所管替えを円滑に行うための準備ともとらえることができる。

十一月三十日 号外 工兵第六方面本署

其方面管内昨年ノ役戦死者埋葬地ノ儀ハ追テ何分ノ儀相違候迄於其署管理  
致シ掃除方等可取計此旨相違候事  
但埋葬地ノ取調書別紙相添候事

別紙

西南ノ役戦死者埋葬地

- 一福岡縣下筑後國御井郡山川村字茶白山
- 一長崎縣下肥前國彼杵郡小島村字佐古
- 一熊本縣下肥後國芦北郡花岡村字峯崎
- 一同縣下同國宇土郡永尾村字河添
- 一同縣下同國芦北郡陣内村字城山
- 一同縣下同國八代郡八代字若宮
- 一同縣下同國菊池郡隈府村字月見殿
- 一同縣下同國山鹿郡湯町字宥明堂
- 一同縣下同國玉名郡岩村字河井浦
- 一同縣下同國同郡肥猪町字十時
- 一同縣下同國同郡南関字城原
- 一同縣下同國同郡高瀬町字北屋敷
- 一同縣下同國同郡木ノ葉町字高月
- 一同縣下同國同郡同町字蘇浦
- 一同縣下同國山本郡轟村字多尾山
- 一同縣下同國飽田郡明德村字上市原
- 一同縣下同國同郡同村字寄鶴
- 一鹿児島縣下大隅國曾於郡五十丁村字馬場
- 一同縣下日向國諸縣郡阪元村字榎ノ元
- 一同縣下同國臼杵郡日知屋村字遠ヶ崎
- 一同縣下同國同郡三田井村字城平
- 一大分縣下豊後國海部郡佐伯村字岡
- 一同縣下同國大分郡牧村字臺良

備考

外ニ鹿児島祇園洲並筑前那珂郡馬出村肥後熊本立田鹿児島城山共四ヶ所  
是迄所轄ノ地ニモ埋葬有之ニ付同様掃除等致スヘシ

この文書から、陸軍省は九州における官軍墓地について、ここに記された24カ所と従来から設置されていた陸軍墓地4カ所を加えた、計28カ所を認識していたことが分かる。

なお、九州以外での西南戦争による軍人軍属の犠牲者を葬った代表的な墓地としては、真田山軍人墓地がある。ここには、最前戦から搬送されてきた負傷兵や病人を大阪の陸軍病院で治療したものであるが、その甲斐もなく死亡した人々を葬ったもので、その数は923名に上るとい<sup>(3)</sup>。

## その2 海軍省による官軍墓地

海軍省で造られた官軍墓地について、明治12年4月15日付けの事入第二百廿一号に次のように記している。



一昨十年西南騷擾之際戦死者埋葬地處分方之義ニ付事出第貳百五十五号ヲ以縷々御打合之趣委細致承知候依テ取調候處戦死者埋葬場所之義ハ大凡別紙之通ニ有之然シ其地所番号等詳細之取調ハ何分難行届且祇園洲墓所之義モ海陸打混シ埋葬相成候筈ニ付其管理ハ未タ何タル御取極ニモ不相成哉ニ推考致候扱又流行病之為死没之者モ夫々埋葬相成候事ト存候得共右ハ凱旋之際ニテ確タル書類モ無之ニ付即今如何ニモ御報知難及一体戦死病死共埋葬等之義ハ實際艦隊指揮官ニテ取扱候事柄ニ付可相成ハ鎮守府江御問合相成候様御取計有之度尤各地墓所之義ハ無論陸軍同様内務省ニ於テ管理相成候方至當ト存候間尚於御課上局之御評議御伺相成リ表向キ同省江御掛合相成候様御取扱有之度此段御荅旁及御談示候也

## 征討残務取調掛

明治十二年四月十五日 有馬海軍大書記官

事務課長

小森澤海軍大書記官殿

別紙

埋葬地名		官 姓 名
長崎梅ヶ崎招魂場	少尉補	雪下 熊之助
同	三等水兵	上村 一
同	一等若水兵	長宗 政市
肥後國小嶋村	二等水兵	渡邊 金太郎
同	三等水兵	洪江 廣太郎
同	四等水兵	瀬口 幸太郎
同	同	角田 元助
同	一等若水兵	前田 廣吉
同	同	松浦 瀧造
同	二等若水兵	山本 十藏
鹿児島祇園埋葬地	一等水兵	高田 徳太郎
同	同	深町 安太郎
同	二等水兵	奥村 仁次郎
同	二等水兵	森 藤七郎
同	三等水兵	條 益太郎
同	一等若水兵	木原 秀吉
同	二等若水兵	東 半助
豊後佐賀ノ関	二等水兵	高橋 定四郎
同	三等水兵	小松 由藏
同	同	愛甲 秀一
同	四等水兵	寺田 良吉

以上のことから、海軍省による埋葬地と犠牲者の氏名等が知られるものだが、これにより海軍省による埋葬地として陸軍省と同所の鹿児島県の祇園洲官軍墓地や長崎県の梅ヶ崎招魂社の他に、新たに熊本県、大分県にそれぞれ各1カ所、計2カ所の新設官軍墓地が知られる。なお、豊後佐賀ノ関の場合4名の死者が記されているが、実際には別の資料のように5名の犠牲者が葬られている<sup>(4)</sup>。

また、海軍省でも内務省への所管替えが進められていたことが知られよう。

### その3 内務省による官軍墓地

内務省は、西南戦争時陸軍の後方支援を目的として、警視隊を派遣したものであるが、剣術に秀れた者より「抜刀隊」が組織され、前戦での戦死者も多い。

内務省所管の官軍墓地については、明治14年2月25日付けで熊本県から内務省宛に出された上申書がある<sup>(5)</sup>。これにより熊本県下の警視隊の墓地の所在等を抜粋すると、次の5カ所が知られる。

明治12年度及び13年度報告分として

山本郡轟村多尾山	墓数14(陸軍墓数:286)
玉名郡高瀬町北屋敷	墓数18(陸軍墓数:377)
玉名郡木葉町宇蘇裏	墓数64(陸軍墓数:335)
八代郡横手村馬渡	墓数270(13年度は、警視隊でなく陸軍の箇所に誤記されている。)
天草郡牛深村共有墓地加世ノ浦	墓数1

5カ所のうちの4カ所の墓地は、陸軍墓地に併設されたものだ。独立して新たに作られたものは、牛深加世ノ浦の墓地である。

次に、鹿児島県(当時、宮崎県は存在せずは鹿児島県に合併)の場合は、明治15年3月11日付けで鹿児島県から内務省に出された文書がある。これを抜粋すれば、次のとおりである。

薩摩国鹿児島郡清水馬場町元阪元・旧台場村祇園ノ洲	墓碑241(陸軍墓数:801、海軍:24)
薩摩国指宿郡今和郷岩元村字城ケ尾	墓数1
薩摩国伊佐郡宮ノ城町字埜首山	墓数1
薩摩国高城郡水引郷大小路村字旧泰平寺跡	墓数8
日向国児湯郡高松村美々津正学寺内	墓数1
日向国那珂郡福島今町 人民墓地内	警視局員2名
日向国那珂郡恒久村真光寺 墓地	警視局員1名
日向国宮崎郡大塚村官有地字無量地埋葬地内	警視局員1名
日向国臼杵郡北町三福寺墓地内埋葬	警視局員1名

上記のとおり9カ所があり、陸軍墓地に併設された祇園洲官軍墓地を除いた8カ所が新たに造られた墓地である。祇園洲官軍墓地以外の官軍墓地での埋葬者数は少なく、寺院の墓地や共有墓地内に建立されたものが多い。

### その4 官軍墓地の所管替えとその後

官軍墓地は、陸軍省・海軍省・内務省の下で造成され、明治12年1月21日付けで陸軍省・海軍省の墓地は内務省へ所管替えを行うよう通知が出されている。陸軍省から出された丙第一号の通知文によれば、

丙第一号

長崎縣 福岡縣 大分縣

熊本縣 鹿児島縣

其縣下ニ有之西南之役戦没セシ軍人軍属之遺骸埋葬地并墳墓等今般陸軍省ヨリ當省へ引継候条自今於其縣管理可致此旨相達候事

但警視局所轄ノ分モ同様可相心得尤該件請渡并後來保存ノ方法稟議ノ為メ内務四等属長谷川保敏ヲシテ出張セシメ候條差支無之様可取計事

内務卿伊藤博文代理

明治十二年一月廿一日 内務少輔林友幸

とあり、所管替え後の官軍墓地管理は、警視局の墓地を含めて該当県で管理をすることとされた。

また、内務四等属長谷川保敏より、熊本県へ次のような指示がなされている<sup>(6)</sup>。

戦没者埋葬地今般内務省所轄ト相成地方官之ヲ榮理候ニ付テハ左ノ件々戸長共ニ於テ厚ク注意候様イタシ度

一 門榜並目標陸軍ノ文字ヲ彫リ左ノ如ク改書スヘシ

表 官軍戦死之墓

横 何國何郡何(町・村)字何々地名ヲ詳記スヘシ

裏 明治十二年六月 内 務 省

一 人民有志輩自費ヲ以テ招魂祭執行並境内へ植木等寄付願スルモノアル時ハ聞届可然、但シ其都度縣廳ノ認可ヲ經ベシ

一 保存方費用ノ定額ハ追テ御治定之上御達可相成ニ付墳墓並玉垣等破壊セシ時ハ縣廳へ申出相当ノ修善可相加事

但シ玉垣ハ追テ生垣改造ノ見込是ハ修繕費ノ内ヨリ漸時植付候様粗戸長へ談示置ケリ

一 遺骸埋葬ニ盡力セシモノ歟或ハ墓地ノ接近ニ住居スルモノハ内壹名及二名ヲ撰ビ(墓地の景況ニ因リ式ケ所ヲ合シ壹名ヲ置クモ妨ケナシ)、番人申付け(従前ヨリ關係セシ旨ヲ以テ陸軍出張官員ヨリ殊更ニ申継ギ有之分ハ其地戸長ニ直ニ命ジ置ケリ)、草取掃除等一切委任シ戸長ニ於テ之ヲ監視シ、時々巡見之上不取締無之様可加注意事

但番人給料之儀ハ墓地ノ大小墳墓ノ多少ニ因ツテ増減モ可有之ニ付追テ御治定之上縣廳ヨリ夫々へ御特達相成度事

一 戦没者ノ遺族並親戚朋友等墓参ノ節ハ番人共ニ於テ懇切ニ取扱ヒ花水等汲与へ候程ニ入念参詣人ノ迷惑無之様致度事

一 墳墓ノ文字年数ヲ経ルニ随ヒ磨滅ノ費ヒ有之ニ付墨又ハ青色ヲ以テ摺込長ク保存イタシ度尤モ区々不相成様御評決之上一般ニ御達相成度事

右保存方見込及御打合候間猶御取捨之上至急其筋へ御相成候様致度此段及御効力議候也

明治十二年七月

九州筋出張

内務四等属 長谷川保敏 印

熊本縣令富岡敬明殿

該当県は、同様な指示を受けたものと見做されよう。

また、「保存方費用ノ定額ハ追テ御治定之上御達可相成ニ付墳墓並玉垣等破壊セシ時ハ縣廳へ申出相当ノ修善可相加事」の一条から、内務省より管理費が定められ、各県に支給される手はずであることが分かる。管理費の算定史料として、該当県から管理すべき墓地の広さや墓数などを提出させたうえで、内務省は定額の管理費を令達することにした。

次の資料は、定額を定めた折の伺い文で、国立公文書館で保管されている<sup>(7)</sup>。

十五年八月十九日

戦死人墳墓修善并掃除費ノ金額ヲ定ム

内務省伺

西南ノ役戦死人墳墓修善及掃除費ノ儀ニ付熊本縣其外ヨリ追々申出ノ趣有之篤ト為取調候処墳墓ケ所額夥多有之随テ地籍實測ナルモノ不少シラ現今掃除費多分ノ仕拂ヲ要シ候分モ羽之戊辰己巳戦死墳墓修繕費定額ノ如ク概シテケ所金六円貳拾五錢宛至急候テハ實證差支可申様被相考候ニ付四法ヲ斟酌シ墳墓ケ所ニ依リ金員

増加ノ法方相設墓数五十箇巳内の墓所一ヶ所ニ付修善并掃除費トシテ一年分定額金六円貳拾五錢四八文給五十一箇以上ハ右ニ準シ毎五十箇以内ニ六円貳拾五錢宛ヲ増加シ管内ハ彼此流用□額ハ為据置候様致度右ハ旧来ノ分ニ於テ別段掃除費ノ名義無之様ヘ共實額ハ定額金ヨリ支拂居且西南戦死墳墓ニ於テハ戊辰己巳ノ墳墓ニ異リ最初ヨリ官營・係り既掃除費ハ所在府縣ニテ経費ヲ以為仕拂候儀ニ有之候旁修繕清掃両費ヘ對前顯ノ通定額ノ見込相立、別紙達按其外書類相添此段相伺候也 十五年六月廿三日

熊本縣  
鹿兒島縣  
大分縣  
福岡縣

西南ノ役戦死人墳墓修善并掃除費定額ノ儀、別紙ノ通被相定候條一管内ハ彼此汎用殘金ハ据置修善并掃除費用及監守者ヲ置候分ハ右給料共一切可取賄此旨相達候事

明治十五年六月 内務卿 山田 顯義  
長崎縣  
大阪府  
兵庫縣  
山口縣  
神奈川縣

西南ノ役戦死人墳墓修善并掃除費定額ノ儀、別紙ノ通被相定候條殘金ハ据置修善并掃除費用及監守者ヲ置候分ハ右給料共一切可取賄此旨相達候事

明治十五年六月 内務卿 山田 顯義  
熊本縣  
飽田郡明德村寄鶴 墓数三十個  
定額金六円貳拾五錢  
全郡全村上市原 墓数百二十三個  
定額金拾八円貳七拾五錢  
全郡立田村小峯 墓数七拾一個  
定額金拾貳円五拾錢  
山本郡轟村多尾山 墓数三百個  
定額金三拾七円五拾錢  
山鹿郡山鹿町宥明堂 墓数百五十三個  
定額金貳拾五円  
玉名郡高瀬町北屋敷 墓数三百九十五個  
定額金五拾円  
全郡肥猪町十時 墓数百八十個  
定額金貳拾五円  
全郡岩村河井浦 数百五十個  
定額金拾八円七拾五錢  
全郡南関町城ヶ原 墓数七十七個  
定額金拾貳円五十錢

全郡木葉町高月	墓数九百八十一個
定額金百貳拾五円	
全郡木葉町宇蘇裏	墓数三百九十九個
定額金五拾円	
菊池郡隈府町月見殿	墓数百個
定額金拾貳円五拾錢	
宇土郡永尾村河添	墓数百四十九個
定額金拾八円七拾五錢	
八代郡八代町若宮	墓数三百九十九個
定額金五拾円	
全郡横手村馬渡	墓数二百七十個
定額金三拾七円五拾錢	
芦北郡陣内村城山	墓数四十二個
定額金六円貳拾五錢	
全郡花岡村峯崎	墓数八十六個
定額金拾貳円五拾錢	
天草郡牛深村加世ノ浦	墓数一個
定額金六円貳拾五錢	
墓所拾八ヶ所	
合計金五百貳拾五円	
	鹿兒島縣
鹿兒島郡清水馬場町字祇園洲	墓数千六十六個
定額金百三拾七円五拾錢	
指宿郡今泉都岩本村城ヶ尾	墓数一個
定額金六円貳拾五錢	
伊佐郡宮城町字野首山	墓数一個
定額金六円貳拾五錢	
高城郡水引郷大小路村字大平寺跡	墓数八個
定額金六円貳拾五錢	
日向國臼杵郡知屋村字遠ヶ崎	墓数二百五十一個
定額金三拾七円五拾錢	
全國全郡三田井村字城平	墓数四十個
定額金六円貳拾五錢	
全國諸縣郡飯野郷坂本村字榎本	墓数六十四
定額金六円貳拾五錢	
全國児湯郡高松村卷出正覺寺内	墓数一個
定額金六円貳拾五錢	
大隅國曾於郡岩川郷五十町村字馬場	墓数八十五個
定額金拾貳円五拾錢	

日向國那珂郡福島今町 墓数二個  
定額金六円貳拾五錢  
全國全郡恒久村真光寺 墓数一個  
定額金六円貳拾五錢  
全國宮崎郡大塚村官有地字無量地 墓数一個  
定額金六円貳拾五錢  
全國臼杵郡北町三福寺 墓数一個  
定額金六円貳拾五錢  
墓所拾三ヶ所  
合計金貳百五拾円

大分縣

豊後國大分郡牧村字松栄山 墓数百三個  
定額金拾八円七拾五錢  
全國全郡全村字臺良 墓数二百十一個  
定額金三拾壹円貳拾五錢  
全國南海部郡佐伯村字岡 墓数百三十三個  
定額金拾八円七拾五錢  
全國北海部郡関村字須賀 墓数五個  
定額金七円貳拾五錢  
墓所四ヶ所  
合計金七拾五円

福岡縣

豊前國企杖郡鑄物師町 墓数百八十八個  
定額金貳拾五円  
築後國御井郡山川村 墓数十九個  
定額金六円貳拾五錢  
墓所二ヶ所  
合計金三拾壹円貳拾五錢

長崎縣

西彼杵長崎村字佐古 墓数五百六十七個  
定額金七拾五円

大阪府

府下真田山 墓数六個  
定額金六円貳拾五錢

兵庫縣

摂津神戸港字門跡 墓数三個  
定額金六円貳拾五錢

山口縣

壇浦郡下ノ関城越町引説寺境内 墓数一個

定額金六円貳拾五銭

神奈川県

三浦郡浦郷村字天濱

墓数四十八個

定額金六円貳拾五銭

総計金九百八拾壹円貳拾五銭

また、以上のことから、明治15年の段階で西南戦争による官軍墓地の管理費を支払う墓地は、熊本県18カ所、鹿児島県13カ所、大分県4カ所、福岡県2カ所、長崎県、大阪府、兵庫県、山口県、神奈川県は各1カ所の合計42カ所であることが知られる。

この中の、兵庫県、山口県、神奈川県に存在している墓地は、この記事からはどの部署で造られたのかは不明である。

兵庫県の官軍墓地については、明治10年3月19日付けで歩兵第七連隊第一大隊第四中隊附の陸軍大尉児玉通良から、陸軍参謀部へ出された文書がある<sup>(8)</sup>。

歩兵第七連隊第一大隊第四中隊附

陸軍少尉試補渡辺奏助

右之者昨十八日午後第十一時死去致候就而口当神戸第二区失部郡坂本村三百九番戸廣巖寺エ埋葬致問此段御仰付候也

明治十年三月十九日

歩兵第七連隊第一大隊第四中隊長

陸軍大尉児玉通良 印

陸軍参謀部 御中

神戸の廣巖寺へ埋葬されたことが知られるが、廣巖寺は明治15年の官軍墓地の管理費対象地に含まれていない。仮墓であったとも思われるが、確認するに至っていない。

なお、明治10年8月25日付けで二等副監督清水光儀より陸軍中佐鳥尾小彌太へ伺いが出され、許可された文書がある<sup>(9)</sup>。

将校以下傷痍疾病ニ罹リ某地ヨリ大阪へ輸送之即於船中死スル者埋葬方之儀ニ付伺

将校以下戦地等ニテ傷痍疾病ニ罹リ此者大坂へ輸送之節船中ニ於テ死没セシキハ是适当地臨時病院へ送附シ不得已同院ニテ埋葬取計候處病院へ死骸ヲ送附致之儀不都合ニ有之隨而運送費等モ不尠候付自今神戸地方ニ於テ埋葬地所購求シ右死没之者有之節埋葬等之儀同所運輸局ニ於テ取計候様致度此段相伺候也

明治十年八月廿五日 二等副監督清水光儀

陸軍中佐鳥尾小彌太 殿

この回答文には「伺之通 八月二十九日」とある。このことから、少なくともが神戸への地に官軍墓地が造られた事が窺われる。

次に、山口県の官軍墓地については、明治10年6月27日付けで陸軍省山口県出張所から陸軍参謀部へ出された文書がある<sup>(10)</sup>。

埋葬他所代価之儀ニ付過ル二十五日付ヲ以テ御申越相成候処右ハ引接寺内官有墓地之事ニ付代価之儀御払渡ニ及候条此段申進候也

十年六月廿七日 山口県出張所 印

陸軍参謀部 御中

この文書にある「引接寺内官有墓地」は、後に国の管理費が出されることとなる。

最後に、神奈川県官軍墓地は、明治14年1月21日付けで旧征討軍事団事務所より工務局へ出された次の文書

がある<sup>(11)</sup>。

発第百四十六号

相州神奈川県下三浦里村埋葬地今般内務省へ御引渡可相成ニ就テハ未タ仮墓標ニ付九州地方戦死者同様石碑ニ変換建築之上同省へ御引渡相成度旨工兵第一方面ヨリ伺出候ニ付該金額支出之義云々御照会之趣致承知候右ハ御意見之通實際難関事項ニ付各費用ハ征討費ヨリ支出可致候間受領証書ヲ以旧軍団会計部へ受取方可申出旨御指令相成度此段及御照会候也

明治十四年一月廿一日

旧征討軍団事務處

工兵局御中

仮標の石造への建て替えが遅れて、所管替えの遅延が見られたものである。なお翌15年の段階では、定額の管理費が支出されている。

以上のように、兵庫県、山口県、神奈川県に存在している官軍墓地は、兵庫県を除き、明治15年段階で国の管理費が拠出されるものとして挙げられている。また、いずれも陸軍省で造られたことが判明する。

ところで、「明治十一年十一月三十日 号外 工兵第六方面本署」によれば、工兵第六方面本署管内(九州管内)では、24カ所が確認されているが、明治15年の段階では、この内の城山脇官軍墓地が含まれていない。この経緯を窺い知るものに鹿児島県より陸軍省に出された上申書がある<sup>(12)</sup>。

会甲第千三百四十七号

當縣下鹿児島城山脇官軍墓地之儀ニ付意見上申

御省所轄當県下鹿児島城山脇官軍墓地之儀塋域蕪穢シ欄柵敗壞スルノミナラス墓碑之破碎スル者モ不少甚キハ碑石又ハ臺石ヲ併セラ存在セサル者モ有之哉ニ見受候右ハ兵備御擴張之際當縣ヲイテ人民奨励上ニモ影響イタシ候条今後厚ク掃除修善之道ヲ被為立候様致度此段為御参考見込及上申置候也

但本文之儀御都合ニ依リ先般内務省ヨリ當縣へ御引渡相成候鹿児島祇園洲官軍墓地へ改葬相成候モ可然存候此段相添上申候也

明治十六年八月廿四日 鹿児島縣令渡邊千秋

陸軍卿大山巖殿

(この後に次の追記有)

上申之趣祇園洲へ改葬之儀了

兵第二方面へ相達候事

明治十七年九月廿五日

以上のことから、城山脇官軍墓地は設置後間もない期間であるにもかかわらず、荒廃著しいことが窺われる。西郷終焉の地に近いこともあり、官軍墓地の存在自体が住民感情としても受け入れがたいものであったようだ。このような事情もあり、陸軍省から内務省への引継ぎが円滑になされたとは思えない。ただし、鹿児島県としても、官軍墓地の荒廃は看過できず、明治16年8月24日付け陸軍省へ城山脇官軍墓地を祇園洲官軍墓地へ移設改葬の上申をしたものである。この申し出により、明治17年9月25日付けで祇園洲官軍墓地への移転改葬の許可が出されている。

以上の経緯から、明治15年に国から管理費が出されていた官軍墓地は、第1表「西南戦争における官軍墓地一覧」51カ所を確認することができる。

## 2 官軍墓地の築造等について

### その1 墓石の形態



墓石の形態については、陸軍省、海軍省、内務省で多少の相違が見られる。西南戦争による官軍側の犠牲者については、明治7年10月13日に施行された「陸軍省布第三百六十九号」の「下士官兵卒埋葬法則」によると、「墓標ハ下士ニ在テハ高サ二尺五寸方六寸兵卒ニ在テハ高サ二尺方五寸 木柱ヲ以テ之ヲ製シ死者ノ官位姓名墓ト記シ其側面ニ年月日ヲ記スヘシ(略)木柱ヲ以テ墓標ヲ製スルハ一般ノ定則ナレトモ或ハ地方ニ在テ物価下直ナルヲ以テ埋葬料ノ余残ヲ積置キ予メ其引当ト為ヘシ」とある。士官兵卒についての規定で、将校についての規定はなく、また、墓標は木製でも石製でも良いとされた。

なお、明治10年12月20日付けの陸軍省達 達乙第224号で、将官、佐官、尉官、下士兵卒の4階級の墓地の面積が示されて、初めて将校の規定が示されている。

しかしながら、実際に墓石を建立するとすると、具体的な内容の問い合わせが各地から陸軍省に出されている。

例えば、明治10年8月2日付けで陸軍大尉児玉通良から陸軍中将鳥尾小彌太あてに出された文書がある<sup>(13)</sup>。

負傷死亡之軍人石碑文字彫刻方ニ付伺

今般征討ニ付負傷於当地死亡之軍人石碑取設方ニ付本月一日附四工一ノ百六拾貳号ヲ以云々伺出置候處別紙雛形之通石碑文字彫刻候而可然哉何分ノ御指揮被下度此段相伺候也

工兵第四方面提理代理 陸軍少佐飛鳥井雅古代理

明治十年八月二日 陸軍大尉谷村猪介

陸軍中将鳥尾小彌太殿

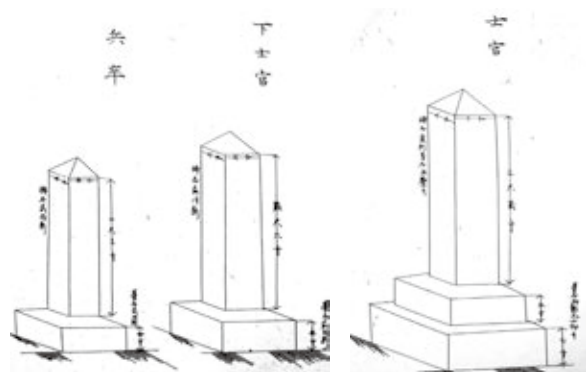
この問い合わせに対して8月21日付けで「伺之趣ニ付義之通可致彫刻候事」として、図面を添付し回答がなされている。

また、別の明治10年8月1日付けの文書には、真田山軍人墓地の石碑建造の伺いが出されていて、次のような仕様が記されている(第1図)<sup>(14)</sup>。これにより、陸軍の墓石の寸法や仕様が知られる。また、真田山軍人墓地の墓石の棹石は「泉州青石上磨キ」とある。これは、通称「和泉石」と呼ばれる砂岩で造られたものだ。また、土台石は「御影石上小叩キ」とあり、花崗岩で造成された事が窺える。なお、陸軍省で造られた熊本県下の墓石は天草砂岩で造られている。九州南部の陸軍関連の墓石は、天草砂石が多くみられるもので、この件については、後述したい。

次に、海軍省では、陸軍と同様な墓石を建立している。

明治11年5月17日付け会四上第二百五号ノ二で有馬海軍中秘史から川村海軍大輔宛てに出された文書に対し、長官名で次のような回答<sup>(15)</sup>なされた。

佐官	石高サ三尺八寸角一尺	臺二段
尉官准士官	石高サ三尺二寸角八尺	臺二段
下官	石高サ二尺六寸角六寸	臺二段
兵卒	石高サ二尺三寸角五寸	臺二段
軍夫	石高サ壹尺五寸角三寸	臺二段



第1図 真田山墓石雛形(陸軍墓)



第2図 海軍墓



第3図 警視墓

第Ⅸ章 考察

墓石棹石の寸法は階級により大きさに差があるが、棹石の大きさは陸軍と同様である。しかし、陸軍との相違点は、陸軍の土台が士官以上の場合が二段となり、下士官以下は一段で造られている。これに対し、海軍の台石はすべて二段で調製されていることにある(第2図)<sup>(16)</sup>。ただし、問い合わせの回答文の中には、三段のものも見られる<sup>(17)</sup>。

次に、内務省の警視局で造られた墓石は、外見に特徴が見られる。陸軍・海軍の墓石の棹石は、頂部を角錐に造るが、警視局の場合は頂部を櫛型(第3図)に造る<sup>(18)</sup>。

なお、警視局所管墓地の第2表「警視局戦死埋葬地建築概算抜萃表」が熊本県の県政資料の中に残されている。ここには、佐官・警部・巡査・軍夫の違いにより、代価に相違が見られることから、階級による墓石の大きさに、違いがあることが分かる。

第2表 「警視局戦死埋葬地建築概算抜萃表」

地名	品 種	品 質	惣 数	代 價	分 数
熊本縣下 八代横手村	佐官石碑	全縣下天草 須本石水磨キ	壹組	貳拾円七拾錢	
全	警部石碑	全	三拾八組	三百五拾七円貳拾錢	一組二付 九円四拾錢
全	巡査石碑	全	貳百拾八組	六百九拾四円九拾貳錢	全 三円拾八錢六厘
全	軍夫石碑	全	拾五組	拾壹円貳拾五錢	全 七拾五錢
全	碑銘薬研彫	大字	千七百九拾二字	九拾四円四拾三錢八厘	一字二付 五錢貳厘七毛
全	全	中字	三千八百五拾四字	九拾貳円三拾四錢一厘	全 貳錢三厘九毛余
全	全	小字	一万二千二百七拾二字	百五拾円九錢四厘	全 一錢二厘三毛
全	全	極小字	五百七拾三字	五円七拾三錢	全 一錢
全	周圍柵矢束	杉赤身小節	長延九拾二間 四合 但表門共	三百四拾五円一錢 三厘	一間二付 三円七拾二錢三厘余
全	全柵下均シ石	全縣下天草 カンヤキ石小 巖キ	全	貳百拾円	全 二円二拾七錢七厘
全	埋葬地所地形 並面リ井手堀		合立坪 三百四拾九坪三合	三百三拾七円二拾錢 一厘	立坪一坪二付 六拾七錢九厘余
全	周圍石垣	全縣下日鐵石	合坪 九拾一坪三合余	五百二拾二円七拾九 錢二厘余	一坪二付 五円七拾三錢七厘余
全	井手回り土 留石垣	雜石割	全 九拾坪一合三夕 余	三才 百貳拾二円	全 一円三拾五錢三厘余
全	柵矢束 ペンキ塗	白ペンキ 三編塗	全 百五十九拾坪五合二夕 余	百拾九円六拾四錢	全 七拾五錢
全	石碑地覆石 内洗砂利		一坪五合	拾八円七拾五錢	敷込人夫費共
全	標柱	檜	大小二本 八寸角 四寸角	六円五拾錢	建附費共
全	花筒	真竹	貳百七拾二個	二円拾一錢六厘	一個二付建附込 七厘七毛余
全	水田子一荷 柄杓二本			六拾錢	
全	墓地門前 井戸	雜石巻上藩屋 形車木鈎瓶繩 回り石場居附一式	一ヶ所	五拾四円三錢	
天草牛深 全 世ノ浦	巡査石碑		一組		全縣下八代ヨリ該所へ 運送建附込 一円四拾三錢
全	全上石碑回り 土留石		長延 一丈二尺		全上 運送並居附込 一円四拾二錢
熊本縣下 立田紅葉山	警部石碑	全縣下島崎 石水磨キ	九組	七拾六円五拾錢	一組二付碑銘薬研彫 彫建附費共 八円五拾錢
全	巡査全	全	六拾貳組	百五十五円	全 貳円拾八錢六厘
全	警部石碑 回り土留石	同嶋岩石 小巖キ	長延 拾間六合	四拾八円七拾錢七厘	一間二付居附込 四円五拾九錢五厘
全	巡査全	全	全 三拾四間五合九夕	五拾五円三拾四錢 四厘	全 壹円六拾錢
全	花筒	真竹	七拾壹個	七拾五錢貳厘	一個二付建附込 壹錢余
熊本縣下多 尾山	警部石碑	全縣下島 崎石水磨キ	壹組	碑銘薬研彫 該所工運送及 建附込十三円	
全	巡査全	全	拾三組	四拾八円拾錢	全上 三円七拾錢
全	警部石碑 回り土留石	全石小巖キ	三間	二拾二円二錢	一間二付該所へ運送並 居附込 七拾三錢四厘
全	巡査全	全	八間三合三夕三才	二拾三円五拾八錢二厘	全 二円八拾三錢
全	花筒	真竹	拾四個	拾六錢八厘	一個二付 一錢二厘

木葉高瀬兩墓所ノ儀ハ總テ多尾山ト同様ニテハ員數等ノ差アルノミ仍而別記セス

また、次の文章は明治12年4月29日付け一等警視補秋月良種から熊本県へ管理の周知のために必要な事柄について不足分の回答を求めたものだ<sup>(19)</sup>。

当局戦死員墓所先般内務省四等属長谷川保敏ヨリ其御縣エ及御引渡置候建築概算表八代横手村墓所地覆石之分不分明之處有之記載不致置候處今般取調別紙及御廻候且ツ御縣下各所之墓碑請負人住所姓名是亦別紙之通及御通知候條御承知有之度此段中進候也

大阪淀屋橋南詰西へ入

大川町川田方滞在

明治十二年四月廿九日 一等警視補秋月良種 印

熊本縣

八等属新渡戸七郎殿

との通知文の後に、次のような請負人等の記載がある。この墓地の造成に係った職人等が知られるものだ。

熊本県下八代横手村墓所周囲石垣請負人

全縣下第十三大手所区八代町六百五拾八番地

石職 永藤茂平

全 千八百二十一番地

全 岩永平次郎

全 千六百二拾七番地

石職 東嶋惣次郎

全石碑回り土留石并周圍柵矢来下均シ石請負人

全縣下八代郡鏡村居住當時天草牟田奇留

石職 山田與一

全周圍柵矢来并表門大工方請負人

全縣下第拾三大手所區八代荒神丁千四百五十一番地

内山好定

全石碑請負人

全縣下第十三大手所区八代横手村千十四番地

遠山茂三郎

全 第十二大区十所区會地村三百五十四番地

和久田源八

全周圍柵矢来ペンキ塗請負人

長崎縣下石灰町

塗師 内田儀平

全縣下紅葉山多尾山木ノ葉高瀬四ヶ所墓所石方總請負人

全縣下第二区九小区嶋寄村四百六番地

石職 久吉静衛

また、第3表「熊本縣下八代墓地概算表之内」が添付されている。

これらの資料から、実際に使用された石材の産地や価格をはじめ、官軍墓地の造成を請け負った業者など、工事内容が窺い知られるものだ。

横手官軍墓地は、西南戦争における警視局最大の墓所で270体が葬られている。実際には、官軍墓地の形態

第Ⅸ章 考察

は、陸軍・海軍は角錐柱、警視隊は櫛型に造られている。なお、陸軍の場合は、真田山軍人墓地に於いては、明治3年から明治7年頃までの墓石は駒型が大半で一部、角錐柱型も混在している。西南戦争時の墓碑についても角錐柱型と櫛型がみられる。九州に於いては、明治7年の佐賀の乱による犠牲者の墓碑は駒型である。明治9年の秋月の乱や神風連の乱の政府軍墓碑は、角錐柱に造られている。

その2 石材

熊本県内の官軍墓地の石材は、現地調査によりある程度把握できるが、内務省所管の警視局で発注した第2表「警視局戦死埋葬地建築概算抜粋表」により、石材産地が特定できる。また、現地調査により、官軍墓地の墓石に使用された石材は、第4表「西南戦争に於ける官軍墓地墓石石材」のとおりである。

九州の場合は、墓石の棹石に使用されたものは、砂岩・阿蘇熔結凝灰岩・火崗岩・安山岩の四種である。この内の砂岩は、天草市栖本町下浦で切り出されたいわゆる「スナイシ」と呼ばれるものだ。当時は、各所に石切り場があり、多くの石工達が従事していた。県内の今日の石工の出身地を辿れば、その多くが下浦出身者で占められるという。また、その地を離れた後も、「天草石工」「下浦石工」「船場石工」などと名乗ったことが知られている<sup>(20)</sup>。

石臼・鳥居・灯籠・石橋をはじめ、墓石などの製造を行うとともに、広く各地で活躍した。また、幕末から明治初期には、下浦から多くの石材が運び出されたが、特に長崎に於いては、多くの天草石工たちが活躍し、都市景観に多大な影響を与えている。

西南戦争後の戦死者の埋葬地設置にも、天草石工の存在は無視できないものであったと思われる。

第3表「熊本縣下八代墓地概算表之内」

八代横手村墓地	警部石碑 回り土留石	天草カンヤ ギ石小殿キ	五拾間	百二十一円七拾錢	一間二付 二円四十三錢四厘
全	逡査全 軍夫	全	二百十五間三合ニタ	二百三十六円八十五錢二厘	一間二付 一円十錢宛
全	佐官石碑 廻り土留石	全石二重積	拾一間	二拾八円十八錢	一間二付 二円五十六錢二厘

第4表 西南戦争に於ける官軍墓地墓石石材

No.	名 称	石 材			No.	名 称	石 材		
		軍人墓石	海軍墓石	警視官墓石			軍人墓石	海軍墓石	警視官墓石
1	寄鶴官軍墓地	滅失			27	城山脇官軍墓地	滅失		
2	明德官軍墓地	島崎石(安山岩)			28	細島官軍墓地	天草砂岩		
3	小峯官軍墓地	滅失		島崎石	29	三田井官軍墓	凝灰岩		
4	七本官軍墓地	天草砂岩			30	台雲寺墓地	未調査		
5	宥明堂官軍墓地	滅失			31	坂元官軍墓地	天草砂岩・凝灰岩		
6	高瀬官軍墓地	天草砂岩		島崎石	32	正覚寺墓地			未調査
7	肥猪町官軍墓地	天草砂岩			33	今町墓地			未調査
8	下岩官軍墓地	天草砂岩			34	真光寺墓地			未調査
9	城ノ原官軍墓地	天草砂岩			35	無量地墓地			未調査
10	月見殿官軍墓地	天草砂岩			36	三福寺墓地			滅失
11	高月官軍墓地	天草砂岩			37	大分県護国神社	花崗岩		
11	宇蘇浦官軍墓地	天草砂岩		島崎石	38	松栄山官軍墓地			花崗岩
13	永尾官軍墓地	滅失			39	佐伯招魂所	花崗岩		花崗岩
14	若宮官軍墓地	天草砂岩			40	佐賀閩海軍墓地		安山岩	
15	横手官軍墓地			天草砂岩	41	鋳物師町官軍墓地	不明		
16	陣内官軍墓地	天草砂岩			42	山川招魂社	凝灰岩・天草砂岩		安山岩
17	峯崎官軍墓地	天草砂岩			43	福岡県殉難警察官之碑			未調査
18	尾の上官軍墓地			天草砂岩	44	佐古招魂社	未調査	未調査	
19	城山上代海軍墓地		島崎石		45	梅ヶ崎招魂社	未調査	未調査	
20	花岡山陸軍埋葬地	未発見			46	真田山軍人墓地	和泉石(砂岩)		
21	田浦官軍墓地	未調査			47	門跡墓地	不明		
22	祇園洲官軍墓地	天草砂岩・ 鹿児島堅石	滅失	滅失	48	引接寺墓地	未発見		
23	城ノ尾墓地			未調査	49	追浜官修墓地	未調査	未調査	未調査
24	野首山墓地			未調査	50	久保山墓地			未調査
25	大平寺墓地			未調査	51	青山霊園			未調査
26	岩川官軍墓地	天草砂岩							

本来、石材は重量があり、運搬の経費を少なくするために、現地や近隣の石切り場で調達することが一般的である。

しかしながら、警視局で発注した資料をみれば一業者が数カ所の埋葬地の墓石建立を行ったことが知られる。また、警視局の場合は、天草砂岩と島崎石の二種類の石材の仕様がみられるものだ。

なお、熊本県内にある陸軍墓地の石材は、天草砂岩が大半であるが、明德官軍墓地が島崎石で造られている。このような状況は、当時の石工の力関係を示すものではなからうか？それは、熊本県外の官軍墓地に於いても言えるもので、鹿児島県の祇園洲官軍墓地、宮崎県日向市の細島官軍墓地、それに宮崎県えびの市の坂元官軍墓地においても、天草砂岩が使用されている事である。先の2件は海岸沿いにあり船で運べるが、坂元官軍墓地においては、内陸部となる。おそらく、石材は川内川を船でさかのぼり、途中から馬車で運搬したものと思われる。このような例としては、熊本県玉名郡南関町の官軍墓地がある。菊池川を船でさかのぼり荷揚げしたものを馬車で運んだとの口碑が残されている。同様な手段をとったものと思われる。なお、南関町には、凝灰岩の石切り場があり、石工集団が存在していたが、南関町の業者ではなく請け負った業者が天草砂岩を利用したことになる。

なお、鹿児島県の祇園洲官軍墓地においては、明治13年に軍夫の墓石二基が紛失したものを新調している。その折の石材は、地元産の鹿児島堅石であった<sup>(21)</sup>。

### その3 墓碑の文字について

墓石に刻まれた文字については、能書家の執筆によるものであるが、特定できる人物として、南画家の竹富清嘯がいる。

昭和3年に書画商の江口半仙により執筆編纂された『清嘯竹富先生逸品集』の略伝のなかに、「当時熊本に第六鎮台が置かれ児玉源太郎、川上操六、乃木稀典等文武両道の俊髦彬々たるものがあつたので、彼も又故緒方治三郎氏の推挙により常に師団長、旅団長、参謀長其他高級将校の官舎に出入し詩書画の相手をしたものである。而して温厚雅順広く信用を得た結果は丁丑之乱平ぐに及び官軍戦死者の墓碑千余基の揮毫を一手に属せられ揮灑累月此の任を終えた時彼として生来始めて多額の報酬を受けたのであつた。」とある。

また、これを受けて、島田美術館館長島田真祐氏は「失意の風景」<sup>(22)</sup>のなかで、「県下数カ所に散在する官軍墓地の中でも特に墓碑数の多い植木町七本、玉東町宇蘇浦、同高月の墓碑群を見た。清嘯伝に、千余基とあるからである。墓碑は碑文と異なり、死者の官職、氏名、戦死場所、出身地を刻字したものである。雲を掴むような話だが、概ね二人による分担執筆とは判別され、後年の書体から類推して、そのうちやや肉太の筆蹟が清嘯のものかと想像される。」と記されている。

この点については、植木町七本、玉東町宇蘇浦、同高月の墓石の文字について、再検証を行ってみた。

島田氏の主張される「やや肉太の筆蹟が清嘯のものかと想像される。」については、宇蘇浦官軍墓地の墓石に、顕著な肉太な書体をみることができた。第4図は肉太の文字、第5図は細字の文字拓本図である。いずれも将校の墓石の拓本図であるが肉太と細字の墓石は隣接している。書体は文字の太さ以外は、ほぼ同様であることに気付かされる。

また、他の墓碑を含めて観察すると、楷書の中に特徴的な異体字が見られる。第6図は「治」「於」「第」の文字である。特に「治」については五画が「止め」でなく「刎ね」ている。「於」は偏を「手偏」のように作るものと「方」に作るものがある。「第」は七画・八画のカ所が長方形に作られるものがある。

さらに、「於」の文字は、一つの墓石に両方の筆法で書かれているものが多く見受けられる。以上のことから、墓碑の文字を書いた人物は同一人物によるものと推測する。肉太と細字の文字の違いについては、石工の違いによるものと見る。石工は、下書きの文字をそのまま彫ると文字が痩せて貧弱に見えることから、経験的にやや広めに彫るものだ。その度合いの違いが、肉太文字と細字の文字の差異を生じたのであろう。さらに、墓石数の多さから多数の石

工が動員されたに相違なく、このことが、文字から受ける印象を微妙に変化させたものであろう。

なお、陸軍から犠牲者の墓碑銘のリストは、将校以下、階級により整理されていたものと推測される。宇蘇浦官軍墓地の場合は、将校の墓石25基を手分けして、別な人物が書くことは考えにくい。

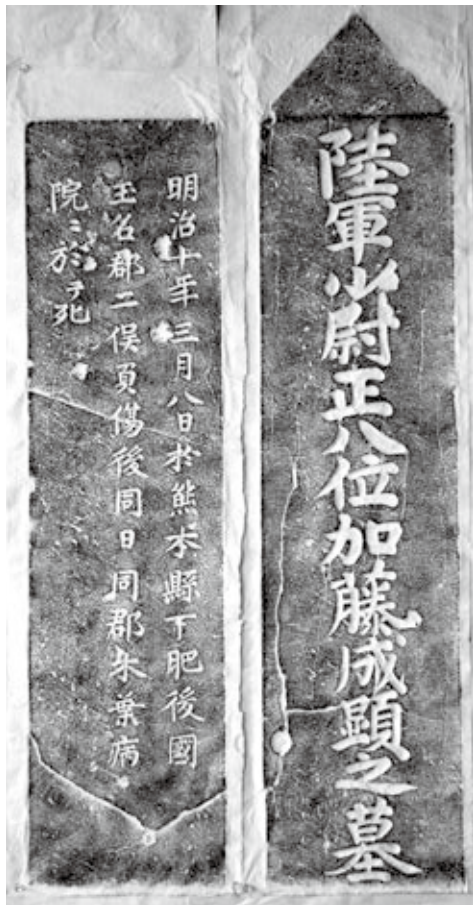
今回、宇蘇浦、高月、七本、明徳の官軍墓地を観察したが、墓石の文字を書いた人物は一人で、それは竹富清嘯その人である。

なお、警視局で造成された墓碑の文字も、陸軍墓碑の文字の特徴が見られることや、建造時期がほぼ同じ明治11年8月であることから、こちらの文字も竹富清嘯とみられる。

さらに、県外官軍墓地の墓石銘も同様な書体であることから清嘯の可能性を窺わせるものだ。

あらためて『清嘯竹富先生逸品集』の略伝をみると「官軍戦死者の墓碑千余基の揮毫を一手に属せられ」とあり、清嘯の活躍が偲ばれよう。

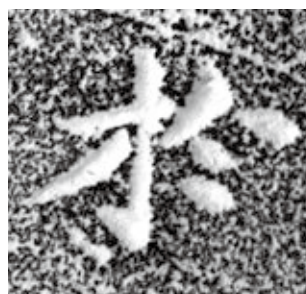
第4図



第5図



第6図



## その4 官軍墓地の建設時期

熊本県内の陸軍の官軍墓地は17カ所、海軍墓地1カ所、警視隊墓地6カ所がある。なお、警視局の墓地は陸軍墓地に併設されたものもあり、全体の西南戦争に於ける官軍墓地は、21カ所となる。

管理を円滑に行うために、県は建設時期を地元の戸長へ問い合わせを行っている。しかし、建設は国で行ったもので地元には資料がなく、永尾官軍墓地のように建設時期の特定調査に苦労をされた様子が綴られている<sup>(23)</sup>。

永尾官軍墓地の建設時期については、明治19年4月19日付けで永尾村□戸長西山雄平より熊本県特九等属上野彦四郎へ提出されたものだ。

「(略)戸長へ乃照会此処墓地設置之節ハ木碑ニテ此処其后石碑ニ建替ニ相成此人共戸長役場へハ何之御達モ無之陸軍ヨリ直ニ建設ニ相成候ニ付無関係之分申出此有建設ノ石工小濱村田代」

ところで、陸軍の場合、すべての墓地が出来上がるまで、およそ1年を要している。このことは、第5表「熊本県内の官軍墓地建設時期」のとおりである。

なお、警視局の墓石竣工の分かるものに、高瀬官軍墓地がある。県政資料によれば、高瀬官軍墓地の竣工は、陸軍の墓石設置が明治11年7月に完成、警視局の墓石は8月に設置されている。若干の時差が見られるのは陸軍の墓石が天草砂岩、警視隊の墓石が島崎石で造られていることから請け負った業者が違っているためであろう。

なお、警視局の墓所は、業者が数カ所を請け負っているが、これは陸軍の墓地でも同様なことが考えられる。

陸軍墓地の場合、大別して三期に分けられる。Ⅰ期は、小峯官軍墓地、明德官軍墓地、寄鶴官軍墓地の3カ所である。Ⅱ期は、高瀬官軍墓地、宥明堂官軍墓地、月見殿官軍墓地、高月官軍墓地、宇蘇浦官軍墓地、七本官軍墓地の6カ所、Ⅲ期としては、若宮官軍墓地、陣内官軍墓地、永尾官軍墓地、肥猪町官軍墓地の4カ所がある。Ⅰ期は、島崎石工が請け負ったもので、石材は島崎石を主体としたものだ。これに対して、Ⅱ期・Ⅲ期は天草石工が請け負ったもので、石材は天草砂石を主体としている。

海軍墓地は、県内に1カ所であり、その石材から島崎石工によるものと推測される。

また、警視局で建立した墓地については、同時に発注されたことが知られているが、天草砂岩で作られた墓石と島

第5表 熊本県内の官軍墓地建設時期

No.	名 称	陸軍墓地	海軍墓地	警視隊墓地
1	寄鶴官軍墓地	明治10年9月建設・同上		
2	明德官軍墓地	明治10年9月建設 石碑建設年 明治11年3月ト口頭ニテ地方ヨリ申出候		
3	小峯官軍墓地	明治10年6月建設		
4	七本官軍墓地	明治11年8月建設		
5	宥明堂官軍墓地	明治11年7月建設		
6	高瀬官軍墓地	明治11年7月建設		明治11年8月建設
7	肥猪町官軍墓地	不明		
8	下岩官軍墓地	明治11年8月建設		
9	城ノ原官軍墓地	明治12年3月建設 但右床地ト改葬ハ明治11年4月ニテ候		
10	月見殿官軍墓地	明治11年8月建設		
11	高月官軍墓地	明治11年8月建設		
12	宇蘇浦官軍墓地	明治11年8月建設		
13	永尾官軍墓地	明治12年1月から 明治12年6月建設落成		
14	若宮官軍墓地	明治11年8月着手 明治12年4月落成		
15	横手官軍墓地			明治11年8月建設
16	陣内官軍墓地	明治12年5月建設		
17	峯崎官軍墓地			明治12年6月建設
18	尾の上官軍墓地			明治11年8月建設
19	城山上代海軍墓地		明治13辰5月建立ト相成	
20	花岡山陸軍埋葬地			明治14年4月27日付 官軍墓地と認定
21	田浦官軍墓地	不明		

崎石で作られた墓石があり、それぞれ別の業者により、建立されたことが知られよう。前者は、横手官軍墓地、尾の上官軍墓地などである。後者は、小峯官軍墓地、七本官軍墓地、宇蘇浦官軍墓地、高瀬官軍墓地の4カ所がある。

### 3 官軍墓地の現状

はじめに、県政資料の「事変西南ノ役」によれば、官軍墓地が建設されて数年後(明治19年頃か?)の姿が、「戦死墓碑」の項目に報告されている。これは、建設当時の塋域の姿とともに、当時の官軍墓地の管理状況等が知られるものだ。<sup>(24)</sup>

山鹿宥明堂墓所 人家近シ

山鹿町北ノ町出口東側畑ニ接シ有リ囲ニ重トモ竹柵ニテ都テ大破草蔓延墓碑一ツ損ス

鍵ハ山鹿町区長ガ預ム

玉名郡岩村 人家前ニアリ

往還ノ傍寺ノ門前ニ有リ外囲ハ木柵ニテ損所ナシ内囲竹柵ニテ大破墓所ノ体裁大ニ宜シ墓碑ノ居置図面相違朱  
○ノ通也草蔓延

同郡肥猪町 人家離シ

同町北壺町斗ノ処往還ノカタワニアリ囲ニ重トモ竹柵ニテ大破墓碑相違朱書ノ通也草蔓延

同郡南関城原 人家遠シ

右乃南ノ関町西裏三町斗ノ処高地ニテ老松ノ下ニテ場所甚佳也墓碑図面相違ナシ囲竹柵ニテ大破

玉名郡高瀬町北屋敷 人家接近

高瀬町西北ノ町裏ニ有リ囲一重竹柵ニテ破損

玉名郡木葉字宇蘇浦 人家遠シ

木葉町北壺町余隔山裾ニアリ段畑ニ而段々サ々崩レ囲竹柵皆破損墓碑図面相違ナシ草蔓  
延警視隊一所

同高月 人家近シ

( 原本確認要 ) 往還ノ傍田中ニ而四方囲竹柵都テ破損墓碑等損シナシ

山本郡轟村字多尾山 人家遠シ

右乃轟村西北三町余ノ山林ノ傍畑ノ下ニ有リ囲一重竹柵破損草蔓延墓碑等損ナシ

飽田郡昭法村之市原 人家遠シ

右鹿子木北八町余路傍壺町斗東側ニ有リ畑中ニテ四方囲竹柵最大破損草源シテ墓碑ヲ弁セス併シ墓碑等ハ損ナシ

高瀬町墓所警視隊ノ中一ツ墓碑窟入口人夫ノ碑一ツ折レ其多損シナシ

この文章から、多くの官軍墓地が草に覆われていること。墓域を囲む矢来は岩村の下岩官軍墓地の木柵以外は竹柵であること。また、その多くは、破損した状態にあることなどが知られる。

現状については、第1表「西南戦争に於ける官軍墓地」として、提示しておく。



## 4 まとめ

本稿では、はじめに西南戦争に於ける官軍墓地が、何処に何カ所造られたのか検証を行った。その結果、これまで知られていない官軍墓地の存在を確認できた。特に、九州圏外の官軍墓地の存在は、真田山軍人墓地を除いて全く認識外であった。さらに、小規模であったためか九州県内の未知の官軍墓地の存在が判明した。今後、継続調査を行い、現状を把握したい。

また、熊本県下の官軍墓地の成立に係った石工や画家など、一部ではあるが特定することができた。

ところで、戦後官軍墓地への国の政策は、戦後思潮の影響もあってか、余りにも粗末な扱いを受けてきたように見える。一方で、国のために倒れた兵士等への哀悼と感謝を込め、善意の管理を行ってきた一部の行政や地元の人々がいる。このような人々により、かろうじて当初の姿を残した官軍墓地は、まことに貴重な存在である。このような人々抜きには、官軍墓地の管理活用は行えないし、今後の展望も開けないであろう。

「指定は、保護の第一歩である」。西南戦争100年を記念して、昭和52年に保存状態の良い官軍墓地を県指定にした先人の慧眼を讃えたい。

### 註

- (1) 明治10年(1877)1月11日 東京警視庁が廃止され、内務省に警視局を設置(太政官布告4号、太政官達15号、内務省達)。
- (2) 防衛省防衛研究所 「戦死者埋葬地当分管理掃除方」明治11年11月30日号外
- (3) 小松忠 「第三章 西南戦争墓碑群がかたるもの」 陸軍墓地がかたる日本の戦争』2006年ミネルヴァ書房
- (4) 防衛省防衛研究所 「明治12年7月22日付けの大分縣令から海軍卿河村純義宛文書」によれば、大分縣豊後国北海部郡関村字須賀埋葬海軍水兵火夫人員表として総計5名を列記している。三等火夫田島常吉が加わることになる。  
なお、明治15年には、新たに2名の自然石による墓石が建立されている。
- (5) 国立公文書館 『太政類典 十三 鹿児島征討始末』
- (6) 熊本県県政資料 7-68
- (7) 国立公文書館 『太政類典 十三 鹿児島征討始末』
- (8) 防衛省防衛研究所 「少将試補渡辺奏助神戸広厳寺埋葬御届」明治10年3月19日
- (9) 防衛省防衛研究所 「戊辰513号 傷者大阪輸中死者埋葬の件」明治10年8月25日
- (10) 防衛省防衛研究所 「埋葬他代価の儀」明治10年6月27日
- (11) 防衛省防衛研究所 「神奈川県下三浦里村埋葬地の件」明治14年1月21日
- (12) 防衛省防衛研究所 「鹿児島より鹿児島城山脇官軍墓地に付意見上申」明治16年8月24日
- (13) 防衛省防衛研究所 「戦死石碑文字の件」明治10年8月2日
- (14) 防衛省防衛研究所 「戊辰396号 戦死者石碑の件」明治10年8月1日
- (15) 防衛省防衛研究所 「埋葬費処分方等之儀ニ付上答」明治11年5月17日
- (16) 熊本県県政資料 7-68
- (17) 熊本県県政資料 7-68
- (18) 宇蘇浦官軍墓地の警視隊の墓石、頂部が和櫛の姿に似ているために、櫛型と呼ばれる。
- (19) 熊本県県政資料 7-68
- (20) 前川清一 「金石文第3節 石を刻んだ人々」2004年『長陽村史』
- (21) 防衛省防衛研究所 「伍第729号 月鹿児島県下鹿児島郡祇園ノ洲旧台場内西南征討之役戦死軍夫墓碑二本紛失ニ付新規建設之義伺」明治13年3月12日
- (22) 『竹富清嘯 遅れてきた南画家』1987年 財団法人島田美術館
- (23)(24) 熊本県県政資料 7-68

### 参考文献

- 『国立歴史民俗博物館研究報告 102号 慰霊と墓』2003  
 小田康徳、横山篤夫、堀田暁生、西川寿勝編著 2006『陸軍墓地がかたる日本の戦争』ミネルヴァ書房  
 水野公寿 2007「西南戦争の戦死者-その埋葬と慰霊-」『近代熊本』No.31  
 宮崎県日向市教育委員会 1996『西南の役 細島官軍墓地-整備事業報告書-』  
 原田敬一 2002「軍用墓地の戦後史-変容と維持をめぐって-」 佛敎大学文学部論集第86号

## 第Ⅸ章 考察

原田敬一 1998『「万骨枯る」空間の形成－陸軍墓地の制度と実態を中心に－』 佛教大学文学部論集第82号

堀田暁生 2009「真田山陸軍墓地についての2,3の問題」『生駒経済論叢』第7巻第1号

高野和人編 1989『西南戦争戦袍日記写真集』 青潮社

鹿児島市教育委員会 1998『祇園之洲砲台跡』

大阪大学文学部日本史研究室編 1998『近世近代の地域と権力』

山川校区郷土研究会編 1999『山川招魂社誌』

宮崎県日向市教育委員会 1996『西南の役 細島官軍墓地－整備報告書－』

## 西南戦争と玉東町 – 戦場・基地・墓地

水野公寿

### 1 田原坂の戦いと玉東町

#### (1) 戦場となった玉東町

##### ① 戦闘の実態

熊本県北部における西南戦争の戦闘は高瀬の戦い(2月25日～27日)に始まり、田原坂の戦い(3月4日～20日)、植木・木留・向坂の戦い(3月21日～4月12日)へと展開した。この間、木葉を中心とする現玉東町域は戦闘地域内にあり、直接戦火にさらされた。その実態を長文であるが、当時の史料「明治十年薩軍ニ関シタル事件取調書」(県政資料所収・熊本県立図書館蔵)によって見ていこう。

ア二俣村、白木村、上白木村、原倉村、西安寺村(7大区4小区)の報告。明治16年10月4日白木村列戸長から玉名郡役所に提出された文書<sup>(1)</sup>。

玉名郡二俣村ニ於テ明治十年賊軍ニ関シタル一切之事件記録 [二俣村]

- 一 二月廿三日午前十一時比山本郡轟村ヨリ隊号不詳賊軍三百名計此地ニ来リ、字森元・萱原・鍛冶場・陣林屋敷ニ於テ午後一時比ヨリ五時間計戦争アリ(官兵ハ木葉、白木村ニアリ)。賊軍手負拾名計有之ト雖モ、賊勝利ニテ木葉高瀬地方之様追撃シテ午後七時比山本郡植木町之様引払フ。但賊軍手負運送ノ為メ強迫シテ此地ヨリ人夫三拾名計支役サレタリ、賃金ナシ。
- 一 前条賊軍戦地ニナリタル処ノ字陣林屋敷、人家拾戸同月廿六日官ノ放火に罹ル。
- 一 二月廿七日比ヨリ此地字峠并上赤尾ニ於テ賊軍陣屋ヲ構ヘ、三月三日迄凡百五十名計滞在ス。同日午後六時比ヨリ凡四時間計戦争アリ(官ハ此地五郎山、塔ノ元ニアリ)。賊軍敗走ス。死傷不詳。翌四日午後六時比賊軍ハ山本郡那知村ノ様退軍ス。
- 一 二月廿七日比玉名郡原倉村字立岩江滞在セル賊軍ヨリ炊出方脅迫シ来ルニ付、米三俵分握飯ニシテ同所へ送ル。代金不請取。
- 一 二月廿八日山本郡木留町ナル賊軍本陣ヨリ米貳拾五俵強迫シ来ルニ付、応シテ同郡那知村水車屋ニ出ス。代金不請取。
- 一 二月廿七日ヨリ三月三日迄賊軍江人夫ヲ出スコト百五拾名計、賃金ナシ。

玉名郡白木村ニ於テ明治十年賊軍ニ関シタル一切之事件記録 [白木村]

- 一 二月廿三日賊軍二俣村字陣林屋敷・鍛冶場ヨリ追撃ノ際、此地字箱井人家(官ノ戦地ナリ)五戸、賊軍ノ放火に罹ル。
- 一 二月廿五日ヨリ同廿七日迄、同郡木葉町賊軍焚出場等江此地ヨリ人夫ヲ出スコト七十五人、賃金ナシ。
- 一 二月廿五日山本郡木留町賊軍本陣ヨリ焚出方強迫シ来ルニ付、白米七斗握飯ニシテ同所江送ル。代金不請取。
- 一 二月廿六日同郡寺田村中ノ塔ニ於テ賊軍敗戦ニテ、熊本隊長谷某兵三拾名斗率テ、此地字栗地原西村源蔵宅江午後一時比立寄り人夫拾名ヲ請求ス。応シテ此地ヨリ飽田郡硯川村迄右同行ニテ玉葉運送ス。賃金ナシ。
- 一 二月廿六日同郡寺田村出陣ノ賊軍敗走ニテ、退軍ノ際此地ヨリ人夫貳名ヲ請求シテ玉葉ヲ荷セ、飽田郡大久保村迄支役サレタリ。賃金ナシ。
- 一 二月廿七日山本郡木留町賊軍本陣ヨリ請求ニ依リ、此地ヨリわらち<sup>草、鞋</sup>四百五拾足同所江送ル。代金不請取。

- 一 三月三日当郡稲佐村并中坂門田村江出陣ノ賊軍大敗走ニテ退軍ノ際、手負玉薬運送ノ為メ、見当り次第此地ヨリ所々江支役サレタル人夫凡三拾人、素<sup>もとよ</sup>り賃金ナシ。

玉名郡上白木村ニ於テ明治十年賊軍ニ関シタル一切之事件記録 [上白木村]

- 一 二月廿七日当郡寺田戦地ヨリ賊軍手負三名ヲ通送シ来テ、人夫ヲ請求スルニ付、応シテ此地ヨリ六人ヲ出シテ山本郡木留町<sup>ママ村</sup>地方江運送ス。賃金ナシ。
- 一 三月一日当郡原倉村字立岩ナル賊軍陣屋ヨリ焚出方脅迫シ来ルニ付、米五俵分握り飯ニシテ同所江送ル。代金不請取。
- 一 同日ヨリ同三日迄一日ニ人夫三拾人<sup>ずつ</sup>完右陣屋近傍台場築トシテ此地ヨリ<sup>ママ、俄</sup>支役サル。賃金ナシ。
- 一 三月三日山本郡木留町<sup>ママ村</sup>賊軍本陣ヨリ米六俵ヲ請求シ来ルニ付、応シテ同所ニ送ル。此夫拾貳人、但米代并夫賃不請取。
- 一 同日原倉村吉次ノ賊兵百五拾名斗此地ニ押出シ、午後四時比字立岩原ニ於テ戦フコト凡一時間、敗走シテ尚吉次江引揚クル。即死七八名アル。
- 一 三月十日比山本郡木留ノ賊三百名計リ此地字小林ニ押出シ、同所ニ於テ二俣村ノ官兵ト戦フコト凡一時間、其中白木村字鬼山江潜伏ノ官兵此地字座主(小林ノ裏手ニアル)江進撃アル、因テ賊軍大ニ敗走シテ右木留<sup>ママ、俄</sup>地方江引揚クル。此時賊兵傷死拾名計リ。但人夫拾貳人ヲ支役サル、賃金ナシ。

明治十年薩軍ニ関シタル事件取調書 [原倉村]

- 一 新二月廿七日ヨリ三月三日迄薩軍隊長姓名不詳式百名計ヲ率テ、玉名郡原倉村字立岩ニ滞在。但玉名郡青野村ヨリ来リ、山本郡木留村ニ去ル。
- 一 同三月四日ヨリ四月一日迄薩軍隊長姓名不詳千五百名計ヲ率テ、玉名郡原倉村字吉次ニ滞在。但飽田郡大多尾村及ヒ山本郡円台寺村ヨリ来リ、山本郡木留村ニ去ル。
- 一 同三月三日ヨリ四日迄玉名郡原倉村字立岩・登立・荒強当・大谷・大谷口・仁平笹・小太・坂下・葉山・尾池・半高ニテ三十三時間程戦争有リ。賊勝利、死傷凡百名計ト云ヘリ。
- 一 同三月十二日原倉村字畑ニテ五時間戦争有リ。賊敗走、死傷五名ト云ヘリ。
- 一 同四月一日原倉村字荒強当・小久保・大谷・半高・尾池・本村ニテ十時間戦争有リ。賊敗走、死傷凡十五名ト云ヘリ。
- 一 其戦ニ兵火ニ罹ル者八拾三戸。但火ハ官ノ放火。
- 一 新二月二十七日ヨリ三月四日迄人夫ヲ賊ニ出スコト凡式百五拾名程、無賃。山本郡木留村迄死傷人運送ス。炊出及ヒ玉薬ハ山本郡木留村本営ヨリ玉名郡原倉村吉次ニ運送ス。

右之通ニ付図面相添此段上申候也。[図面なし]

明治十六年九月三十日

玉名郡原倉村戸長 坂田己太 印

熊本県兵事課御中

明治十年薩軍ニ関シタル事件取調書 [西安寺村]

- 一 新二月廿七日ヨリ三月三日迄薩軍隊長姓名不詳百名計ヲ率テ、玉名郡西安寺村字市ノ迫ニ滞在。但玉名郡青野村ヨリ来リ、山本郡木留村ニ去ル。
- 一 同三月三日玉名郡原倉村字半高ヨリ薩軍隊長姓名不詳百名計ヲ率テ、同郡西安寺村字野中川三十三時間程戦争有リ。賊勝利、死傷凡十名計ト云ヘリ。
- 一 其戦ニ兵火ニ罹ル者壹戸、但火ハ官ノ放火。
- 一 新二月廿七日ヨリ三月十五日迄玉名郡西安寺村字横平山・八立山<sup>ママ、墨</sup>炮壘ヲ築キ薩軍数名番衛ス。

- 一 同四月十七日午前第七時ヨリ午後二時比迄、隊長姓名不詳五百名余ヲ率テ戦争。賊敗軍、戦死四十名ト云ヘリ。但山本郡木留村ヨリ来リ同所ニ去ル。
  - 一 同二月廿七日ヨリ四月十二日迄人夫ヲ賊ニ出スコト凡五十名程、無賃。山本郡木留村迄死傷人運送ス。炊出及ヒ玉葉ハ山本郡木留村営ヨリ玉名郡原倉村吉次ニ運送ス。
- 右之通ニ付図面相添此段上申候也。[図面なし]

明治十六年九月

玉名郡西安寺村戸長 坂田己太 印

熊本県兵事課御中

イ.木葉町、浦田村、上木葉村、山口村、稲佐村(7大区5小区)の報告。明治17年5月14日木葉町列戸長から熊本県兵事課に提出された文書<sup>(2)</sup>。

熊本県玉名郡木葉町外四ヶ村明治十年賊軍ニ関スル一切ノ事件記録

- 一 二月廿三日賊軍隊長知レス、二百有余ノ勢ヲ率テ上木葉村字古閑平字宇ノ木及ヒ同郡二俣村字藤尾林ノ小路ニ其軍ヲ配ス。官軍木葉町字相村字高月字丸田及ヒ上木葉村字部田見字大城寺ヨリ此レト接戦、午後二時ヨリ始リ此際賊軍一隊山鹿ニ向フ者山西ノ鉦声かまびしママキフ聞、山鹿郡広町ヨリ間道山本郡霜野村ヲ経テ玉名郡上木葉村字山伏峠及ヒ中野ノ小路ヨリ浦田村ニ下リ、隊ヲ分チテトナシ其勢二百有余、一ハ上木葉ニ向ヒ、二ハ米山ノ小路ヨリ木葉町字宇蘇山路ニ出テ官兵ノ脇ヨリ襲、官軍其鋭ヲ避ントス。時ニ藤尾林ノ賊八十有余人、抜刀喧声ヲ発シ勇ヲ鼓シテ高月ニ向。此時少尉試補井手利見重疵、退コトヲ不得遂ニ戦死ス。依テ官軍潰レテ高瀬南関ノ二道ニ走ル。午後四時比賊ノ三隊浦田村花園ヨリ山口村両山字前平、稲佐村松ヶ平ノ山路ヨリ進テ官ノ潰兵ヲ追フ。賊利ヲ得テ其夜植木駅ニ帰陣ス。
- 一 二月廿五日賊軍木葉町ニ出兵ス。其兵二百余人ノ炊出ヲ当地ニ設ク。翌廿六日玉名郡玉名村江出兵シ午後六時比木葉ニ帰陣ス。其翌廿七日植木ヨリ出陣之兵ヲ合シ四百有余名ヲ以テ安楽寺村エ出兵シ、戦敗シテ植木エ逃走ス。此日賊ノ負傷八十余名。木葉ヨリ植木町迄無賃ニテ運送ス。官軍追撃ス。山口村ニ壺戸、木葉町ニ一戸ヲ火ク(但シ官軍散火)。
- 一 三月一日賊軍植木ヨリ木葉町ニ出兵ス。隊長知レス、其勢七百有余、大鉦四門ヲ引テ木葉ニ宿陣シ木葉字高塚稲佐村ノ松ヶ平ニ出兵シ、字黒石字宮之下字切畑エ大鉦台場ヲ築ク。
- 一 三月三日午前八時比ヨリ戦ヒ官軍稲佐村字カン崎井手ニ添フテ切畑ノ台場ニ向イ火ヲ稲佐ノ村々放ツテ人家六拾戸火ク。一手ハ北坂門田村ヨリ黒石字宮ノ下ノ台場ニ向、賊稲佐村ノ松ヶ平木葉町ノ高塚ニ在リ。官軍下村ノ奥野ヨリ劇戦、進テ浦田村字面附ニ戦。此日官軍ノ力戦ニヨリ賊ノ諸塁皆潰、大鉦小銃ヲ捨テ敗走シテ植木ニ退ク。戦死負傷数ヲ不知。
- 一 薩賊脅迫ニヨリ二月廿六日ヨリ兵隊出者三人、内一人ハ戦死ス。

右之通ニ御座候也。

明治十七年五月十四日

玉名郡木葉町列戸長 井上平七 印

熊本県兵事課御中

現玉東町全域が戦場となったため、住民は薩軍によって死傷者や玉葉などの運搬に無給で従事させられ、米が徴発された。また政府軍によって家屋が焼かれた。家屋の被害は表(1)のとおりである。原倉村は88戸、稲佐村は60戸が焼失、木葉町では104戸が破毀された。これらは後日被害の程度に応じ救恤金が出された。戦闘で激戦であったのは2月23日と3月3日である。この両日の政府軍戦死者は表(2)のとおりである。2月23日には歩兵第14連隊の第3大隊吉松秀枝少佐も戦死した(玉東町宇蘇浦官軍墓地に埋葬)。

表(1) 明治10年5月 兵難家屋調査

町村	全戸数	家屋の被害				無難戸数	
		破毀戸数	焼失戸数	計	焼毀の率(%)		
7大区 4小区	白木村	127	1	5 (5 薩)	6	4.7	121
	二俣村	147	21	11 (10 官)	32	21.8	115
	上白木村	64	1	-	1	1.6	63
	西安寺村	89	-	1 (1 官)	1	1.1	88
	原倉村	188	21	88 (83 官)	109	58.0	79
7大区 5小区	浦田村	13	-	-	-	-	13
	上木葉村	98	12	-	12	12.2	86
	木葉町	184	104	2 (1 官)	106	57.6	78
	山口村	30	1	3 (1 官)	4	13.3	26
	稲佐村	73	-	60 (60 官)	60	82.2	13

県政資料7-113より作成。焼失戸数欄の( )は県政資料7-62による。( )内は焼失戸数と放火した部隊、官は政府軍の放火、薩は薩軍の放火を示している。

表(2) 政府軍兵士の戦死者数

月 日	部 隊	戦死者数	戦死地
2月23日	熊本鎮台歩兵第14連隊	24	木葉町
3月 3日	東京鎮台歩兵第1連隊	6	吉次越
	大阪鎮台歩兵第8連隊	1	吉次越
	近衛歩兵第1連隊	20	吉次越
	熊本鎮台歩兵第14連隊	6	木葉町
	計	33	

『靖国神社忠魂史 西南の役』青潮社 平成2年復刻版49頁、58～59頁。

表(3) 台場・陣屋・柵の数

村	陣屋(軒)	台場(箇所)	柵(箇所)	文書の題名(提出月日、明治10年)
二俣村	30	10	-	御陣屋并御台場御解放伺(5月11日)
上白木村	-	11	-	御台場御解放伺(5月22日)
西安寺村	-	22	-	御台場御解放伺(5月22日)
原倉村	56	57	15	御陣屋并御台場柵御解放伺(5月23日)

県政資料7-19

②政府軍による陣屋・台場・柵の設営

戦場には陣屋や台場・柵が戦闘に有利な場所に民有地(田畑)や官有地(官山)の区別なく設営された。2月3月の戦闘が一段落すると麦の収穫や田植えの準備の農繁期を迎えることとなる。5月になると各村の用掛・戸長から、それら戦闘用建造物の撤去願(「解放願」)が県宛に提出されている。表(3)は政府軍によって設営された村ごとの陣屋・台場・柵のまとめである。

ア. 陣屋

陣屋は軍隊の陣営、陣所である。表(4)は二俣村と原倉村における陣屋の規模などを示している。二俣村の陣屋の規模は1.5間、2間が19軒(63.3%)ですべて藁葺である。

原倉村では2間と1.5間が8軒及び2間と2間が22軒、計30軒(53.3%)で柴葺(62.4%)が主である。陣屋の面積は3～4坪が主である。

イ. 台場

戦闘の最前線に構築される台場(塹壕)の規模(表(5))をみると上白木村・西安寺村のものは小規模のものが多く、二俣村・原倉村のものは規模が大きいものがみられる。なお、二俣村の「台場御築立用諸品御買上願」

(明治10年3月29日、県政資料7-19)には古閑台場とともに瓜生田台場築立諸品が記録されている。これによって表(5)にない瓜生田台場の存在が知られる。

表(4) 二俣村と原倉村の陣屋

二俣村(30)				原倉村(56)			
規模		軒数		規模		軒数	
1間,2間		4		2間,1間		2	
1.5間,2間		19		2間,1.5間		8	
2間,3間		1		2間,2間		22	
2間,4間		3		3間,1.5間		4	
3間,6間		2		3間,2間		6	
4間,4間		1		4間,2間		8	
				5間,1間		2	
				5間,1.5間		2	
				6間,2間		1	
				6間,3間		1	
陣屋の所在地字名	地種	屋根	軒数	陣屋の所在字名	地種	屋根	軒数
瓜生田字前畑	耕地	藁葺	7	字南	官山	柴葺	11
八久保字栗山	耕地	藁葺	1	字大谷	官山	柴葺	1
八久保字井川	明午開地	藁葺	6	字荒強堂	(不明)	柴葺	9
字横平	官山	藁葺	16	字荒強堂	(不明)	藁葺	1
				字大谷口	官山	柴葺	1
				字半高	官山	藁葺	14
				字半高	官山	柴葺	13
				字清太原	耕地	無葺物	1
				字七ツ松	明午建山	松葉葺	3
				字新屋敷	(不明)	無葺物	1
				字さこ	(不明)	藁葺	1

県政資料7-19。地種欄の(不明)は未記入。

表(5) 台場の規模

	二俣村(10)				上白木村(11)				西安寺村(22)				原倉村(57)			
	字名	土地の種類	幅(間)	長(間)	字名	土地の種類	幅(間)	長(間)	字名	土地の種類	幅(間)	長(間)	字名	土地の種類	幅(間)	長(間)
1	横平	官山	2	250	大石原	畑	2	24	八籠	明午上山	5	4	狐平	畑	3	33
2	横林	畑	5	46	立石原	畑	2.8	17	谷ヶ久保	明午上山	0.7	20	前	畑	7	10
3	古閑	畑	4	25	立石原	畑	2.1	22	一ノ迫	畑	1	7	前	畑	4	17
4	前久保	畑	5	8	立石原	畑	2.1	14.5	横平	官山	1	7	清太原	畑	2	28
5	古閑	畑	4	9	大石原	畑	2	14	八籠	明午上山	1	6	南原	畑	3	17
6	栗山	畑	1	2	大石原	畑	1	1	上ノ原	畑	1	2	七ツ松	明午建山	1	2

県政資料7-19

この史料には幅と長さが示されているが長方形(矩形)を意味しているわけではない。台場の形態について五十川雄也氏は大分県南海部郡宇目町、宮崎県東臼杵郡北川町に分布する台場の踏査に基づいてA類からK類の11種に分類している(『西南戦争の台場(塹壕)跡の分類』『西南戦争之記録』第1号、西南戦争を記録する会、2002年9月刊)。この史料から台場の形態(三日月型、L字状型、コ字状型、馬蹄形型など)までは判明しない。しかし、おおまかな大きさはわかる(表(5)は幅(間)×長さ(間)=坪数を参考にして並べた)。表(5)の1~5は村内で規模が大きい順、6は最小のものである。

二俣村には陣屋・台場のほか、大砲を据えた砲壘が設営されていた。川口武定『從征日記』には次のように記録されている。

○我カ軍ハ三門ノ山砲ヲ二股ニ備ヘ、賊壘或ハ其ノ営舎ヲ射撃ス(3月7日の項)<sup>(3)</sup>

表(6) 原倉村の柵

所在地字名	地種	数(箇所)	幅(間)	長(間)	大きさの順
中道	畑	1	6	14	4
	畑	1	2	6	
	畑	1	2	18	9
	畑	1	2	9	
	畑	1	4	15	6
柴尾	畑	1	4	16	5
	畑	1	4	8	10
牛王ノ元	田	1	3	6	
	田	1	4	13	7
	田	1	4	11	8
	畑	1	2	12	
新屋敷	(未記入)	1	2	12	
	畑	1	4	28	1
牛王ノ元	畑	1	3	30	2
長葉	官山	1	3	30	2

県政資料7-19

表(7) 玉名郡の炊爨場

炊爨場地名	主任	日数	苞数
玉名郡	船隈村	船隈 3月2日～3月6日	31日間 精米1619苞2斗
	井石軍吏試補	玉名 3月7日～4月1日	
同	安楽寺下村	宮地軍吏補 3月3日～4月6日	同1254苞1斗2升2合
同	木葉町	堀軍吏副 3月4日～4月10日	同1288苞1斗6升
同	同	佐竹軍吏 3月16日～4月22日	同1576苞1斗6升
同	堺木村	管野軍吏補 3月21日～4月19日	同1048苞2斗1升7合

『第一旅団糧食炊爨場地名并ニ費消精米通算表』『第一旅団会計官日記抄下』16頁。『征西戦記 附録』所収

○午後予モ亦戦地ニ赴キ、二股村ノ右阜ニ登リ実況ヲ見ル、賊勢極メテ猖獗<sup>しょうけつ</sup>、発砲猛烈ニシテ、我カ兵一歩モ進ム能ハス、唯夕守戦内ニ在リテ対戦セリ、山砲二門ヲ此ノ阜ニ備ヘ時々射撃ス(3月11日ノ項)<sup>(4)</sup>

これらの山砲は田原坂の薩軍陣地を砲撃したものである。本街道の攻撃軍(歩兵13中隊、工兵1分隊)のほか二俣口には歩兵18中隊・工兵2分隊と砲兵1小隊が配置されていた<sup>(5)</sup>。

#### ウ. 柵

柵は敵の侵入を防ぐためのもの(逆茂木)である。この地域では原倉村のみに設営された。柵は平地である畑(10か所)・田(3か所)などに柴2358本(1尺2寸以下1尺廻)で築かれている。

谷干城の「熊本守城戦略 明治十年四月」のなかで、熊本城籠城にあたって「橋梁を撤し柴柵を結び通路を塞ぎ」<sup>(6)</sup>と述べている。このように柴柵を構築することは「通路を塞ぐ」ための一方法であった。

### (2) 兵站基地としての玉東町

高瀬の戦いが政府軍の勝利に終り、薩軍が田原坂に後退すると木葉町は田原坂の戦い(3月4日～20日)、植木・木留・向坂の戦い(3月21日～4月12日)の兵站基地として炊爨場、弾薬貯蔵所、繃帯所、軍夫小屋が置かれた。

#### ① 炊爨場

炊事場である炊爨場が木葉町(醸酒家某ノ家)・境木に設置されたのは3月4日であった<sup>(7)</sup>。同じころ設営された石貫と安楽寺下村とあわせて4か所の炊爨場で田原坂戦以後の食事(兵餉<sup>へいしゅう</sup>)をまかなった(表(7))。

兵士たちの食事について『従征日記』は次のように記述している。



- 凡ソ兵餉ハ精米一合ヲ以テ一団飯(握り飯)ト為シ、中に白梅(梅干)ヲ入レ、或ハ味噌ヲ入ルイハ法トナス、味噌ハ觀望宜カラスト雖モ、反リテ兵隊ハ之ヲ嗜メリト、其ノ団飯二個ヲ合シテ紙ニ包ミ、百口餉ヲ苞ニ入レ、二名ノ軍夫ヲシテ二苞ヲ一担ト為シテ運送セシム(2月28日)<sup>(8)</sup>。
- 兵餉ハ朝食後各自ニ昼餐ヲ携帯セシメ、夕食ハ輜重方ヨリ運輸スヘシ(3月2日)<sup>(9)</sup>。
- 本軍ノ人夫大約千六百名余ナリ、之ニ軍夫ヲ加算スレハ二千三百有余名ナリト雖モ、兵餉ニ至リテハ一万五千口糧ヲ費セリ(軍人ハ夜食ヲ合シテ一日四餉ヲ給ス)(3月4日)<sup>(10)</sup>。
- 我カ糧食分配所ハ二股境木ノ両村ニ設ケ、本道ノ兵ハ境木ヨリ給シ、二股口ノ隊ハ二股ヨリ送ル(3月7日)<sup>(11)</sup>。
- 目今炊爨場ノ耗費ヲ算スルニ左ノ如シ/境木ハ一日二千口糧、木葉ハ二万口糧、下村ハ一万五千口糧、玉名(曩ニ石貫富尾ノ炊爨場ヲ併セテ玉名ニ設ケタリ)ハ二万口糧、合シテ五万六千口糧ナリ。是ノ時ニ方リテ、歩兵三十二中隊ト砲工兵・輜重兵・伝令騎兵・其ノ佗各部ノ官員・軍夫アリ。而シテ軍夫ノ糧ハ其ノ半ヲ過ク(3月8日)<sup>(12)</sup>。
- 兵隊ノ夜餉ハ、時トシテ迂回前進ニ當リテハ、各自携帯セシムルヲ以テ、餅ヲ輕便ト為シ、嘗テ之ヲ南関ニ請求セシト雖モ、日久ウシテ多ク黴腐ヲ生ス。因リテ宮地軍吏補・井石軍吏試補ニ命シテ毎日拾貳石ノ餅ヲ造リテ之ヲ送輸セシム。宮地ハ下村、井石ハ玉名ノ炊爨場ノ主管タリ(3月9日)<sup>(13)</sup>。

炊爨場には炊夫や団飯つくり地域の男女が雇われた。「炊爨場ニ婦女ヲ雇使スルハ大ニ民心ニ協ヒ、今日ニ在リテハ各々其ノ産ニ就クヲ得ルノミナラス、非常ノ賃金ヲ得レハ反リテ該地ノ富贍ヲ助ケリ」<sup>(14)</sup>とされた。炊爨場での仕事は植木・木留・向坂の戦いが終る(4月12日)ころには炊爨場が他に移動し、一時的な稼ぎであった。

## ②弾薬

弾薬は兵士各自が100発を携帯し、予備は軍夫が運送した。「弾薬(スナイトル銃包)ハ箱ニ入レ、五百発(四百五六十発ナルモノアリ)ヲ一箱ヲシ、二箱ヲ一担トシテ軍夫二名之ヲ担フ、又布囊ニ入レ、二百発ヲ一囊トシ、五囊ヲ一担ト為スモノアリ」(2月28日)<sup>(15)</sup>と定められ、20中隊(2500人)に1人100発の予備弾薬(計25万発)を運ぶには500人の軍夫が必要となると計算されている。

弾薬は「歩兵一名毎二百発ヲ各自ニ携帯セシメ、而シテ第一予備ハ各自二百二三十発ノ量ヲ測リ定メ、輜重方ヨリ運輸シ、第二予備ハ十八万発ヲ石貫村ニ備へ、時宜ニ従フテ両軍ニ分輸スヘシ」(3月2日)<sup>(16)</sup>と定められていた。弾薬の「第一予備ハ木葉ニ備へ、其ノ内若干発ヲ急須用ト為シテ、直チニ境木ニ送リテ分配ス、其ノ第二予備ハ石貫ノ旧砲廠ニ置」(3月4日)<sup>(17)</sup>いた。弾薬は「第一予備欠クルトキハ第二予備ニ取り、第二予備欠クルトキハ南関砲廠ヨリ請求シ、毎ニ二三十万発ノ貯蓄ヲ充実」(3月6日)<sup>(18)</sup>していた。

田原坂戦のうち3月3日から13日までで、スナイドル弾薬を最も大量に使用した3月12日は25万3000発(本街道5万発、二俣口20万3000発)であり、10万発以上使用したのは11日間のうち7日に及んでいる(3月13日)<sup>(19)</sup>。このように政府軍は大量の弾薬を運び、貯蔵することが可能であった。

## ③繃帯所

木葉に大繃帯所が設置されたのは3月5日で、翌6日には「各隊合併ノ大繃帯所ヲ木葉ニ設ケ以テ田原二俣の傷者ニ備へ」た<sup>(20)</sup>。7日「昨来田原二俣共ニ劇戦傷者無数、高瀬ニ送致スル者黄昏ヨリ味爽ニ徹ス、総計二百余人」<sup>(21)</sup>。8日「予(川口武定)ハ野田軍吏正ト同ク戦場ニ臨ミ各課ヲ巡視シテ小繃帯所(二俣)ニ造ル、是ノ日死傷頗ル夥ク、其ノ後宇ニ入レハ、十五六ノ死体相枕藉シテ藁席ノ上ニ在リ(中略)、而ルニ讒ニ傷者ヲ繃帯シテ繃帯所ニ送レハ、傷者又至ル。此ノ如ク絡繹絶エス、医官等ヲシテ一喫煙ノ暇無カラシム」<sup>(22)</sup>。10日「予ハ大繃帯所(木葉)ニ詣リ(中略)、三浦軍医正ヲ見テ其ノ状ヲ聞クニ、一日平均シテ死傷百七八十名ニ至ル、其ノ被傷ノ者悉ク充分ニ治療ヲ施スヲ得ス、惟タ出血ヲ止メ銃丸ヲ抜き、或ハ刀創ヲ縫合シ或ハ摧骨ニ副木ヲ施スノ外、復タ他術ヲ用フルニ違ア

ラス、薬物ハ甘硝石精・火酒ノ二品ニ過キスト。倉卒ノ際、理然ル可シト雖モ、亦憫然ナラスヤ」<sup>(23)</sup>。11日「木葉大繙帯所ニ至ルノ死傷百七十六人(死八名)」<sup>(24)</sup>。

これが戦闘の第一線近くにおかれた大小繙帯所の実態であった。これらの負傷者はその程度によって木葉から高瀬(3月8日病舎、同12日病院開設)→久留米(2月28日病院開設)→福岡(2月26日病院開設)へと送られた。3月16日の「軍団病院日記抄」には「○高瀬ノ傷者二百七十名ヲ久留米ニ送ル、高瀬ニ送ル所三百九十七名 ○久留米ノ傷者百六十名ヲ福岡ニ送ル」とある。同20日になると始めて「福岡病院ノ患者二百名ヲ大阪ニ航送」している。

木葉大繙帯所では3月6日以降4月6日までの1ヶ月間で負傷者1781人(内死に至る者115人)、死者(戦死者)1115人を収容した<sup>(25)</sup>。後年の編纂物<sup>(26)</sup>によると、木葉大繙帯所は全期間を通じて負傷者4057人(内死亡者110人、先の統計と死亡者数が減少していて不正確)、病者221人(内死亡者5人)を収容している。病者の内訳は腸壘扶斯9人、脚気3、黴毒9.その他内科病200人である。

木葉大繙帯所はどこに開設されたらうか。この問題を考える前に負傷者の治療にある繙帯所や病舎・病院はどこに開設されたか、他地区の場合をみておこう。

2月26日「軍団病院ハ福岡ノ寺院三箇ヲ以テ病室ニ充ツ」<sup>(27)</sup>と軍団病院は三寺院を病室としていたと記している。第一第二旅団の本営のおかれた南関町では、本営は正勝寺におかれ「炊爨場ハ民舎ニ設ケテ其ノ雑踏市場ノ如シ、繙帯所ハ郊外ノ寺院ニ設ケ、患者百余名之ニ居レリ」(2月27日)<sup>(28)</sup>とある。石貫神社から一町ばかりの繙帯所は「僅ニ一民舎ヲ借りテ繙帯ヲ施術セリ、死者ハ枕藉シ、傷者ハ苦ヲ呼ヒ水ヲ乞フ、酸鼻殊ニ甚シ」(2月27日)<sup>(29)</sup>と、一民舎を繙帯所としている。

3月7日高瀬町には「幸ニ寺院数個アリ、以テ傷者ヲ容ルレトモ皆填溢セリ」<sup>(30)</sup>。同月15日「当時久留米ノ病室二十四皆寺院ヲ以テ之ニ充ツ、地方医ヲ用ルコト七十五人」<sup>(31)</sup>。高瀬・久留米ともに負傷者の治療を寺院でおこなっている。

以上のように、大繙帯所や病院は多くの場合寺院が軍によって指定された。木葉町でも寺院が使われたことは『東京日日新聞』(明治10年3月24日)が次のように報道している。

三月十四日高瀬発 戦報採録 福地源一郎 (前略)五時ごろに二俣の山を降りて木の葉に帰り見れば病院(寺なり)より高瀬に送り出す手負ひハ引きも切らず。<sup>(32)</sup>

この記事にある「病院」は木葉町に設置されたことはなく「病舎」(3月31日設置)もまだ置かれる以前の記事である。このことからこの「病院」は木葉大繙帯所をさしていると考えられる。木葉大繙帯所は3月5日に設置され、翌6日には各隊合併の大繙帯所を設けている<sup>(33)</sup>。木葉大繙帯所は高瀬大繙帯所(3月3日開設。同9日病舎、同12日病院となる)とともに田原坂二俣の戦いに備えて開設された。

西南戦争当時、木葉町には正念寺・徳成寺・世尊寺の三寺院が存在していた<sup>(34)</sup>。正念寺については3月31日「正念寺ニ病舎ヲ開ク」<sup>(35)</sup>と記録されている。これは正念寺が木葉大繙帯所の一つであったからであろう。「病舎」が開設されたのは、大繙帯所の付属として植木・木留・向坂の戦い(3月21日～4月12日)に備えて設置された。また正念寺には戦死者36名が埋葬されていた<sup>(36)</sup>。徳成寺については『田原坂附近戦蹟案内』<sup>(37)</sup>に「(一七)木葉徳成寺の仮繙帯所(木葉三ヶ寺の一)」の見出しで「(前略)寺院内には傷病兵数百名之に居り本堂・位牌堂・書院・玄関・庫裏・鐘楼至る所充滿せざるなし」と説明している。これは徳成寺が繙帯所であったとする伝承が大正期末にあったことを示している。世尊寺が繙帯所として使用されたかどうかは文献・資料などで確認できない。同寺は現在廃寺になっており、廃寺跡(字世尊寺411番)の考古学的調査は未実施であり<sup>(38)</sup>、西南戦争当時の伝承も明らかではない。

以上のことから、木葉大繙帯所として使用されたのは正念寺と徳成寺は間違いないと考えられる。

田原坂の戦いが終って約1ヶ月後、戦闘は球磨郡・芦北郡へと展開していた。そのころ、大阪鎮台後備第五大隊第四中隊が木葉町に駐屯していた。その際、同隊軍曹宇垣友春の依頼によって、木葉町の医師志方半蔵は4月26

日から5月20日までの25日間木葉町坂本喜平太方に仮病院を開設して診察に当たった。同隊が移動する際薬種代5円50銭の支払いをうけたが、未払いである「日当御下渡之儀ニ付伺」が提出されている(県政資料7-5)。それに詳細な診療記録が添付されている。病症を整理したのが表(8)である。

この第4中隊が戦闘の第一線から、はるか後方の木葉町に駐屯していたのは治安上のことや戦闘部隊との交代要員であったためであろう。病症で下痢患者が多いのが特色である。1人平均治療日数は2.5日と比較的短い。これは重傷患者は長崎や久留米の病院に移されているからであろう。

表(8) 木葉町仮病院の診療 4月26日～5月20日

病症	下痢	腹痛	食傷	疝氣 (疝積)	風邪	眼痛	足痛	牙痛	黴瘡	腫疥	癬疥	肩背痛	計
患者数	14	1	3	6	5	5	4	3	1	1	1	1	45人
延治療 日数	41	2	9	12	13	9	9	9	4	2	3	1	114日
1人平均 治療日数	2.9	2	3	2	2.6	1.8	2.2	3	4	2	3	1	2.5日

県政資料7-5。

#### ④軍夫

軍夫は戦闘部隊と行動をともにし、武器・弾薬・食糧・死傷者等を運搬する役夫である。軍夫は軍団や各旅団で管理され、5月19日の「読法」で「軍団ノ役夫タル者ハ一体ニ軍属ト看做シ諸ノ犯罪ハ軍律ヲ以テ処ス」<sup>(39)</sup>と規定された。同法には「三人以上申合せ」を「徒党」とし「徒党ハ軍法ニ於テ嚴禁」としている。軍夫は志願者から選び平夫とし、平夫100名を一隊、二十人長5名、百人長1名、合計106名を一団とした。「軍夫ニ召集スルモノハ百人長以下平夫ニ至ルマテ精密ニ其身許等ヲ糺シ」(3月21日「福岡熊本両県下軍夫召集概則」<sup>(40)</sup>)と厳重な身許調査のうえ採用された。

軍夫は3月上旬山口県福岡県から募集が始まり、戦局の推移に従って熊本県大分県などからも集められた。使役日数は当初5日間としていたが、3月中旬には15～20日間となり、5月には無期限軍夫が出勤している(5月18日「福岡県無期限軍夫一千人至ル」、5月24日「熊本県無期限軍夫四百人福岡軍夫二百人至ル」<sup>(41)</sup>)。7月になると賃金(日給)は切り下げられた(百人長2円50銭→1円、二十人長1円50銭→75銭、平夫75銭→50銭)。軍夫(農民)にとって麦の取入れ・田植え準備・田草取りの農繁期を迎えると軍夫放免願が集団的に提出されるようになり、また集団的脱走もおこなわれるようになった。6月8日には「脱走軍夫ノ処分法」がだされ「軍夫脱走スル者アレハ其名簿ヲ県吏ニ移シテ搜索セシメ捕獲スレハ之ヲ陸軍裁判所ニ交付スヘシ」<sup>(42)</sup>と定められている。これは、このころ脱走が多発していたことを物語っている。

田原坂戦の時期になると大量の軍夫を必要とするようになった。3月10日「福岡県ニ諭達シテ毎日軍夫四百名ヲ木葉町ニ出サシム(使役五日間ニシテ交代セシムルヲ約ス)」、同14日「福岡県民某担任ノ軍夫四百名ヲ木葉ニ送ル」<sup>(43)</sup>。こうして木葉町には軍夫小屋が建ち並んでいた。同19日には「木葉輜重部事務取扱概則」(全27条)が定められた<sup>(44)</sup>。木葉町には輜重部、七本村には出張所がおかれ、軍夫の手配や賃金などすべてを取り仕切った。3月10日現在木葉町におかれた軍関係施設と軍夫数は表(9)のとおりである。これによって、田原坂戦のころ木葉町が兵站の中心的役割を担っていたかが明らかである。

## 2 玉東町の官軍墓地

### (1)官軍墓地<sup>(45)</sup>の設定

高瀬の戦い(2月25日～27日)に続く田原坂の戦い(3月4日～20日)で両軍の戦死者は日に日にふえるばかりであった。「軍団病院日記抄」には3月9日「木葉高瀬両村ニ埋葬地ヲ選定して戦死者ヲ葬ル」<sup>(46)</sup>とある。これが戦死者埋

表(9) 3月10日現在 木葉地方の軍夫配分

町村	課掛	糧食課	病院課	弾薬掛	軍夫計
二俣村		糧食分配所 (20)	小綱帯所 (100)	弾薬掛出張 (30)	150
堺木村		糧食分配所 (10)	-	弾薬掛出張 (20)	30
木葉町		木葉炊爨場 (195)	大綱帯所 (150)	弾薬掛 (200)	545
下村※		下村炊爨場 (100)	-	-	100
玉名村※		玉名炊爨場 (150)	-	-	150

※は現玉名市。( )内は軍夫数、軍夫総数は本営12人、会計本部13人を含めて1000人。  
このほか炊爨場に使役する炊夫及び団飯の男女は糧食課で雇用了。『従征日記 上巻』3月10日の項、117-118頁より作成。

葬地の初出であるが、この日に木葉高瀬両町に埋葬地を選定する方針をしめたもので実際に戦死者埋葬がおこなわれたわけではない。

以下、官軍墓地の具体的な設定過程を川口武定『従征日記』によってみていこう。3月13日の項につぎのようにある。

埋葬地ハ木葉(字高月原)ニ設ケタリ、初メ死者稀少ナルヲ以テ正念寺(上木葉村)境内ニ埋葬セリ、然ルニ逐日増加シ復タ之ヲ葬ルノ地ナキヲ以テ高月原ニ設ク、嗣後死者日ニ一日ヨリモ増加シ屍体積累阜ヲ為シ、通行兵隊ノ旁ヲ經過スル者ヲシテ見セシメハ、恐ラクハ胆ヲ寒シ氣ヲ沮ムノ患アラン、乃チ病院課ニ命シテ竹垣ヲ周囲ニ環ラシ、之ヲ蔽ハシム<sup>(47)</sup>。

これによって戦闘の初期には、正念寺に戦死者を埋葬したことがわかる。その遺体は36名であった<sup>(48)</sup>。正念寺境内に埋葬の余地がなくなると高月原に土地を求めて戦死者埋葬地を設営した(現在の高月官軍墓地)。

3月19日の項では高月埋葬地の改葬案が提起されたが、結局不可となる経過をつぎのように述べている。「川崎副監督ヨリ書ヲ致シテ曰ハク、高月原ノ埋葬地ハ軍人來往ノ路傍ニ在リテ甚タ軍氣ニ関ス、速ニ之ヲ改葬スヘシト。因リテ野田軍吏正ト相議リ、県官ヲ携ヘテ別域ヲ相定セントスルニ、木葉山麓ニ一ノ広圃アリ、地高燥ニシテ遠ク人家ヲ離ルハ以テ、之ニ改葬セント、本営ニ詣リテ之ヲ告ク。将官等以テ不可トナシ、改葬ヲ許サス。予モ亦之ヲ熟思スルニ、現今既ニ高月原ニ葬ル者大略七百有余名、今之ヲ発キ徙サントスル亦易キニ非スト。改葬ノ論遂ニ行ハルハ果サス」<sup>(49)</sup>。こうした高月官軍墓地移転の失敗から、以後官軍墓地設営の場所は兵士の軍紀・士気の関係から主要道路近くではなく「地高燥ニシテ遠ク人家ヲ離ル」ところに設営されるようになった。

3月27日の項には「野田軍吏正ノ通報ニ拠レハ、上木葉村ニ埋葬スル士官下士卒ヲ合シテ千百三拾二名ニ至リ。復タ余地ナキヲ以テ、是ノ日ヨリ曩ニ相定シタル木葉山宇蘇ノ岡ニ埋葬ヲ開クト。嗚呼、死者ノ多キ亦此ニ至ルカ」<sup>(50)</sup>とある。高月埋葬地も埋葬の余地がなくなり、「是ノ日」(3月27日)から新たに「宇蘇ノ岡」(現宇蘇浦官軍墓地)に埋葬するようになった。

犬養毅の「戦地直報」が『郵便報知新聞』に掲載された(明治10年3月27日より104回連載)。その第19回に「○四月二日迄、木ノ葉口官軍戦死埋葬の人員、木葉堂の上に十二人、同高月に千四十八人、同少念寺内に三十六人、同宇蘇に二百十三人、轟村、豊岡村の内に十五人。」<sup>(51)</sup>と報道されている。

5月18日には埋葬者数がつぎのように記録されている。「木葉町字高月原ニ埋葬スル者千三十一名、同字宇蘇岡ニ三百十五名、轟村字多尾山ニ二百十六名、其ノ他上木葉正念寺内ニ三十六名、豊岡村ニ七十名、石貫村ニ二十六名、凡ヘテ我カー二旅団ニテ埋葬スル者合計千六百四十一名ニ至ル」<sup>(52)</sup>。この埋葬者数はまだ流動的な数である。木葉町の高月、宇蘇、正念寺に埋葬されている戦死者の身分は表(10)のとおりである。

表(11)は下士・兵卒・軍夫の姓名未詳者の率である。三か所の平均をみると、姓名未詳者は、下士(15.3%)より兵卒(19.3%)が高い。それに比較すると軍夫(11.8%)は低いが、軍夫は兵士と違い軍属扱いであり、同列に比較するわけにはいかない。軍属である軍夫でも約12%が姓名未詳者なのである。

政府軍戦死者の埋葬にあたってひとつの「苦事」(難問)があった。3月18日の項に「予ハ木葉(高月原)ノ埋葬地ヲ

巡視ス、四元書記等大ニカヲ竭シ、既ニ七百余名ノ死体ヲ埋葬シ、位置極メテ井然タリ、四元等ノ説ヲ聞クニ、埋葬ニ一苦事アリ、官賊ノ弁分明ナラサル者多シ、其ノ衣袴ヲ剥奪シ襯衣ノミナル者アリ、或ハ赤裸ニシテ一衣袴ナキ者アリト<sup>(53)</sup>と記している。「苦事」とは、戦死者の軍服を「剥奪」し襯衣(下着)のみの者や一衣袴(上衣とズボン)なき赤裸の遺体は政府軍薩軍いずれの兵士か見わけがつかないのである。川口武定は四元書記の話を聞き、「惨刻(惨酷・残酷)甚シ」と感想を記しているが、戦死した兵士の軍服を剥奪する者が誰であるのかまでは語っていない。

表(10) 木葉町における政府軍将兵埋葬者

埋葬地	上・長官	士官	姓名記入 姓名未詳	下士	姓名記入 姓名未詳	兵卒	姓名記入 姓名未詳	陸軍 所轄外	姓名記入 姓名未詳	軍夫	姓名記入 姓名未詳	官姓名 未詳	通計	県史跡指定 (墓石数)
玉名郡木葉 字高月		44	43	174	144	753	604	48	43	4	3	8	1031	970
			1		30		149		5		1			
玉名郡木葉 字宇蘇	1	24	24	35	34	225	180	16	15	13	12	1	315	392
					1		45		1		1			
玉名郡上木葉 正念寺地内				6	6	30	29						36	
							1							

- ・「第一旅団所管埋葬人員表」『従軍日記 下巻』456～457頁。 陸軍所轄外は警視隊の戦死者である。
- ・宇蘇埋葬地の長官は吉松秀枝少佐(第14連隊)である。
- ・県史跡指定は昭和52(1977)年10月11日である(西南戦争100年)。『熊本県文化財一覧』(平成16年3月刊行)

表(11) 下士・兵卒・軍夫の姓名未詳者の率

埋葬地	下士 総数	姓名 未詳者数	姓名 未詳率	兵卒 総数	姓名 未詳者数	姓名 未詳率	軍夫 総数	姓名 未詳者数	姓名 未詳率
高 月	174	30	17.2	753	149	19.8	4	1	25.0
宇 蘇	35	1	2.9	225	45	20.0	13	1	6.3
正 念 寺	6	0	0	30	1	3.3	-	-	-
上記三ヶ所 合計、平均	215	31	15.3%	1008	195	19.3%	17	2	11.8%

表(10) より計算して作成。

表(12) 戦死者埋葬地の買上げ

所在地	面積 反畝歩	地主
木葉町字高月 669	畑 8.22	徳永 市太郎
同 所 679	畑 6.18	古財 喜十郎
同 所 680	畑 2.28	同 人
同 所 678	畑 5.22	窪田 嘉久馬
同 所 677	宅地 4.03	同 人
同 所 641 の内	畑 .18	広瀬 金平
同 所 681 の内	畑 .12	古財 伝次
同 所 676	畑 3.26 ※	古財 喜三郎
小計反別	3反2畝29歩	地主6人(8筆)
木葉町字宇蘇浦 91 の内	畑 .06	徳永 卯平
同 所 899 の内	畑 .07	徳永 熊雄
同 所 903 の内	畑 1.212	同 人
同 所 950 の内	畑 .12	同 人
同 所 902 の内	畑 .12	窪田 嘉久馬
同 所 927 の内	畑 .11	徳永 伊久馬
同 所 928 の内	畑 .12	同 人
小計反別	1反4畝12歩	地主4人(7筆)

買上げ年月一※印は明治11年4月、他はすべて同10年3月。  
県政資料7-67より作成。

(2) 埋葬地の買上げ

戦死者埋葬のための土地は、木葉町では明治10年3月と翌11年4月に買収している。「陸軍埋葬地一筆限」による木葉町字高月と字宇蘇浦の分は表(12)のとおりである。

土地(畑)の買上げ価格は畑の地味によって段階があった。1反につき、高月では37円60銭、37円63銭4厘2毛、宇蘇浦では、20円、34円、35円、37円50銭、37円60銭があり、これを基準に買上げ面積分が支払われた。

(3) 政府軍兵士の改葬

戦死した政府軍兵士の遺体は当日ただちに収容された。戦闘状況によって、それが不可能の場合は後日「掃除隊」を編成して遺体の収容にあたった<sup>(54)</sup>。これらの遺体は明治10年3月に買収した高月埋葬地に集められ「屍体積累阜ヲ為シ」(『従征日記上巻』3月13日)とあるように遺体は阜(岡)をなす状態であった。その後順次軍夫により埋葬されていった。

戦場となった村むらには両軍兵士の仮埋葬地が散在していた。これについて原倉村用掛清田彦二は明治11年4月「戦死之者御届」を7大区4小区戸長へ提出、戸長は4月13日付で同届を熊本県権令宛提出している。「戦死之者御届」はつぎのとおりである。

戦死之者御届

一 戦死五拾四名 第七大区四小区 原倉村

内

十二名 賊兵

四十二名 官兵

内

字大谷口官林之内 十九名

字荒強堂官林之内 九名

字立岩官林之内 四名

字小太官林之内 七名

字葉山官林之内 三名

字尾池民林之内 壹名

右者原倉村戦地之ヶ所エ戦死之者仮埋葬仕置候処今般官軍仮埋葬分取調尚御届可申上旨奉敬承候、此節精々取調申候処右之通御座候間此段御届申上候事

明治十一年四月 右村用掛 清田彦二 ㊦<sup>(55)</sup>

このうち政府軍兵士42名の遺体は高月か宇蘇浦の埋葬地に改葬された。木葉町の高月官軍墓地と宇蘇浦官軍墓地は明治11年8月に完成している<sup>(56)</sup>。薩軍戦死者12名については何もふれていない。

漢学者古賀重徳は明治10年5月24日城北戦跡を巡見し『明十騒擾日誌』に記録している。七本の薩軍埋葬地と木葉の政府軍兵士埋葬地についてつぎのように記している。

平野村ヲ通り垂水ヲ経七本ニ出、是亦縦横ニ築キ壘傍所々死骸ヲ埋ム、尺ニ満タス、頭顱骨自出テ悪臭鼻ヲ撲ママ滴ち付立シ難シ(中略)、行程里許、路傍ノ寺ばかり※中官兵ノ墓アリ凡ソ四拾名余、復行数百歩、又官兵ノ墓またゆく※※畔中ニ有リ、土上白砂ヲ盛ル尺余、一一墓標いちいちヲ立凡ソ二千余外圍柵ヲ環ラス、清潔殊ニ甚シ、見望木ノ葉ニ至ル此ニ又墓所アル由ママ滴※※<sup>(57)</sup>

※正念寺、※高月官軍墓地、※宇蘇浦官軍墓地

ここには、悪臭鼻をうちたたくことも難しい薩軍兵士の埋葬地(七本)と清潔著しい政府軍兵士の埋葬地(高月)

とが対比してとらえられている。

### 3 薩軍戦死者の埋葬

#### (1) 薩軍戦死者の仮埋葬

戦闘があった村むらでは、薩軍戦死者は台場(塹壕)に埋められたり、戦死地近くの墓地や入会地・官有地(官林)などに仮埋葬されていた。5月になり熊本県は薩軍戦死者についてつぎの達をだしている。

○5月14日、番外乙第十二号(明治10年)

(前略)賊屍埋葬所ノ内埋瘞<sup>まいえい</sup>浅薄ニテ間ニ屍体相露レ或ハ臭気蒸発ノ箇所モ有之趣ニ付右等ノ箇所ハ来ル二十三日迄ニ修繕相加(略)修繕費之儀ハ箇所限取調受取方可申出(略)<sup>(58)</sup>

○5月15日、番外乙第十五号(明治10年)

今般開戦以来各所ニ於テ戦死之遺屍区戸長及人民ヨリ埋葬取計右費用追々申立候処調査ノ都合候条尚遺漏モ有之候ハ官兵賊徒ヲ論セス早々取調本月中一大区毎ニ有無共可申出旨相達候事

これらは「賊屍埋葬所」の修繕費、両軍戦死者埋葬の費用についての達である。

番外乙第十二号にもとづいて、第七大区四小区の戸長は管内の村むらの分をまとめて「賊徒埋葬人足賃金願」を5月27日権令宛に提出している。村ごとにまとめると表(13)のとおりである。

明治10年10月4日の熊本県布達乙第八十九号で薩軍兵士埋葬地についてつぎの達をだしている。「各戦地賊徒死屍埋葬之儀(略)粗略之埋方ニ而此節ニ至リ死屍ヲ露シ又ハ悪臭ヲ放チ候向モ有之趣ニ相聞甚タ不都合之次第ニ付今般更ニ其地方警察分署エ協議ノ上往々不都合無之様修繕相加ヘ左ノ雛形(略)ノ通墓標相立他ノ人民墓所ト紛レザル様至急取計可申(以下略)」。薩軍兵士の埋葬地に「修繕」を加え墓標(氏名、戦死月日を記す、四五寸角檜杉長四五尺)を建立させ、その費用を請求させている。

表(13) 薩軍兵士埋葬人足賃金

村名	戦死薩軍兵士(名)	埋葬字名と人数	人足数(名)	人足の費用	出典 (県政資料)	
7 大区 4 小区	原倉村	55	荒強堂14、小太7、立岩屋敷2、荒平4、大谷2、半高3、薬山2、大谷口21	30	15円00銭	7-80
	西安寺村	3	横平山2、野中川1	2	1円00銭	
	二俣村	45	横平43、前久保1、古閑1	26	13円00銭	
	上白木村	1	建石原1	1	50銭	
7 大区 5 小区	山口村	3	前平3	4	2円00銭	7-70
	稲佐村	2	山川1、黒石1	4	2円00銭	
	安楽寺村 <sup>※</sup>	2	染山2	5	2円50銭	
	下村 <sup>※</sup>	17	平畑16 唐ノ平1	15 空俵60俵 3 6寸廻竹6本	7円50銭 50銭 1円50銭 12銭	

※印 現在玉名市

人足費用は1人当50銭である。山口村と稲佐村での戦闘は3月3日、安楽寺村・下村(現在ともに玉名市)での戦闘は2月26日である。戦死した薩軍兵士の名前は大部分不詳であるが、安楽寺村の1名と下村の17名は姓名が記されている。

#### (2) 薩軍戦死者の改葬

西郷隆盛が戦死(9月24日)し西南戦争が終結する直前の9月15日鹿児島にコレラが発生した。この日、長崎発の汽船品川丸が鹿児島に着港したが、「船中虎列拉病ニ罹ル者アリテ警視人員ニ伝染ス、仍テ其病者ヲ一時知林島ニ移ス(戦地ニ虎列拉病ヲ発スルハ是ヲ始メス)」<sup>(59)</sup>と、この年の全国的コレラ流行<sup>(60)</sup>の発端が記録されている。

熊本県は死亡したコレラ患者の改葬について明治10年12月4日布達甲第九十九号で「親族ノ情願ニヨリテハ三年ノ星霜ヲ経筋肉脱亡消化シテ全ク白骨ト做ルノ後十分消毒ヲ用ヒ改葬取計不苦段指令ニ付三年以内ハ火葬之外

改葬不相成候」と達した。これによるとコレラによる死亡者は土葬の場合三年間改葬禁止を方針とすることになった。これは内務省へ同の上だされており全国的な方針であった。この達はコレラによる死亡者でも火葬された場合とコレラ以外での死亡者ということが明確な場合は改葬が許可されると読みとれる。

薩軍戦死者の一周忌である明治11年になると1月以降鹿児島県の遺族・親族から戦死者の改葬願が熊本県令宛だされるようになり聞届けられている。しかし5月になると布達甲第七十二号(5月10日)をだし衛生上の理由により「当分差止」の措置をとっている。その達は「死者ノ親戚等ヨリ改葬願出候ニ付聞届来候処追々炎暑ニ向ヒ許多ノ屍骸一時ニ掘揚候ニ付一種ノ悪臭ヲ醸シ之カ為メ病毒伝染等ノ恐れ有之候条右改葬ノ儀当分差止候」としている。明治11年の夏は、熊本県では前年にひき続きコレラが流行した。この達はコレラ予防対策のひとつであろう。

明治12年は西南戦争の戦死者にとっては三回忌であった。この年、遺族の改葬願に対して熊本県は奇第八十七号(3月15日)で「明治十年鹿児島県賊徒戦死ノ墳墓管内所々ニ散在候右遺族ヨリ取寄改葬方今以出願ノ者有之候内鹿児島県庁又ハ掛リ戸長ノ添書ヲ以其郡役所へ直ニ願出候節ハ願意聞届不都合無之様可取計」<sup>(61)</sup>と各郡役所に達している。県では「今以出願」される改葬願に対して「不都合無之様可取計」と指示を与えたのである。

西南戦争戦死者にとって七回忌にあたる明治16年には、鹿児島三州社による大規模な遺骨収集作業が戦場となった鹿児島・宮崎・大分・熊本各県でおこなわれた。熊本県には七人の鹿児島県人が2月中旬から約一か月県北部から八代水俣にかけて遺骨を収集し、海路によって運送した<sup>(62)</sup>。三州社による南九州4県の遺骨収集作業によって「墓碑数749基、2023柱を葬る南洲墓地」<sup>(63)</sup>ができた。しかし、氏名のわからぬ薩軍兵士の遺体は故郷に帰ることなく熊本県下各地に仮埋葬されたまま現在に至っている場合もある。その地域の人びとのなかには慰霊の行事を続ける個人や地域がある。玉東町二俣の字峠には薩軍兵士の墓とされる場所に「薩軍戦死者四十四体仮埋葬地跡」と刻まれた小さな石碑が建てられている。

## 註

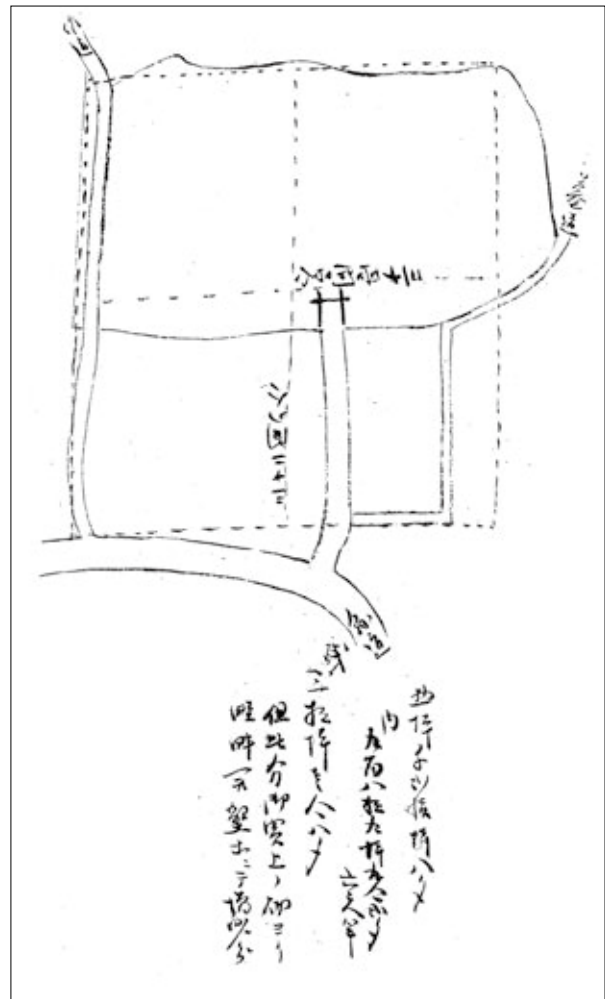
- (1)、(2)県政資料7-62。原文の分ち書きは( )内に活字を小さくしていた。史料は読みやすくするため句読点をつけた。
- (3)陸軍会計二等司契川口武定著『従征日記』、青潮社復刻版『従征日記 上巻』99頁。以下青潮社復刻版から引用。
- (4)『従征日記 上巻』121頁。
- (5)同上 115頁。なお、東京鎮台予砲兵第一大隊『戦闘略記』3月5日の項に、砲兵の「中央分隊ハ二股ノ砲台ヨリ賊壘ヲ射撃ス」とあり、6日・7日も田原坂の薩軍陣地を砲撃している。(『玉東町史 西南戦争編資料編』638頁)
- (6)日本史籍協会編、昭和51年覆刻『谷干城遺稿三』72頁。東京大学出版会。
- (7)「第一第二旅団会計官日記抄上」4頁。『征西戦記稿 附録』所収、青潮社復刻。『従征日記 上巻』88頁。
- (8)従征日記 上巻』63頁。
- (9)同上 76-77頁。
- (10)同上 90頁。
- (11)同上 99頁。
- (12)同上 106頁。
- (13)同上 111頁。
- (14)同上 155頁。
- (15)同上 67頁。
- (16)同上 77頁。
- (17)同上 89頁。
- (18)同上 96頁。
- (19)同上 137頁。
- (20)「病院繙帯所地名表」2頁。「軍団病院日記抄」3頁。『征西戦記稿 附録』所収。青潮社復刻。
- (21)「軍団病院日記抄」3頁。
- (22)『従征日記 上巻』44-45頁。
- (23)同上 118-119頁。甘硝石精(亜硝酸エチルエステル)はアルコールに硝酸を少量滴加したもので、褐色の液体。主効は衝動・鎮痙・利尿・発汗・歯痛など。火酒は焼酎。



- (24)「軍団病院日記抄」4頁。
- (25)同上 7頁。
- (26)陸軍一等軍医西村文雄編『明治十年西南戦役衛生小史』(大正元年刊)、31頁及び35頁。
- (27)「軍団病院日記抄」2頁。
- (28)『従征日記 上巻』44頁。
- (29)同上 51-52頁。
- (30)「軍団病院日記抄」3頁。
- (31)同上 5頁。
- (32)吉川龍子『日赤の創始者 佐野常民』(2001年吉川弘文館)75-76頁から引用。
- (33)「病院繙帯所地名表」2頁、「軍団病院日記抄」3頁。『征西戦記稿 附録』所収。
- (34)田辺哲夫校訂、昭和33年『肥後国玉名郡村誌』玉名民報社。木葉町の項、215頁。「凡例」によると寺社は明治13年7月9日現在の調査である。
- (35)「病院繙帯所地名表」5頁。
- (36)『従征日記 上巻』492頁。政府軍の使役に出夫した五野保萬は『日記』の3月5日の項に「山口県ノ人夫ト当境木ヨリ葉武野ノ寺迄、数度官軍ノ手負ヲカツギ」と記している(『五野保萬日記(第1輯)』29頁。高木誠治校訂、昭和58年刊)。この葉武野は上木葉村の小字で、その寺は正念寺である。記述した3月5日は木葉大繙帯所が開設された日である。
- (37)大正13年6月、帝国在郷軍人会木葉分会発行。
- (38)『玉東町文化財調査報告第3号 (伝)世尊寺跡』(平成7年玉東町教育委員会)は西南戦争当時の世尊寺(字世尊寺411番)と別の世尊寺跡(字世尊寺416番地)の調査報告である。
- (39)『征西戦記稿下』所収、卷六十五、「電汽軍夫」45頁。軍夫全般については水野公寿 1977「西南戦争と民衆-政府軍軍夫について」『熊本史学』50号。猪飼隆明 1994「官軍における軍夫」『玉東町史 西南戦争編資料編』所収。
- (40)同上「電汽軍夫」19頁。
- (41)『征西戦記稿下』卷六十五「電汽軍夫」44頁、45-46頁。
- (42)同上 52頁。
- (43)、(44)同上 8頁。
- (45)原田敬一は「西南戦争の官軍戦没者墓地は、熊本県など九州各地にあり、当初陸軍墓地と呼ばれていたが、その後陸軍省と内務省との話し合いで「官軍墓地」と名称を改め、内務省が管理することになった」と述べている(「陸海軍墓地制度史」、『国立歴史民俗博物館研究報告』102号、2003年、100頁)。通達類では「軍人軍属之遺骸埋葬地」(明治12年1月21日内務省丙一号)、「戦没者埋葬地」(明治12年7月内務省四等属長谷川保敏の指示)、「戦没者遺骸埋葬地」(明治12年10月24日内務省丙第五十二号)とある。これらからみると、「官軍墓地」の名称が公式に使用され始めるのは、埋葬地が陸軍省から内務省へ管轄がえ(明治12年1月21日)と同時ではなく、しばらくのちのことであろう。
- (46)「軍団病院日記抄」4頁。
- (47)『従征日記 上巻』138-139頁。
- (48)同上 492頁。
- (49)同上173-174頁。引用文中の最初に「高月原ノ埋葬地ハ軍人來往ノ路傍ニ在リ」と記述されている。現在の地形からすると県道から高月官軍墓地は見えない。県道が玉東町役場の丘と高月官軍墓地の丘をわけている。この二つの丘が本来続いていてそこを県道が通っていたとすれば、高月官軍墓地は県道の「路傍」であると言える。高月官軍墓地の移転改葬が不可となった段階で県道を掘り下げた可能性がある。
- (50)『従征日記 上巻』240頁。
- (51)『西南役従軍記』78頁。東京木堂会編『西南役従軍記 外数篇』(昭和5年刊)所収。
- (52)『従征日記 上巻』492頁。
- (53)同上 172頁。
- (54)水野公寿 2007「西南戦争の戦死者-その埋葬と慰霊」『近代熊本』31号。
- (55)県政資料7-67。
- (56)県政資料7-63。
- (57)『明十騷擾日誌』、『鹿児島県史料 西南戦争 第三巻』923頁。
- (58)布達は「熊本県布達便覧」(熊本県立図書館蔵)による。
- (59)「軍団病院日記抄」28頁。『征西戦記稿 附録』所収。
- (60)水野公寿 2005「西南戦争期のコレラ」『近代熊本』29号。
- (61)県政資料12-34。
- (62)水野公寿 2007「西南戦争の戦死者-その埋葬と慰霊」『近代熊本』31号。
- (63)『角川日本地名大辞典 鹿児島県』「南洲墓地」の項。



県政資料21-5。宇蘇浦埋葬地、「新設埋葬地届」  
(明治10年10月9日)より。  
官軍埋葬地は地番「九百三ノ内」と記入してある。



県政資料21-5。高月埋葬地、「新設埋葬地御届」  
(明治11年5月30日)より。

# 熊本県における西南戦争遺跡

西住欣一郎・岡本真也

## 1 調査組織について

県内遺跡の調査組織は、遺跡が所在する市町村教育委員会または県教育委員会が単独で調査主体となるのが基本である。

しかし、今回の調査対象とした西南戦争遺跡の中で、政府軍と薩摩軍との戦闘が行われた田原坂周辺地域は、熊本市（調査開始時は合併前で植木町）と玉東町の二つの自治体に跨っている。西南戦争遺跡の調査を有効的に円滑に実施するには、両自治体が連携し、同じ調査方法による調査成果の共有などが必要になった。

そのため、両自治体の首長が中心となり、平成21年8月に「植木町・玉東町西南戦争遺跡群連携保存協議会」が発足した。この連携保存協議会は、調査・保存の連携だけでなく、遺跡を活用する事業も連携を行い、文化庁の国庫補助事業で実施している。調査だけでなく、遺跡活用事業も同時に展開することで、地域住民の方々の遺跡に対する理解が深まり、遺跡の重要性も浸透している。

このように、二つの自治体が連携して、遺跡の調査・保存、活用に取組むのは、県内では最初の事例である。これらの取組は、大きな成果があがっており、先駆的な取組として評価でき、今後の取組の参考になるものである。

また、両自治体には、それぞれ同一の委員による調査検討委員会が設置され、専門的で熱心な調査指導等を受けた。そのことが両自治体の調査水準を高い位置で保ち、統一がとれたものにする事ができた。さらに、この調査検討委員会には、遺跡が存在する地域住民の代表者の方々も参加された。地域住民の代表者の方々が検討委員会の委員として遺跡の調査・保存、活用に関わるのは、県内では初めての試みである。この試みは、地域住民の方々に愛される遺跡となり、理想的な保存・活用を展開するために必要な事柄の一つとして位置づけることができる。

## 2 西南戦争遺跡の定義と分類

### (1) 近代遺跡の調査

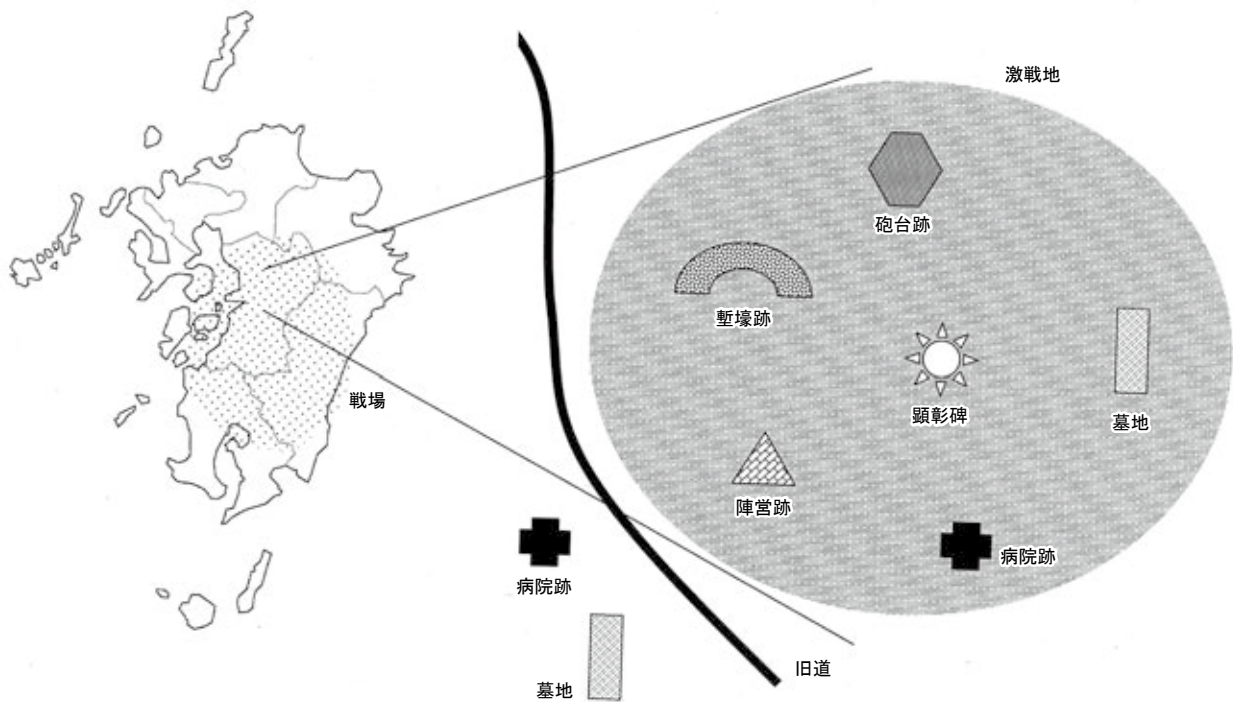
熊本県教育委員会は、市町村教育委員会の協力のもと、幕末から第2次世界大戦時までの間で、近代化に貢献した産業・交通・土木に関係する建造物を対象に「熊本県の近代化遺産」として平成9年・10年に調査を行った。

しかし、近代の遺跡の調査、まして、広範囲に及ぶ戦争遺跡の調査は、今回が初めての取組である。そのため、調査にあたっては、西南戦争遺跡の定義、分類を明確にする必要があった。定義と分類は調査検討委員会の先生方の指導を受けながら、両自治体の教育委員会の担当者、県文化課の関係者で協議を行い、以下のように定めた。

### (2) 西南戦争遺跡の定義

西南戦争遺跡としては、下記の一つないしは複数の要件を満たすものとした。

- ① 塹壕跡などの遺構が現地表面で確認できる。
- ② 小銃弾、薬莖、砲弾等の西南戦争の遺物が認められる。
- ③ 試掘・確認調査で遺構や遺物が確認できる。
- ④ 戦争に関係する繙帯所・病院跡、墓地、記念碑などがある。
- ⑤ 古記録、古写真、古絵図などに記載された戦争関係箇所が現在の場所に同定できる。
- ⑥ 遺構や遺物などについての伝聞や伝承品がある。



第1図 西南戦争遺跡の模式図

### (3) 西南戦争遺跡の分類(第1図)

上記①～⑥の定義に基づいて、実際の遺跡を分類すると、次のようになる。

- ①戦場。戦場は戦いが行われた土地で、県内だけでなく、大分県、宮崎県、鹿児島県に分布している。
- ②激戦地。激戦地は戦場の中にあり、陣地等の戦いに伴う遺構が構築されており、銃弾等が出土する。激戦地を細分すると、塹壕跡、砲台跡、陣営跡などがある。
- ③戦傷者治療遺構。戦傷者治療遺構には病院跡、繃帯所跡などがある。
- ④旧道。旧道は戦争時に政府軍、薩摩軍が通行した道路で、大砲、物資、戦死者、負傷者などを搬送した。
- ⑤墓地。墓地は政府軍、薩摩軍の戦死者を埋葬した場所である。
- ⑥顕彰碑(戦勝記念碑)。顕彰碑は新たな軍事力を担った兵士等を顕彰したものである。

## 3 調査方法

### (1) 基礎調査

西南戦争に係る資料には、戦争時や戦後の記録類、戦場の絵図、古写真などが豊富にある。これらの資料には戦闘に関する具体的な記載があり、遺跡の状況を理解する有効なものである。また、地域の住民の方々への聞き取りは、記録に残されていない現地の状況を詳細に把握することができる。そのため、西南戦争遺跡の調査では、次のような基礎的な調査を実施した。

- ①記録類、戦場の絵図、古写真などの調査
- ②地域に残る伝承等の聞き取り調査
- ③踏査による遺構・遺物の分布調査

## (2) 試掘・確認調査

試掘・確認調査は、上記(1)の①～③の基礎調査成果を踏まえた上で、地面を掘り下げ、遺構・遺物等の確認が必要と判断した箇所について、必要最小限度の調査を行った。

また、小銃弾、砲弾等の金属遺物の検出には金属探知機を使用し、埋没箇所を探した。

## 4 熊本県下の西南戦争遺跡の現状(第2・3図・第1表～第5表)

熊本県における西南戦争遺跡は、県の中南部を中心にほぼ全域にわたって点在する。それらは2で定義された塹壕跡、砲台跡、旧道、陣営跡、病院跡、繻帯所跡、墓地、顕彰碑(戦勝記念碑)などの遺構や小銃弾、薬莖、砲弾等の西南戦争の遺物が散布する土地などを指す。墓地や顕彰碑(戦勝記念碑)は、現在ほぼ特定できているが、その他の遺構や遺物散布地は未発見の場所が多い。陣営跡、病院跡、繻帯所跡は、民家や寺などが利用されることが多いが、特に民家のほとんどが消滅していたり、例えば家屋が残存していても外部や内部が改装され、当時の状況を残しているものは少ない。

しかし、塹壕跡、砲台跡や旧道などは開発が入っていない山間部を中心に多く残存している。現状では特に山都町、球磨郡内、芦北町、水俣市周辺には山の尾根線に多くの塹壕跡が良好な状態で残っており、政府軍と薩摩軍が対峙した様子がわかる配置を残す場所も存在する。中には、小銃弾、薬莖や陶磁器類が採集できる場所もある。塹壕跡は、山の尾根線上のなるべく高い位置から射撃ができる場所を選定して、径4～5mほどの半円形状(馬蹄形)に築かれている場合が多くみられる。しかし、中には円形状や直線的に伸びる形状も見られ、地形に即して戦闘に有効な塹壕を築いたことがわかる。また、旧街道が通る峠の鞍部にも築かれている場合もある。

今後、文献調査や聞き取り調査を基にした陣営跡、病院跡、繻帯所跡の確認、戦場となった地域の山の尾根線を踏査することが、熊本県下における西南戦争遺跡の現状把握につながると考える。

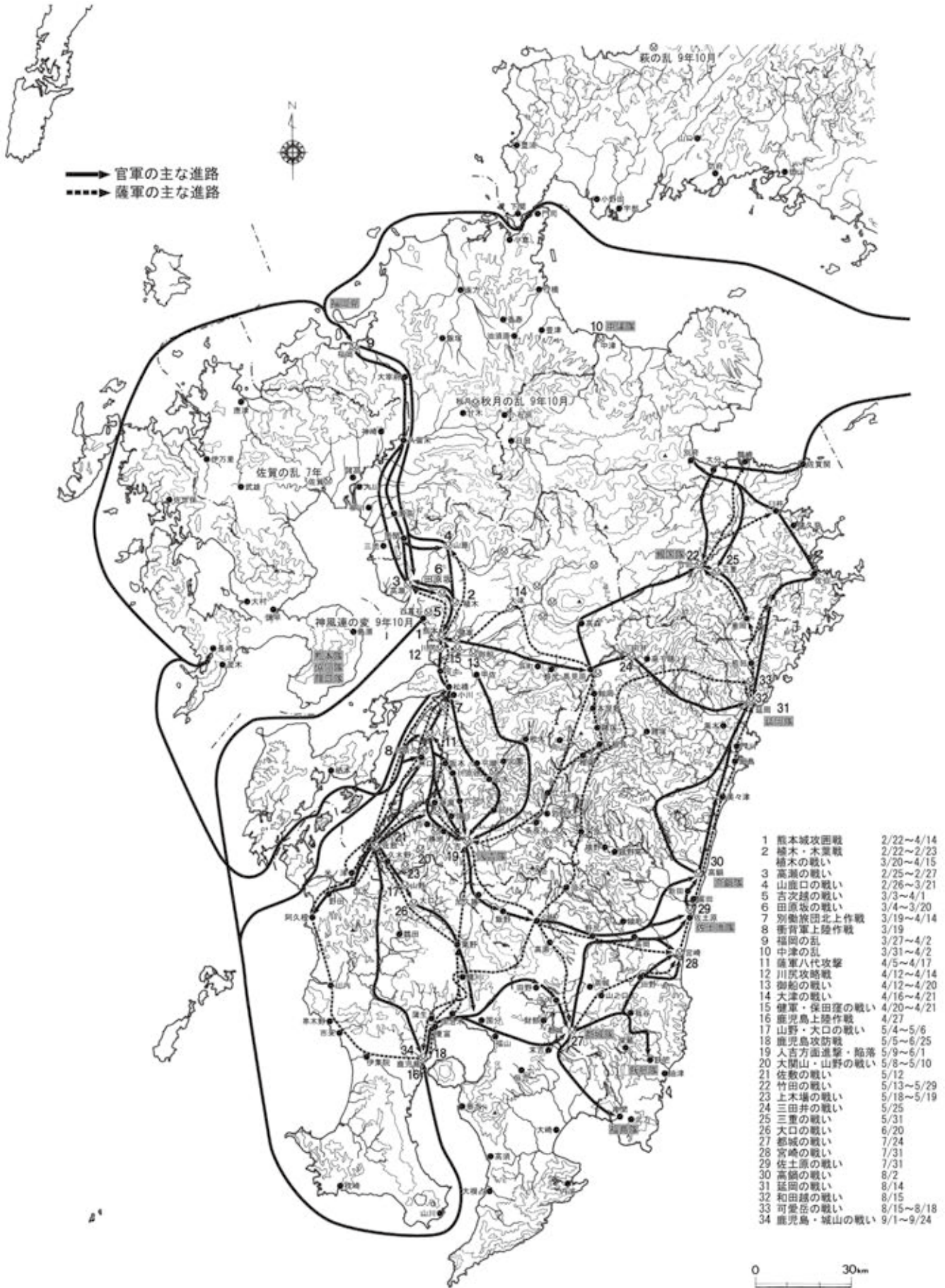
## 5 県内の西南戦争遺跡の課題と今後の取組

今回調査対象とした植木・玉東地区の遺跡は、徴兵制軍隊と士族集団という担い手の異なる軍事力の優劣がどのような形で争われたのかを良く示しており、高い歴史的価値をもっている(鈴木2012)。このような調査成果をあげることができたのは、対象とした遺跡の残存状況が良かったことによる。

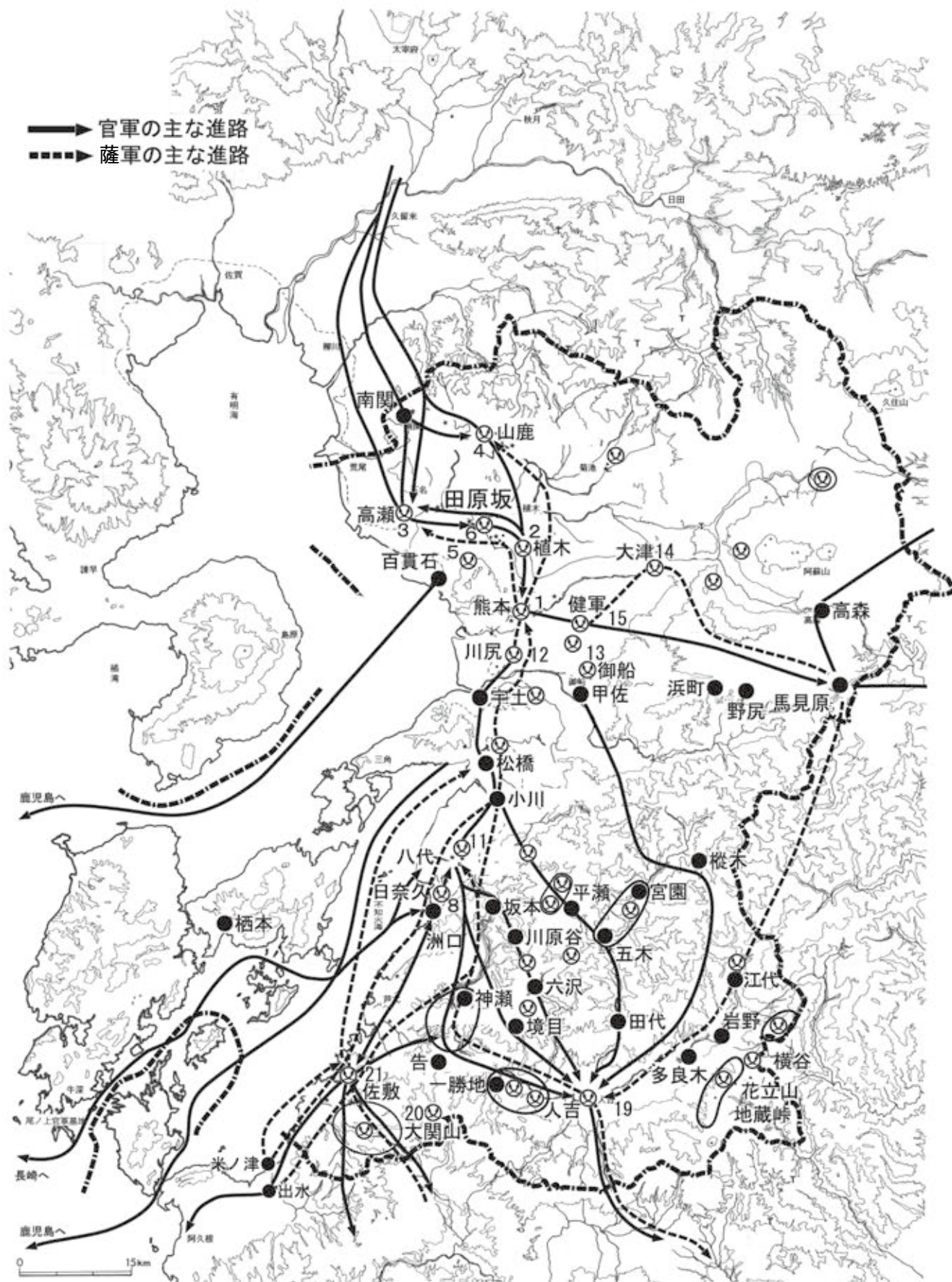
県内には、今回取り上げた遺跡が存在する地域以外にも西南戦争遺跡は存在している。これらは、今回調査した遺跡と同じように残存状況が良好なものばかりではない。これらの遺跡を総合的に保存・活用するには、基礎的な資料を蓄積し、有効な保存・活用方法を検討する必要がある。具体的には、遺跡が存在する市町村教育委員会が調査主体となり、聞き取り調査、分布調査などの基本的な調査を実施することが前提で、確認調査が必要な時には必要最小限度の発掘調査を行い、遺跡の詳細な内容把握を行う。遺跡が広域で、複数の自治体に及ぶ場合には、今回のように連携を図ることが有効的な方法である。この調査過程の中で、文化庁の指導を適宜、市町村教育委員会と県文化課が受けながら進めていくことが必要である。

県内の西南戦争遺跡の詳細な内容把握後、保存・活用することが必要な遺跡は、文化庁の指導を受けながら、市町村教育委員会と県文化課とが伴に、遺跡の内容を検討し、国、県、市町村の段階的な保存・活用を図る措置をとる。このような取組が遺跡が存在する市町村全体に及ぶことになると、西南戦争遺跡の面的な保存・活用が可能になる。

最後になりましたが、第2・3図の作成にあたって中川治氏の全面的な協力を得ました。記して感謝致します。



第2図 西南戦争関連戦地図(1990学研、2012中原を参考に追加・改変)



第3図 熊本県内西南戦争戦地図(1990学研、2012中原を参考に追加・改変) ※番号は図2に対応

第Ⅸ章 考察

第1表 征西戦記稿と薩南血涙史にみる西南戦争の状況(1)

明治10年(1877年)

※番号は第1、2図に準拠

月	日	天気【征】	主な出来事【官軍:征西戦記稿】	主な出来事【薩軍:薩南血涙史】	戦場【征西戦記稿】	番号
2	1		暴徒の、弾薬を奪う群の如し			
2	2		暴徒又海軍造船所の弾薬を奪う			
3						
4						
5			弾薬奪略の電報熊本より西京行所在に至る、山縣陸軍卿戒嚴の命を陸軍省留守官及び熊本鎮台司令長官に下す			
6						
7						
8				飢肥隊一番隊の結成		
9			山縣陸軍卿各鎮台に戒嚴の命を下す			
10			陸軍卿出征の内命を近衛及び東京大阪両鎮台に下す			
11			第14連隊小倉を發す			
12			鹿兒島北塔營兵水俣に至るの報熊本より西京に至る	西郷隆盛、桐野利秋、篠原國幹連署して鹿兒島県令大山綱良に対して公然書を提出		
13			乃木少佐小倉を發す、広島鎮台に命し兵を馬関出さしむ			
14			谷少将と陸軍卿と電報往復、谷少将嬰城守戦の部署を定む			
15		雪下寒甚	熊本鎮台龍城の準備敵にす	未曾有の大雪、一番二番大隊出發		
16			広島鎮台に出兵を命ず、乃木少佐熊本を發す	大雪、三番四番大隊出發		
17				雪、五番大隊、砲隊、西郷隆盛等出發		
18		雨雪敵寒烈風		西郷等は、加治木を發して溝辺に休憩し、横川に至りて一泊す、飢肥隊の参加		
19		天陰寒甚	征討の詔を下し有栖川親王を總督に任す、14連隊の半大隊小倉を發す、熊本城出火	西郷等は、横川を發して栗野に休憩し、吉田に至りて一泊す		
20			綿貫警視熊本城に入る	西郷及び砲隊は、吉田を發し人吉に至りて一泊す、熊本協同隊の結成		
21			熊本鎮台兵川尻を焼かんとして成らず	西郷及び砲隊は、早天人吉を發し舟師球磨川を下りて八代に着し直ちに川尻に向えり、池邊吉十郎を大隊長とする熊本隊の結成		
22			14連隊植木に戦う、熊本鎮台兵賊と戦う	黎明薩軍凡そ五千人、川尻を發して三分道進し等しく熊本城を攻む、植木の初戦	植木	1・2
23			14連隊木葉に戦う、山鹿に入る	龍口隊の結成、木葉の戦	木葉	2
24				山鹿、田原、木留の譜方面に前進		
25			14連隊高瀬に戦う	熊本隊は野田田を發し薩軍は小天を發し行く行く途に相い合し高瀬に向かつて前進せり	高瀬	3
26			14連隊高瀬に戦う、山鹿に戦う		高瀬、山鹿	3・4
27			14連隊高瀬に戦い勝つ、熊本城兵出て賊を撃つ	坪井安政橋の戦	高瀬	3
28			熊本城兵賊と戦う	薩軍花園山より砲撃	熊本	1
3	1		熊本城兵賊と戦う	官軍高瀬街道を進み、木葉の薩軍を撃つ、佐土原隊参加、西郷隆盛川尻病院を巡視	熊本	1
2			熊本城兵賊と戦う	飢肥隊の集合、薩軍花園山より砲撃	熊本	
3		夜雨	熊本城兵賊と戦う、木葉駅を取る、その支軍吉次峠に戦う、山鹿の賊來襲	木葉、吉次越、耳取山、永の原の戦い、篠原國幹、村田新八木留出張本營に在り、安政橋小戦	熊本、木葉、吉次峠	4・5
4		大雨	田原坂及び二俣を攻める、吉次峠に戦い篠原國幹を倒す、山鹿口腹取坂に戦う	篠原身に陰面緋色の外套を被り手に烏金裝飾の大刀を掲げ始終戦線に挺立して自ら率先風勵す、花園山及び段山の防塁より砲撃	熊本、田原坂、吉次峠、二俣	4・5・6
5			二俣田原に戦う、山鹿口鍋田を撃ち車坂及び平山村を取る	田原本道、二俣、城原の戦	熊本、田原坂、二俣	1・4・6
6			二俣田原に戦う、熊本城兵賊と戦う	二俣の戦	熊本、田原坂、二俣	1・6
7			陸軍臨時裁判所を南関に開く、槍垣警視取坂に向かう	「別働狙撃隊」は薩軍の「抜刀隊」に対して結ばれたるもの、	熊本、田原坂、二俣	1・6
8			二俣及び長窪山に戦う	田原の戦、勅使の入鹿と島津父子の上奏	熊本、田原坂、二俣	1・6
9			二俣田原及び五郎山に戦う	田原と横平山の戦	熊本、田原坂、二俣	1・6
10			熊本城兵賊と戦う	西安寺の戦、村田新八が大山少将に書面	熊本	1
11			二俣田原坂横平山立野等に戦う	円台寺山、田原と山鹿の戦	熊本、田原坂、二俣	1・6
12			熊本段山に激戦す	原倉と田原の戦、段山の戦、都城隊参加、西郷隆盛大山綱良へ答書	熊本段山、田原坂、吉次峠、二俣、山鹿	1・5
13			抜刀隊を編成す	田原と横平山那智山の戦、段山の戦	熊本段山、田原坂、二俣	1・6
14			田原口側面に激戦抜刀隊切り込みを行う	田原の戦、黒川二重峠の守備	熊本、田原坂、二俣	1・6
15			横平山最も激戦、山鹿口再び鍋田に進撃す	横平山那智山、田原と山鹿の戦、黒川の戦、薩軍日奈久警戒と赤尾口の戦	熊本、田原坂、横平山、二俣、山鹿	1・4・6
16			田原口二俣口砲撃、槍垣の兵黒川村に小戦す	田原の戦、二重峠黒川の戦い	熊本、田原坂、二俣	1・6
17			田原二俣両口正面攻撃を行う	田原口諸軍の小異動、山鹿の戦、加藤社の戦	熊本、七本、二俣	1・6
18			警視兵二重峠に戦う	田原の戦	熊本、田原坂、二俣、二重峠	1・6
19		夜雨	衝背軍日奈久に戦い八代を取る	薩軍小隊の制を廢して中隊となす、薩軍八代進軍	熊本、日奈久地方	7・8
20		暁雨、夜又暴雨	田原坂を抜き植木を取り向坂に激戦す、衝背軍小川宮原に戦う	薩軍は弾薬の欠乏に代ふるに常に白刃を以ってし戦闘十六昼夜にわたる	熊本、田原坂、二俣、植木、小川、宮原	1・6
21		雨	山鹿の軍山鹿を取る	官軍山鹿に入る、植木の戦い、氷川の戦	熊本、吉次峠、植木、山鹿、鏡	1・4
22			衝背軍南種山早尾に戦い砂川を攻める	薩軍山鹿に向かう、植木の戦い、小川の戦	熊本、植木、宮原、砂川	1
23		雨	正面軍植木木留三岳に激戦す、衝背軍立神山及び宮原口に戦う	植木の戦い、三の嶽と吉次の戦、鳥巢転載、京町口の戦	熊本、木留、植木、宮原、鏡	1・5
24			正面軍滴水轟両道進撃	薩軍植木会議、木留の戦、砂川の戦	熊本、木留、植木	1
25			正面軍植木口ノ賊我哨戦に突入我は木留を攻撃し共に激戦す	植木の戦い、薩軍分かれて二隊となり植木を發して山鹿に向かう、木留の戦、隈府守備、宮原の戦	熊本、木留、二連塔、平野	1
26		雨	正面軍木留口攻撃、衝背軍小川を攻撃す	植木の戦い、山鹿の戦い、薩軍川水の堰止、小川の戦	熊本、木留、植木、小川	1
27			熊本城兵出て賊を撃つ	植木、木留の戦い、京町口と井岸口の戦	熊本、木留、植木	1
28			熊本正面軍の使、城に入る	植木、木留の戦い、吉開の戦、松橋の戦	熊本、木留、久具、豊福	1
29			福岡の暴徒を撃つ	植木、木留の戦い、松橋の戦	熊本、植木、	1
30		大雨寒甚	山鹿の軍鳥栖及び隈府を攻撃す	三の嶽の戦、隈府の戦、娑婆神と松橋の戦	熊本、三嶽、隈府、鳥栖、豊福、久具、娑婆神	1
31			福岡の暴徒を追う、衝背軍松橋を取る	三の嶽の戦、梨木坂守備、猫坂と松橋の戦、薩の背面軍人吉在陣	熊本、松橋、観音平	1

征西戦記稿(明治20年に陸軍参謀本部編纂課から出版された官軍の公式記録)

薩南血涙史(大正元年に元薩軍兵士であった加治木常樹氏によって編纂された書物)



第2表 征西戦記稿と薩南血涙史にみる西南戦争の状況(2)

月	日	天気【征】	主な出来事【官軍：征西戦記稿】	主な出来事【薩軍：薩南血涙史】	戦 場【征西戦記稿】	番 号
4	1		衛背軍宇土堅志田を取る	薩軍の木留応援、半高山と吉次の戦、薩軍八代口援隊、宇土及び木原山の戦	熊本、半高山、宇土、堅志田、大分	1・5
	2	雨甚	正面軍木留を取り部田野を攻める	薩軍の木留応援、南田島の小戦	熊本、木留	1
	3		中津の暴徒肥後に逸す	明午橋出町口の小戦、堅志田と甲佐の戦	熊本、堅志田、甲佐	1
	4		山鹿口の軍北田島の賊を払い南田島に戦う、賊八代地方に衛背軍に襲撃す	薩軍の鳥の巣応援、植木方面は敵望を隔てること数十歩に過ぎず互いに罵詈雑言しその声喧騒甚だし、鳥巣隈隈木坂の戦、坂本占領	熊本、北田島、南田島、備谷、横石	1
	5		山鹿口鳥栖に進撃、賊八代地方に衛背軍と戦う	植木の戦、鳥巣の戦、中津隊の参加、薩軍城中の番使捕縛、深見谷松馬場の戦	熊本、植木、鳥栖、川尻、小川、深見、古麓、横石、宮地谷、植柳	11
	6		正面軍荻迫に激戦	植木木留中央の戦、八代の戦	熊本、木留、荻迫、辺田野、植木、塚塚、備谷、萩原、横手、古麓	1・11
	7		山鹿口古閑上生を取る南田島及び隈府を撃つ	木留の戦、鳥巣の戦、城平突圍の議、木原山の戦、八代球磨川の戦	木留、南田、南田島、隈府、六弥、大渡、木原山、球磨川、古麓、宮地	11
	8	小雨	八代地方の賊人吉に逃げる	木留荻迫の戦、城平突圍軍	熊本、辺田野、荻迫	1
	9	大霧	山鹿口隈府を陥れる、熊本城兵賊と戦う	辺田野の戦、隈府の戦、犬塚の戦	辺田野、滴水、荻迫、木留、隈府近傍	
	10	雨	正面軍休戦、熊本城は甚だ砲撃せず	鳥巣の戦、学寮新地の戦	鳥栖、石川	
	11		熊本城兵賊と戦う	鳥巣の戦	熊本	1
	12		衛背軍八代地方に戦い又御船を陥れ川尻を攻める	鳥巣の戦、薩軍中の瀬偵察、川尻の戦、御船の戦、薩軍再度八代進撃	熊本、木留、石川、庄村、川尻、御船、横石、上宮山	12・13
	13		警視兵販梨を陥れる	薩軍本宮本山転移、南田代の戦、松馬場占領	走潟、古麓、阪梨嶺	
	14		衛背軍八代地方及び隈府に戦う、衛背軍諫早武雄の土族を募る	薩軍川尻応援援発、川尻の戦、宮地と高尾山の戦	川尻口、隈庄、宮地、宮原	11・12
	15		正面の賊皆潰散す	薩軍植木、木留、鳥巣、京町口退却、辛川の戦、飯田山の戦、高尾山と古麓の戦	備谷、古麓	
	16		衛背軍健軍に戦う	大津坂戦の戦、官薩両軍書簡の贈答	大津地方、健軍	14
	17	雨	衛背軍八代地方に戦う、警視兵御船地方に戦う	健軍の戦、薩軍御船占領、備谷と松馬場の戦	御船地方、宮原、古麓	11・13
	18			大津の戦と退却	御船地方	13
	19		第1第2旅団竹迫町に戦う			
	20		御船健軍保田窪大津に大戦す	長嶺保田窪の戦と退却、御船の戦	御船、保田窪、健軍、大津地方	13・14・15
	21		木山地方に戦う	木山川原の戦、薩軍矢部会議と諸隊の編成	木山地方	
	22		第1第2旅団小山御嶺村に陣し熊本鎮台兵は馬水村に陣す	薩軍江代退却		
	23			官軍の鹿児島占領と岩村県令入鹿		
	24	暴雨				
	25	雨	賊軍悉く矢部を去て人吉及び日向に向う			
	26	時々雨	分遣兵鹿児島に入る			
	27	雨				16
	28		川路少将堅志田を發して出水口に向う	薩軍江代会議と進軍の部署決定、奇兵隊結成		
	29		別働第4旅団佐敷を取る	薩軍本宮の告諭と官軍灰塚会議		
	30	夜風雨	三浦少将高森進軍の事を建議す		馬見原地方、菅村	
5	1	雨	別働第2旅団諸隊に命じ漸次人吉に向う	薩軍による川内地方での募兵、行進隊鹿児島進軍		
	2			松尾坂の戦、奇兵隊高野進入		
	3		別働第4旅団佐敷地方に戦う	宮藤橋の戦、薩軍鹿児島進撃の部署	鋒野峠	
	4	雨	熊本鎮台兵馬見原を守る		小川内	
	5	雨	別働第1旅団鹿児島に戦う	薩軍材木進軍、両軍大入口進入、振武隊城山攻撃と行進隊到着	鹿児島	17・18
	6		別働第2旅団人吉攻撃兵を七道に分つ其五木越道の兵開戦	材木の戦、牛尾川の戦、川尻の戦と行進隊の守備	大口、八重之尾山、才木村、鹿児島	17
	7		別働第2旅団種山道の兵開戦	宮藤の戦、石河内の戦	八重之尾山、大島越、鹿児島	18
	8		別働第4旅団球磨川筋に戦う、別働第3旅団大関山に戦う、	神瀬の小戦、黒岩瀬山の戦、薩軍吉田進軍	大関山、伊高瀬	20
	9	晩雨	第3旅団八代に陣す	神瀬、飯瀬の戦、材木の戦と佐敷進軍	佐敷、大河内、球磨川	19
	10		別働第2旅団の兵五木種山両道に戦う	屋敷野、飯瀬の戦、平瀬の戦、山野の戦、三田井占領、奇兵隊竹田進軍	山野、宮園、椿村、屋敷野越	19・20
	11		第3旅団の先鋒水原に向う、別働第3久木野地方に戦う	水保進撃と出水進軍、勇義隊の組織、竹田進軍と本宮会議	深渡瀬、竹野川村	
	12	雨	別働第3深渡瀬に戦う、賊重岡を襲う	椎葉の戦、薩軍重岡と竹田占領	深渡瀬、佐敷、鋒野峠、八原山、棚山	21
	13	雨	別働第4飯瀬に戦う	平瀬の戦、鏡山の戦い、薩軍重岡と竹田占領	飯瀬、深渡瀬	19・22
	14	雨	第1旅団賊を鏡山に撃つ、別働第2球磨川道に戦う	平瀬の戦、深川の対戦と守備、飯瀬の小戦、薩軍重岡と竹田占領	深川、高嶽、飯瀬、馬見原口、鹿児島	18・22
	15	雨	別働第3久木野地方に賊と対撃す	薩軍赤塚源太郎以下降伏、深川の対戦と守備、勇義隊出水進軍	深渡瀬、棚山、飯瀬	19
	16		別働第2旅団黒川大佐をして種山万江球磨川三道の兵を指揮せしむ球磨川道の兵賊を撃つ	一の瀬の戦、深川の戦、薩軍鶴崎襲撃	深渡瀬、飯瀬、鶴崎	19
	17	雨	別働第2旅団種山五木越両道に戦う	深川の戦、官軍福山攻撃	鳳見山、嶽村山、鶴崎、福山	
	18		別働第3中尾山に戦う、巡查700余名東京を發す	猪の嶽、久木野の戦	上木場、中尾山、平瀬、折立、鷹栖山、鹿児島	18・23
	19		第3旅団上木場に戦う	万江方面の戦、雉子山熊本隊の守備	上木場、矢代山、切通、大河内、水無、魚ノ山	19・23
	20		山縣參軍山田三好両少将に八代会議す	一の瀬の戦、軍艦の阿久根砲撃、恵良原の戦と竹田隊来加	札松嶽、松尾原、切通、竹田	22
	21	陰霧	賊赤塚源太郎等降る	水無大河内鹿沢の戦い、横野五家荘の戦、官軍矢筈嶽占領、薩軍奇兵の二中队到着	札松嶽、八原山、日當、尾前、水無	
	22		第3旅団大野村を取る	久木野の戦、岩野の戦、矢筈嶽の戦、勇義軍の大口と鹿児島援軍、竹田の戦	札松嶽、大野村、屋敷野越、鉢巻、竹田、鹿児島	19・22
	23		別働第2旅団球磨川道に戦う	倉谷、高早の戦、大野一の瀬の戦、竹田の戦	上木場、神瀬、竹田	19・22
	24		第3旅団大関山に戦う、別働第2旅団五家荘道五木越道球磨川道に戦う	倉谷高早等の戦、山の神の戦、武、西田、内瀬の戦、男山の戦、竹田の戦	大関山、不土野、赤松平、高沢越、竹田、三田井口、鹿児島	18・22
	25		別働第3矢筈嶽に戦う	江代の戦、大境の戦、男山の戦、竹田の戦	矢筈嶽、竹田、三田井口	22・24
	26		山田少将人吉攻撃の方略を諸道に分つ	官軍人吉総攻撃の準備、矢筈嶽と猪の嶽の戦	矢筈嶽、古河内、竹田	19・22
	27		賊別働第2旅団の佐敷道に出つ	竹田の戦	矢筈嶽、竹田	22
	28		別働第2旅団照嶽道に戦う	薩軍大槻本宮の会議、水無大河内鹿沢の戦、舞床の戦、猪の嶽の戦、勇義軍の大口と鹿児島援軍、神武本宮会議、弾薬製造所を高岡・高嶽、佐土原等に、紙幣製造所を砂土原に設置	照嶽山、竹田	22
	29		別働第2旅団五木越道に戦う	舞床三方塚の戦、椎葉、抜帽子、雨包の戦、人吉本宮の転陣、猪の嶽の戦、華倉の戦、竹田退却	永良川山、八原山、松香山、竹田、鹿児島	18・22
	30		別働第2旅団椎葉山に戦う	白石峠中神の戦、照角の戦、猪の嶽の戦	落山、照嶽、万江越、黒山、五木越、田代、古屋敷、江代、椎葉山	19
	31		第2旅団及び別働第2大に人吉方面に戦う	神瀬口薩軍退却と照嶽山の戦、三重市の戦と臼杵襲撃の議	井口村、瀬戸山、幸野村、中神村、三重市、玉田村	19・25
6	1		別働第2旅団人吉を陥る	大野口に薩軍退却、人吉の戦、臼杵占領	人吉、臼杵	19
	2					
	3		第3旅団大関山に別働第3米津に戦う	大関山、久木野、大境の戦	大関山、米津	

第IX章 考察

第3表 征西戦記稿と薩南血涙史にみる西南戦争の状況(3)

月	日	天気【征】	主な出来事【官軍：征西戦記稿】	主な出来事【薩軍：薩南血涙史】	戦 場【征西戦記稿】	番 号
6	4		別働第2旅団進撃兵を五方面に分つ	人吉隊の降伏と官軍の降人採用、石坂の戦、針原ハハツ峠の戦		
	5	雨	第2旅団入吉口の守備を撤す	白杵の戦	鬼嶽	
	6		別働第2旅団大畑地方に小戦す		鬼嶽、黒辺田野	
	7		第3旅団久木野を取る、賊第4旅団を鹿児島に砲撃す	黒部田の戦、六ヶ所と山野、大口の戦	上原、久久保山、久木野、鹿児島	
	8	雨		白杵の戦	小川内、白杵	
	9	雨	熊本鎮台警視兵白杵に戦う	針原ハハツ峠の戦、地藏峠(多良木町)の戦、白杵の戦	白杵	
	10	夜雨	山田少将肥田国境攻撃の策を決す		白杵	
	11	雨	別働第2旅団大畑地方に戦う	大畑田代の戦、出水の戦と勇義隊鹿児島より川内進軍、三重市進撃	出水、大畑	
	12		別働第2旅団大畑を取り加久藤皆越に戦う	大畑吉田越加久藤越の戦、榎木の戦、三國峠・旗返峠の戦	大畑、皆越口	
	13		別働第2旅団飯野を取り平谷村に戦う	飯野越の戦、野田、桑原の戦、榎木の戦	山野、飯野越、平谷村、重岡地方	
	14		熊台兵警視兵三國旗返に戦う	旗返峠の戦	三國、旗返	18
	15		別働第2旅団横谷に戦う	武村、馬の背の戦い	横谷、鹿児島、三國、旗返	
	16	小雨	第3旅団山野に戦う	羽月と山野の戦、三國峠・旗返峠の戦	山野、三國、旗返	
	17		熊台兵三國峠を取り又白杵口の賊を擧ぐ	羽月と山野の戦、野田・桑原の戦、三國峠・旗返峠の戦	高熊山、阿久根街道、三國、旗返、下直見	
	18	夕雨	第3旅団別働第2高熊山坊主石山青木越に戦う	高熊山の戦、野田の戦と伊藤以下の降伏、赤木・仁田原の戦	高熊山、坊主石山、青木越、阿久根街道	
	19	陰霧夜暴雨	三方塚の賊別働第3に降る		小木原、平泉、牛尾、高熊山、小林、天狗嶽、白杵口	
	20		第3旅団別働第2高熊山を取る	高熊山の戦、阿久根及び宮之城の戦	高熊山、木氏村、大越嶽、阿久根地方	26
	21		別働第2飯野地方及び皆越久米越に戦う	紫尾山方面の戦、阿久根の戦、飯野の戦	皆越、久米越、飯野、観音岳、水引、宮城、陸地峠	
	22		第2旅団川内川に戦う	川内川の戦、吉野の戦、重岡進撃	川内川、白金坂、吉野街道、重富、草牟田、関屋谷	
	23		別働第3旅団向田を取る	川内の戦、飯野の戦、吉野の戦	向田、雀宮	
	24	夜雨	熊台兵大に赤松陸地峠に戦う	飯野の戦、武の岡の戦、大楠の戦、切込谷・赤松・陸地峠の戦	笹之谷、武岡、土圍、紫原、赤松峠、豆殿峠、陸地峠	
	25	大雨	第1旅団延岡口に戦う	出水口官軍の連絡戦、大楠の戦、陸地・不動越の戦	稲葉崎、備馬寮、上之原、草牟田、陸地峠、中村、大楠	
	26	雨球磨川水増五尺		出水口官軍の連絡戦、錢釜峠の戦	鶴丸、中津川、雀宮、鳥越、宮水、大人、白仁田	
	27	雨球磨川水増至一丈	第1旅団延岡道の賊を砲撃す	薩軍坪屋(あさざり町上村)進撃の謀、加治木、蒲生の守備、梓峠の戦	金場村、赤松峠、中村	
	28	晴球磨川水減五尺	第2旅団稲葉崎に砲撃す	薩軍市来退却、振武行進隊の転陣、中村の戦、梓峠の戦	稲葉崎、大人、宮水	
	29		第4旅団別働第3旅団蒲生地方に戦う	涼松の戦、重岡進撃	稲葉崎、蒲生、佐山、祐佐、宮水	
	30		第3旅団曾木湯尾両地方に、第2旅団稲葉崎に戦う	針持と永池の戦、官軍高洲上陸と振武隊の転陣、黒土峠の戦	曾木、湯尾、稲葉崎、北方村、別府川、宮水	
7	1		別働第2旅団皆越口に戦う	針持と横川の戦、坪屋(あさざり町上村)の戦、振武隊末吉進軍と国分敷根の守備、踊退却、西郷隆盛が奇兵隊の功を賞す	粟野横川、高畑山、大野山、志布志、高隈、赤松峠、宮水	
	2		別働第2旅団皆越口に戦う	薩軍水無越の会議	高畑山、大原越、楠原、中村、小崎	
	3		別働第2旅団皆越口を回復す	水無越の戦、花立峠(多良木町)の戦、行進隊十番中隊の降伏と薩軍の退軍、志布志進撃	地蔵(蔵?)越、水ヶ谷、高塚山	
	4		別働第2旅団飯野口及び板屋越に戦う	月野の戦	飯野口、額返山、重岡口、新町	
	5	雨	別働第2旅団飯野口及び板屋越に戦う	二川の戦	板屋越、飯野口、二川、加治木地方、陸地峠、菅原、	
	6	雨	別働第1視野及び及び市成地方に戦う	振武隊恒吉進軍と国分の戦、大窪の戦	視野、市成、重岡口、菅原	
	7	雨	第2旅団真幸口に戦う	振武隊恒吉進軍と国分の戦、水ヶ谷・錢釜の戦	真幸口、踊口、襲山	
	8		第3旅団踊地方に戦う	百引と市成の戦、大窪の戦	踊口桶松、百引、市成、仮谷東、平原、国分、萬田村	
	9		第3旅団別働第3霧島山本原村等に戦う		霧島山、本原村	
	10	雨	第2旅団別働第2飯野地方に戦う	飯野、小林、白鳥の戦、須木の薩軍退却、薩軍兵制改革	飯野	
	11		第2旅団別働第2小川内に入る	大崎と荒佐野の戦、永迫、上之段の戦、官軍黒澤進撃と三川内の戦	荒佐、大崎、清水郷、敷根	
	12		別働第2村所に戦う	煤原の戦、薩軍再び大崎進撃、赤坂の戦、上の段と福山原の戦、三川内の戦	今町、鋒山、八重、大崎地方、赤坂、黒沢口	
	13		別働第3旅団財部方面に戦う		荒磯嶽、三川内	
	14		第2旅団高原に、別働第2野尻に戦う	龍の越の戦、薩軍嘉例川進撃と戦	高原、野尻、荒磯嶽、宮水口	
	15	雨	警視兵梅木村に戦う	龍の越の戦、薩軍嘉例川進撃と戦	小川村、福山原、梅木村、宮水口	
	16	雨	山縣参軍園分に至る	波当津の戦と陸地峠の戦	泉師原、陸地峠、額返、古江口、三河内	
	17	雨	警視兵三川内に戦う	荒磯の戦、高原の戦、水ヶ谷の戦	霞権現嶽、猪小石越、大峯村、正部谷、三川内	
	18	雨午後暗	別働第2旅団野尻口に戦う	野尻の戦、米良口の戦	野尻、田口村、小川村、於藤山	
	19	雨	第1旅団延岡道両道に戦う	薩軍高野退却と岩川進軍、野尻の戦	霧島山、山城山、鹿川口、大楠口	
	20		別働第2旅団須本地方に戦う	薩軍岩川進撃の準備と戦、梓峠の戦	立野山	
	21		第2旅団高崎口に進む、熊台兵黒土峠に戦う	高原の戦、野尻の戦、本城と天包の戦	霧島社山、野尻、立野山、山城山、黒土峠	
	22		別働第2旅団天ヶ谷及び小川口に戦う	七時の戦、薩軍高野退却と岩川進軍、薩軍岩川進撃の準備と戦、官軍都城進撃、野尻の戦	立野山、天ヶ谷、小川口	
	23		熊台兵赤松峠城之腰に戦う	七時の戦と薩軍の退却、岩川進撃の準備と戦、天包の戦	鍋村、笠木、赤松峠、城之腰	
	24	午後雨		財部、庄内、通山、末吉の戦	庄内、末吉、通山、財部	27
	25	雨	第3旅団高城を取る	薩軍三俣、山之口退却	高木村、山之口、三俣	
	26			学の木守備と戦	陣尾村、秋山村	
	27		熊台兵板戸山城之腰に戦う	学の木守備と戦	東八重越、月出原、板戸山、城之腰、金山	
	28		別働第2旅団綾方面に戦い綾に入る又一越野尻に戦う	清武、時雨の戦、紙屋及び綾の戦	紙屋、漆野、一之瀬、陣之尾、越野尾、大窪	
	29		第2旅団高岡を取る	宮崎軍務所と本營、越野尾の戦	高岡、森永、越野尾	
	30		別働第2旅団杉之本に戦う		杉之本	
	31		第3旅団宮崎を取る	宮崎の戦、星山の戦	佐土原口、宮崎、佐土原、倉岡川、千本杉、鹿川峠	28・29
8	1		第3新撰旅団佐土原に、第2第4両旅団一瀬川に戦う	両軍徳北川対峙、官軍堂前野峠回復	一瀬川、佐土原、堂前野峠	
	2		熊本鎮台警視兵黒澤口に戦う	祇園渡・佐土原・一の瀬の戦、歌糸の戦	一瀬川、高鍋、黒澤口、釣鐘峠、山伏峠	30
	3		新撰旅団都濃に戦う	両軍美々津の対戦、歌糸の戦	都濃	
	4	午後大雨	別働第2旅団渡川を取る	両軍美々津の対戦、歌糸の戦	上渡川、美々津、萩峠、中川、星山	
	5		別働第2旅団神門に戦う	両軍美々津の対戦	鎌谷峠	
	6	時々大雨耳川漲	第4旅団美々津より砲撃	西郷隆盛が各隊長に対して告諭書を出す「一歩たりとも進んで斃れ尽し後世に醜辱を残さざる様」、矢河内の戦	美々津	

第4表 征西戦記稿と薩南血涙史にみる西南戦争の状況(4)

月	日	天気【征】	主な出来事【官軍：征西戦記稿】	主な出来事【薩軍：薩南血涙史】	戦 場【征西戦記稿】	番 号
8	7	大雨	別働第2旅団山陰を取り富高新町に入る	山陰の戦	山陰、福瀬	
	8	大雨	別働第2旅団富高新町に、第2旅団塩見川に戦う		富高新町、塩見川	
	9	大雨	美々津前岸ノ賊逃れ緒軍富高新町に連絡す	門川、延岡薩軍の形勢		
	10	雨	第1旅団延岡口に戦う	門川、延岡薩軍の形勢、椎畑の戦	星山、大楠、七山	
	11		細島に運輸局を設く、第1旅団延岡口に戦う		菅原、杉樹峠	
	12		山縣参軍富高新町に転営す	官軍延岡攻撃	神前、小原山、門川	
	13	雨	別働第2旅団小黒木道に、第1旅団延岡道諸所に、第2旅団中之峯峠に、第4旅団門川に戦う	三輪口、延岡の戦	中之峯峠、山口原、門川、杉樹峠、桐郷山、高野山、大山口、椿谷	
	14		第4旅団午後無鹿山に戦う	三輪口・延岡の戦、椎畑の戦	中洲川、山田村、三須村、延岡	31
	15		豊後口の兵(熊本兵別働第1及び警視兵)瀬口村に入る	和田峠・無鹿の戦	無鹿山、和田越、遠見村、小梓越、堂ヶ坂、長尾山、小畑山、六首山、可愛嶽	32・33
	16		第2旅団島越峠長井山に、豊後口の兵長井村に、第4旅団川島に戦う	薩軍長井村の去就	川島、可愛嶽、長井村	33
	17		豊後口の兵長井山柚木山兵野村に、第4旅団無鹿川の北に、新撰旅団長井村に戦う	薩軍可愛嶽の突圍	須佐山、長井山、柚木山、兵野村	33
	18		第1第2旅団可愛嶽に戦う賊逃して嶽を下る		柚木山、可愛嶽	33
	19		第1旅団可愛嶽の西北に戦う	鹿川の戦	宮ノ谷、百段谷、下村	
	20	雨	第1旅団祝子川地方に脱賊を要撃す	薩軍三田井進軍	神楽山、猪内	
	21		第1旅団兵の若干三田井に戦う	薩軍三田井進入	三田井	
	22		別働第1の兵熊本地方に向く	薩軍三田井進発	三田井地方	
	23		熊本鎮台兵所勢を馬見原に張り脱賊を阻む	薩軍七つ山進入	七山	
	24	大雨	別働第2旅団鬼神野に戦う	神門の戦	鬼神野	
	25	大風雨		眼鏡の戦		
	26	大風雨	第2旅団細島に滞駐す	薩軍村所進入		
	27			薩軍榎本(多良木町)進入		
	28		第2旅団鹿児島湾に入り又転して重富に上陸す	薩軍小林進入		
	29		第2旅団牙宮を加治木に置く	薩軍馬開田進入		
	30		第2旅団横川跡に戦う	横川・蒲生の戦	横川、踊	
	31		新撰旅団蒲生郷に、第2旅団溝辺地方に戦う		三縄村、山田村、上宗池村、蒲生	
9	1		第2旅団鹿児島島に入る、第2旅団帯迫に、新撰旅団警視兵及び海軍兵鹿児島島に戦う	薩軍鹿児島進軍、吉野学校・鹿児島島の戦	吉野街道、新照院越、私学校近傍、野上橋、米倉	34
	2		別働第1鹿児島島に入り武橋に戦う、別働第2郡本湾に戦う	薩軍城山籠城	米倉、清水村、武橋、郡本湾	34
	3		第2旅団鹿児島島の北方諸所に、新撰旅団桂山に、別働第2城山の北角に、別働第1多賀山に戦う	薩軍城山籠城	小立山、桂山、浄光明寺山、戸越山、城山、多賀山、伊敷地方	34
	4		別働第1警視隊新撰旅団別働第2米倉に戦い貴島清を殺す	米倉の戦	米倉	34
	5	午後雨	三浦少将加治木より鹿児島島に入る	両軍の兵備と形勢		
	6		第3旅団大門口に戦う、警視隊明神山に戦う		大門口、明神山、私学校、常盤村	34
	7		新撰旅団賊営に放火す		県庁、私学校、岩崎谷	34
	8	朝驟雨	山縣参軍第4旅団鹿児島島に入る、新撰旅団城山外に戦う、第2旅団岩崎谷を火く	西郷隆盛は九月六日より十日まで野村某宅後の土窟のあり	米倉	34
	9		第3旅団高見馬場に進む、新撰旅団稲荷堂と対戦し夜又戦う	十日より十三日迄馬乗馬場の鹿柴に米粟の俵を積み上に杉葉を葺き雨露をしのぎつつあり	中福良、高見馬場、米倉、私学校、岩崎谷	34
	10	雨	第2旅団賊將小倉啓助を虜す		私学校、城山	34
	11	雨午後晴				
	12				城山	34
	13				城山	34
	14					
	15				城山	34
	16				岩崎谷	34
	17		新撰旅団二之丸に戦う		私学校	34
	18	雨				
	19	雨	第2旅団浄光明寺山に戦う	西郷は十三日より十九日迄再び野村宅後の土窟に在り十九日新たに一洞を掘りて之に居る	浄光明寺山	34
	20		諸旅団城山を攻撃す		城山	34
	21		大山少将令して城山を砲撃す	軍使と西郷隆盛の教書	城山	34
	22		夜賊使至る	各隊に対して「・・・一層奮発し後世に恥辱を残さざる様此時と明らめ此城を柱として決戦致さざるべき儼肝要之事に候也」		
	23	雨		軍使の帰城と決死の決議		
	24		城山を陥る	山上の流弾西郷の肩より股を貫く、西郷、別府を顧みて曰く「晋殿、晋殿最早此處にて可ならんと」・・・西郷に向かつて曰く「我罪を怒せよ」と、乃ち起て其首を斬り・・・、城山陥落	城山	34
	25					
	26					
	27		総督鹿児島島に入り軍団諸旅団の編成を解く			

引用・参考文献

鹿児島県 1979「西南戦争第二巻」『鹿児島県史料』

加治木常樹 1982『薩南血涙史』青潮社

参謀本部陸軍部 1982『征西戦記稿』青潮社

学習研究社 1990『西南戦争【最強薩摩軍団崩壊の軌跡】 歴史群像シリーズ21』

中原幹彦 2011『田原坂 西南戦争遺跡・田原坂第1次調査』熊本市の文化財第5集 熊本市教育委員会

中原幹彦 2012『田原坂Ⅱ 西南戦争遺跡・田原坂第2次調査』熊本市の文化財第15集 熊本市教育委員会

鈴木淳 2012「近代国家の成立と西南戦争」『玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書』玉東町教育委員会



田原坂を望む



七本の柿木台場

出典：『西南戦争古写真アルバム』財団法人 熊本城顕彰会 平成19年9月21日 監修：鈴木 喬 著者：富田紘一

## 第X章 総括

### 第1節 はじめに

西南戦争は明治10(1877)年に勃発した不平士族の反乱である。鹿児島県を出発した反政府軍である薩軍は陸路東京を目指し、途中熊本城包囲戦を展開する。しかし、主力は北上し官軍の歩兵第十四連隊と緒戦を交え、玉名高瀬の戦いに駆けつけた政府軍(官軍)に阻まれることとなる。薩軍は田原坂を中心に東は山鹿方面、西は河内に至る強固な防衛線をはった。そこで激戦地となったのが玉東町と熊本市北区植木町一帯である。

玉東町が戦禍に遭ったのは2月23日の木葉における戦い、そして3月3日から4月1日までの田原坂や半高山・吉次峠をめぐる戦いの間である。玉東町の北に位置する木葉の町には官軍の兵站が置かれ軍事基地となり、町の東に位置する二俣や南に位置する半高山・吉次峠は、各所に台場(砲台)や陣屋が築かれ戦場と化した。水野公寿(273頁)によると現在の木葉地区(7大区5小区)は約6割、現在の山北地区(7大区4小区)においては8割強の家屋が戦火によって焼かれたという。3月20日に田原坂が陥落することで、薩軍は後退し、前線は県南へと移っていった。しかし、その後も町では荒らされた田畑や家屋の整理、戦死者の埋葬等戦後処理が待っており、地域にとっての被害は甚大なものであった。

一方、明治政府は国家予算の大半を注ぎながらも反乱を沈静化したことで、江戸時代幕末より続いていた国内の不安定な情勢を治め、日本は近代国家としての体制を整えていく。このような意味で、西南戦争は日本という国の方向性を定めた事件だったと言っても過言ではないだろう。

平成21年度から平成23年度にかけて、これら西南戦争遺跡に関連する玉東町における遺跡の範囲確認調査及び文献調査を行った。また、並行して出土遺物の整理作業を行った。まとめとして、調査の成果及び今後の課題について述べる。

### 第2節 調査の成果

#### (1) 二俣官軍砲台跡の調査

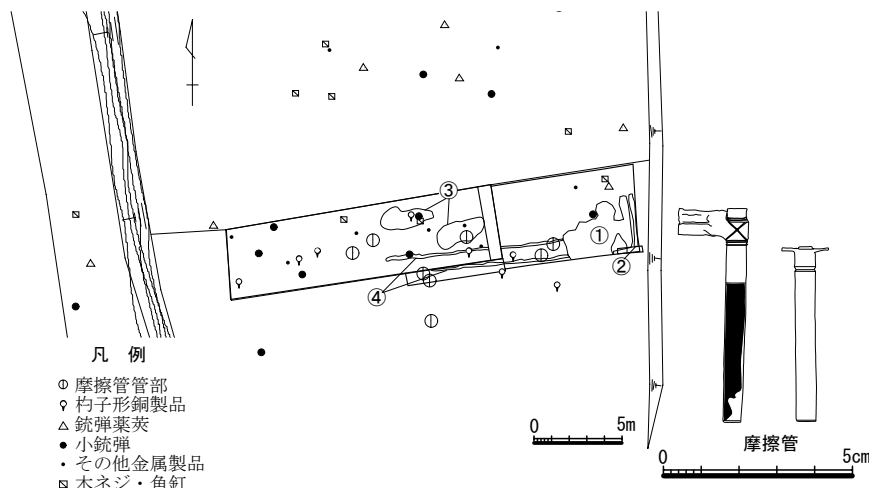
二俣官軍砲台は、田原坂に布陣する薩軍攻撃の為に玉東町二俣台地に築かれた官軍の砲台である。3月4日から3月20日まで田原坂方面攻撃の拠点となった。

二俣台地は田原坂を有する植木台地と平行して南北方向に伸びる丘陵地であり、船底と呼ばれる低地を間に挟む。標高約100mであり、田原坂(三の坂)との距離は800m程である。二俣砲台として、伝承では三つの砲台が築かれたといわれる。その内、砲台の北側に位置し左翼をなす瓜生田官軍砲台跡では、大砲を設置したと思われる遺構と共に大砲発射に使用される摩擦管等の関連遺物が確認された。また、南側に位置し右翼をなす古閑官軍砲台跡でも関係遺物を確認することができた。

#### 二俣瓜生田官軍砲台跡の調査

瓜生田官軍砲台跡では金属探知機による探査の結果15点の摩擦管が出土し、その集中区において砲台跡と思われる遺構を検出した。遺構は現地表面より20cm程下位で確認された。①4m四方の蝶形の硬化面、②硬化面に接する幅40cm深さ50cm程度の溝、③約300cm×130cmの楕円形の土坑2基よりなる。また硬化面に接続するように④東西方向に約10m伸びる2条の細い溝SD01・02を検出した。この溝の幅は16cm、深さ6cm程度で、狭く浅い。2本の溝の軸の間隔は約84cm、内輪間66～78cmで平行して伸びる。

西南戦争で官軍が主に使用したとされる大砲は四斤山砲で、45門が装備された。山がちである日本の地形には分解して持ち運ぶことのできる山砲が好まれたようだ。四斤山砲の完全体は現在日本に残っていない

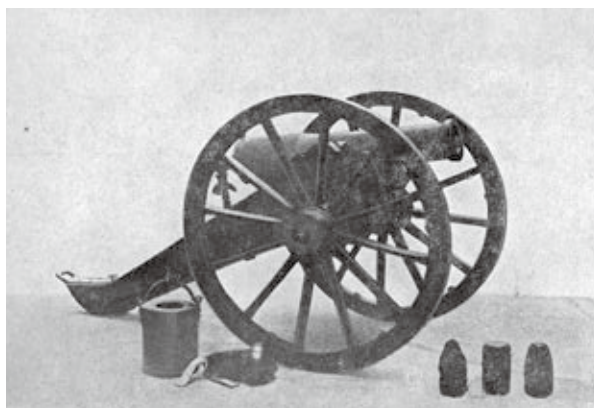


二俣瓜生田官軍砲台跡遺構・遺物検出状況

いが、『兵器沿革史 第一輯』には次のように紹介されている<sup>(1)</sup>。“砲身青銅製、口径86.5mm、全長9口径30、正曲螺状腔綫6条の前装式。…砲身の全長は960mmで、重量は100Kg、架体の重量(車輪を除く)は70Kg、車輪の直径956mm、車輪の重量24Kg。分解可。通常、駄馬にて運搬する。車轍74mm。”とある。二俣瓜生田官軍砲台跡で検出した2条の溝SD01、02の間隔はこれと一致する。浅川氏が指摘するように(165頁)、若干の誤差は砲の後退、複座の繰り返しが原因するものと考えられる<sup>(2)</sup>。また、前装式四斤山砲の装填作業場と考えられる硬化面が攻撃方向の田原坂方面(東側)に位置すること。さらにこれらの遺構の周辺に大砲の発射に利用される摩擦管という発火の為の小型の銅管が多く出土していることから考えて、西南戦争時に実際にここで大砲が放たれた痕跡といえよう。

古写真に見る  
二俣砲台

右下の上野彦馬撮影の古写真<sup>(3)</sup>は、明治10年戦争直後に二俣瓜生田に築かれた台場を撮影したものである。これには遺構が検出された高台と胸壁と思われる構築物が写っている。二俣の台場や陣地に使われた胸壁には二俣村九戸の民家から借り出された穀物や猫伏<sup>ねこぶく</sup>が用いられ、それを取り壊してよいかという伺いが5月11日付けで二俣村用掛より提出されている<sup>(4)</sup>。つまり、撮影日は胸壁が取り壊される前であり、戦闘後も構築物はしばらくそのままにされていたと思われる。雨が多かったことでも知られる「田原坂の戦い」において、雨上がりのぬかるんだ地面に刻まれた車轍の跡は、放置された結果、現在に至るまでしっかりとその形が残ったのだろう。



四斤山砲 (引用『火砲の発達』)

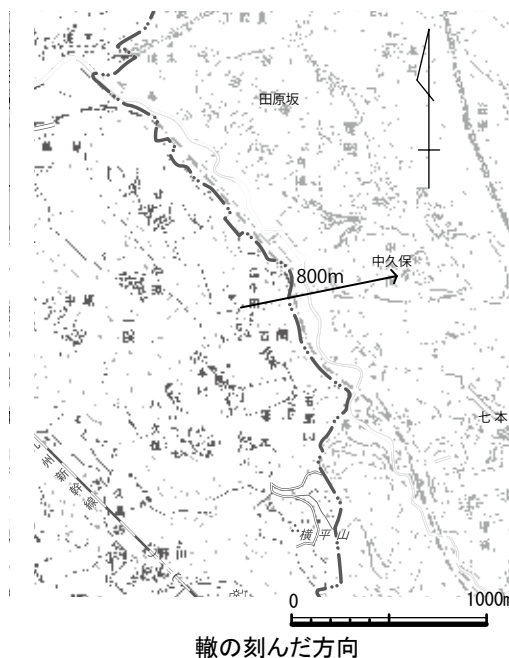


二俣瓜生田官軍砲台跡 明治10年上野彦馬撮影  
(引用『明治十年戦没記念写真帖』)

轍の刻んだ  
攻撃の方向

轍は東西方向に刻まれる。その方向を地図上で追うと熊本市北区植木町の中久保という集落にあたる。記録によると中久保には薩軍の砲台が築かれており、3月7日には砲撃戦が行われている<sup>(5)</sup>。また、対峙する田原坂周辺の聞き取り調査では、中久保付近で砲弾が採集されていることから、二俣瓜生田の砲台から中久保方向に砲撃が行われていたことは間違いないだろう<sup>(6)</sup>。

以上より、この轍は7日の砲撃戦を示すものか、もしくはそれ以後に戦闘が田原坂から動いた時のものであることが考えられる。3月20日には官軍が田原坂本道及び七本方向から挟撃に成功している。この時に七本から田原坂へ進撃する歩兵への援護射撃が行われたものかもしれない。現在、田原坂における調査も進んでいるところであり、最も激しい戦闘が行われたといわれる田原坂二の坂、三の坂はどのようにどこから攻撃されたのかを解明することが今後の課題である。

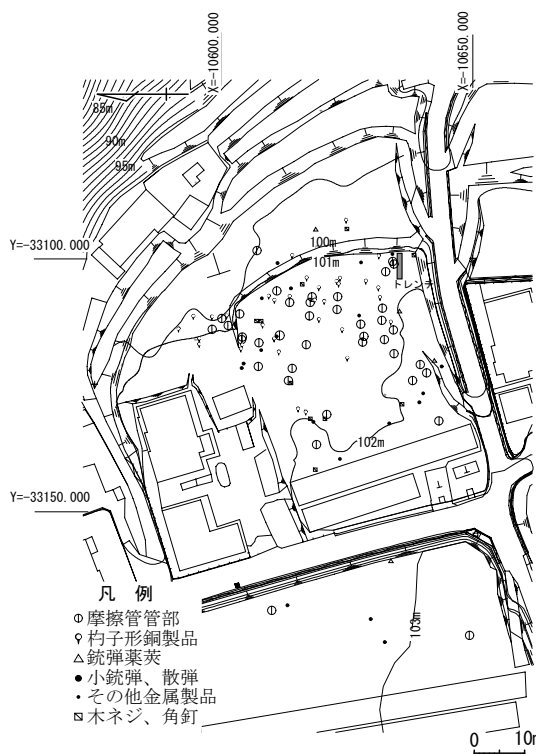


二俣古閑官軍  
砲台跡の調査

二俣官軍砲台の右翼をなしたのが瓜生田より南に位置する古閑の砲台である。戦況が移るにつれて増築されたものと考えられ、主に七本の薩軍陣地を攻撃したという伝承がある。砲台跡推定地は段々畑であり、現在も「台場」といわれている。発掘調査でもこの「台場」を中心に摩擦管が40点出土した。瓜生田同様、高台状の平坦面が広がっている。今回の調査では遺構の検出は行っていないが、当該地においては大きな土地の改変が行われていないこともあり、同様の遺構が地下に存在するものと推定される。また、摩擦管は砲台の北東方向、東方向に集中しており、砲撃方向が東側（七本方向）、北東方向（田原坂）だったことが推定できる。

古閑砲台の  
広がり

二俣古閑官軍砲台跡推定地において、摩擦管は東西方向の段々畑三段にて出土した。東側の二段については上野彦馬撮影の古写真（図版26下、27）にも写されているが、西側の畑は写されておらず、摩擦管の出土点数も2点と少ない。横平山の戦闘の際に二俣砲台からの援護射撃があったというが、ここが利用された可能性も考えられる。



中央砲台跡・官軍  
本営出張所跡

中央の砲台推定地は、両砲台の中央の二俣台地の凹部に位置する。当該地はかつて（30年ほど前まで）は人家があり、上木葉官軍本営の出張所が置かれたといわれる。焼失により今は跡形もなく、中央砲台跡も確認できな

二俣古閑官軍砲台跡遺物出土状況

かったが地下式の石蔵跡の一部を検出した。

#### 石蔵跡

二俣台地凹部の東側崖面に接するように半地下状の掘り込みがある。西壁には石柱が2本建ち並び、その間に切石が積まれている。また、南東方向隅に石柱を載せる礎石が残存しており、2×2間の規模のものであったことが明らかになった。南西の石柱の横には西壁に使われている切石とは異なる正方形の切石が垂直方向に積まれることから、南向きに開口するこの石蔵の入り口であると思われる。石柱の内側の床は白色の三和土<sup>たたき</sup>となっており、全体的に非常に頑丈な造りの構造物であったと考えられる。なお、石材はすべて在地産の凝灰岩が利用されている。地域の古老の話では、60年ほど前は石蔵の形を留めていたそうだ。また、石蔵の東側は最近道路によって削られたようで、かつては土に覆われていたという。高瀬哲郎は石材加工の技術から江戸時代後半から明治期にかけての石工によって造られたものと推定し、西南戦争時の「硝煙蔵」と推定している。また、浅川道夫は品川台場における幕末の火薬庫と類似し、各砲台との位置関係からも「玉薬置き場」として利用されていたのではないかと指摘する。しかし、敵対する薩軍陣地に面すること、石蔵跡から遺物が出土していないこと等から、これを西南戦争時の遺構として断定することは難しい。いずれにせよ、地域にはこのような石造りの蔵のようなものは無く、特殊な遺構であることは確かである。また、西南戦争当時は大量の弾薬を保管する施設は必ず必要であったと思われ、砲台の全体的な構造を検証する必要がある。

地権者の祖父(西南戦争当時、子供であったという)は、ここを「ひょうろう」と呼んでいたということであるが、その用途については今後の課題である。



二俣官軍本営出張所跡(石蔵跡)

#### (2) 横平山戦跡の調査

横平山は二俣台地の南側に位置する田原坂と並ぶ薩軍の主要陣地であった。官軍が二俣台地に進出する際には、両軍の要衝の地である横平山をめぐる激しい争奪戦が行われた。記録では、明治10年3月15日が決戦の日であり、官軍警視抜刀隊が投入され活躍したことも有名である。

山頂の塹壕跡(SD01)は現在も地表面において目視できる遺構である。トレンチ掘削により土層断面を確認したところ、当時の兵法に基づいた北側向きの塹壕跡であることを確認した。地山を掘り込んで造られた遺構面直上からは、戦闘で主に使用されたスナイドル薬莖が出土している。つまり、遺構の構築の時期がスナイドル薬莖が使用される前だったことは明確である。また、この塹壕跡付近からは多くのスナイドル薬莖が出土しており、山頂部が火点=陣地であったことを裏づけている。なお、明治16年に記された陣地図(図版20上)には山を東西に横断する薩軍陣地が記載されている。SD01はこの一部と推測され、さらに東西に広がりをもつものと考えられる。

#### 陣地遺構

山頂部より北に下った標高130mの地点は、テラス状を成す。ここでは、スナイドル薬莖やスナイドル・エンフィールド銃弾の未使用弾の集中区を確認した。現地表面は落ち葉と10cm程度の腐葉土に覆われているが、その直下は地山であり、遺物は地山と堆積物の間において出土する。つまり、135年前から地形はあまり変化していないものと考えられる。

この陣地は北側斜面に位置し、テラス状になった北側の斜面の縁には多くの薬莖と弾薬箱に使われたと思われる木ネジが集中して出土した。弾薬箱は木製であるため、朽ちてしまい、木ネジのみが残ったのだろう。弾薬箱は弾薬の運搬に利用されるが中身が無くなると土砂を入れて胸壁として利用され



たそうであり、木ネジの集中出土は弾薬箱の胸壁を伴う陣地が構築されたことを示していると思われる。

官軍は二俣台地から横平山に向かって南進している。両軍の横平山争奪戦があったと記録にあるものの、官軍の攻撃方向は南であり、北側を向いたこの陣地は、やはり薩軍陣地であると考えられる。

特筆すべきは、これらの陣地において火点を示す遺物がスナイドル(後装)銃薬莢しか出土していないということである。2月23日の木葉の戦いにおいて小倉第十四連隊に勝利した薩軍は「鞍馬一疋、スナイドル式銃三百六十挺(二十函、一函二十挺を収む)及び弾丸一萬二千發」<sup>(7)</sup>を略奪している。このように相手方の武器を略奪することは多々あったと考えられ、それらが戦闘に利用されたことは言うまでもない。個々それぞれの装備をしていたといわれる薩軍が、意図的に射撃効率の良い後装銃に銃器を統一し、3月15日の横平山争奪戦<sup>(8)</sup>に望んだことは文献にも明らかである。いかに横平山における戦闘が薩軍にとって重要視されたかをうかがい知ることができる。

その他の遺構

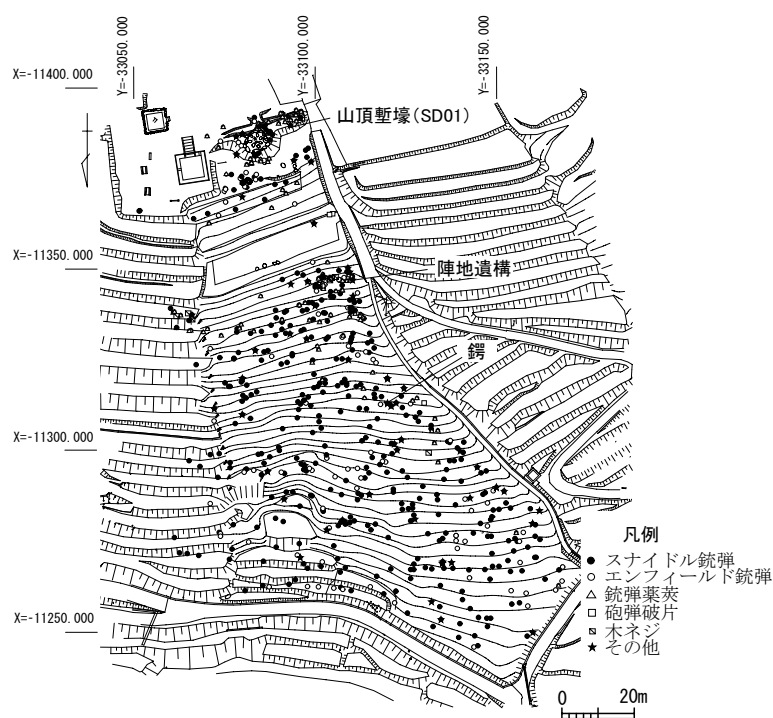
調査区からは4基の土坑を検出した。この内いずれからも遺物は出土していないため、土坑の用途については不明であるが、山腹に位置するSK03、04については仮埋葬地石碑の傍に位置すること、地山の土が遺構覆土内に多く混入しており遺構ラインがはっきりとせず短期間に埋められたものと推定されることから、仮埋葬地跡ではないかと考えられる。

戦死者の埋葬については、明治10年5月～10月にかけて熊本県布達が出されている。水野公寿(水野2007)によると、村内に散乱する遺体は区戸長及び人民により仮埋葬されるも、5月頃になると臭気を発する所があり、これらを修繕(深く埋めなおす等)し、10月には一般人民と区別して墓標が建てられたという。その際、「四五寸角檜杉之内長四五尺」の墓標には「賊徒何人ノ墓」と記載する雛形も示されている。現在ある石碑は後に建てられたものであるが、「薩軍戦死者四十四体仮埋葬地跡」との記載があり、以前建てられた墓標の文面を踏襲したものと思われる。

このように仮埋葬された遺体は、しばらくはコレラ流行の予防策として3年間の改葬禁止令が出されていた。しかし、明治16年の七回忌に大規模に行われた遺骨収集によって、その改葬がなされた<sup>(9)</sup>。町内で最も仮埋葬者が多かった横平山においても遺骨は掘り起こされたものと思われる。SK03、04もその時に掘り起こされたものかもしれない。

交戦の状況

横平山山頂の塹壕及び山頂部に近い陣地遺構が薩軍のものであれば、官軍の攻めた痕跡は薩軍陣地より北側(山腹、麓)に残っていることが推定できる。残念ながら、今回の調査では官軍の火点を明らかにすることができなかったが、



横平山戦跡出土遺物状況

山頂と麓をつなぐ小路沿いに薬莖が分布し、山腹において刀の鍔が1点出土している。刀の鍔がどちらの軍のものか判断できないが、横平山は警視抜刀隊が投入されたことでも有名であり、その白兵戦の様子を物語る遺物といえよう。

### (3) 半高山・吉次峠戦跡の調査

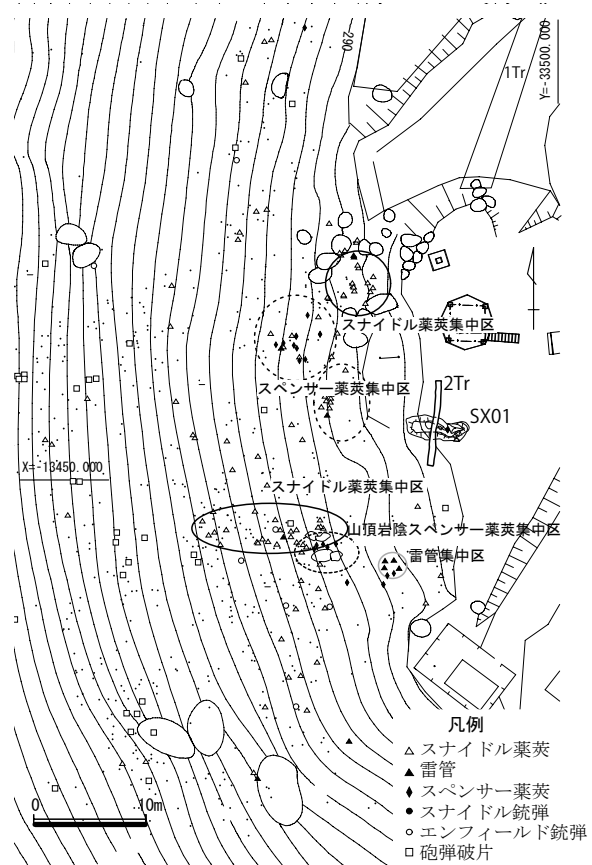
半高山・吉次峠は、田原坂～横平山の西の延長線上に設けられた薩軍左翼の陣地といわれる。ここは1ヶ月程度薩軍の守備地となっており、記録では3月3、4日と4月1日に官軍による大規模な進撃が行われたのちに、官軍の占領下となっている。

#### 半高山戦跡の調査

半高山・吉次峠においては、半高山山頂部と官軍から攻撃を受けたと思われる山の西側及び北側斜面の調査を行った。また三の岳の北側斜面にある吉次峠公園において調査を行った。吉次峠側では1条の溝を確認したが、遺物が出土していないため時期と用途は不明である。半高山戦跡では山頂部において土坑1基と盛土1基を検出した。いずれも明確な遺物が出土していないため、当時の構築物であるという評価は難しい。一方、火点を示す遺物は山頂部よりやや下った290mラインに環状に集中している。半高山は安山岩の山であり、巨石がいたるところに露出している。山頂部も例外ではなく、その岩陰においてスペンサー薬莖の集中出土地点が確認された。その他、スナイドル薬莖や雷管(後装式エンフィールド銃の火点を示す)等がある一定のまとまりをもって出土している。この状況は、熊本市北区植木町が発掘調査を行った田原坂や山頭遺跡の薩軍陣地と共通している。各人異なる装備で戦っていた薩軍を彷彿とさせる。

山腹には薩摩天保銭と呼ばれる古銭<sup>(10)</sup>と明治7年製の半銭が共に出土しており、これもまた当時の状況を示す遺物といえよう。

調査区においては銃弾や砲弾が全体的にまんべんなく出土した。これらのうち大半は、薩軍陣営である半高山に打ち込まれた官軍のものと思われるが、横平山戦跡同様、官軍側の攻撃拠点を確認されていない。両者の攻防を明らかにすることが今後の課題である。



半高山戦跡山頂部薬莖分布図

### (4) 戦場遺跡出土遺物について

戦跡の調査では、金属探知機による探査により数多くの銃弾や銃弾薬莖、砲弾、摩擦管等を検出した。これらは地表面に露出する物もあれば、わずかに堆積した土中より出土するもの、地山にくい込むような形で出土するもの、あるいは遺構内にて検出されるものと様々であった。遺物として扱ったものは、幕末より明治期にかけて使用された武器である。一部、釘や木ネジ、キセルや軍服の付属品等も

共伴する一括遺物として取り扱った。発掘調査で出土したのは、明らかに現代のものと思われる空き缶等を除き、そのほとんどが武器であった。この地でこのように大量の武器弾薬が使われたのは、明治10年の西南戦争の時しかなく、出土する遺物の型式から考えても明治10年における一括遺物と判断した。








出土遺物の中でも最も多く出土したのが銃弾である。出土するもののほとんどは発射や着弾の衝撃により潰れ、原型すらわからないものもあるが、原型を留めるものを中心に分類を行った。また蛍光X線による成分分析を併せて行っている。

当町の戦場遺跡にて出土した銃弾の分類を下表に示す。スナイドル銃弾は4本の圈溝が有るものが主で、弾底部や先端部の断面形態により、大きく3種類に分かれる。また、圈溝のないエンフィールド銃弾は2種類に分けることができる。英文献との比較によると、A1類は1867年にイギリス政府軍が公認したスナイドル実包MARKVかVIに使われている銃弾である。またA2類はMARKVIIかVIII(1868年～イギリス政府公認)の銃弾型式と思われる。B類については英文献に記載が無く、A類に後続するものと思われる。成分分析でも国内産の特殊な型式であることが推測されており、浅川氏も“弾ノ尖頭稍々鈍ナルモノ”と比類し、明治10年に東京砲兵本廠で製造された可能性を指摘する(166頁)。また、エンフィールド銃弾は当時としては旧式であり、底部断面形態台形のb類はスナイドル銃弾に先行する型式のものであることは明らかである。

当町における戦跡ではスナイドルA2類やB類等MARKVII以降のスナイドル銃弾が主に出土しており、それ以前の型式のものも共伴する。日々数十万発という銃弾消費に対応するため、国内の砲兵本廠においては1日500万発の銃弾が製造されたという。また、当町の民家で保管されていた弾薬箱(151頁に資料紹介)には次の様に記されたスナイドル銃弾のラベルが付属していた。『10/Boxer Ammunition/For '577/SNIDER RIFLE/ELEY BROS,LONDON 明治七歳四月』つまりこれは、明治7年4月の段階で国内に保管、もしくは輸入されたイギリス製のスナイドル実包が、明治10年の戦争で使われていることを示す資料である。かねてより備蓄されていた弾薬、新しく製造された弾薬がこの戦争にて大量に消費されたことがいえる。

ところで、陸軍は兵站である鹿児島を官軍に占領されて物資の供給が途絶えると、弾薬不足に悩まされたようだが、当町における戦闘時にすでにそのような状況下にあったのだろうか<sup>(11)</sup>。大坪・平木

玉東町西南戦争戦跡出土遺物分類と出現率

英文献による分類	エンフィールド銃弾変遷			上 / ボクサー実包型式 (スナイドル銃等に使用)・下 / 銃弾型式変遷									
	プリ チエット 弾		ミニエー 弾	MARK I (1866/8/20)	MARK II (1867/5/4)	MARK III (1867/5/4)	MARK IV (1867/7/8)	MARK V (1867/7/8)	MARK VI (1867/10/8)	MARK VII (1868/3/1)	MARK VIII (?)	MARK IX (1871)	無
出土遺物の分類	a類	b類	A'類	type1		type2,3	type3	type4	type4	type5	type6	type7	無
				—	—	—	—			—		—	 日本国内で 生産された ものか？
半高山戦跡 出土銃弾点数 (出現率)	14 (0.0103)	1 (0.0007)	6 (0.0044)	—	—	—	—	64 (0.0474)	227 (0.1682)	—	—	—	91 (0.0674)
横平山戦跡 出土銃弾点数 (出現率)	2 (0.0042)	62 (0.1324)	0	—	—	—	—	14 (0.0294)	78 (0.1639)	—	—	—	67 (0.1408)
二俣砲台跡 出土銃弾点数 (出現率)	5 (0.2381)	2 (0.0952)	0	—	—	—	—	0	0	—	—	—	2 (0.0952)

※出現率は分類した銃弾点数を出土銃弾点数で除したものである。詳細分類表は第VI章に記す。

※ボクサー実包型式の下に記すのはイギリス政府公認の年月日である。浅川道夫(166頁)によるとスナイドル実包の国産化は東京の砲兵本廠で明治9(1876)年から始まった。

(157頁)によると当町における出土銃弾の成分は主に鉛中心だが、鑄直し痕のあるエンフィールドb類の中には微量に銅と鉛が検出され、スナイドルA類と同様の成分の傾向を示したものがあつた。つまり、スナイドルA類を採集してエンフィールド銃弾として鑄直したものが使用されていた可能性が指摘されている。当町における遺跡では鉄や銅を主成分とする銃弾は見られず、このようなものを使うほど薩軍の弾薬保有状況は逼迫した状況ではないと考えられる。しかし、使用された弾を鑄直す行為も行われ始めていることから、弾薬不足が徐々に進んでいることが推測される。

#### (5) 官軍病院跡の調査

当町には、当時官軍の病院として利用された寺院が現存する。文献史料や官軍墓地には「木葉病院」とあり、官軍の病院組織でいう「大綱帯所」が設置された。その内、正念寺については「病舎ヲ置ク」といった記載があることから当時利用されていたことは間違いないと思われる。明治13年調べの郡村誌によると、当時存在した寺は3つあり、その内、正念寺・徳成寺は現存する。これらの建造物の調査を行ったところ、正念寺については庫裡の一部は江戸時代以前に遡る古い建物であり、山門は文政6(1823)年以前に遡ることが確認された。また、徳成寺の本堂は明和7(1770)年建立と推定されている。正念寺の山門には明治10年西南戦争時の鉛の銃弾が刺さったままになっており、生々しい弾痕が36箇所にも及ぶ。当時激しい戦闘下(2月下旬)にあつたことは間違いない。

西南戦争当時の寺域については前述の『玉名郡村誌』、永青文庫所蔵の『玉名郡内田手永寺院本末間数御改帳』を比べてみると、正念寺は現在の木葉748番地であり、徳成寺は木葉1065-1の本堂部分が相当すると考えられる。寺には現存する当時の遺物等は残っていないが、正念寺には官軍戦死者の仮埋葬が行われたという記録があることから寺院地下に遺構として埋蔵されている可能性も考えられる。今後の検証課題である。

#### (6) 官軍墓地の調査

当町には2箇所の官軍墓地が現存する。高月官軍墓地と宇蘇浦官軍墓地である。西南戦争に関する官軍墓地は全国に51箇所数えられており、そのほとんどは九州の戦地の傍にある。つまり、戦場で亡くなった兵士は、政府の管理の元に戦死地傍に葬られた。彼らの内ほとんどは全国の鎮台より送られた徴兵であつたが、遺体は地元に戻ることなく死亡地に埋葬された。その後、遺族によって引き取りの希望があつても許可はなされなかつたそうだ<sup>(12)</sup>。

高月官軍墓地には980体、宇蘇浦官軍墓地には399体の遺体が埋葬され、明治11～13年にかけて陸軍省や海軍省、警視局によって、それぞれ墓地の整備がなされた(前川清一252頁)。

それぞれの規格に基いて造られた墓石は、天草下浦石と呼ばれる砂岩(警視局のものは島崎石といわれる安山岩が使われた)が用いられており、石材の利用状況から当時大規模な工事請負をしていた天草下浦石工の活躍を知る事ができる。埋葬については発掘調査が行われた八代市の若宮官軍墓地、横手官軍墓地によって明らかになっているところである。手厚く葬られた官軍戦死者であつたが、次々に所管替えが行われ、太平洋戦争後の管理者不在により荒れ果て、無くなってしまったものもあるという。

### 第3節 今後の課題

熊本県北のいわゆる「田原坂」をめぐる戦いは、その名称が一人歩きするほど、この戦争を象徴するものだったといえよう。発掘調査では、田原坂を攻撃した官軍二俣砲台からの砲撃の状況が明らかになり、戦い的一幕といえる横平山や半高山・吉次峠における個別具体的な戦闘の状況が明らかになった。遺跡では多くの銃弾が出土し、特に薩軍陣地の火点が明らかになるなど戦闘の詳細な状況を想定することができた。しかし、通時的な関係を示すに至っておらず、今後の課題として残っている。

その他、官軍の陣跡や病院跡、墓地等も当時の軍の状況や埋葬の習慣などを知る貴重な遺構であり、当町においては、それらが良好に残っていることが確認された。しかし、病院跡等伝承地については直接的な資料が残っておらず、今後は埋蔵されている遺構や遺物から直接的に調査を行なう必要がある。

発掘調査という手法によって明らかになった西南戦争は、必ずしもこれまで語られてきたイメージを肯定するものではなかった。実に生々しい戦闘の痕跡は両軍兵士の生死に関わる痕跡であり、戦争というものの悲惨さ、愚かしさを物語る。戦争はこの地域のみでは終わらず、その後も五カ月間、南九州の各地で行われた。九州各地には現在もその遺構が数多く残っており、近年徐々にその詳細が明らかになりつつある。これら相互間の資料の詳細な比較検討を行いながら、当町における西南戦争遺跡の課題の解明を図りたい。

#### 註

- (1) 陸軍省『兵器沿革史 第一輯』191～192頁
- (2) 前装式である四斤山砲は、発射後その勢いで数m後退する。これを元に戻して次の発砲を行うといった操作が繰り返して行われたと思われる。
- (3) 川村純義参軍は、戦後の状況写真の撮影を長崎の上野彦馬に依頼した。種板69枚の写真の内、二俣砲台に関する物は5枚が確認されている。写真には、当時の主要な構造物や激戦地の状況が写されている。写真を見ると、二俣砲台は現在もほとんど変わっていないことがわかる。
- (4) 熊本県県政資料7-19
- (5) 加治木常樹 1912『薩南血涙史』新潮社 203頁
- (6) 四斤山砲の射程距離は約2,600mといわれ、有効射程距離は約1,000mといわれる。中久保は瓜生田から有効射程距離内にあることから砲弾が撃ちこまれた可能性は高い。
- (7) (5)と同じ 148頁
- (8) 横平山における3月15日の戦いでは「後装銃を携帯したる壮士各々十名を選抜し之を四十名とし…」(加治木常樹『薩南血涙史』新潮社222頁)とあるように薩軍の狙撃手の選抜隊が編成された。
- (9) 水野氏によると、それ以前も改葬がなされているという。
- (10) 神園紘 2011「西南戦争軍用貨幣-まぼろしの西郷金銀銅貨を追う」『敬天愛人』第29号76頁。出土した天保通宝の内、3枚は幕末の薩摩藩で铸造された薩摩銭であると確認されている。
- (11) 戦いの後半戦である烏帽子岳や和田越えの薩軍塁で採集されたエンフィールド銃弾は銅製や鉄製であった。高橋信武 2012「可愛岳一帯の戦跡」『西南戦争の記録5』
- (12) 水野公寿氏の御教示による。

#### 主要参考文献

- 川口武定 1878『従征日記』上巻  
 参謀本部陸軍部編纂 1880『明治十年征討軍團記事』  
 参謀本部陸軍部編纂 1887『征西戦記稿』  
 加治木常樹 1912『薩南血涙史』新潮社  
 小島徳貞 1941『西南戦蹟顕彰會第一回戦蹟踏査記』西南戦蹟顕彰會  
 莊司武夫 1943『火砲の発達』愛之事業者

- 徳富蘇峰 1980『西南の役(六)』講談社  
靖国神社社務所 1990『靖国神社忠魂史 西南の役』新潮社  
小川原正道 2007『西南戦争 西郷隆盛と日本最後の内戦』中公新書  
水野公寿 2007『西南戦争の戦死者—その埋葬と慰霊』『近代熊本』31号 熊本近代文化研究会刊  
高橋信武 2012『可愛岳一帯の戦跡』『西南戦争の記録5』  
浅川道夫 2011『建国期の日本陸軍にみる兵器統一への試み—国産小銃採用までを中心に—』『軍事史学』第47巻第2号  
所荘吉 1997『仏式四斤山砲について』『銃砲史研究』第286・287合併号  
中原幹彦 2011『至近距離の対峙を示す戦闘遺跡—熊本県熊本山頭遺跡』『季刊考古学』第116号 雄山閣  
玉東町史編纂委員会 1994『玉東町史 西南戦争編・資料編』玉東町  
玉東町役場編 1981『歴史への招待 西南の役と玉東町』  
熊本市教育委員会 2011『田原坂 西南戦争遺跡・田原坂第1次調査』熊本市の文化財第5集  
熊本市教育委員会 2012『田原坂II 西南戦争遺跡・田原坂第2次調査』熊本市の文化財第15集  
八代市教育委員会 2002『若宮官軍墓地・横手官軍墓地跡』八代市文化財調査報告書第16集



玉東町二俣から木葉の町並みを望む

# 報告書抄録

ふりがな	ぎよくとうまちせいなんせんそういせきちょうさそうごうほうこくしょ
書名	玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書
シリーズ名	玉東町文化財調査報告書
シリーズ番号	第8集
編著者名	宮本千恵子
編集機関	玉東町教育委員会
所在地	〒869-0312 熊本県玉名郡白木1番地1
発行年月日	2012年(平成24年)9月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ふたまたうりやうだかんぐんほうだいあと 二侯瓜生田官軍砲台跡	くまもとけんたまなぐんぎょくとうまち 熊本県玉名郡玉東町	43364	061	32° 90' 67"	130° 64' 35"	20100506 ~ 20100922, 20101108 ~ 20110115	2,755㎡	学術目的調査
ふたまたこがかんぐんほうだいあと 二侯古閑官軍砲台跡			-	32° 90' 36"	130° 64' 66"	20110829 ~ 20111209	5,840㎡	学術目的調査
ふたまたかんぐんほんいしやうちようじあと 二侯官軍本営出張所跡			062	32° 90' 53"	130° 64' 34"	20111212 ~ 20120328	4,600㎡	学術目的調査
よこひらやまぜんせき かりまいそうち 横平山戦跡・仮埋葬地			036 068	32° 89' 68"	130° 64' 62"	20091202 ~ 20100226, 20111012 ~ 20120328	8,680㎡	学術目的調査
はんこうやま・きちじょうげせんせき 半高山・吉次峠戦跡			048	32° 87' 69"	130° 64' 19"	20090706 ~ 20091024, 20110829 ~ 20120123	29,230㎡	学術目的調査
しょうねんじ 正念寺			058	32° 91' 87"	130° 63' 01"	20110509 ~ 20111130	4,500㎡	学術目的調査
とくじょうじ 徳成寺			-	32° 92' 04"	130° 62' 32"	20110509 ~ 20111130	2,000㎡	学術目的調査
たかつまかんぐんぼち 高月官軍墓地			014	32° 91' 71"	130° 62' 75"	20110509 ~ 20110629	2,029.71㎡	学術目的調査
うさうらかんぐんぼち 宇蘇浦官軍墓地			004	32° 92' 18"	130° 62' 37"	20110509 ~ 20110629	1,685.47㎡	学術目的調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二侯瓜生田官軍砲台跡	戦跡	近代 明治10(1877)年 西南戦争	硬化面1、車轍溝2、土坑2	摩擦管、官軍帽草、瓦質土器、陶磁器	砲台跡地にて大砲関連の遺物が出土し、砲台として利用されていた遺構を検出した。中世期と思われる大溝を確認した。
二侯古閑官軍砲台跡	戦跡		-	摩擦管、蹄鉄	砲台跡地にて大砲関連の遺物が集中出土した。
二侯官軍本営出張所跡	戦跡		石蔵跡	銃弾	江戸幕末期～明治時代初期のものと思われる石蔵跡を検出した。
横平山戦跡	戦跡		塹壕跡1、陣地跡1、仮埋葬地跡	銃弾、薬莢、鏢、木ネジ	山頂部にて薩軍の塹壕を検出し、調査区全体で銃弾や薬莢が出土した。
半高山・吉次峠戦跡	戦跡		陣地跡	銃弾、薬莢、砲弾破片	半高山山頂部にて岩陰を利用した薩軍の陣地跡等を検出した。調査区全体で銃弾や薬莢、砲弾が出土した。
官軍病院跡(正念寺)	包蔵地		山門(彈痕有り)、庫裡	-	山門と庫裡の一部が西南戦争以前に建立されたものであることがわかった。山門において36ヶ所の弾痕が確認された。
官軍病院跡(徳成寺)	-		本堂	-	本堂が1770年に遡る建物であることがわかった。
高月官軍墓地	墓地		墓石980基	-	墓石配置図を作成した。
宇蘇浦官軍墓地	墓地		墓石399基	-	墓石配置図を作成した。

要約	<p>西南戦争遺跡は文献調査等多くの研究がなされてきたが、遺構や遺物等の実際的な資料について未調査であった。今回の調査では戦場跡の他、官軍の前線基地となった木葉地区における病院跡、墓地等の総合的な調査を行い、今後の保存・活用の為の資料を得ることができた。</p> <p>田原坂を攻撃したといわれる二侯官軍砲台跡においては、摩擦管等大砲関係の遺物が出土した他、左翼をなす瓜生田官軍砲台跡では、戦争で使われた四斤山砲の発砲の跡(車轍)等関連遺構を検出した。また、砲台跡の中央にある本営出張所跡では西南戦争頃のものと思われる石蔵を検出した。</p> <p>激戦地として知られる半高山・吉次峠戦跡や横平山戦跡においては銃弾や薬莢等の遺物が大量に出土し、また塹壕や陣地と思われる遺構も良好に残っていることが確認された。</p> <p>その他、病院跡や墓地は配置図の作成を行った。官軍病院跡の正念寺や徳成寺については建造物の検証を行った結果、一部は当時のまま残っていることが確認された。</p>
----	---



玉東町文化財調査報告書第8集  
玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書

---

発行年月日 2012年(平成24年)9月30日

編集・発行 玉東町教育委員会

〒869-0312 熊本県玉名郡玉東町白木1-1

印刷 株式会社 有明印刷



